



經 典  
卷 十  
第 一 篇

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.10

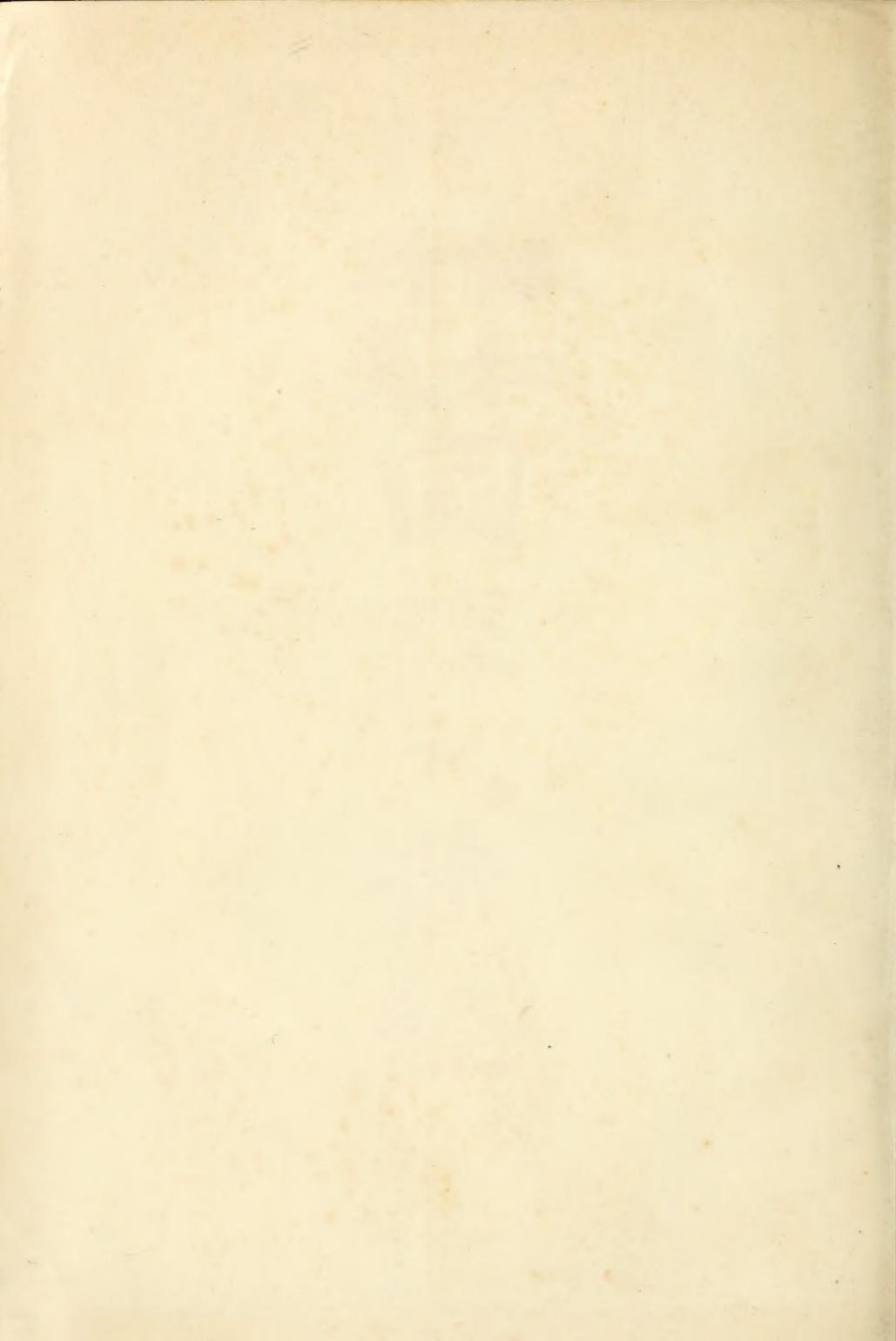
East Asia

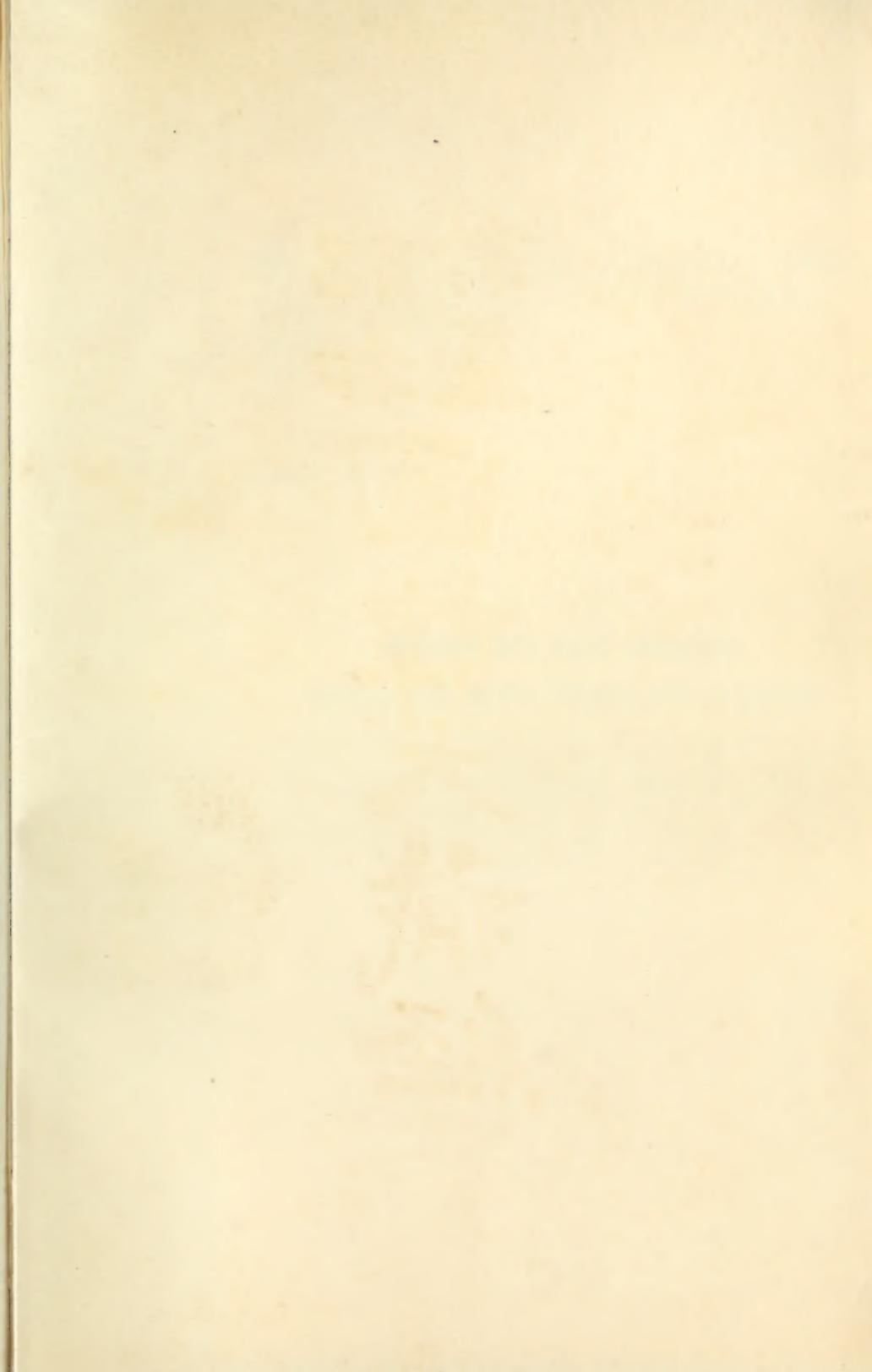
PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





新纂 昭和

國譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
V. 10

昭和  
新纂 國譯大藏經 經典部 第十卷

華嚴經 第一 目次

卷 第 十 七

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之四…………… 一

卷 第 十 八

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之五…………… 二

卷 第 十 九

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之六…………… 五

卷 第 二 十

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之七…………… 六

卷 第 二 十 一

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之八…………… 一〇一

卷第二十二

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之九.....二三四

卷第二十三

十地品第二十二之一.....二五三

卷第二十四

十地品第二十二之二.....二六三

卷第二十五

十地品第二十二之三.....二七三

卷第二十六

十地品第二十二之四.....二八一

卷第二十七

十地品第二十二之五.....二八二

卷第二十八

十明品第二十三.....三三三

十忍品第二十四.....三三三

卷第二十九

心王菩薩問阿僧祇品第二十五.....三六八

壽命品第二十六.....三六五

菩薩住處品第二十七.....三六六

卷第三十

佛不思議法品第二十八之一.....三六九

卷第三十一

佛不思議法品第二十八之二.....三六八

卷第三十二

如來相海品第二十九.....四一一

佛小相光明功德品第三十.....四一五

卷第三十三

普賢菩薩行品第三十一.....四三三

寶王如來性起品第三十二之一.....四三三

卷第三十四

寶王如來性起品第三十二之二.....四六七

卷第三十五

寶王如來性起品第三十二之三.....四九七

卷第三十六

寶王如來性起品第三十二之四.....五二八

離世間品第三十三之一.....五四一

卷第三十七

離世間品第三十三之二.....五五一

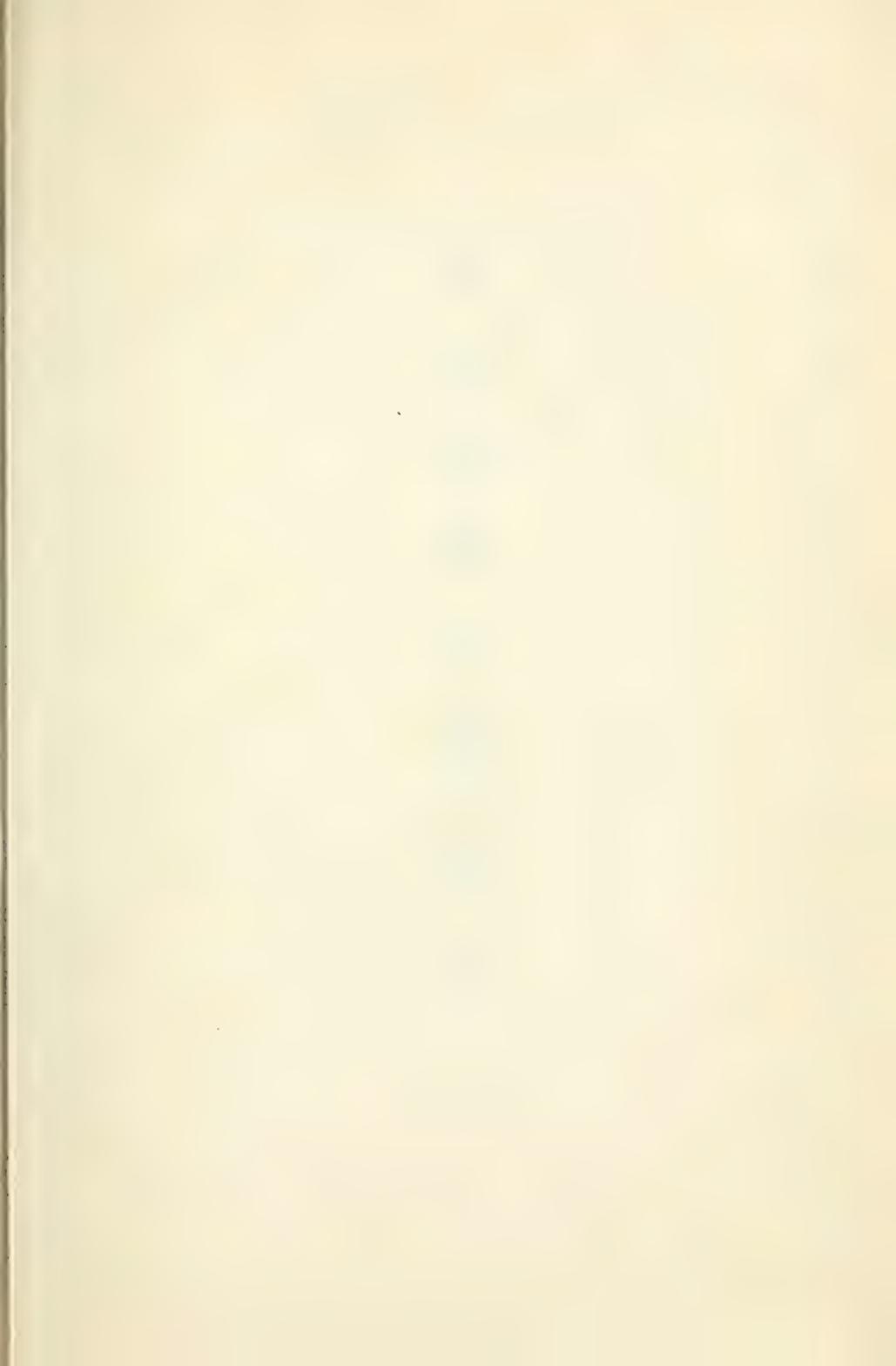
卷第三十八

離世間品第三十三之三.....五七二

大方廣佛華嚴經

第二

第十卷	經典部
-----	-----



# 大方廣佛華嚴經

卷第十七

東晋天竺三藏佛驮跋陀羅譯

## 金剛幢菩薩十迴向品第二十一之四

【十迴向品第二十一之四】第五會、兜率天所説の十迴向會の正説、菩薩行中の布施行を説き衆生と菩提と眞實とを詳説す。

【蓋】佛座、高座等を莊嚴する具として用ひらる。元來印度等の熱帶地に於て、日射除而等を拒ぐに使用されたる生活必需品たりしが、時の階級の相異と時の變遷に伴ひ、實用價值以上に宗教用具とせらるるに至り。

【沈水】沈水香、略して沈香と言ひ香木の名なり。熱

菩薩摩訶薩は種種の蓋を施す。謂ゆる尊重人の蓋は、種種の妙寶もて之を莊嚴し、無量の嚴飾せる蓋の中に於て、最も爲れ第一にして、衆寶を竿と爲し、金網もて纏覆し、雜寶の瓔珞周匝して垂下し、衆寶の鈴と、淨瑠璃の珠とを懸け、微動し相扣ちて和雅の音を出し、白淨の寶網もて之を絞絡し、百千の清淨なる衆の雜寶網を其上に置覆し、無量百千億の雜寶もて莊嚴し、無量億那由他の沈水梅檀堅固の香を熏じ、閻浮檀金もて清淨に莊嚴せり。是の如き等の無量阿僧祇那由他の蓋を、離惡心、廣大心、放捨心を以て布施を行じ、或は以て現在の諸佛に奉獻し、及び涅槃の後に塔廟に備養す、法を求んが爲の故なり。菩薩と、諸の善知識とに奉施し、或は法師に施し、或は父母に施し、或は諸僧に施し、或は復一切の佛法に奉施し、或は種種の福伽羅の福田に施し、或は師長及び諸の尊重に施し、或は初めて菩提心を發せし者に施し、或は一切の貧窮下劣に施し、諸の求むる所有れば、皆悉く施與す。菩薩摩訶薩は、蓋を布施する時に、是の如く廻向すら

金剛幢菩薩十迴向品第二十一之四

五〇九

得此方廣正法、具足智慧、來此法界、以此名爲、華嚴經中、

【諸佛】、一切諸佛、三世諸佛、一切諸佛、

【十方】、十方、十方、十方、十方、

【如來】、如來、如來、如來、如來、

【大慈】、大慈、大慈、大慈、大慈、

【大力】、大力、大力、大力、大力、

【無量】、無量、無量、無量、無量、

【一切】、一切、一切、一切、一切、

【諸佛】、諸佛、諸佛、諸佛、諸佛、

【如來】、如來、如來、如來、如來、

【大慈】、大慈、大慈、大慈、大慈、

【大力】、大力、大力、大力、大力、

く、此華嚴を以て、一切の衆生をして、善根の身に覆はれ、又一切諸佛の身に普賢せらる

して、一切の衆生をして、智慧功徳の身に寶護せられて、世間の一切の煩惱垢を除滅せし

め、一切の衆生をして、善法に淨法を以てして、一切の煩惱障、業障を滅せしめ、一切の衆

生をして、悉く如來の内智慧を得て、一切の衆生を樂觀して、悉くこれを無量せしめ、一切

の衆生をして、寶勝なる白法を以て、自ら護護し、悉く行境の佛法を究竟することを得

しめ、一切の衆生をして、善根の身を得て、如來の清淨法身を究竟せしめ、一切の衆生を

して、悉く一切の眞に善法を以て、十方の智慧もて善く世間を覆はしめ、一切の衆生を

して、隨柔の智慧を得て、皆悉く一切の世間を出過し、清淨に明達して、樂著する所無

からしめ、一切の衆生をして、隨佛の善を得、験れたる福田を成じて、一切の徳を受けし

め、一切の衆生をして、最上の善を得て、自然に無上智の蓋を當攝せしめん」と、是を普

薩摩訶薩の蓋を布施する時の善具隨順と爲す。一切の衆生をして法自在の蓋を受持して、

一功徳の徳を以て、普く一切の法界虚空界に等しき一切の世界を覆ひ、諸佛の神力自在を  
示現して、一功徳の蓋を以て法界を莊嚴し、諸佛に妙幡幢蓋を供養して、普く十方の一切  
諸衆を覆はしめ、一切の佛刹をして種種の寶蓋を以て莊嚴せしめ、一切の衆生をして、皆  
悉く無上菩提を樂せ求めて、無上の善を以て普く衆生を覆はしめ、一切の衆生をして、  
不可説不可説の一切の寶蓋もて莊嚴せる妙蓋を以て、一佛に供養し、一切の諸佛に供養す  
ることも亦復是の如くならしめ、一切の衆生をして自然に覺悟して、最正覺の功徳の高廣

を深慮すべし。  
【不可説不可説】  
無量無邊の大數を  
形容す。而して本  
經特有の無盡緣起  
の思想を表示する  
なり。

微妙の蓋を得て、普く諸佛を覆はしめ、一切の衆生をして、種種の寶蓋を以て法界虚空界に  
等しき一切世界の諸佛を供養せしめ、一切衆生をして、種種の摩尼寶の蓋を以て、諸寶の  
瓔珞周匝して垂れ下り、以て莊嚴を爲せる一切の堅固香の蓋の、清淨なる寶蓋を以て莊  
嚴し、極大高廣にして、白淨の寶網を以て其上に羅覆し、金鈴の網を以て周匝して之に  
懸け、自然に微妙の音聲を演出する、是の如き等の無量不可數の蓋を以て諸佛に供養せし  
め、一切の衆生をして、無礙智の蓋を得て、普く十方の一切諸佛を覆はしめ、一切の衆生  
をして、最勝智の蓋を得て、普く衆生を覆はしめ、一切の衆生をして、佛の功德もて莊嚴  
せる寶蓋を得て、普く衆生を覆はしめ、一切の衆生をして、皆悉く清淨の大願と諸佛  
の功德とを具足せしめ、一切の衆生をして、不思議なる清淨の心寶を得しめ、一切の衆  
生をして、諸法の自在の智を満足せしめ、一切の衆生をして、諸の善根を以て普く衆生を  
覆はしめ、一切の衆生をして、無上智の蓋を得て、普く衆生を覆はしめ、一切の衆生をし  
て、十力の蓋を得て、普く衆生を覆はしめ、一切の衆生をして、一佛刹を以て、悉く能く普  
く一切の法界を覆はしめ、一切の衆生をして、悉く諸法に於て、自在を得しめ、一切の衆生  
をして、心の自在を得しめ、一切の衆生をして智慧勝廣ならしめ、一切の衆生をして、無  
量の功德を以て、悉く能く普く一切の衆生を覆はしめ、一切の衆生をして、諸の功德を以  
て其心を覆はしめ、一切の衆生をして、平等の心を以て普く一切を覆はしめ、一切の衆生  
をして、大智慧を以て等しく一切を覆はしめ、一切の衆生をして、大廻向を具へしめ、一

【意根を清淨ならしむ】意根は六根の一なれども、此處に於ては衆生の心全般の意味なり七佛通説の自淨其意の清淨は佛教の精神なるを以てなり

一切の衆生をして、清淨なる正直の心を満足せしめ、一切の衆生をして意根を清淨ならしむ。是を菩薩摩訶薩の種種の業を爲す時の善根廻向と爲す。一切の衆生をして、捨て志く最大の廻向を成就して、普く廻ひて一切の衆生を攝取せしむるなり。

菩薩摩訶薩は種種の清淨なる幢幡を布於す。無量の寶寶を以て其竿と爲し、種種の寶飾を以て垂幡と爲し、種種の寶飾は周匝して垂れ下り、白淨の寶網を其上に羅覆し、金鈴の寶網を以て莊嚴と爲し、微風に吹動せられて和雅の音を出す。無量無數億那由他の妙轉輪を以て眷屬と爲し、寶寶の寶飾を懸けて以て飾と爲し、半月の寶像の圓淨極金は

大光明を出すこと日の普く照すが如く、環飾せる寶輪は大地に圓滿し、一切の世界の隨業の業根を以て彼幢を莊嚴し、一切の虚空法界に等しき諸の如木の刹に安住せり。菩薩摩訶薩は諸の世界に於て、其業所に隨ひ普く妙幢を爲して、正直なる菩提の心を發さしむ。或は現在の一切の諸佛に施し、或は塔廟に施し、或は寶寶に施し、或は僧寶に施し、或は善知識に施し、或は菩薩に施し、或は聲聞に施し、或は緣覺に施し、或は大衆に施し、或は憍伽羅に施し、或は貧人に施し、諸の來り求むる者には普く施して遺すこと無し。菩薩摩訶薩は幢幡を施す時に是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして一切の善根功徳の幢幡を建立して、毀壞すべからざらしめ。一切の衆生をして、一切諸法の自在なる幢幡を建立して正法を守護せしめ。一切の衆生をして、正法の寶を護りて、諸佛菩薩の深法を守りせしめ。一切の衆生をして、高顯なる功徳の寶幢を建立し、智慧の燈を然し

の深法を守りせしめ。一切の衆生をして、高顯なる功徳の寶幢を建立し、智慧の燈を然し

【九十六種諸の邪見の歸】九十六種外道（第一卷に註せり）の邪説を、佛の正法輪に對して邪見の幢と呼べるなり。

【薩婆若】(SARVA Jñāna)の音譯(Sarva)は一切なり。(二五)は智なり。即ち一切智と譯し諸佛の果上の智慧なり。  
【十六智】地前の四定(光得、明増、

て、普く衆生を照らさしめ。一切の衆生をして、不壞の幢幡を成じて、一切諸魔の惡業を降伏せしめ。一切の衆生をして、皆悉く智力の幢幡を建立して、一切の諸魔も壞すること能はざる所ならしめ。一切の衆生をして、大智慧那羅延の殊勝の幢幡を得て、一切世間の幢幡を摧滅せしめ。一切の衆生をして、解脫の慧光の圓滿なる日幢を建て、智慧具足して、普く法界を照さしめ。一切の衆生をして、智慧寶莊嚴の幢幡を得て、一切諸佛の世界に充滿し、不可説の勝妙なる幢幡を建て、十方の一切諸佛を供養せしめ。一切の衆生をして、如來の幢を得て、一切の九十六種諸の邪見の幢を摧滅せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の幢幡を施す時の善根廻向と爲し、一切衆生をして高廣にして甚深なる菩薩行の幢を建て、一切の菩薩の自在行の幢を建て、清淨の道を得しむるなり。

菩薩摩訶薩は衆の寶藏を聞きて布施を行する時に、是の如く廻向すらく、「非善根を以て、一切の衆生をして常に佛寶を見たてまつり、愚癡を捨離して正念を修行せしめ。一切の衆生をして法寶の明を得て一切諸佛の寶藏を護持せしめ。一切の衆生をして僧寶を攝取して、慳を離れ施を行じて、其意を充滿せしめ。一切の衆生をして薩婆若の心寶を得て、清淨なる菩提心に於て退轉せざらしめ。一切の衆生をして、智慧の寶を度り、永く愚癡を離れて佛法を究竟せしめ。一切の衆生をして、菩薩の諸の功德の寶を成就して、無量なる智慧の妙寶を演說せしめ。一切の衆生をして、無量なる功德の寶を讚歎し、十力智を修して、正覺の寶を得しめ。一切の衆生をして十六智の寶を得て三昧正受し、智慧の寶を

印順、無間」と、地上の四聖（光明、集福王、普賢、健行）との八聖の各に自分と譬喩との二分あるを以て、總じて十六聖となる。此等の聖に入りて得たる智を十六智と云ふ。

【百福具好】百福

莊嚴、別名に十二相、別名に十善に各百福の心ありて五十心となり、更に智慧心と終成とあるを以て百福の善心となる。因位に於て此百福を積む功徳に因りて果上に一相好を得るが故に此異名ある。

究竟じ、増廣せしめ。一切の衆生をして、第一の福田の寶を成就して、如來の無上智の寶を覺悟せしめ。一切の衆生をして、増上の寶を成じて無盡の寶もて法寶を演說せしめん。是を菩薩摩訶薩の衆寶を具す時の菩提樹向と爲し、一切の衆生をして、無上智の寶を具是に究竟して、佛の無礙なる清淨眼の寶を得しむ。

菩薩摩訶薩は莊嚴具を捨てて衆生に恵み與す。謂ゆる一切の身の莊嚴具、裝飾の莊嚴具、身を清淨ならしむる莊嚴具、寶足無き莊嚴具、寶寶絞飾の莊嚴具なり。是の如き等の種種の無量億那由他の莊嚴の具を一切に布施して、善根を廻向すらく、一切衆生の身を清く莊嚴し、一切を等觀すること爲し、一子の如くし、世間を超出して佛智の樂を得、衆生を調伏して深法を樂はしめ、一切諸佛の法の中に安住せしめ、一切の衆生をして天人を莊嚴し、悉く清淨の智慧を以て自ら嚴飾せしめ。一切の衆生をして、身を清く莊嚴して功徳相の門を清淨に具足せしめ。一切の衆生をして、妙相もて身を嚴り、百福、具好を以て自ら莊嚴せしめ。一切の衆生をして、身相具足して、諸の相好を以て自ら莊嚴せしめ。一切の衆生をして、言辭もて莊嚴して智慧の辯慧を具足せしめ。一切の衆生をして、功徳の功徳を以て音聲を莊嚴し、妙音清淨微妙にして具足せしめ。一切の衆生をして、智慧の佛法の莊嚴を志樂して、正法を樂てし、諸佛を歡喜せしめ。一切の衆生をして、心を莊嚴し、念佛の味もて普く諸佛を見なてまつらしめ。一切の衆生をして、諸の陀羅尼の莊嚴を以て自ら莊嚴し、佛の法明を得て、諸佛の法を見しめ。一切の衆生をして、平等智を以

るなり。  
【一切を等観す】

等は平等なり、觀は視觀するなり。即ち佛の一味平等の大慈悲心を以て一切有無情を觀察するを言ふなり。

【梵音】梵音聲と

同じ。清淨なる音聲を以て諸佛及び法僧等の三寶を供養する義。如來の聖音は響十方に渡り、聞く者皆道果を得と言ふ。

【念佛三昧(前註)】念佛三昧(前註)の中、此處の意味は

事理の定善觀なり。佛の相好莊嚴を觀察し、觀念を凝らして、其觀成熟すれば邊遍法界の理法身を觀するに至るなり。

【陀羅尼】(Tilina)

(三)の音譯、總持。能持、能遮等と譯す。咒法に似たるを以て咒とも言ふ。廣大無量の義理、善法を以て散失

て其心を莊嚴し、如來智を以て法身を莊嚴せしめん」と。是を菩薩摩訶薩一切の莊嚴具を惠施する時の善根廻向と爲し、一切の衆生をして、無量の佛法の功德、智慧に於て莊嚴し満足せしめ、一切の衆生をして、自の大神變と放逸とを捨離せしむるなり。

菩薩摩訶薩、灌頂の大王と爲り、威力自在にして、天冠と髻中の明珠とを布施して、一切に給施し、衆生を攝取して施心を長養し、施を以て心に重じて、増上の施に向ひ、施を以て慧を修し、施して捨根を修し、施して廣覺を修す。菩薩摩訶薩、髻の明珠を施す時に、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、善く一切智の灌頂の法王を受けしめ、一切の衆生をして、頂相を具足して、勝智の頂を獲、彼岸に到ることを得しめ、一切の衆生をして、勝智の寶を得て、一切功德の頂を究竟せしめ、一切の衆生をして、悉く智慧の寶頂に安住することを得て、一切の敬心頂禮を堪受せしめ、一切の衆生をして、皆悉く智慧の天冠を冠冕して、一切の法に於て自在を得しめ、一切の衆生をして、智慧の明珠を以て其頂に繫け、一切世間能く頂を見ること無からしめ、一切の衆生をして、皆悉く敬心の頂禮を堪受し、慧頂を具足して佛法を照明せしめ、一切の衆生をして、十力の冠を成じて、以て其頂に冠むり、智寶海藏を清淨に具足せしめ、一切の衆生をして、最上の大地帝王に安住して、諸魔の頂を摧き、最正覺を成じて、究竟して如來の十力を具足せしめ、一切の衆生をして勝頂王を成じて、一切智の頂の最勝の光明を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の天冠の明珠を捨つる善根廻向と爲し、一切の衆生を

明を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の天冠の明珠を捨つる善根廻向と爲し、一切の衆生を

せしめざる義なり  
從つて樂徳を具す  
る約文等を陀羅尼  
と呼ぶ。

【放逸】 心所（精  
神作用の一）の一、  
大煩惱地法に數へ  
られ、尸羅煩惱の  
一たり。人をして  
善を專修せざらし  
むる作用を言ふ。

【杵械枷鎖】 杵は  
手がせ、械は足か  
せ、枷は頸かせ、  
鎖はくさりにて凡  
て罪人縛縛の道具  
なり。

【煩惱】 煩惱の異  
名。煩惱は身心を結  
縛するもの。心は山  
らざらむる意、  
煩惱は身口の境を破  
り、善根の苗稼を損  
ずるが故に名けら  
る。

して、眞如の智慧を皆悉く清淨ならしめ、淨智照の摩尼寶の光を得しむるなり。

菩薩摩訶薩、牢獄の衆生の略の梵毒を受くるを見るに、或は縛せられ、或は打立、

眞如に體在し、杵械枷鎖に拘束せられて血を流し、飢渴忍び難く、裸形にて癩瘦し、被髮

に身を覆ひて、無量の苦を受くも、能く救ふ者無し。菩薩摩訶薩は是の如き等の苦の衆

生を見知りて、或は財寶、妻子眷屬を捨て、或は己が身を捨てて、彼獄中に於ける苦の衆

生を救ふこと、大悲菩薩、普賢王菩薩摩訶薩の如し。彼獄中より衆生を出し已りて、其須

むる所に歸して之を給養す。或は寶藥呪術を以て彼を安樂ならしめ、坐す歡喜せしめ、復

爲に法を説きて、皆悉く不眞實の善根に安立し、正覺の法に於て、心退轉せざらしむ。

菩薩摩訶薩よ獄人を救ふ時に、其の如く覺向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、愛

縛を解脫せしめ、一切の衆生をして、生死の流を斷ちて智慧の彼岸に到らしめ。一切の衆

生をして、眞如を體證して清淨の智を得、衆の使根を抜きて、諸の塵垢を離れしめ。一

切の衆生をして、三界の清を斷ちて一切智を得しめ。一切の衆生をして、永く結漏を滅し

て、煩惱塵を離れたる無礙の智慧を得、皆悉く究竟して彼岸に到らしめ。一切の衆生を

して、愛慢の毒を離れ、究竟して愛慢を離れたる覺を成就せしめ。一切の衆生をして、諸

欲の縛を離れ、永く一切世間の貪欲を離れ、諸の世間に住して樂著する所無からしめ。

一切の衆生をして、清淨の深心を得て、常に諸佛に守護せらるることを爲しめ、一切の

衆生をして、無著無縛の心を得て、廣大なること法界の如く、究竟すること虚空の如くな

【五種に繫縛】兩手兩足、頸の五處を縛するを言ふ。

【高標】處刑臺のこと。俗に言ふさらし場なり。

【身に油を灌ぎ云】火刑の一種にして、印度、支那等に於て多く重罪人の處刑法として用ひらる。

【記別】佛の豫言を言ふ。

佛の豫言

らし。一切の衆生をして、菩薩の神足を得て遍く諸刹に遊び、衆生を調伏し、世間を捨離し、大乘に安住せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の苦の衆生を救ふ善根廻向と爲す。一切の衆生をして、如來の智慧の地を究竟せしむるなり。

菩薩摩訶薩は、獄囚に送られ死地に趣くを見るに、五種に繫縛せられ、憂惱心に切り、命須臾に在り、衆人に圍遶せられ、閻浮提の一切の樂具を捨て、永く親愛を離れて、漸く死地に之く、或は木を以て貫きて高標の上に置き、或は刀を以て割き、或は火を以て焚き、或は身に油を灌げるものを纏ひ、火を以て之を燒く。是の如き等の無量の諸苦を受く。菩薩摩訶薩は是の如きを見じりて、自ら身命を捨てて彼苦難を救ふこと、猶し持來菩薩、勝進王菩薩等の諸の大菩薩の如し。自ら己が身を捨てて衆の楚毒を受け、以て衆生を救ひ、是の如きの言を作さく、「我當に身を捨てて、以て彼命に代るべし。設使苦痛彼に過ぐることも無量なりとも、悉く當に代つて受け、其をして解脱せしむべし」と。復是念を作さく、「是の如きの苦を見て、而も代つて受けざるは、大利を失ふと爲す。何を以ての故に。我、衆生の爲の故に、衆生を救護せんが故に、一切智、菩提の心を發せばなり。是故に身を捨てて以て彼に代らん」と。菩薩摩訶薩は苦める人を救ふ時に、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、無盡の身命を得て、永く熾然の憂悲、苦惱を離れしめ。一切の衆生をして、諸佛の住に依りて、一切智の力と、菩提の記別とを受けしめ。一切の衆生をして、諸の怖畏を救ひ、永く惡道を離れしめ。一切の衆生をして、一切の命を得て永く

【不死の智慧の境】成佛の覺證の境界は輪廻生死を斷滅せるを以て即ち不死(アメリカ)は不生不死、不増不減の眞如たり。故に今は不退の正覺位に入ることを言ふなり。

【鬘珠を割き】印度貴族の習慣として、生子の頂の皮を開き内に一の神珠を入れ、藥を以て其皮を封じ著る惡風習あり。今其頂皮を破りて珠取出すなり。【無見頂相】佛の三十二相の、佛の

不死の智慧の境界に入らしむ。一切の衆生をして、怨敵を遠離して、佛と善知識と常に共に攝護せしめ、一切の衆生をして、刀杖を捨離して淨業を修行せしめ、一切の衆生をして、諸の恐怖を離れ、菩提樹下に坐して魔軍を降伏せしめ、一切の衆生をして、大衆の恐怖を離れ、無上の法の中に於て、淨無畏の大獅子境を得しめ、一切の衆生をして、無障礙の師子の智慧を得て、清淨の業を行せしめ、一切の衆生をして、無畏の處に到りて、一切の苦惱の衆生を救護せしめん」と。是を菩薩摩訶薩、自ら身命を捨てて彼死囚を救ふ善根廻向と爲し、一切の衆生をして、生死の苦を離れ、佛の樂を究竟せしむるなり。

菩薩摩訶薩は、人の來りて連膚、頂髮、及び髻の明珠を乞ふものを見れば、菩薩是時に歡喜して施與すること、周羅寶王菩薩、勝趣菩薩等の諸の大菩薩の如し。人有りて、從つて連膚、頂髮、及び明珠を乞ふ時に、正心に思惟して餘業を念はず。諸の世間を離れて専ら寂靜を樂み、清淨、正念にして、一切種智と正直心とを修す。菩薩、爾時、手に利刀を執りて、即ち髻髮及び髻の明珠を割き、右膝を地に着け、敬心に合掌して、三世の諸佛菩薩の所行を正念し、大歡喜を發し、直心清淨にして、一切の正法を意根に充滿し、心に苦を計せず。苦は是れ生滅の法、是れ無常の法なり」と。是念を作し已りて衆苦を隨滅し、歡喜して布施し、善根を廻向し、一切の衆生をして無見頂相を得て、菩薩の周羅の尊塔を成就せしめ、一切の衆生をして紺青の髮を得、金剛の髮を得、柔軟の髮を得て、悉く能く諸の煩惱の患を除滅せしめ、一切の衆生をして不亂の髮を得、光澤の髮を得しめ。

十隨形好の第六十  
六の肉の隆起して、  
鬚の形をなし、人  
天、二乗、菩薩の見  
る能はざるが故に  
此名あり。人天は  
言ふも更なり。因  
位の菩薩も及ばざ  
る特殊なる瑞相好  
なり。

【周羅】(アノロ)  
の音譯、頂髮と譯

【結習】煩惱の異  
名たり。結は結縛  
なり。習は習氣な  
り。習習は習慣性

即ち惰性にして、  
煩惱の斷滅後と雖  
も尚修養精進(佛  
教にては修斷と言  
ふ)の結果にあら  
ざれば斷じ難き惡  
性の煩惱なり。

【摩訶衍心】大乘  
心とも言ひ、大人  
即ち菩薩の大機が  
佛果の大涅槃を上  
求し、苦海に沈淪  
する衆生を下化救  
濟せんとの志を言  
ふ。

一切の衆生をして、柔軟なる旋螺の髮を得しめ。一切の衆生をして、右旋の髮を得しめ。一切の衆生をして、佛相の髮を得て煩惱結習を皆悉く除滅せしめ。一切の衆生をして、髮より大光明を出して普く十方を照さしめ。一切の衆生をして、惡心を除滅し、如來の髮を見たてまつらしめ。一切の衆生の髮をして、諸の塵垢を離れて、悉く如來の樂著無き髮を得しめん。是を菩薩摩訶薩の頂髮及び鬚の明珠を布施する善根の廻向と爲す。一切の衆生をして、悉く一切の陀羅尼、諸の三昧門、一切種智、及び佛の十力を究竟することを得しむるなり。

菩薩摩訶薩、眼を布施する時は、歡喜菩薩、滿月王菩薩等の無量なる諸の大菩薩の如し。眼を布施する時、施眼の心を修し、慧眼の心を修して、佛の法眼の心、無上道に向ふ心、諸道を究竟する心、専ら智慧を求むる心を得、三世の菩薩の惠施を修する心に等し。眼を乞ふ者に於て愛眼を以て視、無壞の信心を以て彼に眼を施す。因りて佛眼を生じ、菩提の摩訶衍心を増廣し、大慈大悲にて六根を調伏す。菩薩摩訶薩は、是の如きの心を修して、眼を以て惠施し、常に樂ひて施與して、正法を建立し、世間の歡樂とく放逸とを捨離し、五欲を厭離じて菩提心を樂ひ、彼求むる所に隨ひて悉く具願を滿じ、平等無二の布施を長養し、彼須むる所に隨ひて悉く能く施與して、善根を廻向し、一切の衆生をして、眼開明たるを得て、世の爲に眼と作らしめ。一切の衆生をして、無障の眼を得て智藏を開廣せしめ。一切の衆生をして淨肉眼を得て、一切世間に能く壞する者無からしめ。一切の衆生

をして淨天眼を得て、悉く衆生をして此に死し彼に生るるを見しめ。一切の衆生をして淨法眼を得て、能く隨順して如來の境界に入らしめ。一切の衆生をして、淨慧眼を得て一切の世間を分別し了知せしめ。一切の衆生をして、淨佛眼を得て、悉く能く一切諸法を覺悟せしめ。一切衆生をして、普淨眼を得て境界を究竟じ、障礙する所無からしめ。一切衆生をして癡翳を除滅して清淨眼を得、衆生界の空にして所有無きことを了らしめ。一切衆生をして無障眼を得て、如來の十力の勝處に到ることを得しむ。是を菩薩摩訶薩の眼を布施する時の善根廻向と爲す、一切の衆生をして、一切智の眼を得しむるなり。

菩薩摩訶薩、耳を布施する時は、勝上菩薩、勝無怨菩薩の如し。耳を布施する時、菩薩の行を修して如來の法に生れ、諸佛の行する所の布施を修習し、一切の菩薩の淨行を正念し、諸佛の菩提に隨順して、清淨なる諸佛の智慧の功德を出生し、世間に堅固の者無きことを觀察して、一切の衆生をして、常に一切の諸佛菩薩を念てまつり、自ら己が身に於て染著する所無く、隨順して、一切の佛法を正念す。菩薩摩訶薩は耳を布施する時其心寂靜にして、諸根を調伏し、衆生を離離なる曠野より救濟し、智慧の徳の功德を生じ、檀波羅蜜海を填満し、信心成滿して、法を知り、法を知り、明かに諸法を識り、智慧の行を得、法に於て自在を得て、不動の身を以て堅固の身に易ふ。普賢菩薩の耳を布施する時に、是の如く廻向すらく、「此菩薩を以て、一切の衆生をして、無礙の耳を得、悉く能く普く無量の法音を聞きて、了達無礙ならしめ。一切の衆生をして、無礙の耳を得て、

【檀波羅蜜海】は Dana の音譯にして布施と譯す。波羅蜜は Parāmita の音譯にして彼岸、究竟等と譯す。即ち普

薩の大行にして六度(前註)の一たり海は集の意。

【天耳、佛耳】衆生(人間)の耳は天耳に比して其聽取力甚だ方弱なり、故に天耳、佛耳の如く勝れたる耳を得んことを顯説せたるなり。

無量の菩薩を分別し、知せしめ。一切の衆生をして、無對の耳を得て佛の淨耳を得しめ。一切の衆生をして、清淨の耳を得て、耳根虚空にして所有無きことを解了せしめ。一切の衆生をして、廣大の耳を得て、皆悉く寂靜にして所起無きことを識らしめ。一切の衆生をして、法界に等しき耳を得て、能善く一切の佛法を聞持せしめ、一切の衆生をして、無著の耳を得て、悉く能く無礙の諸法を分別せしめ。一切の衆生をして、無塵の耳を得て、一切の異論を能く壞する者無からしめ。一切の衆生をして、周普の耳を得て、廣大にして清淨ならしめ。一切の衆生をして天耳、佛耳を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の耳を布施する時の善根廻向と爲す、一切衆生をして、清淨の耳を得しむるなり。

菩薩摩訶薩、鼻を布施する時、清淨に是の如く廻向すらく、此善根を以て、一切の衆生をして如來の鼻相を得、善相の鼻を得、愛樂の鼻を得、清淨の鼻を得、隨順の鼻を得、高好の鼻を得、伏怨の鼻を得、如來の鼻を得しめ。一切の衆生をして、端正の面門を得、一切の法門を得、無礙門を得、善現門を得、無厭門を得、清淨門を獲、離惡門を得、隨順の如來の圓滿なる面門を得、一切の門を得、善樂無量の門を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の鼻を布施する時の、善根廻向と爲す。一切の衆生をして究竟して諸佛の法の中に入ることを得しめ。一切の衆生をして十方の諸佛の正法を攝取せしめ。一切衆生をして分別して深く諸佛の妙法を解らしめ。一切の衆生をして諸佛の法に於て彼岸に到ることを得しめ。一切の衆生をして、常に諸佛を見たてまつらしめ。一切の衆生をして、諸の如來の無量の

【自在の大王地】

自在は樂地なき白山即ち解脫の樂なり。今菩薩の樂縛を脱して自在を得たるを以て、大王地と言ふなり。

【白淨の利牙】

白淨相のこし三十二相の一にして、四犬齒の白色にして清淨なる相たり。四牙白淨と言ふ。

【齊密無間の齒相】

三十二相の一にして、佛の齒は白淨にして細密尚も其形齊しく整へる。故に瑞相の一に數ふ。

【入齒四十四】 三十二相の一たり。我

法門を得しめ。一切の衆生をして究竟して清淨を得しめ。一切の衆生をして、佛法の明を得て善く諸法を照さしめ、一切の衆生をして、嚴淨の淨刹を得しめ。一切の衆生をして佛の堅固不可壞の鼻を得しむ。是を菩薩摩訶薩の鼻と布施する時の善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩、自在の大王地に安住する時、能く牙齒を以て衆生に布施すること、菩薩摩訶薩、六牙白象王菩薩の如し。衆を布施する時、得難きの心を以て寶鬘華の如し、清淨施の心、無量施の心、不濁施の心、無著施の心、無量世の心、伏して諸根を捨すの心、一切施の心、一切智願の心、衆生を安隱にする心、施を成就する心、大施の心、無施の心、能く身の要用なるは牙齒を最と爲す。己の寶重とする所、衆の愛惜する所にして、而も能く衆生の乞ひ求むるものに施入す。菩薩摩訶薩は此法に安住して、牙齒を捨する時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、白淨の利牙を得て最勝の塔を成じ、万人の供を受けしめ。一切の衆生をして、佛の齊密無間の齒相を得、一切衆生をして調伏の心を行ぜしめ。菩薩の諸波羅蜜に進取せしめ。一切衆生をして、口齒清淨にして顯現明白ならしめ。一切の衆生をして、莊嚴の口を念じ、牙相成就して閑現鮮潔ならしめ。一切の衆生をして、舍齒四十四にして、常に無量清淨なる妙香を出さしめ。一切の衆生をして、安住旋牙を得、華色華香して能く心を調伏せしめ。一切の衆生をして、清淨の牙を得て、能く無量億千の光明を放ち、鮮潔圓滿にして善く十方を照さしめ。一切の衆生をして徐嚙の牙を得て、飯口に入りて過ぐれば穀粒皆碎けて、味著する所無く上福田

我の齒数は最も完全なる者に於て三十二枚と言ふに佛のみは四十齒を有すと云ふ。  
【徐暉】 暉は咀嚼する義なり。今は立派な白齒を得る意なり。

【廣長舌の相】 三十二相の一、舌葉甚だ廣長なるなり八十隨形好の第三十にして、丹赤にして薄く、能く髮際に至ると言ふ。故に覆面舌の名あり。

と爲さしめ。一切の衆生をして勝妙の牙を得て、無量の色光を放ち、菩提の記を授けしめん」と。是を菩薩摩訶薩、牙齒を施す時の善根嚮向と爲す、一切の衆生をして、無礙清淨なる諸法の智慧を得しむるなり。

菩薩摩訶薩、若し人有り來り從ひて舌を乞ふ時、乞ひ求むる者に於て、柔軟語、愛語、慈愍心の語もてし、撫慰の心を生ずること、善口王菩薩、不退轉菩薩、及び餘の無量なる菩薩摩訶薩等の如し、諸趣の中に於て無量の生を受くる時、舌を乞ふ者有らば、先づ乞ふ人を安んじて師子の座に處らしめ、己が舌を捨つる時、歡喜の心、不壞の心、輕快無き心、大なる心、佛家に生ずる心、菩薩の家を建立する心、不濁の心、勇猛精進の心、自身に著せざる心、怨敵無き心を以て、右膝を以て地に著け、舌を出し承し已りて、柔軟の語、愛語、慈愍心の語を作して、乞ふ者に謂ひて言はく、「汝我が舌を取り、意の所用に隨ひて汝が意を充滿せしめよ」と。菩薩摩訶薩は舌を布施する時、是の如く嚮向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして廣長舌の相を得て、能く一切の具足せる音聲を出さしめ。一切の衆生をして覆面舌の相を得て、言ふ所二無く皆悉く誠實ならしめ。一切の衆生をして舌能く過く一切の佛刹を覆ひ、諸佛の自在神力を示現せしめ。一切の衆生をして、軟の薄舌を得て清淨第一の上位を宣通せしめ。一切の衆生をして正語舌を得て、言説する所有れば一切歡喜して疑網を悉く除かしめ。一切の衆生をして淨光舌を得て、能く不可説の百千億那由他の光明を放たしめ。一切の衆生をして決定語を得て善能く無盡の法藏を

分地すし、一切の衆生をして淨勝處を得、衆の言音を淨くし、寔を以て文化せしめ、一切の衆生をして菩薩の智を得、善能くを顯して明淨法に入らしめ、一切の衆生をして、善能く一切の諸法を辯明し、善の正法に於て智慧を成就し、彼岸に到ることを得し、一人一人を以て諸國衆の首を布施する時の菩薩願と爲す、一切の衆生をして、無礙智を得、諸法を辯明せしむるなり。

【大捨】捨は心所の名にして、行捨と云ひ、心を離れて、平等安んずる精神作用なれど、今は唯識宗の説の精進、無貪、無瞋、無礙の四心所を當作用に解するを當れりとす。

一切の衆生をして淨勝處を得、衆の言音を淨くし、寔を以て文化せしめ、一切の衆生をして菩薩の智を得、善能くを顯して明淨法に入らしめ、一切の衆生をして、善能く一切の諸法を辯明し、善の正法に於て智慧を成就し、彼岸に到ることを得し、一人一人を以て諸國衆の首を布施する時の菩薩願と爲す、一切の衆生をして、無礙智を得、諸法を辯明せしむるなり。

一切の衆生をして淨勝處を得、衆の言音を淨くし、寔を以て文化せしめ、一切の衆生をして菩薩の智を得、善能くを顯して明淨法に入らしめ、一切の衆生をして、善能く一切の諸法を辯明し、善の正法に於て智慧を成就し、彼岸に到ることを得し、一人一人を以て諸國衆の首を布施する時の菩薩願と爲す、一切の衆生をして、無礙智を得、諸法を辯明せしむるなり。

一切の衆生をして淨勝處を得、衆の言音を淨くし、寔を以て文化せしめ、一切の衆生をして菩薩の智を得、善能くを顯して明淨法に入らしめ、一切の衆生をして、善能く一切の諸法を辯明し、善の正法に於て智慧を成就し、彼岸に到ることを得し、一人一人を以て諸國衆の首を布施する時の菩薩願と爲す、一切の衆生をして、無礙智を得、諸法を辯明せしむるなり。

切處に於て壞ること能はざる所、一切諸の世尊の上に出現し、頂相具足して、長髮莊嚴し、一切世間に未だ曾て有らざる所、佛の首相の嚴勝殊特なるを得しめ、一切の衆生をして智慧の首、最勝の首、清淨の首、具智慧の首を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の頭を布施する時の善根廻向と爲す。一切の衆生をして勝法を具足して、無上大智慧の首を速得せしむるなり。

【經】 煩惱の異名なり。纏縛と熱し自由解脫を妨ぐるを以てなり。

菩薩摩訶薩は、衆生に手足を施すこと勇猛王菩薩、無畏菩薩の如し。是の如き等の無量の菩薩摩訶薩は、諸趣の中り無量の生所に於て、手足を布施し、信心の手を修して常に正法を行じ、衆生を饒益し、威儀庠序にして、寶手を手と爲し、著すること無くして手を施す。菩薩の所行は眞實にして虚しからず、施心廣大にして善根を建立し、淨責を遠離し、菩薩の行を具へ、如來の所に於て不壞の信を得、惡道を除滅して菩提を成就す。菩薩摩訶薩は手足を施す時、無量無邊の廣大の心を以て、淨法門を開きて、諸佛の海に入り、一切の佛を見たてまつりて、施手を成就し、衆生の意を満じ、悉く能く一切種智と、善根の諸願とを受持し、清淨心を修して煩惱の纏を離れ、智身法身を得て、斷つこと無く、壞ること無く、磨滅すべからず、一切魔業も傾動すること能はず、善知識に親近して、一切の菩薩の布施の出生する所の、菩薩摩訶薩の一切智の境界を修習す。手足を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、悉く寶手を得て神通力を具へ、寶手を成じ已りて、各相敬重して福田の心を生じ、種種の寶を以て更に相供養し、又衆寶の

【綬網】三十二相の綬網と言ひ、手足間に綬網の文ありて、恰も水鳥の足の如き相をなすと云ふ。

【忍辱】六度（六波羅蜜とも言ふ）の一、苦痛屈辱等を耐へ忍びて、怨むことなきを言ふ。

非難を以て一切の佛に供へ、妙寶の雲を興して諸佛の刹に廻からしめ。一切の衆生をして慈悲を修習して、相惱害せず、諸佛の刹に遊びて無畏に安住し、少方便を以て神足を究竟し、寶手、香手、衣手、蓋手、鬘手、鬘手、末香手、莊嚴具手、無量華手、無量香手、香水を以て、神通力を以て諸佛の刹に詣り、諸佛を供養し、能く一手を以て能く一切諸佛の世尊を摩し、能く神足自在の手を以て一切の衆生を持し、手相成就して無量の光を放ち、能く一手を以て普く衆生を覆ひ、佛の綬網、手足の相好を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の大德向の手と爲して、普く衆生を覆ひ、一切の衆生をして志常に無上菩提を樂求せしめ。一切の衆生をして、無量の功德の大德を出生して、忍辱心得、求むる者を見れば、皆大いに歡喜し、觀て厭き足ること無く、深法海に入り、諸佛所共の善根を速得せしむ。是を菩薩摩訶薩の手足を能く時々の善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩は身を壞り血を出して、衆生に布施すること法手菩薩、喜心王菩薩等の無量の菩薩摩訶薩の如し。諸經の中の無量の生處に於て、乞ひ求むる者に於ては身を壞り血を出して之を布施し、薩婆若の心を以て施し、菩提を喜ぶ心を以て施し、菩薩の行を樂修する心もて施し、苦痛を計せざる心もて施し、來り乞ふ者に於て嫌恨無き心もて施し、一切の菩薩に趣向する心もて施し、一切の菩薩を長養する心もて施し、菩薩の善を増廣する心もて施し、不退轉の心を以て施し、休息せざる心もて施し、已を惜まざる心もて施す。菩薩摩訶薩は、身を壞り、血を出して布施する時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一

一切の衆生をして菩薩の法身智身を具足せしめ。一切の衆生をして、微密なる金剛の身を成就せしめ。一切の衆生をして、無盡の身を得て、清淨不壞ならしめ。一切の衆生をして現化の身を得て、十方一切の世間に遍滿せしめ。一切の衆生をして可樂の身を得て、明淨鮮潔にして沮壞すべからざらしめ。一切の衆生をして法界生身を得て、如來の身に於て染著する所無からしめ。一切の衆生をして寶光明の身を得て、能く壞る者無からしめ。一切の衆生をして智藏の身を得て、不死の法に於て自在を得しめ。一切の衆生をして寶海の身を得て、一切の衆生の所見虚しからざらしめ。一切の衆生をして虚空に等しき身を得て、諸の世間に於て染著する所無からしめん」と。是を菩薩摩訶薩の身を壞り血を出して布施する善根にして、大乘心もて廻向し、清淨心もて廻向し、大心もて廻向し、歡喜心もて廻向し、大歡喜心もて廻向し、無厭心もて廻向し、安樂心を以て廻向し、不濁心もて善根を廻向すと爲す。

菩薩摩訶薩は、人有り來りて髓肉を乞ふものを見る時、歡喜し、軟語して乞ふ者に謂ひて言はく、「我が身の髓肉は意に隨ひて取用せよ」と。饒益菩薩、一切施王菩薩等の、無量の菩薩摩訶薩の如く、諸趣の中の無量の生處に於て、髓肉を捨つる時、心大いに歡喜し、施心深廣にして測量るべからず。一切の菩薩の修習する所の心、無上なる大乘妙善根の心、卑垢を捨離したる正直の勝れし心、來り求むる者に於て施して盡くすること無き心、能く自己の愛重する身を捨つる心、一向に専ら無量の善根を求めて妙功德の寶の覆ふ所の心、菩薩

【無憂】樹を略せるなり。梵名阿輪迦(Aśoka)樹の名なり。釋迦佛は此樹下に出生し、過去に毘婆尸佛は此樹下に成道すと云ふ。今亦諸菩薩は此樹下に菩薩行を修するなり。

の兩行に厭き足ること無き心、大布施の心、疑惑を離れたる心、未だ信ふ所に於て希求する所の物は中に悔ゆること無き心、分別して希求し厭き足らざる心、平等に希求して選擇すること無き心なり。菩薩摩訶薩は隨肉を施す時、諸佛の所に於て其父の心を生じ、一切衆生をして清淨に安住せしめ、現在の諸の世界の中、一切の福智を修習し、大慈現前して衆生を救護し、菩提現前して十力明もて三世を觀し、菩薩現前にて其根を滿足し、無畏現前して十師子吼し、三世現前して智慧平等に、一切の善法現前して其根を滿足して菩薩の願を修し、無憂現前して無數の諸の菩薩行を修習す。菩薩摩訶薩は隨肉を施す時に之の如く希求すらく、此善根を以て、一切の衆生をして全體不可壞の身を得しむ。一切の衆生をして微密の身を得て、疏漏有ること無からしめ。一切の衆生をして、體の清淨に莊嚴する無意法身を得しめ。一切の衆生をして喜樂の行身を得て、一切の衆生をして自ら莊嚴せしめ。一切の衆生をして八十種好の妙莊嚴身を得て、十力を具足して歡喜すべからざらしめ。一切の衆生をして如來の常住なる妙身を得得して觀望すべからざらしめ。一切の衆生をして最勝の身を得て、一切の諸魔も壞すること能はざる所ならしめ。一切の衆生をして、希有の身を得て、三世の佛に等しからしめ。一切の衆生をして無礙の身を得て、微妙清淨にして虚空界に滿たしめ。一切の衆生をして菩薩の滿身を得て、衆多希有一切の衆生と合せしむべしと云ふ。是を菩薩摩訶薩の隨肉を希求し、一切智の瓔珞の心もて、善根を希向すと爲す。一切衆生をして佛の常住なる無礙の妙身を得しむるなり。

【金剛圍山】 鐵圍山のことにして、七金山とも言ふ。

菩薩摩訶薩は、衆生有りて、來り從ひて心を乞ふものを見れば、無量阿僧祇劫、不動王菩薩、是の如き等の無量の菩薩摩訶薩の如し。人有り來り從ひて心を乞ふものを見る時は歡喜して施與し、不斷の施を學するの心、一切無盡藏の心、大檀波羅蜜の心、檀波羅蜜の彼岸に到る心、一切菩薩の布施を行するを學する心、一切の施に於て無量を得る心、一切の大布施を修習する心、一切の菩薩の施を建立する心、現前に諸佛の施を正念する心、一切の來り求むるものに施して充滿せしむる心なり。菩薩摩訶薩は心を布施する時、清淨の心を以て施し、一切の衆生を度脱する心を以て施し、十力菩薩の堪忍の心を以て施し、大願を満足する心を以て施し、菩薩の行を修習する心を以て施し、諸善法を得る心を以て施し、本願を捨てざる心を以て施す。此善根を以て衆生に廻向して、一切の衆生をして金剛藏の心を得て、一切の金剛圍山も壞すること能はざる所、金剛眞實の心、恐怖を離れたる心、不可勝の心、一切世間も能く盡すこと無き心、勇健なる菩薩摩訶薩の心、大勇健超高勝轉の心、衆生の大海の盡すべからざる心、沮壞すべからざる那羅延の心、悉く能く諸魔、魔衆、魔の軍衆を壞散する心、威武勇健なる大丈夫の心、恐怖無き心、大智もて莊嚴せる勝堅固の心、最勝生の菩薩の心、諸佛の法菩提の莊嚴を具する心、菩提樹に坐して一切如來の正法を成就し、諸の愚癡を離れたる一切頓智正覺の心、十力を具へたる心を得しむる。是を菩薩摩訶薩の心を施し、善根を衆生に廻向すと爲す。一切の衆生をして無著の十力の心を具足せしむるなり。

【膜不現の相】佛八十隨形好の一、膜の形方正にして柔軟。而も現るることなく衆相を禁【總持】陀羅尼(前註)のこと。

菩薩摩訶薩は入來りて腸腎肝肺を乞ふもの有るを見る時に、羅刹菩薩、滅惡自在王菩薩是の如き等の無量の菩薩摩訶薩の如し。人有り來りて腸腎肝肺を乞ふものを見れば、見已りて歡喜し、愛敬を以て觀じ、菩提の愛を起して、彼樂土所に隨ひ、悉く其意を誦たし、歡喜して驚異し、心に申悔せず、正念に觀察すらく、不堅固の身に於て堅固の身を取り、我が眞個身は、鹿獐狐狗、衆の服の食ふ所、此身は無常にして棄捨すべき物なり」と言菩薩摩訶薩は是の如く觀じ已りて、執心に未り乞ひ求むる者を誦觀し、復舊念を作さく、「我若し乞ふすんば不堅固の中に堅固を、無常の中に常を、不淨の中に淨を得ざらん」と。菩薩摩訶薩は是の如く正念すれば、則ち能く清淨の直心を開發して、眞實の法を解り、來り乞ふ者に於て善知識の心を生ずらく、「能く我を教化して、不堅固の中に能く堅固を取らしむ」と。菩薩摩訶薩は、是念を作し已りて、此善根を以て衆生に轉向し、一切の衆生をして内外清淨なる智慧藏の身を得しめ。一切の衆生をして智慧藏の腹を得て、悉く能く一切の諸願を受持せしめ。一切の衆生をして清淨の身を得て、見る者厭くこと無く、堅固なる衆生の光明を演發して、普く十方に重ぜしめ。一切の衆生をして如來の膜不現の相を達得して、身宜相稱ひ肢節を具足せしめ。一切の衆生をして法味の實を得て智身を長養し、佛法の愛を具へて柔軟に充滿ならしめ。一切の衆生をして無量の身を得て、法身に安住せしめ。一切の衆生をして内清淨なる總持藏の身を得て、一切の總持普く諸法を照さしめ。一切の衆生をして清淨の身を得て内外悉く淨からしめ。一切の衆生をして

【甘露智慧】甘露はアミリタリ(不死)の譯なり。(前記)

【法身】眞如法性の理佛なれど、今本經の所説に依れば、解脱十佛の一に於て、智慧に依て證せらるる法性の理を言ふ。

如來智を得て、行身を修習し、普く甘露智慧の法雨を雨らしめ。一切の衆生をして悉く内身よ清淨にして寂靜、外身は能く衆生の爲に智慧幢王と作ることを得て、一切を照明せしめん。是を菩薩摩訶薩の屬腎肝肺を施して、善根を衆生に廻向すと爲す。一切の衆生をして悉く内外清淨の身を得て、堅固なる無障礙の智に安住せしむるなり。

菩薩摩訶薩は人の來りて肢節諸骨を乞ふもの有るを見れば、法藏菩薩、夜光菩薩の如し是の如き等の無量の菩薩摩訶薩は肢節骨を施す。來り求むる者を見れば、大歡喜の心、明淨の心、寂靜の心、慈の心、安樂の心、所著無き心、清淨の心を生じ、來り乞ふ者に於て願を滿たさしめんと心を生ず。菩薩摩訶薩は肢節を施し、攝むる所の善根を以て衆生に廻向すらく、「一切の衆生をして知化の身を得て、永く世間の骨血肉の身を離れしめ。一切の衆生をして金剛力の身を得て、能く壞する者無く、能く勝る者無からしめ。一切の衆生をして薩婆若力の具足せる法身を得て、無縛無著の法界より出生せしめ。一切の衆生をして智力の身を得て、諸根堅固にして斷壞すべからざらしめ、一切衆生をして法力の身を得て、智力自在にして、彼岸に到らしめ。一切の衆生をして堅固の身を得て、壞散すべからざらしめ。一切の衆生をして隨應化の身を得て、善能く衆生を調伏し成熟せしめ。一切の衆生をして智熏の身を得て、那羅延の肢節莊嚴を具へしめ。一切の衆生をして堅固にして流注不斷絶の身を得て、究竟じて永く一切の疲倦を離れしめ。一切の衆生をして安住力の身を得て、悉く皆勇猛精進を具足せしめ。一切の衆生をして淨法の身を得て、悉く

【圓身の身】 圓は圓滿、應身は三身の一にして衆生化益の爲に應現する身なり。故に圓なる應身佛の意。

く能く一切衆生を分別して、無量なる智身の境界に入らしめ。一切の衆生をして功德力の身を得て、繁惡を除滅し、見る者を虚しからざらしめ。一切の衆生をして無礙の身を得て、皆悉く無量著の智を究竟せしめ。一切の衆生をして佛所攝の身を得て、常に一切の佛に守護す。圓と爲らしめ。一切の衆生をして普く衆生を教化す。身を得て、悉く能く遍く一切の諸道に入らしめ。一切の衆生をして圓満の身を得て、十方の衆生、悉く其面を見て法に背くこと無く、清淨の照明常に現して前に在らしめ。一切の衆生をして具足精進の身を得て、究竟大乘の智を修習せしめ。一切の衆生をして我慢、自大、憍逸の身を捨離して、清淨の身を得、智慧に住して懈動すべからざらしめ。一切の衆生をして堅持戒の身を得て、大乘の一切智を成就せしめ。一切衆生をして佛家に生ずるの身を得て、永く眞道の生處の穢身を離れしめ。と。身を再薩摩訶薩、肢節諸骨を施す善根廻向と爲す。一切の衆生をして皆悉く清淨にして無量智を得しむるなり。

普薩摩訶薩は、未來りて手に利方を執り、摩薄の塵を乞ふもの有るを見れば、愛眼を以て、歡喜し恭敬して、常に其處を去り、即ち是念を作さく、「福田には遇ひ難し、而も自ら入りて我が本願を満し、決定して一切の智を究竟せしむ」と。是の如きの言を作さく、「我が身の皮を取り、汝が意に施して申すよ」と。清淨の普薩摩訶薩、金剛脇鹿王菩薩の如し。如きの無量の菩薩摩訶薩は乞人に厚薄の皮を前施する時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして如きの薄皮の相を得て、金色清淨ならしめ。一切の衆生を

【金色の皮】佛の三十二相の一なり身金色相と言ひ、膚の色紫金の如く光澤ありて智相なり。

【明淨の皮】佛の三十二相の一なり皮膚細滑相と言ひ八十隨形好の第二十五皮膚清淨にして垢垢を受けず滑澤細膩たるを言ふ。

して金剛堅固なる不壞の薄皮を得しめ。一切の衆生をして金色の皮を得て、阿耨多羅三藐三菩提の如くならしめ。一切の衆生をして無量色の皮を得、應に隨つて色を現じ悉く清淨ならしめ。一切の衆生をして明淨の皮を得て、塵垢を受けず、沙門如來に淨色を樂ぶが如くならしめ。一切の衆生をして第一色の皮を得て、自然に清淨ならしめ。一切の衆生をして如來の清淨色の皮を得得して、微妙の相好を自ら莊嚴せしめ。一切の衆生をして明淨の皮を得、大光明を放ちて普く一切を覆はしめ。一切の衆生をして明淨の皮を得て、無量の光明圓滿し、具足して普く世間を覆はしめ。一切の衆生をして潤澤の皮を得て衆色清淨ならしめん」と。是を菩薩摩訶薩、自身の厚薄の皮を存捨する時の善根廻向と爲す。一切の衆生をして無上最勝の菩提を逮得して、皆悉く如來の功徳を具足せしむるなり。」

# 大方廣佛華嚴經

## 卷第十八

東晉天竺三藏佛跋陀羅譯

### 金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一

「菩薩摩訶薩は、人來りて手足の指を乞ふもの有るを見れば、堅固精進菩薩、圓淨自在王金光菩薩等の無量の菩薩摩訶薩の如し。手足の指を屈す時、心大いに歡喜して、顔色異ること無く、大衆に乗じて施し、左欲に求めずして抱し、名聞を求めずして施し、檀波羅蜜を建立して施し、大施の心もて施し、淨垢を離れて施し、疑妬を離れて施し、佛に隨順して施す。是手足の指を施して攝むる所の善根を以て衆生に廻向すらく。一切の衆生をして佛の長指の相を得しめ。一切の衆生をして指の密相を得て圓融纖直ならしめ。一切の衆生をして赤銅甲の相を得て筒密清淨ならしめ。一切の衆生をして大人の指相を得て、悉く能く一切の諸法を攝持せしめ。一切の衆生をして隨好十力相を具足せる指を得しめ。一切の衆生をして大人の指相を得て、纖肺緊密ならしめ。一切の衆生をして手足の指端は輪相もて莊嚴し、指節平滿にして文相明顯ならしめ。一切の衆生をして蓮華色の指を得て、十力の業報、相好莊嚴ならしめ。一切の衆生をして光明の指を得、光明網を放ちて、普

【赤銅甲】佛の八十隨形好の第一にして、指爪狭長、赤銅色を帯び、鮮淨なること花の如く薄くして細澤あり

【大人の指相】佛の三十二相の第一、八十隨形好の第二

手指纖長相と言ふ  
手指纖細にして圓  
長、端直にして指  
節差し、光澤あり  
りて人天に勝ると  
言ふ。

く十方諸佛の世界を照さしめ。一切の衆生をして淨妙の指を得て、諸の相好を以て、具足莊嚴せしめん」と。是を菩薩摩訶薩指を爲す。衆生に向すと爲す。一切の衆生の心をして皆清淨ならしむるなり。

復次に菩薩摩訶薩は法を請ひ求むる時、若し人有りて言はん、「汝能く我に肉の瓜を施さば、當に汝に法を與ふべし」と。菩薩答へて言はく、「復我に法を與へば、汝が氣ある所に隨つて、意の念に取り用ひよ」と。求法王菩薩、無量菩薩、是の如く、無量の菩薩摩訶薩の如し。法を求めんが爲の故に、一切の衆生をして正法を具へしめんと欲するが故に、是善根を以て衆生に向すらく、「一切の衆生をして悉く赤銅伽藍の瓜を得しめ。一切の衆生をして濁濁の瓜を得しめ。一切の衆生をして佛の具足清淨光の瓜を得しめ。一切の衆生をして具足せる夫人の一切智の瓜を得しめ。一切の衆生をして無比の瓜を得しめ。一切の世間に於て染著する所無からしめ。一切の衆生をして莊嚴の瓜を得て、普く衆生を照さしめ。一切の衆生をして細妙の瓜を得て、微密清淨にして破壊すべからざらしめ。一切の衆生をして佛の具足せる方便相好を得て、大智清淨ならしめ。一切の衆生をして菩薩の瓜を得て、菩薩の清淨なる行業の果報ならしめ。一切の衆生をして菩薩若の善方便の瓜を得て、無量色の妙光明藏を放たしめん」と。是を菩薩摩訶薩の瓜肉を施す。衆生に向すと爲す。一切の衆生をして一切智の瓜を得て、如來の法身を具足し莊嚴し、皆悉く無障礙の力を満足せしむるなり。

【阿鼻地獄】(一)二、  
無間と云ふ。八熱  
地獄の最底にして  
此處に墮せば苦を  
受くること間なき  
を以て此名あり。  
五逆汚法の大罪人  
の墮すべき地獄なり。

【意趣】(一)三、  
上人、以上を善  
賢地、青地、修羅  
を以てと云ふ。

【三昧】(一)四、  
三昧の最も  
善なりなきも  
の、自他狂放す  
る、四諦の  
真諦を以て邪  
あり、是を三毒と  
言ふなり。

【諸佛】(一)五、  
諸佛は通力  
神通の精神なり

【諸佛】(一)六、  
諸佛は通力  
神通の精神なり

菩薩摩訶薩は法を求めんが爲の故に、得難きの法の爲の故に、能く法を施す者ありて、  
是の如きの言を作さく、「若し能く身を七女の火坑に投ぜば、當に汝に法を與ふべし」と。菩  
薩は其を聞きて歡喜すること量り無く、是思惟を作さく、「我法の爲の故に、阿鼻鼻地獄、  
阿鼻惡趣の中に於てすら無量の苦をも受けん。況んや人間の微小なる火坑に入りて而も  
法を聞くことを得んをや。奇なる最正法は甚だ得易しと爲すに、地獄の無量の苦をも免れ、  
小火坑に入りて正法を聞かんと云。汝但法を説け、我火坑に入らん」と。兼善法王菩薩、金

剛思惟菩薩の如し。法の爲に歡喜して火に入り、善根を衆生に傾向すらく、「一切の衆生を  
して佛の所住の一切智の法を得よ、無上道に於て堅固不退ならしめ、一切衆生をして皆悉  
く惡趣の火坑を除滅して、如來の樂を受けしめ。一切の衆生をして無畏の心を得て、諸の  
悲情を離れしめ。一切の衆生をして常に法を樂ひ求め、皆歡喜を得て佛法を莊嚴せしめ。  
一切の衆生をして、諸の惡道を離れ、悉く能く三毒の熾火を除滅せしめ。一切の衆生を  
して悉く快樂を得て、如來の量勝たる妙樂を成就せしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の心を  
得て、悉く能く貪患癡の火を除滅せしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の諸の三昧の  
樂を得て、悉く諸佛を見たてまつり、心大いに歡喜せしめ。一切の衆生をして常に正法を  
聞き、佛道を究竟して未だ會て未失せざらしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の自在なる  
諸通の快得を得、究竟じて薩婆若の智を具足せしめんと。是を菩薩摩訶薩、法を求めん  
が爲の故に火に赴き、善根を衆生に傾向して、一切の衆生をして智慧の火を具へ、一切諸

佛の悲情を離れしめ。一切の衆生をして常に法を樂ひ求め、皆歡喜を得て佛法を莊嚴せしめ。  
一切の衆生をして、諸の惡道を離れ、悉く能く三毒の熾火を除滅せしめ。一切の衆生を  
して悉く快樂を得て、如來の量勝たる妙樂を成就せしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の心を  
得て、悉く能く貪患癡の火を除滅せしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の諸の三昧の  
樂を得て、悉く諸佛を見たてまつり、心大いに歡喜せしめ。一切の衆生をして常に正法を  
聞き、佛道を究竟して未だ會て未失せざらしめ。一切の衆生をして悉く菩薩の自在なる  
諸通の快得を得、究竟じて薩婆若の智を具足せしめんと。是を菩薩摩訶薩、法を求めん  
が爲の故に火に赴き、善根を衆生に傾向して、一切の衆生をして智慧の火を具へ、一切諸

の不善の業を遠離せしむと爲す。

菩薩摩訶薩は、法を求めんが爲の故に、身を擧げて、具に無量の諸苦を受く。正法の爲の故に、廣く正法を説かんが爲の故に、菩薩の道を建立せんが故に、無上菩提を聞かんが故に、無上智を具足せんが故に、十力を修習せんが故に、一切智の心を増廣せんが故に、無礙智を得んが故に、一切の衆生をして清淨ならしめんが故に、一切の菩薩の境界に入らんが故に、大乘の佛菩提を守護せんが故に、求正法菩薩、勇健王菩薩の如し。是の如き等の無量の菩薩摩訶薩は法を求めんが爲の故に、無量の苦を受け、乃至正法を謗る人、極大の惡人、惡業障の人、服業を持する人、正法の爲の故に、彼惡人に代りて具に諸苦を受く。菩薩摩訶薩は法を求めんが爲の故に、諸の衆生に代りて苦を受け、善根を衆生に廻向すらく、一切衆生をして一切の苦を離れ、安樂利道を得しめ、一切の衆生をして一切の苦受を離れ、妙樂を成就せしめ、一切の衆生をして永く苦陰を滅して、電光の如き樂を得しめ、一切の衆生をして苦惱を超出して、智慧の行を具足し究竟せしめ、一切の衆生をして、安隱の道を見て苦惱の趣を離れしめ、一切の衆生をして法愛の樂を得て、充満し具足し、究竟じて一切の衆苦を寂滅ならしめ、一切の衆生をして大悲心を生じて、悉く一切の苦海を濟度せんと欲せしめ、一切の諸佛をして諸佛の樂を得て、生死の苦を斷せしめ、一切の衆生をして無比の淨樂を得て、其身は永く一切の苦受を離れしめ、一切の衆生をして一切の勝樂を得、究竟じて佛の無礙の樂を具足せしめん」と。是を菩薩摩訶薩、法を求

【苦陰】陰は善法を陰蓋する意にして、亦蘊の舊譯即ち積聚の義あり。識の五陰は我人間の肉的存在にして、常に煩惱の根源となり、苦惱絶ゆることなきを以て、此肉的存在を苦陰と言ふ。【苦海】三界なり。【苦色】三色の二界は一として眞實の樂なきを言ふなり。

めんが爲の故に、悉く哀苦を受け、善根を廻向して衆生を救護し、一切の衆生をして薩婆の無礙の解脱に安住せしむと爲す

菩薩摩訶薩は法を求めんが爲の故に、法得難きが爲の故に、能く大地、四海、國土を捨て、大小の諸城、林邑丘壑、園上の豐業なる、人民の熾盛なる、園林、浴地、樹叢の華茂せる、是の如きの種種無量の莊嚴、天下にして無敬有ること無き、金銀の寶藏、妻子眷屬を、皆悉く捨く捨てて、不堅固の中に居て衆生の法を求め、一切の衆生を利益せんが故に、一切の衆生をして佛の無量清淨の寶藏、善法の道を得しむること、大勢

持徳菩薩、勝越王菩薩の如し。其の如き等の無量の菩薩摩訶薩は正法を求め、其の法に乃至一句一味をも、五體を地に投じて、敬禮し頂禮して、其の諸佛を正念し、重法を勤

求して、正法の中に於て心常に欣樂して諸願を修習し、難念の事を求めて世尊の命の自在の法を捨離し、無上なる法王の自在の勝法を求め、其の世間を念せず、前世、

以て世法を離れて自ら心を長養し、一切世間の惡業を遠離し、寂靜にして諸佛の所住に安立す。菩薩摩訶薩は正法を求めんが爲に、再た下の天國國土を施し、懸むる所の根を

以て衆生に廻向すらく、一切の衆生をして悉く能く内心の所有を離れしめ、一切の衆生をして能く一切を捨てて、心に中悔無からしめ、一切の衆生をして身命資生の具を惜ま

ず、常に正法を求めしめ、一切の衆生をして悉く法利を得て、無量の衆生の疑惑を解除せしめ、一切の衆生をして常に正法を樂び、諸佛の法に於て深き法華を得しめ、一切の衆

四天下、東方、提  
頭毗陀天王(持國)  
南方、毘留勒又天  
王(增長)、西方、  
毘留博又天王(廣  
目、北方、毘沙門  
天王(多聞)の四王  
の國にして、帝釋  
天王の外臣たり。

【二是四足】二足は人類、四足は獸類なり。總じて動物全般を稱するなり。  
 【三種の戒法】大乘の菩薩戒なり。攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒にして、一切の大乗戒を攝聚する清淨戒なり。  
 【五戒】在家の持する制戒にして、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒を言ふ。

生をして能く身命と世間の自在とを捨て、佛法の苦心を樂ひ求めて、無上菩提を修得せしめ、一切の衆生をして諸佛の正法を恭敬し、尊重して、能く身命を捨てて正法を究竟せしめ、一切の衆生をして佛法を護持して、如来の闕くことを得難きの法を修習せしめ、一切の衆生をして能く諸佛の菩提の明照を得て、諸菩薩の行を學び、他に由りて修得せしめ、一切衆生をして諸佛の法に於て自在を得、疑刺を拔出して心常に清淨ならしめん」と。  
 是を菩薩摩訶薩、得難きの法を求めんが爲の故に、國土を布施して善根を廻向し、一切の衆生の知見を満足せしむと爲す。

復次に菩薩摩訶薩は行法自在の時、悉く閻浮提の内の城邑聚落をして、一切の屠殺を斷除せしめ、二足四足に普く無畏を施し、怨敵の心を離れ、菩薩の行を修し、政を以て國を治め、衆生は一切の苦毒を滅除し、一切の衆生の安穩なる心寶を發起し、正命妙法の心寶を具足して、能く自ら三種の戒法を具足し、亦衆生をして三種の戒法を具へしむ。菩薩摩訶薩は、不殺等の五戒の善根を以て、衆生に廻向すらく、一切の衆生をして、長壽の慧を得て、菩提の心を具へ、命根量無からしめ、一切の衆生をして、無量壽を得て、一切の諸佛を恭敬し供養せしめ、一切の衆生をして、老死を離れたる法を具足し、修習して、一切の衆生をして能く命を害すること能はざらしめ、一切の衆生をして無量の痛苦を離れたる身を逮得して、命根自在にして能く意に隨ひて住せしめ、一切の衆生をして無盡の命を得て、未來劫を盡して、悉く具に菩薩の所行を修習し、一切の衆生を調伏し、化度せしめ、一切の

【命愚】 生を言ふは、佛教中、法に由りて其父を就にすれど、伊舎宗は壽命の根源に命根と實を在を言ひ、唯識宗は第八識の名言種子を命根として現在に在らしむる作用の上に此名を假説すと説く。

【命愚】 三十二相の第一、八十種好の第十五にして、馬齒相と言ひ、馬齒と見えて見ず、好妙なること馬王の如しと言ふ。

衆生をして、淨命門を得て、十方の善根皆悉く求り入らしめ、一切の衆生をして善根具足し、壽命無量にして、出頭を成滿せしめ、一切の衆生をして悉く心解脱を見在たまはしめ、無盡長壽の善根を修得せしめ、一切の衆生をして如来の家に於て、法の所學を學び、無盡の善根を具足し、成就して、聖法の中に於て解脫の心を得しめ、一切の衆生をして老病無き不死の善根を得て、無盡の菩提まで佛智に安住せしめん」と。是を菩薩摩訶薩、善哉等の五戒の善根を以て、衆生に廻向し、一切の衆生をして如来の三種の淨戒に安住し具足して、十方の智慧を究竟せしむと爲す。

菩薩摩訶薩、若し衆生を憐愍不忍にして、若し人、若し法、其男形を奪り、女を強固して、出頭を善根を受けしむるを以て、此善を見りて、七難を起して之を救護し、悉く貴樂珍重を具足せしむる菩薩摩訶薩は、衆人に對ひて言はく、「汝何の利の爲に其善根を造るや、汝が能なる所に聽ひて、悉く相資助せん。汝が能なる善根を捨つべし、正念すること能はずして其善根を燒にし、彼を害して自ら利し、以て己が樂を求めんは、畢竟有ること無し。此の如きの惡行と諸の不善の法とは、一切の如来の讚歎したきはざる所なり」と。菩薩摩訶薩は、悉く能く一切の所有を捨離して、彼衆生をして惡法を行さざらしむ。又彼人の爲に微妙の法を説く菩薩摩訶薩の法は、淨土を長養し、不善を離滅す、慈心を修得して、衆生を憐愍せしむ」と。時に彼惡人、此法言を聞き、即ち惡行を捨てて清淨の業を修す。菩薩摩訶薩は、慈救の善根を以て衆生に廻向すらく、「一切の衆生をして佛の女人除滅

【丈夫】正道を勇進して退くことなき修行者なり。丈夫たるには一心自ら正しく、二に他を正しく、三に問に應じて能く答へ、四に著く因縁を解すと、門義具するを條件とす。

【五欲】色、聲、香、味、觸の五境を言ふ。境は欲の對境にして欲を惹起せしむるが故なり。

【七丈夫の趣】小乗は七賢聖と言ひ大乘は十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の七位なりと言ふ。此丈夫の修行する所なるを以て趣と言ふ。

の相を得しめ。一切の衆生をして男根を具足して丈夫の意を得、梵行を清淨ならしめ。一切の衆生をして丈夫無欲の身を成就して無礙の智に乘じ、不羂を究竟せしめ。一切の衆生をして大人の身を得、永く欲心を離れて、樂著する所無からしめ。一切の衆生をして皆悉く善男子の法を成就して、諸佛讚歎し智慧具足せしめ。一切の衆生をして大人の力を得て、十力の善根を具足し成就せしめ。一切の衆生をして常に男子の形を成就することを得て、堅固にして未曾有の法に安住せしめ。一切の衆生をして五欲の中に於て無著無縛にして、心に解脫を得、三界を遠離して菩薩の行を修せしめ。一切の衆生をして皆第一智人を成就することを得て、一切信伏し、皆道化を受けしめ。一切衆生をして菩薩の丈夫なる深智を成就して、一切の大乘の佛趣を究竟せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の毀形の者を救ひて、善根を廻向すと爲す。一切の衆生をして皆悉く諸の善男子を救護し、賢聖の家に生れ、智慧具足して、男子の勝智を修習し、履行して、善能く七丈夫の趣を示現し、無上の丈夫の正法を具足し、常に能く一切の衆生を化度して善根を廻向し、一切の衆生をして、佛の清淨の丈夫の勝法を得しむるなり。

復次に菩薩摩訶薩、若し如來世に興したまふ有れば、大音聲を以て普く一切に告ぐらく、如來出世したまふ、如來出世したまふ」と。一切の衆生をして佛音を聞くことを得しめ、佛音を聞き已りて、自の大憍慢と放逸とを捨離し、諸佛を見たてまつることを得て、堅固に念佛三昧に安住し、佛の境界を修して未だ曾て廢忘せず。一切の諸佛を恭敬し供養

して、常に佛と見たりてまづらんことを欲し、百千劫にも信受することなきを以ての故に、  
 多く衆生の爲に佛の徳は難くすることを説く。衆生を教化して、常に一切の諸佛を常見せんと  
 欲し、心正しく歡喜して、佛事して其し、佛道に成就し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。衆  
 生は佛の徳に於て、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 く佛の徳となり、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。衆生は佛の徳に於て佛徳の多きを説く。  
 衆生は佛の徳に於て、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 衆生は佛の徳に於て、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 つり、初めより時を止すして、衆生を教化す。佛を信受して、衆生をして、佛の徳を  
 常に佛を樂見して、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 一切諸佛の法藏を轉せしめ、一切の衆生をして佛道を修習せしめ、無量劫に於て佛の徳を信  
 常に正法を聞かしめ、一切衆生をして不忘念を得て、悉く一切諸の如來智を得せしめ、  
 一切の衆生をして、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 に隨ひて佛を信受して、佛の善徳を信受し、佛道に增長し、衆生の爲に於て佛徳の多きを説く。  
 の衆生をして佛の善徳を得て、一切の世界に於て佛道を現成せしめ、一切の衆生をして  
 佛の徳に於て佛の正法を聞き、佛の如來に於て不壞の信を得しめ、一切の衆生をし  
 て佛の出世は皆悉く虚しからざることを證せしめ、衆生を教化して皆く清淨ならしめ

【四衆】佛弟子を  
分して、比丘、  
比丘尼、優婆塞、信  
士、優婆夷、信女  
の四衆となす

【無畏】四無所畏  
の略。菩薩、如來  
の二種あり。衆生  
に法するに畏怖  
の用なきことなり  
佛の四無畏とは、  
正等覺無畏、一切  
智無所畏、漏盡永  
無畏、煩惱無所畏  
說障法無畏、說苦  
道無所畏、說出苦  
道無畏、說盡苦道  
無所畏、說盡苦道  
菩薩の無畏法は今  
は略す。

んとして、量を菩薩摩訶薩佛の出世を敬する菩提の趣向と爲す。一切の衆生をして、悉く諸  
佛を見たてまつり、佛の如く化を受け、無上の道、一切の佛法に於て究竟清淨ならしむ  
るなり

復次に、菩薩摩訶薩は大地を布施す。或は佛に布施して殿堂を起立し、或は菩薩、及び  
善知識に施し意に隨ひて用ひられ、或は聖僧に施して坊舎を造立し、或は父母に奉じて屋  
宅を興建し、或は餘人、聲聞緣覺、一切の福田、諸の乞ひ求むる者に施し、或は四衆に  
施し隨意に受用して乏くる所無からしめ、或は如來に奉じて塔廟を造立す。是の如き等の  
施は彼受用に隨ひて、悉く怨敵一切の恐怖を離る。菩薩摩訶薩、大地を施す善根を以て  
趣向して、一切の衆生をして、諸婆若の清淨の佛地を得、究竟して普賢菩薩の所行の彼  
岸に對ることを得しめ、一切の衆生をして大地陀羅尼を得て、癡を離れ正念し、悉く能  
く諸佛の妙法を受持せしめ、一切の衆生をして一切の法を持して佛法を守護せしめ、一切  
の衆生をして大地に等しき心を得て、衆生の所に於て清淨正直にして、想念を生ぜざら  
しめ、一切の衆生をして佛の族姓を尊して佛種を斷せず、次第に一切の菩薩の諸地の善根  
を成立せしめ、一切の衆生をして普く一切の爲に安隱の依と作りて、悉く調伏せしめ、  
清淨なることを成就せしめ、一切の衆生をして如來と等しく衆生を隨益し、佛力に安立  
せしめ、一切の衆生をして悉く一切の愛樂する所と爲りて、諸佛の所愛樂の處に安住せ  
しめ、一切の衆生をして堅固に如來の諸力、無畏法の中に安住せしめ、一切の衆生をして

【父母尊重の福田】  
難奉行、祖先尊崇  
の者を指す。

諸善業の地を得て、諸佛の法に於て自在施能ならしむ。是を菩薩摩訶薩の大地を前攝する菩薩摩訶薩と爲す。一切の衆生界をして如来の清淨道の地を充實せしむるなり。

復次に、菩薩摩訶薩は僮僕を布施す。友は菩薩、菩薩、知識に奉ず、如来の法を、增長せんと欲するが爲め施たり。或は信實に施し、或は父母尊重の福田に奉給し、或は復た諸善業に給施して其命を全濟し、一切の貧窮にして一切の乞ひ求むる者に、皆悉く施

し、諸塔廟に施して靈祐を供給す。若し人行りて能く善業を書寫せば、法を説く人が自ら施し、無量佛の如來淨人を以て其使令に施し、此諸の給使は皆悉く隨喜明了にして歡喜あり、柔軟調伏にして常に勤めて行はせしむ。若し行りて能く善業を以て彼に奉給す。慈心、無怒を離れたる心を成す。此諸の給使は是の如きの心を以て彼に奉給す。

菩薩摩訶薩は其父母の如き所の宜しき所のを能く技術に施して、諸佛を以て之に施與す。是は菩薩の淨業の根本にして、能く僮僕をして彼を管可せしむ。菩薩摩訶薩は僮僕を施す善根を以て細向すべく一切の諸佛をして其使の心を得、諸佛に奉給して、善業を修習せしめ、一切の衆生をして一切の諸佛に隨順し奉給して、悉く諸佛の如きたる

ふ所を聞持せしめ。一切の衆生をして常に隨ひて自在に進んで如来を觀つてまじり、常に正念を修して餘の惡心無からしむ。一切の衆生をして二種種を隨順して、如来の如きたる善業の隨喜に隨順せしめ。一切の衆生をして如来に奉給して、常に隨喜奉給す、見たるまつる所の諸佛は皆悉く盡しからざらしめ。一切の衆生をして悉く一切の諸佛の妙法を推し

【世間の吉祥】吉  
 祥は瑞事にして日  
 出度事なれども、  
 世間の吉事は佛道  
 修行に障礙となる  
 を以て、遠離せし  
 むるなり。

て、音辭清淨に、遊行無畏ならしめ。一切の衆生をして、悉く諸佛を觀たてまつり、樂  
 觀して厭くこと無く、諸の如來に於て身命を惜まざらしめ。一切の衆生をして諸佛を見  
 たてまつることを得て、心に染著無く、世の所依を離れしめ。一切の衆生をして諸佛に依  
 止して、一切世間の吉祥を遠離せしめ。一切の衆生をして佛道に隨順して、一向に無上菩  
 提を業ひ求めしめん」と。是を菩薩摩訶薩の隨使を布施する善根勸向と爲す。一切の衆生  
 をして永く垢染を離れて佛の淨地、如來の法身の自在無礙を得しむるなり。

菩薩摩訶薩は身を以て布施して給使を爲す時、憍慢を捨離し、謙下の心、給使の心、大  
 地の知き心、一切の苦を忍ぶ心、一切の供給して厭足無き心、懈怠無き心、一切の貧賤なる  
 衆生に諸の善根を興ふる心、一切の尊貴、富樂、乃至童蒙、愚小をも皆悉く恭敬し供  
 養する心、堅固に最勝の法門に安住して、一切の善根を正念し修習する心もせず。菩薩摩  
 訶薩は身を以て布施し、善根を勸向するく、一切衆生をして隨使を爲くること無く、菩薩の  
 行を修して心退轉せず、未だ曾て菩薩の正義に違失せず、一心に専ら菩薩の道を求めて、  
 菩薩の平等の正法に了達し、如來隨從の數に在ることを得て、眞實の法を修し、菩薩の行  
 を増さしめ。諸の世間をして淨き佛法を得、深心に解脫して菩提を究竟せしめ。一切の  
 衆生をして清淨なる勝大の善根を増長せしめ。一切の衆生をして大功德に向ひ、一切智  
 を究竟せしめん」と。菩薩摩訶薩は復是念を作さく、身をもて供給し、擲むる所の善根を  
 以て、一切の衆生をして善能く一切の諸佛に給侍し、其心柔軟にして常に正法を聞き、法



【雜有】有は三界の意なり。離ち欲、色、無色の三界業海を解脫せしむる意なり。

【法力】佛法の功德力の意。

智人の地を説き、究竟の華嚴若の業を具足し、無量無邊の大法を以て諸根を成滿す。菩薩摩訶薩は諸佛の所に於て甚深の法を聞き、歡喜すること無量にして、正道を修習して自ら能く一切の疑惑を除滅し、又衆生をして歡喜すること無量にして疑網悉く除かしめ、功德充滿して善具足し、無量の法門を修習して、普く大智を行じ、衆生を隨行して不動なる金剛藏の習に安住せしめ、正心に専ら無上菩提を求む、悉く能く一切の佛刹を嚴淨し、無量の如來を恭敬し親近したてまつる。菩薩摩訶薩は此法に安住して、自身普く一切の諸佛を覆ひ、此善根を以て衆生に死向すらく、一切の衆生をして妙身具足して、悉く能く普く一切の諸佛を覆はしめ、一切の衆生をして如來の住に依りて、常に諸佛を見たてまつり、未だ嘗て遠離せざらしめ、一切の衆生をして最勝の身を得て、一切の功德智業を具足せしめ、一切の衆生をして難行の梵行を行せしめ、能く一切の諸佛を歡喜せしめ、一切の衆生をして無我所の身を得て、我我所に於て心に所著無からしめ、一切の衆生をして悉く能く分身して一切の刹に遍く、諸の世界に於て前も來去無からしめ、一切の衆生をして自在の身を得、我我所を離れて自在に遊方せしめ、一切の衆生をして佛身出生して、如來の無上身の家に處在せしめ、一切の衆生をして法力身を得て、法座に安住し、忍力成就して心壞すべからざらしめ、一切の衆生をして無比の身を得て、如來の清淨法身を具足せしめ、一切の衆生をして出世間功德の身を得て、空法界に於て出生することを得しめんこと、是を菩薩摩訶薩、自身佛を覆ひ、攝むる所の善根を衆生に死向すと爲す。一切の

衆生をして、世間の勝妙の功徳を成就せしむるなり。

菩薩摩訶薩は身を以て、一切の衆生に布施する時、是の如きの念を作さく、「一切の衆生をして善根を成就せしめ、一切の衆生をして常に善根を念せしめ、一切の衆生をして能く明瞭と爲らしめ、一切の衆生をして安隱に樂住せしめ、一切の衆生をして法義の眞を得て悉く能く一切の衆生を念せしめ、一切の衆生をして世間の明と作りて、業障を滅除せしめ、一切の衆生をして悉く一切の善根の因縁と作りて、善知識の爲に展轉相成して、正道を開示し、無上の樂を得しめ、一切の衆生をして明淨の目と作らしめん」と、菩薩摩訶薩は身を以て一切の衆生に布施し、修むる所の善根を衆生に廻向すらく、「一切の衆生をして諸佛の智慧道の地を究竟せしめ、一切の衆生をして正道に頓して、悉く無上の菩提を究竟せしめ、一切の衆生をして常に佛會に處して、悉く教化を受けしめ、一切の衆生をして威徳具足して、諸佛の清淨なる威徳を成就せしめ、一切の衆生をして悉く涅槃を得て、深く法義を悟らしめ、一切の衆生をして悉く正法を得て疑き足ること無く常に勝法に遇ひ、如来の家に生れしめ、一切の衆生をして世の希冀を捨てて、如来の寶藏の希冀を達得せしめ、一切の衆生をして菩提樹に坐して、無量の時清淨なる善根を出生せしめ、一切の衆生をして一切の煩惱怨敵を摧滅して、無害の心を發せしめ、一切の衆生をして無畏法を得て、悉く能く一切の佛法を講持せしめん」と、是を菩薩摩訶薩自身を布施する善根廻向と爲す。一切の衆生をして能く一切の衆生をして、無上の法を得しむるなり。

【自法】明註に曰はく「自法は疑ふらくは正法か」と。

【灌頂の菩薩】灌頂とは佛が大悲の甘露水を以て菩薩の頂に灌ぐ意にして、等覺の菩薩が妙覺位に登らんとする時、佛彼に灌頂して佛果を證得せしむるなり。故に今は等覺の菩薩を指す。

菩薩摩訶薩は自ら己身を以て諸佛に奉給し、一切の無業に於て報恩の心を生じ、父母の心を生じ、諸佛の所に於て清淨の深心を生じ、明淨の心を以て菩提を愛持し、諸佛の法を得て、世間の法を捨て、如來の家に生れ、諸佛に隨順して、自法を守護し、一切衆生の境界を遠離して佛の境界を修し、自ら己身を以て一切諸佛の法器を成就す。菩薩摩訶薩は是の如きの法を修して、自身に一切の諸佛に奉給し、擧むる所の善想を衆生に廻向すらく、一切の衆生をして淨心に安住し、一切智の寶もて自ら莊嚴せしめ、一切の衆生をして衆生を調伏することを得、其と共に事を同じくして、一切の不善の業を遠離せしめ、一切の衆生をして不壞の眷屬を得て、悉く能く諸佛の正法を攝持せしめ、一切の衆生をして悉く如來の清淨の弟子と爲り、灌頂の菩薩の地を成就せしめ、一切の衆生をして悉く諸佛の攝護したまふ所と爲りて、一切の諸佛の惡知識を遠離せしめ、一切の衆生をして諸佛に隨順して、最勝の生地菩薩の法行を修習せしめ、一切の衆生をして佛の境界に入りて、悉く皆一切智の記を受くることを得しめ、一切の衆生をして如來と等しく、諸佛の法に於て自在を得しめ、一切の衆生をして悉く諸佛の攝取する所と爲りて、無量の業を行せしめ、一切の衆生をして悉く諸佛の第一の侍者と爲り智慧具足して、諸佛を悅可せしめん」と。是を菩薩摩訶薩身をもて佛に奉事すと爲す。善根を無上菩提に廻向するなり。一切の衆生を救護せんと廻向し、衆生をして三界を超出せしめんと廻向し、自心悉く清淨ならしめんと廻向し、無量廣大の菩提に廻向し、諸佛の照明の智慧に廻向し、己身佛



諸國を離して、世間の  
 俗事を離して、佛道修行  
 清閑なる地を遷  
 居する處となせる  
 處を言ふ、

く勝大の菩薩を成就せしめ。一切の衆生をして淨法界に於て法王と爲ることを得て、世に  
 出興し、相續ぎて絶えざらしめ。一切の衆生をして、この世界に於て智慧王と作りて一切  
 の衆生を調伏し成就せしめ。一切の衆生をして普く法界虚空界に等しき世界の衆生の爲に  
 法施の主と作りて、一切の衆生界を摩訶衍に建立せしめ。一切の衆生をして法王の法  
 を得て、三世の佛の善根と齊等からしめん」と是を菩薩摩訶薩の王位を布施する善根廻  
 向と爲す。一切の衆生をして、皆悉く安隱の處を究竟せしむるなり。

菩薩摩訶薩は、入有り來りて王の京都嚴飾せる大城を乞ふものを見れば、歡喜の心を以  
 て施し、不亂の心を以て施し、一向に正しく菩提を求むるの心もて施し、無量の願心もて  
 施し、大慈心もて施し、大悲心もて施し、清淨心もて施し、一切の衆生を利せんが爲の  
 故に施し、自ら摩訶衍に安立せんが故に施し、諸佛の法平等の心を以て施し、善法を行す  
 る心もて施し、一切智王を欲する心もて施し、法王の自在の意を求めんが故に施し、智慧  
 を増上せんと欲する心の故に施し、一切の清淨の功德を欲する心もて施し、堅固にして  
 廣大なる心もて施し、一切の善根を長養せんが故に施し、衆魔の恐怖を遠離して佛智を具  
 足せんが故に施し、菩薩の心力に安住せんが故に施し、一切の境界、一切の智、菩薩の所  
 行、及び一切の大願を究竟せんが故に施す。菩薩摩訶薩は京都嚴飾せる大城を布施し、攝  
 むる所の善根を衆生に廻向すらく、一切の衆生をして一切の利を淨めしめ、佛に施して住  
 せしめ。一切の衆生をして常は阿蘭若の處を樂ひて、寂靜に安住せしめ。一切の衆生を

して一切の國土、諸邑、聚落、大小の諸城に著せしめ、究竟して欲を離れて土寂靜を得しめ、一切の衆生をして心一切の罪惡に親近せず、悉く持永く世間の諸苦を離れしめ、一切の衆生をして離欲の心を得て、所有を布施し心に申悔無からしめ、一切の衆生をして家室に著せず、淨直の心を得しめ、一切の衆生をして、悉く一切を捨てて轉ずる所無く、善施を成就せしめ、一切の衆生をして住處に著せず、一切の居家の貪著を捨置せしめ、一切の衆生をして、諸の苦惱を捨て、一切の恐怖憂感を除滅せしめ、一切の衆生をして一切の衆生をして、諸の苦惱を捨て、一切の恐怖憂感を除滅せしめ、一切の衆生をして一切の世界を以て淨淨の刹と爲し、諸佛に奉養せしめんと、諸を具足す河京都羅衛の大城を布施する善根廻向と爲す、一切の衆生をして佛住を敬淨せしむるなり。

菩薩摩訶薩は寶女、侍人、眷屬を有する技術、悉く備り、才力巧妙にして、音戲を善くし、威儀具足し、奉給すること恭敬に、能く人心を感ぜしめ、世間の功德は備り盡さざる無く、菩薩轉輪にして天人を廻轉し、音音和雅にして離離々々、正に侍して禮を盡し其意を失はず、姿容殊妙にして見るもの無くこと無き、千億の伎直侍の寶女は、皆是れ菩薩の淨業の果報なり、而も用ひて布施す、無著の心を以て施し、虚妄を離れたる心をして施し、一切の欲に轉せられずして覺し、一切の色に於て所著無くして施し、欲樂を留らずして施し、欲の覺觀を離れて施し、寶女の形色に於て想を生ぜずして施す、菩薩摩訶薩は寶女眷屬を布施して善根を廻向す、一切衆生生死を出離せんと廻向し、悉く諸佛の喜樂を得んと廻向し、不堅固の中に堅固を得んと廻向し、金剛界の智、不可壞の心に廻向し、

如來の圓滿なる大業に廻向し、堅固なる眞實を攝取せんと廻向し、無上菩提の心に廻向し、智法もて諸法を分別せんと廻向し、一切の善根を出生せんと廻向し、三世の傳教に或はざらんと廻向す。菩薩摩訶薩は是の如きの法に任じ、如來の家に生れ、一切智を出し、深く一切の菩薩の智業に入り、一切世間の運垢を捨離し、賣心を調伏し、功德則滿にして、無上の福田となり、廣く妙法を説きて衆生を安立し、一切の衆生をして皆悉く清淨にして一切の善根を修習し攝取せしむるなり。菩薩摩訶薩は寶女眷屬を布施し、攝むる所の善根を衆生に廻向すらく、一切の衆生をして無量の三昧の眷屬を得得し、又菩薩の不壞の三昧を得しめ、一切の衆生をして悉く諸佛の莊嚴三昧に入り、常に佛を樂観せしめ、一切の衆生をして悉く菩薩の不可思議なる自在遊戯の三昧を行じて、無量の自在三昧に安住せしめ、一切の衆生をして如實の三昧に入りて、其心を壞らざらしめ、一切の衆生をして悉く菩薩の甚深三昧を得て、一切の三昧に於て皆自在を得しめ、一切の衆生をして皆悉く三昧の眷屬を成就して、心に解脫を得しめ、一切の衆生をして善能く種種の三昧を分別して、悉く善能く諸の三昧の相を取らしめ、一切の衆生をして勝智三昧を得て一切諸の三昧門を修習せしめ、一切の衆生をして無礙の三昧を得て、能く決定して不壞の正受に入らしめ、一切の衆生をして無著の三昧を得て、心常に念じて不二の三昧を行せしめ、一切の衆生をして不可壞の清淨の眷屬、菩薩の眷屬を得しめ、一切の衆生をして普く清淨なる菩提の心を發して、佛法を満足せしめ、一切の衆生をして薩婆若の力清

淨に満足して、無上智を得しめ。一切の衆生をして隨順の眷屬を得て、悉く衆生と意を同じくして安住せしめ。一切智の功徳を満足することを得て、一切の勝妙の善根を成就せしめ。一切の衆生をして眞實の眷屬を得て、往來の清淨なる法身を成就せしめ。一切の衆生をして諸器を成就して、無縛無著にして廣く普佛の法眼を識かしめ。一切の衆生をして各一切の爲に善知識と作りて、一切の勝妙なる善根を成就せしめ。一切の衆生をして淨滿足して、一切諸の清淨法を成就せしめ。一切の衆生をして諸佛の淨妙の法門を満足して、一切の淨法を以て世間を普離せしめん」と。是を菩薩摩訶薩、寶女眷屬を布施する善根の微尚と爲す。

【須達拏太子】(Sudhātala) 釋迦佛の因位に於ける太子たりし時の名なり。

復次に、菩薩摩訶薩は妻妾男女を布施すること、須達拏太子、現世國王善信の如し。是の如き等の無量の菩薩摩訶薩は、薩婆若の乘に乗じて一切の善を行じ、積聚善業を具足し成滿して、菩薩の布膚の道を眞淨し、清淨なる不怖畏の心を長養し、一切の施寶善業の心に入り、一切の衆生をして皆悉く清淨にして正直の心を具へしむ。清淨の正直心を具足しじりて、一切の善根は皆悉く満足し、悉常に菩薩の淨道を勤め求め、調佛の菩提門願を受持し、一切の如來家の心を修習す。是の如く菩薩摩訶薩の意力成就して、往來の地を歩かば、自ら其身は一切に繫屬して自在を得ず、彼に隨ひて走使することを知り、普く衆生に於て一切の施を行じ、未だ満足せざるものに於て悉く満足せしめ、一切の衆生を護持し安慰して、自身をして普く世間の爲に第一の塔と作らしめ、一切の衆生を

して皆悉く歡喜せしめんと欲し、一切に於て平等の心を具へんと欲し、世間の爲に清涼池と作らんと欲し、世間の爲に地樂の主と作らんと欲し、一切の爲に大地主と作らんと欲し、智慧を育と爲して、菩薩の行を習し、誰の如く修行し、一切の種智もて大菩提心を成ぜんと欲し、常に専ら智慧の福田を求めんと欲し、悉く衆生に請うて善根を長養し、己身を建立し、正教を崇順して普く一切の爲に智慧の因と作り、菩薩の一切の地心を正念し一切の諸佛常に現じて前に在り。菩薩摩訶薩は善哉男女を布施し、撰むる所の善根を以て無著無縛の解脫の心もて衆生に廻向すらく、一切の衆生をして普く無量なる變化の身を出し、十方一切の世界に充滿して、不退の法輪を轉じ、一切の衆生を無上道に安立せしめ、一切の衆生をして身に貪著せず、謙願具足して、悉く十方諸佛の世界に請らしめ、一切の衆生をして僧愛の心を離れて、愛患の結を斷ずることを得しめ、一切の衆生をして佛の眞子と爲りて、如來の家に往かしめ、一切の衆生をして諸佛の所に於て、自己の心を生じて、沮壞すべからざらしめ、一切の衆生をして常に佛子と爲りて法化より生ぜしめ、一切の衆生をして正希望を得て薩婆若を成ぜしめ、一切の衆生をして善根を成ぜしめ、究竟して無上菩提を具足せしめ、一切の衆生をして諸佛の菩提と解脫とを成就して無上の法を施さしめ、一切の衆生をして無生の心を得て、因縁を壞らざらしめ、一切の衆生をして、菩提樹に坐して最正覺を得、無上の道を成じて、無量の眞法より男女を化生せしめん」と。是を菩薩摩訶薩法婆娑男女を布施する善根廻向と爲す。一切の衆生をして無著の解脫、無礙の

【中解】途中に於て修持すること。

【少欲知足】佛道教綱に於て、少欲にして、得た少を以て悔恨せざること。

智慧を得しむるなり。

菩薩摩訶薩は、人有り來り從ひて家を乞ふ者を見れば、家の莊嚴具を以て具足し、莊嚴して之を布施し、威徳を修習して家に於て著すること無く、居家の一切の莊嚴具を離れ、居家の平、養生の具を離れ、家の珍妙玩好の物に於て貪心を生ぜず、味著する所無く、家の樂具に於て染著の心無く、家の噴灑して須臾に變易することを解り、出家して道を求め、佛法を宣立し、菩薩の任に安住して、佛法もて莊嚴し、心能く一切を捨てて申修せず、常に菩提の道に精進せられ、養生の物と、一切の佳處とに於て、心に染著無し。來り來なる者を見れば歡喜すること無量にして、能く決定して修す。菩薩摩訶薩は家を有地し、樂むる所の善根を以て是の如く衆生に向向すらく、一切の衆生をして妻子を捨離して、常に出家を樂ましめ、一切の衆生をして家も家に居すと信じて、家を捨てて道を求め、佛法の中に於て修行を淨修せしめ、一切の衆生をして一切の善を樂み、心に申修せずして、憍慢正安住せしめ、一切の衆生をして永く佛法を離れて、少欲知足にして修積する所無からしめ、一切の衆生をして俗家を離はずして常に佛法を樂ましめ、一切の衆生をして悉く離れ、一切の衆生をして俗家の道を滅除せしめ、一切の衆生をして家に於て離れ、一切の衆生をして一切の善の道を滅除せしめ、一切の衆生をして家に於て離れ、一切の衆生をして能く一切を化して、現じて家に在りし衆生の正覺の智を益かしめ、一切の衆生をして在家を棄現して佛の所に住し、心常に如來の智慧に隨順せしめ、一切の衆生をして家に在りて悉く能

く衆生を悦喜せしめ、佛の所住に住せしめん」と。是を菩薩摩訶薩、家を施す善根廻向と爲す。一切の衆生をして悉く菩薩の種種の諸行を行じ、諸願を満足し、智慧自在なりしむるなり。

菩薩摩訶薩は莊嚴せる遊戯の園林を布施する時、是の如きの念を作さく、我當に一切の衆生の爲に愛樂の法林と作るべし。我當に一切の衆生の爲に、悦樂の處を示現すべし。我當に一切の衆生に無量の歡喜を與ふべし。我當に一切の衆生の爲に、淨き法門を開きて三界を超出せしむべし。我當に一切の衆生に無上の菩提を與へて、諸願を満足せしむべし。我當に一切の衆生の爲に慈父と作り、智慧もて一切の三界を觀察すべし。我當に一切の衆生に資生の具を惠み施して、二くる所無からしむべし。我當に一切の衆生の爲に慈母と作り、善根を出して諸願を満足せしむべし」と。菩薩摩訶薩は善根を廻向し、家は無き心もて、一切衆生の諸惡を遠離せんと廻向し、正心に一切の衆生を安穩にせんと廻向し、報恩を求めざらんと廻向し、衆生の利養を求めざらんと廻向し、讚歎を求めざらんと廻向し、一切衆生の無量の苦惱を除滅せんと廻向し、一切衆生は其心清淨なること猶し虚空の如くならんと廻向し、一切衆生は善根を首と爲し一切諸法の眞實を觀察せんと廻向し、一切衆生は大莊嚴を以て自ら莊嚴し、永く苦陰を離れんと廻向し、摩訶衍の願に於て、厭き足ること無く、永く聲見を離れ、菩薩の所行、及び一切の大願を具し修習せんと廻向す。菩薩摩訶薩は莊嚴せる遊戯の園林を施し、攝むる所の善根を以て、衆生に廻向すらく、

【神是】神是神の

【神通】神通の

【身如】身如の

【未來】未來の

【未來】未來の

【未來】未來の

【未來】未來の

一切の衆生をして轉た勝れたる善根を得、究竟まで無上菩提の智慧の心を成就せしめ。一切の衆生をして不壞の法を得て、普く諸佛を見たてまつりて、皆悉く歡喜せしめ。一切の衆生をして常に法林を樂ひ、佛初の教誨の園林を速得せしめ。一切の衆生をして淨妙の心を得て、常に如来の大神足の林を見たてまつらしめ。一切の衆生をして如来の自在なる法界を樂ひ、即是自在にして過く十方に遊ばしめ。一切の衆生をして法界を樂得して諸の佛初に於り、教化を諸受せしめ。一切の衆生をして菩薩の眞を樂ひ、未來未來に無礙の行を樂して、心に疑念無く、解脱に安住せしめ。一切の衆生をして一切の佛の普滿せる法界を見て、佛の大心を樂へ園林を清淨ならしめ。一切の衆生をして諸佛の初に於り、其心歡喜して諸佛を供養せしめ。一切の衆生をして離欲の心を樂ひ、清淨に一切の佛刹を普觀せしめんと。是を普賢菩薩の莊嚴せる莊嚴の園林を希觀する善根阿耨と爲す。一切の衆生をして一切の諸佛の園林に遊觀し、一切の佛を見たてまつらしむるなり。」

大方廣佛華嚴經 卷第十九

東晉天竺三藏佛跋跋陸羅譯

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之六

【三】身口意の言にて爲す所作を

復次に菩薩摩訶薩は無量億那由他の阿僧祇の大衆の施會を作して、惡を離れ、清淨にして、諸佛に歎ぜられ、普く衆生を淨め、永く衆惡を離れ、三業の邊を淨めて薩婆若を生じ、無量の境界は、皆悉く清淨にして、無量百千億那由他の布施の具は、皆悉く莊嚴して以て惠み施す。菩薩摩訶薩は大施會を攝むる所の善根を以て、衆生に廻向すらく、「一切の衆生をして悉く無上菩提の心を得て、無量の施を行じ、皆悉く清淨ならしめ。一切の衆生をして皆悉く無量無邊の清淨の道を究竟せしめ。一切の衆生をして無量の惡を行せしめ、衆の須むる所に隨ひて悉く満足せしめ。一切の衆生をして無量の悲れを行じ、悉く能く一切の衆生を救護せしめ。一切の衆生をして三世の如来の正教に隨順せしめて、佛を歡喜せしめ。一切の衆生をして諸佛の所に於て布施を修行し、心に中悔無からしめ。一切の衆生をして皆悉く勝妙の信根を長養して念念の中に於て無量の布施を修行し増進せしめ。一切の衆生をして摩訶衍の心を得て、皆悉く菩提の施會を成就せしめ、

【無等】無等は無比なり、次の等は諸佛の相等しき等なり

【非時】時は戒律生活の生命にして、食事は一定時より轉ること無し、故に單に時と言ふも盡の定時食をさすなり、故に非他の時を非時と言ふ、戒律生活者は非時に食を得ることとを固く禁ず

一切の衆生をして空寂の處、空寂處、善美、隱處、第一處、上處、無上處、無等處、出世間處、一切諸佛の讚歎する所の處を成せしめ、一切の衆生をして第一施の主と成り、諸の善道に於て衆生を拔出して、無礙清淨の善道に安處し、平等の國、眞實の善處を修し、無等善の二乘の善處を得しめ、一切の衆生をして空寂たる諸の禪定智に安住して、無礙の道に説き、一切の諸阿羅漢を度脱し、功徳積進して諸境を具足し、佛法を莊嚴し、彼岸を究竟とてよく成就せしめ、一切の衆生をして空寂の善を具得せざることを得て、衆生に輪廻とて休息すること無く、無上の一切佛智を究竟せしめ、一切の衆生をして諸の善處を獲え、よく成就したる功徳の彼岸に到らしめ、一切の衆生をして諸所に感ぜられ、普く一切の衆生に大慈心と成りて、功徳具足して淨界に安處し、普く十方を照し、無上の樂を成せしめ、一切の衆生をしてよく成就せしめ、普く十方を究竟とせしめ、衆生を成就し、一切の衆生をして無上の樂に獲えしめ、一切の衆生をして一切の衆生をして空寂の主と成りて、普く衆生を具へて、彼岸に到らしめ、一切の衆生をして淨淨の主と成りて、一切の諸の聲聞衆の處に到らしめ、一切の衆生をして一切の淨淨の主と成りて、淨界に等しき功徳を出生し、成就せしめ、一切の衆生をして一切を出離せしめ、如來と成りて、大願を滿し、衆生を度脱して、如來の處非處の方に安住せしめん」と、是を普賢菩薩の大願の善趣行向と爲す。一切の衆生をして無上の善を行じ、究竟の

【處非處】處非處  
智力の略。佛の十  
月の一にして、處  
(非理ノ義)と非處  
(知見する智力の意  
なり)。

佛施、善を成就する施、不可壞の施、諸佛の法施、愛眼心の施、衆生を救ふ施、薩婆若の施、諸佛を見たてまつる施、威儀を具する施、菩薩の所行の功德の佛の智慧とを具足する施をなさしむるなり。

復次に菩薩摩訶薩は、悉く一切の資生の具を捨てて、心に貪著無く、果報を求めず、世間の富樂も希望する所無く、愚癡を捨離して、深く諸法を解り、一切の衆生を饒益し、安立し眞實相の心も一切の法を解り、種種の莊嚴、諸の資生の具、無量の境界、種種なる莊嚴資生の具も衆生を饒益し、究竟施、一切施、内外施も直心を増長す、一切の衆生をして、功德の寶心を具へ、善業く無量の衆生を饒益せしめ、一切の衆生をして、寶心を成就せしめ、一切の衆生をして、清淨の善根、三世の佛に等しくして、一切智を具へしむ。菩薩摩訶薩は資生の具を施し、攝むる所の善根を以て衆生に廻向すらく、一切の衆生をして清淨に調伏せしめ、一切の衆生をして皆悉く一切の佛刹を嚴淨して煩惱を除滅せしめ、一切の衆生をして清淨の心を以て、念念の中に於て、法界に充滿せしめ、一切の衆生をして智慧を虚空法界に充滿せしめ、一切の衆生をして一切智を得て三世に了達し、一切時に於て不退の法輪を轉せしめ、一切の衆生をして悉く善業の行を示現し、巧妙の方便も衆生を饒益せしめ、一切の衆生をして悉く一切の諸の如來の道を悟りて未來劫を盡して一切の刹に於て廣く衆生を度ふを未だ曾て休息せざらしめ、一切の衆生をして無量劫に於て菩薩の行を修し、心に厭倦無からしめ、一切の衆生をして一切の世界、淨

世界、千淨世界、小世界、中世界、大世界、微細世界、廣嚴世界、法界、量  
如き等の一切の世界に於て、皆悉く清淨し、菩薩充滿して大乘の行を行せしめ。一切の  
衆生をして念之中に於て、悉く三世の一切の行を作し、衆生を伏して清安を立  
てしめん。

【釋】以上十行の  
六以上十行の  
以下の諸行は、  
以下に諸行を  
以下に諸行を  
以下に諸行を  
以下に諸行を

【真諦王】所  
代眞諦王所  
治すまはして  
倫實を以て一  
三十二相の大  
の相を具へ、人

是菩薩摩訶薩は早の如き等の無量の阿僧祇劫を以て、衆生を飽息し、佛法を説きざらし  
め、大悲心を以て衆生を救護し、大慈を修習して菩薩の行を具へ、一切の諸法の如來の法を  
建立し、一切の衆生をして皆悉く諸法の善根を斷せざらしたる來り求むる菩薩摩訶薩に  
く其深を滿して悲愍深く、能く一切を施して心に悔有ること無く、一切の物、資生の具を  
捨て、十方の方に於ては伏せしめんこと無く、諸の衆生に於て一千の劫の如くし、  
來り求むる菩薩を見れば、心大いに歡喜し、是念を作して言はく「昔れ我が阿僧祇劫なり」と。  
爾時、菩薩大悲の心、歡喜の心、不可壞の心、大慈の心を長養す。菩薩摩訶薩は來り求む  
る者を見れば、共宿むる所に隨ひて、悉く之を資給し、其意を充滿して、こくる所無か  
らしめ、菩薩をせしめ、其貧苦を斷ちて、富樂を具足し、同聲に稱美し、歡喜して歸らし  
む。菩薩摩訶薩、心大いに歡喜し、百千億那由他劫に於て、帝釋の受くる樂に及ぶこと能は  
ざる所、須夜摩天王、兜率陀天王、化自在天王、他化自在天王の百千億那由他劫に受くる  
所の喜樂も及ぶこと能はざる所、梵天王の樂、乃至淨居天の無量無邊の阿僧祇劫の禪定の  
快樂も亦及ばざる所、無量無數の稱説すべからざる阿僧祇劫の轉輪王の樂も亦及ぶこと能

無量歳より八萬歳の時までに出世し以後出世せずと言はれ、即位に際し感得する輪寶の別に依り金銀銅鐵の別ありと云ふ。

【此善根を以て云云】以下實際廻向を明す。

【禪頭】禪豆、又は經都と書き(一)云(二)の音譯、空者と譯す。

はざるなり。菩薩摩訶薩は是の如く大喜無量にして、信心增長し、直心清淨にして諸根柔軟に、定心増廣して菩提心を生じ、堅固にして轉ぜず。菩薩摩訶薩は善根を廻向して一切の衆生をして、毒害の心を離れしめ、一切の衆生をして安隱快樂ならしめ。一切の衆生をして眞實の義を得しめ。一切の衆生をして悉く清淨なる無上菩提を得しめ。一切の衆生をして悉く平等を得しめ。一切の衆生をして賢善の心を得しめ。一切の衆生をして普賢菩薩の摩訶衍の心を逮得せしめ。一切の衆生をして所行悉く善ならしめ。一切の衆生をして普賢菩薩の修する所の願行を具へしめ、一切の衆生をして十力の乘を覺せしむ。

菩薩摩訶薩は、此善根を以て、廻向する時、身口意の業に於て、無著無縛にして、解脫もて廻向す。無衆生の想もて、廻向し、命の想無く、人の想無く、福伽羅の想無く、男子の想無く、年少の想無く、禪頭の想無く、造の想無く、受の想無く、有の想無く、無の想無く、今世後世の想無く、此に死し役に生るるの想無く、有常の想無く、無常の想無く、三有の想に非ず、三有無きの想に非ず、想に非ず、無の想に非ず、無縛無著の解脫の心もて廻向し、無量にして廻向し、無業報にして廻向し、無虛妄にして廻向し、無眞實にして廻向し、無思にして廻向し、無思報にして廻向し、無心にして廻向し、無心無くして廻向す。

菩薩摩訶薩は、是の如く廻向する時、内に著せず、外に著せず、縁に著せず、境界に著

【取】煩惱の異名  
 三有生の迷妄に  
 執取するが故なり  
 又十二因縁の取支  
 も亦欲取、見取、  
 戒取、我語取等の  
 一切の執取の煩惱  
 たり。小乗の説は  
 略す。

【一切の諸法は不生不滅云云】以下  
 諸法の眞相法爾  
 自然を肯定的述語  
 を以て論表するな  
 り。如しの如く、  
 空の如し。

【無行無作】諸法  
 の實相を佛眼を以  
 て圓觀する時、事  
 即理にして造作あ  
 ることなく、斷ず  
 べき煩惱、證るべ  
 き菩提の何等執す  
 べきもの無し。故  
 に佛行菩薩行は無  
 行にして行たり。無  
 作にして作たり。

せず、因に著せず、因和合に著せず、法に著せず、非法に著せず、思に著せず、思界に著  
 せず、色に著せず、色取に著せず、色觸に著せず、受想行識に著せず、受想行識取に著せ  
 ず、受想行識に著せず、菩薩摩訶薩名は法の中に於て心著せず、即ち色に縛  
 せられず、色取に縛せられず。色觸に縛せられず、受想行識に縛せられず、受想行識取に  
 縛せられず、受想行識滅に縛せられず。善し此法に於て縛せられざる者は、即ち諸法に於  
 て亦解有ること無し。何を以ての故に。一切の諸法は不生不滅にして自性有ること無く、  
 一無く二無く、多無く少無く、有量無く無量無く、善無く不善無く、淨無く不淨無く、  
 亂無く、著無く離無く、法無く非法無く、性無く非性無く、有無く無無きが故なり。菩薩  
 は是の如く法を見れば則ち是れ法に非ざるなり。言語の道隔ゆるが故に、法を法と爲し、  
 而も亦一切の羂迹を遺せず、具に菩薩の行を修して、一切言を退せず、聲聞は法の如く響  
 の如く、聲中の像の如しと解知し。一切の法は法の如くにして、而も亦因縁五塵に遺は  
 ず、甚深の法に入りて法の眞實を離れば、無行無作にして、亦復業行の跡に立はず。菩薩  
 摩訶薩は一切の善根を以て是の如く一切積習に廻向し、善く十方に廻つて衆生を教化す。  
 廻向とは何の義ぞや。永く世間生死の彼岸に度るが故に廻向と説き、諸種の彼岸に度るが  
 故に廻向と説き、語言道の彼岸に度るが故に廻向と説き、衆生相の彼岸に度るが故に廻向  
 と説き、身見の彼岸に度るが故に廻向と説き、不堅固の彼岸に度るが故に廻向と説き、諸  
 種の彼岸に度るが故に廻向と説き、諸種の彼岸に度るが故に廻向と説き、諸種の彼岸に度

【若し能く此善根云云】以下第三行所成の益を説く。

【此廻向に住すれば】以下、當位所成の果を明す。

るが故に廻向と説き、諸の世間法の彼岸に處るが故に廻向と説く。

菩薩摩訶薩、若し能く此善根を以て廻向すれば、則ち皆一切の諸佛に隨順し、法に隨順し、智に隨順し、菩提に隨順し、義に隨順し、廻向に隨順し、行に隨順し、眞實に隨順し、清淨に隨順す。菩薩摩訶薩は是の如く廻向しじりて、一切の衆生をして如来の法を得しめて諸佛を歡喜し、佛として値ひたてまつらざること無く、法として了らざること無く、一切の法に於て違無く失無く、悉く能く一切の佛法を分別して、正法を捨てず、因縁内外の諸法に違はず、法力具足して休息有ること無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六の隨順一切堅固善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩此廻向に住すれば、無量の諸佛皆悉く守護して、堅固の法を得、一切智を修し、隨順の義を領り、一切の法を解り、眞性に隨順して一切法を得、堅固なる善根に隨順し、隨順して諸願を満足し、堅固の法に隨順することを得て一切の金剛を壞ること能はざる所、堅固の願に隨順することを得、一切法の中に於て自在を得。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承けて十方を觀察し、一切の衆生を觀察し、法界を觀察し、深く諸法の句味の義に入り、無量の心を修して大悲普く一切の衆生を覆ひ、三世の如来の家法を覺悟し、一切諸佛の功德に入り、諸佛の自在の身を遠得し、一切諸の衆生の心を分別し、種うる所の善根に隨ひて、受化の時に應じ、法身に隨順して色身を示現し、偈を以て頌すらく、

【一切諸問六云】  
 以下の重頌は、  
 四十位より成  
 り、初五位は前  
 の行所依の身を  
 依止して、依止  
 先の十九位は、  
 及び菩提への實  
 後、十位は、實  
 際、向を頌して  
 後の五位は、行  
 成の益を頌して  
 結するなり。

一切諸問の諸の大王、菩薩は身を現じて後に生れ  
 佛に奉養する大士の位に實して、悉く諸の諸生を調伏す  
 其心不變にして常に清淨、一國家に於て自在を得  
 常に正法を以て天下を治め、方便隨順して世間を樂しむ  
 菩薩は清淨の王家に生れ、常に前く應の如く方便を轉じ  
 諸國を治めて正しく國を治め、十方の諸國に建ふこと無し  
 菩薩は色用功勤勵して、世間の諸智慧を見出し  
 堅固に安住して其佛せず、悉く悉く一切の魔を降伏す  
 常に前く共に清淨の戒を執ち、決定して定慧力に實化し  
 一切の魔志の毒を降滅して、常に前く最勝の法を修習す  
 菩薩は其に前集の法を行じ、飲食、華鬘、樂、衣服  
 塗香、房舍、明淨の燈、坐の如き等の處に量有ること無し  
 菩薩は其に前集の法を行じ、常に前く廣大の心を開發し  
 其意清淨にして、いかに歡喜し、菩薩及び世間に前集す  
 菩薩は悉く悉く無量なる、内外有する所の一切の物を捨てて  
 行する所の奇趣を常に歡喜し、未だ曾て暫くも中悔の心有らず  
 菩薩は悉く悉く四日、手足其及及び骨髄を施し

一切の身分を悉く恵み施して、其心に未だ曾て中悔を生ぜず  
菩薩は大王の位に處在し、清淨にして富貴なる人中の尊  
大悲をたれ舌を以て群生に施し、楚毒無量なるも中悔せず  
菩薩は舌を施す淨き善根を、一切諸の群生に廻向し  
悉く此等の衆生類をして、具足して廣長舌を成就せしむ  
菩薩は歡喜して妻子を施し、其心に未だ曾て憂悔を生ぜず  
又復歡悦して國土を施し、亦能く身を捨てて吝む所無し  
樂み求むる所に隨ひて盡く施與し、時に應じて恵み施して嫌恨無く  
一切の所有を能く悉く捨てて、諸の來り求むる者皆満足せしむ  
法の爲に身を捨つること央數無く、諸の苦行を修して菩提を求め  
又衆生の爲に諸苦を受け、無上智を求めて退轉せず  
如來の正法を聽受せんが故に、身を以て布施して疲厭無く  
内心に歡喜すること量有ること無し、一切の衆生を救護せんが故なり  
菩薩は諸佛を見たてまつることを得已りて、慈心に恭敬して供養を設け  
佛益し歡喜して悉く具足し、皆能く諸佛の法を聞持す  
一切の衆生類に廻向して、悉く世間をして安樂を得しめ  
普く能く一切の衆を救護して、永く究竟じて解脱を得しむ

菩薩は諸の眷屬を具足し、色身端嚴にして發命に順ひ  
 妙莊嚴の具を校飾と爲し、聰敏仁賢にして巧智慧あり  
 饒益を以ての故に悉く布施して、未だ曾て微しも吝む心有らず  
 世間の資生の利を爲さず、衆生を饒益して菩提を求む  
 淨巧徳を具足し修習して、無量の諸の勝業を履行し  
 一切の衆生類に變向して、亦業の堅固の相を取らず  
 菩薩は能く大王の位、嚴飾せる京都、諸の城邑  
 宮殿、内外の一切の物、遊觀の園林、諸の油流を捨つ  
 無量無數の百千劫に、無上の心を以て布施を行じ  
 世間を閉悟して彼岸を示し、隨順して群生の類を化導す  
 菩薩は來り求むる者有りて、悉く他方の世界より至るを見れば  
 彼らに隨ひて隨ひて其願を滿ぜしめ、菩薩は大喜身に充遍す  
 菩薩は施の功德を廻向して、三世一切の諸の如來の  
 所學を究竟して彼岸に到り、無上の導師の境界なり  
 菩薩は一切の法を觀察するに、其か衆生を度脱する者と爲す  
 誰を度脱せんが爲に何の法にかする、空なるを解りて布施の心を捨てず  
 菩薩は智慧に廻向せんが故に、菩薩は廻向して正法を求め

菩薩は甚深の義に廻向し、一切の法に於て所著無し  
心に一切の業を分別せず、諸の業根に於て染著せず  
菩提は縁より起ると了達し、法の眞性に於て壞する所無し  
己身を解了して染著せず、其心寂滅にして所依無く  
智慧もて分別するに業性無く、善く因縁を解れば業無きに非ず  
虚妄に過去の法を取らず、亦復未來の法を取らず  
現在に了達するに所有無く、三世を觀察するに悉く空寂たり  
菩薩は色の彼岸を究竟し、受想行識も亦是の如く  
永く一切を度して彼岸に到り、其心謙順にして常に清淨なり  
五陰十八界を觀察し、諸入及び己身を分別し  
此諸法に於て菩提を求むるに、皆悉く空寂にして不可得なり  
諸法の常住の相を取らず、斷滅の相に於ても亦受けず  
一切の諸法は有無に非ず、諸業は因縁の和合より生ず  
衆生の菩提を得ること有る無く、一切の諸法は悉く寂滅にして  
心諸佛の刹に染著せず、三世に了達するに所有無し  
若し能く是の如く正法を解らば、亦一切諸の最勝の如くならん  
復推求すと躰も所得無く、菩薩の所行も亦虚しからず

是故に縁の中に諸法を求めて、一切の内縁の道に違はず  
諸の業迹を分別し解説して、衆生をして悉く清淨ならしめんと欲す

是を智者の修行する所と爲し、一切の諸佛の説きたまふ所なり  
隨順し思惟して正法に入り、自然に無上の道を覺悟す

諸法は生無く亦滅も無し、亦復來ること無く去ることも無く  
此に於て死せず彼に生せず、深く一切諸佛の法を解す

諸法の眞實性を了達すれば、法性の中に於て所著無く  
永く諸法の虚妄の相を離る、彼人は諸佛の智を見たてまつることを得

諸法の趣、衆生の諸趣、佛國の趣を分別し解了し  
一切三世の有ゆる法を、皆悉く了知して餘り有ること無し

三世諸佛の所覺の法を、悉く能く具足して聞きて受持し  
説く所の三世の一切法、是の如き等の法は悉く法に非ず

隨順して一切の法を修行し、而も亦諸法の相を壞せず  
菩薩は諸の衆生に廻向して、彼をして疾かに一切智を得しむ

『佛子、何等をか菩薩摩訶薩の、第七の等心隨順一切衆生廻向と爲す。佛子、此菩薩摩訶  
薩は、下品の善根、中品の善根、上品の善根、無量の善根、廣善根、種種の善根、測量る

べからざる善根、不可思議の善根、阿僧祇の善根、無邊の善根、佛境界の善根、法境界の

【佛子云云】以下  
第七等心隨順一切  
衆生廻向を明し、  
初に修する所の行  
相、就中行體を舉

【内境界】 自利の意。  
【外境界】 利他の意なり。

【菩薩摩訶薩云云】 修行得功德即ち行用に就て説く。

善根、僭境界の善根、善知識の境界の善根、一切衆生の境界の善根、方便の境界の善根、微妙の境界を修習する善根、内境界の善根、外境界の善根、無量の別異なる功德の境界の善根、一切施を修習する境界の善根、清淨或の境界の善根、菩薩の内自ら専正にして一切の捨に於て忍辱する境界の善根、精進して退轉せざる境界の善根、種種の禪定に入る境界の善根、諸地の智慧を修行する境界の善根、一切衆生の心心を分別する境界の善根、無量の清淨の功德を積集する善根、正念に菩薩の業を修習する境界の善根、普く一切の衆生を覆ふ境界の善根を増長す。

菩薩摩訶薩は是の如き等の無量の善根を行じ、修習し、究竟じ、積集し、長養して、廣く開解し已れば、則ち能く忍力に安住して惡趣の門を閉ぢ、善く諸根を調へ、威儀具足して、永く顛倒を離れ、正趣を決定して、一切諸佛の法器と爲るに堪ふ。普く衆生の爲に無上の福田と作り、常に諸佛の爲に守護せられ、一切諸佛の清淨の善根を出生し、長養し、隨順して如來の大願を具滿し、深く佛業を樂ひ、心に自在を得て、悉く三世の諸の如來と等しく、普く能く一切の諸佛を供養したてまつり、一切諸の如來力を究竟じ、常に諸佛の爲に講敷せられ、天に生ずることを求めず、利養を食らさず、諸行に著せず。一切の善根を皆悉く廻向して一切の衆生の爲に功德藏と作り、諸道を具足して普く一切の衆生を覆ひ、生死の中より衆生を拔出し、教へて一切の善根を修習せしめ、一切の境界に廻向して斷絶せず、一切智菩提の門を開きて智幢を建立し、大道を嚴淨せしめ、普く衆生

【離垢清淨の菩提心云云】菩提心收攝の善根を説きて攝して廻向することを明す。

【是念を作さく云云】前の善根を廻向して、行の具成することを明す。

に示して、一切世間の塵垢を捨離し、鬼心の功德もて如来の家に生れ、清淨の功德皆悉く満足して無上の福田となり、衆生に著せず、世間に依らず。一切の衆生をして皆悉く清淨ならしめ、一切の善根を修習し擧取せしむ。

菩薩摩訶薩は、離垢清淨の菩提心もて善根を擧取し、是の如きの念を作さく、「此れ菩提心の起す所の善根、菩提心の思惟せる善根、菩提心の得る所の善根、菩提心の正しく希冀する善根、一向菩提心の善根、一切の衆生を憐愍し、一切種智の境界を擧取し、十力の境界を究竟じ、十力の境界を積集し、法界を壞せざる善根、退轉せざる善根なり」と。

菩薩摩訶薩は復是念を作さく、「此の如きの善根に若し果報有らば、我身に未來際を盡して菩薩の行を行すべし。衆生を捨てざるが故に、大捨を修行し、一切衆生に廻向して悉く餘り有ること無けん」と。無數の世界に珍寶を充滿せしめ、無數の世界に寶衣を充滿せしめ、無數の世界に妙香を充滿せしめ、無數の世界に莊嚴具を充滿せしめ、無數の世界に摩尼寶を充滿せしめ、無數の世界に勝摩尼寶を充滿せしめ、無數の世界に彩色の雜華を充滿せしめ、無數の世界に上味を充滿せしめ、無數の世界に金銀を充滿せしめ、無數の世界に天衣を充滿せしめ、妙寶もて莊嚴し、數くに天衣を以てし、無數の世界に寶もて莊嚴せらば、冠を充滿せしめん。若し一人有り、未來劫を盡して常に來りて求索すとも、此寶物を以て之に惠み施して、未だ曾て厭離せしめず。一りの衆生の如く一切の衆生も亦復是の如し。菩薩摩訶薩は是の如く施す時、平等の心、偏愛無き心、名を求めざる心、熱惱無き

【婆羅馬】婆羅譯  
(Yama)雲馬と譯  
す。空中遊行の馬  
形の生物なりと言  
ふ。

【不放逸】心所の  
名。大善地法亦是  
十一善心所の一に  
數ふ。惡法を防ぎ  
善法を修むる精神  
作用を言ふ。

心、中悔無き心、専ら一切智を求むる心、清淨道の心、一向施の心、憐愍の心、調伏の心、一切智に安住するの心を以てす。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向し、未來劫を盡して常に布施を行す。復次に菩薩摩訶薩は善根を是の如く一切の衆生に廻向して悉く勝り行ること無し。我當に寶象を以て無數の世界に充滿し、七支具足し、六辮成滿し、大寶輪を建て、眞金にて莊嚴し、白寶の網を覆ひ、一切の雜寶もて之を莊嚴して以て布施すべし。我當に清淨の寶馬、婆羅馬王等を以て無數の世界に充滿し、一切の馬寶の莊嚴具を以て之を莊嚴して以て布施すべし。無數の世界に寶女を充滿し、娛樂を具足して以て布施し。無數の世界に男女を充滿して以て布施し。無數の世界に己身充滿して以て布施し。無數の世界に己身の頭首を充滿して、不放逸の心を以て布施し。無數の世界に己が口を充滿して、以て布施し。無數の世界に己身充滿し、梵毒破骨出髓を堪忍して、以て布施し。無數の世界に大王の座處を皆悉く充滿して以て布施し。無數の世界に給使僮僕を皆悉く充滿して以て布施すべし。平等なる一切施の心を修習し、一世界の中に於て未來劫を盡して菩薩の行を修し、一りの衆生の爲に一切世界の中に於て未來劫を盡して菩薩の行を修し、一りの衆生の爲のごとく、一切衆生の爲にも亦復是の如し。大惡を具足して衆惡を遠離し、普く一切を念じ、我有施をして究竟じて不退ならしめ、布施を行する時、乃至一念憂悔の心をも生ぜざらん」と。菩薩摩訶薩復是念を作さく、「我是の如き無量の布施を行するに、無著の心、無縛の心、解脫の心、大心、甚深の心、攝取の心、憎

【善】樂詞は此善根云以下は衆生廻向を修して果に即かしむるの義を説く。

愛を離れたる心、壽命を離れたる心、善調伏の心、不亂の心、無害の心、一切智に安住する心、無光音一切法を照す心、一切智に入る心を以てせん」と。

菩薩摩訶薩は善根を以て念心に廻向すらく、一切の衆生をして財寶を充足せしめ、一切の衆生をして無量の大功徳を具足せしめ、一切の衆生をして安樂の樂を得しめ、一切の衆生をして菩薩の摩訶行業を長養せしめ、一切の衆生をして深法を満足せしめ、一切の衆生をして一切智業を具足せざることを得しめ、一切の衆生をして一切の佛を見たてまつらしめ、一切の衆生をして普く衆生に於て選擇する所無からしめ、一切の衆生をして悉く清淨なる平等の心を得しめ、一切の衆生をして諸の難處を離れて一切智を得しめ、一切の衆生をして無量の衆生を饒益し安樂ならしめ、一切の衆生をして普く一切に於て平等心を得しめ、一切の衆生をして柔軟の地心を得しめ、一切の衆生をして眞實盡地の心を攝受せしめ、一切の衆生をして施心を失はざらしめ、一切の衆生をして施心を具足して永く貧窮を滅せしめ、一切の衆生をして悉く世間の諸の妙財寶を具足して正趣する所無からしめ、一切の衆生をして一切の地を行せしめ、一切の衆生をして未來劫を盡して布施を行せしめ、一切の衆生をして一切の衆生をして悉く一切を捨てて、心に中絶ならしめ、一切の衆生をして隨順して施を行じ衆生を饒益せしめ、一切の衆生をして勝願の施を行ぜしめ、一切の衆生をして種種莊嚴の施を行ぜしめ、一切の衆生をして無著の施を行ぜしめ、一切の衆生をして平等の施を行せしめ、一切の衆生をして大力金剛の施を行せしめ、

【尸波羅蜜】尸羅波羅蜜の略。持戒波羅蜜のこと。

一切の衆生をして日の光明の如き施を行せしめ。一切の衆生をして如來の智を得しめ。一切の衆生をして善根の眷屬具足し成滿せしめ。一切の衆生をして善根智慧悉く現じて前に在らしめ。一切の衆生をして不可壞の正直の心を得しめ。一切の衆生をして清淨の善根を具足し成就せしめ。一切の衆生をして煩惱の睡眠に於て、智慧覺悟せしめ。一切の衆生をして疑惑を悉く除かしめ。一切の衆生をして平等の智と、清淨の功德とを得しめ。一切の衆生をして功德悉く備りて能く壞る者無からしめ。一切の衆生をして清淨なる不動三昧を具足せしめ。一切の衆生をして不可壞の薩婆若智を具へしめ。一切の衆生をして菩薩の無量なる清淨自在の正行を具足せしめ。一切の衆生をして無著の清淨の善根を修習せしめ。一切の衆生をして淨修して三世の諸佛を正念せしめ。一切の衆生をして勝妙なる清淨の善根を出生せしめ。一切の衆生をして一切の諸魔、魔業、障礙道の法を除滅せしめ。一切の衆生をして皆悉く無量の功德を履行し、諸の三昧を生じ、清淨満足ならしめ。一切の衆生をして常に諸佛を念じて、未だ曾て廢忘せざらしめ。一切の衆生をして常に諸佛を見たまつらしめ。悉く歡喜して初より遠離せざらしめ。一切の衆生をして淨法門を聞きて、善根を出生し、白淨法を平等に具足せしめ。一切の衆生をして悉く無量なる平等正直の心を得しめ。一切の衆生をして清淨なる平等の施心を成就せしめ。一切の衆生をして諸佛の尸波羅蜜を満足して、平等清淨ならしめ。一切の衆生をして大精進波羅蜜を具へて、未だ曾て懈怠せざらしめ。一切の衆生をして大



【一切の衆生をして諸佛云云】以下の三十七句は因圓果滿ならしむる勝遊分を説けるなり

一切の衆生をして諸法を出生して平等に満足せしめ。一切の衆生をして善根清淨にして應じて時を失はず、平等に満足せしめ。一切の衆生をして清淨なる阿耨多羅三藐三菩提の法を成就して、平等に満足せしめ。一切の衆生をして第一の華鬘、無量の莊嚴、大莊嚴、諸佛の莊嚴に於て平等に満足せしめ。一切の衆生をして三世を觀察して、分別平等ならしめ。一切の衆生をして諸佛の所に詣り法を聞きて受持し、解了平等にして則滿に具足せしめ。一切の衆生をして愧愧智慧を諸佛と等しからしめ。一切の衆生をして平等の智を得て、諸法を觀察せしめ。一切の衆生をして不動の業智を得て諸の障礙を離れ、平等に満足せしめ。一切の衆生をして甚深の智に入りて悉く分別し、衆生の諸根を知りて平等に満足せしめ。一切の衆生をして無分別の平等智慧を得て、皆悉く等一にして清淨に満足せしめ。一切の衆生をして等閑して厭くこと無く、善根を平等に分別して、皆悉く満足せしめ。一切の衆生をして大神足に於て自在を得、菩薩の神力を平等に満足せしめ。一切の衆生をして悉く諸佛の功德と智慧の教とを得、究竟の功德を皆悉く等一ならしめ。一切の衆生をして諸法の中に於て虚妄を測ることを得、平等に等閑して一切法に入りて、菩提心を知らしめ。一切の衆生をして勝如の福田を平等に満足せしめ。一切の衆生をして清淨の大悲を得て、普く世間の最上の福田と爲らしめ。一切の衆生をして堅固にして壞すること無く、平等に満足せしめ。一切の衆生をして眞實の法を見て假使すべからず、平等に満足せしめ。一切の衆生をして最勝の心を得て、思惟し正觀して平等に満足せしめ。一

【一音音】一音と  
も言ひ、如来の一  
音は諸衆に種種の  
利益を興ふること  
説法の如きを言ふ

一切の衆生をして、諸の善物を離れ、甚深の法に入りて彼岸に到らしめ、一切の衆生をして  
一光眼を置ちて普く十方を照し、寧しく一切を度せしめ、一切の衆生をして、悉く菩薩  
の不退の精進を得て、行を同じくし、願を同じくして、平等に満足せしめ、一切の衆生をし  
て、一音音を出して、平等に満足せしめ、一切の衆生をして、菩薩の直心に於て平等に満足せし  
め、一切の衆生をして、悉く諸の善知識を親見することを得て、心大いに歡喜せしめ、  
一切の衆生をして、皆、悉く菩薩の諸行を具足し、衆生を調伏し、未だ曾て休息せずして平  
等に満足せしめ、一切の衆生をして、不圖の辯を得、普く諸音に入りて、平等に満足せしめ  
一切の衆生をして、能く一心を以て一切心を知り、一切の善根を平等に満足せしめ、一切の  
衆生をして、諸の善根を修して退轉せず、衆生を清淨智に安立せしめ、一切の衆生をし  
て、一切智、平等の功德、清淨の法身を得しめ、一切の衆生をして、悉く萬縁を捨て、善  
根を觀察して、平等に満足せしめ、一切の衆生をして、一薩婆若を得、等正覺を成じて平等  
に満足せしめ、一切の衆生をして、諸の悪趣を離れ、一道に一切種智を出して、平等に  
満足せしめ、一切の衆生をして、一衆清淨なることを得て、悉く能く普く一切の大衆を  
淨くし、平等智慧もて之を莊嚴せしめ、一切の衆生をして、一佛刹に於て、普く一切、諸の  
如来の刹を見て平等に満足せしめ、一切の衆生をして、一切の莊嚴、不可説の莊嚴、不可量  
の莊嚴、無量の莊嚴もて、一切の佛刹を莊嚴して平等に満足せしめ、一切の衆生をして、無  
量の諸法を分別し解了して、甚深の義を見り、平等に満足せしめ、一切の衆生をして、諸の

【非一非異】 不二  
不異に同じ、三論  
所説の八不の一對  
句にして、一にあら  
ず、即ち中道の意  
たり。  
【是の如く菩薩摩訶  
薩】以下は前の  
菩薩の慈心の廻向  
に次で悲心の廻向  
を説く。

【等心】 平等心の  
略。  
【白法】 黒に對す  
る白は清淨の意な  
り、即ち清淨法。  
亦は善法を言ふ。  
佛教全般を白法と  
言ふも、今は就中  
三學六度等の善根  
功德の法を指せる  
なり。

現行、諸佛の自在を得て平等に満足せしめ、一切の衆生をして非一非異の諸の神通力を平等に満足せしめ、一切の衆生をして善根に隨順して、普く諸佛の甘露の灌頂を爲さしめ、一切の衆生をして清淨の智身を平等に具足せしめん」と。

是の如く菩薩摩訶薩は衆生を憐愍し饒益し、大悲もて衆生を哀念し、一切の衆生をして皆悉く清淨にして慳嫉の結を離れ、無量無邊の善妙の功德を具足し、常に勝法を樂み瞋恚の濁及び諸の障礙を離れ、其心柔軟にして癡を離れ、正直にして邪曲無く、行ずる所堅實にして沮壞すべからず、不退轉の平等の心を得て、白淨の法力皆悉く成就して惱まず、失はず、善く廻向を解りて功德を修習し、衆生を調伏して一切諸の不善の業を除滅し、專精に苦行して、普く一切に苦行の善根を具足し、修習せんことを教へ、諸の衆生の爲に具に衆苦を受け、慧眼清淨にして善根を觀察し、智慧聖行の善根を一切の衆生に廻向せしめ、一切の衆生をして清淨なる微妙の功德に安住し、熾然を遠離し等心を成就して善根を廻向し、一切の衆生をして薩婆若を得て廻向を修習し、衆生の一切の善根を攝取して平等に具足し、等心の廻向を具足し成就せしむ。是の如き等の無量の善根を以て衆生に廻向して、一切の衆生をして常に安隱を得しめ、一切の衆生をして常に清淨を得しめ、一切の衆生をして常に安樂を得しめ、一切の衆生をして究竟の解脱を得しめ、一切の衆生をして究竟の平等を得しめ、一切の衆生をして自在神力を得しめ、一切の衆生をして白法に安住せしめ、一切の衆生をして無障の眼を得しめ、一切の衆生をして諸根を

【菩薩摩訶薩は是の如き】以下は、行極りて眞如法性に契ひ、行に所行なく即ち無作無行廻に所廻なく即ち實際廻向を説く。

【一切を】出して一切の法を以て

調伏せしめ、一切の衆生をして十力を具足して衆生を教化せしむ。

菩薩摩訶薩は是の如き廻向を修行する時、業に著せずして廻向し、報に著せずして廻向し、身に著せずして廻向し、利養に著せずして廻向し、諸刹に著せずして廻向し、諸方に著せずして廻向し、衆生に著せずして廻向し、亦衆生を離れずして廻向し、一切に著せずして廻向し、法に著せずして廻向す。菩薩摩訶薩は是の如く廻向する時に、是の如きの念を作さく、一切の衆生をして佛智を満足し、清淨身を得、智慧もて分別し、内心寂靜にして外離れず、三世諸佛の家に在りて坐るることを得しめん」と。

菩薩摩訶薩は是の如きの廻向を行じて、一切を露出し、能く壞す。普照く、一切の衆生悉く共に賛歎すとも讚すこと能はざる所にして、普く一切の菩薩の行を行じ、少方便を以て過く諸刹に詣り、悉く諸佛を見たてまつりて讚嘆する所無く、又諸刹の一切の菩薩の行を盡す。諸の行を見、悉く一切の巧妙なる方便を得、一切の法、陀羅尼を分別し、妙法を演説して衆生を教化し、未入劫を盡して未だ行て斷絶せず。念念の中に於て不可説不可説の諸佛の世界に、悉く現じて生を受くるも、斷し常光の如く、念念の中に於て悉く不可説不可説の諸佛の世界を清淨し、佛刹を圓滿する智慧を修行して實を足ること無く、不可説不可説の衆生をして清淨に成就し、平等に満足せしめ、其所住の善根に隨ひて、悉く能く諸の菩薩を具足して衆生を攝取し、垢穢を離脱して淨性を成就し、無礙の淨耳を得て、不可説不可説の世界に於て、佛の法教を傳じたまふを、悉く聞

【遠想】遠は教遠なり、佛に對して教遠的態度を取るを言ふ。  
【一切の佛刹】以下廻向行果徳の請淨なることを明す

【廻向を行じて】以下遠相を融會する自在の徳を説き七對を以て緣起の事相の上に就て融會を明す。最後第七の法生は性に違はずと説きて理事互融無礙なることを明す。  
【思、心】思は動作の因、業の體なり。心は本識なり、即ち其相違する處なし。  
【業】業(Karma)身、口、意の所作を言ふ。業迹は思の所起にして、意の決定に依て起る

きて受持し、彼諸佛に於て遠想を生ぜず、乃至未だ曾て一彈指の頃も正法を聞かざること  
あらず。無所有に住して依無く、染無く、著無く、行無く、堅固不壞の菩薩の神力にて、  
念念の中に於て不可説不可説の一切の佛刹に、其所應に隨ひて悉く其身を現じて菩薩の  
行を修し、常に與に同見して事に從ひ、相違背せず。菩薩摩訶薩は菩薩の行を修する時、  
是の如き無量無邊の清淨の功徳を成就して隨くとも盡すべからず。沈んや無上菩提を成  
じて最正覺を得るをや。謂ゆる、一切の佛刹、清淨にして平等。一切の衆生、清淨に  
して平等。一切の身、清淨にして平等。一切の根、清淨にして平等。一切の業報、清  
淨にして平等。一切の眷屬、清淨にして平等。諸行を満足し清淨にして平等。方便も  
一切法に入り、清淨にして平等。一切如来の諸願を満足する廻向、清淨にして平等。  
一切諸佛の境界の自在を示現し、清淨にして平等なり。菩薩摩訶薩は是の如く善根を廻  
向し已りて、一切の清淨なる巧徳の法門を得、諸の功徳を以て之を莊嚴す。菩薩摩訶  
薩は是の如く廻向を行じて一切の刹に違はず、刹は衆生に違はず。刹は衆生の心に違はず、  
衆生の業は刹に違はず。思は心に違はず、心は思に違はず。思は心の境界に違はず、心の  
境界は思に違はず。業縁は報に違はず。報は業縁に違はず。業は業迹に違はず、業迹は業  
に違はず、法は刹に違はず、刹は法に違はず。法生は性に違はず。性は法生に違はず。刹  
の平等は衆生の平等に違はず、衆生の平等は刹の平等に違はず。一切衆生の平等は一切法  
の平等に違はず、一切法の平等は一切衆生の平等に違はず。離欲離の平等は一切衆生の安

【法生】因縁所生  
【平等】以下七

【平等】以下七  
【平等】以下七

住平等に違はず、一切衆生の安住平等は離欲際の平等に違はず。過去は未來に違はず、未來は過去に違はず。過去は未來に違はず。過去は未來に違はず。世の平等は佛の平等に違はず、佛の平等は世の平等に違はず。菩薩の行は薩婆若に違はず。薩婆若は菩薩の行に違はず。菩薩摩訶薩は是の如き廻向を行じて平等の業を得、平等の報を得、平等の身を得、平等の道を得、平等の願を得、平等の一切衆生心を得、平等の一切刹を得、平等の一切行を得、平等の一切智を得、三世の諸佛の平等を得、諸佛及び諸の菩薩を見ることを得、一切の善根を得、一切の願を滿ずることを得、一切の衆生を成就することを得、善く一切の諸法を分別することを得、一切の善如識に見えて悉く歡喜せしむることを得、清淨の七衆を得、諸佛の正教を究竟することを得、一切の白淨法の廻向を究竟することを得。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の等心略願一切衆生廻向と爲す。

菩薩摩訶薩、此廻向を成就し已れば、則ち能く一切の怨敵を摧伏し、悉く能く一切の欲刺を拔出し、無生の道を得て、無二の處に到り、無量の自在功德の王たることを得て、衆生を救護し、善足無礙にして、難く諸利に遊び、常に寂靜を樂みて、一切の身に於て自在を得。悉く能く菩薩の大行を出生して、諸の行願に於て自在智を得。一切の諸法を分別し了知して、悉く能く遍く一切の佛刹に生じ、無礙の耳を得て、一切刹の有ゆる音聲を聞き、淨慧眼を得て、一切の佛を見たてまつり。諸の善根を修して未だ曾て休息せず、一切の諸法を具足し成就す。菩薩摩訶薩は計等心略願一切衆生廻向を以て諸

【菩薩具に】以下  
 の重頌は總じて二  
 十一偈より成り、  
 初半偈は行相、次  
 三偈は具行、次六  
 偈は衆生廻向に依  
 りて得菩提に至る  
 こと、次十偈半は  
 實際廻向、最後の  
 一偈は成益を讃頌  
 して終る。

の善根を廻向す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承けて普く十方を觀じ、偈を以て歎して曰はく、  
 菩薩は具に諸の功德を行じ、深遠清淨にして甚だ微妙なり  
 所行の功德は微小なりと雖も、悉く能く廻向し廣きこと量無し  
 菩薩は一切の資生の具、珍妙奇特貴くして無價なる  
 象馬寶王諸の華輿、種種の寶衣、及び衆珍  
 象馬寶王諸の華輿、種種の寶衣、及び衆珍  
 己身頭目並びに手足、骨を破り髓を出し肌肉を割き  
 無量の諸の世界に充滿して、悉く以て惠施して貪吝無し  
 是の如く無量無邊の劫に、一切普く施して退轉せず  
 此功德を以て悉く廻向す、無量の衆生を救度せんが故なり  
 菩薩は一切の衆を饒益し、清淨の功德、諸の妙願あり  
 三有の群生の類を安樂にし、悉く究竟じて菩提を證せしめ  
 菩薩は平等に大願を發し、隨順して清淨の業を修習す  
 一切の衆をして平等なることを得しめ、彼願の中に於て所著無く  
 普く世間に於て嫌恨無く、悉く能く隨順して諸願を行す  
 悉く能く群生の類に廻向して、一切諸の賢聖に違はず  
 一切世間の智慧日は、斯れ布施淨戒より生ず

【兩足尊】二足尊とも言ひ、二足の生類（人天）中の最尊、即ち佛を言ふなり

轉修し精進して懈怠無ければ、一切の障に於て退轉せず  
 菩薩は廻向して彼岸に到り、能く清淨の妙法の門を聞く  
 兩足尊の勝智慧を得て、實義を分別して彼岸に到る  
 菩薩は梵音を悉く究竟し、堅固なる妙智慧を具足す  
 深く正法に入りて障礙を離れ、菩薩彼に於て心著すること無し  
 菩薩の心淨くしてこと作らず、亦復不二の法と作らず  
 二法と不二法とを捨離して、衆生の語言の道を覺悟す  
 菩薩は世の平等なることを覺悟し、諸心、音聲、一切の業  
 一切の衆生は猶し化の如く、悉く因緣業報より轉ずとしる  
 一切世間の造作する所と、十方無量の業音聲とよ  
 悉く業縁に從うて起る所、眞に彼業を滅して餘り無からしむべし  
 菩薩は一切の衆を觀察するに、身口意の業悉く平等なり  
 普く衆生をして平等を得て、猶し一切の無等等の如くならしめ  
 菩薩は善根を悉く廻向して、普く衆生の色をして清淨ならしめ  
 一切諸の功德を具足して、悉く無上の調御士に同ぜしむ  
 一切衆の中に最も殊勝にして、功德の妙法身を具足し  
 功德の大海を悉く廻向して、諸の群生を饑益し安樂にす

【寂滅空】涅槃の  
こと、生滅共に空  
にして、無爲寂靜  
たる境なり。

我修行する所の諸の功德は、普く一切をして悉く清淨ならしめ  
諸佛は清淨にして偷匹無く、普く世間をして亦是の如くならしむ  
平等に善根を悉く廻向して、一切の業をして實義を知らしめ  
微妙の智慧功德満ちて、悉く一切の如來と等し  
菩薩は一切の法を觀察するに、世間は寂滅空にして餘無く  
造作有ること無く造者無く、亦復諸の業報を壞せず  
彼靜亂に於て二有ること無く、悉く等心を以て正しく觀察し  
菩薩は眞實に世間を解り、一切諸の虚妄を遠離す  
是の如きの眞實の佛師等は、諸の如來の法化より生じ  
無量の功德を悉く廻向して、一切の疑惑悉く除滅す

# 大方廣佛華嚴經 卷第二十

東晉天竺三藏佛跋跋羅譯

## 金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一七

【佛子】以下十廻向行の中、第八、知相廻向を説き、先づ初に其行體を明す。

【不轉】眞如の性の常住にして、不動なるを不動の義とす、今は菩薩念智を成就して其心不變不動なるを云ふ。

【分別】差別の義、行相の意なり。今、分別は善根の分齊に不同あることを言へるなり。

【一向】専ら菩提の一に住して、他に同ぜざる義なり。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第八の如相廻向と爲す。佛子、此菩薩摩訶薩は、念智を成就して不動に安住す。實を離れて正念し、直心不動にして堅固なる下可壞の業を成就し、一切智の境界に不退轉を得、大乘の勇猛無畏の心を得、無盡の善根を修習し、勝妙の善根を積集し、白淨の法を修して大悲を増長し、正直の實を得て常に能く一切の諸佛の白淨の法を正念し、廻向の心退轉せず、菩薩の道を樂み求め、巧妙の方便もて清淨なる堅固の善根を出し、正念に智慧功徳を修習して調御師と爲り、一切の善根を具足し出生して智慧方便もて衆生に廻向す。慧眼清淨にして悉く能く一切の善根を觀察し、無量なる種種の善根を長養す。分別の境界の善根、具足の善根、清淨の善根、一向の善根、修習の善根、行の善根、思惟の善根、平等廣説の善根なり。菩薩摩訶薩は是の如きの善根に種種の門、種種の境界、種種の相、種種の事、種種の分別、無量の行、無量の語言道行り。無量の分別を出し、種種に莊嚴せる善根を修行し、悉く能く十力の諸乘を正持す。菩

【菩薩摩訶薩】以下第二に正しく廻向することを明す

【菩薩の心】菩提心に同じ、上求菩提、下化衆生の心

【巧便】巧方便の略、善巧方便、前妙方便とも言ふ

薩摩訶薩は是の如き種種の善根を修習して、一ら無二の一切智の境界を觀す。

菩薩摩訶薩は是の如き等の善根を以て廻向し、無礙の身を具滿して菩薩の行を修せしめんと欲し。口業を清淨、無礙にして菩薩の行を修せしめんと欲し。無礙の心業を具足して大乘に安住せしめんと欲し。無礙の心を具へて、菩薩の行を皆悉く清淨ならしめ、無量なる大施の心を得て、一切の衆生を充滿せしめ。法自在の心を得て、一切の法を照して普く世間に示し、最勝不可壞の心を得て、清淨の一切種智を得。菩薩の心を發して、普く一切を照し、三世の一切諸佛を正念して念佛三昧、悉く具足することを得。害を離れたる正直の心を滿足して、怨敵を遠離す。衆生を任持し、一切に充滿して休息無く、十力智に於て、悉く安住することを得て、深三昧を得、悉く能く遍く一切の世界に遊びて、樂著する所無く、悉く一切の刹に住して、曠き足ること無く、衆生を化度して、未だ曾て休息せず。無量の巧便思慧を出生し、一切の菩薩の不思議慧を具足し成就す。無礙の智を得て、悉く能く一切の世界を分別し、一念の中に於て、悉く能く一切の佛刹を嚴淨し、諸の通慧に於て自在を得。一切法の眞實の相に入りて、嚴淨せる一切の世間を示現し、一切の中に於て一切の刹を見、不壞の智を究竟して、能く一切の刹を持す。菩薩の莊嚴具を以て之を莊嚴して、一切に應現し、悉く能く無量の衆生を調伏す。一佛世界の廣大なること法界の如く、一切の世界も亦復是の如くして、究竟智を得、一切の刹に詣りて一切普く持す。菩薩摩訶薩は此善根を以て佛刹に廻向し、衆生を充滿せしめ、廻向分別して智慧を受持す。

【闍維王】 闍維王  
と云ふは、Anuradha  
といふ闍維王の  
主、或は闍維の王  
とも云ふ。

【復次に】 以下、  
事に因りて行を起  
し廻向を修するこ  
とを明す。  
【阿練若】 阿蘭若  
(前註)の舊譯。

己身の爲の如く、衆生の爲に廻向することも、亦復是の如く、一切の衆生をして永く地獄  
餓鬼、畜生、閻羅王の處を離れしめ、一切の衆生をして悉く能く阿耨多羅三藐三菩提の業を除滅せ  
しめ、一切の衆生をして悉く等心なる平等智を得しめ、諸の怨敵をして慈心を具へ、  
清淨の智慧を樂はしめ、一切の衆生をして智慧現前して圓滿具足し、普く一切を照さし  
め、一切の衆生をして眞實智と、離垢正直の菩提心とを具へ無量の智慧を満足せしめ、一  
切の衆生をして平等安穩の善處に示現せしむ。菩薩摩訶薩は是の如く廻向すらく、善根及  
び一切の業を修習して、大雲雨の如く、一切の衆生をして皆悉く清淨ならしめ、一切  
の衆生をして功德の福田と爲らしめ、一切の衆生をして菩提の内藏を守護し受持せしめ。  
一切の衆生をして一切の障礙を離れて無礙の清淨法界に安住せしめ、一切の衆生をして  
無礙の諸通智慧を満足せしめ、一切の衆生をして自在の身を得、十方に遊行して、應の如  
く示現せしめ、一切の衆生をして無礙の善根と一切種智とを得しめ、一切の衆生をして一  
切を具足して、悉く清淨ならしめ、一切の衆生をして障礙眞志の心を遠離し、究竟して  
一切淨智を成就せしめんとす。

復次に菩薩摩訶薩、若は樂ふべき園土、林樹、華果を見、或は樂ふべき名香、土服、珍  
寶、財物、諸の莊嚴具を見、或は樂ふべき園觀、村邑、聚落、王都を見、或は樂ふべき自  
在なる帝王を見、或は樂ふべき阿練若處を見、或は樂ふべき阿耨多羅三藐三菩提を見、巧方  
便を修して、無量の淨妙の功德を出生し、實義を樂ひ求め、衆生の爲の故に前も放逸な

らず、善能く一切の善根を修習すること、難し大海の測量すべきこと難きが如く、善根を具足して窮盡すべからず、一切の功德皆悉く満足し、亦種種の善根を分別せず。巧妙の方便もて清淨に廻向して、無量なる諸行の善根を示現し、常に一切を念じて、未だ曾て衆生の境界を忘失せず。如の善根、平等の善根なり。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向すらく、一切の衆生をして志常に無量の諸佛を樂見して、如法に法性を取らざらしめ、無数の衆生の平等清淨なることも、亦復是の如くならしめ。一切の衆生をして悉く諸佛隨意の愛樂を得て、供給の侍者たらしめ。一切の佛國をして煩惱を除滅し、清淨にして樂ふべからしめ。一切の衆生をして悉く無量の佛法を見聞することを得て、心常に愛樂し常に樂ひて、諸の菩薩の行を守護し、樂ひて天眼を以て善知識を觀せしめ。一切の衆生をして可樂の法を見しめ。一切の衆生をして正法を樂持せしめ。一切の衆生をして佛法の中に於て可樂の明を得しめ。一切の菩薩をして悉く可樂の大施の心を得て、諸法の中に於て無所畏を得、樂ひて衆生の爲に分別し廣説せしめ。菩薩の可樂三昧、諸の陀羅尼を得、一切の菩薩の受記の智慧を得。一切の菩薩の甚だ愛樂すべき自在の示現を得。諸佛の圓滿なる説法を具足し、樂ふべき方便を得て分別して法を説き、可樂の大悲を得、菩薩の心を發して、諸根悅豫し、愛樂すべき諸の如來の家を得、衆生を教化して心休息せず。菩薩の樂ふべき無盡の法藏を得て、無量劫に於て、一一の世界に衆生を化度し、現在の佛の所に於て愛樂すべき巧妙の方便を得、愛樂すべき深妙の方便を得て、障礙する所無く。永く

【無淨】淨は煩惱の異名、即ち煩惱を増長せしめざる義にして無漏法又は阿羅漢を指すことあり。  
【金剛藏】八歳の一、佛所説の等覺の菩薩の修因證果の法を言ふ。

【善根を具すの如く】以下は第三に實修の向を明す

眞實を離れ、樂ふべき平等離欲を具足し、一切の諸法に諸の障礙を離れ。決定して深く不二の法界を解り、可樂の離欲離等の一切諸法を具足して、眞實際に入り。菩薩の樂ふべき無淨滿足の法を得、可樂の金剛藏心、一切種智を具足し。勇猛精進して清淨に成滿し、樂ふべき清淨の善根を具足し、怨敵を摧伏して障道の法を滅し、樂ふべき無上菩提を具足し、一切種智常に現在前して衆生に充滿せしめん。是の如く菩薩摩訶薩は善根を長養して、淨慧明を得、常に善知識の爲に攝護せられ、如來の慧日は明かに其心を照して諸闇を淨除し、正法を淨修して諸の智業に入り、善く智地を學して法界を分別し、一切の善根を善能く廻向し、一切の善業諸の善根海は其源處を盡し、智慧を成就して深く堅固に入り、時に善根を解りて諸魔に了達す。

菩薩摩訶薩は、善根を是の如く廻向して世界に著せず、衆生界に著せず、心に所依無く、寂然として亂れず、諸法を正念し、諸障の選擇無き智を具足し、三世一切の諸所の正廻向門に違はず、一切の平等正法に違はず、佛の相を壞せずして三世を證觀し、衆生の空なることを了りて、依住する所無し。如來の道に順じて普く諸法を照し、眞實の義を解りて深く諸障に著り、實の如く一切の諸法を分別して智慧圓滿し、具足堅固なり。未だ曾て正業を作習することを忘失せず、常に寂靜を樂ひ、正しく衆生に隨ひ、一切の法は皆斷し、幻化の如しと了り、一切の法は自體有ること無しと解し、一切の法、及び種種の行を觀して諸音道に於て而も所著無く、有ゆる諸法は皆終より起るとす。甚深の法を觀じ實智を生じ

て廻向し、寂滅を觀察して一切の諸法皆一觀に入りて、諸法の種種の異相に就はず、善く廻向を解し、菩薩の道を修して、善根を廻向し。衆生を攝取して、三世の菩薩の一切の廻向を長養す。是の如く菩薩摩訶薩は恐怖無き心を以て善根を一切の佛法に廻向し。無量の心を以て善根を一切の佛法に廻向して、皆悉く清淨ならしめ、我無く我所無き心を以て善根を十方界に廻向して染著する所無く。無餘の心を以て善根を一切の境界世界に廻向して染著する所無く。離世間の法を行じて善根を廻向して出世の法を得。衆生に著せしめて善根を廻向し。諸の勝道を見て善根を廻向し。虚妄の法を離れ眞實の善根を出生して廻向す。

【如の法門】以下第四に自在深廣の廻向を論く。此一句は總標にして、以下は其別釋たり即ち眞如の理體に契同する萬有諸法の普遍の善根を以て、任行無量の異門に廻向することを知るなり。

如の法門の一切の道に在る無量無邊の善根もて廻向す。如の如く善根も亦爾り、衆生をして諸法を解了せしめんと廻向し。性如の如く善根も亦爾り、一切法の自性は自性有ること無しと廻向し。相如の如く善根も亦爾り、一切の法は無相の眞實相なりと廻向し。法如の如く善根も亦爾り、佛法を退轉せざらんと廻向し。行如の如く善根も亦爾り、一切如来の所行に廻向し。境界如の如く善根も亦爾り、三世の諸佛の満足せる境界に廻向し。安立如の如く善根も亦爾り、一切の衆生を安立せんと廻向し。隨順如の如く善根も亦爾り、盡未來劫に隨順して斷ぜざらんと廻向し。量如の如く善根も亦爾り、衆生心は虚空と等しからんと廻向し。充滿如の如く善根も亦爾り、一念に一切の世界に滿てんと廻向し。久住如の如く善根も亦爾り、一切世間の住を離れて究竟住に住せんと廻向し。不生如の如く善根

て、自在深廣の廻向を成ずることを説けり。

【無根如】 無根眞如の意。眞如は寂靜無爲の法性なるを以て、其所依とすべきものなく、其根本と執すべきものなきが故に無根と言ふ。

【非世間行如】 眞如は世間の所行に非ず、世間超越の

も亦爾り、不生にして一切の佛法を満足せんと廻向し、堅固如の如く善根も亦爾り、一切の煩惱を壊滅せんと廻向し、不壞如の如く善根も亦爾り、一切の衆生は破壊すべからずと廻向し、明如の如く善根も亦爾り、普く一切を照さんと廻向し、一切處如の如く善根も亦爾り、一切處に至る道に廻向し、一切時如の如く善根も亦爾り、一切時に隨順せんと廻向し、一切如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして隨順清淨ならしめんと廻向し、一切平等如の如く善根も亦爾り、一切の行は平等ならんと廻向し、一切法眼如の如く善根も亦爾り、一切の衆生、悉く法眼を得んと廻向し、不覺如の如く善根も亦爾り、一切の菩薩道を行じて甚深無からんと廻向し、甚深如の如く善根も亦爾り、一切の第一深法に廻向し、無所有如の如く善根も亦爾り、一切所有無きをしらんと廻向し、不出如の如く善根も亦爾り、一切顯現する所無からんと廻向し、離覺如の如く善根も亦爾り、明眼は暗を離れて清淨ならんと廻向し、無比如の如く善根も亦爾り、菩薩の如比の行に廻向し、寂靜如の如く善根も亦爾り、一切常に寂靜を樂はんと廻向し、無量如の如く善根も亦爾り、無相の法を究止せんと廻向し、無量無邊如の如く善根も亦爾り、一切の無量無邊の衆生皆悉く清淨ならんと廻向し、無著如の如く善根も亦爾り、無所著の際を究竟せんと廻向し、無量如の如く善根も亦爾り、一切の眞如の如く善根も亦爾り、非世間行如の如く善根も亦爾り、一切世間の行法を遠離せんと廻向し、不繫如の如く善根も亦爾り、一切の生死に繫がれざらんと廻向し、無行如の如く善根も亦爾り、一切諸行を遠離せんと廻向し、住如の如

無爲なるを以て言ふ。

【不繫如】繫は繫縛にして煩惱なり。眞如は離繫無縛にして清淨の理體なるを以て煩惱の繫が故に言ふ。

【無行如】眞如は無爲無作にして法然の眞理なり。行のなきを以て無行と言ふ。

【住如】眞如法性は常住にして不變なるを言ふ。

【一切法同如】眞如は一切法に對在し、其體性を同じうするを以て同く言ふ。

【照如】眞如は一切諸法の歸趣にして、而も一切諸法を照顯するを以て言ふ。

く善根も亦爾り、一切如住に住せんと廻向し。一切法成如の如く善根も亦爾り、衆生の學ぶ所成就せんと廻向し。一切法平等如の如く善根も亦爾り、一切平等の行を具へんと廻向し。一切法不捨如の如く善根も亦爾り、未來際を盡して一切の衆生を捨てじと廻向し。一切法不盡如の如く善根も亦爾り、一切無盡の衆生に廻向し。不遠一切法如の如く善根も亦爾り、一切の衆生三世の諸佛に違はじと廻向し。攝一切法如の如く善根も亦爾り、一切衆生悉く善根も亦爾り、一切無盡の衆生に廻向し。一切法同如の如く善根も亦爾り、悉く三世の諸佛に同うせんと廻向し。一切法不離如の如く善根も亦爾り、悉く世間及び離世間を攝せんと廻向し。不可壞如の如く善根も亦爾り、一切衆生をして沮壞すべからざらしめんと廻向し。無患如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして一切の魔障も動かす能はざる所ならしめんと廻向し。不濁如の如く善根も亦爾り、一切の菩薩の行に垢濁有ること無けんと廻向し。不亂如の如く善根も亦爾り、一切衆生をして諸の障礙を離れしめんと廻向し。不可盡如の如く善根も亦爾り、一切世間の法は盡すこと能はざる所なりと廻向し。菩提如の如く善根も亦爾り、一切の諸法を覺悟せんと廻向し。不失如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして直心を失はざらしめんと廻向し。照如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして悉く大智の光明を以て普く一切を照さしめんと廻向し。不可說如の如く善根も亦爾り、一切の不可說の智に廻向し。持一切衆生如の如く善根も亦爾り、一切菩薩の行を持せんと廻向し。隨順一切語言如の如く善根も亦爾り、一切無言の智慧に廻向し。

【不有知】眞如  
 は一切處有に遍在  
 し、處として在ら  
 ざるなきを以て言  
 ふ(眞如の普普通性)  
 【夜如】眞如の時  
 間的無を言ふな  
 り。夜如乃至盡未  
 來如と云ふは、一  
 念より量功に至  
 る各時分は悉く法  
 義の理に依りて  
 轉じ、眞如を離  
 れざるものにあ  
 るを以て云ふ

【有無如】眞如は  
 一切有の法に遍  
 住する義

一切の諸法如の如く善根も亦爾り、一切の佛刹に不現し、及び諸の如來の最正覺を成じ、無量無邊の諸方自在を不現せんと廻向し、虚空妄如の如く善根も亦爾り、世間は悉く康安と爲れんと廻向し。一切身廻至如の如く善根も亦爾り、無量の身を一切の刹に遍せしめんと廻向し、行受生如の如く善根も亦爾り、無生の巧妙なる方便もて受生を示現せんと廻向し、無不有如の如く善根も亦爾り、三世一切の諸佛の自在神力、及び一切の如來身内に在りて現せんと廻向し、夜如の如く善根も亦爾り、一切の夜に佛事を施作して、無上の明を得んと廻向し、當如の如く善根も亦爾り、一切のもの書に在りて衆生は悉く善く轉じて、諸の如來の自在神力を見立てまつり、不退の法輪に住し、癡清淨ならしめんと廻向し、半月及び一月如の如く善根も亦爾り、一切の衆生一切時に住して、巧練の方便も一念の中に於て、悉く能く一切の時節を分別せんと廻向し。年歲如の如く善根も亦爾り、一切の諸劫を受持し、諸根を嚴淨し、諸儀に了達せんと廻向し。一切劫成敗如の如く善根も亦爾り、一切の劫淨くして無染に住し、一切の衆生清淨にして衆生を調伏せんと廻向し。善如の如く善根も亦爾り、一切の未來際を盡して、菩薩の清淨なる修行を修習し、悉く能く無量の大圓を満足せんと廻向し。世如の如く善根も亦爾り、一切の衆生一念の中に於て、一切の障を見立てまつり、乃至未だ嘗て一念にも遠離せじと廻向し。至一切處道如の如く善根も亦爾り、一切の衆生不壞の道を得て、三界を超出せんと廻向し。有無如の如く善根も亦爾り、一切の諸有清淨にして所有無しと知らんと廻向し。淨如の如く善根

も亦爾り、一切の菩薩の淨行は無上菩提の具を出生せんと廻向し、明淨如の如く善根も亦爾り、菩薩の一切の三昧、明淨の心を得んと廻向し、離垢如の如く善根も亦爾り、一切の垢を離れ淨心満足せんと廻向し、無畏所如の如く善根も亦爾り、我我所無き清淨の心を攝取して、十方一切の佛刹に充滿せんと廻向し、平等如の如く善根も亦爾り、無盡の一切智を得て永く癡愛を離れ、普く一切を照さんと廻向し、無數如の如く善根も亦爾り、一切智の乘方巧方便に住して、法雲普く一切の世界を覆はんと廻向し、平等住如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして菩薩の行を具して一切智に住せしめんと廻向し、分別一切衆生界如の如く善根も亦爾り、一切の善根現前して無礙智を滿せんと廻向し、一切衆生語言如の如く善根も亦爾り、一切諸の語言の法を解了せんと廻向し、不離一切衆生如の如く善根も亦爾り、一切の衆生を攝取して、善根を具足し、生死を遠離せんと廻向し、廣如の如く善根も亦爾り、三世の佛の説きたまふ所の法を受持して、菩薩の離礙の行を修習せんと廻向し、不休息如の如く善根も亦爾り、一切劫に菩薩の行を修して未だ曾て休息せず、衆生を摩訶衍に安處せしめんと廻向し、一切法第一如の如く善根も亦爾り、淨き法門を聞き、無礙の淨念もて一切の法を攝せんと廻向し、無量讚歎如の如く善根も亦爾り、無量の讚歎の智慧、菩薩の實行を得んと廻向し、離熾然如の如く善根も亦爾り、熾然を離れたる法は、衆生の熾然を滅除して清淨なることを得しめんと廻向し、不動如の如く善根も亦爾り、善根安住して動せず、普賢菩薩の願行を満足せんと廻向し、諸佛境界如の如く善

【非可修非不可修如】眞如は無爲無作なるを以て所得無く修行して得べきにあらざるも聖者の境界にして凡夫之を證せず、故に修すべからざる者にも非ざる義なり。

【過去非同未來】諸法を三世各の立脚地より眺め、其相關的立場より眞如の融會關係も眞如の一相に過ぎざるを以て斯く言ふ。  
【新新の菩提心】三世は相續し續絶

根も亦爾り、一切衆生の智慧の境界は皆悉く満足して、一切の煩惱の境界を除滅せんと廻向し。不可壞如の如く善根も亦爾り、善根は一切の障蔽も壞ること能はざる所に於て、悉く能く衆邪外道を離れんと廻向し。非可修非不可修如の如く善根も亦爾り、一切の修非修の虚妄を離れ、一切の虚妄を離れんと廻向し。不還の如く善根も亦爾り、當に一切の諸佛を見たてまつりて未だ會て中退せず、菩提を莊嚴する心を修習せんと廻向し。不著一切法如の如く善根も亦爾り、一切の衆生悉く著無く、一切の衆生をして普賢の行を行せしめんと廻向し。一切地如の如く善根も亦爾り、一切の善根をして悉く智慧の地に階級して、普賢の莊嚴を得しめんと廻向し。不可斷如の如く善根も亦爾り、一切の法の中に無畏無斷の一切の諸言を得て、圓滿し具足して能く廣く演說せんと廻向し。無漏如の如く善根も亦爾り、一切の衆生は皆無漏の善根の菩提の心を具足し、法智を體得して解了し分別せんと廻向し。無有量法無有量法如の如く善根も亦爾り、一切の諸法を覺悟して、一念の頃に於て皆悉く無量の法界に充滿せんと廻向し。過去非同未來非故現在非異如の如く善根も亦爾り、新新の菩提心を發起し、類くば生死を除滅して衆生を清淨にせんと廻向し。三世中不取虚妄如の如く善根も亦爾り、過去未來皆悉く清淨にして、現在の念に正覺を現成せんと廻向し。一切諸佛菩薩具足如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして佛智の大爾方便を具足せしめんと廻向し。常淨無染汚如の如く善根も亦爾り、一切の衆生をして悉く煩惱を除きて、一切種智を清淨に満足せしめんと廻向す。

せざるも、法は新  
にして舊法にあら  
ず故に念念に新な  
り。此故に菩提心  
も此見解より新新  
の菩提心と言ひ得  
るなり。  
【菩薩摩訶薩】以  
下、第三に廻向を  
成ずる所の徳を尊  
ぐ。

菩薩摩訶薩は是の如く廻向する時、一切の佛刹を等しうす、一切の世界を淨するが故に。一切の世間を等しうす、不可壞の清淨の法輪を轉ずるが故に。一切の菩薩を等しうす、一切の智願を出生するが故に。諸佛を等觀す、二有ること無きが故に。諸法を等觀す、自性を壞せざるが故に。三世を等觀す、巧方便智もて語言の道を解るが故に。一切の菩薩の行等し、種うる所の善根を悉く能く廻向するが故に。一切の時を知る、隨時に修習して佛事を捨てざるが故に。一切の業報平等なり、世間に瞞せず、離世の善根を出生するが故に。神力自在なること諸佛と等し、世間に隨順して等しく佛事を現するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の第八の如相廻向と名く。

菩薩摩訶薩は此廻向に安住すれば、無量無邊の清淨の法門を得、人中の雄と爲りて畏るる所無く、大師子吼し、無量無數の菩薩を成就し、一切時に於て未だ曾て休息せず。佛の無量無邊の満足身を得て、一身一切の世界に充滿し、佛の無量無邊の満足音聲を得、一音聲を發して一切の衆生聞かざる者無く。佛の無量無邊の満足力を得て、一毛道に於て一切の世界を安置し、佛の無量無邊の満足せる勝れたる衆生法を得て、一切に示現し、佛の無量無邊の満足せる自在神力を得て、一切の衆生を一微塵に置き、一切の佛の無量無邊の満足せる解脱を得て、一りの衆生の身中に於て一切の佛刹を現じ、一切の如來最正覺を成じ。一切の佛の無量無數の満足せる三昧正受を得て、善方便の力もて、一三昧の中に於て悉く能く一切の三昧を生じ、一切の佛の無量無邊の満足せる辯才を得て、一句の

【菩薩の心安住し】  
以下の重類は總て  
廿九偈より成り、  
初二偈は行體、次  
四偈は衆生及び善  
提廻向、次二偈は  
實際廻向、次の十  
六偈は圓滿無礙  
在の廻向、最後五  
偈を以て所成の果  
徳を重頌す。

法を説くに、未來劫を盡すも而も窮盡せずして、悉く一切衆生の疑議を除き。一切の佛の無量無邊の満足せる勝衆生法を得て、一切の衆生に薩婆若十力の等覺を示現す。佛子、是を菩薩摩訶薩、一切の善根を以て如相に隨順して廻向すと爲す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承けて普く十方を觀じ、佛を以て頌して曰はく、

菩薩の心安住し、疑を離れて常に正念し

忍辱にして惱害を離れ、無量の徳を修集す

其心離恨無く、正直にして常に清淨

諸業は世を莊嚴し、悉く能く分別す

菩薩の思惟の業は、種種にして量有ること無し

若し衆生を益する業なれば、修習して常に履行す

善能く世間に順じ、普く一切を喜ばしめ

衆生の業に隨應して、菩薩は分別して行ず

永く諸の悲癡を離れ、法を知り亦義を知り

調御地に安住して、一切の業を饒益す

諸の善法を覺悟するに、無量にして數ふべからず

悉く能く分別して知り、廻向して衆生を益す

此深方便を以て、諸地の智を具足し

衆の煩惱を滅除して、如の如く善を廻向す  
普く一切の趣を攝して、如實の法に安住し  
是の如き業を廻向して、悉く所著無からしむ  
深く生處の道を樂ひ、眞如の法を修習するに  
無性にして所有無く、明徳の者廻向す  
日夜及び半月、一月、年、數劫は  
一切皆悉く如なり、功德も亦是の如し  
世及び諸刹と、衆生と一切法と  
趣と非趣との如きを如實に廻向して、悉く餘すこと無し  
如性の如實の如く、是の如きの性を思惟し  
諸の功德を廻向して、悉く皆眞如に願す  
如の性の如く是の如く、諸法は所有無し  
如の自性を離るるが如く、智者は業を廻向す  
諸相の如實なるが如く、諸生も亦是の如し  
如の自性は實なるが如く、諸業も亦是の如し  
如に量有ること無きが如く、一切の業も是の如し  
縛も無く亦解も無く、諸業は悉く清淨なり

是の如く眞の佛子は、安住して動ずべからず  
智慧力を成就して、佛の方便藏に入る

法王の法を覺悟するに、縛も無く亦苦も無く

無礙にして轉心無く、亦復所轉も無し

法身所攝の業は、衆生の相に隨順して

深く眞實の相に入り、相も亦是れ相に非ず

是の如く不思議にして、思議すとも盡すべからず

深く不思議に入りて、思も非思も寂滅す

是の如く法を思惟して、一切の業を分別し

諸の煩惱を除滅す、是を功德の王と名く

菩薩の一切の報は、無盡智の印する所

法は無盡の性にして、無盡の方便滅す

心は内外に在らず、心亦所有無し

妄取するが故に法有り、取せざれば則ち寂滅なり

佛子は是の如く知れば、法は空にして自性無く

諸法に自性無ければ、最勝は無我を覺る

如の衆生に等しきが如く、法性を覺るも是の如し

【世間は業報】有情世間は各自の業の所感、器世間は共業前感と言ふ。其業とは共同の如き意。

【佛子云云】以下第九の無縛無著解脱心廻向を明す。章なり。初二十門は能廻の行體、次八十門の中初六十門は廣大廻向即ち衆生、菩提への廻向、次二十は甚深廻向（實際）を明す。

金剛轉菩薩十廻向品第二十一之七

彼不思議を見れば、無相の智惑はず。是の如く深く修習して、一向に菩提を求むれば願ふ所退轉せず、衆生を饒益せんが故なり。

菩薩は此身を捨てて、死の虚妄の相無く心は化の如しと解了して、一切の衆を調伏す。彼を觀じて正念に願すれば、世間は業報より起る。

菩薩は悉く救護して、三界に餘り有ること無し。衆の想行を了知するに、皆悉く是れ虚妄なり。菩薩は非實なりと知りて、亦法性を壞せず。彼是の如く、智慧の妙善根を廻向し。

一切の衆を憐愍して、深方便に入らしむ。

「佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第九の無縛無著解脱心廻向と爲す。此菩薩摩訶薩は、一切の善根に於て輕心を生ぜず。生死を出づることを輕んぜざる心、善根を攝すること、輕んぜざる心、專ら一切の善根を求むることを輕んぜざる心、悔過を輕んぜざる心、善根に隨喜することを輕んぜざる心、他方の佛を禮すること、恭敬合掌の業を輕んぜざる心、塔廟を禮拜し、尊重する業を輕んぜざる心、他方の諸佛を勸請して法輪を轉ずる業を輕んぜざる心なり。菩薩摩訶薩は常に樂うて彼諸の善根を攝受し、堅固にして彼

六〇一

善根を壞せず、彼善根に安住し、彼善根を思惟し、彼善根を長養し、彼善根に著せず、正直の心を具へて彼善根を具し、彼善根を選択せず、彼諸佛の境界の善根に隨順し、彼善根の自在力を得ることを見る。

菩薩摩訶薩は、無縛無著の解脫の心を以て、彼善根を徇向し、普賢の身口意業を具足す。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の頂猛精進を修習す。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の無礙の音聲陀羅尼門を具足して、十方に充滿し。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の一切の佛を見たてまつることを得る。一切の陀羅尼を具足し。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の妙音陀羅尼を具足して、一切の音聲を分別し、悉く無く無量の法を演說し。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の一切劫の行を持する陀羅尼を得て、一切の世界に於て諸の菩薩行を具足し修習す。無縛無著の解脫の心を以て、一塵生身に於て、未來劫を盡して普賢菩薩の一切の自在神力を示現し、一塵生身の如く、一切の眾生身亦復是の如し。無縛無著の解脫の心を以て、悉く普賢の自在神力を得て、現在一切の諸佛菩薩の華中に示現して、普賢の行を修し。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の一法門を得て、無量無數劫に於て、諸佛の無量の自在を示現して、悉く能く一切の眾生を度脱し。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の自在を得、念念の中に於て無量の眾生をして十方に安住せしめ、心に厭足無く。無縛無著の解脫の心を以て、普賢菩薩の

【菩薩摩訶薩】以下、普賢菩薩の廣大の三業を明す。

自在を得、一切の衆生身中に於て、皆悉く諸佛の自在を見ることを得て、普賢の行を修す。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の自在を得、一言の中に於て悉く能く一切衆生の音聲語言を分別し、一切の衆生を調伏して、薩婆若地に安住せしむ。無縛無著の解脫の心を以て、普賢の自在を得、一衆生身の中に於て悉く能く一切の衆生を容受し、彼悉く自ら佛身を違得すと謂へり。無縛無著の解脫の心を以て普賢の自在を得、一華の中に於て一切の微淨せる世界をして皆悉く安住せしむ。

菩薩摩訶薩、復是念を作さく、「此無縛無著の解脫心の善根を以て、普賢の微妙なる音聲を出生して法界に充滿し、十方の佛刹は其所應に隨ひて皆悉く聞くことを得。此普賢の無縛無著の解脫心の善根を以て、普賢の如く念念の中に於て、過去際を盡して無量無邊の世界の諸佛を見たてまつり、所説の法を聞きて、受持して忘れず、佛家を莊嚴す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、普賢の如く未來劫を盡して、一切の世界の中に於て諸法を演説し、皆悉く究竟す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の世界に於て最正覺を成じて、世に出興す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、能く一光を以て普く虚空に等しき一切の世界を照し、普賢菩薩の所行を修習す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、無量無邊の智慧を得、皆能く諸地の神通に隨順して、普賢菩薩の所行を成就す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く如來の智慧を究竟することを得、一切劫に於て如來智を説き、諸劫は悉く盡くるとも、而も智は窮盡すること無く、普賢菩薩の所行を具足す。此無縛

無著の解脫心の善根を以て法界に等しき一切の如來、菩薩の所行に於て、悉く能く身口意の業を修習して、而も懈怠無きこと猶も普賢の如し。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の佛の無上菩提を得て、善身法身に違はず、解脫淨地にして壞すべからず、樂說辯才無盡の藏は一切の衆生を調伏して普賢の願を具ふ。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の法門に入りて、普く無量不可思議の世界を照し、一切の法門に於て其源底を盡し、普く眞言國の所行を修習し、究竟の薩婆若地を達得す。

【此無縛無著云々】上來は普賢の相を明せるを以て、以下三十五門は具果徳を説きり、就中初十門は攝法廣大の果徳、次十五門は攝法自在の徳、最後十門は微細智の徳を明す。

此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の境界の中に於て、悉く一切種智を以て一切種智を分別し了知して、猶窮盡すること無く、普賢の莊嚴せる彼岸を究竟し、菩薩の行を修し、方便大王を具足し成就す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、此生より未來際の生を盡して、普賢菩薩の所行、及び一切種智の莊嚴の法王を具足す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、無礙の法明を得て普く一切諸の菩薩の行を照し、常に正業を修して、普賢の自在方便を具足す。無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く無量の方便、不可思議の方便、菩薩の方便、一切智の方便、別代菩薩の方便、無量の法輪を轉する方便、不可説不可説時の方便、種種の說法の方便、分際無き無畏の方便、一切の法を説く無餘の方便を得、是の如き等の一切の隨順方便を得て、普賢菩薩の所行を修習す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、身業を具足し、一切の衆生をして皆悉く歡喜し、菩薩の不退の清淨の善根を得て、究竟じて普賢の諸業に安住せしむ。此無縛無著の解脫心の善根を以て、清淨の智

を得て、悉く能く衆生の語言を分別し、一切の口業を清淨に莊嚴し、音辭微妙にして言の能く及ぶ無く、普賢の所行を修習し受持す。此無縛無著の解脫心の善根を得て、悉く能く一切の佛刹、一切の衆生、一切の諸法、一切の莊嚴を分別し、其心清淨にして一切如来の法蔵を出生し、一切智を究竟じて善能く普賢の所行に隨順す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、清淨の直心一切の佛の無礙の法身を得て、解脫を具足して如来の法を修し、佛の功徳を攝して佛の境界に住し、大智普く照し、菩薩の清淨の行を修習し、方便に隨順して、悉く能く一切の法蔵を分別し、無量なる大乘の自在を出生して、悉く能く無量無邊の一切の衆生に無上の大道を示現し、普賢の行願を具足して廻向す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、明刹の根、善く調伏する根、一切の法に於て自在なる根、窮盡無き根、一切の諸善を修習する根、一切の佛の境界に住する平等根、一切の菩薩に不退轉の記を授くる大精進の根、一切の佛法を分別する金剛界の根、一切如来の智慧の光照金剛の根、一切の諸根を分別する自在の根力、一切の衆生をして一切智に安住せしむる根、無量の根、一切を満足する根、無礙清淨の根、平等に諸願を修習する根を得。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の菩薩の神力、無量の身を住持する神力、無量の智慧境界の神力、一處を離れずして悉く能く一切の佛刹に示現する神力、菩薩の無礙にして制持すべからざる自在神力、一切の佛刹を示現し攝取して一處に安置する自在神力、一身の一切の佛刹に充滿する自在神力、菩薩の無礙解脫の自在神力、少方便もて一念自在の神力、所

有無きに依る自在の神力、一毛を以て悉く無量の世界を縛し、悉く打して法界に等しき佛刹に遊行し、衆生に承取して究竟の妙智慧門を得しむる自在神力を得て、普賢菩薩の所行を修習す。

【無生の心】無生無滅の義。再び迷界の生を受けざる生即ち涅槃なり。涅槃は寂靜にして真如たり。故に眞如の心即ち覺心を言ふ。

此無縛無著の解脫心の善根を得て、一念の頃に於て悉く能く無量の佛刹に往詣し、一身の中に於て悉く能く無量の佛刹を容受し、甚深微妙の智地を逮得して、普能く諸佛の世界を分別し、無生の心を得て悉く普賢菩薩の法門に入り、菩薩の行を生ず。此無縛無著の解脫心の善根を得て、知來の家に生れて菩薩の行を修し、無量無數なる不可思議の法を具足し、無量の大圓は皆悉く圓滿し、一切の法界及び三世の法界を分別して憍怠無く普賢菩薩の諸行に隨順して智慧を究竟す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一毛道に於て、無量無數の佛刹を分別し、悉く能く一切の法界を包容して空界を究竟じ、一毛道の如く一切の法界、虚空界に等しき一切の毛道も、亦復是の如く、普賢菩薩の清淨の法門を以て、智慧の眼を開く。此無縛無著の解脫心の善根を以て、能く無量無數の阿僧祇劫を以て、以て一念と爲し、能く一切衆生の諸念を以て、以て一念と爲し、此諸の方便は皆普賢菩薩の深心究竟に由る。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一身の内に於て悉く能く無量の諸身を容受し、一身の如く一切身も亦復是の如くして、普賢菩薩の趣向を具足す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く一切諸佛の境界に入り、常に諸佛の虚空界に等しき清淨の法身を見たてまつり、相好莊嚴し、神力自在に、梵音微妙にして、具足して廣

【見例】五見（身見見、取見、見取見、或取見）の惡見と四倒（常樂、我、淨の顛倒せる思想とを言ふ。

く無礙の正法を説き、彼佛の法を聞き、彼佛の法を聞き、彼佛身に於て所有無しと了り、悉く普賢菩薩の無量の大願を得て、永く衆生の心想見解を離る。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切の世界に入り、翻覆世界に入り、伏世界に入り、一念の中に於て悉く能く遍く十方世界の一切の佛刹に入り、因那羅網の世界を分別し、一切平等の法界を分別し、雜世界をして悉く一形と爲さしめ、無量の種種の世界は無量の方便もて、深法界に入り、皆虚空の如くして而も亦世界の性を壞せず、普賢の行を修し菩薩の地に住す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く能く一切の諸想を分別す、衆生の想、法の想、佛刹の想、方想、佛想、世想、業想、行想、解脫の想、根想、時想、受持の想、煩惱の想、清淨の想、成熟の想、諸佛を見たてまつる想、法を聞き解する想、調伏の想、種種の方便出生の想、種種の地想、菩薩に入るの想、菩薩の功德を修習する想、菩薩の三昧正受の想、菩薩の三昧起の想、菩薩の境界想、劫の成壞の想、明想、闇想、晝想、夜想、半月一月、年歳、時變の想、去想、來想、坐想、立想、覺想、睡想、是の如き等の一切の諸想を、一念の中に於て悉く能く了知し、心慮安無くして悉く諸想を離れ、心所著無くして障礙を遠離し、一切如来の智慧充滿し、一切の佛法は善根を具養し、一切の佛身を以て、以て其身に熏し、常に諸佛の爲に攝取せられ、白淨の法に於て未だ曾て退失せず、普能く等正覺の法を修學して彼岸を究竟し、諸佛普賢の所行を修行して諸願を具足し、如来の記を受けて、一念の中に於て方便地に入ることを得て、究竟の智満足し安

住す。此無縛無苦の解脫心の善根を以て、一一の心を以て無量の心を觀じ、諸の虛妄を離れて所依無く、心一ならざるが故に、所行各異りて、業相同じからず、一切の衆生をして勇猛精進して普賢の智慧の寶を生ぜしむること猶し普賢の如し。此無縛無苦の解脫心の善根を以て、一處に於て悉く能く無量の諸處を分別し、一處の如く一切處も亦復是の如くして、悉く決定して知り、普賢の大願智寶を滿足す。

大方廣佛華嚴經

卷第二十一

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之八

此無縛無著的解脫心の善根を以て、一業に於て無量の諸業と、種種の緣造とを分別して知り、一業の如く一切の諸業も亦復是の如くして、普賢菩薩の行業智地を修習す。此無縛無著的解脫心の善根を以て、一法の中に於て悉く一切の諸法を分別して知り、一切法の中に於て亦一法を知り、諸法を分別して違せず著せず。此無縛無著的解脫心の善根を以て一語の中に於て悉く分別して無量の言音は猶し呼響の如しと知り、一語の中の如く一切の語言も亦復是の如くして、彼言音に於て依著する所無く、菩薩の行に住し、智慧成就して普賢の無礙の淨耳を速得す。此無縛無著的解脫心の善根を以て、一の法の中に於て、悉く能く不可説不可説の諸法を演説し、善根を長養して思議すべからず、時に應じて法を説き、一切時に解脫し、決定して衆生の諸根を了知し、其所應に隨ひて佛の音聲を聞き佛の一妙音は無量の衆を悦ばし、一如來の所の菩薩の大衆は法界に充滿し、究竟して一切の諸行を了知し、普賢の地に住し、念念の中に於て、説の如く法に入りて、不可説の妙智



【一生補處】一生を過ぎて、佛處を補ふ等覺の菩薩の位を言ふ。若し應身佛の跡處は、前佛の滅後に其跡を續ぎて或佛する菩薩即ち釋迦の後の彌勒菩薩の如し。彌勒菩薩の場合等は根身佛の場合の覺の菩薩の四種の變易生死中の最後、無有生死位なり。

微細、菩薩の淨眼の微細、菩薩の具足する深心の微細、菩薩の往詣する諸の如來大衆の微細、菩薩の諸の陀羅尼智門の微細、菩薩の無量無邊の無所畏地、一切の諸の辯才、方便演說の微細、菩薩の無量無邊の三昧相の微細、菩薩の一切の佛を見たてまつる三昧の微細、菩薩の莊嚴三昧の微細、菩薩の法界三昧の智慧微細、菩薩の自在三昧の智慧微細、菩薩の三昧の智慧微細、菩薩の受持する盡未來際の三昧の智慧微細、菩薩の勝妙の智慧もて一切を分別する菩薩の三昧の微細、菩薩の無量無邊の一切菩薩の三昧を出生して分別了知する微細、菩薩の三昧智慧を出生して、一切諸の如來の所に往詣する微細、一切の菩薩の廣大なる甚深無礙の三昧を修習し一切種智を究竟して方便地、一切通地、分別實義地、菩薩の饑饉の智を得、普賢の無量の諸行を修習する微細なり。此無轉無著の解脫心の善根を以て、一念の中に於て悉く菩薩の一切住の微細を知り、悉く菩薩地の微細を知り、菩薩の種種の行の微細、菩薩の出生する廻向の微細、菩薩の一切諸佛の藏を得る微細、菩薩の分別智慧の微細、菩薩の大願神力自在の微細、演說菩薩三昧の微細、菩薩の神力方便の微細、菩薩の印の微細、菩薩の一生補處の微細、菩薩兜率天に生ずる微細、菩薩の天宮に處する微細、菩薩の他稱を嚴淨する微細、菩薩の人中を觀察する微細、菩薩の大光明を放つ微細、菩薩の家法に了達する微細、菩薩の眷屬法の微細、菩薩の一切世界受生の法微細、菩薩の一身に一切身の命終を示す微細、菩薩身の母胎に入る微細、菩薩の母胎に處する微細、菩薩胎中に在りて法界に等しき大衆を顯現する自在神力の微細、菩薩

の母胎に在りて一切の佛を顯現する自在の微細、菩薩の生法の微細、菩薩の遊行七步無畏  
 智の微細、菩薩の正智に現在する方便法の微細、菩薩の出家求道して諸根を調伏し、法を  
 修する微細、菩薩の菩提樹下の道場に坐する法の微細、菩薩の魔を降して最正覺を成ずる  
 法の微細、如來の道場に觀坐して光明眼を放つ微細、普く十方一切の世界を照す微細、  
 如來の無量無邊の自在神力を顯現する微細、如來の獅子吼大嚴涅槃の微細、如來の一切衆  
 生を教化して未だ曾て失ふこと有らざる微細、如來の金剛菩提心を知る微細、如來の一切  
 世界を任持することを顯現する微細、一切の世界に於て盡未來劫に佛事を施作して休息無  
 き微細、究竟じて一切の法界を受持する微細、虛空界に等しき一切の世界に衆生を化せん  
 が爲の故に普く佛身を現して世に出興する微細、一如來の身無量の身を現する微細、去來  
 現在の一切の諸佛の智慧眷屬の微細をしる。是の如き一切の功德の微細を、我當に悉  
 く知り、具足し究竟じて彼岸に到ることを得、清淨に一切の衆生に示現して、念念の中  
 に於て智慧圓滿し、不退轉を得て普賢の行を修し、普賢の廻向の功德の地を具足し、一切  
 の如來菩薩の所行を受持し、菩薩の如く智慧門を離れず、一切の方便は皆悉く清淨  
 にして普く普く一切の衆生を安隱にし、菩薩の行を修し、菩薩の諸地の功德を具足して、  
 金剛幢廻向の門を得、無量の法界の如くの功德藏を出し、常に諸佛の行に念念とられ、  
 諸の菩薩の深淨の法門に入り、一切の微妙の法義を演說して違失する所無く、悉く能  
 く一切の衆生を慈愍し、念念の中に於て究竟して思議、不思議地の如くの功德藏を了知し

不思議に於て思議を出し、諸の法門を示し、語言の道を離れて智慧地を得、一切の菩薩皆悉く同等にして、未來際を盡して菩薩の行を修し、未だ曾て休息せず、普賢の行を具へて、世間の一切の妄想、及び語言の道を遠離し、大願自在を具足し受持して、菩薩の行を修して未だ曾て斷絶せざらん。此無縛無著の解脫心の善根を以て、一切衆生の性に入る智の微細、衆生の性を分別する智の微細、衆生の性を具足し演說する智の微細、衆生の性に染著する智の微細、衆生の不動性の智の微細、衆生の動性の智の微細、無量無邊の種種の衆生性智の微細、不可思議なる衆生の種種の行性智の微細、衆生の無量煩惱性の智の微細、衆生の無量なる清淨性の智の微細、是の如き等の一切衆生の性境界の智微細を、一念の中に於て如實に了知し、一切の衆生を調伏し安隱にして、應の如く說法して時を失はず、常に法輪を轉じて衆生を攝取し、諸の法門を説き、菩薩の道を修して智慧具足し、化身無量にして衆生を安隱にし、悉く歡喜せしめ、慧日普く照し、深く菩提心に入りて、菩薩の自在智を得、菩薩の智慧境を覺悟し、安住して大乘の智を修習し、普賢の行を究竟す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く能く虚空法界に等しき一切の世界を分別する智の微細、小世界智の微細、中世界智の微細、不淨世界智の微細、清淨世界智の微細、無比世界智の微細、雜世界智の微細、廣世界智の微細、狹世界智の微細、無礙莊嚴世界智の微細、一切の世界に諸佛出世し示現する一切智の微細、演說一切世界智の微細、一身一切の世界に充滿する智の微細、無量の光を放ちて普く一切の世界を照す智の微

細、一切の世界の一切の諸佛自在神力を顯現する智の微細、一切の諸菩薩普く十方一切  
 の世界に聞ゆる智の微細、一切の世界に現在する諸佛の大衆に圍遶せらるる智の微細、一  
 切の法界一佛刹と作る智の微細、一佛刹一切の佛刹と作る智の微細、一切世界の如來智の  
 微細、一切世界の如電智の微細、是の如き等の一切世界の智の微細を、悉く分別して知  
 り、究竟して菩薩の諸行は皆悉く幻の如しと了達し、普賢菩薩の行自在の智を究竟し  
 て、普賢菩薩の明觀を得、一切菩薩の行を行じて休息すること無く、悉く顛倒を離れ  
 て一切の佛及び佛の自在を見たまつて、無礙の身を得て智に所依無く、諸の善根の所  
 に染著する所無く、心の所行には悉く所有無く、諸方の堅固の窟を捨離して、菩薩の所  
 行の相を嚴淨し、而も未だ曾て一切智の窟を取らず、衆生に著せざる三昧もて智慧を莊嚴  
 し、一切の法界に隨順し、一切の世界に於て菩薩の行を修す。此無縛無著の解脫心の善根  
 を以て、深く無量の法界に入る智の微細、一切の法界を演說する智の微細、廣き法界に度  
 る智の微細、不可思議の法界を分別する智の微細、一切の法界を分別する智の微細、一念  
 の中に於て一切の法界に充滿する智の微細、一切の法界を等觀する智の微細、一切の法界  
 の境界は所有無く智の微細、一切の法界を觀察する無礙智の微細、一切の法界を前る行生  
 智の微細、身に一切の法界を攝つ自在智の微細、是の如き等の一切の法界智の微細を皆悉  
 く究竟して、普賢の行を成じ、智慧を受得して法の自在を得、衆生を攝伏せしめ、護身を  
 捨てず、法身を見ず、無礙平等の智を出生して無礙の行を得、諸法に著せず、一切の有

を離れて眞實にして染無く、世間に隨順して語言の法を行じ、常に寂靜を樂ひ、實義を捨てず、智慧清淨にして虚妄を滅除し、一切の所有は悉く堅固に非ず、無量の一切の法界を覺悟するに、一切の世間は平等にして不二なり、一切の諸法も亦復不二にして依止する所無く、普賢菩薩の行門に入ることを得て、平等の智慧を究竟に成就す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、悉く能く一切の諸劫を分別する智の微細、無量劫は即ち是れ一念の智の微細、一念は即ち無量劫の智の微細、阿僧祇劫は即ち是れ一劫の智の微細、一劫は即ち是れ阿僧祇劫の智の微細、長劫は即ち是れ短劫の智の微細、短劫は即ち是れ長劫の智の微細、有佛の劫無佛の劫に入る智の微細、一切の劫を數知して餘り無き智の微細、一切劫非劫を説く智の微細、一念の中に過去未來現在際の一切の諸劫を覺りて餘り無き智の微細、是の如き等の一切の諸劫を、一念の中に如來智を以て知り、一切の菩薩の行、圓滿なる正心を得て、普賢菩薩の究竟の行心を得、一切の虚妄を離れたる心を得、大願を退せざる心を得、無量無邊の世界の微細の中に示現して一切の如來遍く充滿する心を得、諸佛の善根と菩薩の行とを聞持する心を得、一切の衆生に大無畏を與ふる心を得、一切の劫の中に諸佛の世に出興することを示現する心を得、一一の世界の中に、未來を盡して以て菩薩の道を行じ休息無き心を得、一切の世界の中に如來の身業、菩薩の心に充滿する心を行す。此無縛無著の解脫心の善根を以て、無量の甚深の法を知る智の微細、勝法の智の微細、雜法の智の微細、莊嚴法の智の微細、廣く一切の諸法を説く智の微細、一切の法は即ち是れ

一法の智の微細、一法は即ち是れ一切法の智の微細、一切法悉く非法に入る智の微細、  
 解法一切法に入るも亦法に違はざる智の微細、一切の佛法の方便に入りて修習すること無き  
 智の微細、是の如きの一切諸の微細法を無量の智を以て悉く能く了知し、一切行一行  
 に同するの心を得、無量無邊の法界を究竟する心を得、無量の佛法を修習する心を得、決  
 定して事の無礙の行に安住し、一切智を以て諸根に充滿し、一切の微細智と、正念の方便  
 とは皆悉く現前して、諸佛の廣大なる功德を成就し、世界に充滿して普く衆生に遇じ、一切の佛の廣  
 大身に入り、一切の菩薩の身重を示現し、如音聲を出して普く衆生に遇じ、一切の佛の廣  
 大に威神力の智慧慧眼を得、無量の分別方便と一切の微細智とを生じ、音聲の行を修して  
 不退轉の智を得、此の菩薩摩訶薩の修習の方便の音聲を以て出生する一切の佛の無量智の微細、  
 出生する一切衆生の諸道智慧の無餘智の微細、出生する諸法の業常の無餘智の微細、  
 出生する一切衆生心の無餘智の微細、出生する諸時の諸法の無餘智の微細、出生す  
 る分別一切法界の無餘智の微細、出生する虚空界に等しき三世の智慧の無餘智の微細、  
 出生する一切諸言道の法の無餘智の微細、出生する一切世間の諸法の無餘智の微細、  
 出生する無世間の行法の無餘智の微細を知る。是の如き等の一切の出生智の微細、一  
 切の如來道、一切の菩薩道、一切の衆生道の出生智の微細して、菩薩の行を修し、普賢  
 の行に安住し、義に隨ひ、味に隨ひて普賢の如く知るに、夢の如く、覺の如く、幻の  
 如く、響の如く、化の如く寂滅にして、一切の法界は眞實有ること無く、業著する所無く

【法及び解法の者を  
妄取せず】以上  
百門を以て菩薩の  
實際廻向を竟れ  
り。就中最後の二  
十門は甚深廻向を  
明せり。  
【是の如く菩薩】  
以下、餘の九百門  
を類顯して、總じ  
て千門の大廻向を  
成ずることを明す

諸佛の平等智慧を出生し、皆悉く究竟して普賢の行を修し、微細智を出生す。

菩薩摩訶薩は、此の如き無縛無著の解脫心の善根を以て、皆悉く廻向して、世間及び世間の法を妄取せず。菩提及び菩薩を妄取せず。菩薩の行、及び出生死の道を妄取せず。一切の佛及び佛法を妄取せず。調伏、不調伏の衆生を妄取せず。善根及び廻向を妄取せず。自己及び他人を妄取せず。施物及び受者を妄取せず。菩薩の行及び菩提を妄取せず。

法及び解法の者を妄取せず。

是の如く菩薩摩訶薩は無縛無著の解脫心の善根を以て廻向す。無縛無著の解脫の身、無縛無著の解脫の口、無縛無著の解脫の業、無縛無著の解脫の報、無縛無著の解脫の世間、無縛無著の解脫の佛刹、無縛無著の解脫の衆生、無縛無著の解脫の法、無縛無著の解脫の智なり。

菩薩摩訶薩は是の如く廻向する時、即ち三世の諸佛一切の菩薩の廻向と同等にして、三世の諸佛一切の菩薩の廻向を成就し安住し、三世の諸佛菩薩の廻向に於て不退轉を得、過去一切の佛の教に隨順し、未來の一切の佛の教を具足し、現在の一切の佛の教を得、過去諸佛の平等の正法を満足し、未來の諸佛の平等の正法を成じ、現在の諸佛の平等の正法に廻向し、與に過去の一切の佛の境界を行じ、未來の一切の佛の境界に住し、現在の一切の佛の境界に等しく、三世の諸佛の善根と異なること無く、三世諸佛の所住に住し、三世の諸佛と同一の境界にして、三世の諸佛に違はず。佛子、是を菩薩摩訶薩の第九の無縛無

縛無著の解脫の身、無縛無著の解脫の口、無縛無著の解脫の業、無縛無著の解脫の報、無縛無著の解脫の世間、無縛無著の解脫の佛刹、無縛無著の解脫の衆生、無縛無著の解脫の法、無縛無著の解脫の智なり。

著の解脫心の善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩は此廻向に安住して、一切の善根を廻向すれば、一切の金剛山を壞すること能はざる所、一切の衆生に於て第一殊勝にして、一切の衆魔邪業も壞すること能はざる所にして、悉く能く衆魔邪業を摧滅し、普く一切の世界に見じて菩薩の行を行じ、善方便を以て廣く衆生の爲に諸佛の法を説き、愚癡を捨離して一切の佛法智慧に隨順す。菩薩摩訶薩は所生の處に隨ひて行住坐臥、一切常に不壞の眷屬を得、清淨の念を得、悉く能く三世の一切諸の如來の法を聞持して、盡未來際の際に、菩薩の行を行じて、未だ曾て休息せず、而も染著無く、普賢の行を得て諸願満足し、一智を得て佛事を施作し、悉く諸佛菩薩の無量の自在を得。

【菩薩は未だ曾て云云】以下重頌なり總じて五十一偈より成り、初四十四偈は行體、次の四十四偈は廣大廻向、最後の四偈は所成の果徳を頌説す。

爾時、金剛轉菩薩、佛の神力を承けて、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、菩薩は未だ曾て慢心有らず、一切諸法に比無き尊なり。本修せし所の功徳の業に隨ひて、亦復輕慢の心を起さず。修する所の一切の功徳は、自己及び他人の爲にせず。純著無き解脫の心を以て、廻向して一切の衆を饒益す。永く一切の自の高顯を離れ、亦復憍慢の心を棄捨し。最勝の所に於て事業を起し、説法を勸請して種種に行ず。作す所の無量なる而も功徳は、一切衆生の類を饒益し。

【逆順に三世】過  
現未を順の三世、  
未現過を逆の三世  
と云ふ。三世觀察  
の基準を異にして  
考察せるなり。

無著の解脫心に安住して、一切諸の如來に廻向す  
世間の無量なる群生の類と、種種の方便と諸の技術と  
勝妙にして甚深なる微細の事とを、悉く能く具足し分別して知る  
世間の有ゆる種種の身は、斯れ身業に由りて得る所  
無量の生死の行を覺悟して、不退の智慧門を逮得す  
十方一切の無量の刹と、微細勝妙の伏世界とを  
菩薩は深く智慧門に入りて、一毛孔に於て悉く了知す  
一切衆生の無量の心を、明者了知するに即ち一心なり  
菩薩は智慧門を覺悟して、諸業を増長する行を捨てず  
一切衆生の種種の根は、上中下品各同じからず  
有ゆる甚深の諸の功德を、菩薩は性に隨ひて悉く了知す  
一切衆生の種種業と、上中下品の差別の相とを  
菩薩は深く如來力に入りて、悉く能く具足し分別して知る  
不可思議の無量劫も、悉く能く了知するに即ち一念なり  
一切十方の所行の業を、菩薩は覺悟して清淨に知る  
悉く能く逆順に三世を知り、其相を分別するに各同じからず  
而も亦平等の相に違はず、是れ即ち離癡の菩薩行なり

【愛慢諸結】愛も慢も結も共に煩惱の别名なり。  
 【無相の觀】初地以上の菩薩が無漏（前註）心を以て修する觀（見解又は思想）にして、萬法皆空の實相なり。

【三有】三界のこと。欲界、色界、無色界。

一切衆生の無量の行は、愛慢諸結各同じからず  
 菩薩は別相を分別して知り、亦復無相の觀を捨てず  
 十方世界の諸の如來は、具足して大自在を示現し  
 見聞く得難く思議し難きも、菩薩は悉く能く分別して知る  
 兜率陀天の大導師は、無比最勝の人師子  
 功德甚深にして廣くして清淨なり、一切實の如く其性を見る  
 降神して母胎に處することを示現し、無量の自在大神變もて  
 成佛し涅槃し法輪を轉ず、一切の世間は能く轉ずる莫し  
 人中の師子飼生の時、一切の諸の勝れたるもの悉く奉敬し  
 天帝釋梵天王、一切の智有る者悉く敬侍す  
 十方一切餘有ること無く、無量無量の諸の法界は  
 始無く末無く中間無く、無量の自在りを示現す  
 人中の尊導、生を現じ已りて、諸方に遊行すること各七歩にして  
 一切衆生の願を觀察し、無量の法門もて一切を覺らしむ  
 衆生の五欲に没することを親見たまひて、人中の師子は微笑を現し  
 衆生は盲冥にして愚癡に費はるるも、我當に三有の苦を度脱せしむべしと  
 大師子吼して妙音を出し、我世間の第一尊と爲り

【六反に震動】六種震動とも言ふ、六種とは動、揺、而、震、吼、擊の六種類に動變するなり。瑞微を表すと言はる。  
 【五道】五趣ともいふ。地獄、畜生、餓鬼、人、天

明淨の智慧の燈を顯現して、永く生死の愚闇の闇を滅せんと人中の諸子世間に出でたまひ、大光明を放ちて量有ること無く一切の惡道を斷除し、無量の衆苦究竟して滅す

或時は宮殿に處することを示現し、或は家を捨て學道を行ずることを現す人中の諸子の自在を現するは、一切の衆生を饒益せんが故なり

菩薩初め道場に坐する時、六反に諸の大地を震動し普く無量の大光明を放ち、遍く五道の衆生類を照す

一切の魔の宮殿を震動して、十方の衆生心を開發し普く菩薩に於て緣有りし者は、皆悉く眞實の義を覺悟す

一毛道の中に無量衆、十方一切の諸の佛刹あり衆生道の衆は量有ること無く、彼最勝の大神變を現じたまふ

是の如く方便隨順して覺るに、一切の佛の演說したまふ所の如し若は諸の如來の説きたまはざる所も、亦悉く解了し分別して知る

一切衆の魔怨を除滅して、普く三千大千界を覆ひ深く一切の無礙門に入りて、能く一切諸の魔道を壞る

如來或は諸佛の刹に在り、或は復諸の天宮に現處し或は復身を梵の宮殿に現じたまふも、菩薩は悉く見たてまつりて障礙無し

清淨の妙法輪を轉じて、如來の法身に遼闊無し  
悉く三世の一切劫に於て、最勝は演說したまひて窮盡無し

諸佛の無等の師子の座は、悉く十方界に充滿し

種種の妙相もて莊嚴し、佛剎座に處したまひて難思議なり

眞の種子等は、悉く摩訶、法界に充滿して餘有ること無く

菩薩の行を説きて撻毘無く、諸佛の出家の道に隨順す

智者は悉く一方佛を以て、諸佛の法を擧げて餘有ること無く

種種に罪障する最勝の法は、皆悉く法界に充滿す

無等の無量なる如自在もて、一切種種の身を示現し

又諸趣の無量の生を現じ、或は衆女衆に闍越せらるることを現す

出家して學道を行ずることを示現し、衆生の諸根を利からしめんと欲し

乃至般涅槃と示現して、舍衛を分佈し塔廟を起す

是の如きの種種無量行と、如來の演說と佛の所住と

一切如來の諸の功德とを、究竟して遍く知りて彼岸に到る

是の如きの種種無量の行は、一切劫に於て休息無く

亦未だ曾て憂愁の心を生ぜず、菩薩は皆悉く善く趣向す

一切諸佛の自在力と、及び佛の無量の諸の功德とを

【般涅槃】 (Parinirvana) 滅没、圓寂等と譯す。無餘涅槃又は入涅槃、寂滅の意。

菩薩は隨順して、悉く了知し、普く一切衆生の爲に成く  
是の如き一切諸の法王は、彼無量の諸の境界に隨ひて  
一念の中に於て、悉く覺悟し、而も亦菩薩の行を捨てず  
一切最勝の甚深の法と、及び諸の佛刹の正法道とに  
隨順して殊勝の行を覺悟し、究竟廻向して彼岸に到る  
有數無數の一切劫を、菩薩は深く解るに即ち一念なり  
菩薩の行を具足し修習して、彼勝道に於て退轉せず  
十方無量の一切の刹は、或は淨妙有り或は垢穢あり  
及び彼の一切諸の如來を、菩薩は皆悉く分別して知る  
念念の中に於て悉く、不可思議の無量劫を了了し  
是の如く三世の劫を了知し、具足して究竟の行に安住す  
深く入りて心の所行を了達し、善方便もて一切の法を行じ  
一切の佛刹の菩薩の行を、悉く能く明了に分別して知る  
智慧を出生して量有ること無く、衆生及び諸法を出生し  
菩提力の自在を出生して、一切皆悉く邊際無し  
深く一切に入りて餘有ること無く、一切諸の妙法を分別し  
悉く分別して同異の相を知り、具足して廣く菩薩の行を修す

十方一切の諸佛の刹、彼に無量無數の衆有り

彼彼の諸性は各同じからず、菩薩は皆悉く分別して知る

過夫の一切諸の如來と、未來現在の諸の導師とを

若し能く是の如く知りて廻向すれば、則ち三世の諸佛と等し

若し能く是の如く知りて廻向すれば、則ち三世の諸佛と等し

最勝の智慧と等しく、最勝の所行と等し

一切の世間難く境する莫く、諸の學ぶ所の者は悉く成就し

一切の世間の最勝に隨順して、善能く世間を觀察す

菩薩の所行は量るべからず、無量の功德悉く具足し

堅固にして如來の行に安住し、自在力を具足し分別す

【佛子】以下多上の法華等無量刹向を明す。法華等、初等は其行を修す【法華】法の布施即ち法益を興ふるなり

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第十の法華等無量刹向と爲す。佛子、此菩薩摩訶薩は、觀  
垢の輪を受けて頂に繫け、大法師の記を受け、能く廣く法施して、大衆衆を生じ、衆生を  
菩提心に安立し、衆生を饒益して未だ行て休息せず、菩提心を以て善根を長養し、一切の  
衆生の爲に善導師と作りて、諸の衆生に一切智の道を示し、一切の衆生の爲に法華の日と  
作りて、善根の淨光普く一切を照し、等心に普く一切の衆生を觀じて、衆生をして常に  
善根を行じ未だ行て休息せざらしめんと欲し、清淨微妙の智慧を増長して、一切の善根  
道業を捨てず、一切衆生の爲に大智慧の探寶導師と作りて、一切安隱の正道を開示し、一

【彼岸】 波羅蜜多 (Paramita) の譯。

【詔曲】 他人に内心を隠し詐り親む精神にして、甘隨煩惱の一たる詔曲の意。

【彼善根に於て云】 以下は正しく廻向の行相を明しく初に廣大廻向十五門あり、其第一門は佛を見て自他の梵行を修することとを明せり。

切の衆生を以て首と爲して、諸法を修行し。一切の衆生をして壞すべからざる眞の善知識を得て、善根を長養せしむ。菩薩摩訶薩は法處等の一切善法を行じて、薩婆若の心を攝取し。正力を究竟して彼岸に到り。堅固にして壞し難き菩提の心を修行し。常に大願を棄ひて菩提を修習し。善知識に依りて詔曲の心を離れ、専ら菩提を求めて無量の一切智門の境界を分別す。

菩薩摩訶薩は、彼善根に於て、廣大にして限無しと廻向し、乃至一句一味をも、佛の説きたまふ所の法を、若は能く聞くあり、若は持し、若は説く。此善根を以て是の如く廻向すらく、「一心に無量無邊の虚空に等しき世界の中の三世の諸佛を正念して、菩薩の行を行ぜす。此善根を以て廻向して一切の佛を常に守護し念せしめ、一世界に於て未來劫を盡して一りの衆生の爲に、菩薩の行を修し、一世界の如く、乃至虚空法界に等しき一切の世界に、未來劫を盡して一りの衆生の爲に、菩薩の行を修せん。一切衆生の爲にも亦復是の如く、一切衆生の爲に大莊嚴を以て自ら莊嚴し、佛と善知識とを離るるの想を生ぜざらん」と。是想を得るが故に、常に現在の一切の諸佛を見たてまつり、乃至未だ嘗て一佛にも遠離せず。諸佛菩薩の讀めたまふ所の梵行は皆悉く満足す。行不決の梵行、具足不破の梵行、不濁の梵行、無垢の梵行、不退の梵行、不壞の梵行、諸佛の讀めたまふ所の梵行、無依の梵行、無所有の梵行、離倒清淨にして三世の諸佛菩薩に順行する梵行、無礙の梵行、無取の梵行、無諍の梵行、無擇の梵行、安住の梵行、無比の梵行、不動の梵行、不亂

の梵行、無志の梵行なり。我梵行を行するが如く、一切の衆生をして皆悉く此諸の梵行に安住せしむ。住置の梵行、具足の梵行、清淨の梵行、離垢の梵行、明照の梵行、離塵の梵行、離情の梵行、離熱の梵行、離纏の梵行、一切の疑を離れたる梵行、一切の惱害を離れたる梵行もて彼岸に到ることを得しむ。何を以ての故に。菩薩自ら梵行を修せずして、他をして梵行を淨修せしめんは、是處有ること無し。菩薩自ら梵行を退きて、他をして梵行を具足せしめんは、是處有ること無し。菩薩自ら梵行を離れ、他をして梵行の道を立てしめんは、是處有ること無し。菩薩自ら梵行を滅して、他をして梵行を修習せしめんは、是處有ること無し。菩薩梵行を樂はずして、他をして梵行を樂修せしめんは、是處有ること無し。菩薩梵行に住せずして、他をして梵行に安住せしめんは、是處有ること無し。菩薩梵行を究竟せずして、他をして梵行を究竟せしめんは、是處有ること無し。菩薩自ら梵行を捨てて、他をして梵行に安住することを捨てざらしめんは、是處有ること無し。菩薩梵行を壞滅して、他をして梵行を採取せしめんは、是處有ること無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は善の如く修行して、顛倒を遠離し、又能く廣く眞倒を離れたる法を説き、實語し實行して、清淨の身口意業を修習し、諸の染汚を離れ、無礙處を行じて、一切の障を滅すればなり。菩薩摩訶薩は自ら正直心にして、他をして正直の心法たらしめ。菩薩は忍辱を修習して、諸の善根を以て其心を調伏し、他をして忍を修し、

【復次に】以下、  
廣大廻向十五門の  
第二、廻向して諸  
法を得しむること  
を明す。

諸の善根を以て其心を調伏せしめ、菩薩は自ら疑悔を離れ、他をして諸の疑悔を離れしめ。菩薩は自ら歡喜の信心を得て、他をして不壞の信を得しめ。菩薩は自ら堅法を行じて、他をして堅法を行ぜしむ。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向す。

復次に菩薩摩訶薩は、法施等の諸の善根門を以て、是の如く廻向すらく、此善根を以て、一切の衆生をして悉く諸佛の無盡の法門を得しめ、諸佛の法門を分別し解説して、一切の外道の邪論を摧滅し、辯理窮屈ならしめ。悉く三世一切の諸佛の説きたまふ所の法流を得。一一の生法、一一の方便法、一一の語言法、一一の施設法、一一の教法、一一の説法、一一の法門、一一の入法、一一の決定法、一一の住法に於て、悉く無量無邊の無盡の法藏を得しめ。無畏の法を得て深く四辯に入り、廣く衆生の爲に種種の法を説き、未來際を盡して而も窮盡すること無く、正直の心を成じて、諸の顛倒を離れ、無礙の道を生じて言に謬失無く、衆生は法を聞きて悉く皆歡喜し、衆生の一切の音言を解了せしめ。一切の法明を退轉せざることを得て一切の衆生歡喜すること量り無く、悉く皆一切種種智に安住し、離礙の明淨の法辯を具足して、諸法を聞持し、悉く能く一切の世界を分別し。法界に等しき無量の身を得て、一念の中に於て悉く能く一切の法界に充滿し、微妙の音聲は無量無邊の法界に迴滿し、眷屬を示現して法界に充滿し。法界に等しき菩薩の淨土を修し、法界に等しき無量の菩薩の所住を得。法界に等しき無量の決定法を得。法界に等しき無量の諸法の究竟を學し。法界に等しき無量の菩薩行に住し。法界に等しき無

【復次に】以下、第三の二利圓行を明す。

【復次に】以下、菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向して、一切の衆生をして薩婆若を具足し、薩婆若に安住せしむ。

復次に菩薩摩訶薩は、善根を是の如く廻向す。法界に等しき無量の一切の佛を見たてまつり、法界に等しき無量の衆生を調伏し、法界に等しき無量の佛刹を遍淨し、法界に等しき無量の菩薩摩訶薩を得、法界に等しき無量の無所畏を得、法界に等しき無量の深智を得、法界に等しき無量の一切菩薩の陀羅尼を得、法界に等しき無量の不可思議なる菩薩住を得、法界に等しき無量の功德藏を具足し、法界に等しき無量の眞義善根を具足せん」と。菩薩摩訶薩は復是念を作さく、「此善根を以て、一切の衆生をして悉く是法を得、具足し成滿して我の如く異ること無からしめ、一切の行等しく功德等しく智慧等しく力等しく無畏等しく自在等しく正覺等しく説法等しく如實の義等しく論議等しく辯通等しからしめん」と。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向す。

【法界の無量なるが如く】以下、第四の行の法界果稱を明す。

復次に菩薩摩訶薩は、此善根を以て是の如く廻向す。法界の無量なるが如く、智慧を出して、衆生も亦復是の如し。法界の無量なるが如く、見る所の諸佛も亦復是の如し。法界の無量なるが如く、諸の佛刹に往くことも亦復是の如し。法界の無量なるが如く、法界の自然に清淨なるが如く、諸の佛刹に往くことも亦復是の如し。法界の不可説なるが如く、一切の衆生をして清淨ならしむることも亦復是の如し。法界の自然に清淨なるが如く、一切の衆生をして清淨ならしむることも亦復是の如し。法界の隨順して悉く一切に至

【復次に】以下、  
第五の見佛解法を  
明す。

るが如く、一切の衆生をして善賢菩薩の行を行ぜしむることも亦復是の如し。法界の一切衆生を普嚴するが如く、一切衆生をして善賢菩薩の道徳を得しむることも亦復是の如し。法界の不可壞なるが如く、一切の衆生をして不壞の善根を得しむることも亦復是の如くならん」と。

復次に善薩摩訶薩は、此善根を以て是の如く廻向すらく、「一切の諸佛菩薩をして皆悉く歡喜せしめ、諸の善根をして薩婆若に趣かしめ、諸の善根をして一切智に趣き一切道に至らしめ、一切の衆生をして常に諸佛を見たてまつらしめん」と。善薩摩訶薩は此善根を以て是の如く廻向すらく、「一切の佛を見たてまつりて、能く善事を作すが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、佛事に於て住著の心を生ぜざるが故に廻向し、一切の佛を見たまつりて、悉く衆生をして普く清淨なることを得しむるが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、悉く能く了知するが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、悉く能く無礙の法を分別するが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、普賢の行を具するが故に廻向し、一切の佛を見たまつりて、未だ曾て時を失はざるが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、菩薩の無量の諸力を出生するが故に廻向し、一切の佛を見たてまつりて、其法を忘れざるが故に廻向す」と。此善根を以て是の如く廻向して、法界の生無きことを解り、法界の自性無きことを解り、法界の如如なることを解り、法界の依無きことを解り、法界の妄無きこと

【無去無集】一法界は眞如にして、事理相即、萬有の本體たり。故に法爾として去來するものなく、又集散すべき何物にもあらざるなり。  
【復次に】以下、第六の衆生をして法師たらしむるを

を解り、法界の相を離るることを解り、法界の寂靜なることを解り、法界の處作無きことを解り、法界と無去無集なることを解り、法界の無壞なることを解る。

復次に菩薩摩訶薩は、善根を是の如く廻向すらく、「此法施の攝むる所の善根を以て、一切の衆生をして大法師を成じて、一切の佛の無量なる自在に住せしめ。一切の衆生をして無上の法師と作りて衆生を一切智に安立せしめ。一切の衆生をして無壞の法體を成じて、一切の問難も能く窮盡すること無からしめ。一切の衆生をして無礙の法師と作りて、詔法の無難照明を具足せしめ。一切の衆生をして智慧の法師と作りて、巧方便もて一切の佛法を講かしめ。一切の衆生をして如來の自在の法師を成就して、能く善巧に諸の如來智を説かしめ。一切の衆生をして淨眼の法師と作りて、廣く實法を説き他教に由らざらしめ。

一切の衆生をして佛法を正持する法師と作りて、説法を具足して一味をも失はざらしめ。一切の衆生をして離相の法師と作りて、一切の妙相を以て自ら莊嚴し、無量の光を放ちて廣く諸法を説かしめ。一切の衆生をして大身の法師と作りて、一身無數の佛刹に充滿し、大法の雲を興して普く佛法を雨らしめ。一切の衆生をして佛法の大海を失はざる法師と作りて一切の世間能く壞る者無からしめ。一切の衆生をして具足圓滿の日光法師と作りて、佛の慧光を放ち、悉く能く一切の諸法を顯照せしめ。一切の衆生をして隨順問答の法師と作りて、善巧の方便もて廣く諸法を説かしめ。一切の衆生をして修行を究竟じて彼岸に到る法師と作りて、善巧の方便もて無量の法藏を開かしめ。一切の衆生をして正法を建立

【菩薩摩訶薩】以下、第七の無選擇の行を闡す。

する法師と作りて、如来の道智を分別し演說せしめ。一切の衆生をして諸法に了達する法師と作りて功德を讚歎して窮盡すべからざらしめ。一切の衆生をして虚誑せざる法師と作りて、深真妙の諸の方便に入らしめ。一切の衆生をして善く魔事を感じる法師と作りて、悉く能く一切の諸魔を壊散せしめ。一切の衆生をして諸佛攝護の法師と作りて、未だ曾て暫くも我我所の心を起さざらしめ。一切の衆生をして安隱正法の法師と作りて、悉く菩薩の一切の願力を得しめん」と。

菩薩摩訶薩は此善根を以て是の如く廻向すらく、「業を選択せざるが故に廻向し。報を選択せざるが故に廻向し。願を選択せざるが故に廻向し。法を選択せざるが故に廻向し。事を選択せざるが故に廻向し。因を選択せざるが故に廻向し。成法を選択せざるが故に廻向し。名身味身句身を選択せざるが故に廻向し。廻向を選択せざるが故に廻向し。義を選択せざるが故に廻向す」と。

大方廣佛華嚴經 卷第二十二

東晉天竺三藏佛跋伽羅譯

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一九

【菩薩摩訶薩】以下第八の無著の六行を明す。【生天】諸天の快樂を會念して種種なる行を修して生れんとする故あり佛教外の教に於ては多く生天を教ふ業報差別經には十善を修して六欲天有漏の十善を修し定に相應して色界天に生ると言ふ。佛教は此生天を眞の解脱に非ずとなして排せり。

一菩薩摩訶薩は此善根を以て是の如く廻向すらく、色に著せざるが故に廻向し。馨香味觸法に著せざるが故に廻向し。生天を求めざるが故に廻向し。欲樂を求めざるが故に廻向し。欲の境界に著せざるが故に廻向し。眷屬を求めざるが故に廻向し。自在を求めざるが故に廻向し。生死の樂を求めざるが故に廻向し。生死に著せざるが故に廻向し。此に死し彼に生ずることに著せざるが故に廻向し。三有の樂を求めざるが故に廻向し。欲の相應を求めざるが故に廻向し。樂處を求めざるが故に廻向し。心を毒せざるが故に廻向し。善根を壞せざるが故に廻向し。三界に依らざるが故に廻向し。諸禪の解脱三昧正受に味著せざるが故に廻向し。聲聞緣覺の乘に住することを求めざるが故に廻向し。但一切の衆生を伏し、薩婆者を満足して無礙智を究竟せんと欲するが故に廻向し。一切の善根をして清淨無礙ならしめんと欲するが故に廻向し。一切の衆生をして生死を超出して、大樂智を得しめんと欲するが故に廻向し。金剛の菩提心を満足せんと欲するが故に廻向し。究竟して不死の

【菩薩摩訶薩】以下、正しく第九の大行を希望することを明す。

法を成就せんと欲するが故に廻向し。無量に莊嚴せる諸佛の種性、一切智の自在を現せんと欲するが故に廻向し。菩薩の一切法明の神力自在を具足せんと欲するが故に廻向し。法界虚空界に等しき一切の佛刹に於て、普賢の行を行じて退轉せず、實を離れたる金剛の大莊嚴を以て自ら莊嚴し、普賢菩薩の地に安住せんと欲するが故に廻向し、未來劫を盡して普賢の行を行じ、衆生を度脱して一切諸佛の莊嚴せる行地に示現し、安住不斷ならんと欲するが故に廻向す。

菩薩摩訶薩は是の如く平等の心もて廻向し。平等法の心もて廻向し。一切衆生の無量の心もて廻向し。無諍の心もて廻向し。無所有の心もて廻向し。不亂の心もて廻向し。等しく三世に入るの心もて廻向し。三世に於ける諸佛の種性の心もて廻向し。不死の神通を得る心もて廻向し。如來の涅槃を得る心もて廻向す。一切の衆生をして、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處を離れしめんが故に廻向し。一切の衆生をして障道の法を除滅せしめんが故に廻向し。一切の衆生をして悉く善根を具へ、歡喜せしめんが故に廻向し。法輪を轉ずるの時を失はざらんと欲するが故に廻向し。一切の衆生をして十方の輪を成じて、彼岸に到らしめんと欲するが故に廻向し。無量無邊の菩薩の清淨なる法願を満足せしめんと欲するが故に廻向し。善知識の器を成就して一切の善知識の教に隨順し、菩提心の寶を具へしめんと欲するが故に廻向し。一切をして佛の深法に住し、正直にして一切の佛法を修習し、無上の智慧光明を具足せしめんと欲するが故に廻向し。一切の菩薩をして無礙の慧明常に

【二種の解脱】  
 爲解脱、無爲解脱  
 とを言ふ。有爲解脱  
 とは無學（羅漢）の  
 聖者の勝解は無漏  
 有爲法なるを以て  
 言ひ、無爲解脱と  
 は諸佛の覺證たる  
 滅無爲の法性なる  
 無爲の涅槃なるを  
 以て無爲解脱と言

現在前せしめんと欲するが故に廻向し。一切をして常に諸佛の現在前したまふを見たてまつらしめんと欲するが故に廻向し。一切をして明淨の法門を得しめんと欲するが故に廻向し。一切をして諸の恐怖を離れ、無所畏の菩提心門を具へしめんと欲するが故に廻向し。一切をして菩薩の不可思議なる諸作の智門を得しめんと欲するが故に廻向し。一切をして大悲もて救護し、悉く清淨なることを得しめんと欲するが故に廻向し。一切無餘の佛刹をして皆悉く莊嚴せしめんと欲するが故に廻向し。一切をして一切の魔業の鈎餌、及び魔の巧術を除滅せしめんと欲するが故に廻向し。一切をして菩薩の行を修し、一切の佛刹に著せざらしめんと欲するが故に廻向し。一切をして一切の佛法に度り、一切智の廣大の心を得しめんと欲するが故に廻向し。一切をして正念清淨たらしめんと欲するが故に廻向し。決定せんと欲するが故に廻向し。一切の佛法を攝取して分別了知せんと欲するが故に廻向し。無量無邊の無礙智を得んと欲するが故に廻向し。清淨の正直心を得んと欲するが故に廻向し。一切の衆生をして大慈心を修習せしめんと欲するが故に廻向し。大悲心を修習せんが故に廻向し。喜心を修習せんが故に廻向し。捨心を修習せんが故に廻向し。二種の無礙解脱を得て、善根に安住せんが故に廻向し。一切の縁起の法を分別せんと欲するが故に廻向し。縁起の法を分別して法化より生ずる心を得んと欲するが故に廻向し。勇猛なる信心を得んと欲するが故に廻向し。不壞の幢幟を得んと欲するが故に廻向し。一切の魔を壊らんと欲するが故に廻向し。一切の清淨無礙法の心を得

んと欲するが故に廻向し。一切の菩薩の行を行じて、不退轉の心を得んと欲するが故に廻向し。勝妙心を樂求することを得んと欲するが故に廻向し。一切の功德法自在智を得て、一切智を樂求せんと欲するが故に廻向し。一切の願を滿じて一切の惡を滅し、離垢の記を受けて佛の自在を得、一切の衆生の爲に不退の法輪を轉ぜんと欲するが故に廻向し。如來の諸の妙勝法、無量智慧の日光、莊嚴大智の光明をして普く一切衆生の法界を照さしめんと欲するが故に廻向し。一切の衆生を調伏して皆悉く歡喜して大願を成就し、未來劫を盡して菩薩の行を行じ、諸の煩惱を滅して離垢清淨となり、愛網を壞裂し、愚癡の闇を除き、垢を離れたる無礙の法を具足して、菩薩の不退轉の行を修行し、一切種智を得んと欲するが故に廻向し。一切の衆生をして無礙にして無上なる妙智慧の身を得て、無量の諸佛の身を示現せしめんと欲するが故に廻向す。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向して五欲に著せず三界に依らず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は無染汚の善根を以て廻向し。瞋恚を遠離したる善根もて廻向し。愚癡を捨離したる善根もて廻向し、沮壞すべからざる善根もて廻向し。憍慢を遠離したる善根もて廻向し。詭曲を除滅せる善根もて廻向し。正直心の善根を以て廻向し。精勤修行の善根もて廻向す。菩薩摩訶薩は是の如く廻向する時大歡喜を得、菩薩の行に於て正希望を得、摩訶薩の道に趣き、佛の種性を具へ、佛の智慧を得て、一切の惡を離れ、衆魔を降伏し、悉く能く一切の衆生を調伏し、善知識をして皆悉く歡喜せしめ、已に修せし所の願は皆悉く成滿し、一切の衆生を請じて大施會を設

【復次に】以下法界等無量廻向の廣大廻向十五門の中第十に法音の語業を得しむることを明す。

復次に菩薩摩訶薩は、此法施の善根を以て是の如く廻向すらく、「一切の衆生をして皆悉く清淨の法音を具足して、柔軟の音を得、和悅の音を得、不可思議の音を得、愛樂すべき音を得、一切の怖懼に充滿する音を得、不可思議なる功德にて莊嚴せる音を得、高散亂を滅する音を得、法界に充滿する淨妙の音を得、一切の衆生を攝する音を得しめ、一切の衆生をして悉く善妙にして自在の音を得しめ、一切の衆生をして清淨の妙音を得しめ、一切の衆生をして悉く妙音を得て、衆生樂聞して厭足有ること無からしめ、一切の衆生をして解脫の音を得て、悉く彼岸に到らしめ、一切の衆生をして歡喜の音を得しめ、一切の衆生をして佛の清淨なる語言の音を得しめ、一切の衆生をして、佛の音聲を得、妙音聲を具へて、愚癡を離離せしめ、一切の衆生をして智法を修習する妙陀羅尼を得しめ、一切の法に於て無量の行を説き、眷屬無數にして法界に充滿し、悉く能く不可思議なる金剛心法を聞持して、隨く分別して説き、能く無量の句身味身を以て、具足して無量の法華と、種種の法相とを演說し、無著の處に住して、諸の法門を得しめ、一切の衆生をして菩薩者を究竟じ、一切法を攝するに句身味身を以てし、諸法の義に於て自在の音を得、無礙の音に於て自在を具足し、彼岸に到ることを得、一切の衆生をして無礙の音聲を得、無畏の音聲を得、無染汗の音聲を得、功德の音聲を得、眷屬を歡喜せしむる音聲を得、如法

【復次に】以下、第十一に法身を得しむることを明す

【正念】八正道の一にして、如来の正法（佛教）を思念する義。

の音聲を得、諸佛の法語言の音聲を得、疾かに一切衆生の疑網を除滅する音聲を得、辯才を具足せる不斷の音聲を得、勝れて衆生を覺悟する音聲を得しめん」と。

復次に菩薩摩訶薩は、此善根を以て是の如く廻向すらく、「一切の衆生をして淨法身を得しめ、一切の衆生をして淨妙の功徳を得しめ、一切の衆生をして諸の相好を具へしめ、

一切の衆生をして淨き業報を得しめ、一切の衆生をして清淨なる薩婆若の心を得しめ、一切の衆生をして無量清淨なる菩提の心を得しめ、一切の衆生をして淨方便を得て悉

く能く衆生の諸根を分別せしめ、一切の衆生をして清淨の性を得しめ、一切の衆生をして清淨なる無礙の行を得て、諸障を満足せしめ、一切の衆生をして清淨なる正念、智

慧不斷の辯才を得しめん」と。菩薩摩訶薩は此善根を以て是の如く廻向すらく、「一切の衆生をして是の如き等の清淨の妙身を得しめん」と。謂ふる明淨の身、離濁の身、究竟

淨の身、清淨の身、離塵の身、種種の空を離れたる身、離垢の身、光明の身、覺業すべき身、無礙の身なり。是の如きの身を以て、普く十方一切の世界に墮じて一切の業を示

し、衆生に示現して、普く一切を照し、一切に示現すも猶し鈎係、淨水の月の如く、一切の衆生をして悉く是の如きの淨妙の身を得しむ。衆生に菩薩の諸行を示現し、衆生に

諸の深妙の法を示現し、衆生に無量の功徳を示現し、衆生に眞實の正道を示現し、衆生に具足の諸法を示現し、衆生に一切の大願を示現し、一刹に住して一切の世界に如来の出世したまふことを示現し、一切諸佛の神足自在なることを示現し、菩薩の不思議の角塵を

【復次に】以下、第十二に無邊の大行を成ずるを明す

【復次に】以下、第十三に佛刹を莊嚴せしむるを明す

示現し受持して、普賢の諸行一切の願智を示現す。菩薩摩訶薩は善根を是の如く廻向して一切の功德智身を成就せしむ。

復次に菩薩摩訶薩は、此法苑の攝むる所の善根を以て、是の如く廻向すらく、「一身一切の世界に廻じて菩薩の行を行せしめ。衆生の見る者皆悉く空しからずして、不退轉の菩提の心を得、一切の衆生をして眞實に隨順して不壞の心を得、一切の衆生をして一切の世界に於て未來劫を盡して菩薩の行を行じて而も厭足無からしめ、法界に等しき大慈悲心を具へ衆生を教化して未だ曾て時を失はず、諸根を分別し、善知識を念じ、一念の中に於て悉く現在一切の諸佛を見たてまつり、如來を正念して未だ曾て暫くも捨てず、諸の善根を修して虚欺有ること無く、衆生を一切智に安立して、悉く不退の清淨の法輪を得、悉く一切諸佛の法明を得、一切諸佛の法爾を受持して菩薩の行を行じ、一切の衆生に入り、一切の刹に入り、一切の法に入り、一切の世間に入り、一切の三世に入り、一切衆生の諸の業報智に入り、一切の菩薩の巧方便智に入り、一切の菩薩の出生行に入り、一切の菩薩の淨境界智に入り、一切の佛の住持境界に入り、一切の無量無邊の法界に入り、菩薩の行を修して諸住に安住せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の善根廻向と爲す。

復次に菩薩摩訶薩は、善根の業を修して是の如く廻向すらく、「一切の佛刹をして皆悉く清淨ならしめ、無量の莊嚴具を以て之を莊嚴し、一佛刹をして廣大なること法界の如くならしめ、一佛刹の如く一切の佛刹も亦復是の如くして、最正覺を得。一佛刹に於て悉く

【芬陀利華】(Pu-  
pūtika)白蓮華と  
譯す。蓮華中の最  
上にして、人中好  
華、希有華、祭華  
等とも言ふ。  
【正法華】正法(佛  
法)の華の意。  
【八楞】楞は角な  
り、故に八角の意  
なり。即ち結晶體  
の寶石なるべし。

く皆一切の佛刹を顯現せん。一佛刹の如く一切の佛刹も亦復是の如くたらん」と。彼一  
の刹は、法界に等しき諸の莊嚴具を以て之を莊嚴し。無量阿僧祇の衆寶もて莊嚴し。無  
量阿僧祇の清淨なる衆寶の高座は、諸の妙寶衣を以て其上に敷き、無量阿僧祇の衆妙  
の寶帳、一切の寶鈴、諸寶の垂帶を以て莊嚴と爲し、無量の寶蓋を以て其上に張り、無量  
の寶雲は一切の寶を雨らし、衆の寶華を散じて見る者厭くこと無く、無量の妙寶を以て  
欄柵と爲し、妙寶の樓閣もて之を莊嚴し、無量の寶鈴は自然に諸佛の妙法を演暢し、無量  
の寶華は周遊して充滿し、衆の妙寶色を以て莊嚴と爲し、無量の寶樹其刹に充滿して、  
無量の妙寶華果を生じ、無量の妙寶を以て宮殿と爲し、妙寶の樓閣諸刹に遍遊し、無  
量の妙寶を以て欄柵と爲し、大寶もて莊嚴し、無量の妙寶を遍樓閣と爲し、一切の淨寶も  
て之を莊嚴し、無量の寶門は、種種の寶鬘もて之を嚴飾し、無量の珍寶、半月の形像は、  
悉く衆寶を以て之を莊嚴し、無量無數にして思議すべからざる珍寶の莊嚴は、諸佛の淨  
業善根の起す所にして、無量の寶藏もて莊嚴す。又衆寶を以て之を莊嚴し、無量清淨の  
寶河を流出し、常に正法を流して未だ曾て斷絶せず、無量の法海は其刹に周遊し、正法の  
淨水湛然として充滿し。無量阿僧祇の寶芬陀利華は皆悉く充滿して自然に正法華の音を  
演出し。無量阿僧祇の須彌寶山もて莊嚴し、智慧の須彌皆悉く具足し。無量阿僧祇の八  
楞の妙寶もて莊嚴し、諸の寶瓔珞を以て垂帶と爲し、無量阿僧祇の明淨寶もて莊嚴し、  
大慧の光を放ちて普く法界を照し。無量阿僧祇の寶鈴もて莊嚴し、自然に微妙の音聲を演

出<sup>し</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の衆寶<sup>しゆほう</sup>の階道<sup>かいたう</sup>を以て莊嚴<sup>しやうげん</sup>と爲し、菩薩<sup>ぼさつ</sup>の妙寶<sup>めうぼう</sup>は皆悉<sup>みなことごとく</sup>く充滿<sup>じゆまん</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、不可思議<sup>ふかぎ</sup>の寶色清淨<sup>ぼうしきしやうじやう</sup>にして、無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>を建立<sup>たうりふ</sup>して莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、半<sup>はん</sup>の寶像<sup>ぼうざう</sup>もて之<sup>これ</sup>を莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、悉<sup>ことごとく</sup>く能<sup>よ</sup>く普<sup>ふ</sup>く無量<sup>むりやう</sup>の寶幡<sup>ぼうばん</sup>を雨<sup>あめ</sup>らし。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、世界<sup>せかい</sup>に充滿<sup>じゆまん</sup>して虚空<sup>こくう</sup>を莊嚴<sup>しやうげん</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の細軟<sup>さいかん</sup>の寶衣<sup>ぼうい</sup>を著<sup>き</sup>きて以て莊嚴<sup>しやうげん</sup>と爲し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の衆寶<sup>しゆほう</sup>旋流<sup>せんりゆう</sup>して以て莊嚴<sup>しやうげん</sup>と爲し、菩薩<sup>ぼさつ</sup>の清淨<sup>しやうじやう</sup>なる一切<sup>いつつ</sup>智眼<sup>ちがん</sup>を示現<sup>しげん</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶臺<sup>ぼうたい</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、一一<sup>いっ</sup>の寶鬘<sup>ぼうまん</sup>は百千<sup>ひやくせん</sup>の菩薩<sup>ぼさつ</sup>を以て嚴飾<sup>げんじき</sup>と爲し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の衆寶<sup>しゆほう</sup>の宮殿<sup>きゆうてん</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、一一<sup>いっ</sup>く前<sup>まへ</sup>諸處<sup>しよじよ</sup>の所愛<sup>しよあい</sup>を除滅<sup>じゆめつ</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の華寶<sup>けわぼう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、金剛圍山<sup>こんかういざん</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、清淨<sup>しやうじやう</sup>明徹<sup>めいちやく</sup>にして障礙<sup>さいがい</sup>する所<sup>ところ</sup>無く。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の妙香<sup>めうかう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、其香<sup>かう</sup>は普<sup>ふ</sup>く一切<sup>いつつ</sup>の世界<sup>せかい</sup>に熏<sup>か</sup>じ。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の諸<sup>しよ</sup>の變化身<sup>へんげしん</sup>を出<sup>し</sup>生<sup>じやう</sup>して、一一<sup>いっ</sup>の化身<sup>けわしん</sup>は法界<sup>ほふがい</sup>と等<sup>とら</sup>しく、各<sup>おのづか</sup>々<sup>づか</sup>無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の妙寶<sup>めうぼう</sup>光明<sup>くわうみやう</sup>を放<sup>はな</sup>ち、一一<sup>いっ</sup>の光<sup>ひ</sup>は一切<sup>いつつ</sup>の光<sup>ひ</sup>を出<sup>し</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の明淨<sup>めいじやう</sup>の寶光<sup>ぼうくわう</sup>を以て照曜<sup>しやうえう</sup>と爲し、能<sup>よ</sup>く衆生<sup>しゆじやう</sup>の淨<sup>じやう</sup>き智慧<sup>しゑい</sup>の光<sup>くわう</sup>を發<sup>はつ</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の無礙<sup>むがい</sup>の寶光<sup>ぼうくわう</sup>を放<sup>はな</sup>ちて、一一<sup>いっ</sup>の寶<sup>ぼう</sup>は普<sup>ふ</sup>く法界<sup>ほふがい</sup>を照<sup>てう</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の衆寶<sup>しゆほう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、一一<sup>いっ</sup>の寶<sup>ぼう</sup>の中に一切<sup>いつつ</sup>の寶<sup>ぼう</sup>を具<sup>ぐ</sup>へ。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶藏<sup>ぼうざう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、自然<sup>じぜん</sup>に諸法<sup>しよほふ</sup>の法藏<sup>ほふざう</sup>を演說<sup>えんさつ</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、智<sup>ち</sup>の妙<sup>めう</sup>の寶幢<sup>ぼうちゆう</sup>を建立<sup>たうりふ</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶寶<sup>ぼうぼう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、清淨<sup>しやうじやう</sup>なる人<sup>にん</sup>衆<sup>しゆじゆ</sup>の寶<sup>ぼう</sup>を具<sup>ぐ</sup>足<sup>そく</sup>し。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の寶<sup>ぼう</sup>もて莊嚴<sup>しやうげん</sup>し、菩薩<sup>ぼさつ</sup>の三昧<sup>さんまい</sup>、清涼<sup>しやうりやう</sup>の寶樂<sup>ぼうがく</sup>あり。無量阿僧祇<sup>むりやうあそうぎ</sup>の諸<sup>しよ</sup>の妙寶<sup>めうぼう</sup>の香<sup>かう</sup>

【善現】善薩の善現なり。菩薩の第十二位の中、第十の第六行にして、常に佛土の中に善く生を現ずる位なり。次の等は無著難得、善法、眞實等の四行をも含む意ならん。

【多羅樹】(白樹)樹名なり。具多と言ふは之の詛語なり。印度所産の植物にして、其葉に經文を刻して梵夾(具多羅)と言ふ。

は、自然に演出して、一一の音の中に如来の音を出し、一方に充滿して聞かざる音無く、無量阿僧祇の寶像もて莊嚴し、一一の像身に普く無量の法寶の光明を放ち、無量阿僧祇の衆相もて莊嚴し、一切の衆相は無執にして莊嚴し、無量阿僧祇の寶威儀もて莊嚴し、見る者菩薩の威儀を樂ひ求め、無量阿僧祇の長養衆寶もて莊嚴し、一切の妙寶の庫藏を出生し、無量阿僧祇の衆寶もて安住莊嚴し、一切の衆寶もて之を嚴飾す、無量阿僧祇の寶衣もて莊嚴し、皆悉く普く覆ひて菩薩の無量三昧を具足し、無量阿僧祇の妙衣もて莊嚴し、其發心する者は、即ち菩薩の善現等の菩薩の陀羅尼を得、無量阿僧祇の修寶もて莊嚴し、悉く能く業寶報應を分別して決定清淨なり、無量阿僧祇の無礙知見の妙寶もて莊嚴す。若し見る者有らば悉く諸法の清淨なる法眼を得、無量阿僧祇の寶天冠もて莊嚴し、智慧の天冠を具足し成就す、無量阿僧祇の寶座もて莊嚴し、佛の清淨なる寶師子の座を成す、無量阿僧祇の明淨の寶燈を然し、明淨なる妙智慧の燈を具足し、無量阿僧祇の寶多羅樹もて莊嚴し、一一の多羅樹は寶瓔珞を以て之を嚴飾し、無量阿僧祇の衆寶の涼臺を以て莊嚴と爲し、無量阿僧祇の寶樹もて莊嚴し、不思議の鳥、其上に棲集して妙音聲を出し、無量阿僧祇の妙寶の化華もて莊嚴し、一一の華上に無量の菩薩結跏趺坐して遍く法界に遊ぶ、無量阿僧祇の果實もて莊嚴し、薩婆若の大智慧の果を具へ、無量阿僧祇の衆寶の聚落もて莊嚴し、皆悉く清淨の正法を修習し、無量阿僧祇の寶宅もて莊嚴し、衆寶の街巷に人民充滿し、無量阿僧祇の大王の寶都もて莊嚴し、彼諸の大王は勇猛精進にし

て、大法の鏡を被り、無上道に於て堅固にして不退なり。無量阿僧祇の寶舎もて莊嚴し、一切の房室の食臺を除滅し。無量阿僧祇の寶衣もて莊嚴し、隱意に愛用して貪著する所無く。無量阿僧祇の寶家もて莊嚴し、家を捨てて出家せる菩薩は其中に充滿し。無量阿僧祇の無厭足の寶もて莊嚴し、見る者能く無量の歡喜を生じ、無量阿僧祇の寶輪もて莊嚴し、不思議の智慧の光明を放ちて不退の輪を轉ず。無量阿僧祇の妙寶の行樹もて莊嚴し、清淨の因那尼羅寶を以て之を莊校し、無量阿僧祇の寶地もて莊嚴し、不思議の寶を分別し示現す。無量阿僧祇の樂器もて莊嚴し、自然の音を出して法界に充滿し。無量阿僧祇の樂器もて莊嚴し、本來際を盡して常に法音を出し未だ曾て斷絶せず。無量阿僧祇の寶耳もて莊嚴し、其利に充滿して悉く能く一切の法寶を受持す。無量阿僧祇の清淨の寶口もて莊嚴し、一切の功德の藏寶を具足し。無量阿僧祇の淨寶の言音を出し、常に無量淨妙の法寶を説き。無量阿僧祇の清淨の寶心もて莊嚴し、正直寶を得て一切の智願皆悉く充滿し、無量阿僧祇の清淨の寶念もて莊嚴し、愚癡を除滅して一切智の無上の寶王を得。無量阿僧祇の清淨の寶越もて莊嚴し、悉く能く一切諸佛の正法の寶を攝受し。無量阿僧祇の菩薩の寶もて莊嚴し、決定して善く一切の佛法を知り。無量阿僧祇の不放逸の寶智慧もて莊嚴し、一切の智寶皆悉く充滿し。無量阿僧祇の清淨の寶眼もて莊嚴し、一切の十力寶に於て障礙する所無く。無量阿僧祇の清淨の寶耳もて莊嚴し、善能く一切の法界の微妙の音聲を聽聞して障礙無く。無量阿僧祇の清淨の寶鼻もて莊嚴し、淨寶の香を聞き

【是の如く】以下第十四に廻向の大意を結成することを明す。

て厭き足ること無く。無量阿僧祇の清淨の寶廣長舌もて莊嚴し、善く一切の諸の語  
言法を説き。無量阿僧祇の清淨の寶身もて莊嚴し、十方に遊行して障礙無く。無量阿僧  
祇の清淨の寶意もて莊嚴し、悉く能く普賢菩薩の一切の大願を修習し。無量阿僧祇の  
清淨の寶音もて莊嚴し、微妙の音聲は皆悉く一切の世界に充滿し。無量阿僧祇の寶身  
業もて莊嚴し、一切智慧の寶業を具足し。無量阿僧祇の寶口業もて莊嚴し、廣く無量の智  
慧妙寶を説き。無量阿僧祇の清淨の寶意業もて莊嚴し、一切の無礙の寶智を究竟せん。  
菩薩摩訶薩は復次に是の如く念すらく、「彼一切諸の如來の刹に於て、一佛刹の一方の一  
毛道の中に於て、無量無數の不可思議なる清淨の智慧を成就し、諸の大菩薩皆悉く  
充滿せん。一佛刹の一方の一毛道の如く、盡虚空法界に等しき一切の佛刹の一切の方の一  
切の毛道も、亦復是の如くならん」と。是を菩薩摩訶薩の妙寶を廻向して一切の佛刹を莊  
嚴すと爲す。寶もて一切の佛刹を莊嚴するが如く、廣く説かば香莊嚴、乃至究竟の無量清  
淨なる妙香の意業、無礙寶の智も亦復是の如し。廣く説かば華の莊嚴、乃至究竟の淨華の  
意業、無礙寶の智も亦復是の如し。廣く説かば、鬘、塗香、末香、衣蓋、幢幡、乃至百事  
の莊嚴も亦復是の如し。

是の如く菩薩摩訶薩は、是法施等の攝むる所の善根を以て廻向すらく、「善根を長養せん  
が故に廻向し。佛刹を嚴淨せんが故に廻向し。一切衆生をして清淨平等ならしめんが故  
に廻向し。一切の衆生をして瞋恚を除滅せしめんが故に廻向し。一切の衆生をして平等な

乃甚深の佛法を具足せしめんが故に廻向し。一切の衆生をして平等不可壞の清淨の功徳  
 力を具足せしめんが故に廻向し。一切の衆生をして力堪すべからざらしめんが故に廻向し。  
 一切の衆生をして悉く平等なる無盡の智慧を得て、諸佛の法に度らしめ。一切の衆生を  
 して悉く平等なる清淨の覺音を得しめ。一切の衆生をして悉く平等なる無礙の淨眼  
 を得て、虚空法界に著しき無礙智を究竟せしめ。一切の衆生をして悉く清淨なる平等  
 の正念を得て過去の劫を盡さしめ。一切の衆生をして悉く平等なる無礙智を得て、決定  
 して一切の諸法を了智せしめ。一切の衆生をして悉く平等の菩提を得、法界に充滿して  
 障礙する所無からしめ。一切の衆生をして悉く平等なる諸の妙善根を得しめ。一切の  
 衆生をして悉く平等なる身口意の徳を得て、功徳を具足し、華嚴清淨ならしめ。一切の  
 衆生をして悉く平等なる普賢菩薩の一切の所行を得しめ。一切の衆生をして悉く平  
 等なる清淨の佛刹を得しめ。一切の衆生をして悉く平等の具足を得て、深く一切智の  
 行に入らしめ。一切の衆生をして一切の衆を離れ、悉く平等の究竟廻向を得しめ。一切  
 の衆生をして悉く平等なる一切の智見を得て、皆能く他人の心念を分別せしめ。一切の  
 衆生をして悉く平等を得て、白法に安住せしめ。一切の衆生をして悉く平等を得て、  
 一念の中に於て一切智を具へ、究竟して無上菩提を滿足せしめ。一切の衆生をして一切の  
 平等の道行を成就して、清淨に具足せしめ。一切の衆生をして悉く平等を得て、廣く衆  
 生に平等に廻向して、一切の衆生をして悉く清淨なる諸法を分別する力を得て、廣く衆

【菩薩摩訶薩】以下、第十五に法證り、説を起さしむるを説く。

【復次に】以下、甚深の實際廻向を明す。

生の爲に解説し廻向せしむ。

菩薩摩訶薩は復是念を作さく、「此善根を以て、一切の衆生をして菩薩の淨行を修して無量の法海を得しめ。一一の法海に於て無量の法界に等しき清淨の智慧普く法界を照さしめ。一切の衆生をして一切の句義を分別し解説せしめ。一切の衆生をして悉く一切の法門三昧を得て、普く諸法を照さしめ。一切の衆生をして皆悉く具足して三世の諸佛の辯りに隨順せしめ。一切の衆生をして三世の佛の自在の身を得しめ。一切の衆生をして無礙の善根を得て、佛法の愛を起し、大悲を退かずして衆生を救護せしめ。一切の衆生をして無礙の智、不思議の法を得て、能く淨く一切の衆會を歡喜せしめ。一切の衆生をして一切の佛利に於て、翻覆の佛利、俯伏の佛利、微細の佛利、廣大の佛利、清淨の淨行、穢濁の佛利、是の如き等の諸の佛利の中に於て悉く清淨なる不退の法輪を轉せしめ。一切の衆生をして念念の中に於て、悉く無盡の無所畏の辯を得て、廣く佛法を説きて窮盡すべからざらしめ。一切の衆生をして常に樂いて一向に専ら勝法を求め、一切の法に於て智慧自在なることを得しめ。一切の衆生をして皆悉く歡喜し廣く一切の法を説かしめん」と。

復次に菩薩摩訶薩は、法界に安住する無量の善根を法界に廻向し、無量の身業を法界に廻向し、無量の口業を法界に廻向し、無量の意業を法界に廻向し、無量の妙色を法界に廻向し、無量の妙受想行識を法界に廻向し、無量の平等界を法界に廻向し、無量の平等界を

【内、外】内は正報本質外は依報（屬性）なり。

【菩薩摩訶薩は是以下、第十の法界等無量廻向の所成の法界を明し、次に法界を併説す。

法界に廻向し、無量の平等入を法界に廻向し、無量の内平等を法界に廻向し、無量の外平等を法界に廻向し。無量の勇猛精進平等を法界に廻向し、無量の正直心平等を法界に廻向し、無量の方便平等を法界に廻向し、無量の性平等を法界に廻向し、無量の諸根平等を法界に廻向し、無量の三世平等を法界に廻向し、無量の業報平等を法界に廻向し、無量の諸の煩惱を離れたる清淨の平等を法界に廻向し、無量の一切衆生の平等を法界に廻向し、無量の一切佛刹の平等を法界に廻向し、無量の一切諸法の平等を法界に廻向し、無量の一切世間の平等を法界に廻向し、無量の一切諸佛菩薩の平等を法界に廻向し、無量の一切菩薩の行願の平等を法界に廻向し、無量の一切諸善の平等を法界に廻向し、無量の一切菩薩の成就する一切の善根を法界に廻向し、無量の一切菩薩の平等の道を法界に廻向し、無量の一切菩薩の成就する一切の善根を法界に廻向し、無量の一切諸法の平等無二なるを法界に廻向し、無量の一切如来の眷屬圓滿平等を法界に廻向す。

菩薩摩訶薩は、是の如く廻向する時、法界に等しき無量清淨の身業に安住し、法界に等しき無量清淨の口業に安住し、法界に等しき無量清淨の意業に安住し、法界に等しき無量清淨の行願に安住し、法界に等しき無量清淨の眷屬に安住し、法界に等しき無量の一切菩薩の清淨智慧廣説諸法に安住し、法界に等しき無量清淨の身に一切の世界に充滿せる法界に安住し。一切の法明、清淨の無畏を得。一言音を以て、悉く一切衆生の疑惑を除きて、皆歡喜せしめ。諸根を調伏して無上の智、諸力の無畏、一切自在の力、佛の無量の功德、上妙の法中に安住す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の法界等無量廻向と

爲す。

菩薩摩訶薩は、此法施等の一切の善根を以て悉く趣向し已りて、普賢菩薩の無量無邊の一切の行願を成就し、悉く能く無量無邊の虚空法界に等しき一切の佛刹を嚴淨し、一切の衆生をして亦復其の如くならしめ、無量無邊の智慧を具足し成就して、深く一切の法に入り、念念の中に於て無量無數の一切の世界の諸佛の出世を承現し、悉く無量無邊の諸佛の自在を得、悉く無量無邊の如來の自在を得、悉く無量無邊の廣大の自在を得、悉く無量無邊の無礙の自在を得、悉く無量無邊の無障の自在を得、悉く無量無邊の不可思議の自在を得、悉く無量無邊の一切の衆生をして清淨ならしむる自在を得、悉く無量無邊の一切の世界を住持する自在を得、悉く無量無邊の一切の言説すべからざる自在を得、悉く無量無邊の一切時の自在を得、悉く無量無邊の一切の諸通無礙智の自在を得、悉く無量無邊の廣く諸法を説きて法界に充滿する自在を得、悉く無量無邊の満足せる普賢菩薩の淨眼を得。悉く菩薩の無量無邊の淨身を得て、諸佛の説きたまふ所の正法を聞持し、能く一身を以て結跏趺坐して、十方一切の世界に充滿して而も迫近せず。一切の衆生は悉く無量無邊の具足して深く三世に入る智慧を得、悉く無量無邊の清淨の菩提、清淨の衆生、清淨の佛刹、清淨の諸佛、清淨の諸人を得、悉く無量無邊の無邊の虚空法界に等しき清淨の智慧を得、悉く無量無邊の衆生の語言音聲、清淨の智慧を得、大光明を放ちて、普く十方一切の世界を照し、三世の一切の菩薩行、清淨

の智慧を出生し。一念の中に於て皆悉く三世の如來の清淨の智慧を究竟じ、一切の衆生をして皆悉く清淨ならしめ。平等の正觀を具足し成就して、決定の智慧もて究竟じて彼岸に到ると。

【爾時】以下、本會即ち第五の兜率天上の十廻向會説法の益を説く。  
【阿伽樓】(Amala) 沈水香と譯す。(前註)

爾時、佛の神力の故に、十方各百萬の佛刹、微塵に等しき世界は六種に震動せり。佛の神力の故に、法星の如くなるが故に、天の華雲を雨らし、天の臺、天の木香、天の寶衣、天の華鬘、天香、天の摩尼寶、天の沈水香、天の阿伽樓香、天の婆羅雙駄香、天の堅固香、天の梅檀香、天の羅色、幡蓋、無量阿僧祇の天身、不可思議なる微妙の法音、不可思議なる諸天の妙音、如來を讚歎したるまつり、無量阿僧祇の諸天の讚歎善哉の雲雨を雨らし。無量阿僧祇の那由他の諸天は恭敬し禮拜し、無量阿僧祇の那由他の諸天は歡喜して佛を念ふ、不可思議なる諸佛の功德を修習し、無量阿僧祇の諸天は娛樂の音を出して如來を供養したるまつり、無量阿僧祇の諸天の光明を放ちて、諸天に出過し、普く虚空法界に等しき一切の佛刹を照し、無量阿僧祇の如來の化身を示現し、自在の威力は諸天に出過せり。此世界の、一切の四天下の兜率陀天の兜率陀天の王宮にて、是の如きの法を説きしが如く、一切十方の世界の兜率陀天の王宮にも、亦復是の如し。

【爾時】以下、本會の證成を説く。

爾時、佛の神力の故に、十方各百萬の佛刹微塵に等しき世界を過ぎて、各百萬の佛刹微塵に等しき菩薩有り、悉く來りて雲の如く集まり、咸共是言を作さく、「善哉善哉、佛子、乃ち能く此諸の大廻向を説けり。我等は悉く同一の號にして金剛幢と名け、金

【諸佛の種性】 佛性の意

【菩薩は此無量の法寶】以下は前述の長行（散文）の重頌なり（散文）の九十四偈あり、總じて十四偈は廻向の行體を頌せり。

剛光世界の金剛幢佛の所より、此土に來詣せり。彼諸の世界にも、佛の神力の故に亦此法を説き、大會、眷屬、說法、句味皆悉く同等なり。我等は佛の神力を承けて、彼土より來りて汝が爲に證を作す。我此世界に來り汝が爲に證を作すが如く、一切十方の一切の四天下の刪兜率陀天の王宮の、摩尼寶の殿上にも、是の如きの法を説き、往きて爲に證を作すことも亦復是の如し。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承けて、十方及諸の眷屬、一切の法界、諸の義句味を觀察して、無量廣大の心を修習し、無上の大悲もて普く一切を覆ひ、其心三世一切の諸佛の種性に安住して、悉く究竟じて諸佛の功德に度り、諸佛の自在の寶身を成就して悉く能く一切衆生の希望の心行を分別し、彼種を所の善根に隨ひて、悉く其時を知り、法身に隨順して色身を示現す。是の如く親じりて、偈を以て頌して曰はく、

菩薩は此、無量の法寶を

自然に正覺して、大法師の記を受く

調御師となりて、普く諸法を照し

善く悟りて、最正覺の道を徹ぐることも無し

菩薩は法の爲に、調御の大師となり

能く廣く、難得の深法を演説し

十方一切の、無量の衆衆を

皆悉く、諸の正法門に安立す

菩薩は悉く、無量の法海を飲み

大法の雲を興して、普く法雨を雨らす

曜明なる法日は、普く世間を照し

微妙の法を説きて、衆生を饒益す

此法施の主は、甚だ値遇し難く

諸法の方便を、具足し成就す

智慧の明を以て、普く其心を照し

世の無畏と爲りて、廣く深法を説く

善能く、變化の心を修習して

廣く普く、諸の正法門を開發す

諸門の、最勝の法海を成就して

普く世間の爲に、甘露の數を撃つ

能く具足して、得難きの妙法を説き

法を以て、一切の功德を長養す

清淨の正法と、眞直の法とは

衆生に、甚深の法藏を示現す

【最勝】 如來を指す。

【菩薩の法施は】  
以下六十頌は菩薩の廣大廻向を頌す就中初八偈は自行殊勝なることを頌し、次八偈は嚴土攝生の行を頌せり。

最勝は、彼に灌頂の法王を受け  
智慧賤の身を、具足し成就す  
無相の妙智もて、法の真相を觀じ  
菩薩は善法に、而も安住することを得  
菩薩の法施は、最も殊勝と爲し  
一切の諸佛は、咸共に讚歎したまふ  
一切の、天中の天に隨順し  
彼能く、一切の諸佛を出生す  
菩薩の清淨なる、微妙の法身は  
悉く諸佛の、眞の法化より生ず  
明淨の法燈は、衆生を饒益し  
無量の法を説きて、憂惱を除滅す  
菩薩の布施は、清淨の妙法にして  
隨順して、一切の善根を思惟す  
無量の世界に、作す所の功德は  
清淨の智慧もて、皆悉く廻向す  
一切の諸佛の、得たまふ所の功德は

悉く衆生をして、具足し成就せしむ

一切の、清淨の功徳を分別し

諸佛の、莊嚴せる彼岸を究竟す

十方一切の、無量無數の

諸の如來等は、佛刹を嚴淨したまふ

是の如きの一切、無餘の佛土の

衆生の莊嚴は、思議すべからず

一切の如來の、行ゆる智慧は

悉く衆生をして、清淨に具足せしむ

猶し普賢菩薩の莊嚴の如く

悉く衆生をして、亦復是の如くたらしむ

無量の自在を、具足し成就して

無餘の、一切世界に充滿す

一切十方の、無餘の衆生は

皆悉く、彼清淨行に安住す

十方無量の、一切の佛刹

彼諸の如來は、菩薩の行を行す

【無餘】無量の意  
全部の、餘りなき  
との意なり

【一切の佛子】以下  
の四偈は佛の自  
在の果徳を得るこ  
とを頌す。

【菩薩は能く】以  
下の十二偈は一切  
の佛を供養し、恭  
敬することを頌す  
【衆生と等し】衆  
生悉有佛性なるを  
以て、菩薩定中の  
所見は衆生亦佛た  
るべく、即ち佛と  
等しと観るなり。

悉く十方、一切の衆生をして  
究竟じて、無上の勝行を成就せしむ

一切の佛子は、佛の功徳を行じ

無量無邊にして、稱讚數ふべからず

諸佛如來は、悉く分別して知り

皆衆生をして、具足に成就せしむ

菩薩は、諸の神通力を具足して

悉く能善く、一切の所學を學ぶ

十方一切の、世界に遊行して

無量の、自在神力を示現す

菩薩は能く、一念の中に於て

悉く諸佛を見たてまつりて、衆生と等し

菩薩は能く、一毛道の中に於て

悉く一切の、諸佛の正法を見たてまつる

一切衆生の、無量の諸行を

一切の最勝は、悉く分別して知りたまふ

常に平等の心もて、一切十方の

無量の諸佛を、恭敬し供養したてまつる

種種の樂音、諸寶

無量の寶衣、及び諸の幢蓋

悉く皆、無量の法界に充滿せるを

以用て、一切の諸佛を供養したてまつる

菩薩は多く、一毛道の中に於て

悉く諸佛を見たとまつり、その數識すべからず

普く悉く、世間の明燈を供養し

其間く所の法を、悉く能く受持す

恭敬し禮拜して、五體を地に投じ

身を擧げて自ら、一切の最勝に歸す

未來際を盡して、無量の諸劫に

十方の、一切最勝を禮敬したてまつる

一佛の所に於ける、一切の供養具は

その數一切の、衆生類と爲し

一佛の所の、諸の供養具の如く

一切の佛の所も、亦復是の如し

【五體を地に投じ】  
印度に於ける最敬  
禮なり。頭、手、  
肢の五所を地に着  
く、即ち身を地上  
に投げ出すなり。

【無量無邊の】以下  
下の七偈は一切時  
に一切佛を恭敬供  
養することを頌す

【悉く能く】以下  
の十五偈は一切の  
供養具を以て、一  
切の佛に供養する  
ことを頌す

無量無邊の、一切の諸劫に

菩薩は、一切の導師を恭敬したてまつる

無量の、一切諸劫を窮盡して

恭敬し供養したてまつりて、而も厭き足ること無し

一切の衆生は、無量の諸劫に

此劫の中に於て、菩薩の行を修す

一一の如來を、恭敬し供養したてまつりて

一切劫を盡して、而も厭き足ること無し

一切の最勝の、説きたまふ所の大劫は

悉く能く、數を稱量する者有ること無し

爾所の一切、諸の大劫の中に

菩薩の行を修して、而も厭き足ること無し

悉く能く、一切の法界を覺悟し

廣大無邊にして、分際有ること無し

衆妙の寶華、其中に充滿せるを

以用て、衆生に等しき佛を供養したてまつる

諸の妙寶華は、色香具足し

清淨にして鮮潔なるを、無量に莊嚴す

一切の世間に、譬と爲すべき無し

而も以て、一切の最勝を供養したてまつる

衆生の故に等しき、無量の佛刹に

諸の妙寶蓋、其中に圓滿す

悉く此蓋を以て、一如來に奉り

一切の佛に供ふることも、亦復是の如し

微妙最勝にして、奇特の塗香は

一切の世間に、倫匹有ること無し

此塗香を以て、衆生の劫を盡し

一切の、諸佛如來を供養したてまつる

是の如きの末香、種種の灌華

微妙の香熏、無量の寶火

無數の妙寶、諸の莊嚴具を

以て如來に供へたてまつりて、而も厭き足ること無し

衆生の數に等しき、一切の諸佛は

一念の中に於て、悉く正覺を成じたまふ

【天人の導師】如來を言ふ。十界の中、迷界六道にて人天を以て其代表となすが故に言ふ。

【普賢菩薩の所行】以下の十三偈は普賢の行を攝して以て廻向を行ずることを頌す。

無量の偈を以て、讚歎し宣揚して

天人の導師を、恭敬し供養したてまつる

衆生の數に等しき、世間の明智を

菩薩は無上なる、殊勝に供養す

衆生の數に等しき、一切の諸劫に

如來は徳を數じたまふとも、猶盡すこと能はず

是の如く、一切の諸佛を供養したてまつりて

如來の自在を、具足し成就す

普賢菩薩の、所行に安住して

悉く能く、一切の諸佛を親見したてまつる

已作と未作と、及び現に作す所の

無量無數の、一切の善根は

普賢菩薩の、諸行に修習せしめ

普賢菩薩の、諸地に安住せしむ

一切の世間、悉く餘り有ること無く

諸佛の知りたまふ所の、衆生の種類に

悉く、智慧明達を成就せしむること

【禪】禪那の略。  
(Dhyana) 定又は  
靜慮と譯す。六度  
(前註)の一。繫縛  
を斷じ、慮を靜め  
心を専らにして眞  
正の理即ち寂靜に  
遊ぶなり。

猶一普賢菩薩の、所得の如し

佛の説きたまふ所の如く、一切の諸行を

菩薩は悉く能く、具足し修習す

悉く以て、一切の衆生に廻向し

普く、無上の廻向を成就せしむ

一切十方の、諸の如來の刹を

悉く能く覺悟して、具因に了達す

悉く一切、無餘の衆生をして

皆、普賢菩薩と齊等からしむ

布施を成就すること、悉く廻向の如くし

持戒具足すること、普賢の力の如し

勇猛精進して、退轉せず

忍辱を成就して、沮壞すべからず

善く甚深の、諸禪正受に入りて

一切の三昧を、分別し了知す

清淨の智慧もて、世に了達し

一切の世間は、知ること能はざる所なり

【身口の諸業】以下二偈は所成の果徳、次の二偈は甚深廻向の十偈は結歎顯勝を頌するなり。以て重頌を終りて同時に十廻向會を説了す。

【善逝】佛十號の一。修伽陀の譯。佛は無量の智慧を以て諸惑を斷盡して迷惑の世間を完全に超出し而して涅槃の佛果に趣きて退轉せざるが故に善く逝くと言ふ。

金剛薩婆經十廻向品第二十一之九

身口の諸業と、及び意業と

音聲語言とは、皆悉く清淨にして

究竟して、菩薩の諸行を成就し

悉く普賢、菩薩と齊等し

譬へば如如の如く、一切の法界は

憍慢と、諸の散亂心とを捨離す

永く障礙を滅して、普く皆清淨となり

悉く衆生をして、亦復是の如くならしむ

是の如く殊妙にして、最勝なる廻向は

一切の如來の、演説したまふ所なり

此無量の、善根廻向を以て

菩薩の所行を、具足し成就す

一切無餘の、諸佛の眞子は

普く此、深き廻向の法を修行す

一切の、微妙の法界を攝取して

深く入りて、諸の善逝の力に安住す

若し、此殊勝の行を樂ひ求むる有らば

如來の説きたまふ所、甚だ深くして彌廣し

此諸の佛子は、皆悉く安住し

具足し成就すること、猶し普賢の如し

一切の衆生は、尙數を知るべく

一切の三世は、心猶知るべくとも

普賢菩薩の、功德の深廣にして

無量無邊なるは、了知すべからず

一毛は量るべく、十方の虚空の

一切の刹塵は、悉く數を知るべくとも

殊勝の大仙、眞の佛子等の

住する所の功德は、稱量すべからず

【殊勝の大仙、眞の佛子】殊勝大仙は如來を言ひ、眞の佛子とは普賢菩薩を指す

# 大方廣佛華嚴經

卷第一十二

東晉天竺三藏佛跋伽羅譯

## 十地品第二十二之一

【爾時】以下、第六會にして、他化自在天宮に於ける十地會なり。前の三會（十住會、十行會、十廻向會）に於ては住行向の三賢位を説きて以て加行方便を成就したるが故に、本會に在りては入證成果の義を明す。又前三會は比觀の行して善賢圓融の行徳を寄顯し、今は證位に約して三乘差別の行徳を寄顯せり、而して最初は本會の序説に就て初に菩薩の徳を讃稱ぐ。菩薩の名

爾時、世尊、他化自在天王宮の、摩尼寶殿の上に在して、大菩薩衆と俱たりき。阿耨多羅三藐三菩提に於て皆退轉せず、他方の世界より俱に來りて集會せり。

此諸の菩薩は一切の菩薩の智慧行處に、悉く自在を得。諸佛如來の智慧入處に、悉く皆入ることを得たり。善能く一切の世間を教化して、念念の中に於て普く能く神通等の事を示現し、一切の菩薩の所願を具足し、一切の世、一切の劫、一切の國土に於て、常に一切の菩薩行を修し、菩薩の福德智慧を具足して窮盡すること無く。能く一切の爲に饒益を作し、能く一切の菩薩の智慧方便の彼岸に到り、能く衆生をして生死の道に背き、涅槃の門に向はしめ、一切の菩薩の所行を斷せず。善く一切の菩薩の禪定、解脫三昧、神通明慧に遊び、諸の施爲する所善能く示現す。一切の菩薩の無作の神足を皆悉く已に得て、一念の頃に於て、能く十方の諸佛の大會に至り、法輪を勸發し、諮請し、受持して、常に大心を以て諸佛を供養し、常に能く諸の大菩薩の行する所の事業を修習し、其身は普く

【阿耨多羅三藐三菩提】 Anuttara-sambodhi (無上正遍智、無上正等正覺等と譯す佛の證覺又は學智を言ふ)

【爾時】 以下、菩薩の八定及び加持に就て説く

無量の世界に現じ、其音は遍く聞えて至らざる所無く、其心は通達して明かに三世を見、一切の菩薩の有る功徳を具足し、修習せり。是の如きの諸の菩薩摩訶薩の功徳は、無量無邊にして、無數劫に於て説くとも盡すべからず。其名を金剛藏菩薩、寶藏菩薩、蓮華藏菩薩、德藏菩薩、蓮華德藏菩薩、日藏菩薩、月藏菩薩、淨月藏菩薩、照一切世間莊嚴藏菩薩、智慧照明藏菩薩、妙德藏菩薩、梅檀德藏菩薩、華德藏菩薩、優鉢華德藏菩薩、天德藏菩薩、福德藏菩薩、無礙清淨智德藏菩薩、功德藏菩薩、那羅延德藏菩薩、無垢藏菩薩、離垢藏菩薩、種種莊嚴藏菩薩、大光明網藏菩薩、淨明威德王藏菩薩、大金山光明威德王藏菩薩、一切相莊嚴德藏菩薩、金剛炎徧莊嚴藏菩薩、炎熾藏菩薩、宿王光照藏菩薩、虛空無礙妙音藏菩薩、陀羅尼功德持一切世間藏菩薩、海華嚴藏菩薩、須彌德藏菩薩、淨一切功德藏菩薩、如來藏菩薩、佛德藏菩薩、解脫月藏と曰ひき。是の如き等の菩薩摩訶薩は、無量無邊にして思議すべからず。稱讚すべからざるなり。金剛藏菩薩を而も上首と爲せり。

爾時、金剛藏菩薩摩訶薩、佛の威神を承けて、菩薩の大智慧光明に味に入り、即時に十方世界の一方の億那由他の諸佛の微塵数の世界に於て、十億の佛土有り、微塵数の諸佛は皆其身を現して金剛藏と行く。十方の世界も亦復是の如し。同聲に讃じて言はく、「善哉善哉、金剛藏、乃ち能く是菩薩の大智慧光明に味に入れり。是の如く十方世界の微塵数に等しき諸佛も、皆同一號にして、汝に威神を加したまふ。謂ゆる盧舍那佛の本願力の

【無分別智】分別  
智に對す所謂相分  
（概念）を浮べず、  
分別の作用を離れ  
て直に眞如の實性  
に冥合する平等智  
を言ふ。

【十地】菩薩の五  
十二位の中、四十  
一位より五十位に  
至る位なり。この  
佛の菩薩は中道の  
生を化益するを以  
て地と言ひ、十地  
とは歡喜地、離垢  
地、發勝地、紹慧  
地、遠行地、不動  
地、善慧地、法雲  
地の稱なり。本章  
に逐次細釋あり。

故に、大威神力の故に、汝大智慧力を有するが故に、一切の菩薩の不可思議なる諸佛の法  
明を宣べんと欲するが故に、謂ゆる智慧地に入らしめんが故に、一切の善根を擧せしめん  
が故に、善く一切の佛法を分別せしめんが故に、廣法智の故に、決定して諸法を説かしめ  
んが故に、無分別智もて善く分別せしめんが故に、一切世間の法も染むこと能はざらしめ  
んが故に、出世間の善根清淨ならしめんが故に、不可思議なる智力を得しめんが故に、  
一切智人の智の境界を得しめんが故に、謂ゆる如實に菩薩の十地の差別を説かしめんが故  
に、菩薩の十地に安住せしめんが故に、分別して無漏の法を説かしめんが故に、大智慧の  
光明は善く分別して以て自ら莊嚴せしめんが故に、具足の智門に入らしめんが故に、應  
に住すべき所に隨ひて次第に説かしめんが故に、無礙の樂說光明を得しめんが故に、大  
無礙の智地を具せしめんが故に、菩薩の心を忘失せざらしめんが故に、一切の衆生界を  
教化し成就せしめんが故に、一切處に至る決定智を得しめんが故なり。金剛藏、汝當に此  
法門の差別を説くべし。謂ゆる諸佛の神力の故に、汝能く如來の智慧神力を受くるに堪ふ  
るが故に、自の善根清淨なるが故に、清淨法界の故に、衆生を饒益するが故に、法身  
智身に入るが故に、一切の佛に於て受記を得るが故に、一切世間の高大身を得るが故に、  
一切世間の道に過ぎたるが故に、淨き出世間の善根の故なり。即時、十方の諸佛は金剛藏  
に眞實の無上身を與へ、無障礙の樂說辯を與へ、善く分別する清淨の智慧を與へ、善く  
憶念する不忘を與へ、善く決定する慧を與へ、一切智に至るの處を與へ、諸佛の無礙力を

【印】心印とも言ふ。多義を含みたる實義。又は決定の標章の義。  
【諸の佛子】以下金剛藏菩薩三昧より起ちて十地を略説することをも明す

與へ、諸佛の無所畏を與へ、諸佛の無礙智もて諸法を分別して善く法門を聞くことを與へ、一切諸佛の上妙なる身口意業を與へたまへり。何を以ての故に。菩薩の大智慧光明三昧を得たるを以ての故に、亦是れ菩薩の本願力の故に、直心清淨なるが故に、智慧明白なるが故に、善く助道の法を集むるが故に、善く本業を修するが故に、無量の法を念持するが故に、清淨なる光明法を信解するが故に、善く陀羅尼門を得て壞すべからざるが故に、法界智印善く印するが故に。

爾時、十方の諸佛は皆右の手を申べて、金剛藏菩薩の頂を摩でたまひぬ。金剛藏菩薩即ち三昧より起ち、諸の菩薩に告げて言はく、諸の佛子、是諸の菩薩の願は、決定して過ぐるごと有る無く、壞すべからず、廣大なること法界の如く、究竟すること虚空の如く、遍く一切十方諸佛の世界の衆生を覆へ、一切の世間を救度せんが爲に、一切諸佛の神力の盡る所と爲る。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩は過去の諸佛の智地に入り、亦未來現在の諸佛の智地に入ればなり。何等か是れ諸の菩薩摩訶薩の智地なる。菩薩摩訶薩の智地に十有り。過去未來現在の諸佛は、已に説き、今説き、當に説きたまふべし。是地の爲の故に我是の如く説かん。何等をか十と爲す。一に曰はく歡喜、二に曰はく離垢、三に曰はく明、四に曰はく焰、五に曰はく離勝、六に曰はく現前、七に曰はく流行、八に曰はく不動、九に曰はく善慧、十に曰はく法雲、是十地は三世の諸佛に説し、今説し、當説せり。我諸佛の國土として、是地を説かざる者有るを見ず。何を以ての故に。此十地は是れ菩薩

【時に】以下、諸菩薩十地の解釋を講じ、解脫月菩薩後著して請問し金剛藏菩薩と三番三答することをお説く

の最上の妙道、最上の明淨法門なればなり。謂ゆる十地の事を分別せんは、諸の佛子、是事思議すべからず。謂ゆる菩薩の諸地の智慧に應順するなり。金剛藏菩薩よ、諸の菩薩の十地の名を説き已りて、默然として住し、復分別せざりき。

時に一切の菩薩は、菩薩の十地の名を説くを聞き已りて、咸く皆渴仰して、解釋を聞かんと欲し、各是念を作さく、「何の因、何の縁ありてか、金剛藏菩薩は、十地の名を説き已りて默然として住せしや」と。

時に大菩薩衆の中に、菩薩有り解脫月と名く、諸の菩薩の心に念ふ所を知りて、偈を以て問うて曰はく、

淨念智慧の人、何が故に菩薩の

諸地の名號を説き已りて、默然として解脫せざるや

今諸の大菩薩は、心に皆猶豫を懷く

何が故に是名を説きて、而も其義を演べざるやと

大智の諸の菩薩は、咸く皆、聽聞せんを欲す

是の如きの諸地の義を、願くば爲に分別して説きたまへ

是の諸の菩薩衆は、清淨にして穢穢無く、

堅實の中に安住して、智功德を具足す

皆恭敬の心を以て、仁者を瞻仰し

所説を聞かんと欲すること、渴の甘露を思ふが如し。  
時に金剛藏菩薩、是を説くことを聞き已りて、衆をして當はしめん<sup>と欲し</sup>、偈を以て答

へて曰はく、

諸の菩薩の所行は、第一にして思議し難く  
是十地を分別するは、諸佛の根本なり

微妙にして深を見難く、心の清く及ぶ所に非ず

佛の智慧より出づ、若し聞かば則ち迷没せず

心を持すること金剛の如く、深く佛の智慧を信じ

以て第一の妙と爲さば、心に疑難有ること無けん

我を計する心と、及び心所行の地とを遠離せる

是の如き諸の菩薩は、爾乃ち能く聽聞せん

寂滅の無漏智もて、分別して説くとも甚だ難く

虚空に響くが如く、疾風を散ふるが如し

我佛の智慧を念するに、第一にして思議し難し

衆生能く信するもの少し、是故に我默然たり

解脫月菩薩、此を説くを聞き已りて、金剛藏菩薩に語りて言はく、椰子、是大菩薩衆は、

直心清淨にして、善く菩薩の道を行じ、善く助道法を集め、善能く諸佛を恭敬し供養し、

無量佛に於て多く善根を種え、無量の深厚なる功德を成就し、癡と疑悔とを離れ、貪著、及び諸の結礙有ること無く、深心に信解し、安住して勤ぜず、是法の中に於て他の教に隨はず、是故に佛子、當に佛の力を受けて此義を轉演したまふべし。是諸の菩薩は是深法に於て、皆能く證知せん。

時に解脫月菩薩、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を以て頌して曰はく、  
願くば安隱の法なる、菩薩の無上の行を説き

諸地を分別して、智慧をして清淨ならしめたまへ  
衆の皆は淨くして垢無く、安住して深く信解し

諸の無量佛に於て、土地の義を證知せん  
金剛藏菩薩の言はく、佛子、是諸の大衆は、皆清淨にして癡と疑悔とを離れ、是法の中に於て他の教に隨はずと雖も、其餘の小法を樂ふ者は、是甚深にして思議し難き事を聞きて、或は疑悔を生ぜん。是人は長夜に諸の衰惱を受く。我此等を慈み、是故に默然たり。

時に金剛藏菩薩、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を以て頌して曰はく、  
是衆は清淨にして、深智疑悔を離れ  
其心に決定して、復他の教に隨はず  
動かざること須彌の如く、亂れざること大海の如しと雖も

【初章】 母音の根本なきを以て今此章を出せしむり。

其論は久しく行ぜず、智慧未だ明了ならず。

識に隨つて智に隨はざれば、聞き起りて後悔を生じ

彼等に隨趣に墜ちんとす、善念するが故に説かず

解脫の言はく、「佛子、願くは佛の力を承けて、善く此不可思議の法、佛所護念の

事を分斷して、信解し易からしめたまへ。所以は何ん。善く十地の義を説かば、十方の諸

佛は法として應に護念したまふべければなり。一切の菩薩は是事を護るが故に勤行精進

す。何を以ての故に。是れ菩薩の最上の所行にして、一切諸佛の法に至ることを得るが故

なり。初は一切の文字は皆初章に攝せられ、初章を本と爲し、一字として初章に入らざる

者有ること無きが如し。是の如く佛子、十地は是れ一切の佛法の根本にして、菩薩具足し

て此十地を行ぜば、能く一切の智慧を得ん。是故に佛子、願くは此義を説きて諸佛に護念

せられ、加するに神力を以てし、人をして信受し破壊すべからざらしめたまへん。

時に普賢菩薩、此義を明顯せんと欲して、偈を以て頌して曰はく、

善く普賢の子、清淨の行具足せり

願くば十地の行と、所入の十地の法とを説きたまへ

智慧を具足し、以て菩提を成ずることを得ん

有ゆる十方の佛、最勝の人中の尊は

皆共に汝を護念して、是十地の義を説かしめん

【爾時】以下、大衆の菩薩同聲に十地の解釋を請ふることを明す。

【戒定慧】三學と言ふ。戒は持戒、定は靜慮、慧は智恵にして佛教の概括的教條なり。

【爾時】佛、金剛藏菩薩に十地を解釋せしむる爲に加被力を與へ給はんことを請す。

十地を根本と爲し、是を智の行處と名け

亦究竟道と爲す、佛の無量の法聚なり

譬へば諸の文字の、皆攝して初章に在るが如く

諸佛の功德智も、十地を根本と爲す

爾時、諸の菩薩は、一時に同聲に、偈を以て金剛藏菩薩に請ひて言はく、

上妙なる智慧の人は、樂説して量有ること無く

徳の重きこと山王の如し、哀愍もて十地を説きたまへ

戒念慧清淨にして、是十地の義を説くは

十力の根本にして、無礙智の本行なり

戒定慧の功德は、集りて仁者が心に在り

憍慢諸の邪見は、皆悉く心に滅盡し

是衆には疑心無し、唯願くば善説を聞かん

譬へば病めるものの良醫を思ひ、饑ゑたるものの美膳を思ふが如し

我等も亦是の如く、甘露の法味を聞かんとす

是故に曠大の意もて、願くば初地の門

乃至第十地を開き、次第して我爲に説きたまへ

爾時、釋迦牟尼佛、眉間の白毫相より、菩薩力の光明を放ち、百千阿僧祇の光を以て

眷屬と爲し、普く十方の諸佛の世界を照したまひて、周遍せざるなく、惡道の苦も皆休息することを得たり。悉く十方諸佛の大會の說法の聲を照し、如來の不思議力を顯現したまへり。是光明、遍く十方諸佛の大會の諸の菩薩の身を照し已りて、上の虚空の中に於て、大光明の雲臺と成れり。十方の諸佛も亦復是の如く、肩間の白毫より俱に菩薩力の光明を放ち、百千阿僧祇の光を以て眷屬と爲し、普く如來の不思議力を現じ、悉く一切諸佛の大會、及び娑婆世界の釋迦牟尼佛の一切の大衆、并びに金剛藏菩薩、及び師子の座を照したまへり。照し已りて上の虚空の中に於て、大光明の雲臺と成れり。時に諸の大光明の雲臺の中に、諸佛の神力の故に、而も偈を説きて曰はく、

無等等の諸佛は、功德虚空の如く

十力無畏等なる、最尊の世間の主にして

釋迦佛の前に於て、此神力を現じたまひ

佛力を以て、法王の無畏義を開現し

諸地の所行と、諸地の義の差別とを説きたまふ

諸佛の神力を承けて、能く壞する者有ること無く

若し人法寶を開かば、則ち諸佛の爲に護られ

漸次に諸地を具して、以て佛道を成ずることを得ん

若し人聞くに堪任せば、大海

【爾時】以下、十地の解釋に就き上來諸菩薩の請問に對し、金剛藏菩薩漸く其語を入れ説くを許し、其分齊を顯すなり。

【諸佛聖主】以下十三頌半、初七偈半は義大即ち十地の法の甚深なる義を頌し、後の六偈は説大即ち説相の廣大なることを頌す。

【言辭説く所云云】此法は涅槃の相に同等即ち眞如の相なれば、法然として空寂、何の著すべきなく、又言語

及び劫火の中に在りと雖も、心、此經を聞くことを得ん  
 若し人癡と疑ふとあらば、終に聞くことを得る能はじ  
 是故に今佛子、諸地の智道を説き  
 勢力觀法に入り、次第に修行して  
 餘地に至ることを得、各利益する所を得て

一切の世間を利す、願くば説きて斷ちしむること勿れ  
 爾時、金剛藏菩薩、十方を觀察して、大衆をして信敬を増益せしめんと欲し、偈を以て

説して曰はく、

諸佛聖主の道は、微妙にして甚だ解し難く  
 思量の得る所に非ず、唯知者のみの行處なり  
 其性は本來、寂然として生滅無し  
 本より已來空にして、諸の苦惱を滅除す  
 諸趣を遠離して、涅槃の相に等同に  
 中も無く亦後も無く、言辭の説く所に非ず  
 三世を出過して、其相は虚空の如し  
 諸佛所行の處は、清淨にして深く寂滅し  
 言語の及び難き所なり、地行も亦是の如く

を離るとの意。離言眞如と言ふが如し。

【心數と道】心數とは思慧の意、道とは心道の義、道

と共報生へ業報として生得とせるの知識を言ふ

【智】此智は無分別の證智を指す。

【識】一般的情分別の智

即ち妄情分別の智

慧を言ふ。

【因喻】因は因故

喻は譬喩なり、因故を拵け譬喩を以

之を説くすら猶尚難し、何に況んや以て人に示すをや。諸佛の智慧は、諸の心數と道とを離れ

思議することを得べからず、陰界入有るに非ず

但智を以てのみ知るべく、盡の及ぶ所に非ず

空迹の如く盡を離し、何ぞ其相を示すべき

干地の義も是の如く、心意の所行に非ず

是事難しと爲すと雖も、發顯して慈慧を行せば

漸次に諸地を具して、智者の能く及ぶ所なり

是の如き諸地の行は、微妙にして甚だ見難く

心を以て知るべからず、當に佛力を承けて説くべし

汝等當に恭敬して、或共に一心に聽くべし

智慧の隨順する所の、諸地の相に入る行は

無量億劫に於て、之を説くとも盡すべからず

今如實に略説せんに、其義餘り行ること無し

一心に恭敬して待て、今佛力を承けて説き

大音に因喩を唱へ、義と名と相違せし

佛の神力は無量なり、今皆我身に在り

て説くとの意。  
【義と名】道理と  
言語(文字)の意。  
【諸の佛子】以下  
愈本説なり。  
章の中、第一に初  
地を説き、始に初  
地の住相を明す。

【自然智】自然は  
本來又は本然なり  
即ち法然の智なり  
先天的生得の佛性  
智と言ふべし。

【如來種】如來の  
種子即ち佛性なり

我の説く所の者は、大海の一滴の如し。

金剛藏菩薩、此偈を説き已りて、大衆に告げたまはく、「諸の佛子、若し衆生厚く善根を  
集め、諸の善行を修し、善く助道法を集め、諸佛を供養し、諸の清白法を集め、善知識  
の爲に護られ、深廣の心に入り、大法を信樂し、心多く慈悲に向ひ、好んで佛の智慧を求  
めなば、是の如きの衆生は、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發さん。一切種智を得んが  
爲の故に、十力を得んが爲の故に、大無畏を得んが爲の故に、佛法を具足することを得ん  
が爲の故に、一切の世間を救はんが爲の故に、大慈悲心を淨めんが爲の故に、十方無餘の  
無礙智に向はんが爲の故に、一切の佛國を淨めて餘り無からしめんが爲の故に、一念の中  
に於て三世の事を知らんが爲の故に、自在に大法輪を轉じて廣く佛の神力を示現せんが爲  
の故に、菩薩摩訶薩は是の如きの心を生ず。諸の佛子、是心は大悲を以て首と爲す。智慧  
増上の方便に護られ、直心深心淳至にして量は佛力に同じく、善く衆生力と、佛力とを決  
定して無礙智に趣向し、自然智に隨順して能く一切の佛法を受け、智慧を以て教化し、廣  
大なること法界の如く、究竟すること虚空の如くにして未來際を盡す。菩薩是の如きの心  
を發さば、即時に凡夫地を過ぎて菩薩の位に入り、佛家に生在し、種性尊貴にして護嫌す  
べき無く、一切世間の道を過ぎて、出世間の道に入り、菩薩法の中に住し、諸の菩薩の數  
に在りて、等しく三世の如來種の中に入り、畢定して阿耨多羅三藐三菩提を究竟せん。菩  
薩是の如きの法に住するを歡喜地に住すと名く、不動の法を以ての故なり。

【諸の佛子】以下  
初地即十歡喜地の  
名を釋す

【依止】所依止な  
り 轉り來の意

諸の佛子、菩薩摩訶薩は歡喜地に住すれば、多くの喜、多くの信、多くの清淨、多くの  
 の踊悅多くの調柔、多くの堪受あり、闘争を好まず、衆生を憐愍することをお好まき、瞋恨  
 を好まず。諸の佛子、諸の菩薩此歡喜地に住すれば、諸佛を念ずるが故に、歡喜の心を生  
 ず。諸佛の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩摩訶薩を念ずるが故に、歡喜の  
 心を生ず。諸の菩薩の所行を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の沒羅蜜の清淨なる相  
 を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の菩薩と衆の殊勝とを念ずるが故に、歡喜の心を  
 生ず。諸の菩薩の境すべからざることを念ずるが故に、歡喜の心を生ず。諸の如來の教  
 化の法を念ずるが故に、歡喜の心を生ず。能く衆生を利益することを巧きと念ずるが故  
 に、歡喜の心を生ず。一切の佛、一切の菩薩の入る所の智慧方便門を念ずるが故に、歡喜  
 の心を生ず。菩薩は復基念を作さく、我轉じて一切世間の境界を離れて歡喜の心を生じ。  
 一切の佛の平等の中に入りて歡喜の心を生じ。凡夫境を遠離して歡喜の心を生じ。智慧地  
 に近きて歡喜の心を生じ。一切の惡道を斷じて歡喜の心を生じ。一切衆生の與に依止と作  
 りて歡喜の心を生じ。近く一切の諸佛を見たてまつりて歡喜の心を生じ。諸佛の境界を生  
 じて歡喜の心を生じ。一切諸の菩薩の數に入りて歡喜の心を生じ。一切の恐怖を離れて  
 歡喜の心を生ぜん」と。所以は何ん。是菩薩、歡喜地を得れば、有ける怖畏は、即ち皆遠  
 隔す。謂ゆる不活の畏、惡名の畏、死の畏、惡道に墮する畏、大業威徳の畏なり。是の如  
 き等の一切諸の畏を離る。何を以ての故に。是菩薩は我相を離るるが故に、尙身をも食

【諸の佛子】以下  
歡喜地に安住する  
の相を説く。

【増上】増進加上  
の意。今は深き信  
心の決定する義なり。

【分別】己の證智  
を衆生に分授別與  
する意、即ち化他  
行の義。

【不共の法】自他  
各別に感得したる  
法の義。如來の不  
共法とは十力、四  
無畏等の如き法に  
して如來外の窺知  
し難き法なり。

らず、況んや所用の物をや。是故に菩薩には不活の畏無し。心に恭敬し、供養せらるること  
を希冀せず、我座に衆生に供養して須むる所を供給すべし」と、是故に菩薩には惡名の畏  
無し。我見を遠離して我相無きが故に、死の畏有ること無し。又是念を作さく、「我若し死  
し已らば、生ずる所に必ず諸佛菩薩を見たてまつらん」と、是故に惡道に墮するの畏有る  
こと無し。我が志樂する所は與に等しき者無し、何に況んや勝れたるもの有らんをや」と、  
是故に大業威徳の畏有ること無し。是の如く菩薩は永く一切諸の恐怖の事を離る。

諸の佛子、是菩薩は大悲を以て首と爲し、一切の衆生に於て心に嫌恨無く、直心堅固  
にして、自然に清淨に、轉じて復一切の善根を勤修す。謂ゆる信心増上し、多く淨心を  
行じ、解心清淨にして、多く信心を以て分別し、大悲を出生し、大慈を成就して、心  
疲懈せず、慚愧を以て莊嚴して、忍辱柔和を成就し、諸佛の教法に敬順し、善知識を信  
重して、日夜常に一切の善根を信し、常に法を愛樂し、多聞を求めて厭くこと無く、所聞  
の法の如く正念し觀察して、心に貪著せず、名聞を求めず。利養資生の物を求めず、常に  
寶心を生じて厭足有ること無し。一切智地を樂ひ、諸佛の力と無所畏と不共の法とを得ん  
と欲し、助の諸波羅蜜を求め、諸の詔問を離れ、説の如く能く行じ、常に實語を行じて諸  
佛の家を汚さず、菩薩の戒を捨てず、薩婆若を生じて心勵せざること山下の如く、世間の  
事を樂はずして出世間の善根を成就し、助菩提の法を集めて厭足有ること無く、世間の  
の勝道を求む。菩薩は是の如き淨地の法を成就するを、名けて歡喜地に安住すと爲す。

【菩薩は是の如く】以下歡喜地安住の菩薩の願行果の三相を顯勝す。其第一として大願發量を明す。即ち供養の願より第十の成菩薩の願に至る十大願を説く。

【法を攝す】衆生の爲に説法を啓請する義なり。  
【三時轉】三度請じて法を轉ずるが故に三時轉と言ふ

【總釋】以下有壞の六相は本經説の轉異點にして、本家の歸趣たる同融無礙の教理たり。萬有の各に此總相

菩薩は是の如く歡喜地に安住すれば、諸の大願を發して、是の如きの定心を生ぜん。謂ゆる、我當に清淨の心を以て一切の諸佛を供養したてまつりて、皆隨有ること無く、一切の供具は意に隨ひて供養すべしと。是の如き大願を發して、廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡して、盡く一切劫の中の有ゆる諸佛を供養したてまつり、大供養を以て具して、休息有ること無し。又一一切諸佛の設きたまふ所の經法は皆悉く受持して、一切諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を攝し、一切諸佛の教化する所の法には悉く皆隨順し、一切諸佛の法は皆華く守護せん」と。是の如き大願を發して廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡して、盡く皆一切劫の中の一切の佛法を守護して休息有ること無し。又一一切世界の一切の諸佛は、兜率天より下りて入胎し胎胎し、初生し出家して佛道を成ぜし時、大法輪を轉ぜんことを説き、大涅槃に入ることを示したまふ。我爾時に於て、盡く往きて供養したてまつり、法を攝することを首と爲さん、三時に轉ずるが故に」と。是の如き大願を發して、廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡し、一切劫を盡して一切諸佛を奉迎し、供養したてまつりて休息有ること無し。又一一切の菩薩の所行は廣大無量にして、壞すべからず、分別無く、諸の波羅蜜の攝する所、諸境を淨めて生ずる所の諸の助道法、總相、別相、有相、無相、有壞、有壞なり。一切の菩薩の行所の諸境の道、及び諸の波羅蜜と本行ともて、一切を教化して其受行の心をして增長することを得しめん」と。是の如き大願を發して、廣

以下の六相ありて而も一の上互に容融して無礙自在なりと言ふ。六相各の釋は本經說に載る。

【無想】無想天のこと。(前註)

【非無想】無色界の前三處、空無邊處、識無邊處、無所有處を言ふ。

【非有想】無色界の第四、非想非非想處を言ふ。

【卵生】以下化生を四生と言ひ、卵は鳥類の如き、胎は人獸類の如き、濕氣より化は縁に因らずして忽爾として生ずるを言ふ。

【名色】十二因縁の一。俱舍所論は受想行識の四蘊を名と言ひ、色を加へての五蘊の托胎後六根圓滿に至る期間を名け、唯識は若干其說を異にするも、要するに異熟種子(五蘊)に

大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡して、盡一切劫の中の菩薩の所行は、諸の教化を以て衆生を成就して、休息有ること無し。又一切の衆生、若は有色、若は無色、有想、無想、非有想、非無想、卵生、胎生、濕生、化生にて、三界に繋かれ、六道の一切生處に入り、名色に攝せらるるものは、教化し成就して、一切世間の道を斷ち、佛法に住せしめて、一切の智慧慈有ること無からしめん」と。是の如き大願を發して廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡して一切劫を盡して、一切衆生を教化して休息有ること無し。又一切世界の廣狹、及びその中の無數、無量にして分別すべからず、壞すべからず、動すべからず、説くべからざる盡細、正住、倒住、平坦、方圓なる、隨ひて是の如き世界に入る智は、因陀羅網の如く差別せり、是の如き十方世界の差別を皆現前に知らん」と。是の如き大願を發して廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡し、一切劫を盡して、是の如きの世界を皆現前に知りて休息有ること無し。又一切の佛土一佛土に入り、一佛土一切の佛土に入り、一一の佛土は無量に莊嚴せられて、諸の垢穢を離れ、清淨を具足し、智慧の衆生は悉く其中に滿ち常に諸佛の大神通力有りて、衆生の心に隨ひて爲に示現せん」と。是の如き大願を發して廣大なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡し、一切劫を盡して、是の如き國土を淨めて休息有ること無し。又一切の菩薩は同心同學して、共に諸善を集めて怨嫉有ること無く、同一の境界に等心に和合して、常に相離れず、其所應に隨ひて

名くと云ふ。  
 【正住】 仰世界即  
 ち人間世界の如き  
 なり。  
 【倒住】 伏世界即  
 ち蜂の巢の如き下  
 に向へる世界を言  
 ふ。

能く佛身を現じ、自ら心中に於て悉く能く諸佛の境界と、神通の智力とを解知し、常に  
 隨意の神通を得て、悉く能く一切の國土に遊行し、一切の佛會に皆身相を現じ、一切の生  
 處に普く其中に生じ、是の如きの不可思議なる大智慧を有して菩薩の行を具足せん」と。  
 是の如き大願を發して願成なること法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡し  
 一切劫を盡して、是の如きの大智慧の道を行じて休息有ること無し。又、不還の輪に乗じ  
 て菩薩の道を行じ、身口意業の作す所空しむらず、衆生の見らば即ち佛法を必定し、我  
 音聲を聞かば即ち眞實の智慧を得、我を見らば心即ち歡喜し、諸の煩惱を離るる  
 こと藥樹王の如きを得んが爲に菩薩の道を行せん」と。是の如き大願を發して、廣大なる  
 こと法界の如く、究竟せること虚空の如く、未來際を盡し、一切劫を盡して不還の道を行  
 じ、作す所空しからずして休息有ること無し。又、一切の世界に於て皆阿耨多羅三藐三菩  
 提を得、一毛端に於て入胎し、出家し、道場に坐して佛道を成じ、法輪を轉じて衆生を度  
 すること示現し、大涅槃を示し、諸の如來の大神通智力を現じ、一切衆生の度すべき所  
 の處に隨ひて、念念の中に佛道を得、一切の法は涅槃の相の如しと知り、一音聲を以て、  
 一切の衆生をして皆歡喜を發さしめ、大涅槃を示して而も菩薩の所行を離せず、衆生に大  
 智地を示して、一切の法は皆是れ假有なることを知らしめ、大智慧の神通自在を以て、變  
 化を出生して法界に充滿せん」と。是の如き大願を發して廣大なること法界の如く、究  
 竟せること虚空の如く、未來際を盡し、一切劫を盡して、佛道の事を得、大智慧大神通等

【心所緣】所化の衆生の心器に隨うて説法するを以て心所緣と言ふ。  
 【起智】佛智所入の境は眞性なり、故に眞如即ち眞性の理より發する智なるを以て起智と言ふ。

【世間轉】前の衆生世界、虚空を言ひ、法輪とは前の法界、涅槃、佛出世を言ひ、智轉とは後の諸佛の智慧、心の所緣、起智を言ふ。

【諸の佛子】以下第一の大行の校量を明し、中に信行以下俱養修行に至る十大行を説けり

を求めて休息有ること無し。諸の佛子、菩薩は歡喜地に住するに十願を以て首と爲し、是の如き等の百萬阿僧祇の大願を生じ、上の不可盡の法を以て是願を生じ、此願を滿ぜざるが爲に精進を勤行す。何等をか十と爲す。一に衆生不可盡、二に世界不可盡、三に虚空不可盡、四に法界不可盡、五に涅槃不可盡、六に佛出世不可盡、七に諸佛智慧不可盡、八に心所緣不可盡、九に起智不可盡、十に世間轉法輪智轉不可盡なり。若し衆生盡きなば我願も乃ち盡きん。若し世界、虚空、法界、涅槃、佛の出世、諸佛の智慧、心の所緣、起智、諸轉盡きなば我願も乃ち盡きん。而も衆生は實に盡くべからず。世界、虚空、法界、涅槃、佛の出世、諸佛の智慧、心の所緣、起智、諸轉は實に盡くべからず。我諸願の善根も亦盡くべからず。

諸の佛子、菩薩決定して是大願を發さば則ち利安の心、柔軟の心、調順の心、寂靜の心、不放逸の心、寂滅の心、直心、和潤の心、不恚の心、不濁の心を得。是の如くして則ち信を成ずる者は、樂ひて信を以て功德を分別し、諸佛の本所行の道を信じ、諸の波羅蜜を行じて增長を得ることを信じ。善く諸地に入りて殊勝の功德を得ることを信じ。佛の十力を成ずることを得るを信じ。四無所畏を具足することを信じ。不共の法は壞すべからざることを信じ。諸佛の法は不可思議なることを信じ。諸佛の自在神力は無量無邊なることを信じ。諸の如來の無量の行門を信じ。因緣に隨ひて以て果報を成ずることを信ず。要を擧げて之を言はば、諸の菩薩の普行、諸佛の功德、智慧、威神力等を信ず。諸の佛子、

【欲流】流は流注不斷の義、又煩惱の異名なり。欲界の見と無明とを除ける一切の煩惱を欲流と言ふ。

【有流】色、無色兩界に於ける見と無明とを除ける一切の煩惱を言ふ。

【暴流】三界の見聞、迷界の分別を言ふ。

【無明流】三界の四諦及び修道の五部に生ずる疑の煩惱のことにして、欲、見、有と合して四流又は四暴流と稱す。

【心意識】心は第八識、意は第七識、識は前六識（眼耳

菩薩は是念を作さく、諸佛の正法は是の如く甚深、是の如く相を離れ、是の如く寂滅、是の如く空、是の如く無相、是の如く無作、是の如く無染、是の如く無量、是の如く廣大、是の如く壊し難し、而も諸の凡夫の心は邪見に墮し。無明、癡、冥、其慧眼を蔽ひ、常に憍慢の情を立て、渴愛の網に墮在し。詔曲に隨順して、常に憍慢を懷き、後身の生ずる處の因縁を作り、多く貪欲、瞋恚、愚癡を集め、諸の重業を起し、嫉恨の猛風は罪心の火を吹きて常に熾然ならしめ、施作する所有れば皆顛倒と相應し、欲流、有流、見流、無明流相續して、心意識の種子を起し、三界の地に種多て苦惱の芽を生ず。謂ゆる名色なり、名色和合して六入を増長し、根塵相對して觸を生じ、觸の故に受を生じ、受を食り樂ふが故に愛を生じ、愛増長するが故に取を生じ、取の因縁の故に復後有を起す。有の因縁の故に生老病死の憂悲苦惱有り。是の如き因縁は諸の苦聚を集め、諸の苦惱を受く。是中に我無く、我所無く、作者無く、受者無く、知者無く、草木瓦石無く、又影響の如し。凡夫は惑むべし、知らず覺らずして苦惱を受く。菩薩此に於て、諸の衆生の諸苦を免れざるを見て即ち大悲の智慧を生じ、是の諸の衆生をば我應に救護して、畢竟佛道の樂に住せしむべし。即ち大慈智慧を生ず。菩薩摩訶薩は是の如き大慈悲の法に隨順し、深妙の心を以て何地に在住し、一切の物に於て貪惜する所無し。諸佛の大妙智を尊重するが故なり。大施の學行して即時に有つ所を盡く能く施與し、金、銀、摩尼、神珠、瑪瑙、瑠璃、珊瑚、琥珀、珂貝、珍寶、瓔珞、華身の具、及び、象馬、羖、羖、人民、奴婢、園土、城邑、園林、遊觀、婁婁男女、一切の

鼻舌身意)の意なるも、一語に解すれば諸識の意なり

【又此菩薩】以下第三に果の校量を明し、調柔果、發明果、攝報果、願智果の四果を説く【後の二攝法】利益と同時とを指す

愛する所を皆悉く施與し、頭目耳鼻、肢節手足をも、深く佛を重んずるが故に、而も食惜せず。菩薩摩訶薩は初地に任して、能く大施を行す。是菩薩は大悲心と大施心とを以て一切衆生を救ふが故に、世間出世間の利益の事を勤求して心に疲懈無し。是故に菩薩は疲倦無きの功德を生じ、諸の經書に於て能く自ら開解す、是故に經書を知るの功德を生ず。是の如く經書を知るの智慧を得て、善能く作すべきことと、作すべからざることとを籌量し上中下の衆生に於て隨宜に利益す。是故に菩薩は、世智の功德を生ず。世智の功德を得ば則ち時を知り、量を知り、慚愧の莊嚴もて、自利利彼の道を修習す。是故に則ち慚愧の功德を生ず。是の如きの功德を、精勤し修行して、心に懈退せず、是精進不退の功德は、即ち堪受の力を得。堪受の力を得已りて、勤行して一切の諸佛を供養したてまつり、佛の所説に隨ひ、説の如く修行す。諸の佛子、是菩薩に悉く是の如きの淨地の法を生起することを知れり。謂ゆる信と慈と悲と施とに、疲倦有ること無く、諸の經書を知り、善く世法を解し、慚愧し、堪受し、諸佛を供養し、所説の如く行す。

又此菩薩歡喜地に住して、少しく諸佛を見たてまつるも、願力を以ての故に、廣く數百千萬億那由他の諸佛世尊を見たてまつりて、心大いに歡喜し、深心に愛敬し、上樂具を以て、諸佛及び一切の僧に供養す。是福德を以て皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是菩薩は諸佛を供養するに因るが故に、衆生を救化する法を生じ、多く二攝を以て衆生を攝取す。謂ゆる布施と愛語となり。後の二攝法は信解力を以て行すれども、未だ善く通達せず。是

【是處】所證の眞理。非是處とは所斷の斷常二執なり。善く諸地の轉じ云云。自地の行じ成就すれば滯住せず、向上するの意

菩薩は隨所に諸佛を供養して、衆生を教化し、皆能く諸の淨地の法を受行す。是の如き諸の功徳を、皆薩婆若に廻向して、轉た益明顯となり、有用に堪任す。譬へば金匱の金を鍊るに、鑄ひて火力を以てすれば鋼系にして用ふべく、光色を増益するが如し。是の如く菩薩は諸佛を供養し、衆生を教化し、淨地の法を行じ、此諸の功徳を皆薩婆若に廻向すれば、轉た益明顯となり、意に隨ひて用ひらる。諸の佛子、是菩薩摩訶薩は初地の中の行果の相貌に於て、諸佛、菩薩、善知識の所に從ひて、成地の法を諮受し。請問して、厭廢有ること無し。是菩薩は初地の中に住して、諸佛菩薩善知識の所に於て、第二地の中の行果の相貌を諮受し。請問して厭足有ること無し。是の如く第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地の中の行果の相貌を、諸佛菩薩善知識の所に從ひて、諮受し。請問して十地の法を成じ厭廢有ること無し。是菩薩は、善く諸地の對治法を知り、善く諸地の破壞を知り、善く諸地の行果を知り、善く分別して諸地を得ることを知り、善く諸地の清淨行を知り、善く諸地の一地より一地に至る行を知り、善く諸地の是處、非是處を知らず、善く諸地の轉じて所在の處を知り、善く諸地の勝進業を知り、善く諸地の不退轉を得ることを知り、乃至、善く一切の菩薩の淨地の法は、如來の智地に入ることを知る。諸の佛子、是の如く菩薩は善く諸地の行を知り、未だ諸地を發さざるに乃ち十地を知りて、躓有ること無く、諸地の智慧光明を得、乃至諸佛の智慧光明を知る。大商主の多く賈人を誘ひて大城に至らんと欲するに、先づ道路の邊邊、過咎、道に在るの利害を問ひ、未だ利ある處を

發せざるに、道の宿時を知り、乃至善く彼處に到る事を知り、能く智慧を以て思惟し、籌量し、諸の資用を具へて乏くる所無からしめ、正しく人衆を導きて大城に至ることを得て、險道の中に於て、諸の患難を免れ、身及び衆人も、皆憂惱無きが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。初地に任して、善く諸地の對治法を知り、乃至善く一切の菩薩の淨地の法を知りて、如來の智地に入る。爾時、菩薩は大福德智慧の資糧を集めて、衆生の商主の爲に、隨宜に教化して、生死の險難惡處を出でしめ、安隱の道を示し、乃至薩婆若の智慧の大城に任し、諸の憂惱無からしむ。是故に菩薩は常に應に心破他せざるべく、諸地の木行を勤修し、乃至善く如來の智地に入ることを知る。諸の佛子、是を略して菩薩の歡喜地に入ることを説くと名く。廣く説かば則ち無量百千萬億阿僧祇の事有り。菩薩歡喜地に住すれば、多く閻浮提王と作り、豪貴自在にして、常に正法を護り、能く大施を以て衆生を攝取し、善く衆生の慳貪の垢を除き、常に大施を行じて窮盡すること無く、作す所の善業は布施、愛語、利益、同事なり。是諸の福德は、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず、諸の同行の菩薩を念ずることを離れず、菩薩の所行の道を念ずることを離れず、佛の波羅蜜を念ずることを離れず、十地を念ずることを離れず、諸力、無畏、不共法を念ずることを離れず、乃至具足一切種智を念ずることを離れず。常に是心を生ずらく、我當に一切衆生の中に於て首と爲り、勝と爲り、大と爲り、妙と爲り、上と爲り、無上と爲り、導と爲り、將と爲り、師と爲り、尊と爲り、乃至一切衆生の中に於て依止者と爲るべし。

と。諸の佛子、是菩薩は、若し家を捨てて勤行精進せんと欲せば、佛法の中に於て、便ち能く家、妻子、五欲を捨てん。出家することを得ば、勤行精進せば、須臾の間に於て、百の三昧を得、百の佛を見ることを得、百佛の神力を知り、能く百佛の世界を動かし、能く百佛の世界を照し、能く百の世界の業生を教化し、能く住すること壽百劫にして、能く過去未來世の各百劫の事を知り、能善く百の法門に入り、能く身を變じて百と爲し、一の身に於て能く百の菩薩を示し、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、自在に示現すること此數に過ぎて、百千萬億那由他劫にも計り知るべからず。時に金剛藏菩薩、重ねて此義を問さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

若し諸の衆生有りて、厚く善根を修習して

清白の法を成就し、諸佛に親近し

清淨なる信樂の力もて、慈悲心に誦願せん

是の如き人は能く、無量の佛智を發す

諸佛の一明智あり、無量力清淨に

堪受の力堅牢にして、諸佛の法を成就す

悲心もて世間を救ひ、諸佛の國を淨修し

敷演して法輪を轉せんとて、此無上の願を發す

一念に三世を知りて、而も別異有ること無く

【若し諸の衆生】  
以下頌を以て義を明す。總じて四十五偈半より成り初二十二偈は正説を頌す。

種種の時に差別して、以て世間に示す  
略して説かば則ち盡く、諸佛の功徳を求めて

廣大の心を發すこと、猶し虚空の若し

悲心は智慧の首にして、方便は修行に合し

深き直心は淳室にして、其力量有ること無し

心の向ふところ障礙無く、而も他教に隨はず

諸佛の平等に同じて、大心を生ず

諸の佛子は、是の如きの寶心を發生すれば

即ち凡夫地を離れて、佛の所行に入り

即ち如來の家に生れて、譏嫌すべきこと有ること無ければ

諸佛に同じく、必ず無上道を成ぜん

是の如き心を生ずる時は、即便初地を得て

其心動すべからざること、猶し大王の如し

是菩薩は便ち、大喜の相有りて顯現し

其心常に清淨にして、大事を受くるに堪ふ

心闕訟を樂はず、衆生を惱ますことを好まず

瞋恨の心有ること無く、慚愧恭敬を樂ふ

又直心を行行し、諸根を守護す  
常に世間を救はんことを念ひ、諸佛の智を求めんことを念へて  
心に歡喜を生ぜば、我當に此事を得べし  
歡喜地を得ば、即ち五の悲怖を過ぐ  
不活と死と惡名と、惡道と業の威徳となり  
我、及び我向に貪著せざるを以ての故に  
是諸の佛子等は、諸の怖畏を遠離す  
常に慈悲心を行じ、恆に信有りて恭敬し  
慚愧の功徳備はり、晝夜に善法を増し  
功徳の實利を樂みて諸欲を樂はず  
所聞の法有るが如きは、能く常に善く思惟し  
貪著の行有ること無く、諸の利養の心を斷つ  
常に菩提を樂ひ、一心に佛智を求め  
諸の波羅蜜を行じて、諸法の心を離る  
常に隨ひて能く行じ、實語の中に安住して  
諸佛の家を汚さず、菩薩の學を捨てず  
世間の事類を遠離し、世間を出づることを樂ひ

【諸の菩薩】以下  
二十一偈半は校量  
顯勝を頌す。

善法を求めて厭くこと無く、精進した増益す  
諸の菩薩は是の如く、好んで諸の功徳を樂ひ  
而も大願を發し、求めて諸佛を見たてまつらんと欲す  
法を護りて佛の所に至り、菩薩の妙行を行じて  
一切の衆生を化し、一切の佛土を淨む  
我が佛國土の中に、満てる諸の大菩薩は  
諸の菩薩同心にして、見聞皆空しからず  
一切の微塵の中にて、諸佛は佛道を成じ  
是の如き等の、無量無邊の願を發せり  
是願は窮盡すること無く、虚空、衆生、法界  
涅槃、諸佛の出世、智慧、心縁、起  
智轉の如く、我が願は是の如く住す  
是の如く大願を發して、心柔軟にして調服し  
能く佛の功徳を信じ、而も衆生を觀ず  
囚縁より起ることを知れば、則ち慈悲の心を生じ  
即ち苦の衆生に於て、我當に之を救度すべし  
是衆生の爲の故に、而も種種の施を行す

謂ゆる妙國土、一切諸の珍寶

象馬及び車乘、眷屬と人民と

頭目及び手足と、肌肉とを棄して悔ゆること無く

種種の經書を求めて、心に疲倦有ること無く

其淺趣を解することを得て、能く世に隨つて行ず

慚愧堪受の力、漸く增長することを得しめ

能く恭敬の心を以て、無量の佛を供養したてまつる

智者は日夜に於て、是の如く常に修行して

善果轉々明淨なること、猶し餘金を遺するが如し

菩薩是地に住すれば、能く十住を了知し

展轉して修行する時、諸の障礙有ること無し

譬へば賈客の主、諸の商人を利せんと欲して

先づ道路の中の、諸の艱難の事を問ふが如し

菩薩初地に住すれば、善く諸地の行を知り

而も障礙有ること無く、能く佛地に至る

是初地の中に住すれば、多く閻浮の玉と作り

善く諸法を知りて、常に慈悲心を行じ

【今初地の義】以下、二偈は結語なり。以て第一歡喜地を説き終る。

法の如く化導して、一切皆信敬し、  
勤めて布施を行ぜしめ、以て佛の智慧を求む  
菩薩若し國を捨てて、佛法の中に出家し  
精進を勤行せば、即ち百の三昧を得  
能く百の諸佛を見たてまつり、百の國土を震動し  
光明百國を照し、飛行も亦是の如くならん  
百士の衆生を化し、百の法門に入り  
百劫の事を念知し、百身を示現し  
能く百の菩薩を以て、眷屬となして示現せん  
若し其れ願力を以てせば、是數に過ぐる事無量ならん  
今初地の義を明すに、但略を以て解説せり  
若し廣説を欲せん者には、億劫にも盡すこと能はざらん  
是れ初の菩薩地にして、之を名けて歡喜と爲す  
衆生を利益する者に、今已に分別し竟る

# 大方廣佛華嚴經 卷第二十四

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

## 十地品第二十二之二

【一切の菩薩衆は、上地の義を説くを聞きて、其心皆清淨にして、歡喜すること量有ること無く、各所の處に於て、踊りて虚空の中に住し、諸の上妙の華を以て、金剛藏に散す。咸く皆稱讚して言はく、善哉金剛藏。大智無所畏にして、善く菩薩の地を説きたまふと。解脱月大士、衆の心清淨にして、第一地の、行相の諸説を聞かんと欲するを知りて、即ち金剛藏に請ひたまはく、大智、聞かんと欲す。第二地の行相を解説したまへ、一切皆聞かんと欲す。金剛藏菩薩、解脱月菩薩に語りて曰はく、佛子、菩薩摩訶薩は已に初地を具足して、第二

【佛子】 以下、本

一切の菩薩衆は、上地の義を説くを聞きて、其心皆清淨にして、歡喜すること量有ること無く、各所の處に於て、踊りて虚空の中に住し、諸の上妙の華を以て、金剛藏に散す。咸く皆稱讚して言はく、善哉金剛藏。大智無所畏にして、善く菩薩の地を説きたまふと。解脱月大士、衆の心清淨にして、第一地の、行相の諸説を聞かんと欲するを知りて、即ち金剛藏に請ひたまはく、大智、聞かんと欲す。第二地の行相を解説したまへ、一切皆聞かんと欲す。金剛藏菩薩、解脱月菩薩に語りて曰はく、佛子、菩薩摩訶薩は已に初地を具足して、第二

地の正意なり。就中三段に分ち第一に發起淨を明す。【古語】離垢地。第二に自體淨、就中攝律儀戒を明す。【正見】諦は眞道なり。眞理を語るを言ふ。【應時語】隨時語の意にして、時機に應じて語るを言ふ。【破壞の心】和合を破壞する意、即ち離間を策する心を言ふ。【無義の語】眞實の義なき巧言、綺語又は雜穢語とも言ふ。【占相】相(様子)を占ふなり、卜測して偶然を期待する山師を言ふ。【正見】八正道の一、佛の正法に準據せる思想見解なり。

地を得んと欲せば、常に十種の直心を生ずべし。何等をか十と爲す。一に柔軟心、二に調和心、三に堪受心、四に不放逸心、五に寂滅心、六に眞心、七に不難心、八に貪吝無き心、九に勝心、十に大心なり。菩薩は是十心を以て第一地に入ることを得。

菩薩、離垢地に住すれば、自然に一切の役生を遠離し、刀仗を捨棄し、瞋恨の心無く、懶有り愧有り。一切衆生に於て慈悲心を起し、常に樂事を求め、尙惡心もてすら衆生を憐まさず、何に況んや害を加へんをや。諸の劫盜を離れ、資生の物は常に止足を知り、若し物の他に屬し、他の受用する所は、是物の中に於て與へざれば取らず。刑姓を離れて自ら妻色に足り、他の女人に於て一念をも生ぜず。妄語を離れ、常に眞實語し、諛語し、隨語し、乃至夢中にすら尙妄語せず、何に況んや故に作さんをや。兩舌を離れて破壞の心無く、鬪諍に於て離散したる人の中に於て常に好んで和合せしめ。惡口を離れ、有ゆる言語の麤獷にして苦惡なるは、自ら其身を壞り、亦他を壞る、是の如き等の語は、皆悉く捨離し、無義の語を離れて常に自ら言説すべき所の、應作と不作とを守護し、常に時語利益語、順法語、護軍語を知り、乃至戲笑すら尙犯す所無し、何に況んや故に作さんをや。他物を貪らず、若し物の他に屬し、他の攝用する所には、是念を作さず、「我當に之を取るべし」と、瞋害の心を離れて、常に衆生に於て愛潤の心、慈悲の心を求め、占相を離れて正見を習行し、決定して深く罪福の因縁を信じ、詭曲を離れて誠に三寶を信じ、決定の心を生ず。菩薩は是の如く常に善導を護りて、是思惟を作さく、「一切衆生の惡道に墮する者は、皆

【善善は是の如く】以下此一節は編善法戒を説く

【正行】八正道の一、佛の正法に立脚せる正しき行爲を謂ふ

【有頂】有頂天の最頂天即ち無色界の非想非非想處なり

【是菩薩】以下、推衆生戒を説けり

十不善の道に由る。我常に自ら善法に住すべし。亦當に人の爲に諸の善法を説き、正行の處を示すべし。何を以ての故に、若し人自ら善を行ぜずして、他の爲に法を説き善に住せしめんば、是皮有ること無し」と。又深く思惟すらく、十不善の道を行せば、則ち地獄、畜生、餓鬼に墮ち、十善の道を行せば、則ち人處、乃至有頂に生ぜん。又是十善道は智慧と和合して修行す。若し心劣弱にして少功德を樂ひ、三界を厭ひ畏れ、大悲の心薄く他に隨ひて法を聞かば、聖聞乘に至らん。若し此十善道を行じ、他に從ひて聞かずして自然に知ることを得、大悲の方便を具足すること能はざるも、而も能く深く衆の因縁法に入らば、辟支佛乘に至らん。若し是十善道を行じて清淨に具足し、其心廣大なること無量無邊にして、衆生の中に於て大悲を起し、方便力を有し、志願堅固にして、一切の衆生を捨てず、佛の大智慧を求め、菩薩の諸地を淨め、諸の波羅蜜を淨め、深廣の大行に入らば、則ち能く佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲を得、乃至一切種智を具足し諸佛の法を集めん。是故に其應に十善道を行じて一切智を求むべし」と。

是菩薩は復は思惟を作さく、此十不善道は上なる者は地獄の因縁、中なる者は畜生の因縁、下なる者は餓鬼の因縁なり。中に於て殺生の罪は能く衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には短命、二には多病なり。劫盜の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。一には貧窮、二には其財自在を得ず。邪淫の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん。

一には婦貞潔ならず、二には意に墮さざる眷屬を得、妄語の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には多く誦誦せられ、二には人の爲に誑かざる。兩舌の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には弊惡の眷屬を得、二には不和の眷屬を得、惡口の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には常に惡音を聞き、二には言説すべき所恆に諍訟有り。無義語の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には有ゆる語言を人信受せず、二には有ゆる言説は明了なる能はず。貪欲の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には多欲、二には厭足有ること無し。瞋惱の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には常に一切の爲に其長短を求められ、二には常に衆人の爲に惱害せらる。邪見の罪も亦衆生をして三惡道に墮せしむ。若し人中に生ぜば二種の果報を得ん、一には邪見の家に生れ、二には其心詭曲なり。諸の佛子、是の如く十不善道は皆是れ衆苦大聚の因縁なり。菩薩、復是念を作さく、「我何の故に是十不善の道を離れて十善道を行じ、亦他人をして此善道を行ぜしめざる」と。是の如く念じ已りて、即ち十不善の道を離れて十善道に安住し、亦他人をして善道に住せしむ。是菩薩は、爾時、一切衆生に於て、安隱心、樂心、慈心、悲心、哀愍心、利益心、守護心、師心、大師心、自己心を生じ。是念を作さく、「是諸の衆生は邪見に墮し、邪心に隨逐し、邪險の道を行ず、甚だ哀愍すべし。我應に彼をして正見の道

【十二人】十二處  
のこゝと、六人とは  
六處（六根處）の義  
譯

知實の法の中に住せしむべし。是諸の衆生は常に共に鬪諍して彼我を分別す。我應に彼をして大慈に住せしむべし。是諸の衆生は常に財物を負りて厭足有ること無く、初に邪命を以て自ら生活せり。我應に彼をして清淨の身口意業に住せしむべし。是諸の衆生は貪欲瞋恚愚癡に隨逐して、常に種種の煩惱の大火の爲に燒然せられて、出要の方便を志求すること能はず。我應に彼をして煩惱の火を滅し、清涼の處に置かしむべし。是諸の衆生は常に無明の爲に覆はれて大黑闇に入り、慧の光明を離れ、生死の大輪道の中に入りて、種種無量の邪見に隨逐せり。我應に彼をして無障礙の清淨なる慧眼を得しむべし。是眼を以ての故に、一切法の知實の相を知り、他に諸はずして一切知實の無障礙智を得。是諸の衆生は、生死の道に墮し、將に地獄、畜生、餓鬼に墮せんとす、邪見の網に入り、種種の愚癡の叢林の爲に覆はれ、虛妄邪道の徑路に隨逐して、常に愚癡の爲に盲冥せられ、導師を遠離し、出要の道に非ざるを出要なりと謂ひ、魔心に隨順して佛意を遠離せり。我應に彼をして生死の輪道艱難を度りて安處せしめ、一切智人の無畏の大城に住し、諸の哀憫無からしむべし。是諸の衆生は諸の煩惱の暴水の爲に没せられ、欲と有と見と無明との四流に漂はされ、生死の流に隨ひて、大愛の河に入り、諸の煩惱の勢力の爲に食はれ、出要の道を求むることを得る能はず、常に欲覺、悲覺、憫覺の惡毒の爲に害せられ、又水中にて身見の羅刹の爲に執へられ、五欲の深流に入りて洞漚し、喜愛の淤泥の没溺する所、我慢の陸地の憔悴する所となりて、歸趣する所無く、十二人の怨賊の聚落

【四倒】 常樂我淨の四顛倒のこと。

【前註】 地、水、

【四大】 火、風の四大種なり。萬有の原素の一説。

【出法】 出離の法の義。

【是菩薩】 以下、第三に本地の得果を明す。

に於て出づることを得る能はず、導師の能く正しく度する者に遇はず。我應に彼に於て大慈悲を生じ、善根の力を以て之を拔濟し、安隱の處を得、諸の恐怖を離れ、一切智慧の寶洲に住せしむべし。是諸の衆生は深く心に貪著し、多く憂悲苦惱の患難有り、憍愛に縛せられ、欲の械に繋かれ、三界の無明の稠林に入り。我應に彼をして一切の三界の所著を遠離せしめ、離相無礙の涅槃に住せしむべし。是諸の衆生は、深く我我所に著し、五陰の單窟に於て、自ら出づること能はず、常に四倒に隨ひ、六人の空聚に依り、四大の毒蛇の爲に侵害せられ、諸の煩惱の衆賊の爲に殺されて、是一切無量の苦惱を受く。我應に彼をして諸の貪著を離れ、寂靜に住せしむべし。謂ゆる一切の障礙を斷ちたる安隱の涅槃なり。是諸の衆生は其心狭劣にして、小法を樂ひ、無上なる一切智慧を遠離し、小乘に貪著し、大乘の出法を志求すること能はず。我應に彼をして廣大の心、無量無邊の諸佛の道法に住せしむべし、謂ゆる無上の大乘なり。諸の佛子、是菩薩は是の如く持戒力に隨順して能善く廣く大慈悲心を生ず。

是菩薩は離垢地に住すれば、數百千萬億那由他の諸佛世尊を見たまつることを得、衣被、飲食、臥具、醫藥、資生の物を以て之を供養し、諸佛の所に於て恭敬の心を生ぜり。復十善道を受け、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、終に中失せず。是菩薩は若くは千百千萬劫にも、饜食破戒の垢を遠離するが故に、布施、持戒の功德を淨修す。譬へば眞金の之を鍊るに火を以てすれば、一切の垢盡き、轉じて復明淨なるが如し。菩薩も亦是の如く、

【四攝法】菩薩の衆生濟度の四種法、愛語、利行、同事、布施の四攝法なり。前計

薄垢地に住して、若し千、百千、乃至無量百千萬劫にも、慳貪破戒の垢を遠離するが故に布施、持戒の功徳を淨修す。菩薩爾時、四攝法に於て、愛語偏に多く、十波羅蜜には戒波羅蜜偏に勝り、餘の波羅蜜も亦皆修集し、地に隨ひて增長す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第一薄垢地と名く。菩薩是地に住すれば、多く轉輪聖王と作り、大法王と爲りて、廣く法力を得、七寶成就し、力自在有りて、能く一切衆生の慳貪破戒の垢を除き、善方便を以て衆生をして上善道に住せしめ、大布施を爲して而も窮盡せず、作す所の善業も布施、愛語、利益、同事なり。是諸の福徳は皆佛を念することを離れず、法を念することを離れず、乃至具足三明預智を念することを離れず。常に是心を生ずらく、我當に一切衆生の中に於て、首と爲り、勝と爲り、乃至一切衆生の中に於て依止者と爲るべし」と。佛子、是菩薩若し家を捨てて勤行精進せんと思せば、佛法の中に於て便ち能く家、妻子、淫欲を捨てん。出家することを得たりて、勤行精進せば、須臾の間に、千の三昧を得、千佛を見ることを得、千佛の神力を知り、能く千佛の世界を動じ、能く千佛の世界を飛び過ぎ、能く千佛の世界を照し、能く千世界の衆生を教化し、能く住すること高千劫にして、能く過去未來の世の各千劫の事を知り、能善く千の法門に入り、能く身を變じて千と爲し、一の身に於て能く千の菩薩を示し、以て眷屬と爲さん。若し神力を以てせば自在に示現し、此數に過ぐることを、百千萬億那由他劫にも計り知るべからず。時に金剛藏菩薩重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

【菩薩一地に入ら  
ん】以下、重頌に  
して二十六偈あり  
初二偈は前十種  
の直心、次四偈は  
律儀戒、次八偈は  
攝善法戒、最後  
七偈は本地の果を  
頌説して本地離垢  
地を究る。

菩薩一地に入らんには、柔軟と調和との心  
堪受と不放逸と、寂滅と眞の不雜と  
亦食吝有ること無く、勝と大とを悉く具足せよ  
是十心を得已れば、第二地に入る  
菩薩是地に住すれば、諸の功德を成就し  
常に殺生を離れ、一切を惱害せず  
常に劫盜を離れ、亦邪淫有ること無く  
兩舌妄語せず、惡口無義の言なし  
他の所有の財物に、貪著を生ぜず  
衆生を惱まさず、直心にして正見を行じ  
憍慢の心有ること無く、亦諂曲の意無く  
柔軟にして放逸ならず、諸佛の教を護持す  
有ゆる劇しき苦惱も、地獄畜生も  
試鬼の熾然の身も、皆惡心より有り  
我今已に永く、是の如き諸の惡事を離れ  
眞實の道、寂滅の善法を行す  
人より有頂に至るまで、有ゆる受樂の處と

種種三乘の樂とは、若し善より生ず  
是の如く思惟し已りて、心常に不放逸にして  
身自ら淨戒を持ち、亦人を教へて持たしむ  
過く諸の衆生の、種種に苦惱を愛くることを離れ  
是の如く思念し已りて、轉た深き悲心を生ず  
凡夫は其の墮むべし、諸の邪見に墮在し  
心に多く瞋恨を懷き、常に好んで諍訟を起し  
常に五欲を樂み、食り求めて厭くこと行る無く  
三毒の因縁を起す、我應に此等を棄すべし  
深く愚癡の闇に覆はれて、生死の輪道に墮ち  
大群見の網に入りて、世の籠籠に墮つ  
常に誦讀の賊、煩惱の爲に墮る  
此等は甚だ懸むべし、我應に之を度脱すべし  
深き煩惱の水に没し、四流に漂轉せられ  
具に三界の、無量、諸の苦毒を受け  
五陰の深巢に住して、我我所の心を生ず  
我此苦を度せんが爲に、常に勤めて道を修行すべし

無上の佛慧を捨てて、下劣の心を生ずるには  
佛の大智に住して、無量の精進を發さしめん  
菩薩此地に住すれば、無量の功徳を集め

諸佛に值遇することを得て、承事し供養せり

是因縁を以ての故に、善根轉た明淨となる

猶し好眞金の、之を鍊るに火力を以てするが如し

佛子、此地に住すれば、多く轉輪王と作り

諸の衆生等をして、十善道に住せしめ

初始の發心より、諸の福徳を修集し

願くば以て世間を救へ、佛の十力を得しめんと

若し王位を捨て、出家して學道を行ぜんと欲せば

勤心に精進を行じて、下の三昧に入ることを得ん

千佛を見ることを得て、供養し法を聽受せん

菩薩此地に住すれば、能く是の如きの事を示す

若し其れ願力を以てせば、諸の神通の事を示し

衆生を度脱すること、此數に過ぐることを無量ならん

常に諸の世間の爲に、勤めて好事を求むる者に

【第三地】發光地

薩婆前地離垢地に善於て、煩惱を斷滅し、中道無相の理に住したるより進める位なるを以て中道の智光益發生するなり。以下此地に就て説き、初に頌偈を以て解説を讚請す。

第三地

具足して眞を觀證せり、第二地已に竟る

諸の菩薩は、是不可思議の行を聞きて

心皆大いに歡喜し、恭敬すること量有ること無し

即時に虚空の中に、衆の名華香を雨らし

雲の如く散下して、金剛藏を供養し

咸く讚めて言はく、善哉善哉金剛藏

善く諸の夫人の、淨戒を護持する行を説きたまへり

一切の衆生に於て、深く哀愍の心有りて

是二地の行相を、敷演し解説したまへり

菩薩の微妙なる行は、眞實にして異り有ること無し

是れ諸の菩薩等の、清淨の行足なり

一切衆生の、常に好事を求むる者の爲に

已に爲に具に、第二離垢地を演説したまへり

夫人の恭敬する者、闍くは第三地を證きて

善く智の所作と、菩薩の所行とを示したまへ願くば諸の夫人の、行する所の布施の徳と

【佛子】以下、正説にして四段あり第一に起行を説き、中に十種の深心を明す。

【菩薩明地に】以下、第二に修行即ち煩惱繋の小心を厭離し、廣大な心を求願することを明す。

持戒及び忍辱と、精進の行と禪定と智慧の巧方便と、并及慈心とを説き、云何が是法を行じて、諸佛の行を淨むるや。

解脱月菩薩、金剛藏に請ひて言はく、「菩薩三地に入るには、當に何等の心を以てすべきや、金剛藏菩薩、解脱月菩薩に語りて言はく、佛子、諸の菩薩摩訶薩は第二地を淨め已りて、第三地を得んと欲せば、當に十種の深心を以てすべし。何等をか十と爲す。一に淨心、二に堅利心、三に厭心、四に離欲心、五に不退心、六に堅心、七に明盛心、八に無足心、九に勝心、十に大心なり、菩薩は是十心を以て第三地に入ることを得。」

菩薩、明地に住すれば、能く一切有爲法の如實の相を觀ず。謂ゆる無常、苦、無我、不淨なること、久しからざること、敗壞すること、信すべき相にあらざること、不生不滅なること、前際より來らず、去りて後際に至らず、現在にも住せざることとなり。菩薩は、是の如く一切有爲法の眞實相を觀じて、諸法の無作、無起、無來、無去なるを知る、而も諸の衆生は、憂悲、苦惱、憎愛に繋がれ、停積有ること無く、定生の處無く、但眞慧蒙の火の爲に燃かれて、後世の苦惱の大聚を増長し、實性有ること無きは猶し幻化の如し、是の如きを見已りて、一切有爲の法に於て、轉じて復厭離し、佛の智慧に越く。是菩薩は如來の智慧の思議すべからず、稱量すべからざるを知り、大勢力有りて、能く勝る者無く雜相有ること無く、衰惱有ること無く、能く無畏安隱の大城に至り、能く無量の苦惱の衆

生を救ふ。是の如く佛智の無量なるを見知り、有爲法の無量の苦惱を見て、一切の衆生に於て、轉じて殊勝の用心を生ず。何等をか十と爲す。衆生は驚かべし、孤獨にして救ふ無く、貧にしろ依止無く、毒の火は熾然として息まず、三有の牢固なる羂に閉在し、常に煩惱諸塵の刺棘に住し、正觀の力無く、善法の中に於て、歡樂するの心薄く、佛の妙法を失へて、而も常に生死の水邊に隨順し、涅槃を怖畏す。是菩薩は諸の衆生の是の如きの哀憫を見こ、大精進を發すらく、是衆生等を我に救ふべし、我應に解くべし、應に清淨ならしむべし、應に觀せしむべし、應に善處に著かしむべし、應に安住せしむべし、應に歡喜せしむべし、應に所宜を知らしむべし、應に得度せしむべし、應に苦を滅せしむべし。

【菩薩は是の如く】  
以下、方便攝生の  
行を説く。

菩薩は是の如く一切有爲の法を厭離して、深く衆生を念ひ、一切智の無量の利益を見、即時に佛の智慧を具へて、衆生を救度せんと欲して菩薩の道を勤行す。是思惟を作さく、此諸の衆生は、大苦難の煩惱の中に墮在す、何の方便を以てか之を拔濟し、よく畢竟の樂に住することを得しむべきと。即時に無礙解脫の智慧の中に住すと知る者は、乃ち此を得べし。は無礙解脫の智慧は、諸法に通達する如實智、無行の行慧を離れず。是の如きの慧明は何れより得べき。當に知るべし、多聞決定の智慧を離れず。復是念を作さく、一切の佛法は何を以て本と爲すや。開法を離れざるを本と爲すと。菩薩は是の如く知り已りて、一切の求法は、轉た精勤を加へ、日夜に聽受して厭足有ること無し。法を喜

【法を説く者】佛を指す。佛出世に遭遇すること困難なればなり。  
 【橋慢】おごりたかぶる心なり。我慢も慢の一にして我慢を恃みて心に橋も煩悩なり。我慢の一にして自已を價值以上に勝れりと思ふこと。要するに慢は四根本煩悩の一にして佛の最も忌む煩悩なり。  
 【釋提桓因】(Sakdevānīn Indira) 能天主と譯し、帝釋の一名。  
 【是菩薩は】以下第三段、禪定を修することを説く。  
 【覺、觀】覺は尋の舊譯、尋ね知らんとの心。觀は細なる分別心に對す。即ち覺觀は尋求伺察の定心を言ふ。

び、法を愛し、法に依り、法に頼り、法を請ひ、法を請じ、法を究竟じ、法に歸し、法を救ひ、隨順して法を行す。菩薩は是の如く方便して法を求め、有ゆる珍寶も遺惜する所無く、此物の中に於て難想を生ぜず、但法を説く者に於てのみ難遭の想を生ず。法を求めんが爲の故に、内外の物に於て捨つる能はざる無く、國土人民、摩尼七寶、象馬犛象、象寶瓔珞、嚴身の具、妻妾男女、肢節手足、身を擧げて施與して、愛惜する所無し。又法を求めんが爲の故に、法を説く者に於て、盡心に恭敬し、供養し、給侍して、橋慢、我慢、大慢を破除し、諸惡苦惱も悉く能く忍受す。深く法を求むるが故なり。若し一句の未だ曾て聞かざる法を得ば、三千大千世界の中に滿てる珍寶を得るにも勝らん。一偈を聞くことを得ば轉輪聖王、釋提桓因、梵天王の處に、無量劫に住することを得るにも勝らん。是菩薩は若し人有り來りて、是の如きの言を作さん、「我に佛の説きたまひし所の法一句有りて、能く菩薩の道を淨む。汝今若し能く大火坑に入りて大苦を受けなば、當に以て相與ふべし」と。是菩薩是念を作さく、「我一句の法を受けんが故に、設ひ三千大千世界の大火の中に滿たしむとも、尙梵天より自ら投下せん、何に況んや小火をや。我盡く一切諸の地獄の苦を受けんも、猶應に法を求むべし、何に況んや人中の諸の小苦惱をや」と。法を求めんが爲の故に是の如き心を發せり。又所聞の法の如く心常に喜樂して、悉く能く正觀す。是菩薩は諸法を聞き已りて、其心を降伏し、空閑の處に於て、心に是念を作さく、「説の如く行する者は、乃ち佛法を得ん、但口言のみを以ては是處有ること無し」と。菩薩は

【離】 欲界諸煩惱を離れて色界初禪に入る意。

【定】 初禪定に入れば尋伺なく、心一處に住するを以て云ふ。

【樂】 第二は喜心躍動し、樂受豊満なるを以て云ふ。而して第三は離喜妙樂地と言ひて此喜樂を離れ勝妙の樂を受く。

【捨を行じ】 第四禪を捨念清淨地と言ふ。捨しての喜も樂も離して、心に愛憎なく、一念平等にして清淨なるを言ふ。

【實】 實なる者の着。

【虚空】 色定處に入る。以下、色界より無色界四處に順次向はると相を明す。

【是菩薩は】 以下第四禪、本地の果徳を説き、前に行果後に位果を明す。

【拍摸】 拍は撫で

【拍摸】 拍は撫で

是の如くにして即ち欲惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離は喜樂を生じて初禪に入る。

覺觀を滅し内清淨にして、心一處に、覺無く、觀無く、定は喜樂を生じて二禪に入る。

喜を離れ捨を行じて、念慧を成就し、身に樂を受け、諸の賢聖能く説き盡く捨し、常に

念じて樂を受け、二禪に入る。苦樂を離棄して、憂喜已に滅し、苦なる事樂ならず、捨を

行じ淨を念じて四禪に入る。是菩薩は一切の色相を過ぎて、一切の有對の相を滅し、一切の

別異の相を念ぜざるが故に、無邊の虚空を知りて、即ち虚空無色空樂に入る。一切虚空の

相を過ぎて無邊の識を知り、即ち無色定處に入る。一切の識相を過ぎて無所有を知り、

即ち無所有の無色定處に入る。一切の無所有處を過ぎて、非有想非無想の安穩を知り、即

ち非有想非無想の無色定處に入る。諸法の行に順じて而も樂著せず。

是菩薩は慈心廣大にして無量なるを以て瞋恨無く、憍害無く信解力を以て、遍く十方に

滿つ。非喜捨の心も亦復是の如し。是菩薩は神通力を有して、能く大地を動かし、一身を

多身と爲し、多身を一身と爲し、地液と彈出して有量皆遍滿すること、虚空を行くが如く、

虚空の中に於て跏趺して去ること、猶し飛鳥の如く、水を履むこと地の如く、地に入るこ

と水の如く、身より妙樂を出すこと大火聚の如く、日月の威徳も能く手を以て拍摸して之

を摩じ、身自自在にして力に覺世に至る。是菩薩の天耳は清淨にして天人の身に過ぎ、

悉く人天の音聲の遠近なるを聞く。是菩薩は他心智を以て、眞の如く他心の欲心を知り、

實の如く欲心と離欲心とを知り、實の如く離欲心、瞋心、癡心、憂心、慳心、離垢心、

持つ意、摸は手に  
て素め提るの意。  
【他心相】十智の  
一。法、類、道、  
世俗の四智より成  
り、自地より下な  
る者の現在の心を  
知る智慧なり。

小心、大心、廣心、狭心、亂心、無亂心、定心、不定心、縛心、解心、有上心、無上心を知り、實の如く有上心と無上心とを知る。是菩薩は、宿命の諸の所生の處を念知す、一世二世、乃至百千萬億那由他劫、一劫二劫、乃至百千萬億那由他劫、其中の諸劫の無量の成壞、諸劫の中に於て經し所の因縁を、悉く能く念知す。我彼處に生じ、是の如き種族、是の如き姓名、是の如き飲食、是の如き苦樂、是の如く久住し、我彼に於て死して此間に生れ此間に於て死して、彼間に生ると、是の如きの種種なることを悉く能く念知す。是菩薩の天眼は、清淨にして天人の眼に過ぎ、諸の衆生の此に死し彼に生ずるを見る。形色の好惡と、貧賤なると富貴なると、善惡の道に趣くことと、業に隨ひて報を受くることとを皆實の如く知る。謂ゆる是諸の衆生は身の惡業、口の惡業、意の惡業を成就し、賢聖に拒み逆ひて、邪見の教を受け、罪業の因縁を起すが故に、身壞し命終りて惡道に墮つ。是諸の衆生は身の善業、口の善業、意の善業を成就して、賢聖に逆はず、正見を信受し、善業の因縁を行すが故に、身壞し命終りて善處に生ぜん。是菩薩は諸の禪定解脱の三昧に於て、能く入り、能く出でて而も隨生せず、助菩提の法有る處には、願力を以ての故に、能く其中に生ず。

是菩薩は明地に住すれば、數百千萬億那由他の諸佛世尊を見たてまつり、恭敬し供養し尊重し讚歎して、衣服、飲食、臥具醫藥をたてまつり、諸佛に親近して經法を聽受し、説の如く修行す。是菩薩は諸法は不生不滅なるも衆緣もて有ることを觀し、百千億劫に於て

【三縛】欲縛、有縛、無明縛を言ふ。縛は煩惱の異名。

【菩薩の深信の心】以下の重頌は三十、五偈を以て成り、初二偈は起行、次二十四偈は修行、行果、最後六偈は位果を頌して本地を重説せり。

集めし所の欲縛、有縛、無明縛は、皆悉く微薄となりて復積集せざるが故に、若貪、若瞋、邪見を離す。譬へば眞金を巧師鍛治すれば、轉た更に精好となり、光明倍勝るが如し。菩薩も亦是の如く明地に住在すれば、三縛を集めざるが故に、邪貪、邪瞋、邪見を離じ、一切の善根を轉た増して明淨となる。是菩薩の忍辱の心、美妙の心、不壞の心、不動の心、不濁の心、不高下の心、一切の所作に報を望まざるの心、他の少しく所作有るにも當に報を生ずべきの心、誦曲せざるの心、染亂せざるの心は轉た勝れて明淨となる。菩薩、爾時、四攝法に於て、愛語、利益偏に多く、十波羅蜜には忍辱波羅蜜と精進波羅蜜と偏に勝れて、餘の助菩提の法も皆轉た明淨となる。諸の佛子、是を菩薩の第三地を略説すと名く。菩薩是地の中に住すれば、多く持提神、因と作り、智慧冥利にして、能く方便を以て諸の衆生を轉じ、雜欲を離れしめ、作す所の善業は布施、愛語、利、同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず、乃至具是一切種智を念ずることを離れず、常に是心を生ずらく、我當に一切衆生に於て、首と爲り、勝となり、乃至一切衆生に於て依止者と爲るべし」と。是菩薩若し勤、行精進せんと欲せば、眞實の間に於て能く十萬を三昧を得、乃至能く十萬の菩薩を示し、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、神通自在にして此數に過ぐることを、若し千百千萬億那由他劫にも語り知るべからず。時に金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て歎して曰はく、

菩薩の深信の心は、能く第三地を得

【有爲作】無爲作に對す。有爲法、有作法の略なり。

清淨猛利の心は、欲を厭止して是を得ず。  
堅く堪受して厭くこと無く、膺大苦く其是す。  
是の如き等の心を以て、三地に入ることを得。  
智者は明地に住して、有爲作の法を觀するに  
不淨、無常、苦、無我、壞敗の相にして  
牢固の性有ること無く、久しからずして念念に滅す。  
是の如く思惟して、來去の相有ること無しと知る。  
諸の有爲法を見るに、病の如く癰瘡の如し。  
愛心に纏縛せられ、諸の憂患の苦を生ず。  
但貪患癡の、猛火の爲に焚燒せられて  
無始世より來、熾んに燃えて常に息まず。  
卽時に一切の、三界に於て厭離を生じ。  
惡賤なる有爲の法は、心に貪著する所無し。  
但諸佛の智をのみ求むるに、無量にして邊限無く  
甚深にして思議し難く、清淨にして諸の苦無し。  
是の如く佛智を見て、諸の苦惱を無くし已り。  
諸の衆生を哀憐すらく、貧窮にして福慧無く

三毒の火常に然え、救護する者有ること無く  
地獄の中に墮在して、無量の苦に切られ  
放逐なる凡夫人は、諸の煩惱の海に没し  
盲冥にして所見無く、諸佛の法寶を失ひ  
常に生死の流に墮い、怖るる無きに空しく怖畏す  
我は衆生に於て、常に勤めて之を度脱せしむべしと  
精進して智慧を求め、僥益を作さんと爲す者は  
思惟すらく何の方便もてか、以て救護することを得べき  
唯、諸の如來の、深妙なる無礙智あるのみ  
此智は何をか因と爲す、無行の行慧より生ず  
思惟は是れ智慧にして、多聞より起ると  
是の如く籌量し已りて、勤めて多く法を聞かんことを求む  
日夜常に精進し、聽受して修むこと無く  
讀誦して法を愛樂し、唯法のみを以て貴しと爲す  
法を求めんと欲するが爲の故に、諸の珍寶等  
親愛する所の妻子、意に隨ふ、諸の眷屬  
國土及び城邑、養生の諸の寶物を以て

歡喜して施し與へ、心に懸着する所無し  
頭目耳鼻舌、牙齒及び手足

肢節身血肉、心肝及び髓腦

此等を以て人に施すも、猶以て難しと爲さず

若し正法を聞くことを得んには、是を甚た希有と爲す

假令一人有り、此菩薩に語りて言はん

汝今若し能く、是大いなる猛火聚に入らば

後る後に當に汝に、諸佛の説きたまひし所の法を與ふべしと

聞き已りて即ち歡喜し、自ら投じて疑有ること無し

設ひ三千界の、大火を其中に滿てしめ

須彌梵世より下るとも、以て難しと爲すに足らず

若し一句の、諸佛所説の法を求めて

諸の苦惱を救はんと爲す者は、之を得ること甚だ難しと爲す

初始の發心より、乃し佛道を成ずるに至るまで

我其中間に於て、此諸劫の數を盡して

法を求めんと欲するが爲の故に、備に阿鼻の苦をも受けん

何に況んや人間の、小小なる諸の苦惱に於てをや

聖法の因縁を以て、能く正覺念を得

正覺念の因縁して、能く諸の禪定を生じ

淫慾の等三昧、及び五神通の事は

次第に皆能く起り、自在にして隨生せず

菩薩境地に住せば、能く決定の心を以て

多く諸佛を供養したてまつり、所法の法を聽受し

邪なる愛と悲と癡とを斷ち、諸縛悉く微薄となり

猶、鍍金を成すが如く、調和して其所を得ん

菩薩境地に住せば、福德藏充滿して

多く轉利王と作り、自在に好欲を化せん

佛の功德を愛するが故に、無量の衆を化導して

悉く能く、無上の佛道の中に住することを得しめん

菩薩境地に住して、能く柔軟の心を以て

勤行精進せば、百千の三昧を得

百千の諸佛の、相好莊嚴の身を見たてまつり

其心は轉た猛利にして、願力なれば殊に勝れん

常に諸の衆生の、好事を勤求する者の爲に、

【第四地】

【第四地】此地の修  
菩薩は前三地の修  
行進みて、無生法  
忍（前註）を得、其  
忍に順じて智光愈  
熾なる位なり。以  
下此地の解説を讚  
請する頌なり。

此第三明地を、分別し解説し竟る

諸の佛子は、是の如き地行の義を説くを聞き  
深妙にして量有ること無く、心皆大いに歡喜し  
衆の名華香を散じて、如來を供養したてまつり  
地及び大海の水は、悉く皆大いに震動せり  
天の諸の采女等は、上の虛空中に於て  
同じく微妙の音を以て、此正法を歌頌せり  
他化自在王は、聞き已りて大いに歡喜し  
摩尼の珠寶を雨らし、以て佛の上に散じ  
踊躍し稱讚して言はく、善哉佛出世したまひて  
功德藏を流布し、我等を利益したまふ  
我今此、菩薩の地行の義を説くを聞けり  
是事は百千劫にも、聞き難きを而も聞くことを得たり  
願くば更に後地を説きて、諸の天人を利益したまふ  
衆く皆喜んで、地を得る諸行の義を聞かんと欲すと  
解脫月菩薩、重ねて金剛藏に請ひたまはく

【佛子】以下、本地の正説なり。中第一に於て四段に分れを説けり。

【大心界】菩薩及佛の世界を指す。二乗の小心と異りて捨てざるを以て大心と言ふ。

【菩薩増進】以下第一に此地初入者の出障の行を明す

【佛子】以下、對治の修行増長すること。明す。

【内身簡身觀】内身は有情身の義、簡とは巡歴の義にして、身體の四肢五體を次第に觀察するなり。而て其身の不淨なるを知つて貪愛の執を斷ずる觀法なり。

謂くば、諸の菩薩の爲に、四地に至るの行を説きたまへ

金剛藏菩薩、彌陀月菩薩に語りて言はく、佛子、諸の菩薩摩訶薩は三境を淨めりて第四地を得んと欲せば、當に十の法明門を以てすべし。何等をか十と爲す。一に衆生界を觀察し、二に法界を觀察し、三に世界を觀察し、四に虚空界を觀察し、五に識界を觀察し、六に欲界を觀察し、七に色界を觀察し、八に無色界を觀察し、九に淨信解界を觀察し、十に大心界を觀察す。菩薩は此十の法明門を以て第四地に入ることを得。

菩薩増進に住すれば、即ち如來の家に於て轉た勢力有り、內法を得るが故に十種の智有り。何等をか十と爲す。一に心退轉せず。二に三寶の中に於て不壞の信を得、清淨にして畢竟す。三に修習して生滅を觀す。四に諸法は本來不生なることを修習す。五に常に世間の成壞を修習す。六に業の因縁の故に生行することを修習す。七に生死と涅槃門との差別を分別すること修習す。八に衆生の業の差別を修習す。九に前際後際の差別を修習す。十に現在に常に滅して住せざることを修習す。是十種の心を行すれば即ち佛家に生じて轉た勢力を得。

佛子、菩薩摩訶薩、是第四地に住すれば、内身簡身觀を觀じ、精勤して一心に世間の貪愛を除く。外身簡身觀を觀じ、精勤して一心に世間の貪愛を除く。内外身簡身觀を觀じて、精勤して一心に世間の貪愛を除く。内受外受、内外受、内心、外心、内外心、内法、外法、内外法の簡法觀を觀じ、精勤して一心に世間の貪愛を除く。是菩薩は未だ生

【外身】自身外のもの即ち非情物なり。我所の愛即ち所有物の貪著を離るるなり。内外身の觀法は四念處觀の(身觀)一たり。

【愛、心、法】四念處觀の三なり。受は苦、心は無常法は無我なることを觀じて、我執煩惱等を除くなり。

【是菩薩】以下、四正斷を説く。四正斷とは四種の斷、所斷惡の再生斷、戒律を以ての斷惡。三に隨護斷無漏定に入り所斷の惡を再起せざらしむ。四に修斷、善を積極的に行じて惡を行ざる閑を與へず。四正勤とも言ふ。

【四如意見】四善根位の頂位に於て修する行、是の如く所願を満足す

ぜざる惡不善の法を、生ぜざらしめんが爲の故に、勤めて精進して、發心し正斷す。已に生じたる諸の惡不善の法を斷ぜんが爲の故に、勤めて精進して發心し正斷す。未だ生ぜざる諸の善法を生ぜんが爲の故に、勤めて精進して發心し正行す。已に生じたる諸の善法に住して失はず、修滿し増廣せんが爲の故に、勤めて精進して、發心し正行す。

是菩薩は四如意見を修行す。

欲定にて斷の行を成就して、如意足を修し、願に依止し、離に依止し、滅に依止し、涅槃に廻向す。精進定、心定、慧定にて斷の行を成就して、如意足を修し、離離滅に依止し、涅槃に廻向す。是菩薩は信根、精進根、念根、定根、慧根を修行して、離離滅に依止し、涅槃に廻向す。是菩薩は信力、精進力、念力、定力、慧力を修行して、離離滅に依止し、涅槃に廻向す。是菩薩は念覺分、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、捨覺分、定覺分、捨覺分を修行して、厭離滅に依止し、涅槃に廻向す。是菩薩は正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を修行して、厭離滅に依止し、涅槃に廻向す。是菩薩は衆生を捨てざる心を以ての故に行じ、本願の助を以ての故に、大悲を首と爲す。故に、大慈行に合するが故に。一切智を攝せんが爲に、佛國を莊嚴せんが爲に、佛の諸の力無畏と不共の法と、三十二相と、八十種好とを具へんが爲に、菩薩を具足せんが爲に、佛の深解脫に隨順せんが爲に、大智慧方便を思惟せんが爲の故に行す。

諸の佛子、菩薩地に住すれば、有ゆる身見等の苦、我著、衆生著、人壽者、知

るが故に如眞足  
言ひ、欲、念、精  
進、思惟の四事な  
り。

【欲定】 欲は樂欲  
の義、不善を對治  
せん、欲樂にて心を  
一境に住せしむる  
を以て定と言ふ。

【心定】 心を一境  
に專住せしむるを  
以て定と言ひ。

【信根】 以下精進  
念、定、思を五根  
と言ひ、此根に依  
りて善の芽を發生  
し、見道を生ずるを  
以てなり。

【信力】 以下を五  
力と言ひ、惑を斷  
絶する力強し。

【念覺分】 以下を  
七覺分又は七覺支  
と言ひ、修進共に  
其體爲善惡を觀察  
覺了する力なり。

【信覺分】 虛誑漏  
惡を斷絶し、眞の  
善根を増長せしむ  
るを言ひ、斷惡支  
とも言ふ。

【正見】 以下を八  
正道と言ひ、菩薩

者、見者の著、五陰、十二入、十八界に起す所の、屈伸卷舒出沒、推求心の所行、愛著の寶重、所見を歸と爲し、淵と爲すも皆悉く斷滅す。是菩薩は轉た倍精進し、智慧の方便の生ずる所の對道法は、修行する所に隨ひ、心轉た柔和にして有用に堪忍し、疲倦有ること無く、轉た上法を求めて智慧を増益し、一切の世間を救ひ、諸師に隨順し、恭敬して教を受け、所説の如く行す。是菩薩は、爾時、恩を知り、報恩を知り、心轉た和善にして同止し安樂なり、直心、歡心にして、邪曲有ること無く、正定の行を行じて、橋慢有ること無く、教母に隨順して説者の意を得、是の如くして、善心、軟心、寂滅心、忍辱心を具足し、地の諸法を淨め、思惟し修行す。是菩薩は、爾時、不轉の精進、不捨の精進、不棄の精進、不壞の精進、不厭倦の精進、廣大の精進、無邊の精進、猛利の精進、無等の精進、救一切衆生の精進を成ず。是菩薩は是の如き精進を修習し、直心清淨にして深心を失はず、信解明利にして、善根增長し、世間の垢濁不信を遠離し、皆已に滅盡して疑ふこと無く、悔ゆること無く、現前に具足して、一切の佛の大信解の事に於て厭はず捨てず、自然に音樂して、無量の心常に現在前せり。

菩薩第四熾地に住すれば、能く數百千萬億那由他の諸佛世尊を見たてまつりて、恭敬し供養し、尊重し讚歎して、衣服飲食、臥具醫藥をたてまつり、諸佛に親近し、一心に法を聽き能く信じて奉持し、多くは自の所に於て出家して道を修む。是菩薩の樂心、深心は清淨となり、信解平等にして、轉た更に明了となり、住壽多劫なり。若千百千萬億那由他劫

の修道なり。

【諸の佛子】以下

第四に本地の果徳を明し、初に行果を説く。

【菩薩の第四留地】以下、本地の位果を説く。

【諸の菩薩】以下

重頌を以て本地を説く、二十九偈より成り、初二偈は入地の方便、次は七偈は對治の修行、次は九偈は對治の修行、最後は七偈は位果を頌せり

諸の菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

に善根轉た勝れたり、譬へば上寶金を首最具と爲せば、餘金の及ばざるが如し。是の如く菩薩は此焰地に住すれば、善根轉た増して、下地の菩薩の及ぶこと能はざる所なり。譬へば摩尼珠の、光明清淨にして能く四方を照し、餘寶は及ばず、水雨澆漬するも、光明減せざるが如し。菩薩焰地に住すれば、下地の菩薩の及ぶ能はざる所なり。一切の諸塵及び諸の煩惱も、皆壞すること能はず。諸の佛子、是を菩薩の第四留地を略説すと名く。菩薩是地の中に住すれば、多く須夜摩天王と作りて衆生を教化し、我心を破り、作す所の善業は布施、愛語、利益、同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず。乃至具足一切種智を離れず。常に是心を生ずらく、「我當に一切衆生に於て、首と爲り勝と爲り、乃至一切衆生に於て依止者と爲るべし」と。是菩薩、若し勤行精進せんと欲せば、須臾の間に百億の三昧を得、乃至百億の菩薩を示現して、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、自在に示現して此數に過ぐることを、若し千百千萬億那由他劫にも計り知るべからず。

爾時、金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

諸の菩薩具足して、明地を修治しじりて

諸の衆生と、法と及び世界と

虚空と識と欲と色と、無色の勝信解と

大心とを觀察して清淨なるが故に、第四地に入ることを得

即ち如来の家に於て、增長して勢力を得  
佛道に於て退かず、三寶に信を壞らず

諸法は生滅し、一切は本來空なりと觀じ

世間の成敗を知り、業に隨ひて生ずること有り

衆生の業の差別せると、生死涅槃の異ると

法の先後際と、常に滅して住せざるの相とを觀ず

諸の大菩薩等は、是の如き法を得已りて

諸の衆生を哀愍し、身受心法

内外の四念明を習し、厭離に依止し

亦寂滅に依止し、涅槃に趣向す

惡法を除滅するが故に、善法增長することを得

四正法を習行し、四如意足を修し

五根を習行し、及び五力を修し

七覺意を修習し、八聖道を行す

是の如き法を修習するは、皆衆生の爲の故にして

本願に助けられ、慈悲心を首と爲す

一切智を攝して、諸の佛土を莊嚴す

【六十二見】外道  
 が六蘊の中、一蘊  
 毎に四種見、五蘊  
 に於て二十見、三  
 世各二十見あるを  
 以て六十見、斷常  
 二見を加へて六十  
 二見と言ふ。

十種の力と、無畏と不共の法と

諸の善聲言説と、甚深の妙道の法と

及び無礙の解脫と、大智慧方便とを成就せんが爲なり

身見に従ふを首と爲し、六十二見等

衆生及び我人、壽命、智、見者

諸の陰界入の、所食著の處に於て

是第四地を得れば、皆悉く已に滅盡す

諸の煩惱業を斷ち、其心轉た明淨となりて

諸の作す所の善業は、皆世間を救はんが爲なり

菩薩の柔軟心は、常に放逸と爲らず

正直の意を用ふるに堪へ、衆生を利せんことを求む

此の如く求むる所の事は、皆無上道の爲にして

大智慧の職位も、世間を利益せんが故なり

深心に師を敬養し、説の如く修行せんことを樂ひ

恩を知り恩に報ゆる者は、化し易くして瞋恨無し

邪曲の心有ること無く、柔和にして同止し樂しむ

菩薩是地に住すれば、深き直心を失はず  
淨心と信解とは、世間の善根を増長す

世間の諸の垢濁、不信疑悔の事

是の如き等の諸法は、皆悉く除滅することを得

諸の菩薩は、第四焰地の中に住すれば

無量の佛に値ひたてまつることを得、所説の法を信受し

是諸佛の所に於て、出家して沮壞すること難し

眞金の莊嚴は、餘金の及ばざる所なるが如し

菩薩是地に住すれば、諸の功德深心

智慧及び方便、行する所の清淨道は

乃至千億の塵も、皆壞すること能はざる所なり

眞妙の明珠も、大雨の爲に散られざるが如し

菩薩是地に住すれば、天人に供養せられ

多く夜摩王と作りて、能く諸の邪見を轉す

作す所の諸の善業は、皆佛の智慧の爲にして

其心は常に堅固にして、動轉することを得べからず

若し勤行精進せば、百億の三昧を得

能く百億の佛を見たてまつらん、願力なれば即ち是に過ぎん  
是の如き第四地の、清淨なるを名けて第一と爲す  
無量の福慧の者に、今已に解説し竟る

大方廣佛華嚴經 卷第二十五

東晉天竺三藏佛跋陀羅譯

十地品第二十二之三

【諸の菩薩】以下第五地、難勝地を明す。難勝とは斷じ難き無明の煩惱を斷ずる意なり。以下の頌は此地の解説を讚請するなり。

諸の菩薩は、是第四地の行法を聞きて  
 心に皆喜悅を懷き、踊躍すること量有ること無し  
 天の衆の寶華を雨らし、雲霧として雪の下るが如し  
 咸く讚めて言はく、善い哉金剛藏大士と  
 他化自在の王は、諸の眷屬等と  
 上の虚空の中に於て、心皆大いに歡喜し  
 衆の妙光明を放ち、天の衆の伎樂を作し  
 佛の功德と、及び諸の菩薩等とを讚歎したてまつる  
 天の諸の采女等は、各清妙の音を以て  
 同聲に佛を稱讚したてまつりて、是の如きの言を説けり  
 世尊の久遠より來、勤苦して求め願ひたまふ所は

無上の正眞道にして、今に於て始めて乃ち得たまへり  
天人を利益する者は、久しくして乃ち

釋迦牟尼佛を見奉ることを得り、今天宮に至りたまふ  
久遠より已來、大海の相給めて動き

久遠の無量の世より、今に乃ち妙光を反らたまふ  
衆生久遠よりして、今始めて安樂を得

久しくして乃し方に、大慈悲の德音を聞くことを得たり  
暗の功德の岸に度り、久遠にして今乃ち

聖王に値ひたまつり、能く悉く憍慢我心等を破る  
無比にして恭敬すべく、而も今供養したてまつることを得

能く諸天の道を聞き、一切智を得しめたまふ  
世尊は甚だ清淨にして、無量なること虚空の如く

世法に染まざること、蓮華の水に在るが如し  
世に處して最も高大なるは、猶し巨海の中の

須彌大天王の如し、是故に歡喜して禮したてまつると  
是の如く諸の天女等、各衆妙の音を以て

敬心に歌頌しじり、默然として佛を觀たてまつる

【佛子】以下、正しく本地の解説にして、三段に分ち第一に勝慢を對治することを明す。

【實の如く】以下第二段にして、不住道の行の勝れたることを明し、最初に四聖諦を説く【第一義諦】は諸法とも言ひ、眞如を言ふ

解脫月菩薩、金剛藏に請うて言はく、願くば五地の、行を得るの因縁を説きたまへ。

金剛藏菩薩、解脫月菩薩に語りて言はく、「佛子、菩薩摩訶薩は、已に第四地を具足して第五地を得んと欲せば當に十の平等心を以てすべし。何等をか十と稱す。一に過去無量阿僧祇劫、二に未來佛の法平等、三に現在佛の法平等、四に戒淨平等、五に心淨平等、六に除見憂悔淨平等、七に道非道淨平等、八に行知見淨平等、九に諸の菩提分法淨平等、十に化衆生淨平等なり。菩薩は是十の平等心を以て、第五地に入ることを得。菩薩難勝地に住すれば、善く菩提の法を修するが故に、深心清淨なるが故に、轉た勝道を求むるが故に、則ち此く佛を得。是菩薩は大願力を得るが故に、慈悲心一切を捨てざるが故に、念慧の道力を得るが故に、福慧を修習して捨てざるが故に、方便を出生するが故に、轉た勝れたる道、上地の明觀法を得んと欲するが故に、諸佛の神力の所護を受くるが故に、定不退の心を生ずるが故なり。

實の如く是れ苦瓊諦、是れ苦集諦、是れ苦滅諦、是れ苦道諦なりと知る。是菩薩は善く世諦を知り、善く第一義諦を知り、善く相諦を知り、善く差別諦を知り、善く説諦を知り、善く事諦を知り、善く生相諦を知り、善く盡無生諦を知り、善く入道諦を知り、善く一切の菩薩の次第に諸地を成就して起す如來の智諦を知る。菩薩は衆生の意に隨ひて歡喜せしむるが故に世諦を知る。一乘を究竟するが故に第一義諦を知る。諸法の自相を分別す

【諸の趣生相續】  
六道(六趣)を輪廻  
轉生する義なり。

【怪むべし】 衆生  
の無智なる相を言  
ふ。衆生は苦を受  
くも苦を認識せ  
ずして厭離するこ  
となく、又無所有  
に於て貪著を生じ  
て執著する状態を  
言ふ。

るが故に相諦を知る。諸法各異なるが故に差別諦を知る。陰界入を分別するが故に説諦を知る。身心の苦惱を以ての故に苦諦を知る。諸の趣生相續するが故に集諦を知る。畢竟して一切の惱を滅するが故に滅諦を知る。不二の法に至るが故に道諦を知る。一切種智を以て、一切の法は次第に一切の菩薩地を成ずることを知るが故に、如來の智諦を知る。信解力を以ての故に知る、無盡諸智を得るに非ず。菩薩は是の如く此諸の諦智を以て、實の如く一切有爲の法は虚偽誑詐にして、假に住すること須臾にして、凡人を誑惑することを知る。菩薩爾時衆生の中に於て大悲轉た勝れ、大慈の光明を生ず。是の如き智慧力を得て、一切衆生を捨てず、常に佛の智慧を求めて、實の如く一切有爲の法の先際と後際とを觀じ、衆生は先際の無明有愛に従ふが故に、生れて生死に流轉し、五陰の轉處に於て勳發すること能はずして、苦惱の聚を増すことを知る。是中に我無く、我所無く、衆生無く、人無く、知者無く、壽命の者無く、後際も亦復是の如し。是の如く所有無きに、而も愚癡のものは貪著して、究竟じて出づること有ると、出づること無きとを知らず。又是念を作さく、凡夫衆生は甚だ怪むべしと爲す。無明癡の故に、無量の身有り、已に滅し今滅し當に滅すべし。是の如く生死して身に於て厭離の想を生ずること能はず、轉た更に五道の苦輪を増長し、生死の水に漂ひ、反ることを得る能はず。五陰の舍に歸りて捨離すること能はず。四大の毒蛇を知らず畏れず。憍慢見の箭を拔出すること能はず。貪慧癡の火を滅除すること能はず。無明愚癡を破壞すること能はず。愛著の大海を乾し竭すこと能はず。十

【以下第一】  
一、長、果の勝れた  
るを明し、初に  
業、次に位果を説

力の大聖導師を求めず。常に衆の意に隨ひて、生死の域に於て、常に一切の惡業の行に轉せらる。是の如き苦惱羸弱の衆生を救ふ者有ること無く、舍す者有ること無く、究竟じて道く者有ること無し。唯我一人のみ、獨り等閑無く、福慧を修習し、是資糧を以て、是衆生をして、畢竟淨に住し、乃至一切法の中に、無礙の智力を得しむべし」と。是の如く思惟して正觀に從つて智力を生じ、發願すらく「作す所の一切の善根は、皆衆生を度せんが爲の故に、一切衆生の爲に安樂を求めんが故に、一切衆生を利益せんが爲の故に、一切衆生を脱せしめんが爲の故に、一切衆生の苦惱を無くせんが爲の故に、一切衆生の盛衰を無くせんが爲の故に、一切衆生の心を清淨にせんが爲の故に、一切衆生を調伏せんが爲の故に、一切衆生の諸の憂惱苦を滅して、其願を滿せしめんが爲の故に」と。

是菩薩摩訶薩地に住すれば、諸法を忘れざるが故に、名けて念者と爲す。決定智慧の故に名けて智者と爲す。經書の意の次第を知るが故に、名けて有道の者と爲す。自ら護り戒を護るが故に、名けて有慚愧の者と爲す。戒を捨てざるが故に、名けて堅心の者と爲す。善く是處と非處とを思惟するが故に、名けて覺者と爲す。他に勝はざるが故に、名けて隨智の者と爲す。善く諸法の章句義を分別するが故に、名けて隨慧の者と爲す。善く禪定を修するが故に、名けて得神通の者と爲す。世間法に隨ひて行するが故に、名けて方便の者と爲す。善く福徳の資糧を集むるが故に、名けて無厭足の者と爲す。常に智慧の因縁を求むるが故に、名けて不捨の者と爲す。大慈大悲の因縁を集むるが故に、名けて疲倦無き者

【十八不共法】佛のみ有し給ふ特殊なる十八の勝法なり。身無失より智慧に十八法。又一説に十力、四無所畏三念住、大悲の十八を數ふ。

【乾消】諸種の奇甚を總稱す。【鬼著】狐狸、死等にて魅さるると言ひし精神病の一種なり。

と爲す。常に正しく精念するが故に、名けて破戒を遠離する者と爲す。深心に佛の十力、四無所畏、十八不共法を求むるが故に、名けて常に佛法を念する者と爲す。常に衆生の惡を離れ善を修することを念ふが故に、名けて佛國を莊嚴する者と爲す。諸の福德莊嚴、三十二相、八十種好を種うるが故に、名けて種種の善業を行する者と爲す。佛の身口意を莊嚴せんことを求むるが故に、名けて常に精進を行する者と爲す。一切法を説く菩薩を供養するが故に、名けて大恭敬を樂ふ者と爲す。一切菩薩の方便の中に心礙ふること無きが故に、名けて心無礙の者と爲す。常に衆生を教化せんことを樂ふが故に、名けて晝夜餘心を遠離する者と爲す。菩薩は是の如く行する時、布施を以て衆生を教化す、愛語、利益、同時もて、亦衆生を教化す、又色身を以て示現して衆生を教化し、亦説法を以て衆生を教化し、亦諸の菩薩の行事を示して衆生を教化し、亦諸佛の大事を示して衆生を教化し、亦生死の過惡を示して衆生を教化し、亦諸佛の智慧の利益を示して衆生を教化す。菩薩は是の如く修習して、大神力と種種の因縁の方便道とを以て衆生を教化す。是菩薩は種種の因縁して方便すと雖も、心常に佛に在りて善根を失はず。又復常に轉た勝れたる衆生を利益するの法を求む。是菩薩は衆生を利益せんが故に、世の有ゆる經書、技藝、文章、算數、金石の諸性、病を治する醫方、乾消、痲病、鬼著、蟲毒等、妓樂、戲笑、歡娛、國土、城郭、聚落、室宅、園林、池謁、華果、藥草、金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、寶珠、礪磧、礪磧、諸の寶聚を知り、日月五星、二十八宿、吉凶を占相すること、地動、夢怪、身中の

諸相を示す。布身持戒もて其心を攝伏し、禪定、神通、四無量心、四無色定、諸の衆生を安んじ、憍慢さざる事を知る。衆生を哀愍するが故に、眞の如き法を出して諸の無上の法に入らしむ。

菩薩、難勝地に住すれば、數百千萬億の僧に値ひたてまつり、恭敬し、供養し、尊重し讚歎し、衣服飲食、臥具醫藥をたてまつり、親近して法を聽き、法を聞きて出家し、法師と爲り、法を説きて利益し、轉た勝れたる多間の法を得、乃至百千萬億劫を過ぐるも、前も忘りせず、一切の福德善根は、轉た勝れて明淨となす。佛へは眞金を成鍊し、磔磔とて明淨すれば、其光轉た勝るが如し。菩薩、是地の中に住すれば、方便智慧の力の故に功德善根轉た淨明にして勝れ、下地は及ばざるなり。又日月星宿、諸天宮殿は風持して去らぬが如く、法度を失はざるが如く、是の如く菩薩難勝地に住すれば、方便を以て思惟するが故に、福德善根は轉た倍明淨にして前も證を取らず、亦亦に無上道を成ぜず。佛子、是を菩薩の難勝地を略説すと名く。菩薩是地の中に住すれば、多く兜率陀天王と作り、諸根寶利にして悉く能く一切の外道を摧伏し、所作の業有るは、布施、愛語、利益

【論】 風持の力にて保持せらるる

同時にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず、乃至具足一切稱智を念ずることを離れず、常に是心を生ずらく。我當に一切衆生に於て首と爲り勝と爲り、乃至一切衆生に於て依止者と爲るべし」と。佛子、是菩薩、若し勤行精進せんと思せば、須臾の間に能く千億の三昧を得、乃至能く千億の菩薩を示して以て眷屬と爲さん、若し願

【時に】以下、本  
地長行の解説を了  
りて今重頌を以て  
再説す。  
【語の菩薩は】以  
下の重頌は三十九  
偈より成り、初十  
一偈は勝慢對治、  
次十三偈は不住の  
道、次七偈は地果  
最後七偈は果勝を  
頌す。

力を以てせば神通自在にして、復甚數に遍満すること、若千百千萬億劫にも計り知るべからず。

時に金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、  
 山の菩薩は、四地の行法を具足し已りて  
 三世の情を思惟し、戒と心と疑悔を除くと  
 道非道と知見と、菩提と化衆生と  
 是の如きを平等に觀じて、第五地に入ることを得  
 四念處を巧と爲し、信五根を箭と爲し  
 四正勤を馬と爲し、四如意を車と爲し  
 五力を以て鎧と爲し、諸の煩惱の賊を破り  
 勇健にして退轉せざれば、直に第五地に入る  
 情慢を無垢の衣とし、淨戒を以て香と爲し  
 七覺を華鬘と爲し、禪定を塗香と爲し  
 智慧と方便とをもて、種種に念じて莊嚴す  
 是の如くなれば則ち、陀羅尼の園林に入ることを得  
 四如意を足と爲し、正念を頭項と爲し  
 慈悲は明淨の眼、利き智慧を牙と爲し

空無我<sup>くうむが</sup>を以て<sup>もつ</sup>吼<sup>こゑ</sup>え、<sup>よく</sup>諸<sup>しよ</sup>の煩惱<sup>ぼんごう</sup>の賊<sup>たいてき</sup>を破<sup>やぶ</sup>る  
是<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>きの人師<sup>にんじ</sup>子<sup>こ</sup>は、能<sup>よ</sup>く第五<sup>だいご</sup>地<sup>ち</sup>に入<sup>い</sup>る  
是<sup>こゝ</sup>菩薩<sup>ぼさつ</sup>已<sup>に</sup>に、第五<sup>だいご</sup>地<sup>ち</sup>に任<sup>にん</sup>ずることを得<sup>え</sup>て  
轉<sup>ま</sup>た勝<sup>しょう</sup>淨<sup>じやう</sup>の法<sup>ほふ</sup>を修<sup>しゆ</sup>するは、皆<sup>みな</sup>佛<sup>ぶつ</sup>道<sup>だう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>なり  
常<sup>じやう</sup>に慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>心<sup>しん</sup>を行<sup>ぎやう</sup>じて、未<sup>ま</sup>だ會<sup>かい</sup>て厭<sup>えん</sup>倦<sup>けん</sup>自<sup>みづか</sup>らず  
常<sup>じやう</sup>に此<sup>こゝ</sup>第五<sup>だいご</sup>地<sup>ち</sup>の行<sup>ぎやう</sup>法<sup>ほふ</sup>を修<sup>しゆ</sup>習<sup>じゆ</sup>せんが爲<sup>ため</sup>なり  
深<sup>ふか</sup>く二<sup>に</sup>の資<sup>し</sup>糧<sup>りやう</sup>なる、精<sup>しやう</sup>德<sup>とく</sup>と及<sup>およ</sup>び智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>とを集<sup>あつ</sup>め  
種<sup>しゆ</sup>種<sup>しゆ</sup>の方便<sup>ふはん</sup>力<sup>りき</sup>もて、上<sup>かみ</sup>地<sup>ち</sup>の觀<sup>くわん</sup>法<sup>ほふ</sup>を明<sup>あきら</sup>む  
常<sup>じやう</sup>に佛<sup>ぶつ</sup>の爲<sup>ため</sup>に護<sup>まも</sup>られ、念<sup>ねん</sup>持<sup>ぢ</sup>を成<sup>じやう</sup>ずることを得<sup>え</sup>て  
次第<sup>しだい</sup>に能<sup>よ</sup>く善<sup>ぜん</sup>く觀<sup>くわん</sup>じ、實<sup>じつ</sup>の如<sup>ごと</sup>く諸<sup>しよ</sup>諦<sup>ぢ</sup>を知る  
苦<sup>く</sup>集<sup>じふ</sup>滅<sup>めつ</sup>と正<sup>しやう</sup>道<sup>だう</sup>と、世<sup>よ</sup>間<sup>かん</sup>と第一<sup>だいご</sup>の事<sup>こと</sup>と  
覺<sup>かく</sup>と生<sup>じやう</sup>相<sup>じやう</sup>と親<sup>しん</sup>別<sup>べつ</sup>と、無<sup>む</sup>生<sup>じやう</sup>と如<sup>ごと</sup>く來<sup>らい</sup>智<sup>ぢ</sup>となり  
是<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>く諸<sup>しよ</sup>諦<sup>ぢ</sup>を觀<sup>くわん</sup>すれば、心<sup>しん</sup>は微<sup>ゐ</sup>妙<sup>めう</sup>清<sup>じやう</sup>淨<sup>じやう</sup>となりて  
未<sup>ま</sup>だ能<sup>よ</sup>く無<sup>む</sup>障<sup>じやう</sup>礙<sup>ゐ</sup>の解<sup>げ</sup>脱<sup>だつ</sup>を、達<sup>たつ</sup>得<sup>とく</sup>すること能<sup>よ</sup>はずと聞<sup>き</sup>も  
能<sup>よ</sup>く智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>と、及<sup>およ</sup>び信<sup>しん</sup>力<sup>りき</sup>と有<sup>あ</sup>るを以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に  
一<sup>いっ</sup>切<sup>せつ</sup>世<sup>せ</sup>間<sup>かん</sup>の諸<sup>しよ</sup>の智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>に、勝<sup>す</sup>ることを得<sup>え</sup>たり  
是<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>く諸<sup>しよ</sup>諦<sup>ぢ</sup>を觀<sup>くわん</sup>じて、悉<sup>ことごと</sup>く有<sup>あ</sup>る爲<sup>ため</sup>の法<sup>ほふ</sup>は

虚偽にして眞實ならず、一として堅固なる煩悩と知り  
能く諸佛の慈悲光明の分を得  
諸の衆生の爲の故に、專心に佛道を求め  
有爲の先後を知るに、衆生は甚だ惑むべし  
無明の闇に墮在し、愛の因縁に繋がる  
是菩薩は能く、世間の苦惱を滅し  
法の壽者無きこと、猶し草木等の如しと知る  
衆生は常に二の、煩惱の因縁を以ての故に  
先世より來る、後世も亦是の如し  
相續して斷絶せず、苦の邊を盡すこと能はず  
此に於て懲傷を生ずらく、我當に之を度脱すべし  
五陰を出づること能はず、四大の害を畏れず  
諸の邪簡を抜かず、三毒の火を滅せず  
無明の闇を除かずして、大愛の海に墮在し  
智慧の眼有ること無し、大導師を離るるが故にと  
是の如き事を知り已りて、轉た勤精進を加へ  
所作の起業有るは、皆衆生を度せんが爲にす

常に正念慧に住し、道有り憍慢有り

堅心にして覺は智に隨ひ、轉た更に増益せしむ

福慧を修して厭くこと無く、戒を持ちて羸弱ならず

多聞を求めて倦むこと無く、正しく修して佛土を淨め

好音聲、因縁取足無し

作す所の諸の善業は、皆衆生を利せんが爲にす

世間を利せんが爲の故に、經書等を造立し

金石の性、方、歌、戲笑の事

堂閣及び園林、衣服、諸の飲食

種種の寶璽を示し、衆をして歡喜を得しめ

日月五星、及び二十八宿、地動

吉凶の相を占ひ、經書、諸の怪事をしり

布施淨戒等、欲を離れ禪定を修し

四無量神通は、世間を安樂にせんが故なり

大智慧の菩薩、此等諸事を得れば

萬億の佛を供養したてまつり、佛に従ひて法を聞き

修する所の諸の善根は、皆悉く明淨なることを得

猶し、碎碎の賣きて、眞金を常響するが如し  
譬へば寶宮殿の、風持して法を失はざるが如く  
世法も染せざる所、蓮華の水に在るが如し

菩薩是地に住すれば、多く兜率王と作り  
諸根轉た猛利となり、諸の外道の見を破る

作す所の諸の善根は、皆佛智慧の爲にし  
佛力と無畏とを得て、能く諸の衆生を度す

是菩薩は、轉た勝れたる精進力を勤修し  
即ち能く千億の、深妙の諸の三昧を得

千億の佛を供養したてまつり、千億の世界を動かす  
其所上の力に隨はば、是數に過ぐることも無量ならん

是の如き第五地の、種種諸の方便は  
上智慧の大人に、法の如く解説し免れり

### 第六地

諸の菩薩は、上地の行相を説くを聞き  
虚空の中に在りて、衆の妙珍寶を雨らし

清淨なる光明を放ちて、世尊を供養したてまつり

【第六地】以下、  
十地の第六地にし、  
て菩薩の修行愈進  
み寂滅無二の諸法  
の現前する位に至  
る解説を、頌を以  
て解説する段なり

佛言、善哉善哉、金剛藏、  
無量億那由他の諸天、心皆大いに歡喜し、

上の虚空の中に於て、種種の珍寶を申らし、  
光明の相好を顯し、微妙にして甚かに愛しむべく

香華鬘等の寶物と、幡蓋とを佛の上に散らし、  
坐化自在菩薩、妙吉祥觀音菩薩と俱に

衆の寶物等を雨らし、尊敬として下の下尊が如し、  
佛を讃歎し、信喜してまつり、金剛藏を稱讚し

咸讚めて、善く善い哉、甚く諸地の行を説きたく、  
千萬億の諸天は、上の虚空の中に於て

天の衆、妙法華を作して、佛の功德を讃歎し、  
成是の如き妙言を作さく、佛の徳をたて、上尊は

微妙にして量有ること無く、能く一切の煩惱を滅す、  
諸法の本性は空にして、虚妄の相有ること無く

空は分別有ること無く、同なること虚空の若如し、  
上尊の相有ること無く、亦戲論有ること無く

亦未常に清淨にして、如何無分別なり

【佛子】 以下、本

若し人能く、一切諸の法性に通達せば、  
行に於ても無の中に於ても、其心動搖せざらん  
但大悲の心を以て、諸の衆生を度せんが爲なり  
是を諸佛の子と名け、佛口の法より生ず  
常に布施を行じて、諸の衆生を利益し  
本來清淨なりと雖も、戒を恃ちて心を堅くす  
本より心は無傷なりと雖も、而も忍辱を行じ  
法性の體を知ると雖も、而も精進を行じ  
先に煩惱を滅すと雖も、而も諸禪に入り  
先に法空を解ると雖も、而も諸法を分別し  
寂滅の智多しと雖も、而も世間を利せんことを求め  
能く諸の惡を滅する者は、之を名けて大人と爲すと  
是の如く諸の天女は、百千種の妙音もて  
稱讚讃歌頌しりて、默然として佛を觀たてまつる  
解脫月菩薩、金剛藏に請うて言はく、  
當に何の行担を以てか、第六地を成ずることを得べきと  
金剛藏菩薩の言はく、佛子、菩薩摩訶薩は已に五地を具足して六地に入らんと欲せば、

地の解體なり。三  
段に分ち第一段は  
譬觀對當の法を明  
し、十平等を以て  
就中初八は無を以  
て有を以て、次一  
は有を以て無を破  
す、後一は無無雙  
破するなり。

【是菩薩は】以下  
第二段不住道行を  
開し、十二菩薩を  
十門より觀察して  
正住地に就て不住  
行を説く。

【有漏】漏は漏滲  
の義にして、煩惱  
の異名なり。煩惱  
の生長するも  
の總じて有漏と  
稱す。

【種子】第八護中  
に伏在し、自體の  
果を生ずる能力、

十の平等法を以てすべし。何等をか十と爲す。一に無行を以ての故に、一切の法は平等なり。二に無相を以ての故に、一切の法は平等なり。三に無生を以ての故に、一切の法は平等なり。四に無滅を以ての故に、一切の法は平等なり。五に本來清淨なるを以ての故に、一切の法は平等なり。六に眞論無きを以ての故に、一切の法は平等なり。七に不取不捨なるを以ての故に、一切の法は平等なり。八に離を以ての故に、一切の法は平等なり。九に幻、夢、影、響、水中の月なるを以ての故に、一切の法は平等なり。十に有無は不異なるを以ての故に、一切の法は平等なり。菩薩は是十の平等法を以て第六地に入ることを得、菩薩は情の如く一切法の性を觀して、能く忍し隨順して、第六地を得、無生法忍は未だ現前せずとも、心に明利の順忍を成就す。

是菩薩は一切法の是の如き相を觀じて、大悲を首と爲し、大悲を増長するが故に、世間の生滅の相を觀て、世間を作さく、世間の有ゆる受身生處は、皆我に貪著するを以ての故なり。若し我に著することを離れば、則ち生處無し。一切の身夫は常に邪念に墮れ、邪道の道を行じ、愚癡に盲はられ、眞に貪著して行を發起す、邪行と、邪行と、不勤行となり。是行を以ての故に、有漏心の種子を起す。有漏有取の心の故に、生死の身を起す。有ゆる業を地と爲し、業を種子と爲し、無明覆蔽し、愛水を潤し、爲し、我心滲漏して、種種の諸見増長することを得しめ、名色の芽を生ず。名色に因るが故に諸根を生ず。諸根合するが故に觸行り、觸より受を生ず。受を樂ふが故に愛を生ず。愛増長するが故に取有り。

換言すれば萬有發  
現の力なり。唯心  
緣起の唯識は名言  
種子、業種子或は  
本有種子、新熏種  
子の別を立つ。  
【福行】福業とも  
云ひ、欲界の善業  
にして、可愛の果  
を感生するを以て  
福と言ふなり。  
【不動行】福業、  
非福業と共に福等  
の三業と言ひ、色  
無色界の善業に  
して、不動の果を  
感ずる業なるが故  
に斷言ふ。  
【根塵】根は眼耳  
鼻舌身意の六根、  
塵は境の義にして  
色聲香味觸法の六  
境を言ふ。

【三事和合】 三事

取の因縁の故に有有り。有に於て五陰の身を起すを名けて生と爲す。五陰の變ずるを名けて老と爲す。五陰の滅するを名けて死と爲す。老死の因縁にて、變悲熱惱、集苦の聚集すること有り。是十二因縁には集むる者有ること無く、散ずる者有ること無し。縁合すれば則ち有り、縁散すれば則ち無しと。菩薩は是の如く六地の中に於て、隨順して、十二因縁を斷ず。又是念を作さく、「實の如く第一義を知らざるが故に無明有り、無明は業を起す。是を行と名く、行に依りて初識有り。識と共に生じて四取陰有り。取陰に依止して、名色有り。名色成就して六入有り。根塵合するが故に觸有り。觸の因縁にて受を生ず。受を食樂するを名けて愛と爲す。愛増長するを名けて取と爲す。取より業を起すを名けて有と爲す。業の散たる五陰を名けて生と爲す。五陰の變ずるを名けて老と爲す。五陰の壞するを名けて死と爲す。死して別體する時、食著し心熱するを名けて悲と爲す。憂を發して啼哭する五陰を苦と爲す。意識を憂と爲す。憂苦轉た多きを名けて觸と爲す。是の如くして但大苦の積聚を生ずるのみ。是十二因縁には我無く、我所無く、作る者無く、作らしむる者無し。若し作者有れば則ち作事有り。若し作者無ければ則ち作事無し。第一義の中には作者無く作事無し」と。又是念を作さく、「三界は虛妄にして、但是れ心の作なり。十二緣分は是れ苦心に依る。所以は何ん。事に隨ひて欲心を生ず。是心は即ち是れ識なり、事は是れ行なり。行は心を誑すが故に無明と名く。識の所依の處を名色と名け、名色の増長するを六入と名く。三事和合して觸有り。觸の共生するを受と名く。所受に貪著するを

とは根、境、識を  
言ひ、此三事合し  
て識を生ずと言ふ

名けて愛と爲す。愛して捨ざるを名けて取と爲す。彼和合するが故に、名けて有と爲す。有の起す所を名けて生と爲す。生の變ずるを名けて老と爲す。老の壞するを名けて死と爲す。又無明に二種の作有り、一には緣中の癡なり、二には行の爲に因と作るなり。行にも亦二種の作有り、一には未來世の果報を生ず、二には識の與に因と作る。識にも亦二種の作有り、一には能く生を受けしむ、二には名色の與に因と作る。名色にも亦二種の作有り。一には縁を以て相續せしむ、二には六入の與に因と作る。六入にも亦二種の作有り、一には能く六塵を緣す、二には能く觸の與に因と作る。觸にも亦二種の作有り、一には能く所緣に觸れしめ、二には能く受の爲に因と作る。受にも亦二種の作有り、一には憎愛の非を覺り、二には愛の與に因と作る。愛にも亦二種の作有り、一には可樂の中に於て貪心を生ず、二には取の與に因と作る。取にも亦二種の作有り、一には能く煩惱を増長す、二には有の與に因と作る。有にも亦二種の作有り、一には能く論道の中に於て生ぜしめ、二には生の爲に因と作る。生にも亦二種の作有り、一には能く五陰を起す、二には老の與に因と作る。老にも亦二種の作有り、一には諸根をして熟せしめ、二には死の與に因と作る。死にも亦二種の作有り、一には諸根をして斷せしめ、二には見知せざるを以ての識に而も相續して絶えざらしむ。又無明は諸行に緣るとは、無明は行をして斷ぜざらしめ、助けて行を成ずるが故なり。行は識に緣るとは、識をして斷ぜざらしめ、助けて識を成ずるが故なり。識は名色に緣るとは、名色をして斷ぜざらしめ、助けて名色を成ずるが故なり。乃至生は

【先賢相續云云】  
十二因縁の三世分  
別説

【又十二因縁を説  
きて三苦】以下、  
十二因縁の三苦觀

老死憂悲苦惱に縁るとは、死をして斷せざらしめ、助けて死を成するが故なり。無明滅するが故に則ち諸行も滅す。乃至生滅するが故に老死憂悲苦惱も滅す。因縁するが故に果も亦滅す。又無明と愛と取と、是三分の斷せざるは煩惱道なり。行、有の三分の斷せざるは業道なり。餘の因縁分の斷せざるは苦道なり。先後際相續するが故に、是三道斷ぜず。是三道は我我所を離れて、而も生滅有り。又無明及び行は是れ過去世の事なり。識、名色、六人、觸、受は是れ現在世の事なり。愛、取、有、生、老死は是れ未來世の事なり。是に於て、三世の轉する有り。無明滅するが故に、諸行も滅するを、名けて三世の相續を斷ずる説と爲す。又十二因縁を説きて三苦と名く。無明、行、識、名色、六人を名けて行苦と爲す。觸、受を名けて苦苦と爲す。愛、取、有、生、老死、憂悲、苦惱を名けて壞苦と爲す。無明滅するが故に諸行も滅す。乃至、生滅するが故に老死も滅するを、名けて三苦の相續を斷ずる説と爲す。又無明に依りて諸行を生ず。無明滅すれば諸行も滅す。諸行の性は空なるを以ての故なり。餘も亦是の如し。無明の因縁にて諸行生ずとは、生縛を以て説く。無明滅するが故に諸行滅すとは、滅縛を以て説く。餘も亦是の如し。又無明の因縁にて諸行生ずとは、是は隨順無所有觀の説なり。無明滅すれば諸行滅すとは、是れ隨順盡觀の説なり。餘も亦是の如し。

是の如く逆順に十種も十二因縁の法を觀ず。謂ゆる因縁分の次第と、心の所攝と、自助成の法と、相捨離せざると、三道に隨ひて行すると、先後際を分別すると、三苦差別

【是菩薩は】以下第二段に果位の勝れたることを明し初に行果、後に位果を説く。

【空解脱門】三解脱門の一にして、萬法の本性は皆空なることに達し諸法に自在を得るを言ふ。

【解脱門】相轉を脱し、萬法如幻にして何等著すべし無きを達しして、諸法に自在を得るを言ふ。

すると、因縁より起るを、生滅の轉と、無所有甚極となり。

是菩薩は十二因縁に隨つて、我無く、人無く、衆生無く、壽命者無く、作者と使作者とを離れ、主無くして衆の因縁に隨す。是の如く觀ずる時に、空解脱門現るる前に在り。

此事を滅すれば、餘は漸積せざるが故に、無相解脱門現るる前に在り。此二種を知りて更に有を樂みず、唯天衆の心して、衆生を教化すれば、無願解脱門現るる前に在り。菩薩は

三解脱門、修行すれば、彼我の相を離れ、作者受者の相を離れ、有無の相を離る。悲心轉

を増し、身心を以ての故に、勤行精進して、未だ滿でざる菩薩の法を満足せんと欲す。

菩薩は是念と作さく、「有爲の法は衆生の故に増し、離放すれば則ち減す。緣具はるが故に

増し、具はらざれば則ち減す。我有爲法の過を知るが故に、應に離放すべからず。諸の

諸法、具はる衆生を生ずるが故に、亦畢竟して有爲法を滅せし」と。菩薩は是の如く有爲

の法は無常にして、堅固の相を離り、生無く滅無しと知り、大無畏と相合して、衆生を捨

てす。即ち無障礙の般若世尊法を得て、光明は現じて前に在り。是智慧を得、具足して

阿耨多羅三藐三菩提の因縁を作すし、而も有爲法に住せず、有爲法の相は空しく相なりと

觀じ、亦其中にも住せず。無上菩提の法を具足せんと欲するが故なり。菩薩現前地に住す

れば、勝空三昧、性空三昧、第一義空三昧、究竟空三昧、大空三昧、自空三昧、生空三昧、

相實證虛妄空三昧、真空三昧、法分別不分別空三昧を得、其の如き等の處の空三昧門

現るる前に在り。無相、無願三昧も亦是の如し。是菩薩、現前地に住すれば、深心、決定

【四種の風】四時の風を門に喻へしなり。春の和風は煩惱、夏の炎風は煩惱、秋の金風は死塵、冬の寒風は天塵に喻ふ。

心、眞心、甚深心、不憍心、不捨心、廣心、無邊心、樂智心、慧方便和合心、是の如き等の心轉た勝れて増長し、阿耨多羅三藐三菩提に隨順して、一切の論議も、傾動すること能はず。智地に入りて、聲聞、辟支佛地を轉じ、決定して佛智に向ひ、一切の衆魔及び諸の煩惱の、壞ること能はざる所なり。菩薩の智慧明の中に安住して、空、無相、無願の解脱門を修し、專ら智慧の方便を以て、助菩提の法を行す。是菩薩、現前地に住すれば、般若波羅蜜に於て偏に勝れ、明上の順忍を得。是法に順ずるを以て違逆有ること無し。

菩薩現前地に住すれば、數百千萬億の佛を見たてまつることを得、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎して、衣服飲食、臥具醫藥をたてまつり、諸佛に親近し、諸佛の所に於て正法を聽受し、説の如く修行し、佛を歡喜せしむ。是人は轉た勝れて佛の法藏を知り、乃至無量百千萬億劫に一切の善根轉た妙にして明淨となる。譬へば眞金の琉璃を以て磨瑩するに、光色轉た勝るるが如く、菩薩現前地に住すれば、慧方便を以ての故に、一切の善根轉た勝れて明淨となり、餘地は及ばざるなり。譬へば月明かにして、能く衆生の身をして清凉なるを得しめ、四種の風吹くとも能く過絶すること能はざるが如く、菩薩現前地に住すれば、善根轉た勝れて、能く衆生の煩惱の火を滅し、四種の惡魔も壞すること能はざる所なり。諸の佛子、是を菩薩の現前地を略すと名く。菩薩是地に住すれば、多く善化自在天王と作り、智慧猛利にして、能く一切の増上慢の者を破り、聲聞の間難は窮盡すること能はず。施作する所有るは、布施、愛語、利益、同事にして、皆佛を念ずること

を離れず、法を念ずることを離れず、乃至一切禪智を念ずることを離れず。常に是心を生ずらく、我當に一切衆生の中に於て首と爲り、勝と爲り、乃至一切衆生に於て、依止者と爲るべし」と。是菩薩、若し鈞行精進せんと欲せば、須臾の間に於て、百千億の一味を得、乃至無量百千億の菩薩を示して以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、能く是數に過ぎて若し百千萬億劫にも計り知るべからず。」

時に金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て説して曰はく、

諸の菩薩は已に、五地の行を具足することを得て

諸法は無性にして、相も無く生滅も無く

本來常に清淨にして、常の教論有ること無く

諸法は常に相を離れ、取らざる捨てざる

性の空なること猶し射の如く、二を離れて分別無しと知り

是の如きの行に隨順すれば、第六地に入ることを得

明利の瞋忍に住すれば、智慧の力を以ての故に

一切の世間の生法を離れ、空無明に從つて有り

愛く諸の世間は、皆無明に從つて有り

無明若し滅すれば、則ち世間有ること無しと知り

因縁の法を觀察し、第一義に隨順して

【諸の菩薩は】以下、本地の重頌、總じて三十九偈より成り、初三偈は勝鬘對治法を、次二十偈は不住道を、最後八偈は行果を頌して、本地の果を頌して終る。

而も縁の報たる、所作及び假名を壊せず

如實には作者無く、亦受者有ること無し

是の如く有無を觀するに、雲の如く實の事無し

眞諦の義を知らざる、之を名けて無明と爲す

是に從へば期ち思を生じ、身口の業は行の果なり

行に從ふが故に識有り、即ち名色を生ず

是の如く次第して、生死の苦惱の聚を起す

三界は、但貪心に從つて有りと了達し

十二因縁は、一心の中に有りと知る

是の如くなれば期ち生死は、但心より起る

心若し滅することを得ば、生死も則ち亦盡きん

無明に二種の作あり、癡に緣りて業を作す

乃至老死に於て、五陰の聚を壞散す

此事邊に從はば、具に苦惱を生じ

是事若し盡きなば、苦惱も則ち亦滅せん

無明若し具足せば、相續は則ち滅せず

因縁若し盡きなば、相續も則ち亦斷えん

無明及び愛塵は、即ち是れ煩惱の道なり

行及び有は其れ業なり、餘の分は則ち是れ苦なり

癡と行とを過去と爲し、識、名色、六入と

觸と受とは是れ現在なり、餘は則ち未來世なり

癡慧對名色と、六入とを名けて行と爲し

觸、受は是れ苦苦にして、餘の分は則ち是れ壞なり

癡は衆緣より生じ、則ち餘の縛の縛有り

衆緣若し滅せば、諸の縛も則ち亦斷えん

因よりして果を生ず、因滅すれば則ち果も滅す

是の如く諸法を觀するに、自性は則ち皆空なり

無明に隨順すれば、則ち諸の世間有り

若し能く隨順止まらば、是れ則ち有を斷つ

是に従へば則ち是有り、是無ければ則ち是無し

是の如きの十種の觀は、甚深の因緣の法なり

因緣分は次第し、去來及び現在に

作は一心を捨てず、分別するに三道有り

三種の苦差別し、生滅は縛法に於てし

無所有と及び盡とは、能く造順の想を行す

菩薩は是の如く、十二因縁の法を入れれば

空の如く夢幻の如く、作者も受者も無し

是の如く因縁を親じて、智者は空を修し

事滅して相續せず、無相の行に入る

此二の虚假なるを知り、中に於て所顯無く

但大悲の心を以て、緣んで衆生を度す

是の如き諸の居士は、解脫門を修習して

悲心もて佛を愛樂し、無量の諸の功德あり

諸の有爲の法は、皆和合によりて有りと知り

萬の空三昧と、無相、無願の定とを得て

智慧轉た増進し、上に順忍に入る

諸の菩薩の、無礙の智解脫を得て

是の如き諸の善根は、轉た勝利明淨となる

無量の佛を供養したてまつり、諸佛に稱讚せられ

諸の如來の所に於て、出家して佛道を學び

諸佛の法蔵に入り、善根轉た增長す

【第十一】 四攝の  
一にして、殊勝の  
法又は證を得ざる  
に得たりと思ひ、  
他人に信心を言ふ

猶し瑠璃の寶もて、眞金を摩磨するに

光明輝た清淨となり、餘の及ぶ能はざる所なるが如し

月の虚空を行くに、清涼一切に被り

四種の風に吹かるるも、能く遠絶せしめざるが如し

菩薩の智慧の光も、諸の煩惱の火を滅し

四魔も壞すること能はず、其後亦是の如し

菩薩是地に住すれば、多く善化王と作り

諸根悉く猛利にして、能く増上慢を破り

作す所の諸の善業は、皆悉く智慧に隨ひ

聲聞の諸の問難も、窮盡することを得る能はず

是佛子若し、是の如く勤めて精進せんと欲せば

須臾にして即ち能く、百千億の三昧を得ん

百千億の、十方の世界の佛を見たてまつること

秋の清涼の時に、月の光明淨好なるが如し

是の如き第六地は、深妙にして知見し難く

聲聞の了らざる所なり、大士に略して説き畢れり

【第七地】 以下、

第七地

菩薩念念に諸法を  
空寂して遠く上地  
に進趣する位、即  
ち第七地の解説を  
擧ぐ。

爾時、諸の天衆は、虚空の中に在りて、  
香華珍寶を雨らし、雲の如く佛の上に散じ、  
踊躍して妙音を發し、咸讀めて言はく、  
善い哉善い哉金剛藏、善く第一義を知りたまふ  
無量の功德聚なる、人中の蓮華也。  
此上妙の行を説きて、諸の世間を利益したまふと  
他化自在王は、光明寶華を雨らし、  
衆家として、憂と煩惱とを除きたまへる者を餽養したてまつる  
諸天及び天王は、咸是の如きの言を發すらく  
若し此地の義を聞かば、則ち爲れ大利を得んと  
時に百千種の、上妙の諸の伎樂を作せり  
諸の天女は稱讃すらく、佛の神力を承くるが故に  
諸佛は最も寂滅にして、能く惡を轉じて善と爲したまふ  
一切諸の世間の、皆共に恭敬する所  
世間を出過すと雖も、而も世間の法を示し  
身は實相に同じと知りて、而も種種の身を示したまふ  
諸の言音を以て、寂滅の法を演説すと雖も

【佛子】以下、本地正説に於て、五段に分ち、第一は越地の方便として、慧方便より十妙行を生ずること

而も語言に於て、音聲の相有ること無しと知りたまふ能く百千の土を過ぎて、上妙も諸佛に供へ智身と佛の国土とは、相を離れて智自在なり衆生を教化すと雖も、而も彼我の想無く廣大功徳を集め、中に於て著を起さず

日月を以ての故に、三毒の火世を然くも一切の相を離らざれば、慈悲清淨を起したまふと諸天及び天女は、歡喜して供養を設け

是の如く成就し行りて、默然として相を觀たてまつる解脫月菩薩、金剛藏に請て言はく

大衆は淨清なり、願くは七地を行を説きたまへと

金剛藏菩薩の言はく、佛子、善哉善哉、是は、已に第六地を具足して、第七地に入らんと欲せば、方便に從て、十の修行を修すべし。何等をか」と爲す。善く空、無相、無願を修して、而も慈悲心で以て、衆生に處在し。諸佛の平等法に隨ひて、而も諸佛を供養することと指す。常に樂ひて空智を思ひて、而も廣く福徳の資糧を修し、三界を遠離して、而も空を莊嚴し。畢竟として、諸の煩惱の焰を寂滅して、而も衆生の爲に貪悲癡の煩惱の障を滅する法を起し、而も法の如く、衆の如く、水中の月の如き、不二の相に

隨順して、而も分別の煩惱の煩惱を起し、其の果報を失はず。一切の諸行の上は、空なること虚空の如く、皆是れ相を離れし如く、而も國土を淨むる行を離れし如く、佛の法身に、身無しと知りて、而も色身の三十二相、八十種好を起し、以て自ら淨まし。諸佛の音聲は不可説にして、空滅の如なることを知りて、而も一切に離れて、種種の莊嚴の音聲を起し、諸佛は一念の中に於て、三世に通達したまふと知りて、而も種種の相、種種の時、種種の劫に、阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生の信解に隨ひて、是の如き善法を作したまふと知る。是を方便よりして、諸行を生ずと行く。菩薩摩訶薩、此妙行を修すれば、是の如き方便現前す。如くに、名して七地に入りと爲す。

【是菩薩七地】以下、第二段にして障對治の法を明す

是菩薩七地に住するは、無量の衆生、地に入り、無量なる佛の衆生を教化する法に入り。無量の世界に入り、諸佛の無量なる清淨の國土に入り。無量なる諸法、差別に入り。無量なる諸佛の智の無上道を得るに入り。無量なる諸劫の數に入り。無量なる諸佛の三世に通達するに入り。無量なる衆生の毀壞の差別に入り。無量なる諸佛の身身の別異に入り。無量なる諸佛の衆生の不行、諸根の差別を知りに入り。無量なる諸佛の音聲、語言、衆生をして歡喜せしむるに入り。無量なる衆生の心心の所行の差別に入り。無量なる諸佛の智慧をして隨ふ行に入り。無量の善聞、乘を不ず信解に入り。諸佛の無量に道の因縁を説きて、衆生をして信解せしむるに入り。無量の問支佛の智慧習成するに入り。諸佛の無量なる甚深の智慧の所説に入り。諸の菩薩の無量なる諸行の道に入り。諸佛の無量なる所説の大乘

は、事を成就して衆生をして得入せしむるに入る。菩薩は是念を作さく、是の如く諸佛は無量無邊の大勢力を有らたまふ。是の如きの勢力を我身に修習すべし。此勢力を得るは分別を以てせず」と。菩薩は是の如く智慧して思惟し、大方便の慧を修習して、佛智に安住す。不動の法を以ての故に。

【常に種種に】以下、第、段にして雙行の勝れしことを明す。

【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道（以上各法華註）を言ひ、普菩提に願趣する道品なり。

常に種種に衆生を度する道を起して、障礙有ること無し。行住坐臥普悉く能く衆生を度する法を起し、諸陰の慧を離れ、諸の威儀に住し、常に慧の如き想念を遠離せず。是菩薩は念念の中に於て、十波羅蜜、及び十地の行を具足す。何を以ての故に。是菩薩は念念の中に於て、大悲を首と爲して佛法を修習し、一切を大智慧に傾向するが故なり。十波羅蜜とは、菩薩は佛道を求めて修する所の善根を以て、一切の衆生に與ふ、是は檀波羅蜜なり。普く一切の煩惱の慧を滅す。是れは智波羅蜜なり。慈悲を首と爲し一切衆生の心に於て、傷くる所無し、是れは捨波羅蜜なり。善根を求めて満足無し、是れ是智波羅蜜なり。道を修するの心散ぜず、常に一切智に向ふ、是れ禪波羅蜜なり。諸法の不生門を忍む、是れ般若波羅蜜なり。能く無量の智門を開す、是れ方便波羅蜜なり。轉々轉々たる智慧を求む、是れ願波羅蜜なり。諸魔外道も沮壞すること能はず、是れ力波羅蜜なり。一切の法相に於て實の如く識く、是は智波羅蜜なり。是の如く念念の中に十波羅蜜を具足す。是菩薩は十波羅蜜を具足する時、四攝法、三十七品、三解脱門、一切の阿耨多羅三藐三菩提を助くる法を、念念の中に於て、普悉く具足す。

【佛子】以下、第四段にして前六地と相望(対比)して此地の殊勝なることを明す。

解脱月菩薩、金剛藏菩薩に問うて言はく、佛子、菩薩摩訶薩は、但七地にのみ助菩提の法を具足するや。一切の諸地にも、亦能く具足するや。金剛藏の言はく、佛子、菩薩摩訶薩は、諸地の中に於て皆悉く助菩提の法を具足す。遠行は勝れたるが故に、此地に於て説く。何を以ての故に。諸の菩薩摩訶薩は、七地の中に於て一切の行具足して、智慧神通の道に入るが故なり。佛子、菩薩は初地に於ては發願して一切の佛法を緣するが故に、助菩提の法を具足す。二地には心の惡垢を除くが故に、助菩提の法を具足す。三地には願轉た增長して法明を得るが故に、助菩提の法を具足す。四地には道に入るが故に、助菩提の法を具足す。五地には隨順して世間の法を行するが故に、助菩提の法を具足す。六地には甚深の法門に入るが故に、助菩提の法を具足す。此第七地には一切の佛法を想すが故に、助菩提の法を具足す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は此地の中に於て、諸の智慧の行する所の道を得ればなり。是力を以ての故に、第八地は自然に成ずることを得。佛子、應へば二の世界の如し。一は定めて清淨にして、一は定めて垢穢なり。是二の中間は、得て過ぐべきこと難し。此世界を過ぐんと欲せば、當に神通及び大願力を以てすべし。菩薩も亦是の如し。雜道を行するは、得て過ぐべきこと難し。大願力と大智慧力と大方便力とを以ての故に、爾乃過ぐることを得。

解脱月の言はく、第七地の菩薩は是れ淨行と爲すや、是れ垢行と爲すや。金剛藏の言はく、歡喜地より菩薩の行する所は、皆罪業を離れたり。何を以ての故に。阿耨多羅三藐

三菩提に趣向するが故に、地に踏みて行する所は清淨なるも、名けて過ぎたりしりきらず。佛子、譬へば轉輪聖王の、大寶の車に乗じて、四天下に遊び、諸の衆生の寶寶財貨を見ながら、王に苦無と雖も、阿耨多羅三藐三菩提を離れず。若し王身を捨てて梵世に生れ、十世界に遊び、大威力を興せば、爾時、乃ち人身を離れたりと名く。菩薩も亦是の如し。初地より、波羅蜜海に在り、衆生の心の行する所の事、及び煩惱の垢を離れ、煩惱垢の爲に汚されずして、善道に長ずと雖も、名けて過ぎたりと爲さず。若し、煩惱を捨てる所の功行を捨てて八地に入らば、爾時、名けて清淨の乘に乗すと爲す。暴く、煩惱の煩惱垢を知り、煩惱垢の爲に汚されざれば、乃ち名けて過ぎたりと爲す。諸の佛子、菩薩七地に住すれば、喜欲等の諸の煩惱垢を過ぐ。七地に在るを有煩惱と名けず、無煩惱と名けず。何と以ての故に、一切に煩惱起らざるが故に、有煩惱と名けず。如來の智慧を以て、具足圓滿するが故に、無煩惱と名けず。

【菩薩七地に】以下、第五段にして行位の二果を明す

菩薩七地に住すれば、深淨なる身口意の業を成就す。是菩薩の有ゆる不善の業、煩惱に隨ふ者は、悉く已に捨離し、有ゆる善業は、常に修習して行す。又世間の修習の五地に盡く仰きは自然に得、三千大千世界に於て最も爲れ希有にして、七師たることを得。唯如來と八地の菩薩とを以ては、衆生の深心妙行も、能く與にもしき者有ること無し。是菩薩の有ゆる禪定、神通、解脫、味は禪に隨はずして生じ、欲する所自在なり。菩薩遠行地に住すれば、念念の中に於て方便慧力、及び一切の助菩提の法を具足し修習して、轉法輪

れて具足し、能く菩提善伏三昧、善思義三昧、遊樂三昧、分別義藏三昧、知實分別法三昧、堅固安住三昧、知神通門三昧、淨法界三昧、顛佛執三昧、種種義藏三昧、背生死向涅槃三昧に入る。是の如き百萬の三昧を具足して此地を淨治す。是菩薩五三昧を得れば、智慧方便善く清淨なるが故に、深く大悲の力を得るが故に、名けて聲聞辟支佛地を過ぎ、佛智地に趣くと爲す。是菩薩是地に住すれば、無量の身業は無相の行なり、無量の口意業は無相の行なり。是菩薩は清淨の行の故に、無生法忍を得て、諸法を照明す。

解脫月菩薩の言はく、佛子、菩薩初地に住すれば、無量の身業、無量の口意業有りて、已に能く聲聞辟支佛地を過ぎきや。金剛藏菩薩の言はく、「大法に修るが故に過ぎたり、實の行の力には非ず。第地地は實行の力の故に、一切の聲聞辟支佛も盡すること能はざる所なり。譬へば、生れて王家に在れば、即ち一切に勝れたるが如し。何を以ての故に。地尊貴なるが故に。其身長大にして、智慧成就すれば、爾乃眞實に一切に勝れたるなり。菩薩も亦是の如し。初發心の時、一乘に勝れたるは、大願を發して深心清淨なるを以ての故なり。今此地に住すれば、智慧の力を以て、聲聞、及び辟支佛に勝るるなり。佛子、菩薩七地に住すれば、甚深なる遠離無行の身口意の業を得、轉た勝れたる法を求めて而も捨離せず、轉た勝れたる心を以ての故に、實際を行ずとも而も實際を許せず。」

解脫月の言はく、「佛子、菩薩は何の地より來りて、能く寂滅に入るや。」金剛藏の言はく、「六地より來りて能く、寂滅に入る。今此地に住すれば、念念の中に於て、能く寂滅に入

り、而も寂滅を證せず。是菩薩は不可思議なる身口意の業を成就して、寶藏を行じ、而も寶藏を證せず。譬へば人有り船に乘りて海に入り、善く行法を爲すも、善く水相を知るをもて、水害の爲に滄浪せられざるが如し。是の如く菩薩北七地に住すれば、諸の波羅蜜の船に乘り、能く寶藏を行じて、而も寶藏を證せず。菩薩は有りての故に、智慧の力を得るが故に、禪定智慧より大方便の力を生ずるが故に、深く涅槃を受すと雖も、尚も身を生死に現じ、眷屬に圍遶せらるると雖も、而も心は常に道に隨ひ、願力を以ての故に、三界に受生するも、世法の爲に汙染せられず。心は常に善寂なるも、方便の力を以ての故に、而も遠つて熾然たり。佛智に隨行し、常聞辟支佛地を轉じて、佛の法藏に至るも、而も寶藏を現す。四魔を過ぐと雖も、而も塵行を現す。外道の行を現すと雖も而も佛法を捨てず。身を一切の世間に現すと雖も、而も心は常に出世間の法に在り。一切有ゆる狂嚴の事よ、諸の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、四天王、釋提桓因、俱舍王に勝れたるも、而も法を樂ひ、法を修することを捨てず。

菩薩は是の如き菩薩を成就して、遠行地に住すれば、百千萬億那由他の佛に値ひてまつり、恭敬し供養し尊重し讚歎して、衣服妙具、臥具醫藥もて、諸佛を供養し、佛の法を護持し、諸の聲聞、辟支佛の智慧の問答も曉すること能はざる所なり。是菩薩は衆生を哀愍するが故に、法意轉た清し。是菩薩は無量百千萬億那由他劫に、善根轉を勝る。譬へば眞金の諸の妙寶を以て莊飾し聞斯れば、轉た勝れて明淨となり、眞金の及ばざるが

【深智慧定心のものも】  
 説の重なりなり。本地解  
 十四偈より成り、四  
 初九偈は趣地の方  
 便十妙行、次三偈  
 は障對治、次八偈

十地品第二十二之三

如し、菩薩も亦是の如く、遠行地に住すれば、一切の音聲は、方便智慧より生じ、轉た勝  
 れて明淨となり、能く壞る者無し。譬へば日光は、星宿月の光の及ぶこと能はざる所  
 にして、一切の泥水を悉く能く乾し竭すが如し。菩薩も亦是の如く、遠行地に住すれば  
 善根轉た勝れ、一切の聲聞辟支佛の及ぶこと能はざる所、又能く煩惱の淤泥を乾し竭す。  
 諸の佛子、是を菩薩摩訶薩の遠行地を略説すと名く。菩薩此地に住すれば多く他化自在  
 天王と作り、諸根猛利にして、能く衆生に悟道の因縁を發し、作す所の善業は、布施愛語  
 利益同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず、乃至具足一切種  
 智を念ずることを離れず、常に是心を生ずらく、「我當に一切衆生に於て首と爲り勝と爲  
 り、乃至一切衆生に於て依止者と爲るべし」と。是菩薩、若し是の如く勤行精進せんと  
 欲せば、須臾の間に於て、百千萬億那由他の三昧を得、乃至能く百千億那由他の菩薩を現  
 じて、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、自在に示現して、此數に過ぎ、百千萬億  
 那由他劫にも計り知るべからず。

時に金剛藏菩薩、重れて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

深智慧定心のもの、具に六地を行じ已り

一時に方便智慧を生じて、七地に入る

空無相の願を行じて、慈悲の心を修し

佛の平等法に順じて、諸佛を供養したてまつる

七五三

は雙行無間、六十一偈は前説の六地の勝益、次八偈は雙行の果、最後四偈は位果を頌讚す

智を以て空を觀すと雖も、而も偏を修して厭くこと無く

能く三界を觀すと雖も、而も心に遠離を樂ふ

心常に寂滅なりと雖も、而も慧を滅する法を過し

空有二の相を行するも、而も慈悲心を行す

六地の土は、空なること虚空の若知しと觀すと雖も

而も偏善く莊嚴して、諸佛の土を清淨す

諸佛の身は、法相の無相なるに同じと知ると雖も

而も三十二、八十の諸の相好を種う

首奪の法は、言説すべからざる相なりと知ると雖も

而も佛の音聲を數じて、一切をして歡喜せしむ

諸障に、一念の中に成道したまふと知ると雖も

而も劫と刹とを示して、諸の衆生を引導す

其の如く諸法を知れば、則ち法の照明を得

菩薩は是の如き者は、即ち第七地に入る

其地に住すれば能く、無量の衆生の行を觀じ

本誓願の、衆生の教化を成ずる法と

眞實の功徳は、諸法の別の相とを觀じ

【四威儀】行、住、坐、臥の四事、戒律の規程なり。

又諸の衆生の、種種の欲樂を知り  
三業の法を説きて、衆生をして信解せしむることを知り  
我應に教化を爲して、是衆生を成就せしむべしと  
是の如き思惟を以て、方便と慧と和合して  
四威儀の中に於て、常に是の如き道を行す  
一の念の中に於て、精く菩提の法を具す  
謂はる施戒等の、十種の波羅蜜なり  
是の如き法、菩薩の、修する所の福德を  
皆諸の衆生に與ふるは、檀波羅蜜と名け  
心の惡垢を消除するを、尸波羅蜜と名け  
六塵の爲に爲せられざるは、羼提波羅蜜なり  
能く轉勝の法を起すは、精進波羅蜜にして  
是道に於て動ぜざるを、禪波羅蜜と名け  
無生忍の照明たるは、般若波羅蜜にして  
佛道に廻向するは、方便波羅蜜なり  
轉た勝れたる法を求むるを、願波羅蜜と名け  
能く壞る者有ること無きを、力波羅蜜と名け

【相分】唯識所談に於ては吾人の認識作用の一要件たり。認識の對境の意なり。即ち認識作用の時現出する所縁の影像なり。

能く解して如實に説くを、智波羅蜜と名く

是れ菩提を助くるの法にして、念念に皆能く攝す

廣大の願を發すは、大法に縁るが故なり

初地の中の功德は、之を名けて具足と爲す

第二地を名けて、諸の心の垢塵を除くと爲し

第三は願増明し、第四地は道に入る

第五は世に隨ひて行じ、第六は深法に入りて

無生の相分を得、漸漸に而も增長す

第七は一切を集めて、菩提分の法を具へ

能く諸の功德、及以一切の願を起す

是の如き諸の功德は、後の八地の中の

一切の諸の所行をして、自然に清淨なることを得しむ

遠行地は過き難く、大智力の能くする所なり

二國の中間の、得て過度すべきこと難きが如し

七地の中に在れば、汚れざること聖王の如く

此道に住すと雖も、一切を過きたりとは名けず

若し第八の、菩薩の智慧地に到らば

【戒盡】無色界の  
第四非非非想處  
に屬する禪定にし  
て、不還果以上の  
聖者心身の勞を厭  
ひ、閑樂を得んと  
して修する定なり

爾時意界を過ぎて、智業の中に住せん

梵王の世を觀るが如く、名けて人と爲すことを得ず

菩薩の罪に汚されざるは、蓮華の水に在るが如し

菩薩是地に住すれば、諸の貪欲等を過ぎたるをもて

有煩惱と名けず、亦滅盡とも名けず

是正道の中に入れば、諸の煩惱有ること無く

佛道を願ひ求むるが故に、盡者と名くることを得ず

諸の世間の中の、經世技藝の事

文頌呪術等に於て、自然に能く明了す

諸の禪定、及び諸の神通等を修習して

無量の心もて世を利す、是事皆能く起る

爾時此菩薩は、二乘の行を過ぎて

第七地の、菩薩の諸行の中に安住す

初發心の時を以ては、大願力の故に勝る

今此地の中に於ては、自ら智慧の力を以てす

猶し國王の子は、生れし時に姓尊貴にして  
後に功行成ずるを以て、諸人の中に於て尊きが如し

此に住すれば深智を得、轉に勝れたる精進を興し  
念念に寂滅に入らり、而も亦復た寂滅す  
人の善く船に乗じて、大海の中に入らば  
深水の難きに行くと雖も、而も後に害せらるる事  
菩薩の行は轉た勝れて、方便智慧の如く  
功德悉く備に足りて、世の能く知る所に非ず  
無量の佛を供養したてまつりて、其心轉た清淨となり  
眞金の雜寶もて、間錯して莊嚴せるが如し  
佛の智慧光を得て、諸の愛潤の事を乾かすこと  
猶し日の光明の、泥濘を消潤するが如し  
是地に住すれば多く、他化自在とならば  
諸根悉く猛利にして、諸の道思に前達す  
若し處して精進せしむれば、百千億  
那由他の諸佛を奉たてまつるを得て、隨りてせば復是に過きん  
七地は智慧淨くして、入大及び二乘は  
皆其境界に非ず、今已に略して説き竟らり

大方廣佛華嚴經

卷第十六

東晋天竺三藏佛跋跋陀羅譯

十地品第二十二之四

【他化自在王】以下、第八地不動地解説の讚講の頌なり。菩薩此地に到れば三界の生死を離れて、有無の二見に動ぜざるを以て不動地と言ふなり。

他化自在王と、諸天及び菩薩とは此上行を説くを聞きて、心皆大いに歡喜し上妙の華香、幡蓋寶瓔珞眞珠摩尼珠を雨らして、佛及び大眾に散じたてまつれり天女は空中に於て、種種の伎樂を作して如來、并及諸の菩薩を供養したてまつり同じく微妙の音を以て、佛の功德を歌頌すらく一切智慧の音、衆生の中の最尊は世間を哀愍したまふが故に、諸の神通力を現じたまへり上華香珍寶等も、皆是の如きの音を出せり一微塵の中に於て、各那由他の

無量數の諸佛、中に於て而も法を説きたまふことを示す  
一微塵の中に於て、無量の佛國を見るに  
須彌金剛に圍まれ、世間迫近せず  
一微塵の中に於て、三惡道天人  
阿修羅、各業報を受くること有るを見る  
諸の佛國の中の、一切の佛の妙音を聞くに  
無上の法輪を轉じて、衆生の心に隨應したまふ  
諸佛の世界の中の、衆生の身は種種なるも  
國王の衆生に隨ひて、種種の身を示現したまふ  
一切の諸の天人は、皆悉く同じく止住し  
佛に隨つ觀望し已りて、然る後に爲に法を説きたまふ  
衆生は、多く、微塵の中の佛國を知見し  
亦廣大の刹を觀たてまつる、佛の威神を以ての故なり  
佛は是の如き等の、種種の神通力を現じたまふ  
若し衆生の爲に説かんと、其事盡すべからず  
是微妙の音を以て、世尊を稱歎したてまつり  
心皆大いに歡喜し、默然として佛を觀たてまつる

【佛子】以下、本地(第八)の正説にして、七段に分れ其第一段は趣地の方便行を明す。

【諸法の本来】以下、第二段に此地に趣く近方便行たる清淨なる無生忍を得ることを明す【不動地に入る】以下、第三段に初住地の行たる勝行を得ることを明す

解脱月菩薩、金剛藏に請うて言はく

佛子願くば、八地に入る行を演説したまへと

金剛藏菩薩の言はく、佛子、菩薩摩訶薩は、既に七地の微妙の行慧を嘗へば、方便道淨くして、善く助道の法を集め、大願力を具へ、大神の神力に護られ、自の善根にて力を得、常に念じて如来の力と無畏と、不共の法とに隨順し、直心、深心清淨にして、福德智慧を成就し、大慈大悲もて、衆生を捨てず、無量の智道を修行す。諸法の本来無生、無起、無相、無成、無壞、無來、無去、無有、無中、無後なるに入り、如来智に入りて、一切の心意識の憶想分別に、貪著する所無く、一切の法は虚空の性の如し。是を菩薩無生法忍を得て、摩八地に入ると名く。不動地に入るを名けて深行の菩薩と爲す。一切世間の濁ること能はざる所にして、一切の相を離れ、一切の想と、一切の貪著とを離れ、一切の聲聞辟支佛の境ること能はざる所なり。深大遠離にして、而も現じて前に在り。譬へば比丘の神通を得て、心自在を得、次第して乃至滅盡定に入り、一切の動心、憶想、分別は皆悉く盡滅するが如し。菩薩も亦是の如し。菩薩是地に住すれば、諸の勤方便と、身口意の行とは、皆悉く息滅して、大遠離に住す。人の夢中に深水を度らんと欲して、大精進を發し、大方便を施して、未だ渡らざる間に、忽然として便ち覺むれば、諸の方便の事を皆悉く放捨するが如し。菩薩も亦是の如し。初より已來、大精進を發して、廣く道業を修するも、不動地に至れば、一切皆捨てて、二心を行ぜず、諸の憶想する所も復現前せず。譬へば梵世

に生るる者には、欲界の煩惱現在前せざるが如し。菩薩も亦是の如く、不動地に住すれば一切の心意識現在前せず。乃至佛心、菩提心、涅槃心すら尙現前せず。何に況んや、當に諸の世間の心を生ぜんをや。佛子、是菩薩、是地に隨順するは、本願力を以ての故なり。又諸佛は爲に其身を現じて、諸地の法の流水の中に住住し、如來の智慧を與へて、當に因縁を成りたまふ。

諸佛は皆是言を作してまはく、「善い哉善い哉、善男子。汝は第一忍を得て、一切の佛法に隨順す。善男子、我に十方、四無所畏、十八不共法有り。汝今未だ得ず。是を得んが爲の故に、勤め、精進を加へ、亦此忍門を捨つること莫れ。善男子、汝は此第一甚深なる寂滅解脫を得と雖も、一切の凡夫は寂滅の法を離れ、常に煩惱覺觀の害する所と爲る。汝當に此一切の衆生と懇切べし。又善男子、汝當に本の願を念ひ、衆生を利益せんことを欲し、不可思議なる智慧門を得んことをすべし。又善男子、一切法の性と、一切法の相とは、佛行すも佛無行すも、當行にして不異なり。一切の如來は此法を得たまはるを以ての故に説いて名けて佛と爲す。善男子、我亦此寂滅無分別の法を得たり。善男子、汝、我等の無量なる清淨の身相、無量の智慧、無量なる清淨の國土、無量の方便、無量の圓光、無量の淨音を觀んや。汝今當に是の如き等の事を起すべし。又善男子、汝今適此一法明を得たり。謂ゆる一切の法は寂滅にして分別有ること無しと。我等の得る時は、無量無邊なり。汝當に精勤して此諸法を起すべし。善男子、十方無量の國土に、無量の衆生、無

量の諸法の差別あり、汝應に實の如く是事に通達して、是の如き言に隨順すべし。  
是菩薩に、諸佛は是の如き等の無量無邊の智慧門を起す因縁を與へたまへり。此無量の門を以ての故に、是菩薩よ、能く無量の智慧を起し、皆悉く成就す。諸の佛子、若し諸佛は菩薩に智慧を起すの門を與へたまはざれば、是菩薩は、畢竟して涅槃を取り、一切衆生を利益することを棄捨せん。諸佛は此無量無邊の智慧を起すの門を與へたまふを以ての故に、一念の中に於て生ずる所の智慧も、初地より已來、乃至七地に比するに、百分の一にも及ばず、無量無邊の阿僧祇分の一にも及ばず、乃至算數も譬喩も及ぶ能はざる所なり。所以は何ん。先には一身を以て功德を修集せしも、今此地の中には、無量の身を得て、菩薩の道を修し、無量の音聲、無量の智慧を以て、無量の生處、無量の清淨なる國土にて無量に衆生を教化し、無量の諸佛を供養し、給侍し、無量の佛法に隨順し、無量の神通力、無量の大會の差別、無量の身口意業にて、一切の菩薩を行する所の道を集む。不動の法を以ての故なり。佛子、譬へば人の船に乗りて、大海を渡らんと欲するに、未だ大海に至らざれば、多く功力を用ひんも、海に入らば風あるを以て復艱難無く、一日の行は先の功力に過ぐるこし、百千歳に於ても、及ぶこと能はざる所なり。菩薩も亦是の如く、多く善根を集めて、大乘の船に乗り、菩薩を行する所の大智慧の海に入るに、功力を施さずして能く一切諸佛の智慧に近づき、未行せし所に比するに、若は一劫、若は百千萬劫にも及ぶこと能はざる所なり。

【佛子】以下第四段に佛国土の清淨を明し、最初に世間自在の別に衆生世間、第三に智正覺(佛)世間を説く。  
【無功用心】意識的努力を行はざる本然法爾の心を言ふ。

佛子、菩薩摩訶薩は第八地に至れば、方便慧よりして、無功用心を生じ、菩薩道に在りて、諸佛の智慧の勢力を思惟し、世界を生ずること、世界の滅すること、世界の壊すること、世界の壊することを思惟す。何の業の因縁集まるを以ての故に、世界に成り、何の業の因縁滅するが故に、世界は壊するを知る。是菩薩は地水火風の性、小劫、中劫、大劫相、常星相、常日月相、常星相を知り、微塵の細相を知り、微塵の差別相を知り、一世界の中に於ける、有ゆる微塵の差別を、皆悉く悉く知り、此一世界の、有ゆる地水火風、若干の微塵を、皆悉く悉く知り、寶物の若干微塵、衆生身の若干微塵、世界の、中の萬物の微塵の差別を知り、衆生の大身小身は、若干の微塵を以て成ることを知り、地獄身、餓鬼身は若干の微塵を以て成り、阿修羅身、天身は若干の微塵を以て成るかを、皆悉く了知す。是菩薩は是の如き微塵を分別する智に入りて、欲、色、無色界の塵を了り、欲、色、無色界の塵を知り、欲、色、無色界の成壞を知り、欲、色、無色界の小劫、中劫、無量相を知り、欲、色、無色界の差別相を知り、是の如く、界を知る。是を菩薩の衆生を教化するに、智明を助くるの分別と名

善く衆生身を分別し、善く塵に所生の塵を了り、衆生の生ずる處に隨ひ、衆生の身に隨ひて爲す行を受く。是菩薩は身を現じて、悉く三千大千世界に滿ち、衆生の身に隨ひて、各々別す。譬へば日月の一切の光に於て皆其像を現するが如し。若し、若し、乃至無量無邊の阿僧祇劫、三千大千世界に、身其中に遍く、衆生身の差別に

【阿迦貳呼】(Akamsha) 色究竟と譯し、色界十八天の最上天なり。

【衆生身】以下、國土、業報、聲聞、辟支佛、菩薩、如來、智、法、虚空身を解境の十佛又は三世間の十佛身と言ひ、本經の特説なり。

隨ひて、而も身に身を受く。是菩薩は是の如き智慧を成就して、一世界に於て身動搖せず。乃ち不可説の諸佛の世界に至る。衆生の身に隨ひ、信樂する所に隨ひ、佛の大會に於て而も身像を現す。若し沙門の中に於ては沙門の形色を示し、婆羅門の中には婆羅門の形色を示し。刹利の中には刹利の形色を示し。居士の中には居士の形色を示し。四天王の中、帝釋の中、魔の中、梵天の中には梵天の形色を示し。乃至阿迦貳呼天の中には阿迦貳呼天の形色を示し。憍聞衆を以て度すべき者には、憍聞の形色を示し。辟支佛乘を以て度すべき者には、辟支佛の形色を示し。佛身を以て度すべき者には佛身の形色を示し。行ゆる不可説の諸佛の國中に、衆生身の信樂差別に隨ひて、現じて爲に身を受く。而も實には身相の差別を遠離し、常に平等に住す。

是菩薩は善く衆生身を知り、國土身を知り、業報身を知り、聲聞身を知り、辟支佛身を知り、菩薩身を知り、如來身を知り、智身を知り、法身を知り、虚空身を知る。是菩薩は是の如く衆生の深心の樂ふ所を知り、若し衆生身に於て、己身と作し。若し衆生身に於て國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身と作し。若し國土身に於て、己身、業報身、乃至虚空身と作し。若し業報身に於て、己身、乃至虚空身と作し。若し己身に於て、衆生身、國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身と作す。是菩薩は衆生の集業身、散身、煩惱身、色身、無色身、諸佛の國土の小相、中相、無量相、垢相、淨相、廣相、狹相、平等相、方差別相を知り。業報身の假名差別、聲聞身の假名差別、

【如來身】以下を  
行境の一考とす

【是菩薩者】以下  
第五段に所住菩薩  
の自在勢力を明す

【是菩薩者】以下  
第六段に本願の智  
業、功徳の大徳な  
ることを明す

詳支佛身の假名差別、菩薩身の假名差別を知り、如來身、菩提身、願身、化身、住持身、相好  
普賢身、妙り身、如意身、辯德身、智身、法身を知り、智身を知り、善く分別して實の如く現身  
平等にして不壞の相なるを知り、虚空身の無量の相、周遍の相、無形の相を知る

是菩薩は善く知りて是の如き諸の身を起せば、則ち命の自在、心の自在、時の自在、業  
の自在、生の自在、願の自在、信解の自在、如意の自在、智の自在、法の自在を得

是菩薩は、十の自在を得て不可思議智の者、無量智の者、廣智の者、不可壞智の者と爲  
る。菩薩は是の如き智慧に隨ひて、畢竟して常に罪無き身業、口業、意業を起し、身業は智

に隨ひて行じ、口業は智に隨ひて行じ、身業は智に隨ひて行じ、般若波羅蜜著上し、大悲  
を首と爲し、善く方便を修し、善く諸願を起し、善く諸佛の神變の功に隨ひ、常に利益

衆生を行する智を捨てずして、悉く無邊の世界の中の差別の相を知る。要を棄けて之を言  
はば、菩薩無動境に住すれば、身口意の作す所、皆前く一切の佛法を具足するなり。是菩薩

此地に住すれば、一切の煩惱を離るるが故に、善く深心力に住す。常に心を離れざるが  
故に、善く深心力に住す。衆生を捨てざるが故に、善く大悲力に住す。一切の世間を救ふ

が故に、善く大悲力に住す。聞く所の法を忘れざるが故に、善く陀羅尼力に住す。一切の  
佛法を分別し觀察するが故に、善く一切の樂説力に住す。無礙の差別せる世界に行くが故

に、善く神通力に住す。一切の菩薩の行する所を捨てざるが故に、善く願力に住す。一切  
の佛法を修集するが故に、善く波羅蜜力に住す。善く一切種智を起すが故に、善く如來力

【諸の佛子】以下第七段に本地の名義を釋す。

【密迹金剛神】(く剛手、金剛力士、仁王等とも言ひ、如来の一切の秘密の夜叉神を役して、賢劫千佛の法を守護すと言ふ。

に住す。是菩薩は是の如き智力を得て、一切の所作を示すに漏咎有ること無し。  
諸の佛子、菩薩の此地は壞すべからざるが故に、名けて不動地と爲す。智慧轉せざるが故に、名けて不轉地と爲す。一切の世間は測り知ること能はざるが故に、名けて威徳地と爲す。色欲無きが故に、童真地と名け。意に隨ひて生を愛く事な故に、自在地と名け。更に不作なるが故に、名けて成地と爲し。決定して知らざるが故に、名けて究竟地と爲し。善く大願を發すが故に、名けて變化地と爲し。壞すべからざるが故に、名けて住持地と爲し。先に善根を修せしが故に、名けて無功力地と爲す。菩薩は是の如き智慧を得れば、名けて佛の境界に入ると爲し。名けて佛の功徳に照明せらると爲し。名けて佛の威徳に隨ひて行すと爲し、佛法に趣向す。常に諸佛の神力の爲に隨はれ、常に四天王、釋提桓因、帝釋の梵王等の爲に奉迎せられ、密迹金剛神、常に隨ひて侍爲し、善能く諸禮三昧を出し、能く無量なる諸身の差別を作し、諸身の中に於て皆勢力有りて、大果報神通力を得、無邊の三昧の中に於て、自在を得、能く無量の記を受け、衆生の成就する處に隨ひて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを示す。是菩薩は是の如き大智慧に入れば、善く諸法に通達し、常に大智の光明を放ちて、無礙の法界道に度り、善く世界道の差別を知り、能く一切諸の功徳を示し、意に隨ひて自在なり。善く先際後際を解り、能く魔道を轉ずる智に入り、如来の行境界に入り、能く無邊の世界に於て菩薩の道を行じ、不轉の相を以ての故に、此地を名けて不動と爲す。

【佛子】以下、本地の位置を明す

佛子、菩薩不動地に在れば、善く禪定力を生ずるが故に、常に無邊の諸佛を見たてまつり、諸佛を供養し供給することを捨てず。是菩薩は、一の劫、一の世界のの中に於て、數百千萬億那由他の無量無邊の阿僧祇の佛を、恭敬し供養し、尊重し讚歎して、諸佛に親近し、諸佛に從ひて、世界の差別を、諸の法明を受く。是菩薩は轉た深く如來の法藏に入り、世界の差別の事を因ふに、能く盡す者無し。乃至百千萬億劫に、説くとも盡すべからず。又、善く善根は轉た盛れて明淨となる。譬へば眞金の、棄賣もて閉鎖し、轉輪王の佩ぶる所の寶珠と爲せば、一切人民の能く念ふ者無きが如し。菩薩も亦是の如く、無動地に住すれば、善根轉た淨くして、一切の言聞辟支佛、乃至、七地の菩薩の境すること能はざる所なり。菩薩是地に住すれば、善分別の智門を以ての故に、智慧の光明は一切衆生の煩惱を滅除す。譬へば千世界の主たる、大見天王は、能く一時に於て慈心を流布すれば、千の世界に滿ち、亦能く光を放ちて、遍く其中を照すが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、不動地に住すれば、能く身の光を放ちて十萬の佛刹、微塵の世界を照し、衆生の煩惱の煩惱熱を滅除して、清涼なることを得しむ。諸の佛子、是を菩薩の不動地を稱讚すと名く。若し能く説かば、無量億劫にも盡すこと能はざる所なり。菩薩此地に住すれば、能く大梵天王と作り、千の世界を主り、諸根猛利にして、諸の衆生、言聞辟支佛、菩薩に波羅蜜道を與へ、窮盡すること有る無し。世界の差別を説くに能く堪る者無く、作す所の善業は布施、愛敬、利益、同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れ

【菩薩七地】以下  
 本地の重頌にして  
 四十四偈より成り  
 初三偈は入地の方  
 便、次三偈は清淨  
 の無生法忍、次十  
 五偈は勝行、次十  
 二偈は佛國土の清  
 淨、次五偈は自在、  
 大勝、釋名、最後  
 五偈は信果を頌せ  
 り。

す、乃至一切破智を念ずることを離れず、常に是心を生ずらく、「我當に衆生に於て首と爲り、勝と爲り、乃至一切衆生に於て、依止者と爲るべし」と。是菩薩若し勤行精進せんと欲せば、須臾の間に於て、百萬三千大千世界の微塵數の三昧を得、乃至能く、百萬三千大千世界の微塵數の菩薩を示し、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、神通自在にして、能く是數に過ぎ、若し百千萬億劫にも計り知るべからず。

時に金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

菩薩七地に住すれば、慧方便已に淨くして

善く助道の法を集め、大願力に繋がれ

諸佛の神力に護られて、善根は悉く成就し

勝れたる智慧を求め、能く第八地に入る

善く智慧を集め、而も深き慈悲有りて

諸の有量の心を離れ、心同じきこと虚空の如し

所説の法の中に、心決定力を得たるが如く

是の如く寂滅にして、微妙なる無生忍を得

諸法は本來、生も無く亦起も無く

相無く成行ること無く、亦去來の義も無し

諸法の初中後と、如とは分別無く

心意の行有ること無く、同なること虚空の若知し

是の如き忍を成就すれば、諸の戲論有ること無く

是不動地の、甚深なる寂滅の行を得

一切の諸の世間は、測量することを得る能はず

一切の諸の心相は皆悉く已に滅盡す

菩薩是地に住すれば、心識の無分別なること

滅盡すに入りて、復憶念の想無きが如し

猶し人の夢の中に、方便して水を度えんと欲するも

覺むれば即ち意廓然として、諸の所作を休息す、亦如し

是深忍を得已れば、一切の想念の滅するごとし

梵天に生れて、欲界の煩惱無きが如し

中願力を以ての故に、及び爾れ今の勸導と

是の如き第一忍は、是の諸佛の職位なり

我等の深智の力と、無畏不害の法と

汝今此有ること無し、當に其精進を修ふべし

汝は一切の煩惱の火を、滅盡することを得と雖も

當に諸の世間は、煩惱常に熾然なりと觀すべし

【成壞と及て住】  
四相の中の三にし  
て、世界生成より

當に本の所願を念じ、諸の衆生を利せんと欲し

悉く遍く諸法を知り、廣く一切を度すべし

諸法の實の性相は、常任にして變異無し

乘も亦竟を得るも、而も名けて佛と爲さず

但無礙の、甚深の微妙智を得て

三世に通達するを以ての故に、乃ち名けて佛と爲すことを得

是諸の無等等は、天人の恭敬する所にして

是起智の門を開きて、諸佛の法に入らしめ

淺底無き、無量の妙智慧を成就すれば

先に行ぜし所の諸法は、今の一念にも及ばず

是の如く諸の菩薩は、妙智慧地を得

能く一念の中に在りて、身は十方に遍し

是智慧門に入れば、道を行すること疾くして礙あること無く

海中を行くに、大風の力に濟さるるが如し

佛の功用の心を離れ、但智慧のみ在りて

十方世界の、成壞と及て住しを觀す  
能く四大の一なることを知り、亦諸の別異と

散滅に至る變轉の相を四期に分ちたるなり。亦佛敎物理學の一派は此四相を本具の力に見て、萬有の變化を支配するものなりと言ふ。

【四大】萬有の原素を地、水、火、風の四種と爲す。印度古代物理學に基く。

小中及び無量と、種種の差別の相とを知る能く三千、大千世界の塵を數へ知り亦衆生身の、四大の微塵數をも知り諸天の身の衆寶も、微塵數の差別も皆悉く遍く明了し、餘も亦是の如く知る智慧の因縁の故に、心轉た調柔なることを得諸の衆生を利せんが爲に、諸の世界に身を遍くし能く衆生身に於て、而も自ら已身及び諸の佛刹、諸の餘の種種の身と作す日月は空に停るも、影は一切の水に現するが如く菩薩も亦是の如く、遍く大千界に滿つ常に法身に住し、湛然として移轉せず淨心の衆生に於て、各其身像を現す諸の心の樂ふ所に隨ひて、而も現して爲に生を受け諸の天人の會に於て、悉く皆其身を示す菩薩は因縁の、和合の中に於て自在にして乃至能く意に隨ひて、爲に佛身を現す

衆生、國土身と、業報、賢聖身と

智身と法身と、皆同じく平等なることを知る

是因縁を以ての故に、如意の神通を得て

世を歡喜せしめんが爲に、種種の身を現す

能く十種の、妙なる自在の智を得て

作す處は智に隨ひて行じ、慈悲の心に順ず

諸佛の有する所の法は、皆能善く修習して

三淨戒の中に住して、動ぜざること須彌の如し

能く大菩薩の、有する所の十種の力を得て

一切諸の魔衆も、皆轉ずること能はざる所なり

常に諸佛の爲に護られ、釋梵に敬禮せられ

密迹金剛神は、常に隨つて侍衛す

菩薩是地を得れば、功德量有ること無く

百千萬億劫に、之を説くとも盡すべからず

無數の佛に親近したてまつりて、諸の善根を増益するは

眞金の寶もて、下の瓔珞を莊嚴するが如し

菩薩是地に在れば、多く大梵王と作り

【佛子】以下、第九の善慧地に佛説を證請する所なり此地は中道無生の理を證る善師の位なり。

子の国土を典領して、功德量有ること無し  
若く三受を以て教へ、窮盡有ること無く、  
善心の聲は着く照して、諸の煩惱の聲を滅す  
能く須臾の間に於て、百萬の三千

大千世界を以、彼地の諸の三受を得て  
能く十劫の佛を見在てまつり、其數も亦是の如し  
若し其願を具せば、是に隨せて是の事も無けん  
今已に略して、第八地の妙相を辨説せり

第九地

若し廣く演説せば、千億劫にも盡くさざらん

佛子此八地の、妙義を演説せし時  
佛の神力を以ての故に、無量の國を遍觀し  
一切の智身は、無量の微妙なる光を具して  
遍く十方界を照し、衆生は安樂なることを得たり  
百千萬の菩薩は、虚空の中に住して  
衆の妙供養を設け、諸天も有べこと無き所なり  
自在天と梵天と、并及變化王とは

歡喜して妙供を、大海の如き功德ある佛に設げたまつれり  
千萬の諸の天女は、咸恭敬し歡喜して  
同じく微妙の音を以て、佛の功德を讃歎したてまつる  
佛の神力を以ての故に、是の如きの妙音を出すらく  
善く寂滅を行する者は、諸の惡心有ること無し  
各其地に在りて、善く菩薩の行を修し  
世間を利益せんが故に、遍く十方に遊ぶ  
衆に示すに佛道を以てし、心は空の如く無礙なり  
諸の菩薩の神力と、上妙なる供養の具とは  
十方の上天に勝れる、福德の致す所なり  
佛子智を樂ふ者は、此を以て佛力を示す  
一の國に於て動ぜずして、而も一切の處に現じ  
世間を利益すること、満月の明淨なるが如し  
一切の音聲、語言の諸の想念を滅して  
而も諸の音聲を以て、法を説くこと猶し響の如し  
若し衆生下劣にして、其心厭沒せる者には  
示すに聲聞の道を以てし、衆苦を出でしむ

若し復衆生有り、諸根少しく明利にして

因縁の法を樂ふものには、爲に群友佛を説く

若し人、根明利にして、衆生を饒益するの

大慈悲心有るものには、爲に菩薩の道を説く

若し無上心有りて、決定して大事を樂ふものには

爲に佛身を示し、無量の佛法を説く

譬へば幻化師の、種種の身色を示すも

是の如き諸の身相は、皆實事有ること無きが如し

是の如く諸の佛子は、善く智慧の術を知りて

能く一切の行を示すも、心有無を離れ

千萬の諸の天女は、同じく微妙の音を以て

是の如く歌歎し、唱りて、默然として佛を觀たてまつる

解脫月又言はく、佛子の大會は淨くして

一心に、九地に入るの正行を聞かんことを願樂ふと

金剛藏菩薩の言はく、佛子、菩薩摩訶薩は、是の如き無量の智慧を以て、善く佛道を觀

じ。轉た勝れたる寂滅の解脫を求めんと欲し。轉た勝れて如來の智慧を思惟せんと欲し。如來の深密の法藏に入らんと欲し。不可思議なる大智慧を觀察せんと欲し。諸の陀羅尼三

【佛子】以下、本地の正覺なり。四段に分れ、第一に法師の方便成就を明す。

【菩薩此地に】以下、第二段にして智成就を明す。

【定の如き】以下第三段にして入行成就を明す。

【三業】有爲業(因縁の離合によりて生滅する法)無爲業(不生不滅の法)非二業(前の二業に非ざる法即ち我なり)の三を言ふ。【分別と不可分別】(造業)行爲は思(意志)依る、而(意思)依るの時、行爲動作と未だならず故に不可分別既に發動すれば正しく身業語業と現るるが爲に分別と

昧を觀察して、重ねて清淨ならしめんと欲し。神通をして廣大ならしめんと欲し。世界の差別を分別せんと欲し。諸佛の力無所畏、不共法の能く壞する者無きを修せんと欲し。諸佛の轉法輪の力に順行せんと欲し。受くる所の大悲大願を捨てざらんと欲す。菩薩は是の如く思惟して、第九地に入ることを得。

菩薩此地に住すれば、實の如く、善、不善、無記の法行を知り、有漏、無漏の法行、世間、出世間の法行、思議、不思議の法行、定、不定の法行、聲聞、辟支佛の法行、菩薩道の法行、如來地の法行、有爲、無爲の法行を知る。

是の如き智慧に隨順して、菩提心の所行の難を知り、煩惱の難、業の難、諸根の難、欲の難、性の難、直心の難、使心の難、生の難、習氣の難、三聚差別の難を知る。衆生の前心の差別相を知り、世を莊飾する心相、速かに轉ずるの心相、壞不壞の心相、無形の心相、無邊自在の心相、清淨差別の心相、垢無垢の心相、縛解の心相、諸曲質直の心相、道に隨ふ心相を皆實の如く知る。是菩薩は煩惱の深相と淺相とを知り、心の伴相と、不相離の相とを知り、使釋の差別相を知り、是心の相應と不相應の相と、道に隨ひて生ずる時に果報を得るの相とを知り、三界の中の差別相を知り、愛癡見の深く入ること箭の如きの相を知り、橋慢癡の重罪の相を知り、是三業の因縁斷ぜざるの相を知り、乃至實の如く、八萬四千の煩惱の差別相を知る。是菩薩は諸業の善と不善と無記との相、分別と不可分別との相、心の伴相と、不相離との相、自然盡の相、行道盡の相、種種の集相、果報を失はざるの相、

【盡集】有爲法は滅盡するを以て而も次第に果を招くが故に盡と云ふ又集と言ふ。今の集は次第集果の義なり。

【黑白報】以下、善は不善、白は善の義なり。而て惡業の因の惡果を受くるを黒黒と言ひ善業の因の善果を招くを白白と言ふ。黒白は善惡相雜る、有漏の業にして、非黒非白とは無漏業なり。

次第の相、有報の相、無報の相、黒黒報の相、白白報の相、黑白黑白報の相、非黒非白龍盡業の相を知り、業果の相と受業法の差別相とを知り、無量の因縁起業の相を知り、世間の業と出世間の業との差別相現報の相、生報の相、後報の相、隨諸果の定相不定相を知り、乃至實の如く八萬四千の諸の差別相を知る。是菩薩は諸根の軟中上の差別相を知り、先後際の別異と不別異との相を知り、上中下の相を知り、煩惱の伴相、不相學の相、諸法の定相、不定相、淨熱相、不善惡相、隨根轉相、易壞相、深取相、言上相、不可壞相、轉相、不轉相、世の差別相、久遠の共生差別相を知り、乃至實の如く、八萬四千の諸根の差別相を知る。是菩薩は諸欲の軟中上の差別相を知り、乃至實の如く八萬四千の諸欲の差別相を知る。是菩薩は直心の軟中上の差別相を知り、乃至實の如く八萬四千の直心の差別相を知る。是菩薩は諸使を知る、心と共に生じ、心と共に生ぜず、心と相應し、心と相應せず、無始より來衆生に備ます相、一切の禪定、解脫、神通を相證する相、三界繫の相、無量の心現前せざる相、煩惱門を開く相、對治を知らざるの相、無所有の相、無聖道間滅門の相を、皆實の如く知る。是菩薩は諸生の差別相を知る、謂ゆる地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、人天、色、無色界、有想、無想の差別なり。業は是れ田、愛は是れ水、無明は是れ糞、瞋は是れ種子、後身は是れ芽、名色共に生じて相離れず、癡愛相續して、欲生、欲作、欲愛して、涅槃を棄はす、三界差別して相續するの相を皆實の如く知る。是菩薩は諸の習氣を知る、

【菩薩是地】以下  
第四段に證成就を  
明せり。

起不起有り、所生の處に隨ひて習氣有り、衆生の行に隨ひて習氣有り、業煩惱に隨ひて習氣有り、善不善無記に習氣有り、纏欲に習氣有り、淺身に隨ひて習氣有り、次第に趣に隨ひて習氣有り、久遠に斷ぜずして煩惱業を埒し、離るれば則ち無法なるを、皆實の如く知る。是菩薩は衆生の定不定の相を知る、正定の相、邪定の相、不定の相、正見の中の正定の相、邪見の中の邪定の相、此二を離れたる不定の相、一一の逆邪定の相、互俱の正定の相、此二を離れたる不定の相、邪位の邪定の相、正位の正定の相、此二を離れたる不定の相、深く邪覺に入りて轉じ難き相、無上道を修する因縁の相、不定の衆生守護の相を、皆實の如く知る。佛子、菩薩摩訶薩は是の如き智に隨ふを、名けて善慧地に安住すと爲す。

菩薩是地に住すれば、衆生の是の如き諸行の差別相を知り、具解脫に隨ひて因縁を眞く、是菩薩は衆生を化する法と、衆生を度する法とを、實の如く知りて、爲に法を説く、聲聞乗の相、辟支佛乘の相、菩薩乗の相、如來地の相を、實の如く知りて、衆生の因縁に隨ひて爲に法を説く。心に隨ひ、根に隨ひ、欲の差別に隨ひて、爲に法を説き、又行處に隨ひ、智慧處に隨ひて、爲に法を説き、一切の行處を知りて、爲に法を説き、衆生の性に隨ひ、深く難處に入りて、爲に法を説き、纏に隨ひ、生に隨ひ、煩惱に隨ひ、習氣に隨ひて轉ずるが故に法を説く。乘に隨ひて解脫せしむるが故に法を説く。是菩薩此地に住すれば、大法師と爲りて諸佛の法藏を守護し、深妙の義に入る。無量の慧方便を用ひ、四無礙の智も

【四無礙智】此境の菩薩此智に隨ひて說法成現するなり。法、義、辭、樂說無礙智を以て四無礙智と言ふ。

【比智】因門入門の一たる比量と同義に解すべし。

て、言辭說法す。是菩薩は常に四無礙智に隨ひて壞すべからず。何等をか因と爲す。一に法無礙、二に義無礙、三に辭無礙、四に樂說無礙なり。是菩薩は法無礙の智を以て諸法の自相を知り、義無礙の智を以て、差別の法を知り、辭無礙の智を以て、諸法の説きて壞すべからざるを知り、樂說無礙の智を以て、諸法の説きて次第に壞せざるを知る。復次に法無礙の智を以て、諸法の體性無きを知り、義無礙の智を以て、諸法の生滅の相を知り。辭無礙の智を以て、諸法は假名なるも、假名を斷せずして説くことを知り、樂說無礙の智を以て、假名に隨ひて、無邊の説を壞せざることを知る。復次に法無礙の智を以て、現在の諸法の差別相を知り、義無礙の智を以て、過去未來の諸法の差別相を知り。辭無礙の智を以て、過去未來現在の諸法の説不可壞の相を知り、樂說無礙の智を以て、一一の世に於て無邊の法明を得て説く。復次に法無礙の智を以て、諸法の差別を知り、義無礙の智を以て、諸法の義の差別を知り、辭無礙の智を以て、諸の言辭に隨ひて、爲に法を説く。樂說無礙の智を以て、衆ふ所の智に隨ひて、爲に法を説く。復次に法無礙の智を以て、法智方便を以て、諸法の差別不可壞なるを知り、義無礙の智を以ては、比智を以て實に諸法の差別を知り、辭無礙の智を以ては、世智を以て諸法の差別を説き、樂說無礙の智を以ては、善く第一義を説くことを知る。復次に法無礙の智を以て、諸法の一相にして不壞なるを知り、義無礙の智を以て、陰、聲、色、諸、因縁の法を知り、辭無礙の智を以て、衆生の言を以ての故に、一切世間の歸趣する所となり、樂說無礙の智を以ては、説く所轉た奪れ、能く

衆生をして無邊の法門を得しむ。復次に法無礙の智を以ては、一乘は究竟して一切の無差別を攝することを知り、義無礙の智を以ては、諸乘の差別を知り、辭無礙の智を以ては、能く諸乘の無差別を説き、樂説無礙の智を以ては、一法門を以て、無邊の法門を説く。復次に法無礙の智を以ては、能く一切の菩薩の行、智行、法行、隨智行に入り、義無礙の智を以ては、能く分別して十地の義の差別を説き、辭無礙の智を以ては、諸地の道に隨順して壞すべからざるを説き、樂説無礙の智を以ては、一切行の無邊の相を説く。復次に法無礙の智を以ては、一切の佛は一念の中に於て菩提を得ることを知り、義無礙の智を以ては、種種の時、種種の利の差別を知り、辭無礙の智を以ては、諸佛の道を得たる事の差別に隨ひて説き、樂説無礙の智を以ては、一句の法に於て無邊劫に説くとも窮盡せず。復次に法無礙の智を以ては、一切の佛語、一切の佛力、無畏、不共の法、大慈大悲、無礙の智、法輪の一切種智を知り、義無礙の智を以ては、如來の音聲は八萬四千を説きて、衆生心の諸根欲樂の差別の行に隨ふを知り、辭無礙の智を以ては、如來の音聲を以て一切諸行の壞すべからざるを説き、樂説無礙の智を以ては、諸佛の智力を以て、衆生の衆生の音聲に隨ひて説く。

【菩薩摩訶薩】以下、第五段に法師成就を明す。

菩薩摩訶薩は是の如く善く無礙智を知りて、第九地に安住するを、名けて佛の法藏を得て大法師と爲れりと爲し、樂義陀羅尼、樂法陀羅尼、起智陀羅尼、樂明陀羅尼、善慧陀羅尼、樂財陀羅尼、名聲陀羅尼、威徳陀羅尼、無礙陀羅尼、無邊旋陀羅尼、蓮義藏陀羅尼を得たり。

是の如き等の百萬阿僧祇の陀羅尼を得て、方便に隨ひて説き、是の如き無量の藥草差別門  
 もて法を説く。是菩薩は是の如き無量の陀羅尼門を得て、能く無量の佛の所に於て法を説  
 き、聞き已りて忘れず、聞く所の法の如く、能く無量の差別門を以て、人の爲に演説す。  
 是菩薩は一佛の所に於て、百萬阿僧祇の陀羅尼を以て、正法を總受し、一佛に従ふが如く  
 餘の無量の佛にも亦復是の如し。是菩薩は佛を禮敬する時に於て、聞く所の法明は、多學  
 の聲聞の陀羅尼力を得たるもの、十萬劫に於ても能く受持する所に非ず。是菩薩は、是の  
 如き陀羅尼力と無礙智の樂説力とを得て、法を説くを以ての故に、法座に在りて、大千世  
 界の中に滿てる衆生に、意に隨ひて法を説く。是菩薩は法座の上に在りて、唯諸佛と及び  
 受職の菩薩とは除き、一切の中に於て、最も殊勝と爲す。是菩薩は法座に處して、或は一  
 音を以て一切をして悉く解了を得しめんと欲せば、即ち解了を得。或は種種の音聲を以  
 て、一切をして各聞解を得しめんと欲せば、即ち聞解を得。或は忽然を以て、但光明  
 を放つのみにて、一切をして各法を解することを得しめんと欲せば、即ち法を解するこ  
 とを得。或は一切の毛孔を以て、皆法音を出し、或は三千大千世界の任ゆる色、無色の物  
 より、皆法音を出し、或は一音を以て周く法界に滿して、解を得しめんと欲すれば、即  
 ち皆解を得。是菩薩は三千大千世界の有る衆生、無量の百億を以て、一時に問難し、  
 問ふ所各異なるも、是菩薩は一念の中に於て、悉く是の如き一切の問難を受け、一音を  
 以て答へ、皆聞解せしむ。是の如く若は二、若は三、若は百、若千、乃至不可説不可説の

【是菩薩】以下、  
此地の果徳の勝れ  
なることを明す。

三千大千世界の中に満てる衆生に、廣く爲に法を説く。佛の神力を承けて、能く衆生の爲に、廣く佛事を作し、倍復勤めて是の如き智明を攝す。一塵の中に於て不可説不可説の世界衆數の大會有り、佛此中に在し、衆生の心に隨ひて爲に法を説き、一一の衆生をして心に若干無量の諸法を得しめたまふ。一佛の如く一切の諸佛も亦是の如し。一微塵の如く一切の十方世界も亦復是の如し。是中に於て大憶念力を生じ、一念の中に於て一切の佛に従ひて受くる所の法明は、一句をも失はざること上の如し。大會の中に満てる衆生は、決定の法明を以て清淨の法を演ぶるを以て、一念の中に於て、滿所の衆生をして皆開解を得しむ。何に況んや若干の世界の中の衆生をや。

是菩薩は是處に住すれば、善根轉た勝れ、深く諸佛の行處に入り、常に一切の佛と會し深く菩薩の解脫に入る。菩薩は是の如き智に隨順して、常に諸佛を見たてまつること、一切の劫の中に於て無量無邊百千萬億なり、上供具を以て諸佛を供養したてまつり、諸佛の所に於て、種種に問難して、諸の陀羅尼に通達し、一切の善根轉た勝れて明淨なり。佛子、眞金を鍊り莊嚴を具足して、轉輪王の著る所の寶冠と爲せば、一切の小王能く奪ふ者無きが如し。菩薩も亦是の如く、善慧地に住すれば、一切の善根轉た勝れて明淨となり、聲聞辟支佛、諸地の菩薩の嘆すること能はざる所なり。是菩薩は善根轉た明かにして、能く衆生の煩惱の難處を照す。大梵王の三千世界の一切の難處を皆悉く能く照すが如し。菩薩も亦是の如く、善慧地に住すれば、善根明淨にして、諸の衆生の煩惱の難處を照

諸の佛子、是を菩薩の善慧地を略説すと名く。若し廣く説かば則ち無量無邊劫にも盡すことを得べからず。菩薩是地に住すれば、多く大梵王と作りて、三千大千世界を典領し、能く勝るもの有る無し。實の如く義を解する者は、自在の中に於て而も自在を得、善能く聲明、辟支佛、菩薩に波羅蜜を宣説して、衆生の問難も能く窮盡すること無し。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず乃至一切種智を念ずることを離れず、常に是心を生ずらく、我當に一切衆生に於て、首と爲り勝と爲り、乃至一切衆生に於て、依止者と爲るべし」と。是菩薩若し是の如く勤行精進せんと欲せば、一念の中に於て百萬阿僧祇の三千大千世界微塵數の三昧を得、乃至能く百萬阿僧祇の三千大千世界微塵數の菩薩を示し、以て眷屬と爲す。若し願力を以てせば神通自在にして、復是數に過ぐることを、百千萬億那由他劫にも計り知るべからず。

爾時、金剛藏菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

諸の菩薩は、無量の深智に隨順し、  
第一にして最も微妙に、一切の世に知り難く

衆生を利益する者は、能く第九地に至り

諸佛の、秘密の法藏に入ることを得

微妙にして最上なる、三昧と陀羅尼と

廣大の神通力とを得て、善く世界の相に入り

【諸の菩薩】以下  
本地の重頌にして  
四十二偈は法師  
り、初四偈は法  
の、入地方便を、  
四十二偈は智成、  
十二偈は入行成、  
就、最後七偈は說  
本地の果徳を頌して

智慧の力決定して、能く諸佛の法を觀し

大願と悲心と淨ければ、第九地に入ることを得

此上地に順行して、諸佛の法藏を持すれば

即ち能く諸法に通ず、善、不善、無記と

有漏及び無漏と、世間、出世間と

是は思議すべき法にして、是は思議すべからずと

法の定と不定と、三乘具足の相とを知り

此有爲無爲の法を、思惟し分別す

是の如きの法を起し知りて、諸の無明の暗を滅し

是智心に隨順すれば、則ち第一にして妙なりと爲す

悉く一切の難と、諸の心の差別の相と

世を莊飾する輕易と、無邊の自在の心と

煩惱の深淺の相と、心の伴と不離相とを知り

使縛の差別と、隨順相續の有とを知り

業の種種雜と、各差別の相と

因の滅と果の不失とを知り、是の如き事に通達す

又衆生の、諸根の軟中上と

廣大の差別等と、實際後際の相とを知り  
欲の軟中上と、及び諸の性の差別とを知り  
乃至能く悉く、八萬四千の種を知り  
煩惱使の離脱は、無始より未滅せず  
皆心と共に有り、繫縛して離すべきらず  
諸の結使等は、但妄想分別のみ  
方處の所有ること無く、亦定れる事相も無く  
常に身を離れず、又亦知ることを得難く  
禪定の力能く遮へ、金剛道能く斷ずと知る  
又能く諸生の、六道に入る差別を知り  
愛は潤し無明は覆ひ、業は田にして識は是れ種なり  
後身の芽を生じ、名色共に増長し  
無始の生死より來、相續して三界に在り  
諸の天龍の趣は、煩惱業の心に由ると知る  
若し此法を離るれば、是れ則ち所有無し  
一切諸の衆生は、皆三趣の中に在り  
或は諸の邪見に没し、或は智道に在り

菩薩是地に住すれば、悉く衆生の心と

諸根と及び欲樂と、種種の差別の義を知り

深心に善く思惟して、宜に隨ひて法を説く

無礙の智に通達して、善く言辭を以て説く

菩薩は爲れ法師なり、猶し師子王

牛王、寶山王の如く、安住して畏るる所無し

普く諸の世界に於て、甘露の法味を雨らすこと

猶し大龍王の、能く雨らして大海に満たしむるが如し

是菩薩は善く、法と義と辯との無礙なるを知り

善能く隨順して行じ、樂説の力を具足す

能く百萬の、阿僧祇の總持を得て

能く諸佛の法を受くること、海龍の雨を受くるが如し

菩薩は是の如きの、諸の深妙にして清淨なる

無量の陀羅尼と、諸の三昧力とを得るが故に

能く一念の中に於て、無量の佛を見たまつることを得

淨き梵音を聞き已りて、妙法の寶を演説す

是菩薩は或は、大千界の衆生を教へ

心根の好む所に隨ひて、法を説きて歡喜せしむ  
 是の如き等の無量なる、三千大千の國に  
 傳た深く勤めて精進して、是思惟を作さく  
 一微塵の中に於て、無量の佛は法を説き  
 衆生の心相に隨ひて、妙義を演説したまふと  
 是菩薩は皆受くること、地の諸八種を受くるが如し  
 復是の如きの願を作さく、十方諸の百ゆる  
 國土の中、衆生は、皆合して一會を爲すも  
 我一念の中に於て、皆悉く其心を知り  
 一音を以て法を説き、悉く疑網を斷ぜしめんと  
 菩薩是地に住すれば、人天の中の法王にして  
 大説法の師と爲り、衆生の性に隨順す  
 常に日夜の中に於て、諸佛と共に會し  
 能く甚深にして妙なる、寂滅智の解脱に住し  
 無量の佛を供養したてまつりて、善根轉た明淨となる  
 猶し轉輪王の、眞金にて莊嚴せる冠の如し  
 光明は衆生の、諸の眞實の慧を照すこと

梵王の光、明、大千界を照すが如し。  
菩薩是地に住すれば、三千世界に於て  
大梵天王と作り、諸根悉く猛利にして  
善く三乗の法を以て、諸の衆生に示留し  
作す所の諸の善業は、皆正念に順ず  
能く一念の中に於て、而も量有ること無き  
世界の微塵數の、諸の深妙なる三昧を得  
十方の佛を見たてまつることを得て、微妙の音もて法を説きて  
佛の大神力を見たてまつり、更に無量の願を起す  
是の如きの第九地は、大智の所行の處  
深妙にして知見し難し、今已に略して説き竟れり

# 大方廣佛華嚴經 卷第二十七

東晉天竺三藏佛跋陀羅譯

## 十地品第二十二之五

【諸の大菩薩】以下、本會の究極位たる第十地の僧説を説請する頌にして、此地の菩薩は中道觀に入りて佛の職位を受け、悲智の法雲普く法界に垂るる位なり。【首陀會】(Suddhāvastu)の譯。色界第四禪の一にして淨居天のこと。

諸の大菩薩の、行する所の無上の事を説き  
無數那由他の首陀會の諸天は  
上の虚空の中に於て、心皆大いに歡喜し  
咸恭敬の心を以て、衆妙もて俾供養したてまつれり  
那由他の菩薩も、歡悦すること量有ること無く  
諸の奇妙の香を燒きて、諸の煩惱を滅除せり  
他化自在王も、諸の天の大衆と與に  
虚空の中に住在して、心皆大いに歡喜し  
咸恭敬の心を以て、種種に供養を設け  
々々衆寶の衣を散じ、空中より旋轉して下る  
無量億の天女は、諸天欣びて瞻豫し

上の虚空の中に於て、微心に佛を供養してまつり  
同じく無量億、彌山他の妓婬を修し

一切の寶器の中より、皆其の如きの音を出せ、  
佛、此處に坐したまひて、悉く一切に通く

十方國土の中にも、皆亦佛行して現じたまひ  
無量億の種種の、相好莊嚴身は

殊妙なること比有る無く、世界に充満せり  
一毛孔の中に於て、無量の光明を出し

一切の、世間の煩惱の火を滅除す  
十方の微塵數は、尚計量することを得べくも

一毛孔の光明は、窮盡するを得べからず  
各佛身有りて、三十二相

八十好を以て莊嚴し、無上の法輪を轉じたまふを見る  
或は佛の種種に、衆の爲に法を説きたまふを見

或は兜率に在して、諸天を教化したまふを見  
或は兜率より來下し、胸胎に處したまふを見

或は初生の時を見、或は夜出家したまふを見

或は道場に坐して、無上道を成じたまふを見  
 或は法輪を轉じたまふを見、或は涅槃に入りたまふを見る  
 無量の國土に於て、種種に示現したまふ  
 衆生を度せんと欲するが故に、是の如き等妙事有り  
 譬へば巧なる幻師の、善く幻術を知りて  
 多く諸の衆生に、種種異身の相を示すが如し  
 是の如く佛慧の中に、善く示現を巧にし  
 一切の身を變化して、諸の世界に周遍す  
 一切の法は空寂にして、先より來性相無く  
 同なること虚空の若知し、大師も亦是の如く  
 第一義の、微妙の性相にて入ることを得て  
 諸法の性相に隨ひて、佛の大神力を示したまふ  
 一切の佛の行性と、法と及び諸の衆生とは  
 皆悉く同く相無く、一切の法は空なるが故なり  
 一切の佛の法は等しく、第一の  
 寂滅義趣の中に在し、悉く皆相有ること無し  
 若し佛智を得んと欲せば、應に諸の想念を離るべし

【佛子】以下、本地の正説にして八段に分ち、第一段に方便して本地を満足することを明す。

【菩薩摩訶薩は是の如き】以下、第二段に百千の三昧を得ることを明す【海印三昧】本經講説に當り佛の入りし禪定にして、海印定とも言ふ（前註）

有無俱に通達せば、疾に天人の師と作らん

諸天の采女輩は、皆是の如き等の

千萬種の妙音を出し、寂然として佛を視たてまつる

解脫月菩薩は、衆皆寂然たるを見て

金剛藏に請うて言はく、大名稱の佛子

菩薩の第九より、第十地に至る

諸の大神通力を、願くば今爲に略説したまへと

金剛藏菩薩の言はく、佛子、菩薩摩訶薩は是の如き無量の智慧もて、善く佛道を修行し

乃し九地に至りて善く清白の法を集め、無量の助道法を集め、大功德智慧に護られ、廣

く大悲を行じ、深く世界の差別を分別することを知り、深く衆生の權處に入り、諸の如

來の行處に入り、如來の寂滅の行處に隨順せんことを念じ、諸佛の力、無畏、不共の法に趣

向し、堅く持して捨てざれば、一切の位に至ることを得

菩薩摩訶薩は是の如きの智を行じて、佛位の地に近づけば、則ち菩薩の三昧を得て

現在前す。又法界差別の三昧、道場を莊嚴する三昧、一切世間の華光を雨らす三昧、海藏

三昧、海印三昧、虚空廣三昧、一切の法性を觀察する三昧、一切衆生の心行に隨ふ三昧、

實の如く一切の法を知る三昧、如來の智信を得る三昧に入る。是の如き等の百萬阿僧祇の

三昧は、皆現在前せり。是菩薩、悉く此三昧に入れば、善く其中の功用の差別を知る。

【是三昧】以下、  
華嚴經に卷位を明  
す。

【不可】相稱ふの  
意、即ち此地の菩  
薩は功成りて其身  
相嚴は其蓮華の  
中に相應するなり

後、三昧を第一の智位三名く

是三昧現在前すれば、即時に大寶蓮華王出づ、周圍に百萬の三千大千世界の如く、一切の衆寶もて間錯して莊飾し、一切の人々の所有に過ぎ、出世間の善妙の生ずるべなり。一切の法は幻の如く、虚の如く、空慧の所成なりと知りて、光明能く一切の世界を照す。瑠璃を華と爲し、稀世王を臺と爲し、那由他の鬘と爲し、四淨相金と造り爲し、妙華の光明と一切の妙寶とは、皆其内に在り、寶網を以て上に覆ひ、十方大千世界の微塵数の蓮華を以て眷屬と爲す。爾時、菩薩は其身菩薩にして、華座に坐す。菩薩は第一の智位の三摩耶を得たるが故に、身は大寶華座に在り。即時に菩薩の智位に指し、蓮華有り、一切の菩薩は蓮華の上に坐して、即ち百萬の三昧を得て、皆一心に大菩薩を恭敬し瞻仰せり。是菩薩華座の座に昇りし時、十方現在の一切の世界は皆大いに震動し、一切の道は皆休息し、光明は普く十方世界を照し、一切の世界は皆悉く清淨して、皆菩薩の大會を見聞することを得たり。何を以ての故に。是菩薩は蓮華の上に坐して、即時に是の下より百萬の僧祇の光明を出し、十方の阿鼻地獄等を照して、衆生の苦惱を滅し、兩膝の上より若干の光明を放ち、十方一切の畜生を照して、畜生の苦惱を滅し、兩膝の上より若干の光明を放ち、十方一切の餓鬼を照して、畜生の苦惱を滅し、若干の光明を放ち、十方の人界を照して、安樂快樂ならしむ。若手より若干の光明を放ち、十方の諸天阿修羅の宮を照し、兩肩より若干の光明を放ち、十方の童男童女を照し、項より若干の光明を放ち、

明を放ちて、十方の時支神を照し、口より若くは光明を放ちて、十方の菩薩、乃至九地に住する者を照し、白毫より若くは光明を放ちて、十方の位を得たる菩薩を照し、一切の虚空は照徹せられて現せず。頂上より百萬阿僧祇の三千大千世界微塵数の光明を放ちて、十方の諸佛の大會を照し、遶ること十匝し已りて、虚空に住し、光明の網を成じ、高大明淨にして、諸佛を供養したてまつる。是の如きの供養には、初發心より、乃し九地に至るまで作しし所の供養は、百分の一にも及ばず、乃至算數も、譬喩も及ぶこと能はざる所なり。是大光明の網は、十方世界の、有ゆる華香、末香、塗香、衣服、幡蓋、衆寶瓔珞、摩尼寶珠の供養の具より勝れたり。出世間の善根より生じたるが故なり。一一の諸佛の大法會の上に、皆衆寶を雨らすこと、猶し大雲の如し。若し衆生有りて、其供養を覺るる者は、皆是れ無上の大道を必定せん。是の如きの諸光は大供養を雨らし已りて、大會を遶ること十匝にして、諸佛の足下に入る。爾時、諸佛及び大菩薩は、某の世界に、某甲の菩薩摩訶薩、是の如きの道を行じて受職を成就することを知り、即時に十方無邊の菩薩、乃至九地に住する者は、皆來りて圍繞し、大供養を設け、一心に恭敬して、各萬の三昧を得、一切のもの職を得たり。菩薩摩訶薩は金剛もて莊嚴せる胸より、一大光を出し、破魔賊と名く、無量百千萬の光を以て眷屬と爲し、下方の世界を照し、無量の神力を示す。亦來りて是大菩薩の胸に入れり。此光明滅し已れば、是菩薩は、即ち百千萬億の大勢力ある神通と智慧とを得たり。爾時、諸佛は眉間の白毫相より光を出し、益一切智と名く。

無量無邊の光明の眷屬有りて、悉く一切の十方世界を照し、圍繞し十匝して、諸佛の大神通力を示現し、無量百千萬億の諸菩薩を勧進して、大方世界は六種に震動し、一切の惡道の苦惱を滅除し、一切の魔宮は皆滅はれて現せず。一切諸佛の得道の處を示し、一切諸佛の大會の莊嚴の事を示し、廣大なること法界の如く、究竟すること虚空の如く、一切の世界を照し、有りて、虚空に集住し、大神通華嚴の事を示して、是菩薩の頂に入り。眷屬の光明は眷屬の蓮華上の諸菩薩の頂に入り、即時に各案に未だ得ざりし所の十千の三昧を得たり。是光明此菩薩の頂に入ること、一佛の光の如く、一切の佛の光も皆亦是の如く、一切十方の諸佛の光明、是菩薩の頂に入る時、名けて光を得たりと爲し、名けて諸佛界に入ると爲す。佛の十力を具へて佛の數に隨在す。佛子、譬へば轉輪聖王の太子、王の相を成就すれば、轉輪聖王は、子をして白象寶の鬘浮幢金の座に在らしめ、四大海の水を取り、上に羅幔を張り、種種に莊嚴して、種種嚴華あり、金瓶の香水を取りて子の頂上に灌げば、即ち名けて灌頂の大王と爲し、具足して十善道を得するか故に、轉輪聖王と名くるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く、職を受くる時、諸佛は香水を以て是菩薩の頂に灌ぎ、灌頂法王と名け、佛の十力を具足するが故に、佛の數に隨在す。是を諸の菩薩摩訶薩の大智慧の職地と名く、是職を以ての故に、菩薩摩訶薩は、無量百千萬億の善行難事を受く。是菩薩是職を得りて法雲地に住すれば、無量の功德皆具轉た増す。

【弟子】以下、第四段に本地の究竟満足の大明を明せり。

【集】因の義。

【化】應化又は教化の義。

【持】加持の義即ち佛の大悲衆生を濕し、衆生の信心佛心に感應するを加持と言ふ。

【密】秘密の義なり。

佛子、菩薩法雲地に住すれば、實の如く欲界の集、色界の集、無色界の集を知り、實の如く、世間性の集、衆生性の集、識性の集、有爲性の集、無爲性の集、虚空性の集、法性の集、涅槃性の集、邪見諸の煩惱性の集を知り、實の如く諸の世間法の成壞の集、聲聞道の集、辟支佛道の集、菩薩道の集、諸佛の力、無畏、不共の法、色身、法身の集、一切智の集、佛道を得、法輪を轉じ、滅度を示す集を知る。要を擧げて之を言はば、實の如く一切法の差別の集を知る。是菩薩は是の如き智慧を以て、菩提の行に隨順し、實の如く衆生の化、業の化、煩惱の化、諸見の化、世間の化、法界の化、聲聞の化、辟支佛の化、菩薩の化、如來の化、一切の化、分別、無分別の化を知る。是菩薩は實の如く佛力の持、法の持、業の持、煩惱の持、時の持、願の持、先世の持、行の持、劫壽の持、智持を知る。是菩薩は十地に住すれば、諸佛の有ゆる微細の智、謂ゆる行の微細智、命終の微細智、受胎の微細智、出生の微細智、出家の微細智、得道の微細智、神力自在の微細智、轉法輪の微細智、壽命を保つ微細智、涅槃を示す微細智、法久住の微細智、是の如き等の微細智を皆實の如く知る。又諸佛の密處、謂ゆる身密、口密、意密、時非時を知る密、菩薩に受記を與ふる密、衆生を攝伏する密、諸乘差別の密、八萬四千の諸根差別の密、業は實の如く作す所の密、行じて菩提を得る密、是の如き等の密を、皆實の如く知る。是菩薩は諸佛の有ゆる入劫智、謂ゆる一劫に阿僧祇劫を攝し、阿僧祇劫に一劫を攝し、有數劫に無數劫を攝し、無數劫に有數劫を攝し、一念に劫を攝し、劫に一念を攝し、劫に非劫を攝し、

非劫に劫を攝し、有佛の劫に無佛の劫を攝し、無佛の劫に有佛の劫を攝し、過去未來の劫に現在の劫を攝し、現在の劫に過去未來の劫を攝し。未來過去の劫に現在の劫を攝し、現在の劫に未來過去の劫を攝し、長劫に短劫を攝し、短劫に長劫を攝し、諸劫の攝しと皆實の如く知る。是菩薩は諸佛の入る所の微塵智、國土智、衆生の身心智、衆生の身心の得道智、衆生の行智、一切處に至る智、遍く佛道を行ずる智、順行智、逆行智、不可思議智、一切の世間、聲聞、辟支佛、菩薩の如く知ること能はざる所を、皆實の如く知る。佛子、諸佛の智慧は廣大無量なり。菩薩は地に住すれば、即ち普く其の如き智慧に入ることを得。菩薩摩訶薩、是地の行に隨へば菩薩の不可思議なる解脫、無量の解脫、淨土の解脫、智門の解脫、如來藏の解脫、隨無礙論の解脫、入三世の解脫、法性裏の解脫、明解脫、勝道の解脫を得。此菩薩は十の解脫を首と爲して、是の如き等の無量無邊の百千萬億阿僧祇の解脫を得。百千萬の無量阿僧祇の三昧、百千萬の無量阿僧祇の陀羅尼、百千萬の無量阿僧祇の神通、亦復是の如し。

【此菩薩】以下、第五段に本經の釋名を明す。  
 【三昧】三摩地と譯す。八  
 大菩薩が一一にして、其言第七段華嚴に於て、人と等しく、雨を供給する神とせらる。

是菩薩、是の如きの智慧を成就すれば、菩提に隨順し、無量の念力を成就し、能く一念の間に於て、十方無量の佛の所に至り、無明の法雨、無量の法雨を皆能く受持す。譬へば波伽羅王の如く、雨の大雨は、唯大海を除きて餘を受くること能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。如來は嚴密に大法の雨を雨らし、一切の衆生、聲聞、辟支佛、乃至九地の菩薩も、受くること能はざる所、唯眞菩薩法實地に住すれば、悉く能く受持す。

へば大海の一龍王の大雲雨を起すも、皆能く堪受し、若は二、若は三、乃至無量無邊の  
の大魔王の起す所の雲雨を、一時に耐き下すも、皆能く堪受するが如し、菩薩摩訶薩、亦  
是の如し。法雲地に住すれば、一佛の所に於て、能く大法明の雨を受け、二佛、三佛、乃至  
至不可説不可説の佛、一念の中に於て、皆能く是の如きの諸佛の大法の雲雨を堪受す。是  
故に是地を法雲地と名けたり。

解脫月の言はく、佛子、是菩薩は一念の中に於て、能く幾所の大法明の雨を受くるに堪  
ふるや。答へて言はく、佛子、譬へば十方の有ゆる不可説の百千萬億那由他の世界の微塵  
の如き、阿所の微塵世界の衆生、假使皆陀羅尼を聞持することを得て、佛の侍者と爲り、  
大聲聞と爲り、多聞第一なること、金剛蓮華上の、佛の鬘珠比丘の如くならん。其一りの  
衆生、是の如き多聞の力を成就し、餘も亦是の如し。一人の受くる所は、餘は重ねて聞  
はき、是の如くして一切各同じからず、意に於て云何。是一切の衆生の多聞を受持する  
力は、多しと爲すや、不や。答へて言はく、甚だ多くして稱し計ふべからず。佛子、我今  
汝が爲に説かん。是菩薩、法雲地に住すれば、一念の頃に於て、一佛の所に於て、三世の  
法藏大法明の雨を受け、上の一切衆生の多聞の力は、百分が一にも及ばず、乃至算數も譬  
喩も、及ぶこと能はざる所なり。一佛に聞く所の如く、十方世界の微塵の諸佛にも、皆能  
く大法明の雨を受持す。復能く此に過ぎて、無量無邊なるも、一念の頃に於て亦能く受持  
す。是故に名けて法雲地と爲す。佛子、菩薩摩訶薩、法雲地に住すれば、自ら願力よりし

て大慈悲、爾德、智慧を生じ、以て密雲と爲し、種種の身を現じて、雜色の雲と爲し、通明無畏を以て電光と爲し、大雷音を震ひ、法を震きて魔を降す。一念に、一時に、能く上に説く所の、復明世界に於て、皆悉く開普し、以て善く善法甘露の法雨を雨らし、衆生の心の樂處所に隨ひて、無明の起す所の煩惱の筵を滅するが故に。是故に、名けて法雲地と爲す。復次に、微子、菩薩摩訶薩法雲地に住すれば、一世界に於て、兜率天より來下し、乃至大涅槃を示し、一回の佛事は、度する所の衆生に隨ひて、普神力を現す。若は二、若は三、乃至上の如き、微塵数の世界、亦復是に過ぎたる、百千萬億阿僧祇の世界にも、兜率天より來下し、乃至大涅槃を示し、一切の佛事は、度する所の衆生に隨ひて、皆神力を現す。

【是菩薩】以下、第六段に本地満足究竟して妙用自在なることを説く。

是菩薩此地に住すれば、智慧の中に於て、上自在力を得。或は狭國を以て廣と爲し、廣國を狭と爲し、或は垢れたる國を以て淨となし、淨き國を垢れたるものと爲す。是の如く一切の世界に、皆神力有り。是菩薩は或は一微塵の中に於て三千大千世界の鐵圍山川を置きて、而も迫近せず。或は二、或は三、乃至不可説不可説の世界の、諸の莊嚴の事を一塵に入るを以て示し、或は一世間の華鬘の事を以て、不可説不可説の世界を示し。或は不可説不可説の世界の衆生を以て、一世界の中に置きて、而も迫近せず。或は一世界の衆生を以て不可説不可説の世界の中に置き、或は不可説不可説の世界を以て、一塵の中に入れて、而も衆生を惱まさず。或は一塵の中に一切の佛の神通力、莊嚴の事を示す。或は一

念の中に於て、不可説不可説の世界微塵の身を現じ、一身の中に於て、無量の手を示し、  
一一の手を以て恆沙の蓮華を執り、以て諸佛に散じたてまつり。雜香末香、幢蓋寶物、是  
の如き一切の莊嚴の具を、皆手を以て執り、諸佛を供養したてまつる。一一の身に於ても  
亦復是の如し。又一一の身は微塵數の頭を化し、一一の頭に於て、摩數の舌有り、是神力  
を以て諸佛を讚歎したてまつる。是の如き等の事、念念の中に於て、十方に遍滿し、念念  
の中に於て、神通力を以て、無量の世界に、佛道を得、法輪を轉じ、乃至大鼓涅槃を示し、  
三世の中に於て神通力を以て、無量の身を示現し、自身の中に於て無量の佛、無量の佛土  
の莊嚴事を現じ、自身の中に於て、一切の世界の成壞の事を示す。或は一毛孔に於て、一  
切の風を出し、而も衆生を觸まさず。或は無量無邊の世界を以て、一海水と爲し、此海水  
の中に、大蓮華を作し、形色光明は、無量無邊の世界に遍く、中に於て菩提樹の莊嚴の  
妙事を示し、乃至一切種智を得たることを示す。或は自身の中に、一方世界の摩尼寶珠、  
日月星宿の一切の光明を現じ、乃至十方の有る光明も、亦復是の如し。或は日よ  
り氣を嘘き、能く十方無量の世界をして、悉く大いに震動せしめて、衆生をして恐れの  
想行らしめず。或は十方世界の水劫盡き、風劫火劫の盡くることを示して、衆生身を意に  
隨ひて莊嚴し、或は自身に於て如來身を示作し、或は如來身にて自身を示作し、如來身を  
已が佛國と作し、已が佛國を如來身と爲す。佛子、菩薩摩訶薩は法雲地に在りて神變する  
ことは是の如し、又餘の無量の神力も自在なり。

爾時、會中の諸の菩薩、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、自在天子、淨居天等、各是念を作さく、若し菩薩の神通力と智慧力と是の如く無量無邊ならば、佛は夜叉何がしたまふや。

時に解脫月菩薩、大衆の心に念ふ時を知りて、金剛藏菩薩に問うて言はく、佛子、今諸の大衆は、是菩薩の神通智慧力を聞きて、疑心に墮在して、汝今當に一切の疑惑を斷ち、菩薩の神通華嚴の妙事を示したまふべし。

時に金剛藏菩薩、即ち一切の諸國體性三昧に入ると、時に大衆、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、四天王、釋提桓因、梵天王、自在天子、淨居天等、皆自ら金剛藏菩薩の身中に入ることを見知して、其身内に於て、千大千世界の莊嚴せる業事を見る。

若し、劫を滿ちして説くとも、盡すべからず。中に於て、佛の道場樹を見る。其臺の周圍は、十萬、千大千世界、高さは、百萬三千大千世界にして、三千億三千大千世界を覆ひ、樹の高廣などに稱ふ。童子の座有り、其座上に佛有り、一切智王如來と號けたまつる。

一切の大衆、咸く皆佛坐して座上に在すを見たまつる。其中の有ゆる莊嚴と、上妙なる供養の具とは、劫を滿ちして盡くし、亦盡すべからず。金剛藏菩薩、是の如き大神力を示現し、有りて、演説して大衆をして、各本處に在らしむるに、一切の衆會は、希有の想を生じて、默然として一心に金剛藏を觀る。

時に解脫月菩薩、金剛藏菩薩に問うて言はく、佛子、是三昧には大勢力有り、甚だ希有

なりと爲す。是三昧は、廣く、所云何。答へて言はく、是三昧は一切佛國の體性と名く。問うて言はく、是三昧の有る所の方の境界は云何。答へて言はく、佛子、若し菩薩摩訶薩を以て、身中に於て現じ、復是數に過ぎず。菩薩法雲地に在らば、是の如き無量無邊の百千萬億の諸の大三昧を得。是故に、菩薩此地の中に住すれば、身身の業測り知るべきこと難く、日日の業測り知るべきこと難く、意念の業測り知るべきこと難く、神力の自在なること測り知るべきこと難く、三世の法を觀ずることも測り知るべきこと難く、諸の解脫に遊戯味に行に入るも測り知るべきこと難く、智力も測り知るべきこと難く、諸の解脫に遊戯味に行に入るも測り知るべきこと難く、變化の所作、神力の所作、如意の所作も測り知るべきこと難く、乃至擧足下足をも菩薩の善慧地に住する者は測り知ることを能はず。佛子、菩薩の法雲地は、是の如く無量なり。若し廣く説かば、無量無邊の阿僧祇劫にも盡すことを得る能はず。

解脫月の言はく、佛子、若し菩薩の行處力と神通力とにして是の如くならば、佛の行處力と神通力とは復云何。答へて言はく、佛子、譬へば人有り、地の土を見て、是言を作さんか如し、無邊の世界の地性は此より多しと爲すや。汝が問ふ所の者は、我是の如しと謂ふ。如來の無量なる智慧は、云何が、菩薩の智慧を以て測量することを欲せんや。佛子、人あり、四天下の地性の少分を取らんに、餘す者極めて多きが如し、菩薩の法雲地は、

無量劫に於て但説くべきのみ。何に況んや如來地をや。我今當に説きて汝をして之を知らしむべし。佛は現じて證を爲したまはん。上方無量無邊の世界の微塵に等しき諸佛の世界の如く、十地の菩薩皆其中に滿てんに、是の菩薩に、無量無邊の業有りて、菩薩の功德智慧一定を修せんも、如來の功德智慧力に於て、百分が一にも及ばず。百千萬億分の一にも及ばず。乃至算數も、譬喩も及ぶこと能はざる所なり。佛子、是菩薩は是の如き智慧に隨順し、如來の身口意に順じて、諸の菩薩の三昧を捨てず、勤心に一切の諸佛を供養したてまつり。一一の劫に於て、一切の供具を以て、無量無邊の諸佛を供養したてまつれば、能く悉く具に諸佛の神力を受け、轉た復明勝となる。是菩薩は、法性の問難に於て、能く勝る者無く、乃至無量無邊の百千萬億劫にも窮盡すべからず。佛子、譬へば天金の、摩尼珠の衆寶を以て間錯して、自在天王の璽身の具と爲さんに、其餘の諸天は及ぶこと能はざる所、亦奪ふ者も無きが如し。菩薩十地に住すれば、菩薩善根は、初地より乃至九地に至るまで及ぶこと能はざる所なり。菩薩是地に住すれば、大智照明なることを得、一切智に隨順するが故に、其餘の智慧は壞すること能はざる所なり。譬へば大自在天王の光明は、能く衆生の身心をして清涼ならしめ、一切の生處の衆生の光明は、及ぶこと能はざる所なるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如し。法雲地に住すれば智慧の光明は、一切の佛國、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり、乃至九地の菩薩も亦及ぶこと能はず。是菩薩是地の中に住すれば能く無量の衆生をして一切智道に住せしむ。佛子、菩薩是地に住

【菩薩見地】以下此地の果徳を明す【摩醯首羅】(Mahaeswara) 大自在天と譯す。

【佛子】以下、第七段に喩を以て法を顯す。【阿耨達池】(Anudapita) 無熱惱池清涼池等と譯す。香醉山の南、大雪山の北に在り、四寶を以てなる岸あり、周圍八百里、四河(洹河、從多河、信度河、縛耨河)を出す。

すれば、十方の諸佛は爲に三世の智慧、法界の智慧、一切世界の智慧、普く照して一切の世界を住持する智慧、大慈大悲も普く一切の衆生を覆ふ智慧を説きたまふ。要を擧げて之を言はば、具足して爲に一切智道に至ることを説きたまふ。佛子、是を菩薩摩訶薩の第一法雲地と名く。

菩薩見地に住すれば、多く摩醯首羅天王と作り、智慧明達し、善く聲聞、辟支佛、菩薩に波羅蜜を説き、法性の中に於て問難する者有るも、能く盡さしむる無し。作す所の善業は布施、愛語、利益、同事にして、皆佛を念ずることを離れず、法を念ずることを離れず、乃至具足一切種智を念ずることを離れず、常に是念を作さく、「我當に一切衆生に於て首と爲り、勝と爲り、乃至一切衆生に於て依止者と爲るべし」と。若し是の如く勤行精進せんと欲せば、一念の中に於て、無量百千萬億那由他の不可説不可説の世界微塵數の三昧を得、乃至爾所の微塵數の菩薩を示し、以て眷屬と爲さん。若し願力を以てせば、神通自在にして復是數に過ぎん。謂ゆる諸行、上妙の供具、信解、起業、若は身、若は口、若は光明、若は耆根、若は如意足、若は音聲、若は行處、乃至若干百千萬億劫にも稱り數ふべからず。

佛子、是菩薩は、十地次第に順行して、一切種智に趣向す、阿耨達池より四河流出して、四天下に満足し、窮盡有ること無く、乃し大海に入るが如し。菩薩も亦是の如く、菩提より菩提根大願の水を出し、四攝法を以て、衆生を満足して窮盡せず、乃し一切種智に至

【續陀】 (Dhuta) 内法、修治等と譯す。煩惱の垢を除き、義として佛道を修行す。以て名く。

【稠糝羅】 (Chūshā) 苦糝本と譯す。法陀羅本を以て名く。

【再乾陀】 (Yuzen) 再乾陀の音譯、持蓮山と譯す。

【五通】 五の譯通なり。天眼、天耳、宿命、他心、神足通を言ふ。

【尼民陀羅山】 (Nimintarōsan) 音譯持蓮山と譯す。

る。佛子、是菩薩の土地は、佛智に因らば故に、而も差別有り。大地に因りて、上の大山王有るか如し。何等をか上と爲す。謂て雪山山王、香山王、柯葉羅山王、龍聖山王、山乾陀山王、馬耳山王、尾民陀羅山王、衝迦羅山王、宿慧山王、須彌山王なり。雪山山の一切の華草を、其中に集在して、盡すべからざるが如く、菩薩も亦是の如く、歡喜地に住すれば、一切世間の經書、技藝、文類、呪術、其中に集在して、窮盡有ること無し。香山王の一切の諸音其中に集在して、盡すべからざるが如く、菩薩も亦是の如く、龍聖地に住すれば、持戒、頭陀、威儀、助法其中に集在して、窮盡有ること無し。柯葉羅山王は但實のみを以て成り、世の妙華を集め、取るとも盡すべからざるが如く、菩薩も亦是の如く、明地に住すれば、一切世間の禪定、神通、解脫、法を具足、問ふとも盡すべからず。龍聖山王の但實のみを以て成り、多く互通の仙人有りて、窮盡すべからざるが如く、菩薩も亦是の如く、煩瑣に住すれば、集めて衆生をして濟す因縁に入らしめ、種種に問難すとす、窮盡すべからず。由乾陀山王は但實のみを以て成り、夜叉大神を集めて、衆生を問難すとす、窮盡すべからず。馬耳山王の但實のみを以て成り、衆の妙果を集めて、衆生を問難すとす、窮盡すべからず。尼民陀羅山王の但實のみを以て成り、一切の大方の龍神を集め、窮盡すべからず。菩薩も亦是の如く、現前地に住すれば、深き因縁の法を集め、世間の果を盡きて、窮盡すべからず。尼民陀羅山王の但實のみを以て成り、一切の大方の龍神を集め、窮盡すべからず。菩薩も亦是の如く、遠行地に住すれば、種種の方便智慧を集め、辟支佛の道を説

きて、窮盡すべからず。新迦羅山王の但寶のみを以て成り、心自在の者を集め、窮盡すべからざるが如く、菩薩も亦是の如く、不動地に住すれば、一切菩薩の自在道を集め、世間の性を説きて、窮盡すべからず。宿慧山王の、但寶のみを以て成り、大神通の諸の阿修羅を集め、窮盡すること無きが如く、菩薩は亦是の如く、善慧地に住すれば、轉衆生行智を集め、世間の相を説きて、窮盡すべからず。須彌山王の但寶のみを以て成り、諸の天神を集め、窮盡すること無きが如く、菩薩も亦是の如く、法雲地に住すれば、如来の十力四無所畏を集め、諸佛の法を説きて窮盡すべからず。是十の寶山は同じく大海に在るも大海の水に因りて、差別の相有り、菩薩の十地も亦是の如く、同じく佛智に在るも、一切智に因るが故に差別の相有り。佛子、譬へば大海の十相を以ての故に、名けて大海と爲し、能く壞するもの有ること無きが如し。何等をか十と爲す。一に漸次に深く、二に死屍を受けず、三に餘水本名を失ひ、四に一味、五に資多く、六に極めて深くして入り難く、七に廣大なること量無く、八に大身の衆生多く、九に潮時を失はず、十に能く一切の大雨を受けて盈溢有ること無し。菩薩の地も亦是の如く、十の因縁を以ての故に、能く壞するもの有ること無し。何等をか十と爲す。歡喜地の中に、漸く堅固の願を生じ、離垢地の中に、破戒と共に宿せず。明地の中に、諸の假名を捨て、焰地の中に、佛に於て一心不壞の淨心を得。難勝地の中に、世間の無量の方便神通を生じて、世間の事を起し、現前地の中に甚深の因縁法を觀じ、遠行地の中に廣大の心を以て善く諸法を觀じ、不動地の中に能く大莊

嚴を起して示現し。普賢地の中に能く深解脫を得、世間の行に通達して寶の如く失はず。法雲地の中に、能く一切の諸佛の大法明の雨を受く。佛子、譬へば大摩尼の寶珠に、十事有りて能く衆生に一切の寶物を與ふるが如し。何等をか十と爲す。一に大海より出で、二に巧匠治を加へ、三に特た精妙となり、四に垢穢を除き、五に火を以て鍛治し、六に衆寶もて莊嚴し、七に貫くに寶輪を以てし、八に琉璃の高柱に置き、九に光明四を照し、十に玉の意に隨ひて衆の寶物を用らす。菩薩の發菩提心の寶も亦十事有り。何等をか十と爲す。一に初發心に布施して慳を離れ、二に持戒、頭陀、苦行を修し、三に諸の禪定解脫三昧を以て轉た精妙ならしめ、四に道行を以て清淨に、五に鍊ふに方便神通を以てし、六に深き因縁の法を以て莊嚴し、七に種種の深き方便智慧を以て貫穿し、八に神通自在の幢上に置き、九に衆生の行を觀じて多聞智慧の光明を放ち、十に諸佛は智の職を授け、一切の衆生に於て能く佛事を爲し、佛の數に墮在す。

【佛子】以下、第八段に十種の利益を明す

佛子、是菩薩の行十所の、集一切智慧功德法門品は若し深く善根を種をされば、聞くことを得る能はず。問うて言はく、佛子、若し聞くことを得る者は、是人等の福を得ると爲すや。答へて言はく、佛子、有ゆる智慧勢力に隨ふ。是の如く薩婆若の心を發して、縁する所に福德を攝む。是人等法門を聞くことを得て、得る所の福德も亦復是の如し。何を以ての故に。若し菩薩の心無ければ、是法門を聞くとも、信解し受持する能はず。何に況んや身を以て修習し、能く其事を成ぜんをや。是故に當に知るべし、是人一切種智に隨

順せば、聞きて、信解し、受持し、修行することを得ん。

是品を説く時、十方世界の十億の佛國微塵數の世界は、六種に十八相に動けり。佛の神力を以て、法是の如くなるが故なり。諸天は華、末香、瓔珞、寶衣、幡蓋、莊嚴身具を雨らし、天の妓樂歌頌を雨らし下す。復大音有りて十地の殊勝の事を讚歎せり。此世界の四天下の他化自在天王宮に、十地を説くが如く、十方一切の世界も、皆亦是の如し。佛の神力を以ての故なり。十方の十億の佛國微塵數の刹を過ぎて、十億の佛國微塵數の菩薩有り、此世界に詣でて遍滿し、虚空に皆是言を作さく、「善哉善哉、金剛藏。善く菩薩の十地の法を説きたまへり。佛子、我等は皆金剛藏と名け、金剛德世界の金剛幢佛の所を發して來り、經歴せし處には、皆是經を説き、衆會も是の如く、言辭義趣も亦是の如くなりき。我等は佛の神力を以ての故に、來りて是事を證す。我此に至るが如く、十方一切世界の他化自在天王宮の摩尼寶殿に、皆十億の佛國微塵數の菩薩有り、往きて爲に證を作すことも亦復是の如し。

時に金剛藏菩薩、十方を觀察し、一切の大眾を觀察し、法界を觀察して、初發の薩婆若の心を讚歎し、菩薩の境界を示し、菩薩の行力を淨め、一切種智を攝し、衆生に隨つて説き、一切世間の垢穢を除き、衆生に一切種智の因縁を與へ、不可思議なる智慧莊嚴の事を示し、一切菩薩の功德の差別相を讚歎して、諸地をして轉た勝明ならしめ、衆生に顯示せんと欲するが故に、佛の神力を承けて、偈を以て頌して曰はく、

【諸の菩薩】以下  
 此地の重頌なり、  
 九十偈より成り、  
 初七偈は前九地中  
 の善擇智、次十四  
 偈は初地より七地  
 に至る進趣の相、  
 次三偈は第八地、  
 次五偈は第九地、  
 次十偈は得位地、  
 次七偈は究竟滿足  
 釋名、次七偈は神  
 通力、次八偈は地  
 果、次十九偈は無  
 說、最後二偈は結了す

諸の菩薩の行ずる所は、善寂滅を樂ひ  
 其心に所著無きこと、猶ほ虚空の若如し  
 貪患癡の垢を除きて、道智に安住す  
 是の如き無上の行を、願樂して聽聞せんと欲す  
 是の如き諸の菩薩は、無量劫に在りて  
 勤心に常に、一切諸の善根を修習し  
 無量の佛、群支阿羅漢を供養したてまつり  
 衆生を利せんが爲の故に、乃ち菩提心を生ぜり  
 轉進して戒行を持ち、頭陀もて罪垢を除き  
 善忍を修して轉た妙に、慇懃の威徳滿ち  
 福慧の因縁の故に、勝れたる遠心明淨となり  
 深く佛智を蒙り、佛と同じく菩提を生ず  
 一切の十方三世の佛を供養したてまつり  
 虚空に等しき如き國を、悉く持清淨ならしむ  
 一切法の平等に、善く悉く通達するが故に  
 諸の衆生を度せんが爲に、菩提心を發す  
 諸の菩薩は是の如くにして、是無量心を生じ

歡喜地に至りて惡を息め布施を樂ふ  
諸の本願力を得て、慈悲心を増廣し

深く十善の道を行じて、能く離垢地に到る

戒聞の功德備はり、慈心もて世間を愍み

永く諸の垢穢を離れ、深心常に清淨なり

普く諸の世間を觀するに、三毒の火熾然なり

是の如きの大士は、第三明地に入る

三界を觀するに皆空にして無常なり、亦病の如く

癰の如く瘡箭の如く、無量の苦は常に然ゆ

諸の有爲の過を見て、佛の功德を貪樂し

佛智の明焰を得て、第四地に入る

念慧を成就して、道智に至ることを得

此地に在りて、百千の諸の如來を供養したてまつる

常に能く思惟して、諸佛の無量の徳を念じ

一切、世間の難勝地に入ることを得

能く慧方便を以て、種種に示現し

諸の爲作する所有るは、以て世間を利せんとす

諸佛を供養し、衆生を益する事を行じ

無生の法前に在りて、現前地に入ることを得

菩薩の諸の所行は、一切の世に知り難く

常に我心有ること無く、有無皆悉く難く

諸法は生より空寂なるも、十二の縁の故に行ず

善く其微妙なるを了りて、遠行の地に入り

慧方便等を行じて、法の寂滅相を得たる

是の如きの大士は、知り難く及ぶべきこと難し

世間をして、善く寂滅を得しめんと欲するが爲の故に

還り起ちて、諸の行と、種種の福徳の事とを修

善く衆生の、種種の心行處に入り

是の如くして能く、空の如き不動地に入ることを得

大智の諸の菩薩は、善能く悉く具に

種種の智業を行じて、上の自在力を得

能く量有ること無く、境界無き諸の身を以て

善く十方界に現じ、而も爲に妙法を説き

善く世界、及び諸の衆生性に達す

是の如き大慈悲して、善く善慧地に入る  
第一妙淨の智は、善く諸の世間の

縷練煩惱業の、甚深の諸の難處を過し

是等を変せんが爲の故に、諸佛の法蔵を得こ

善く第一義を説き、悉く違背する所無し

是の如く次第に行じて、諸の善法を具足し

乃し九地に至りて、修集する所は福慧たり

諸佛の力の、第一深妙の利を得んと欲して

乃ち一切の佛に於て、智の職位を受くることを得

先に無数の定を得て、智行極めて廣大となり

最後に壞し難き、諸の智位三昧を得たり

若し能く是の如き、益智位三昧を得ば

一切の寶もて莊嚴したる、蓮華王即ち出でん

菩薩は蓮華に稱ひ、身を現じて其上に坐し

餘華の諸の菩薩、咸共に一心に視る

爾時大菩薩、身より無量なる

百千億の光明を放ち、諸の世間の苦を滅し

然して後に頂上より、百千億の光明を出し  
普く十方界の、諸佛の大集會を照す  
上の虚空の中に於て、光明の網を化はして  
諸佛を供養すること已りて、諸佛の足下に入る  
時に一切の如來、及び諸の居士等は  
又、某の菩薩、智職を受くることを得たるを知れり  
是の如く一切の佛は、眉間より光明を放ちたまひ  
益一切智と名け、此菩薩の頂に入る  
一切の無量の佛も、此菩薩に職を與へたまふこと  
猶し轉輪王の、太子に位を授くるが如し  
時に十方の世界は、普く皆大いに震動し  
乃至阿鼻等の、諸の苦は皆除滅せり  
菩薩一切の、智慧を具して是職を得たる  
是の如きを名けて、無上の法雲地に到れりと爲す  
是地の中に住すれば、智慧無量無く  
善く一切の、世間を度する諸の因縁を知る  
色無色の法と欲色無色の界とに入り

能く業生と、國土及び法性を知ら  
又能く可數、不可數の法の中に入り  
乃至能く、虚空の無量性を觀察す  
又此地には、悉く、菩薩の變化の事と  
諸佛の威神力と、微細智と密事とを知る  
又能く、悉く、一切諸劫の數に通達し  
一微塵の中に於て、諸の世界の  
一切諸の如來を觀見たてまつる、此無土地に於て  
初生し及び出家し、道を得て法輪を轉じ  
涅槃に入ることを示し、皆智と  
寂滅の妙解脱とに隨順して、悉く此地を得たり  
此地の諸の居士は、憶念力大なるが故に  
諸佛の大法雨を、皆悉く能く受持す  
譬へば大海の水は、能く龍王の雨を持するが如く  
諸佛の廣大の法を、菩薩の受くることも亦爾なり  
若し一佛の所に於て、一時に法を聽受せんに  
十方無量の土の、微塵數の衆生

若多みく聞ききて總持しゆし、聲聞しやうもん乘りを以もつても是こゝ菩薩ぼさつには知しかず、算數さんすうも及およばざる所ところなり  
無量むりやうの智慧ちゐと、及および先まづの大願だいがん力りきとを以もつて  
能よく一念いっぴんの中に於おて、無量むりやうの國くにに過へ満まんし  
甘露かんろの法雨ほふうを雨あらして、諸しよの煩惱ぼんごうの火ひを滅めつす  
是こゝ故ゆゑに、諸しよの如來にょらいを、名なけて法雲ほふうん地ちと爲なす  
大士だいし此地こゝに住すれば、諸佛しよぶつを供養くやうするの具ぐは  
諸天しよてんの所有しやうりやうに過へぎ、普ふく大神力だいじんりきを示しす  
諸の轉勝てんじやう力りきを示しして、是數こゝに過へぐること無量むりやうなり  
若し人ひと思量しりやうせんと欲ほつするも、迷悶みまんとん、一い切せつはざらん  
大智だいち此地こゝに住すれば、舉足じゆそく下足げそくの事ことを、  
一切いっせつ諸の菩薩ぼさつ、乃すなはち九地くちに至いたるまで  
皆みな悉しつく知しること能よはず、何なにに況いはん、餘あまの衆生しゆじやう  
三世さんぜの諸の眷屬けんじやく、及および與師いし支佛しはつを、  
此こゝに住すれば諸佛しよぶつは、一切いっせつの智慧ちゐの事ことを示し  
亦また、三世さんぜに通達つうたつせしむる無礙むがいの智ちを具ぐふ  
法性ほふじやうの寂滅じやくめつなることを示し、亦また種種しゆじゆんの事ことを示し

一切諸の世界の、有ゆる衆生の類の  
行する所の一切の法と、深微隱遠の事と  
一切の佛の功德とを、次第に示して知らしむ  
菩薩此地に住すれば、能く大供具を以て  
十方の佛を供養したてまつりて、一切の世界に遍し  
一切諸の世間の、有ゆる衆生の類の  
其餘の諸の供具は、皆及ぶこと能はざる所なり  
智者此地に住すれば、皆能く一切の  
無明諸の闇冥を破り、開示するに佛道を以てす  
自在天王の、光は衆の熱惱を滅するが如く  
佛子の智の光明の、惡を滅することも亦是の如し  
是地に住すれば多く、三界の自在王と作り  
諸の智慧に通達して、善く三乘を以て化す  
能く一念の中に於て、無量の三昧を得  
能く十方の佛を見たてまつる、其數も亦是の如し  
金剛藏菩薩、諸の居士に告げて言はく  
我今略して、十地の妙行を解説せり

若し摩訶演說せば、千億劫にも盡きざらん  
 是れ明也、法界の諸の大菩薩の地と名く  
 佛智を得んが爲の故に、十地の中に住し  
 安住して移動せざるごとし、猶し大山王の如し  
 初地の一箇の、經言と、其の技術とを具す  
 猶し雪山の中に、衆の糞草を積聚するが如し  
 持戒及び多聞は、二地の中に在ること  
 猶し香山王の、一切の香物を集むるが如し  
 剎梨羅山の、多く諸の寶物を積むるが如く  
 明地に聞智禪定を集むること、亦是の如し  
 焰地に多く、入道の法の不壞なるを積集するは  
 仙聖山の中に、善法の遮止する所なるが如し  
 五地の神の神通に、能く及ぶことを得る者無きは  
 由乾陀山の、多く夜叉の衆を集むるが如し  
 六地に能く、諸果を分別して窮盡すること無きは  
 猶し馬耳山の、妙果量有ること無きが如し  
 七地の方便慧は、能く及ぶ者有ること無きは

尼民陀羅の、諸の龍王盈満するが如し

八地の中に住すれば、自在智無量なること

祈迦羅山の、多く心自在なる者の如し

九地には心清淨にして、法を説くに障礙無きこと

猶し宿慧山の、阿修羅の止る所なるが如し

十地の諸の佛力と、功德とは窮盡すること無きは

須彌山王の、一切の天衆を集むるが如し

又復初地の中に、廣大の願を發し

二地に戒品を持ち、三地に假名を壞し

第四地に專一にして、五地に衆の妙事あり

六地に甚深の相、七地に廣大の心

八地の中に種種の、莊嚴と諸の神通とあり

九地に思妙の智、能く一切の世に過ぎ

十地に能く、諸佛の大法の雨を受持す

菩薩の行の大海は、動じ難く盡すべからず

發心して世間を出で、初地に入ることを得

二地に淨く戒を持ち、三地に諸の禪を修し

四地に道行淨く、五に方便慧を鍊り  
六に因縁して莊嚴し、七に深き方便慧あり  
八に琉璃の窟に到り、九地に衆生の  
一切の難の處を觀し、智慧の光普く照し  
十地に智識を受く、珠の王意に隨ふが如く  
是の如く次第に、菩提心の妙實を淨む  
十方諸の世界の、有はる微塵の數は  
一念の中に於て、其多少を計り知るべくとも  
一塵を以て、虚空を數へ知るべくとも  
諸佛の大功德は、無量にして盡すべからず

大方廣佛華嚴經

卷第二十八

東晋天竺三藏佛驮跋陀羅譯

十明品第二十三

【十明品】第六會他化自在天宮說法の第二にして、菩薩位中の行相即ち十種の智明を説きて、神力自在の行用を明す。【明】佛智の妙用自在にして、萬有を照明するが故に明と言ふ。【此菩薩摩訶薩】以下、別釋にして十段に分ち、其第一善知地心智明を説く。【廣心狭心】廣狭の差別は善心に於ける差違なり。【惡心】順不善心なり。之に反するを勝心と言ふ。【悉く無量無數】以下、此段は第二に天眼明を明せり

爾時、普賢菩薩摩訶薩、諸の菩薩に告げて言はく、「佛子、菩薩摩訶薩に十種の明有り。何等をか十と爲す。此菩薩摩訶薩は、悉く三千大千世界の衆生の心念を知れり。謂ゆる善心、不善心、無記心、廣心、狭心、惡心、勝心、順生、死心、背生死心、聲聞心、緣覺心、菩薩心、聲聞行心、緣覺行心、菩薩行心、天心、龍心、夜叉心、乾闥婆心、阿修羅心、迦樓羅心、緊那羅心、摩醯首伽心、人心、非人心、地獄心、畜生心、餓鬼心、閻羅處の衆生心、諸の雜處の衆生心なり。是の如き等の無量なる種種の衆生心を、悉く分別して知る。是の如き等の百の世界、千の世界、百千の世界、億の世界、百億の世界、千億の世界、百千億の世界、乃至百千億那由他の世界、廣く説かば、乃至不可説不可説の、佛刹微塵數の世界の衆生を、悉く能く分別して其心念を知る。佛子、是を菩薩摩訶薩の第一の善く他心を知るの智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、悉く無量無數の、不可説不可説の佛刹微塵數の世界の衆生、此に



【佛子云云】以下第四段に未來際明を明す。

【出、不出】出、解脱の善を出と言ふ。不出、世非解脱の善を不出と言ふ。

【定、不定】解脱の善中、九上四無礙の樂より離れて決定の自由を得ることを得る善を定と言ふ。不定の善を不定と言ふ。

【正定、邪定】不出世解脱善の中に於て佛の種性あるを正定と言ひ、無き者を邪定と言ふ。

【使】煩悩の異名なり。有使とは有漏と同義。

【具足の善根】無

たてまつりて、  
を承現し、自在に變化して、無餘涅槃し、塔廟を莊嚴し、善根を長養し、乃至、法の住せしことを憶念す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の深く過天際の劫に入る無量の宿命智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は深く未來際の劫、乃至無量無數の不可説不可説の佛刹微塵數の世界の衆生の、未來に生死し、三有に流轉するに入り。衆生の業を知り、衆生の報を知り、衆生の善を知り、衆生の不善を知り、衆生の出を知り、衆生の不出を知り、衆生の定を知り、衆生の不定を知り、衆生の正定を知り、衆生の邪定を知り、衆生の有使の善根を知り、衆生の無使の善根を知り、衆生の具足の善根を知り、衆生の不具足の善根を知り、衆生の善を攝取するを知り、衆生の不善を攝取するを知り、衆生の善を積集するを知り、衆生の不善を積集するを知り、衆生の惡法を積集するを知り、衆生の惡法を積集せざるを知る。未來の無量無數の不可説不可説の佛刹微塵數の世界の諸佛は、是の如きの名號、是の如きの眷屬、是の如きの父母、是の如きの侍者、是の如きの聲聞、是の如きの最勝なる二大弟子、是の如きの王都を捨離して出家求道し、是の如きの菩提樹下に結跏趺坐して最正覺を得ん、是の如きの住處、是の如きの床座、是の如きの說法、是の如きの化度、是の如きの壽命、是の如きの佛事を作し已りて無餘涅槃に入り、佛滅度の後に正法は是の如く久住せんと知る。悉く未來の無量無數の、不可説不可説の佛刹微塵數の佛の、得發心より願行

謂の善根中、果位の善根を具是の善根と言ひ、因位を不具是と言ふ。

【攝取、積集】攝取とは初起に名け積集とは造修に名

【未來の無量無數】以下、謂の未來の衆生の報得に對し、未來佛の因果の相を知ることを明す。

【佛子六六】以下第五次に天耳明の力を擧げ、覺じて所聞の自在、別して東方佛刹の三寶を隨つて能く所持することを明す。

【念す所】隱微の事、眞理を念す。

【念す所】 草木を念す。

【念す所】 念佛念法等なり。

【佛子六六】第六次に神力智門を明す。

を出生して、無量の諸佛を恭敬して供養したてまつり、一切衆生を教化し調伏し、大衆眷屬に淨法輪を轉じ、其壽命に隨ひて神力を示現して、自在に變化し、無量涅槃し、塔廟を莊嚴して、善根を長養し、乃至法の住せんことを知る。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の深く未來賢の劫に入る無礙の智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、無礙の天耳を出生して、清淨廣大にして具足し、稱量すべからず、修習して證を得、明淨にして障を離れ、了達し、決定せり。菩薩は、無礙の天耳を成就して、十方遠近の一切の音聲、聞と不聞とを欲するまゝに、自在に意に隨ふ。東方の無量無數の不可説不可説の佛刹に於て、微塵數の諸の如來應供等正覺の説く所、發はす所、聞く所、示す所、制する所、調伏する所、教化する所、念する所、分別する所、教ふる所、深妙の善解、無量なる清淨の方便、是の如きの一切を、悉く能く聞持し、義を善くし、味を善くし、衆に隨ひ、人に隨ひ、音聲に隨ひ、智に隨ひ、衆に隨ひ、信實する所の所得の功德に隨ひ、境界に隨ひ、所依に隨ひ、出道に隨ひ、悉く能く聞持して、忘失すること無く、廣く妙法を説き、一切を度脱し、乃至一句一味を失はず。東方の廣く聞持する所、亦復是の如し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の無礙清淨の天耳智明と爲す。佛子、菩薩摩訶薩は、無畏神力の智明に安住して、自在無作の神力、平等の神力、廣大の神力、無量の神力、無依の神力、念至の神力、不轉の神力、不退の神力、無盡の神力、不可壞の神力、長養の神力、隨順行の神力を速得せり。若し十方の無量諸佛刹の世界、

て至るの義。  
【若し十方】以上  
は名を標し、十二  
種の神力を擧げて  
其體を顯し、以下  
は其業用を説く。

【佛子云云】以下  
分別言音智明を説

無邊の世界、無分齊の世界、稱量すべからざる世界、不可思議の世界、度量すべからざる世界、乃至不可説不可説の佛刹微塵に等しき一切世界の現在の諸佛を聞かんに、聞き已りて、悉く能く彼諸佛の所に往詣して、恭敬し、禮拜し、讚歎し、供養して、深く知來の清淨なる佛刹の、種種の莊嚴と種種の功德とを知りて、無量の功德、皆悉く充滿し、無量の自在無量の境界を示現して一切の知來を讚歎し、恭敬し、供養して、其身を示現し、悉く十方一切の佛の所に在り、亦此を離らずして、而も往きて彼に到り、悉く自ら了知して、諸佛の所に詣でて、恭敬し、禮拜し、讚歎し、供養し、菩薩の法を問ひたてまつりて佛智を出生し、諸の佛刹の眷屬の變化を見、説法の相を知り、佛刹の相を知りて、悉く著する所無く、一切の事に於て、皆悉く究竟じて彼岸に到り、神力を損すること無くして、速かに十方の一切世界に遍く、佛として見たてまつらざる無く、法として聞かざる無く、衆として知らざる無く、常に正法を聞きて未だ曾て斷絶せず、佛法を樂ひ求めて、勝願を成滿し、普賢菩薩の無量の諸行を具足し修習す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六無畏の神力に安住する智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、無量無數の不可説不可説の佛刹微塵數世界の衆生の首聲語言に於て、悉く能く了知す。謂ゆる中國の言音、邊國の言音、天の言音、龍の言音、夜叉の言音、乾闥婆の言音、阿修羅の言音、迦樓羅の言音、緊那羅の言音、摩睺羅伽の言音、人の言音、非人の言音なり、是の如き等の不可説不可説の種種の衆生の言音の同じからざるを、菩薩

【世諦】世俗諦の中、凡俗の對境となる萬有の眞相の一面なり。

【佛子云々】以下第八段に色身正覺智明を明す。【色を生ぜず】色即無色の理を明す。【向々】向々、向々、以下、多色を現することを叙す。

摩訶薩は悉く能く了知し、善く分別して知り、一切の施設に入り、深く入りて一切の世諦を解了し、悉く種種の言音の法を知り、諸の言音の法を分別して了知して、一切種種の言音の大海に入る。菩薩摩訶薩は其入る所に隨ひて、世界に遊行し、悉く能く此世界の中の衆生の性を了知す、其性を知り已りて、悉く一切諸の言音の法を解る。日天子出でて、一切の色を照し、眼有る者をして悉く色相を見しむるが如し、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、悉く一切諸の言音の雲に入り、善く一切諸の言音の法を知る。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の一切言音を分別する智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、一切の色法を知る。色を生ぜず、種種の色無く、虚妄の色無く、青黄赤白等の色無し。而も菩薩摩訶薩は深法界に入りて、種種の形色を住持し、變化す。無量の色、明淨の色、清淨の色、普現の色、彼に似る色、善く色を得る所を照す色、染汚無き色、具足辯の色、清淨相の色、惡を離れたる色、大方の色、新車の色、無窮の色、無盡の色、羅色、羅業の色、稱量すべからざる色、善學の色、善く長養する色、成熱の色、隨ひて化度する色、無礙の色、明徹の色、離垢の色、澄淨の色、正身の色、不可思議なる方便の色、不可壞の色、最勝の色、最勝の色、離障の色、離暗の色、牢壁の色、善雜の色、功德相の色、善好の色、大我の色、境界の色、善調伏の色、清淨正直の色、上色、勝勝の色、不可斷の色、無所住の色、無等の色、不可説の佛刹に充滿する色、長養の色、最堅固の色、勝色、惡色、勝功德の色、希望に隨ふ色、清淨性の色、常善の色、善決定の

【佛子六六】以下  
無色にして色を現  
する意を明す。即  
ち應機の化用を示  
すなり。

色、無障の色、虚空明淨の色、清淨長養の色、無垢の色、離塵の色、種種の塵を離れ  
たる色、善く示現する色、普く應現する色、隨時に示現する色、寂靜の色、離欲の色、  
功德福田眞實の色、安隱の色、恐怖を離れたる平等威儀の色、超越智慧の色、無礙身の色、  
遍く遊行する身の色、愚癡を離れたる色、大慈尊也の色、大悲受持の色、正趣を出づる色、  
功德力を具足する色、正念に隨ふ色、無量寶の色、明淨藏の色、一切の衆生をして歡喜  
せしむる色、一切智門の色、歡喜眼の色、一切寶莊嚴無比の色、不著心の色、不堅固の色、  
住持自在の色、種種の神力自在の色、如來の家に生ずる色、無比の色、法界に充滿する色、  
衆に隨ひて往詣する色、種種の色、具足の色、善行の色、隨化究竟の色、見て厭足無き色、  
無量雜光の色、無量阿僧祇の焰光を放つ色、不可說の種種の光色、不可思議なる香光、普  
く三界に熏ずる色、量るべからざる日光焰の色、稱るべからざる月の形像の色、無量の樂  
華雲を放つ色、種種の寶華鬘莊嚴雲の色、一切世間に過きたる一切の香焰普く熏ずるの色、  
一切如來の功德藏を出生する色、無量の音聲もて廣く一切法を説きこ顯現する色、一切  
種の行は普賢菩薩を具足する色なり。佛子、菩薩摩訶薩は無色の法界に入りて、種種の形  
色を住持し變化す、所應に隨ふが故なり。謂ゆる見の教化、正念の教化、轉法輪の教化、  
隨時の教化、念念の教化、親近の教化、隨逐の教化、神力の教化、種種自在の教化、不可  
思議なる大神變の教化もて、悉く能く一切の衆生を度脱す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第八  
の無量阿僧祇の色身莊嚴を出生する智明と爲す。

【佛子云云】以下第九段に眞實智明を明し、二邊を遠離して而も中道に著せず、性相俱に現じ、有無併べて破すことを説く。

佛子、菩薩摩訶薩は、悉く諸法の名字有ること無きを知り、一切法の悉く性有ること無きを知り、一切法の來無く去無きを知り、一切法の別異なるを知り、一切法の別異無きを知り、一切法の不二にして不二に非ざることを知り、一切法の無我なるを知り、一切法の無比なるを知り、一切法の不生なるを知り、一切法の不滅なるを知り、一切法の從來する所無く去るも至る所無きを知り、一切法の無壞なるを知り、一切法の不實なるを知り、一切法の不實に非ざることを切り、一切法の一相と無相とを知り、一切法の有に非ざることを知り、一切法の無に非ざることを知り、一切法の法に非ざることを知り、一切法の非法に非ざることを知り、一切法の語言に非ざることを知り、一切法の非語言に非ざることを知り、一切法の業に非ざることを知り、一切法の非業に非ざることを知り、一切法の報に非ざることを知り、一切法の無報に非ざることを知り、一切法の作に非ざることを知り、一切法の不作に非ざることを知り、一切法の第一義に非ざることを知り、一切法の第一義ならざることを知り、一切法の量に非ざることを知り、一切法の無量に非ざることを知り、一切法の間に非ざることを知り、一切法の量に非ざることを知り、一切法の無間に非ざることを知り、一切法の因生に非ざることを知り、一切法の因生に非ざることを知り、一切法の世間を離れざることを知り、一切法の因生に非ざることを知り、一切法の定性に非ざることを知り、一切法の不具是の色に非ざることを知り、一切法の不具是の色に非ざることを知り、一切法の生死を出でざることを知り、一切法の生死を出でざるに非ざ

【菩薩摩訶薩は是の如き】以下、成智を證し、著を遠離するの益を明す。【一切の塵を捨てず】以下、後得智を以ての攝化の明を明す。【即ち前は法體、今は説法の用を示すなり】

【佛子云云】以下第十段に減定智明を明す。

ることを知り、一切法の虚妄に非ざることを知り、一切法の虚妄ならざるに非ざることを知り、一切法の方便に非ず、方便ならざるに非ざることを知り、菩薩摩訶薩は是の如きの諸法を知らが故に、世諦に著せず、第一義諦に著せず、虚妄に諸法を取せず、諸の文字を起さずして寂滅の性に隨順す。一切の塵を捨てず、第一の實義を見り、決定して諸法を知り。無量の法雲を興して、普く一切の甘露の法雨を雨らし。不可説の方便に入り、不可説の方便に度り、無盡の辯才を以て廣く、加實の義を説きて、眞法に違はず。善巧の方便も一切法を説き、辯才盡くすること無くして、大慈悲を成就し。無文字の境界より文字の義を出生して、文字の性を壞せず。諸法は悉く緣より起ると觀察して染著する所無く一切諸の語言の法を解了して、開發し、示導し、稱揚し、顯現し、具足し、清淨にして衆の疑網を滅し、衆生を攝取して實法を捨てず。不二の法に於て而も濫沒せず。無礙の法門を具足し成就して、微妙の音聲もて普く法雨を雨らし、未だ會て時を失はず。佛子、是を菩薩摩訶薩の第九の一切諸法の眞實智明と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は念念の中に於て、滅一切法三昧正受に入りて、退轉せず。亦菩薩の事を捨てず。大慈悲の心を捨てず。諸の波羅蜜を捨てずして善能く諸佛の刹土を分別して厭足無く、大願を捨てずして、衆生を度脱し。轉法輪を捨てず。衆生を教化し、調伏することを捨てず。一切の諸佛を供養し、恭敬することを捨てず。一切諸法の自在の法門を捨てず。常に一切の諸佛を見ることを捨てず。常に諸佛の正法を聞くことを捨てず。悉く能

一切無礙の法を出生して、一切の法は皆悉く平等なるを知り、一切諸種の諸法の諸願を具足し成就して、深く一切の佛刹に入り、一切諸佛の種種の彼岸を究竟し、一切の世界に於て悉く能善く一切の所學を學び、一切の法相は深く法相に入り、善く諸法に隨り起ることを知り、一切の法を眞實有ること無きを了り、世間の諸法を眞實の法に隨順し、一切の法に於て染著する所無く、其所所に隨順方便も一切の諸法を演説す、菩薩摩訶薩は一切法滅盡正受に於て、或は住すること一劫、或は住すること百劫、或は住すること百千劫、或は住すること億劫、或は住すること百億劫、或は住すること千億劫、或は住すること百千億劫、或は住すること百億那由他劫、或は住すること千億那由他劫、或は住すること百千億那由他劫、或は住すること無量劫、或は住すること無邊劫、或は住すること阿僧祇劫、或は住すること不可思議劫、或は住すること不可稱量劫、或は住すること無分齊劫、或は住すること不可說不可說劫なり、常に滅一切法、滅正受に在りて、顔容異なること無く、體相異無く、亦壞散せず、燒くべからず、沒すべからず、失ふべからず、盡くべからず、有に於ても無に於ても悉く所作無く、悉く能く諸の菩薩の事を成辦し、廣く能く一切の諸法を演説し、衆生を教化して未だ曾て時を失はず、一切諸の如來の法を長養し、一切諸の菩薩の行を滿足し、一切の衆生を饒益することを捨てず、十方に變化して未だ曾て暫くも息まず、普く一切諸の趣を照すことを捨てず、正受の地に於て寂然として動せず、佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の一切諸法滅定智明と爲す。

【菩薩摩訶薩】以下、上來の十明別釋の結了なり

菩薩摩訶薩、此明に安住すれば、一切の天人も思議すること能はず。一切世間も思議すること能はず。聲聞、緣覺も思議すること能はず。下地の菩薩も思議すること能はず。身日意の業も思議すべからず。一切三昧の自在も思議すべからず。智慧の境界も思議すべからず。唯如來のみ有して乃ち能く此人の功德を演説したまふも、餘は能く説くこと無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智明と爲す。此菩薩摩訶薩此智明に住すれば、悉く三世無礙の智明を得ん。

【十忍品】第六、他化自在天宮に於ける説法にして、前所説の十明の所依たる智體の無盡を明す。

【忍】智を以て性となし、忍解即可の義なり。

【佛子云云】以下本品の解説十段に分ち、各段に譬起釋義結名ありて所説自ら分明なり。

【隨順音聲忍】無生の法の教説に於て、信順忍受して驚かざるを言ふ。

十忍品第一、十四

爾時、普賢菩薩摩訶薩、後諸の菩薩に告げて言はく、佛子、菩薩摩訶薩十種の忍を成就せば、能く一切無礙の忍地を得、又一切諸佛の無盡、無礙の法を得ん。何等まか十と爲す。謂ゆる隨順音聲忍、順忍、無畏法忍、如幻忍、如響忍、如夢忍、如響忍、如電忍、如化忍、如虚空忍なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の忍と爲す。過去の諸佛は已に説きたまひ、未來の諸佛は當に説きたまふべく、現在の諸佛は今説きたまふ。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の隨順音聲忍と爲す。若し眞實の法を聞きて、驚かず、怖れず、畏れず、信順し受持し、愛樂し順入し、修習し安住すれば、佛子、是を菩薩摩訶薩の第一の隨順音聲忍と爲す。

【順忍】眞理を順應するも未だ完全に覺悟せざるを言ふ。

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍解覺悟する智體なり。

【大圓】寂靜に没在する、能く隨機應答する順を指す。

【莊嚴に住す】行門にして莊嚴する。

【諸法は眞如幻生にして實無く皆も幻化の如きを以て執すべき行者もなく、性本空寂なりと觀ずる忍智を言ふ。

【出入、不出入】佛の世間應現を出入と言ひ、而も化用常に寂靜無作なるを不出入と言ふ。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の順忍と爲す、佛子、此菩薩は寂靜に隨順して、一切法の平等を觀じ、正念して諸法に違はず、隨順して深く一切諸法に入り、清淨なる直心もて諸法を分別して、平等觀を修し、深く入りて具足す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第二の順忍と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の無生法忍と爲す。佛子、此菩薩は法の生有ることを見ず、法の有ることを見ず。何を以ての故に。若し生ぜざれば則ち滅せず、若し不滅なれば則ち壞れること無し、若し無基なれば則ち墜る、若し離垢なれば則ち壞れること無し、若し無壞なれば則ち動ぜず、若し不動なれば則ち寂滅地たり、若し寂滅地なれば則ち眞を離る、若し離欲なれば則ち所行無し、若し所行無ければ則ち是れ大圓なり。若し是れ大圓なれば則ち莊嚴に住す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の無生法忍と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の如幻忍と爲す。佛子、此菩薩は、深く諸法は皆悉く幻の如しと入る。緣起の法を觀じて、一法の中に於て衆多の法を解し、衆多の法の中に一法を解了す。菩薩摩訶薩は彼諸法に於て、諸刹を分別し、衆生界、法界に入りて、等しく世間を觀じ、等しく佛の出入と、不出入と、出生と住持とを觀ず。譬へば幻の象兵、馬兵、車兵、歩兵に非ず、男に非ず、女に非ず、童男童女に非ず、樹に非ず、葉に非ず、華に非ず、果に非ず、地水火風に非ず、晝に非ず、夜に非ず、半月一月に非ず、年歳に非ず、百年に非ず、月に非ず、日に非ず、劫數に非ず、定に非ず、亂に非ず、一に非ず、異に非ず。

【如智忍】一切の如く實性無く執着する忍智を言ふ。

す、純に非ず、雜に非ず、好に非ず、惡に非ず、多に非ず、少に非ず、量に非ず、無量に非ず、譬に非ず、細に非ず、種種の衆は幻に非ず、幻よ種種の衆に非ず、但幻を以ての故に、衆の色像を示すが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く一切の世間は皆悉く幻の如しと觀ず。謂ゆる業世間、煩惱世間、佛刹世間、法世間、三世世間、流轉世間、成世間、壞世間、行世間なり。菩薩摩訶薩は、一切世間は悉く幻の如しと觀察する時、衆生を起さず、衆生を壞せず、諸利を起さず、諸利を壞せず、諸法を起さず、諸法を壞せず、過去の虚妄の相を取せず、當來に住せず、當來を轉せず、現在に住せず、亦所著無し、菩提を觀察せず、虚妄に菩提を取せず、佛の興世を取せず、亦佛の涅槃無し、大願に住せず、清淨を取らず、離生平等にして、出無く著無し、嚴淨の佛刹を出生すれども決定して眞法を知り、衆生界を出生し分別して衆生を知り、決定して法界を知るも、正法に住して動ぜず、等しく三世に入りて而も亦三世を分別することを違へず陰入を出生して所依を除滅し、衆生を度脱して、法界の差別有ること無きを等觀し、一切法は文字に非ず、言説に非ざることを知りて而も亦諸の深妙なる辯を捨てず、衆生を化することに著せずして法輪を轉じ、衆生の爲の故に大悲を受持し一切を度脱し、過去の因縁を説きて實に諸法を知るも而も所至無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の如幻忍と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の如智忍と爲す。佛子、此菩薩は一切世間は皆悉く燦の如しと覺悟し、熱時の燦の如く方處有ること無し。菩薩摩訶薩は決定して一切の諸法も、亦

【如夢忍】 者の世間は夢の如く眞實なるもの無しと覺悟して執着せざる忍智なり

【如響忍】 一切の語言音聲皆因縁の合なり、實性あるにあらざる如く、響の如く、響するべき無しと覺悟して執着せざる忍智なり

方處無く、内に非ず、外に非ず、有に非ず、無に非ず、常に非ず、斷に非ずと了知す。一切の法は皆悉く眞實に假名の施設にして、一色に非ず、種種の色に非ず、無色の地に非ず、一響に非ず、一切の諸法を具足し證知す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の如始忍と爲す。

佛子、何等を菩薩摩訶薩の如夢忍と爲す。佛子、此菩薩は、一切の世間は行夢の如しと覺悟す。一塵へは夢の世間に非ず、世間を離るるに非ず、欲界に非ず、色界に非ず、無色界に非ず、生に非ず、淨に非ず、穢に非ず、清に非ず、濁に非ず、而も示現有るが如し。是の如く菩薩摩訶薩は、一切世間を皆悉く夢の如しと覺悟して、夢を壞らす、夢に著せず、夢の性は實證にして、夢に自性無し、一切法を受持するに皆悉く夢の如くして、夢を壞せず、虛妄に著せしむせず、一切世間は皆悉く夢の如しと覺悟す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六の如夢忍と爲す。

佛子、何等を菩薩摩訶薩の如響忍と爲す。佛子、此菩薩は諸法を出生し、音く舉げて、現法を成就し究竟す、彼岸に到ることを得、一切の法は皆悉く響の如しと知る。衆の響を守持するに類し、呼聲の如くにして所至無し。菩薩摩訶薩は、如來の音は、内より出づるにあらず、外より出づるにあらず、内外より出づるにあらずと解り、彼音を聞くは、内に在らず、外に在らず、亦内外に在らず、而も能く巧方便の智を出生して、響は響の如く、悉く縁より起ると了り。亦み施を壞せず、深く音聲に入りて、顛倒を遠離し、善く一切を學ぶ。帝釋の后は、一音の中に於て、千の妙音を出し、而も亦虚妄に音聲を取らざ

【如電忍】正法は電の如く一切を照現して而も執すべき我の境にあらざると諦忍するを言ひ以下前の遮詮の九對の止行に對し、積極的に表詮に約して觀行を成ずることを説く。

るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く虚妄を離れたる音聲に入る。菩薩摩訶薩は是の如く虚妄を離れたる法界に入り、巧妙の方便もて音聲を出生し。無量無邊の世界に於て、廣く衆生の爲に淨法輪を轉じて、一切を度脱し、如來の廣長舌の相を受持し、無量の無障礙の音を出生して、十方一切の世界に充滿し、普く衆生をして悉く聞解を得、善根を發起せしめ。而も音聲は轉ずること無く、言説すべからず。音聲は語言に非ずして、而も語言に隨順することを知り、亦種種の音聲に染著せずして、一切の音聲を覺悟し了知す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の如電忍と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の如電忍と爲す。佛子、眞菩薩は世間に生れず、世間に死せず。世間の内にあらず、世間の外にあらず、世間を行ぜざるに非ず、世間を壊せず、世間を壊せざるに非ず。世間の趣に趣かず、世間の趣を離れず、世間に等しからざるに非ず、世間に非ず、世間を離るるに非ず。菩薩の行を行ぜずして、而も大願を捨てず。眞に非ず、虚に非ず。行する所は眞實にして、一切如來の正法を究竟し、能く一切世間の諸の事を辦す、亦世間に隨順して流轉せず、亦正法を受持して流轉せず。譬へば電の如く、或は日、或は月のごとく、山、樹、男女、室宅、鐵壁、大地、流水等を皆悉く能く照して明淨ならしむるが如く、譬へば水油、身、寶珠、明鏡の如く、一切清淨の色は、悉く能く一切の淨界を照明ならしむ。電は明淨を離れず、明淨の電を離れず。電能く速く照して、而も電に遠近あらず。菩薩摩訶薩も亦復是の如く能く彼我の一切の境

界を照すも、而も其智慧は分別を作さず、彼我の一切の境界を照現すること、種子の中に根芽華葉結實有ること無ければならず、而も能く因と爲るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、不二の法の中に於て二相を分別し、無礙智を修す、佛子、是を菩薩摩訶薩の第八の如雷忍と爲す。若し菩薩摩訶薩此忍を成就せば、諸の如来の所に往詣せずと雖も、而も悉く普く一切の佛刹を遍遊し、此世界を起たす、一切の世界に至らずして、菩薩身を現じて一切の世界に迴すること、電光の現するが如く、遊行無礙にして、普く十方に至り、金剛諸山のごとき堅固の物を碎ふることも能はざる所、佛家の清淨なる身日意の業を具足し成就して、無量清淨の一切の色身を得ん。

【如化忍】世間の諸法は生、住、異、滅に非ず、眞實の體無しと認知して執著せざる諦智を言ふ。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第九の如化忍と爲す。佛子、此菩薩は一切世間は皆悉く化の如しと知る。謂ゆる一切衆生の業は化なり、一切衆生の行は化なり、一切の處安は化なり、一切の苦樂顛倒是化なり、一切の處取は化なり、一切世間無常法は化なり、一切の語言道は化なり、一切煩惱は化なり、諸想の起す所の故に。爾代衆生は化なり、離垢清淨なるが故に。三世不退轉は化なり、無生平等の故に。菩薩の願は化なり、菩薩の行を長養するが故に。如来の大世は化なり、衆生は一切の苦を除滅するが故に。法輪の方便は智化なり、無量なる無畏の智辯を出生するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩、世間離世間の化を解知すと爲す。決定して廣大を知り、無量無際等を知り、如知を知り、無量の自在を具足し成就して、眞實の中に於て、而も變動せず、悉く一切眞實有ること無きを見て、而も

所行を壊せず、譬へば化の如く、心より起らず、心の中に住せず、業に由りて起らず、亦  
報を受けず、世間の生に非ず、世間の滅に非ず、法の所攝に非ず、法の所觸に非ず、是れ  
久住に非ず、須臾住に非ず、世間の行に非ず、世間を離るるに非ず、諸方に遊ぶに非ず、  
諸方の所攝に非ず、量に非ず無量に非ず、原に非ず無原に非ず、休息に非ず休息無きに非  
ず、凡に非ず聖に非ず、淨に非ず穢に非ず、生に非ず死に非ず、愚に非ず智に非ず、見に  
非ず聞に非ず、世間に依らず、法界の所攝に非ず、點慧に非ず愚蒙に非ず、熾然に非ず寂  
滅に非ず、生死に非ず涅槃に非ず、有に非ず無に非ず。是の如く菩薩摩訶薩も、世間に處  
して菩薩の行を行じ、方便を受持して、世間を觀察するに皆悉く化の如く、世間に著せ  
ず、亦化に著せず、妄りに世間を取せず、亦化を取せず、世間に住せず、世間に滅せず、  
正法に住せず、非法に隨はず。而も衆生を教化することを捨てず、一向に正念して諸賢を  
具足し、諸法を莊嚴せず、亦復諸の莊嚴法を壊せず、一切の法に於て悉く所有無くし  
て、悉く能く一切の佛法を具足す。譬へば化の行に非ず無に非ざるが如く、菩薩摩訶薩も  
亦復是の如く、如化忍の中に安住して、悉く能く諸佛の菩提を具足し、衆生を饒益す。佛  
子、是を菩薩摩訶薩の第九の如化忍と爲す。佛子、若し菩薩摩訶薩此忍を成就せば、一切  
の初に於て依著する所無けん。譬へば化の如く一切の世界に於て依著する所無く、一切  
の佛法に於て虚妄に行ぜず。譬へば化の如く行するも所行無く、諸の顛倒を離る。譬へば  
化の如く非身にして一切の身を示現す。譬へば化の如く色に依らずして一切の色を示現す。

【如虛空忍】世間  
 出世間の諸法は皆  
 虚空の如く、執着  
 す。き色相あるに  
 あらずと了知する  
 忍なり。  
 【電光】現代物理  
 學上の空間なり。  
 佛の法相としては  
 俱舍唯識其所説異  
 るも、要するに事  
 物の存在を礙ふる  
 ことなき無爲法な  
 りしす。

譬へは化の如く實際に著せず、平等満足にして自然無住なり。譬へば化の如く解脫の法に非ずし、悉く前く一切の法處を呈現す。譬へば化の如く虚増無く、性も亦調伏に著す、亦清淨に非ず。譬へば化の如く一切の勢力を離れて、一切の諸の如來の所に往す。譬へば化の如く眞覺すべからず、不生不滅にして、悉く心處を離れ、一切の諸力、金剛の諸山、勝ふること能はず。障なり。

佛子、何等を菩薩摩訶薩の第十の如虚空忍と爲す。佛子、此菩薩摩訶薩は、一切の法界は猶ほ虚空の如しと解す、無性なるを以ての故に。譬へば虚空の如く一切の世界も亦復是の如し、一切の佛刹は層起無しと解するが故に。譬へば虚空の如く一切の諸法も亦復是の如し、無量の法を解するが故に。譬へば虚空の如く一切の佛刹も亦復是の如し、分別無しと解するが故に。譬へば虚空の如く一切の佛刹も亦復是の如し、異ること無しと解するが故に。譬へば虚空の如く一切の説法も亦復是の如し、不可説なりと解するが故に。譬へば虚空の如く一切の佛身も亦復是の如し、無礙なりと解するが故に。譬へば虚空の如く一切の處に過ず、一切の法は虚空の如しと解するが故なり。佛子、是の如く菩薩摩訶薩は、一切の法は悉く虚空の如しと解り、虚空に等しき忍智を得、虚空に等しき身を得、虚空に等しき口を得、虚空に等しき口業を得、虚空に等しき心を得、虚空に等しき心業を得。譬へば虚空の不生不滅なるが如

く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、一切の法身に生ぜず死ぜず譬へば虚空の破壊すべからざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、智慧の諸力は破壊すべからず。譬へば虚空の一切世間の依止する所にして而も所依無きが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、一切諸法の依止する所にして而も所依無し。譬へば虚空の不生不滅にして、悉く一切の生滅の所依と爲るが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、向に非ず成に非ずして、一切衆生をして皆悉く清淨ならしむ。譬へば虚空の方に非ず、非方に非ずして、而も能く諸海の分際を示現するが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、業に非ず業報に非ずして、而も能く一切生死の大海の分際を演説す。譬へば虚空の行に非ず住に非ずして、而も能く種種の威儀を示現するが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、行に非ず住に非ずして、而も能く一切の諸行を分別す。譬へば虚空の色に非ず無色に非ずして、而も能く百千の諸色を示現するが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、世間の色に非ず離世間の色に非ずして、而も能く一切の諸色を示現す。譬へば虚空の久住に非ず、須臾住に非ざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、久しき趣向に非ず、須臾の趣向に非ずして、能く廣く一切の菩薩の住する所の行を演説す。譬へば虚空の淨に非ず穢に非ざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、世間の障覆に非ず、亦清淨に非ず。譬へば虚空の一切世間は皆現前すと謂ふも、實は現前するに非ざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如く、一切の諸法は菩薩の前に現するも、而も菩薩に於ては現前する所無し。譬へば虚空の一切處に住して、而も虚空に分齊無きが如く、菩薩摩訶薩も亦復是

【二分】緣起二分  
中の眞分を言ふ。  
【一量】善根の理  
性に同ずるを以て  
同一量となる意な  
り。

の如く、一切法に住して、而も菩薩の心に令所有ること無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は自己の善根を思惟すること、猶し虚空の如く、善根は具足なり、善根は平等なり、善根は一分なり、善根は寂滅なり、善根は一味なり、善根は一量なり、善根の清淨なること、虚空の色の如く、善根は一切道に趣く。一切法を忘れずして一切の不壞の法を得、一切の刹に遊行して一切の身を具足し、而も諸身に於て悉く所著無く、普く十方に於て永く癡惑を離れ、不可壞の力を具足し成就して、一切の功德の境界を満足し、一切種の法を得、深樂の法を得、虚空に等しき金剛の善根を得、一切諸の妙音聲を出して、一切の世間に、常に法輪を轉じて未だ曾て時を失はず。佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の如虚空忍と爲す。若し菩薩摩訶薩此忍を成就せば、無來の身を得ん、去ること無きを以ての故に、不生の身を得ん、滅せざるを以ての故に、不壞の身を得ん、散壞無きを以ての故に、具足不實の身を得ん、眞實無きを以ての故に、一相の身を得ん、無相なるを以ての故に、無量の身を得ん、佛力無量なるを以ての故に、平等の身を得ん、如の相なるを以ての故に、不可壞の身を得ん、等しく三世を觀するを以ての故に、一切處に至るの身を得ん、淨眼普く照して障礙無きを以ての故に、欲際を離れたる身を得ん、一切の法は合散無きを以ての故に、虚空際の功德義を得ん、無盡なるを以ての故に、窮盡すること無き平等法の慧を得ん、一切の法は性虚空の如く一性なるを以ての故に、無量無礙の微妙なる音聲を得ん、無礙なること虚空の如きを以ての故に、清淨に一切の菩薩の行を具足



我是一切智ある、天人の尊き導師と作るん  
甚深の法を聞き、其心に堪忍するを以ての故に  
彼寂滅の音を聞きて、踊躍して大いに歡喜し  
一心に樂ひて専ら、一切諸佛の法を求む  
調伏の心を修習して、正直に菩提を求め  
諸の善根を長養して、而も法性を壞せず  
寂滅の法を堪忍し、彼音聲に隨順して  
菩薩の行を修習し、音聲の忍に安住す  
轉た勝妙の道を求め、諸の善法を出生し  
精進して退轉せず、究竟して菩提を成ず  
此妙なる音聲を聞き、菩提心清淨にして  
勇健なる善根を得、諸佛をして歡喜せしむ  
譽へば功德の人、大いなる珍寶の藏を獲  
身の宜しき所に隨順して、諸の莊嚴の具を造るが如し  
慧者も亦是の如く、此深法の義を聞きて  
智慧の海を増廣し、隨順して諸法を求む  
決定して法に隨順し、分別に所有無く

【無等の所説】無  
 等とは無等者なり  
 即ち如來なり。如  
 來の説法の義なり  
 【三十三天】(三十三  
 天の譯語なり。六  
 欲天の第二にして  
 喜見城の四方に  
 各八天ありて三十  
 三天となる。

眞如に隨順して、彼眞實の法を得  
 淨自在の心を得、明徹して大いに歡喜し  
 一切の法は、悉く衆緣より起ると解了す  
 平等の法を修習し、性と非性とを分別して  
 佛の法藏を壞せず、正しく一切の法を覺る  
 正直心堅固にして、淨菩提を莊嚴し  
 動ぜざること須彌の如く、一向に佛道を求む  
 深三昧を修習し、精進して懈怠せず  
 無量劫に修行して、未だ曾て退失すること有らず  
 最勝なる甚深の海に、究竟じて彼岸に到り  
 諸法の源底を盡して、衆の恐怖を遠離す  
 等心に諸法を觀すること、無等の所説の如く  
 隨順の忍を成就して、平等の智満足す  
 隨順の門を具足して、佛の所説に従ひ  
 眞實の智に隨順して、法相を分別せず  
 三十三天の中の、彼諸の天子等は  
 一の寶器を共にして食するも、食する所 各同じからず

諸天の種種の食は、十方より來らず  
彼の修する所の業に隨ひて、自然に食は器に在り  
菩薩も亦是の如く、一切の法を觀察するに  
悉く因縁より起り、不生にして亦不滅なり  
若し法生滅せざれば、是法は盡くべからず  
其成敗を了達すれば、清淨にして壞すべからず  
實際は壞すべからず、悉く寂滅にして如如なり  
金剛の體もて饒益し、佛の無礙智を具す  
専ら寂滅の法を念じて、其心未だ曾て  
略明世間の行を離れず、大悲の願を長養す  
諸の神力を具足して、世間に著せず  
甚深の智を成就して、隨順して廣く法を説く  
是を無生忍と名け、諸法の無盡なるを解り  
悉く如如にして、法界に所起無しと了達す  
菩薩此忍に住すれば、一切の十方界に  
現在したまふ無量の佛は、皆悉く彼に記を授けたまふ  
寂滅の法を樂觀して、諸の善根を出生し

一念に三世を達り、調伏して衆生を淨ら  
諸の世間を觀察して、悉く幻の如く

寂滅にして所有無しと解了し、彼に於て染著すること無し

諸の色は心より造られ、示現するも猶し幻の如く

虚妄にして眞實に非ず、一切の有は幻の如し

譬へば工なる幻師の、四衢に衆像を現じ

衆生見て歡喜するも、而も實には所有無きが如し

世間も亦是の如く、一切皆幻の如く

有無等の諸法は、悉く虚妄なりと了知す

一切の衆を度脱して、悉く幻の如しと解了せしめ

善能く平等に知れば、衆生は幻に異ること無し

衆生と諸佛の刹と、三世の一切法と

無量の諸の世間とは、悉く義に幻の如しと了る

譬へば工なる幻師の、種種の形

男女象馬牛、園林華果等を示現するも

幻に染著する所無く、亦任處行ること無し

幻の法は眞實無く、現する所 悉く虚妄なるが如し

佛子も亦是の如く、諸の世間の

有無の一切法を觀して、悉く幻の如しと了す

衆生と諸佛の刹と、種種の業の造る所とは

幻際の如しと覺悟して、彼に於て所著無し

菩薩摩訶薩は、常に寂靜の法を樂ひ

深く眞實地に入り、究竟じて法界に住す

隨順して正法に向ひ、最勝の法は化生にして

善く一切の想は、群生の類を纏網すと傳る

想は熱時の焰の如く、衆生をして顛倒せしむるも

菩薩は善く想を知りて、能く一切の倒を離る

世間は各別異にして、形類悉く同じからず

佛子、善く明達して、想を了れば眞の想に非ず

十方諸の群生は、悉く想の爲に覆はるるも

菩薩は慧眼淨もて、善く世間の想を見る

世間は猶し焰の如く、妄想もて世間を取らも

能く世間の想を斷てば、則ち三種の倒を離る

譬へば熱時の焰の如く、衆生遠きに於て見て

只、想の顛倒なり、心顛倒とは自

心の眞相を從ら  
ず、妄りに外境に  
對して盲列斷を下  
すを言ひ、見顛倒  
とは如幻の外境を  
實有なりとの迷見  
顛倒すを言ひ、眞  
相を了知せず妄想  
執着するを言ふ。

妄想して水なりと謂ふも、其實は眞の水に非ず  
衆生も亦是の如く、虚妄に世間を取るも  
想は熱時の焰の如く、無礙心の境界なり  
一切の想を分別して、無礙の智を成就すれば  
想の群生の類を縛するをば、勇健に能く解脱せしむ  
放逸と慢とを遠離して、世間の想を除滅し  
盡と無盡とを究竟す、無盡とは方便なり  
彼能く世間を解りて、一切の法は夢の如く  
夢の性に方處無し、世間も亦是の如し  
法は虚妄を離ると解れば、寂滅の心に異ること無く  
明かに世間の行を了れば、三世は皆夢の如し  
夢は生死の法に非ず、有に非ず亦無に非ず  
三有は悉く夢の如く、寂滅の心に縛無し  
世は夢性の如しと解りて、世間に依らず  
世間の寂滅なるを觀じて、諸趣に染著せず  
明かに一切の世を見るに、虚妄顛倒ならず  
善く法の夢の如きを解りて、如夢忍を速得す

衆生は夢に於て、種種の異相を見るも  
悉く心より造られ、實には所有無しと知る  
智者も是の如く、衆生は皆夢の如しと見る  
夢の如しと曉了りれば、一切の虚妄を離る  
菩薩は方便もて、一切の法は夢の如しと解り  
夢の性は眞實無く、一に非ず亦異に非ず  
衆生と一切の法と、佛刹と諸の行業とを  
菩薩は悉く明かに、一切皆夢の如しと了る  
一切の垢淨なるに隨ひて、悉く能く實の如く知り  
世の夢の如きを解知して、虚妄の相を取らず  
菩薩の行する所の行と、一切諸の妙願とは  
明かに悉く夢の如しと解り、彼に於て所著無し  
決定して諸法と、及び一切の世間とを解りて  
菩薩は能善く、其性皆夢の如しと知る  
世間の生滅の法と、衆生の去來の相とは  
淨きこと夢の如しと解了し、其性忘失無く  
如夢の行に隨順するも、亦世間を壞せず

諸の威儀は、脩短の如く實無しと了達す  
是を如夢忍と名け、一切の法を解了し  
無礙の智を成就して、一切の衆を度脱す  
菩薩摩訶薩は、廣く無量の行を行じ  
一切の、正覺平等の法を出生し  
種種諸の方便もて、法の眞實相を解り  
諸法に去來無ければ、彼に於て心著すること無し  
一切衆生の類の、無量の諸の音聲を  
菩薩は深く覺悟し、之を悉く響の如しと了る  
菩薩は音聲をば、是れ内外の法に非ずと知り  
諸の音聲は、一切皆響の如しと諦了す  
一切諸の音聲は、皆悉く是れ虛妄なり  
菩薩は實に非ざることを知れば、彼に於て所著無し  
菩薩は悉く、十方一切の佛を覩見たてまつり  
又彼如來の、梵音もて法を演説したまふを聞く  
彼諸の大導師は、廣く修多羅を説き  
菩薩は法音を聞くも、其心に所著無し

聞く所の聲は響の如く、悉く從來する所無く、  
一切の音を分別して、善く無境の法なりと解る  
諸の音聲を分別して、善く一切の法を解り  
聲は是れ聲に非ずと解りて、無量の淨音を出す  
一切の法を覺察するに、皆悉く音聲を離る  
種種の語言の際を、悉く能善く了知す  
菩薩は衆生に於て、上ヒ悉く響の如しと了る  
是の如くして能く深く、一切諸の衆生を解り  
菩薩善く隨順して、語言の道に明達し  
一切世間の、種種諸の音聲を解了す  
音聲の性を了知して、常に寂靜の地を樂ひ  
明かに諸の世間は、一切悉く響の如しと信る  
猶し語言の道の、種種の法を宣明するが如く  
衆生は業ひて、虚妄の音聲に染著す  
彼音聲の相の如く、世間も亦是の如く  
衆生の由も亦然り、眞の種子は明かに  
是の如きの眞實相を覺り、明智の忍力もて

音聲をして微妙ならしめ、世間の寂滅たることを覺る  
彼三世の中に於て、語言の道に了達し

虚妄の聲を取らざれば、其心に所著無し

寂靜の定意は世間の爲に、一向に専ら佛の菩提を求め

未だ曾て虚妄に世間を取らず、心常に寂滅の法を欣樂す

世間を觀察して餘有ること無く、皆悉く寂滅にして自性無く

専ら菩提を求めて衆生の爲にし、智力と大慈悲とを具足す

一切世間の生を受けず、亦世間を解脱せず

一切世間に所依無く、亦復世間に依ることを離れず

衆生と諸法の性とを解知し、彼法性に於て染著せず

諸の衆生に於て所依無く、清淨に解脱して縛無し

一切の趣に於て實性を知り、世間の生死流轉の法をば

菩薩は法に二有ること無しと解り、不二の法に於ても所著無し

其心 諸の世間に住せず、又亦世間を離れず

行する所は世間の外に在らずして、諸法の眞實相を了知す

譬へば水中の電光の色の如く、彼色は内にも非ず亦外にも非ず

菩薩は衆生を餽益せんが故に、世間に眞實無しと演說す

衆生に縛も無く解脫も無く、一切の世間は不可説なり  
世間は内にも非ず亦外にも非ず、彼水中の電光の像の如し  
是の如く清淨なる離垢の心は、甚深微妙の行に隨順して  
智慧を具足して法の燈明となり、諸願を成滿して退轉せず  
智慧成就して量るべからず、常に能く一切の衆を饒益し  
衆生を無畏の法に安立して、一切諸の障礙を除滅せしむ  
甚深の法を修習して、一切の衆を饒益す  
此忍は妙智を増し、菩薩の行を具足せしむ  
深く寂滅の法に入りて、悉く化の如しと諦了し  
無量の行を示現して、而も實には所行無し  
勝地に菩提を修し、隨順して化の如く行じ  
化の如く常に寂滅なり、菩薩の行も亦然り  
衆生の類と、及び無量の行業とは  
平等にして、悉く化の如しと了知す、解脫も亦是の如し  
明かに三世の佛は、一切悉く化の如しと解り  
無量なる木の行願にて、諸の導師を化成す  
大慈悲彌廣くして、化の衆生を清淨にす

清淨は即ち是れ化なり、化の力に持せられて應現す  
世間は悉く虚妄にして、菩薩は化の如しと解る  
化性なる諸の世間を、種種の業もて莊嚴す  
變化藏もて嚴飾して、菩薩の行を究竟じ  
世の諸の行業に隨ひて、種種雜にして量無し  
化は是れ虚妄の法なり、化を出生するも虚妄なり  
菩薩の行する所の法は、皆悉く虚妄を離る  
化の智海決定し、化の印は世間を印す  
化は生に非ず滅に非ず、智慧も亦是の如し  
第十の忍明觀は、清淨なること虚空の如し  
虚空と衆生法とは、等しく觀するに別異無し  
智の滿てること虚空の如くにして、諸の障礙を除滅す  
虚空の性に雜無く、世間も亦是の如し  
空忍の力を成就すれば、空の如く盡すべからず  
境界も虚空の如く、虚妄の相を取らず  
虚空に自性無く、虚空は斷すべからず  
虚空に種種無し、智力も亦是の如し

譬へば虚空の性の、初中後有ること無く  
虚空に異性無きが如く、智慧も亦是の如し  
是の如く正しく法を觀するに、皆悉く虚空の如く  
生も無く亦滅も無く、平等に諸法を觀す  
虚空の法に安住して、廣く十方の爲に  
虚空の方便忍を説き、一切の魔を調伏す  
虚空に自性無く、世間も亦是の如し  
有性無性の法は、平等なること虚空の如し  
一方便もて莊嚴して、世間の虚空なることを觀し  
悉く三世の法も、猶し虚空の如しと知る  
菩薩の智慧の身は、音聲虚空の如く  
身性も亦虚空にして、虚空智に安住す  
是を十種の忍と名く、佛子、具足して行ずれば  
心忍力に安住し、廣く十方の爲に説く  
眞の佛子は善く學び、越えて智慧りと  
法力と定智力とを成じ、隨順して菩提を修す  
深く此忍門に入れば、無礙の智を成就して

一切の業を伏し、無上の法體を證す

無量の法に安住して、一切能く知る莫く

調御師の智海に、菩薩は深底を盡す

謙下して菩提を行すれば、其法忍と

妙法清淨の意とを得、悉く一切の業を滯す

一切衆生の類と、諸仁の利の微塵とは

悉く其徳を尊すべくとも、菩薩の徳は知り難し

若し眞の種子有りて、異十種の忍を成せば

一切諸の衆生は、能く境界を知ること無けん

# 大方廣佛華嚴經 卷第二十九

東晉天竺三藏佛跋闍樹羅譯

## 心王菩薩問阿僧祇品第二十五

【阿僧祇品】 數量の甚深不可思議を詳説し、行徳校量の分齊を示して事の微妙を顯し、次で佛菩薩の實徳其數量を超越せることを教ふ。

爾時、心王菩薩、佛に白して言さく、世尊、諸佛阿僧祇、不可量、無分齊、無周遍、不可數、不可稱量、不可思議、不可說、不可說、不可說なるあり。世尊云何ぞ阿僧祇、乃至不可說不可說なるや。佛、心王菩薩に告げて言はく、善哉、善哉、善男子。衆生を饒益せんが故に、乃ち能く此如來應供正覺佛尊。諸佛の甚深妙法を問へり。善男子、汝今諦かに聽け、我當に之を説くべし。爾時、心王菩薩、佛に白して言さく、世尊、唯然り、善く聽きたてまつらん。

【拘梨】 二三億の數名なり。  
【轉婆邏】 三三三(三)譯説に轉婆邏と書き、拘梨と名なり。  
【阿婆邏】 阿婆邏の數名なり。

佛、心王菩薩に告げて言はく、一由千の百千を一拘梨と名け。拘梨の拘梨を一不變と名け。不變の不變を一由他と名け。那由他の那由他を一轉婆邏と名け。轉婆邏の轉婆邏を一件と名け。件の件を一來と名け。來の來を一勝と名け。勝の勝を一復次と名け。復次の復次を一阿婆邏と名け。阿婆邏の阿婆邏を一得勝と名け。得勝の得勝を一分界と名け。分界の分界を一充滿と名け。充滿の充滿を一量と名け。量の量を一解と名け。解の解を一此

【毘遮妬】(Vicia) 豆の音聲。印度の穀名なり。  
 【梨婆】(Nirala) 藜藿に涅槃羅と書く。同上。  
 【阿梨婆】(Hart) 新羅に訶理婆と書く。同上。  
 【阿梨婆】(Hart) 新羅に訶理婆と書く。同上。  
 【摩樓陀】(Mahat) 摩魯陀と書く。同上。  
 【摩樓陀】(Maham) 摩魯陀と書く。同上。  
 【摩多羅】(Amudr) 阿摩怛羅と書く。同上。  
 【阿羅】(Ela) 箭羅と書く。同上。

解と名け。此解の此解を一離欲と名け。離欲の離欲を一捨と名け。捨の捨を一聚と名け。聚の聚を一通通と名け。通の通を一頻申と名け。頻申の頻申を一調と名け。調の調を一衆流と名け。衆流の衆流を一 outcomes と名け。 outcomes の outcomes を一分と名け。分の分を一分別と名け。分別の分別を一稱と名け。稱の稱を一持と名け。持の持を一不顛倒と名け。不顛倒の不顛倒を一不幡と名け。不幡の不幡を一正と名け。正の正を一懸と名け。懸の懸を一第一と名け。第一の第一を一懸と名け。懸の懸を一毘遮妬と名け。毘遮妬の毘遮妬を一極高と名け。極高の極高を一妙と名け。妙の妙を一羅婆と名け。羅婆の羅婆を一阿梨婆と名け。阿梨婆の阿梨婆を一解脫と名け。解脫の解脫を一黃と名け。黃の黃を一阿梨那と名け。阿梨那の阿梨那を一因と名け。因の因を一賢覺と名け。賢覺の賢覺を一明相と名け。明相の明相を一摩樓陀と名け。摩樓陀の摩樓陀を一忍と名け。忍の忍を一枝と名け。枝の枝を一摩樓陀と名け。摩樓陀の摩樓陀を一等と名け。等の等を一翻疑と名け。翻疑の翻疑を一種と名け。種の種を一不放逸と名け。不放逸の不放逸を一摩多羅と名け。摩多羅の摩多羅を一動と名け。動の動を一到と名け。到の到を一説と名け。説の説を白と名け。白の白を一了別と名け。了別の了別を一究竟と名け。究竟の究竟を一清涼と名け。清涼の清涼を一阿羅と名け。阿羅の阿羅を一潮と名け。潮の潮を油と名け。油の油を一祇邏と名け。祇邏の祇邏を一味と名け。味の味を一泥邏と名け。泥邏の泥邏を一戲と名け。戲の戲を一斯羅と名け。斯羅の斯羅を一聚法と名け。聚法の聚法を一彌羅と名け。彌羅の彌羅を一堅固と名け。堅



【言説すべからざる以下、本品の重なり。總じて百二十三偈より成り、初七偈は能數の法、後は所數の德を擧ぐ。

可量轉を不可説と名け、不可説の不可説を不可説轉と名け、不可説轉の不可説轉を不可説轉轉と名く。

爾時、世尊、心王菩薩の爲に偈を以て頌す曰はく、

言説すべからざる不可説は、一切に充滿して不可説なり

言説すべからざる諸劫の中に、不可説と説くとも盡すべからず

言説すべからざる諸佛の刹を、皆悉盡く末として微塵と爲し

悉く一一の微塵の中に於て、一切の不可説を演説す

悉く能善く一念の中に於て、不可説の諸の世界を説き

稱説すべからざる諸劫の中に、念念に次第して演説す

不可説の劫は猶盡すべくとも、而も不可説は盡すべからず

悉く一一の微塵の中に於て、分別して不可説を演説す

不可説の劫は猶盡すべくとも、而も不可説は盡すべからず

言説すべからざる微塵の中に、悉く不可説の衆生有り

皆共に普賢の德を讚歎すとも、猶尙窮盡せしむること能はず

設使一微の毛端の處に、不可説の諸の普賢有りて

彼諸の一切の普賢等、不可説を説くとも盡すこと能はず

一微細の毛端の處の如く、十方の世界も亦是の如し

【彼一一の毛端】以下、所數の徳を明す中、初に果徳の無礙と因位の善窮を明せり。

【名身】名は音聲の屈曲差別に依り事物の體を詮表するを言ひ、身とは積聚の義なり。數名の集むるを名身と言ふ。

彼一一の毛端の處に於て、不可説の諸佛の刹を置き

毛端は能く虚空を量り盡すとも、而も佛刹を説くことは盡すべからず

彼一一の毛道の中に於て、種種無量の諸佛の刹は

同類なる者有るも不可説、亦異類有るも不可説なり

彼一一の毛道の中に於て、不可説の淨き佛刹有り

不可説の莊嚴の具を以て、彼彼の諸佛の刹を莊嚴す

彼一一の毛道の中に於て、名身を演出すること不可説

彼一一の毛の名身に於て、廣く無量の諸佛の名を宣ぶ

一一の如來の自身の中に、變化せる毛孔は不可説

彼一一の毛孔の中に於て、異色を出生すること不可説なり

彼一一の異色の中に於て、妙光明を放つこと不可説

彼一一の光明の中に於て、寶蓮華を出生すること不可説なり

彼一一の寶蓮華に於て、各寶華有ること不可説

彼一一の寶華葉に於て、微妙の色有ること不可説なり

彼一一の如色の中に於て、蓮華を出生すること不可説

彼一一の蓮華の中に於て、各光明を放つこと不可説なり

彼一一の光明の中に於て、淨月を出生すること不可説

彼一一の諸月の中に於て、復淨月を出すことも不可説なり  
 彼一一の淨月の中に於て、淨き光明を出すこと不可説  
 彼一一の光明の中に於て、不可説の明淨の目を出し  
 彼一一の諸日の中に於て、不可説の淨妙の色を出し  
 彼一一の妙色の中に於て、不可説の淨き光明を出し  
 彼淨妙の光明の中に於て、不可説の獅子座を出し  
 言説すべからざる莊嚴の具は、不可説の淨き光明を出し  
 彼一一の光明の中に於て、不可説の異妙の色を出し  
 彼一一の妙色の中に於て、不可説の明淨の寶を出し  
 彼一一の明淨の寶に於て、不可説不可説の  
 金剛の寶藏を出して須彌の如く、清淨に具足して莊嚴せり  
 彼一寶の須彌の中に於て、不可説不可説の  
 微妙にして殊特なる諸佛の刹有り、清淨に具足して莊嚴せり  
 此一の寶の須彌由の如く、一切の須彌も亦是の如し  
 悉く無量の不可説有り、具足して諸佛の刹を清淨にす  
 是不可説の不可説は、皆悉く分別するに不可説なり  
 不可言説轉を攝取して、光明を出生すること不可説なり



一切の衆生の類を清淨にし、一切の諸衆生を度脱す  
 莊嚴を莊嚴すること不可説、神力を成滿すること不可説  
 自在を清淨にすること不可説、衆生に應現することも不可説なり  
 神力の自在なること不可説、智慧の境界も不可説にして  
 稱説すべからざる神力に持せられ、普く世間を轉じて清淨ならしむ  
 不可説の淨き方便の法もて、修多羅を説くこと不可説  
 彼一一の修多羅に於て、諸佛の法を擲することも不可説なり  
 彼一一の淨法の中に於て、復淨法を説くこと不可説なり  
 彼一一の諸法の中に於て、不可説の決定法を説く  
 彼一一の決定の中に於て、不可説の衆生依を説き  
 稱説すべからざる種種の法、稱説すべからざる種種の心  
 稱説すべからざる非類の法、稱説すべからざる非類の心  
 稱説すべからざる非類の根、稱説すべからざる非類の許あり  
 彼悉く能く念念の中に於て、衆生を調伏すること不可説  
 稱説すべからざる自在の力は、衆生に應現すること不可説なり  
 彼不可説の變化の時、或は同類、不同類なり  
 菩薩は皆悉く分別して知り、此の明算の者も數ふること能はず

【菩薩は一毛端の處】以下、因位の菩薩を説くに十段あり。其第一に因陀羅刹土を頌す。

【一毛端の深廣なる】

菩薩は一毛端の處に於て、佛刹を安置すること不可説なり。其は微細處は廣狹なる有り、淨穢無量にして不可説なり。彼一の佛刹の中に於て、復佛刹有りて不可説なり。

菩薩は皆悉く分別して知る、其の如きの佛刹は不可説なり。

一毛端の處に無量の刹あり、而も其中に於て迫進せず。微小の毛端も亦大ならず、悉く無量の諸佛の刹を容れ、佛刹をして雜亂有らしめず、形相本が如くにして異なること無し。

佛刹は無量の刹有り、一切の佛刹も亦是の如し。

一毛端の處に悉く、虚空に等しき如き無量の刹を容受し、佛刹の形相も不可説にして、一毛端の處各殊別なり。

一毫の毛端の中に入りて、次第に悉く入ること不可説。

毛道の攝取も不可説、毛道も亦究竟して滿つること無し。

次第に劫に入ることも不可説、常に漸く攝取すること不可説。

種種の方便不可説、衆生を度脱することも不可説なり。

是方便を具足し攝取し、境界無量にして不可説なり。

菩薩は悉く不可説に入る、是を深入不可説と名く。

佛刹の深廣なること不可説、漸く諸方に無量なる不可説。

【以下、第二に三業勤勇行を明す。】

【一切の衆生も以下、四偈半は第三に塵穢攝生の行を明す。】

勇猛に轉進すること不可説、具足自在なること不可説なり  
彼諸の大願不可説、所得の功德不可説  
彼諸の境界不可説、能く究竟して度すこと不可説なり  
菩薩の身業不可説、口業の清淨なること不可説  
意業の清淨なること不可説、清淨の解脫も不可説なり  
清淨の智慧不可説、微妙なる奇特不可説  
方便して深く入ること不可説、疑惑を除滅すること不可説なり  
勇猛精進も不可説、深く正法に入ることも不可説  
甚深の三昧も不可説、彼岸を究竟することも不可説なり  
一切の衆生も不可説、一切の佛刹も不可説  
諸の衆生身も不可説、衆生の希望も不可説なり  
諸の業報も不可説、衆生の欲を知ること不可説  
衆生の性を知ること不可説、衆生を分別することも不可説なり  
彼應化の時も不可説、所出の處に隨ふことも不可説  
方便道に隨ふことも不可説、彼諸の出づる者も不可説なり  
無上の智慧も不可説、彼方便道も不可説  
彼諸の所説も不可説、一切の轉時も不可説なり

【應現の色像不可説】以下、五度は第四に遊行供養を明す

【信心を成就すること】以上、九偈は信心に就く十度修行を明す。

是の如く大總悲を成辦して、一切諸の世間を饒益す

應現の色像不可説、諸の供養に遊ぶこと不可説

菩薩の智慧は甚大明淨にして、十方の佛を觀ること不可説なり

問ふ所の正法も不可説、諸佛の號名も不可説

應現の色像も不可説、諸方に遊行することも不可説なり

佛の所に往詣することも不可説、自在を示現することも不可説

不可説の諸の色像を以て、不可説の無量の所に詣て

不可説の供養の具を以て、不可説の諸の如來に供へ

不可説の清淨寶、不可説の衆の寶なり

不可説の妙華鬘もて、不可説の所の最勝に供へたてまつる

彼深き信心も不可説、清淨の佛體も不可説

正直の希望も不可説にして、一切の佛を恭敬し供養したてまつる

信心を成就すること不可説なり、過去の信心も不可説

布施を修行することも不可説、内外悉く捨することも不可説なり

禁戒の清淨なることも不可説、信心の清淨なることも不可説

長壽を成就することも不可説、妙法愛を生ずることも不可説なり

一切の忍を具足することも不可説、深く無生を解することも不可説

【彼淨法輪も不可説】以下、五は第六に淨法達利の行を明す。

寂滅を成就することも不可説、寂滅の地に住することも不可説、

持進を具足することも不可説、過去の心も不可説、

不退轉の心も不可説、忍辱の心も不可説なり

一切の禪觀も不可説、諸法を觀察することも不可説、

寂靜の定意も不可説、諸禪を了知することも不可説なり

波羅蜜の慧も不可説、三昧を成就することも不可説

決定して法を解することも不可説、諸佛を究竟することも不可説なり

菩薩の行門も不可説、諸願を具足することも不可説

智慧の境界も不可説、清淨の法門も不可説なり

彼諸の法力も不可説、清淨に法に住することも不可説

菩薩の正念も不可説、彼諸の法界も不可説なり

智慧を修行することも不可説、善く智慧を學ぶことも不可説

彼智慧の身も不可説、智慧を住持することも不可説なり

彼淨法輪も不可説、彼法の智慧も不可説

彼妙法も不可説、彼妙法雨も不可説なり

彼諸の神力も不可説、方便の法を解することも不可説

彼悉く能く念念の中に於て、深法界を解することも不可説なり

【深く衆生に入る  
こと】以下、五偈  
の行を明す。

一向を成眞することも不可説、念念の中に於て過く

諸佛の刹土に遊行することも不可説、詣る所の諸佛も不可説なり

佛刹を分別することも不可説、種種の莊嚴も不可説

莊嚴の清淨なることも不可説、微妙の淨色も不可説なり

種種の雜色も不可説、種種の莊嚴具も不可説

清淨の佛刹も不可説、垢穢の佛刹も不可説なり

深く衆生に入ることも不可説、衆生の諸界も不可説

彼諸の業報も不可説、衆生の行ずる所も不可説なり

種種の諸根も不可説、衆生の虚妄も不可説

衆生の諸性も不可説、衆生の欲樂も不可説なり

衆生の威儀も不可説、衆生の煩惱も不可説

衆生の清淨も不可説、衆生を代すること不可説なり

菩薩の神力も不可説、變化する所の身も不可説

諸行に隨順することも不可説、衆生を度脱することも不可説なり

示現の自在なることも不可説、光明を放つことも不可説

光明の妙色も不可説、衆生を淨ならしむることも不可説なり

彼一一の毛端の中に於て、光明刹を放つことも不可説

【中】以下、七船半は第八に三業淨淨の行を明す。

【彼諸の菩薩も不可説】以下、八偈半は第九に願智自在の行を明す。

光明網の色も不可説、普く佛刹を照すことも不可説なり  
勇猛精進も不可説、無畏を成就することも不可説  
寂滅の三昧も不可説、世間を調伏することも不可説なり

清淨の身業も不可説、清淨の口業も不可説  
意業の無量なることも不可説、清淨の勝行も不可説なり  
智寶を成就することも不可説、深く法界に入ることも不可説

首の陀羅尼も不可説、菩薩の善く學ぶことも不可説なり  
首髻の清淨なることも不可説、智慧の音を知ること不可説  
眞實の正念も不可説、衆生の語を持つことも不可説なり

菩薩の行する所も不可説、正覺の清淨なることも不可説  
衆生の恐怖を離るることも不可説、世間を調伏することも不可説なり  
稱説すべからざる眞の佛子は、彼清淨の行も不可説

佛子を讚歎することも不可説、究竟盡を欲することも不可説なり  
不可稱説の導師の、菩薩を讚歎することも不可説なり  
彼諸の菩薩も不可説、清淨の功德も不可説

彼諸の分齊も不可説、彼所住に隨ふことも不可説なり  
智慧に隨住することも不可説、不可説の劫は説くこと能はず

諸佛を常見すること不可説、智慧を長進すること不可説なり

永く正法に度ること不可説、離礙の正法も不可説

正しく三世を覆すること不可説、三世の智慧も不可説なり

彼前量する所も不可説、智慧を出生すること不可説

菩薩の勝行も不可説、種種の所願も不可説なり

清淨の所願も不可説、菩提を具足することも不可説

諸佛の菩提も不可説、眞智慧を起すことも不可説なり

眞實を分別すること不可説、一切法を断ること不可説

清淨の佛刹も不可説、行する所の諸方も不可説なり

彼修習する所も不可説、一念の間等も不可説

廣く正法を説くことも不可説、諸佛の自在も不可説なり

踊躍歡喜することも不可説、世間に示現することも不可説

妙法輪を轉ずること不可説、衆の怖畏を離るることも不可説なり

説く所の正法も不可説、衆生を度脱することも不可説なり

稱説すべからざる一切の時に、菩薩の諸の功徳を讚歎せんに

彼諸の大劫は猶盡すべくとも、功徳も盡すべからず

不可稱説の諸の如來に、各無量の清淨根有りて

不可稱説の諸の如來に、各無量の清淨根有りて

如來以下、五劫は佛徳の深廣なることを辨ず。

【長舌】 佛の三

【若は一小微塵】 以下、八偈は佛の果徳に於て別して依正二報の果を頌す。

不可説の劫に常に讃歎すとも、如來の功徳は猶ほきす  
 一切十方の諸の衆生は、皆悉く一時に正覺を成じ  
 彼諸の正覺の一一に、不可説の淨妙の身有り  
 彼淨妙の身の一一に、不可説の如來の頭有り  
 彼如來の頭の一一に、不可説の廣長舌有り  
 彼廣長舌の一一に、無量の清淨の妙音聲を扇し  
 彼一一の妙音聲を以て、不可説の劫に佛を讚歎したる事  
 不可稱説の一切の劫に、佛の功徳を宣揚し讃歎したる事  
 不可説の劫は猶ほ盡すべくとも、佛の功徳を敬することは猶ほ盡すべし  
 若は一小微塵の中に於ても、諸の佛有りて不可説なり  
 彼一一の佛利の中に於て、各賢首有りて不可説なり  
 彼の此修習も不可説、一念の開悟も不可説  
 賢首如來の佛利の中に、復佛利有りて不可説なり  
 一切の法界餘り有ること無く、其中の有ゆる所の微塵は  
 彼一一の微塵の中に於て、佛利の成敗すること不可説なり  
 彼一一の微塵の中に於て、佛利を安置すること不可説  
 復刹海を置くことも不可説、方類を分別することも不可説なり

【不可說不可說】

彼一一の刹利の中に於て、不可稱量の諸の如來あり  
 彼諸の如來の所の壽命は、不可稱量の諸の大劫なり  
 諸の行する所も不可說、彼等の正法も不可說  
 威神の道力も不可說、障礙を離れたる智も不可說なり  
 微妙の智慧も不可說、境界の甚深なることも不可說  
 十力の功にも不可說、佛の普賢を尊りたまふことも不可說なり  
 清淨に深く入ることも不可說、清淨の法界も不可說  
 彼智慧の威も不可說、功を分別することも不可說なり  
 菩薩は究竟じて正しく隨順し、廻向を具足すること不可說なり  
 無量の諸の廻向を分別して、一切諸の導師に廻向す  
 不可稱量の諸の大劫に、一心に諸の味を正受し  
 不可說の諸佛の所に於て、行する所清淨にして不可說なり  
 不可說の無礙の心を得て、悉く遍く十方界に遊行し  
 行する所の業も不可說、神力の摩訶も不可說なり  
 佛刹を分別することも不可說、諸佛の現前することも不可說  
 勇猛に精進することも不可說、智慧を究竟することも不可說なり  
 未だ曾て一座の處を離れず、而も能く遍く十方界に遊行す

不可稱説の諸の大劫に、遍く十方の諸佛の刹に遊ぶ  
智慧の方便も不可説、如實の智慧も不可説

淨智慧を轉ずることも不可説、念念に示現することも不可説なり

諸の一一の語言の中に於て、佛の智慧を解ることも不可説なり

或は一時に於て菩提を覺り、或は種種の時に菩提を覺り

諸の毛竊に入ること不可説、諸の微細に入ること不可説なり

殊特の勝れたる性も不可説、諸の如來を見たてまつることも不可説

一一の方便も不可説にして、隨順して善く諸佛の性に入る

諸の佛刹の性も不可説にして、悉く能く隨順して菩提に入る

不壞の法界も不可説、佛も衆生も利も不可説なり

三世の所攝も不可説、菩薩の究竟も不可説なり

壽命品第二十六

【壽命品】第六會の第五の説法に於て、佛の壽命は機に隨ひ長短自在なることを説き、別して佛徳を顯表するなり。

爾時、心王菩薩摩訶薩、諸の菩薩に告げて言はく、「佛子、此娑婆世界の、釋迦牟尼佛の刹の如きは、安樂世界の阿彌陀佛の刹に於ては、一日一夜と爲す。安樂世界の一劫は、娑羅轉世界の、金剛如來の佛刹に於ては、一日一夜と爲す。娑羅轉世界の一劫は、

不退轉菩薩輪世界の、善樂光明清淨聞繫佛の刹に於ては一日一夜と爲す、不退轉菩薩輪世界の一劫は、離垢世界の法輪佛の刹に於ては、一日一夜と爲す、離垢世界の一劫は、善燈世界の師子刹の刹に於ては、一日一夜と爲す、善燈世界の一劫は、善光明世界の盧舍那佛の刹に於ては、一日一夜と爲す、善光明世界の一劫は、超出世界の法光明清淨聞繫蓮華佛の刹に於ては一日一夜と爲す、超出世界の一劫は莊嚴慧世界の一切明光佛の刹に於ては、一日一夜と爲す、莊嚴慧世界の一劫は、鏡光明世界の覺月佛の刹に於ては、一日一夜と爲す、佛子、是の如く次第して、乃至百萬阿僧祇の世界あり、最後の世界の一劫は、勝蓮華世界の、賢首佛の刹に於ては一日一夜と爲す、普賢菩薩等の、諸の大菩薩は其中に充滿せり。

菩薩住處品第二十七

【住處品】菩薩の住處に約して、菩薩の化用、應機接物の大用法界に周遍し、隨て所住に應なきことを明

爾時、心王菩薩摩訶薩、衆生の菩薩に告げて言はく、佛子、東方に菩薩の住處有り、仙人觀山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、金剛勝と名け、其中に於て止まり、三百の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く、南方に菩薩の住處有り、尊嚴開山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、法慧と名け、五百の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。西方に菩薩の住處有り、金剛

【俱怛】 踊出と譯す。海鳥山の名。  
 【莫無錫】 (Dhar mudgata) 法勇と譯す。史實の支那僧にあらず。  
 【毘舍離】 (Vaisali) 廣嚴城と譯し、摩訶陀國の北方にあり。  
 【巴連弗邑】 (Pataliputra) 華子城と譯し、恆河の南岸パトナノ地を指す。  
 【摩倫羅】 (Malin) 孔雀又は密蓋等と譯し、中印度の地名。

焰山と名け、過去の諸の菩薩常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、無畏獅子行と名け、三百の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。北方に菩薩の住處有り、香聚山と名け、過去の諸の菩薩常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、香象と名け、三千の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。東北方に菩薩の住處有り、清涼山と名け、過去の諸の菩薩常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、文殊師利と名け、一萬の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。東南方に菩薩の住處有り、楞嚴岡と名け、過去の諸の菩薩常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、天冠と名け、一千の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。西南方に菩薩の住處有り、樹提光明山と名け、過去の諸の菩薩常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、賢首と名け、三千の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。西北方に菩薩の住處有り、香風山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、香光明と名け、五千の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。四大海の中に菩薩の住處有り、俱怛と名け、過去の諸の菩薩は、常に中に於て住せり。彼に現に菩薩有り、曇無竭と名け、萬二千の菩薩の眷屬有りて、常に爲に法を説く。海中に菩薩の住處有り、功德莊嚴窟と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。毘舍離城の南に菩薩の住處有り、善住と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。巴連弗邑に菩薩の住處有り、金燈僧伽藍と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。摩倫羅國に菩薩の住處有り、長養功德と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。拘陳那耶國に菩薩の

【拘婁那耶】 仙人の名に出てたる國名なり。

【舍摩那院】 (Am-cilinda) 解脱と譯し、龍王の名より出づ。

【甘密國】 (Kann-look) 北印度の古代の大國なり。

【震旦】 震旦とも書く。印度に於ける支那の呼稱なり。

【毘羅】 譯に疏羅國の名。擧ぐ。

【閻提】 (Yam-ti) 今の閻提羅羅地方の國名。

【鬱提尸山】 (Ude-sin) 鬱提尸と譯す。

【難提拔提那】 歡喜增長と譯し、南印度に在り。

【佛羅守呵】 (Flora-vira) 上呵と譯す。

【羅浮那摩】 (Amra) 無垢と譯し、葉の名より出づ。

【乾陀羅】 (Gand-hara) 香國と譯し、史上の月氏國を指す。

住處有り、法座と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。清淨なる彼岸の國に菩薩の住處有り、牟尼那院功德と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。風境の内に菩薩の住處有り、無量龍王の所造と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。

甘密國に菩薩の住處有り、最上慈と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。甘密國の國土に菩薩の住處有り、那羅延山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。

震旦の國土に菩薩の住處有り、牛頭山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。震旦の國土に菩薩の住處有り、鬱提尸山と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。

難提拔提那城に菩薩の住處有り、樓羅浮呵と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。難提拔提那城の國土に菩薩の住處有り、正治邪曲と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。

佛羅守呵に菩薩の住處有り、寂靜寶と名け、過去の諸の菩薩は常に中に於て住せり。

羅浮那摩に菩薩の住處有り、

乾陀羅國に菩薩の住處有り、

佛羅守呵に菩薩の住處有り、

羅浮那摩に菩薩の住處有り、

乾陀羅國に菩薩の住處有り、

佛羅守呵に菩薩の住處有り、

羅浮那摩に菩薩の住處有り、

乾陀羅國に菩薩の住處有り、

佛羅守呵に菩薩の住處有り、

羅浮那摩に菩薩の住處有り、

乾陀羅國に菩薩の住處有り、

佛羅守呵に菩薩の住處有り、

大方廣佛華嚴經 卷第二十

東普天竺三藏佛跋闍耶譯

佛不思議法品第二十八之一

【不思議法品】第六會第七の說法にして、上來六品は差別の妙因を説けるに對し、以下三品は修生の果徳を明す。而して此品は果徳の發用不可思議なる所以を説く。

爾時、諸の菩薩の大會の中に、諸の菩薩有り。是の如きの念を作さく、「諸佛の初王は不可思議なり。諸佛の淨願は不可思議なり。諸佛の種姓は不可思議なり。諸佛の出世は不可思議なり。諸佛の法身は不可思議なり。諸佛の音聲は不可思議なり。諸佛の智慧は不可思議なり。諸佛の神力自在なること不可思議なり。諸佛の無礙にして住すること不可思議なり。諸佛の智慧は不可思議なり。」

爾時、世尊、諸の菩薩の心の所念を知りたまひて、即ち青蓮華菩薩に佛の神力と、佛の智と、佛の徳と、佛の功徳と、佛の無畏とを與へたまひて、其身に充滿せしめ、一切諸佛の法界を究竟せしめ、佛の神力の境界と、無障礙の行と、分別一切如來種姓とを與へ、數ふべからざる諸佛の方便を與へたまへり。

爾時、青蓮華菩薩摩訶薩、即ち甚深の無礙法界の一切無礙の法に入りて、菩薩の行を作し、普賢菩薩の所願を成就し、一切の佛に隨順し、大莊嚴を以て自ら莊嚴し、大悲もて普

一切の衆生を觀して、清淨ならしめんと欲し、一念の中に於て如來の無量の智慧を出  
生し、如來の無盡智門を成就して一切諸の陀羅尼を成就し、諸辯の光明は普く一切を  
照せり。

爾時、青蓮華菩薩、佛の神力を受けて蓮華藏菩薩に告げて言はく、佛子、諸佛に無量無  
數の清淨なる妙住有り。諸佛は無量の自在に安住したまふ。諸佛は一切の事に於て未だ  
嘗て時を失はず。一切の諸佛は悉く皆平等に淨法輪を轉じ、諸佛の四辯の辯は窮盡する  
こと無く。一切の佛法は思議すべからず。一切の諸佛の清淨なる音聲は、至らざる所無  
く一切の諸佛は悉く能く無量の法界を分別したまひ、一切の諸佛の光明は普く照し、  
一切の諸佛の尸體は、皆甚深の法界に入。

【一切諸佛の色身  
以上、佛の六種の  
殊勝及び依正を明  
して、勝徳の體を  
説く。

佛子、一切の諸佛に十種の法界無量無邊有り。何等をか十と爲す。一切諸佛の色身は清  
淨にして、無量無邊に世間を超出す。一切諸佛の無礙の眼は、無量無邊にして、清淨に  
平等に一切の法を覺る。一切諸佛の無礙の耳は、無量無邊にして、一切衆生の音聲を分別  
す。一切諸佛の鼻は無量無邊に入り、清淨に一切の國の自在を突發して、彼岸に到る。  
一切諸佛の廣長舌の辯は、無量無邊にして、妙音聲を出し、普く法界に聞ゆ。一切諸佛  
の身業は、無量無邊にして、衆生に隨順して如來身を現す。一切諸佛の意は、無量無邊  
にして、三世に礙ふること無く、法身清淨にして嚴瑛すべからず。一切諸佛の無礙の腕  
の法門は無量無邊にして、無盡の神力自在を示現す。一切諸佛は一切の世界に於て、佛刹

【一念の中に於て】以下、佛の出生は諸刹普遍にして、隨機得生なり。而して處に依り用を起すことを明す。

【一切の諸佛は等正覺】以下、業用機に應じ、教化其時を失ふことなき勝徳を説く。

を現すること無量無邊にして、以て衆生に於て、一切の諸佛は無量無邊にして、諸の善行、及び諸の勝願と自在の神力とを、皆悉く満足し、悉く能く諸佛の正法を學悟す。佛子、是を一切諸佛の十種の法界無量無邊と爲す。

佛子、一切の諸佛は一念の中に於て、悉く能く十の無盡智を出生したまふ。何等をか十と爲す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、兜率天より命終することを現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、菩薩の出生を現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、善薩の出家を現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、道場に往詣し、菩提樹下に等正覺を成ずることを現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、淨法輪を轉ずることを示現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、應に隨ひて一切の衆生を化導し、悉く解脱せしむることを現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に於て、莊嚴身を現じ、衆生に隨應す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、種種に莊嚴し、無數に莊嚴せる如來の自在なる一切の智藏を現す。一念の中に於て、悉く一切の世界に、衆生を清淨にすることを現す。一念の中に於て、一切の世界に遍じて、悉く三世の一切諸佛を現す。一念の中に於て、種種の諸根、精進、欲性の爲の故に、三世の諸佛の種姓、等正覺を成じ、衆生を開道することを顯現す。佛子、是を一切諸佛、一念の中に於て十種の智を生ずと爲す。佛子、一切の諸佛に十種の未曾失時有り、何等をか十と爲す。一切の諸佛は等正覺を成ずるに、未だ曾て時を失はず。一切の諸佛の善根の業報は、未だ曾て時を失はず。一切の

諸佛は菩薩に記を授くるに、未だ會て時を失はず。一切の諸佛は衆生に隨應して、神力を  
 示現するに、未だ會て時を失はず。一切の諸佛は如來の身を現するに、未だ會て時を失は  
 ず。一切の諸佛は悉く捨を行するに、未だ會て時を失はず。一切の諸佛は境界に入る  
 に、未だ會て時を失はず。一切の諸佛は衆生を攝取し歡喜せしむるに、未だ會て時を失は  
 ず。一切の諸佛は難化の衆生に於て之を放捨し、調伏せんが爲の故に、未だ會て時を失は  
 ず。一切の諸佛は不可思議の自在神力を示現するに、未だ會て時を失はず。佛子、是を一  
 切諸佛の十種の未曾失時と爲す。

【一たび言音】以下、華嚴經に於て、菩薩の觀念することを通じて勝德を明す。

【出生住持智】身の根本智に依りて、化徳の獲得智（經論的知識）を出して教化を精進するを以て言ふ。

佛子、一切諸佛に十種の譬喩すべからず思議すべからざる境界有り。何等をか十と爲す。  
 一たび跏趺して坐して、十方一切の世界に遍滿す。一たび言音を發して、悉く能く一切  
 の佛法を演説す。一光明を放ちて、悉く能く普く一切の世界を照す。一身悉く能く  
 一身身を現す。木の根を離れずして、悉く遍く一切の世間に示現す。一法を決定して、  
 悉く諸法に於て置礙する所無し。一念の中に於て、悉く能く無餘の世界に充滿す。一  
 念の中に於て、悉く能く遍く諸佛の功德を示現す。一念の中に於て、悉く能く一切三世の  
 佛を示現す。一切の衆生を教化して、而も諸佛の寂滅無二の三昧を捨離せず。佛子、是を  
 一切諸佛の十種の譬喩すべからず思議すべからざる境界と爲す。

佛子、一切諸佛に十種の出生住持の智慧有り。何等をか十と爲す。一切の諸法は趣向  
 する所無くして、而も能く清淨の願智を出生す。一切の諸法は無身にして、而も能く

【内法】内心の所  
 論の法を指す。  
 【三輪】身業（神  
 通輪）、語業（正教  
 輪）、意業（記心輪）  
 を佛の三輪と言ふ。  
 【四衆】比丘、比  
 丘尼、優婆塞、優婆  
 夷を言ふ。

法身の智慧を出生す。一切の諸法は悉く二有ること無くして、而も正覺を生じ一切の法を悟る。一切の諸法は悉く我有ること無く、衆生有ること無くして、而も能く衆生を化する智を出生す。一切の諸法は悉く相有ること無くして、而も能く種種の智を出生す。一切の世界は悉く成敗無くして、而も能く世の成敗の智を出生す。一切の諸法は造者有ること無くして、而も能く業報の智慧を出生す。一切の諸法は言説すべき無くして、而も能く説法界の智を出生す。一切の諸法は垢淨有ること無くして、而も能く垢淨の智慧を出生す。一切の諸法は生滅有ること無くして、而も能く縁起の智慧を出生す。佛子、是を一切諸佛の十種の出生住持の智慧と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の無量内法有り。何等をか」と爲す。一切の諸佛は内身清淨にして、三世に隨順し。一切の諸佛は悉く三輪の内法を有して衆生を教化す。一切の諸佛は悉く内に深智慧の陀羅尼を有して、一切の佛法を分別す。一切の諸佛は皆悉く内に四辯の法輪を有して、四衆の中に於て淨法輪を轉す。一切の諸佛は皆悉く内に大慈大悲を有して、悉く能く一切衆生を捨てず。一切の諸佛は内常に寂定にして、善く衆生を觀じて未だ會て時を失はず。一切の諸佛は皆悉く内に巧妙なる善根を有して、衆生を調伏す。一切の諸佛は皆悉く内に一切の法界を有して、無礙の住に住す。一切の諸佛は内一念の中に、悉く能く三世の諸佛世に興することを示現す。一切の諸佛は内に一切三世の阿僧祇劫は、即ち是れ一日なりと分別する有り。佛子、是を一切諸佛の十種の無

【甚深の大法】無  
思にして而も道理  
に契稱するを甚深  
と言ひ、業用を第  
一にして殊勝なるを  
大法と言ふ。

量内法と爲す

佛子、一切の諸佛に十種の甚深の大法有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は悉く能く一切の諸佛を降伏す。一切の諸佛は悉く能く一切の外道を降伏す。一切の諸佛は悉く能く一切の衆生を教化して、其をして歡喜せしむ。一切の諸佛は悉く能く一切の世界に往詣して衆生を教化す。一切の諸佛は悉く分別して甚深の法界を知る。一切の諸佛は種種の身を以て、衆生の世界に趣くして、而も異身無し。一切の諸佛は一一の音聲に四種の辯を具して、未嘗て斷絶せず。一切の諸佛は衆生を見る善を、皆歡喜せしめ利益せしからざらしか。一切の諸佛は一一の毛孔より、次第に一切世界の微塵に等しき佛を出して、未嘗て斷絶せず。一切の諸佛は一一の微塵の中に於て、一切世界の微塵に等しき佛を顯示し、種種に莊嚴して、常に法輪を轉じ、衆生を教化して未嘗て斷絶せず、而も微塵大なるを、世界小ならず、決定して了知し、法界に安住す。一切の諸佛は一切の法に於て癡闇を覺悟し、十力を具足して、廣く一切衆生の爲に知實の法を説き、魔障を斷絶せしか。佛子、是を一切諸佛の十種の甚深の大法と爲す。

佛子、一切諸佛に十種の功徳の羅刹清淨なる有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は本より來、一切の功徳を修習して、無惡清淨なり。一切の諸佛は悉く世の如來の家に於て生れ、羅刹清淨なり。一切の諸佛は未來際に於て心に所著無くして、無惡清淨なり。一切の諸佛は一切の諸法に著せずして、羅刹清淨なり。一切の諸佛は種種

【優婆提】(Upari) 優婆提舍のこ  
 と、即ち論議經、  
 逐分別說等と譯さ  
 れ、十二部經の一  
 として原始教興の  
 代表とせらる。今  
 此處に言ふ意は其  
 義にあらざる。義  
 論議又は戲論の義  
 に用ひられしなり  
 新譯に世衆惑と言

の虚妄を離れ、一の莊嚴を以て自ら莊嚴し、離惡清淨なり。一切の諸佛は功德無盡にし  
 て法界等に安住し、離惡清淨なり。一切の諸佛は色身淨妙にして、量無く量無く、普く  
 十方一切の世界に現じて、衆生を教化し、未だ會て時を失はずして、離惡清淨なり。一  
 切の諸佛は四無畏に往して、諸の恐怖を離れ、一切の天人衆の中に於て、大師子吼し、  
 廣く諸法を説きて衆をして歡喜せしめ、離惡清淨なり。不可説不可説の劫の中に、波度  
 したまへる諸佛は、若し衆生有りて其名を聞かん者は、大果報を得んこと、佛の現在した  
 まふが如くにして、離惡清淨なり。一切の諸佛は遠く不可説不可説の世界の中に在して  
 住す、若し衆生有りて、一心に正しく彼諸の如來を念せば、即ち現じて前に在りて、離  
 惡清淨なり。佛子、是を一切諸佛の十種の功德離惡清淨と爲す。

佛子、一切諸佛に十種の究竟清淨有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は諸加究竟じ  
 て清淨なり。一切の諸佛は梵行禁戒究竟じて清淨なり。一切の諸佛は悉く優婆提を  
 捨離することを得て、究竟清淨なり。一切諸佛の佛刹は究竟じて清淨なり。一切諸佛  
 の眷屬は究竟じて清淨なり。一切諸佛の種姓は究竟じて清淨なり。一切諸佛の色身の  
 相好は究竟じて清淨なり。一切諸佛の法身は究竟じて清淨なり。一切諸佛の無礙の一  
 切智身は究竟じて清淨なり。一切諸佛の解脱は所作已に作して、永く彼岸に度り、究竟  
 じて清淨なり。佛子、是を一切諸佛の十種の究竟清淨と爲す。

佛子、一切の諸佛は、一切の世界一切の時に於て、十種の佛事有り。何等をか十と爲す。

【一切の諸佛は】以下、佛の智用甚く機を照すことを明す

【一切の諸佛は】以下、佛の智用甚く機を照すことを明す

一切の諸佛は、若し衆生の正しく憶念する者有らば、即ち現じて前に在り。一切の諸佛は常に衆生の爲に摩訶衍を説く。一切の諸佛は常に能く一切衆生の無量の善根を長養す。一切の諸佛は、若し衆生有りて、始めて生死を離れ正法の位に入るを、悉く分別して知る。一切の諸佛は衆生教化の時會を捨てず。一切の諸佛は常に一切の世界に遊びて障礙有ること無し。一切の諸佛は大悲もて常に一切の衆生を捨離せず。一切の諸佛は變化する所の身常に斷絶せず。一切の諸佛は自在の神力未だ曾て斷絶せず。一切の諸佛は普く常に清淨の法界に安住し、悉く衆生の爲に廣く演説す。佛子、是を一切の諸佛、一切の世界と一切の時とに於て、十種の佛事有りと爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の無盡の方便智慧の大海有り。何等を不すと爲す。一切の諸佛は法身の無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は功德の無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は佛眼の境界無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は不可思議なる善根の無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は一切の法を行ずる無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は甘露の法を雨らす無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は諸佛の功徳を宣說する無盡智慧の大海なり。一切の諸佛の本願の諸行は無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は未來際を盡して、一切衆生の爲に常に佛事を作し、未だ曾て休息せざるは、窮く有ること無き智慧の大海なり。一切の諸佛は衆生の心心の所行を知る無盡なる智慧の大海なり。一切の諸佛は一切智の功徳を出生する無盡なる智慧の大海なり。佛子、是を一切諸佛の十種の無盡の

【常法】如来常に往し、常に行ずる法なるを以て常法と言ふ、此段は如来智徳不離を説く

方便智恵の大海と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の常法有り、何等をか十と爲す。一切の諸佛は常に一切の諸の波羅蜜を行す。一切の諸佛は一切の法に於て常に愚癡を離る。一切の諸佛は常に大悲を具す。一切の諸佛は常に無量の十力を具す。一切の諸佛は常に無上の法輪を轉す。一切の諸佛は常に一切衆生を度す。一切の諸佛は常に衆生の爲に等正覺を成ず。一切の諸佛は常に應化して一切衆生を度す。一切の諸佛は常に正念不二の法を行す。一切の諸佛は常に衆生を化し、りて、涅槃を示現するも、諸佛の境界に邊際有ること無し。佛子、是を一切諸佛の十種の常法と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の無量説佛法門有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は悉く無量なる衆生の界門を説く。一切の諸佛は悉く無量なる衆生の種種の行門を説く。一切の諸佛は悉く衆生の無量なる諸の業報門を説く。一切の諸佛は悉く無量の方便もて衆生を度する門を説く。一切の諸佛は悉く無量の衆生の行を淨むる門を行す。一切の諸佛は悉く無量なる一切の菩薩を教化し、菩薩の行を安立する門を行す。一切の諸佛は悉く無量の菩薩の勝妙なる願門を説く。一切の諸佛は悉く無量の世界の諸の成敗門を説く。一切の諸佛は悉く無量の清淨なる佛刹の一切菩薩の正希望門を説く。一切の諸佛は悉く無量の一切世界の去來現在の諸佛、無量劫の中に次第に出世し、善く此佛の智慧門を分別することを説く。佛子、是を一切の諸佛の十種の無量説佛法門と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の法有りて常に衆生の爲に佛事を作す。何等をか十と爲す。一切の諸佛の色身と常に衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛の音声と常に衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は施を受けて常に衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は常に身水火風を以て佛事を作す。一切の諸佛は神力の境界を住持して、常に衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は常に名號を以て、諸の衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は常に徳利の境界を以て、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は常に清淨の徳利を以て、諸の衆生の爲に佛事を作す。佛子、是を一切諸佛の十種の法として常に衆生の爲に佛事を爲すと爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の堅固上の法有り。何等をか十と爲す。一切諸佛の諸願は堅固にして沮壞すべからず、誰の如く修行し言行相應す。一切の諸佛は未來際の時を盡して、菩薩の行を修し、功徳莊嚴して、未だ會て悲懼せず。一切の諸佛は一切衆生を化せんが爲の故に、悉く不可説不可説の世界に詣り、而も一切の世界に於て衆生を教化し、留難有ること無し。一切の諸佛は信不信の衆生に於て、大悲もて等しく觀じて、異り有ること無し。一切の諸佛は初發心より乃至正覺に至るまで、其中間に於て未だ會て菩提の心を遺失せず。一切の諸佛は諸の功徳を修し、皆悉く一切種智に廻向して、世行を求めず。一切の諸佛は諸佛の所に於て、隨順して身口意の業を修學して、永く聲聞緣覺の心を離れ、

一向に専ら無上の菩提を求め、修す。川の功徳を、行こころ悉く一切種智に嚮向して、無上道を求め、等正覺を成ず。一切の諸佛は平等に普く無量無邊の諸佛の正法を照し、菩薩の心を淨め、究竟して一切種智を具足す。一切の諸佛は悉く能く一切世の樂を捨離し、世間の願樂すべき所を棄はず、世間に著せず、一切衆生をして悉く諸の苦を滅し、寂滅なる平等の快樂を逮得せしむ。一切の諸佛は一切衆生の爲の故に無量の苦を受け、皆諸佛の種姓を建立せしめんと欲して、悉く衆生をして菩提を樂ひ求めて、生死を超出し、十力の地を得しむ。佛子、是を一切諸佛に十種の堅固士の法有りとなす。

佛子、一切の諸佛に十種の佛無障礙住有り。何等をか十と爲す。一切諸佛の、悉く能く過く一切の世界に遊ぶは、無障礙の住なり。一切諸佛の、悉く能く一切の世界に安住するは無障礙の住なり。一切諸佛の、一切の世界に於て行住坐臥するは無障礙の住なり。一切諸佛の、一切の世界に於て説法するは無障礙の住なり。一切諸佛の、一切の世界に於けるは無障礙の住なり。一切諸佛の、眷屬を一切の法界に充滿して、爲に法を説くは、無障礙の住なり。一切諸佛は一念の中に於て、悉く一切衆生の心心の所行を知り、三輪を以て教化して之を調伏するは無障礙の住なり。一切諸佛の、能く一身を以て、悉く一切諸佛の不可思議なる法門に往するは無障礙の住なり。一切諸佛の、悉く分別して一切衆生を知るは無障礙の住なり。一切諸佛の、悉く能く一切の如來を分別するは無障礙の住なり。佛子、是

以下、其體の  
を明

を一切諸佛の十種の無量莊嚴と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の最勝無上なる莊嚴有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は悉く色身の莊嚴、最勝無上なる莊嚴有り、是を一切諸佛、最勝無上なる色身の莊嚴と爲す。一切の諸佛は悉く八種の微妙なる音聲を有し、一一の音聲に悉く五百の妙音の容響有り、諸の聲ふべからざる口舌の音聲を以て莊嚴と爲し、無量無邊の妙音聲の教は、皆悉く清淨にして、音く清く一切諸佛の正法の花鬘を演説し、悉く慈悲を離れ、無難に宣説して大勝を成し、悉く一切の法界の一切衆生をして、其音聲を聞かしめ、其本行にして諸佛の善徳に隨ひて、皆開解せしむ。是を一切諸佛の最勝無上なる口舌の音聲と爲す。一切の諸佛は悉く十種の莊嚴を有し、諸佛の大莊嚴を同觀し、自ら亦共して莊嚴せらる。是の如く莊嚴する所無くして、法界地に住し、悉く諸佛の法の體性を得て餘り無き法界を莊嚴せしむ。一念の中に於て悉く分別して、三世の一切法界の一切衆生の心念の行を知りて、諸の法界の事無し。是を一切諸佛の最勝無上なる莊嚴の莊嚴と爲す。一切の諸佛は悉く最勝無上なる光明の莊嚴を有し、皆悉く音く光を明藏と爲す、一一の光輝に悉く無量無邊の光明有り、以て莊嚴と爲し、皆く一切諸佛の世界を照し、一切世界の諸佛を莊嚴し、佛出世して、亦其佛の莊嚴の相續を作す。是を現じ、無量なる清淨の法身を出生す。是を一切諸佛の最勝無上なる光明の莊嚴と爲す。一切の諸佛は若し微笑する時は、悉く口中に於て、數ふべからざる諸の清淨妙由他

の光を以て、一切諸佛の衆生に、阿耨多羅三藐三菩提の道を授く。是を一切諸佛の最勝無上にして普く一切を照。疑を離れて示現する菩薩と爲す。一切の諸佛は悉く無量の法身を有し、疑を離れたる清淨の法界は、無量無邊にして、世間を遍照し、世間に染着す、世間に著せず、世の眞實を解りて、出世の法を行じ、善言の道を説ちて無量の衆生を度脱し、衆人を離る。是を一切諸佛の最勝無上なる法身の菩薩と爲す。一切の諸佛は悉く無量常妙の光明を有して、普く十方一切の世界を照し、不可説不可説の諸の灌頂の色もて之を莊嚴し、普く世間を照して障礙する所無く、一切光明の光を出生す、是を一切諸佛の最勝無上なる常光の莊嚴と爲す。一切の諸佛は、悉く無量の妙色、微妙の妙色、清淨の妙色、一切衆生に普く慈する妙色、三界の光明を映發する妙色、彼岸を究竟する無上の妙色を有す。是を一切諸佛の最勝無上なる無量の妙色の莊嚴と爲す。一切の諸佛は、自然に清淨にして三世の佛の音聲家の中に生れ、一切の惡を離れて、一切清淨の諸法を修行し、一切智の如來の種姓を出生し、清淨にして無礙なり。是を一切諸佛の最勝無上なる清淨、種姓の莊嚴と爲す。一切の諸佛は、大慈の諸力を具身を莊嚴して、自然に清淨にして一切の不善の覺悟を遠離し、身行永く息み、觀る者無く、心淨くして解脱し、大悲具足し、一切衆生の第一の福田、無上の受者となりて、衆生を哀愍し、普く一切種智に安立して、無量の功德の寶藏を出生せしむ。一切の衆生は菩提智慧の功德の藏

【十種の自在】  
十種の自在を  
十種の自在を  
十種の自在を

を長しす。是を一切諸佛の最勝無上なる大慈大悲の究竟功德の寶藏、清淨の莊嚴と爲す。佛子、一切の諸佛の最勝無上なる十種の莊嚴と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の自在の正法有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛に一切の法に於て、意に隨ひ自在にして、身身味身の類、窮盡すること無く、一切の法を以て而も障礙無し。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は衆生に隨應して化して時を失はず、一切の法に隨ひて爲に法を説き、未だ會て時を失はず。是を一切諸佛の自在正法と爲す。

一切の諸佛は悉く能く六種に十方の世界を震動して、未だ會て一切の衆生をも憫亂せず。虚空に等しき世界を、無量阿僧祇の種種に莊嚴し、處に樂淨具は下下、善は合し或は散し、一切の衆生に於ても、亦衆生の心を攝養す。亦其をして疑惑の相を生ぜしめず。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は能く衆生を以て一切世界の種種の莊嚴を受持し、一念の中に於て一切世界の種種の莊嚴を示現し、不可數不可數の阿僧祇劫に莊嚴の具を變ずとも、而も窮乏すること無く、永く一切世界の塵汚を離れ、世間の一切の煩惱を莊嚴す。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は若し一りの衆生の心に化を授くべき者を見れば、不可數不可數の阿僧祇劫に於て、結跏趺坐して、身疲倦せず、専ら彼人を念じて、未だ會て廢忘せず而も時を失はず、一りの衆生の爲に善法を任持し、未

來際場を盡して結跏趺坐し、身に疲倦無く、彼衆生を念じて未だ會て廢忘せず、一りの衆生の如く、一切衆生にも亦復是の如し。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は悉く

一切の諸佛は能く衆生を以て一切世界の種種の莊嚴を受持し、一念の中に於て一切世界の種種の莊嚴を示現し、不可數不可數の阿僧祇劫に莊嚴の具を變ずとも、而も窮乏すること無く、永く一切世界の塵汚を離れ、世間の一切の煩惱を莊嚴す。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は若し一りの衆生の心に化を授くべき者を見れば、不可數不可數の阿僧祇劫に於て、結跏趺坐して、身疲倦せず、専ら彼人を念じて、未だ會て廢忘せず而も時を失はず、一りの衆生の爲に善法を任持し、未

來際場を盡して結跏趺坐し、身に疲倦無く、彼衆生を念じて未だ會て廢忘せず、一りの衆生の如く、一切衆生にも亦復是の如し。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は悉く

【耳入を以て耳入】  
以下、佛の六根の  
互用自在を明す

く過く一切世界の諸の如來の所に往詣して、而も障礙無く、一一の方面に各法界に等しき世界清有、一一の方の無量の世界網、法界に等しき一切の世界海は、一念の中に於て、悉く能く周遍して妙淨土を成じ、而も障礙無し。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は一切の衆生を調伏し教化せんが故に、念念の中に於て等正覺を成ずるも、先に諸佛の正法を覺らざるに非ず、亦學地に住せずして而も正覺を成じ、諸佛の法に於て礙無きことを得、自在の神力、無量の智慧の境界を捨てずして衆生を教化す、是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切諸佛は能く眼入を以て耳入の佛事を作し、能く耳入を以て鼻入の佛事を作し、能く鼻入を以て舌入の佛事を作し、能く舌入を以て身入の佛事を作し、能く身入を以て意入の佛事を作し、能く意入を以て一切世界、種種の境界、世間の境界、出世間の境界に於て、一一の境界に於て能く佛事を作す。是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は一毛孔に於て悉く能く一切の衆生を安置し、一一の衆生は其身悉く不可説不可説の諸佛の身と等しく、彼の衆生に於て而も迫進せず。一一の衆生は悉く無量阿僧祇劫にして、悉く能く無量の世界に遊行し、諸の世界に於て、佛世に興りて淨法輪を轉じ、無數の法門を宣暢し演説し、廣く過去不可數の法、未來現在の不可數の法を説き、一切の衆生は回聲響を行きて迫進せざるを見る、是を一切諸佛の自在正法と爲す。一切の諸佛は一念の中に於て蓮華寶藏の師子の座を現じ、如來の淨身は法界と爲し、彼の寶座に處して等正覺を成じ、一念の中に於て如來の自在神力を示現し、一念の中に如來

の等正覺を承現したまふが如く、一切世界の諸衆生の如來の等正覺を成ずることを承現したまふも亦復是の如し、一念の中の如く一切念の中に於ても亦復是の如し、華嚴寶藏師子の座に、依正覺を示すが如く、是の如く一切の不可說不可說の法界に等しき清淨の佛刹、不可思議の種種に莊嚴せる世界、種種の境界、不可說の法界に、或は同相有り、或は異相有り、不可說の諸佛威助に於くとも成ずること成はず、無量の諸佛の種種の念、種種の時を思惟すべからず、一念の中に於て、一切の諸佛は少方便を以て、一切衆生に承現すること亦復是の如し。佛子、是を一切諸佛の十種の自在正法と爲す。

佛子、一切の諸佛は十種の不思議の法を具足し已りて等正覺を成ずたまふ。何等をか十と爲す。一切の諸佛の一一の妙相に、百、悉く具はりて、等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の佛刹を具足して等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の善根を具へて、等正覺を成ず。一切の諸佛は諸の功徳の行を具足し修習して、等正覺を成ず。一切の諸佛は善く衆生の諸根の勝するを知り已りて、等正覺を成ず。一切の諸佛は無壞の勝法を具足し修習して、等正覺を成ず。一切の諸佛は佛刹を具足し嚴淨して、等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の諸佛は色身の相好満足し、其の善虚しからずして、智を具足して、等正覺を成ず。一切の諸佛は悉く諸佛の平等の正法を具へて、等正覺を成ず。一切の諸佛は悉く一切諸佛の事を具へ已りて、然る後に無量涅槃に入る。佛子、是を一切諸佛は十種の不思議の法を滿具して、等正覺を成ずと爲す。

【一切の諸佛の十種の妙相】以下、縁を授けて正覺を現することと爲す。

佛子、一切の諸佛は十種の不思議の法を具足し已りて等正覺を成ずたまふ。何等をか十と爲す。一切の諸佛の一一の妙相に、百、悉く具はりて、等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の佛刹を具足して等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の善根を具へて、等正覺を成ず。一切の諸佛は諸の功徳の行を具足し修習して、等正覺を成ず。一切の諸佛は善く衆生の諸根の勝するを知り已りて、等正覺を成ず。一切の諸佛は無壞の勝法を具足し修習して、等正覺を成ず。一切の諸佛は佛刹を具足し嚴淨して、等正覺を成ず。一切の諸佛は一切の諸佛は色身の相好満足し、其の善虚しからずして、智を具足して、等正覺を成ず。一切の諸佛は悉く諸佛の平等の正法を具へて、等正覺を成ず。一切の諸佛は悉く一切諸佛の事を具へ已りて、然る後に無量涅槃に入る。佛子、是を一切諸佛は十種の不思議の法を滿具して、等正覺を成ずと爲す。

【巧妙方便有り】  
以下、無の中に巧  
みに方便を現する  
ことを明す。

佛子、一切諸佛に十種の巧妙を現有り、知覺をかすと爲す。一切の諸佛は悉く諸法に  
究竟有ること無きを知りて、而も究竟なく諸法の善根を證く。是を一切諸佛の巧妙の方便  
と爲す。一切の諸佛は、一切の法は悉く所見無く、各相知らず、縛も無く、解も無く、  
取も無く、棄も無く、具足も無く、自在も無く、究竟も無きことを了して、而も一切の佛  
は、彼法の中に於て、實に異り無きことを知り、身垢汚を離れ、一切の法に於て悉  
く自在を得、無取の法の中に於て實際を壞せず、善く究竟じて大自在地を學び、一切の法  
界を見、一切智を覺悟す。是を一切諸佛の巧妙の方便と爲す。一切の諸佛は諸相の塵を離  
れて一切の相に住せず、而も分別して一切の諸相を知り、本自性を亂さず、一切諸法は自  
性有ること無くして、而も能く阿僧祇の清淨の色身と、種種に乾淨せる佛の身とと  
示現し、佛の一切智は智身を具足し、阿淨の智體は疑闇を除滅して、普く能く一切衆生  
に示現す。是を一切諸佛の巧妙の方便と爲す。一切の諸佛は、衆生の際に遠大に非ず、未來  
に非ず、現在に非ず、法界も亦未來現在に非ざることを知り、知實の性の如く、虚妄を捨  
離して、能く三世の諸佛を演說し、一切の佛の平等の境界を見る。是を一切諸佛の巧妙方  
便と爲す。一切諸佛の身口意の業は造作する所無く、究竟じて住無く、諸の業法を離れ  
て彼岸に到り、而も無量なる功徳の寶藏を出生して、世間出世間の法を分別し演說し、  
無礙の智慧を具足し成就して、無量の自在神力を示現し、一切の法界に等しき衆生を度脱  
す。是を一切諸佛の巧妙の方便と爲す。一切の諸佛は、悉く一切の法は知無く、見無く、

一に非ず、異に非ず、相に非ず、無相に非ず、甚深に非ず、莊嚴せざるに非ず、一切の諸法は皆自性無く、不生不滅なるを爲して、而も有ゆる無所有の法の中に於て、亦世間の法相を壞せず、一切の衆生、人を見て覺悟の智恵を不現し、自在に廣く一切諸法を説き、而も如如に於て亦永く滅せず、是を一切諸佛の巧妙方便と爲す。一切の諸佛は能く一時に於て皆悉く分別して一切時を知り、離生平等の正法を授てず、一切時の中に皆攝せざる所、晝に非ず、夜に非ず、半月に非ず、一月に非ず、一歲に非ず、百歲に非ず、劫成に非ず、劫敗に非ず、時に非ず、時を離れず、而も無量の時に於て、淨法輪轉じ、或は寶臚の時、或は晝の行中後の時に於て、或は夜の初中後の時に於て、或は七日、一月、一歲、百歲、乃至不可思議の信解劫の時に於て、乃至未來際の劫を盡して、一切時の中に、淨法輪を轉じ、未だ曾て善くも思はず、是を一切諸佛の巧妙方便と爲す。一切の諸佛は、一切の法界は時に非ず時を離れざるを知り、一切諸佛は、無量の無量を具足し、不可説の辯、不可量の辯、不可盡の辯、不可壞の辯、無邊の辯、不共の辯、無窮盡の辯、廣深の辯、方便して一切の句す味身を分別し演説する辯、一切の法辯を具足し、性にして、性に隨ひ、根に隨ひ、行に隨ひて、廣く諸法の不可説不可説の由他の修多羅を説き、後諸の一切の修多羅は口中後善く、究竟して善く説けり、是を一切諸佛の巧妙方便と爲す。一切の諸佛は正しく法界を覺りて、名無く、性無く、三世の名無く、衆生の名無く、法の名無く、非法の名無く、功德の名無く、非功德の名無く、菩薩の名無く、佛の名無く、衆の名無く、

非數の名無く、生の名無く、滅の名無く、有名に非ず、無名に非ず、一名に非ず、種種の  
 名に非ず、一切諸法の自性は言無く、力無く、處無く、音聲を捨離し、音聲の道斷え、彼  
 岸を究竟じ、虛妄の境界を離れ、無影の法を修し、一切の觀虛妄を滅し、一切世間の  
 語言に著せず、而も能く一切諸法の行身味身を出生す、言を一切諸佛の巧方便と爲す。  
 一切の諸佛は、一切の法は不生にして、受者有ること無きを知り、色も不生なり、受想行  
 識も不生なり、一切諸法は皆受く寂滅にして、人無く鬼無く、法界は所有無しと知りて  
 而も亦一切法の相を壞せず、一切諸法は起者有ること無く、一切の虚空の如く、一切法は  
 寂滅にして業報有ること無く、所學無く、成就無く、數無く、生數無く、有に非ず無に非  
 ず、生に非ず滅に非ず、垢に非ず淨に非ず、來無く去無く、亦作有ること無く、衆生無く  
 衆生無きに非ず、亦教化無く、命無く、命無きに非ず、因縁無く、因縁無きに非ず、縁起  
 無く、縁起無きに非ず、而も善く正定、邪定、不定、不定の衆生を分別して、十と四無所畏  
 と一切種智とを成就し、大業の中に於て如來の境界を大轉子吼す、是を一切諸佛の巧妙方  
 便と爲し、是を一切諸佛の巧妙方便と爲す。



【一切の諸佛は】  
 以下、因位の時の  
 菩薩が王宮に在り  
 する時の攝生佛事  
 を説く。

て眞實の智を修し、徳を離れ清淨にして、其非成或は其地し、最後を生に於て佛事を作し、妙寶莊嚴の樓閣に安處して、佛事を作す。或は神力を以て佛事を作し、或は正念を以て佛事を作し、或は大自在威を示現すること、以て神力を作し、或は圓滿なる慧目を以て佛事を作し、或は如來の廣大なる境界を具足すること、以て佛事を作し、或は化して無量無邊の世界に滿てる諸佛を以て佛事を作し、或は覺悟無礙の諸の方便に入りて佛事を作し、或は復成神の味より覺して佛事を作し、或は智慧心より佛事を作し、乃至、無餘涅槃して佛事を作す。此第一攝生位にて一切の世間に示現し、或は初生の時、一切世間にて佛事を作し、或は童子の時、一切世間にて佛事を作し、或は出家の時、或は成道の時、或は轉法輪の時、一切世間にて佛事を作し、種種の方便もて、一切無餘の境界に於て佛事を作し、一切の方便もて佛事を作し、一切の佛利にて佛事を作し、一切の方便にて佛事を作し、或は一切無餘の衆生に於て佛事を作し、一切の生死の中に於て、正念の法門を變化して佛事を作す。佛子、是を一切諸佛の第一の佛事と爲す。

一切の諸佛は菩薩爲りし時、王宮の中に於て、一切清淨の善業を成就し、善哉く分別して一切の生を知り、衆生に隨順して王宮に現處し、一切の善根を具足せしめんを欲して而も一切の能に著す、一切の能を離れ、一切の行持を著くを欲たりと覺じて、甚深の智慧、一切の境界に入り、一切の能を著して清淨に滿足し、其悲もて内の諸の眷屬を

觀察し、大慈もて衆生の空寂なることを觀察し、大善もて世の樂むべき無きを觀察し、大捨もて心に自在を得、意に隨ひて能く轉ずることを觀察して、一切の智を究竟に、諸の妙功德は法身を出生して、法界と爲しく、清淨に満足して而も染著無く、一切の眷屬をして皆悉く清淨ならしめ。廣く能く彼爲に願の如く法を説きて、世間を厭はしめ、能く一切世間の善惡を説き、彼所行に隨ひて果報を示現し、無量なる種種の方便を出生し、其所應に隨ひて、調伏し教化し、善根未だ熟せざるものは悉く成熟せしめ、已に成熟せる者は解脫を得しめ、無量の不退の勝事を示現して、廣く種種の法門を説き、無量の衆生をして心に清淨を得しめ、大慈の重安を與し、普く無量の甘露の法雨を雨らし、大慈平等にして、三輪示現し衆生を教化す。下宮に處すと雖も而も普く一切の勝事を示現し、一切世界に於て、佛事を示現し、無量なる諸佛の神涌を出生し、三輪の巧方便の法を具足し、身口の二業究竟して清淨に、意業甚深にして究竟して無礙となり、巧方便を得て衆生を饒益す。佛子、是を一切衆佛の第三の勝事と爲す。

【佛子云云】以下  
如來因位に於ける  
出家時の攝益を説く。

佛子、一切の諸佛は、世間の珍味、種種の寶物の、悉く能く人心を感伏し動轉せしむるものを、菩薩は悉く棄て、空を捨てて出家し、世間に示現して、衆生にして世間に著せざらしめんと欲し、磨滅して皆悉く常に非ざることを解知せしめ、貪愛を捨離して、清淨の法を行じ、衆生を饒益して、出家の利を得しむ。世間に示現して俗衆を捨離し、無諍の法を修し、本願を満足し、無量の功德皆悉く圓滿し、智慧具足して、世の愚氣を

【一切の諸佛は】  
如來の成道時の攝  
益を叙す。

除く。衆生に無上の福田を示現す、善くして生ずるて、佛の福田に於て善根を積うる者は、其人を讚歎し、悉く一切の功徳を具足し、善法の智慧を眞實の義を了り、悉く衆生をして清淨の樂を得、永く諸の惡を離れ、清淨の法門を廣く衆生の爲に説き、正法門は生死を超出せしめ、一切智の幢を建立せんと欲するが爲の故に、家を捨てて出家す。佛子、是を一切諸佛の第四の佛事と爲す。

一切の諸佛は、無量の行を修して、一向に専ら薩婆若を求め、道場に坐して菩提樹下に端正覺を成じ、一切の法に達して、衆魔を壞散し、破壊すべからざる法身の戒は、悉く離く一切の法界に充滿して、一切の相を離れ、究竟じて盡ること無く、無量の法門を具足し成就し、一切智の境界に於て自在に、其義に隨順して、一切種智の功徳を積集し充滿す。一切の寶座を莊嚴して一切の刹に遍く、諸の大菩薩は悉く其座に處して、菩薩の無上なる衆行を成就し、菩薩の殊勝の大願を具足し、一切の菩薩に常に敬念せられ、諸の菩薩の爲に深法輪を轉じ、無量の佛の境界は、諸の菩薩を攝取し、諸の菩薩の行を修習し莊嚴し、菩薩衆をして悉く一切世間の諸佛の境界を清淨ならしむ。一切の衆生をして善根を修習せしめ、破壞すべからざる一切の善根は、眞實地に出でて無量の菩薩の行地に安住し、一切の勝妙の功徳を具足せしめ、悉く分別して、一切の世界、一切の衆生、一切の佛刹、一切の諸法、一切の菩薩、一切の成熟、一切の三世、一切の教化、一切の佛自在覺、一切の衆生性を知りて佛事を作す。佛子、是を一切諸佛の第五の佛事と

【法輪を轉ず】  
如來の轉法輪の攝益を明す

【法眼】五眼の一にして、菩薩の眞相を知り、衆生を攝化するなり。一切諸法の眞相を觀する智眼なり。而して般若智所證の五眼は諸法觀察の範疇たり。  
【若し聚落城邑】以下如來巡錫に際し、王城に入る等の時の攝益を明す

爲す

一切の諸佛は法輪を轉ず、退轉せざるが故に。無量の法藏あり、一切の法門を開闢するが故に。一切の法藏あり、無量の大師子吼なるが故に。一切の法藏を知り、法眼あり、淨

法門を開闢し、法眼あり、一切の法は有無に等ざることを顯するが故に。一切世間の法輪あり、無礙の法輪あり、一切の法は有無に等ざることを顯するが故に。一切世間の法輪あり、一切衆生の法眼を淨むるが故に。一切智の法輪を現示す、三世一切の世間に充滿する

が故に。一切諸佛同一の法輪あり、一切の佛法相違せざるが故に。是の如き等の無量阿僧祇の法輪を、所應に隨ひて轉ず、佛事を施作すること思議すべからず。佛子、是を一切諸

佛の第六の佛事と爲す。

一切の諸佛、若し聚落城邑、大なる都城に入らば、昔く衆生の爲に佛事を施作す。或は

人王の都城に入り、或は天王、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、

羅刹、毘舍遮王に入る。是の如き等の一切の諸王の國に入る時、能く衆生の爲に佛事を

作す。謂ゆる城門に入る時、一切の大城六街に響動し、光明普く照し、盲者は視ること

を得、聾者は聽くことを得、狂者は正しきを得、裸者は衣を得、苦める者は樂を得、一切

の寶器は具せざるに自ら得り、諸の莊嚴具は、自らに微妙の寶華を演出す、甚の如き

等の物も亦自然に微妙の寶華を演出す。一切の諸佛は、色身法界にして、見ざるが故に

無く、昔く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は相好莊嚴して、昔く衆生の爲に佛事を爲

す。

佛子、是を一切諸佛の第六の佛事と爲す。

佛子、是を一切諸佛の第六の佛事と爲す。

【或は佛興りた  
ふ】以下、無量の  
難、見佛の功徳を  
明す。

す。一切諸佛は視瞻無常にして未だ曾て卒疾ならず、諸苦を觀察して威儀を表はず、一切の境界に於て、諸根齊整にして心と攝めて亂れず、直に涅槃に趣き、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は四威儀を行じて、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は或は說法を以て、或は默然を以て、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は或は神足を以て說法し、或は誠して、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は一切世界の中の種種の衆生海の爲に、大善根と念種とを修し、菩薩の行を行じ、諸佛を觀察して厭足有ること無く、或は佛興りたまふには、值遇したてまつるべきことを誓きを説き、如來を見じらば、無量なる一切の善法を出で、功徳を修習し、諸佛の行を行ぎば、佛世間に出でたまひ、衆生をして淨からしめ、諸佛の無量なる功徳を讚歎し、未來の諸佛の種胤を長養し、一切の善根を修して、諸佛を歡喜せしめ、如來の無量なる妙色を解知し、應化する所に隨つて普く能く現前し、不可思議の衆生をして、諸佛の利に於て、如來を見たまふことを得しむ。一切の諸佛は是の如き等の無量の善根を以て、普く衆生の爲に佛事を作す。彼諸の衆生は、或は佛を見たまふつりて歡喜する有り、或は禮拜する有り、或は合掌する有り、或は讚歎する有り、或は佛を請する有り、或は佛を請する有り、或は佛の悦樂したまふを見て、普く衆生の爲に佛事を作す。一切の諸佛は能く無量種種の色身を以て衆生に示現して佛事を作す。一切の諸佛は或は音聲を以て、普く衆生の爲に佛事を爲す。一切の諸佛は是の如き等の無量無數の不可思議

【或は阿練若】以下、所住處に隨つて攝益することを明す。

【默然を以て佛事を作し】維摩の一言は文殊の智を超するが如く、佛の功徳無量なるあり

【盡ること無き功徳藏を以て攝益すること】を明す。

なる事を以て、普く衆生の爲に佛事を作し、一切世界の中の一切の衆生に於て、悉く之を教化して、退させざらしめ、大慈充滿して本願を捨てず、一切智力を具足し成就して、應に化すべき所に隨ひて、悉く護伏せしむ。佛子、是を一切諸佛の第七の攝事と爲す。

一切の諸佛は或は阿練若の處、或は寂靜の處、或は無量阿僧祇に住して佛事を作し、或は佛住に止して佛事を作し、或は大三昧に住して佛事を作し、或は稱量すべからし、或は身を現すべし佛事を作し、或は深智に住して佛事を作し、或は稱量すべからざる諸佛の境界に住して佛事を作し、或は剎應に隨ひて佛事を作す。或は天身の境界を以て佛事を作し、或は下、龍、河樓羣、緊那羅、摩睺羅伽、緊那羅、摩睺羅伽、摩訶、人、非人等の一切の境界を以て佛事を作し、或は聲聞、緣覺、菩薩の境界を以て佛事を作し、或は說法を以て佛事を作し、或は默然を以て佛事を作し、或は世間に一佛有すことを以て佛事を作し、或は世に一切の諸佛有すことを以て佛事を作し、或は一切の菩薩の願、無量の行の一と爲ることを説きて佛事を作し、或は一行一願の無量と爲ること説きて佛事を作し、或は世間の境界の如來の境界と爲ることを説き、或は如來の境界の世間の境界と爲ることを説き、或は非境界の如來の境界と爲ることを説きて佛事を作す。或は一日に住し、或は一夜に住し、或は半月、二月、一年に住し、乃至無量無數の阿僧祇劫に住して佛事を作す。佛子、是を一切諸佛の第八の攝事と爲す。

一切の諸佛は即ち是れ盡ること無き功徳の藏にして、能く衆生をして深信の心を發し、

清淨を具足せしめ、其所應に隨ひて、悉く能く化度し、諸根具足して、衆生を調伏し、悉く歡喜せしむ。一切の衆生を化するに眞實の道を以てし、一切諸の菩薩衆を稱揚し、未だ菩提心を發さざる者は皆發心せしめ、已に發心せる者は智慧を具へ悟るに他に由らざらしむ。或は涅槃を現じて佛事を作し。或は世間の無常を觀じて佛事を作し。或は法身の清淨なることを讃歎して佛事を作し。或は所作已に辦せることを説きて佛事を作し。或は一切の言を壞することを説きて佛事を爲し。或は三有の根本永く絶くることを説きて佛事を作し。或は衆生を教へて世間を厭離し、佛の心に隨順せしめ。或は衆生の爲に壽命の短促を説き、或は衆生の爲に一切世間に樂むべき者無きことを説き、或は衆生の爲に未來の一切諸佛に值ひたてまつることを説き、或は衆生の爲に、諸の如來妙法輪を轉じたまふことを説く。或は衆生に佛境界の心を發さしめ、或は時に隨ひて清淨に佛を念じ、如來を見たてまつることを得るを説き、衆苦を滅除し、皆清淨にして専ら佛道を生ぜしめ、一切の世界に於て衆生を攝取し、如來の甚深の境界に入らしめ。如來の身を以て一切身と爲して、衆生を攝取し、放逸の衆生をして、悉く三種の淨戒を具足せしむ。佛子、是を一切諸佛の究心の佛事と爲す。

一切諸佛の般涅槃の時に、一切の衆生は悲泣して涙を雨らし、憂惱し愁毒すらく、嗚呼痛しい哉、如來應供等正覺は、常に大悲を以て等しく衆生を念ひ、大導師と爲りて一切の衆生を哀愍し饒益し、世間を救護したまひ、天人の歸する所、值遇したてまつるべきこと

【般涅槃の時】涅槃を示現する時の攝生を叙す。

諸佛、無上の福田は今に於て永へに滅したまふ」と。諸佛は即ち此等の衆生を憐愍し  
 て、諸佛を感戴することを以て佛事を作す。佛に隨ひて彼一切の天、人、龍、夜叉、乾  
 闥婆、阿耨羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等を化せんが故に、全身を碎鍊して舍利を示現  
 し、衆生をし、歡喜し供養せしめんと欲す。淨き正直心して善依り教化して衆生を清淨  
 にし、衆生の功德を滿足ならしめんと欲し、衆生をして如來の塔を起し種種に供養せしめ  
 んと欲す。一切の世間、天宮、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、  
 非人の宮に塔を起して供養せしめ、又爪牙頭髮を以て塔を起して供養せしむ。衆生は已り  
 て佛法僧を念じ、恭敬供養の心を發起せしめ、或は布施を行じ、或は功德を修し、功徳を  
 具へ已りて、或は天上に生れ、或は人中に生れ、尊貴富樂にして惡趣を除滅し、直に正道  
 に向ひ、諸佛を見たてまつることを得、白淨の法を具へ、正道を成就して三界を超出し、  
 彼の願ふ所に隨ひて、皆悉く滿足せしめ、常に如來を念じて、恩を知り恩に報い、諸  
 の如來常に衆生の爲に救護と作るを以て、如來に歸依したまつり、復涅槃に入るとも、  
 猶衆生の爲に無上の福田、無盡の福田と作りて、一切の衆生をして善根と長養し、一切の  
 功徳を具足し成就せしむ。佛子、是を一切諸佛の第十の佛事と爲す。

佛子、是十種の佛事は無量無邊にして思議すべからず、一切の天人能く知る者莫く、三

【法王無異の法有  
 十】以下、果位の明

佛子、一切諸佛に十種の法王無異の法有り、何等をか十と爲す。一切の諸佛は記を與へ



餘有ること無し。一切の諸佛は一切の語言の道を知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の世間の成壞を知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の業生と及び其智慧とを知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の菩薩の善根の上中下の相を知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の佛の滿足せる智慧を知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の法は皆縁より起ることを知りて、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は一切の世界を分別して、悉く餘有ること無し。一切の諸佛は智慧もて一切法界の因陀羅網の如きを分別して、悉く餘有ること無し。佛子、是を一切諸佛十種の法を知りて、悉く餘有ること無しと爲す。

【十種の最勝力】  
以下、佛の十力を説く。

【大力那羅延轉佛】  
以下、身命無損力を説きて佛の最勝の大力を明す。

佛子、一切の諸佛に十種の最勝力有り。大力、無量力、大功徳力、身重力、不退轉力、堅固力、不可壞力、一切世間の思議すること能はざる力、一切衆生の壞すること能はざる力、大力なり。

佛子、諸佛世尊に十種の大力那羅延轉佛の住する所の法有り。何等をか十と爲す。一切の佛身は擧世の災穢も壞すること能はざる所、諸佛の命根は世間の諸毒も害すること能はざる所、一切世界の火劫起る時にも燒熱すること能はず、水劫の起る時にも没溺すること能はず、風劫の起る時にも散壞すること能はず。一切の魔軍、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、遍樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、羅刹、毘舍遮、人、非人等の一切衆生、悉く金剛を雨らすこと須彌山、金剛圍山の如く、三千大千世界の爾所に等しき處を佛の上に雨らすと

【一切の諸佛は一切の法界】以下、一毛毛孔持力を説きて如來の無量力を明す。

【一切の諸佛は一步に】以下、毛持闍山連歩力を説きて如來の大功德力を釋す。

も、佛をして怖畏の心を生ぜしむること難はす。一毛だも踏てず、行住坐臥、威儀改まらず。如來の如來の所住の方面に隨ひて、金剛の雨滴、終に下ることを得ず、雨らざると欲するも雨らずして、如來の意に隨ふ。佛の住持する所の衆生、及び佛の使命をも尙害すべからず。何に泥んや如來をや。佛子、是を一切諸佛の第一の大力那羅延幢佛の住する所の法と爲す。

佛子、一切の諸佛は一切の法界に等しき世界の中の須彌山王、金剛圍山、大金剛圍山、一切の大海、一切の諸山及び一切の衆生を、一毛孔に於て悉く能く容持し、未來際劫を盡すとも、一切の衆生は、悉く自ら我何の所に住するやを知らず、佛の神力をば除く。毛に悉く一切の衆生を持して遍く十方無量の世界に遊び、行住坐臥するも、而も諸の如來は苦惱厭倦の心を生ぜず、威儀異なること無し。佛子、譬へば虛妄の一切法界に等しき世界を容持して、苦惱厭倦の心を生ぜざるが如し。一切諸佛も亦復是の如く、一毛孔に於て無餘の世界の一切衆生を容持して、苦惱厭倦の心を生ぜず。佛子、是を一切諸佛の第一の大力那羅延幢佛の住する所の法と爲す。

佛子、一切の諸佛は、一步に能く不可説不可説の世界微塵等の佛刹を過ぎ、一念の中に於て、能く不可説不可説の世界微塵等の歩を行く。是の如きの歩を以て、一切の世界微塵等の劫を經、念念の中に於て能く一切の世界微塵等の劫を經ん。一金剛圍山は、上の諸劫に經し所の世界微塵の佛刹と等し、是の如き等の不可説不可説の世界微塵數の諸の金剛

【一切の諸佛は一食して】以下、定用自在力を説き、如来の尊重力を明す。

【一切の諸佛は一身上に於て】以下、一若し常轉法輪力を説き如来の不退轉力を釋す。

圍山を一毛孔に内る。一切の毛孔も亦復是の如し。如来の毛孔は悉く一切衆生の毛孔の數と等し。是の如きの毛孔を以て、是の如く遠く歩み、是の如く速疾に、十方一切の世界一切の虚空界を遊行し、過去未來際一切の諸劫を盡す。是の如きの諸劫は猶窮盡すべくとも、而も諸の如来身は羸弊すること無く、心退没せず。三昧と一切の佛事とを拈てす。佛子、是を一切諸佛の第三の大力那羅延幢佛の住する所の法と爲す。

佛子、一切の諸佛は一食して、結跏趺坐し、過去未來際不可説不可説の一切劫を盡して身不動せず。不思議なる佛性に住して、空滅の樂を受け、乃至一切の衆生をも化することを生はず。一切の世界及び一切の衆生を以て、如来の一指端の上に安置して、未來際劫を思す。彼一切の衆生は其身悉く不可説不可説の佛刹微塵等の世界の如く、彼一切の衆生は其身重きこと一切の世界の如く、而も諸の如来は身に疲倦無く、心に苦惱無し。一指端の如く一切の指端も亦復是の如し。一切の世界に入り、虚空界に入り、一切の力門に入る。是の如き一切の處、虚空界は、悉く餘有ること無く、法界を究竟し、一毛孔を以て一切の世界を量り、一切の指端の處に結跏趺坐して、過去未來際一切の劫を盡す。佛子、是を一切諸佛の第四の大力那羅延幢佛の住する所の法と爲す。

佛子、一切の諸佛は一身に於て、不可説不可説の佛刹微塵等の國を化し、一切の國は不可説不可説の佛刹微塵等の舌を化し、一切の舌は、不可説不可説の佛刹微塵等の音聲を出し、一切の法界の衆生は、聞かざる者無し。一切の音聲は、不可説不可説の佛刹微塵等の

修多羅を説き、一一の修多羅は、不可説不可説の佛刹微塵等の法を説き、一一の法の中に不可説不可説の佛刹微塵等の句身味身を説く。是の如く法を説きて、乃至不可説不可説の佛刹微塵等の劫を盡す。復不可説不可説の佛刹微塵等の劫に、異なる句身味身を説きて、一切世界微塵等の劫、一切の衆生の心に等しき劫を盡し、未來際一切の劫を盡す。此諸の劫数は、猶盡すことを得べくとも、如來の化身の説法は、一切の法を轉ずること、猶火輪の如く、自在の智慧もて一切の法を説く。正法輪を轉じて、一切衆生の疑惑を除滅し、正法輪を轉じて一切の法を照し、正法輪を轉じて皆悉く一切の法藏を開發し、正法輪を轉じて一切の衆生を歡喜し、調伏し、莊嚴し、正法輪を轉じて諸の菩薩の莊嚴法行を説き、正法輪を轉じて、大乘の智目をして圓滿莊嚴ならしめ、正法輪を轉じて、一切無餘の衆生をして、大乘の智を以て自ら莊嚴せしめ、正法輪を轉じて一切の諸辯無畏もて自ら莊嚴せしむ。一如來の一化身、是の如き等の譬喩すべからざる法輪云を轉ずるが如く一切の法界虚空界等の世界を、悉く毛端を以て周遍して度量し、一一の毛端の處に、念の中に於て不可説不可説の佛刹微塵等の身を化し、乃至未來際劫を盡して、一一の化身佛の身に、不可説不可説の佛刹微塵等の眞有り、一一の眞に、不可説不可説の佛刹微塵等の舌音も、一一の舌より、不可説不可説の佛刹微塵等の音聲を出し、一一の音聲は、不可説不可説の佛刹微塵等の修多羅を説き、一一の修多羅は、不可説不可説の佛刹微塵等の法を説き、一一の法の中に、不可説不可説の佛刹微塵等の句身味身を説く。復不可説不可説の

【一切諸佛は勝妙の相の降魔力を説きて、如来の堅固力を稱す。】  
【德字】 記字を指す。吉祥萬徳の相なるを以て徳字と言ふ。

【一切諸佛は無礙の相】 以下、菩薩の不可壞力を稱す。

佛得微等の劫に、異れる句身、法界を説き、音聲法界に充滿して一切の衆生聞ざる者無し。一切未來の劫を盡して常に法性を證し、如来の音聲異なること無く斷ずること無く、窮盡すべからず。佛子、是を一切諸佛の第五の大力無礙轉轉の住する所の法と爲す。

佛子、一切諸佛は勝妙の大莊嚴を成就して、胸の徳字の相は、猶し金剛の如く破壊すべからず。如来、彼菩薩樹下に坐したまふに、無量の化魔王の軍衆有り、悉く一切の衆生能く等しく、難勝なる形色は、甚だ怖畏すべく、衆生を見る者、能く狂亂を發し、悉く能く一切世間を恐怖せしむ。是の如き等の衆、虚空法界に等しき一切の世界に充滿し、難勝なる形色は、甚だ怖畏すべく、能く狂亂を發し、能く一切の衆生をして怖畏せしめ、能く一切の世間を壞し、能く一切の衆生を害す。如来見じりたまひて、心に恐怖無く、一毛たも礙てず、顔に異容無く、乃至一念微畏の相を生ぜず、心安くして動ずず、形色異なること無く、衆生を遠離し、心常に寂靜にして、究竟して一切の恐怖を遠離し、一切の衆生の煩惱を滅滅して、佛性に安住し、無礙の大慈の力を具足し、大悲の住に住し、諸衆寂靜にして多く恐怖を離れ、胸の徳字の相は破壊すべからず、堅固眞實にして、一切の諸魔と、魔天の眷屬とは如来を見じりて、皆悉く歸依したてまつり、如来は彼三輪に於て教化し、皆倒伏して菩提心を發し、悉く遠離せざらしめ、乃至無上菩提を得しむ。佛子、是を一切諸佛の第六の大力無礙轉轉の住する所の法と爲す。

佛子、一切諸佛は無礙の相なる音聲を出し、皆悉く一切の世界に充滿し、所應に

【一切の諸佛は】  
以下、證理其事の  
無量力を説きて以  
て如來の一切世間  
不能思議力を稱す

隨ひて度したまひ、聞かざる者無し。彼諸の如來の出したまふ所の音聲は、一切の衆山も障ふること能はざる所、須彌山王、寶山、小金剛圍山、大金剛圍山も障ふること能はざる所、天宮、龍宮、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の一切の宮殿も障ふること能はざる所、一切世界の廣大なる音聲も亦障ふること能はず。其所隨ひて皆悉く之を聞きて障礙する所無し。佛子、是を一切諸佛の第七の大力那羅延轉阿の住する所の法と爲す。

佛子、一切の諸佛は、心に障礙無く、不可説不可説の億那由他劫に於て、心常に清淨に、三世の諸佛も、離垢清淨にして、同一に莊嚴し、我我所を離れ、一切の法に於ても、亦所依無く、内に非ず外に非ず、生に非ず不生に非ず、一切の境界を離れ、寂滅にして處無く、造作する所無く、種種の相を離れ、一切の虚妄なる取相を除遣し、自然に清淨にして諸の境界を離れ、憶念する所無く、境界無諍の法に隨順し、離欲清淨にして眞實に住し、法界の際を説き、法界平等にして盡くすること有ること無し。一切の衆生能く知る者無く、永く一切の有爲無爲を離れ、一切言說道の境界を捨離し、無礙無盡の法界を究竟す。智慧に隨ひて、十力を轉じ、莊嚴して一切の法を淨め、巧方便を行じて種種の法相を説く、即ち一法の相と一切法の相と相違背せず、三世を壞せず、一切の法界に於て、究竟自在にして彼岸に到り、甚深なる自在の法藏を具足し、一切の方便は礙を離れて正念し、十方一切の佛刹に安住して、勳轉すること無く、不死の智を具へ、一切の漏を盡し、

諸法を究竟して無漏を證し、心慧華嚴して、實際を究竟じ、無礙の住に住して常に定まりて纏ること無く、三世の法に於て障礙有ること無く、一念の中に於て、悉く三世一切の衆生の心心の所行を了る。佛子、是を一切諸佛の第八の大力那羅延轉佛の住する所の法と爲す。

【細密の法身】以下、法身の微妙力を説きて、如來の一切衆生不能壞力を釋す。

佛子、一切の諸佛は細密の法身を具足し成就す。諸佛の法身の境界は量無く、一切世間の徧ること能はざる所なり。三界の中に於て染汚する所無く、因縁に隨ひ、一切に徧して普く現じ、實に非ず虚に非ず、平等にして清淨なり。去に非ず來に非ず。無爲無壞にして清淨に、常住にして一相無料なる、是れ法身の相なり。處に非ず方に非ざる一切の身は、身自在にして無量なり、妙色無量にして、一切の身を攝して種種の身を作し、方便身に隨ひて普く一切を照らし、智藏を具足して種種の分別無し。其身は無餘の世界に充滿して、一切の法界は動ずと雖も動に非ず、清淨の法身は、有に非ず無に非ず、方便に非ず方便ならざるに非ざることを説き、衆生所應に隨ひて、悉く能く示現す。滅に非ず不滅に非ず、亦現ぜざるに非ずして衆生を化し、一切功德の寶の起す所の身と、一切法と佛法との起す如如の法身とは、自然に寂靜にして、一切の法に於て障礙する所無く、一切の法界に隨順して、一切の世間を清淨にし、一切の世間を分別して動轉有ること無く、境界有ること無く、如來の解脱は、一切智を攝し、一切身に隨順す。佛子、是を一切諸佛の第九の大力那羅延轉佛の住する所の法と爲す。

【一切諸佛の正覺】  
以下、菩薩行を具  
する佛の大智力を具  
説きて、大力を結  
す。

佛子、一切諸佛の正覺は悉く等しく、一切諸の菩薩の行を出して、行ずる所虚  
しからず、深願を満足し菩薩の行を淨め、一切の菩薩の行智を具足す。一切の諸佛は菩薩  
の行を修して、悉く真有りること無く、善く分別して一切の菩薩の行を知り、菩薩の諸  
の大願海を満足し、一切の悪を離れて、諸の善行を生じ、菩薩の行を修し、皆悉く清  
淨にして、一切の佛に隨順し、寂然にして放逸ならず、一切の三昧無量の境界に住して、  
能く一切の勝道を教へ、一切の惡道を遠離し、彼岸を究竟じ、第一の智力を具足し成就し  
て、無畏の法雨を雨らし、其所隨に隨ひて悉く能善く答へ、方便もて法を説き、智慧平  
等にして周遍清淨に、身口意の業も皆悉く清淨なり。諸佛の住に住し、唱佛の百姓  
佛智の所作、悉く退轉せず。一切禪智は無量無邊の諸住を分別し、一切の智明と、隨順  
の智慧とは、不可思議にして、一切世間の解ること能はざる所なり。智慧明淨にして、一  
切法を知り、微細の智慧は無量無邊にして、善能く一切の三世を分別す。智慧微妙にして  
一切の世界を覺悟し、無上の道義を具足し了知し、一切の世間に於て、不可説の佛事を作  
す。智慧不退にして一切諸の如來身を成就し、算數の智に入りて、決定して一切の諸法  
を了知し、文字を捨離し、言語の道斷え、而も善能く一切の文字を説き、淨善の法を行じ  
普賢の智を滿じ、一念の中に於て悉く能く一切の諸法を覺了し、淨き樂生に隨ひ、所應  
の處に隨ひて悉く能く法施す。明淨の智を以て、一切法の境界、一切世界の境界、一  
切衆生の境界を解り、一念の中に於て悉く能く三世の法界、一切如來の出世の境界、一

一切教化の境界を知見し、未だ曾て時を失はず。一切清淨の境界に至り、一切の境界を覺り、持てよく究竟して、一念の中に於て、三世の衆生の心意識の行を覺悟し、諸佛の平等なる、衆生の無邊なる、世界の無邊なる、法界の無邊なる、三世の無邊なる、一切諸佛の自在の無邊なる、是の如き等のことを覺りて障礙有ること無し。諸佛の智慧、諸佛の自在、無量無邊の諸佛の廣住を轉じて、無礙の住、無礙心の住に住し、大悲住に住して、廣く深法を説きて衆生を教化し、心に休息無し。是を一切諸佛の第十の大力那羅延幢佛の住する所の説と行す。

佛子、是を一切諸佛の十種の大力那羅延幢佛の住する所の説と爲す。無量無邊にして思議すべからず。三世の一切衆生、聲聞、緣覺は皆知ること能はず、佛の神力をば除く。

【定法】化身の八相を指す。八相は諸佛決定して等しく有する定法なるはなり。

佛子、一切の諸佛に十種の定法有り、何等をか十と爲す。一切の諸佛は定めて須臾天に於て其壽命を盡す。一切の諸佛は定めて胎に處する、十月に滿ちて生るることを示現す。一切の諸佛は定めて宮館を捨て、樂處て出家を行す。一切の諸佛は定めて菩提樹下に生じて一切の法を覺る。一切の諸佛は定めて一念の中に一切の佛法を覺り、一切の世界に於て、普く如來の神力自在なることを現す。一切の諸佛は定めて時に隨つて教化し正法輪を轉ず。一切の諸佛は定めて時に隨ひて諸の善根を種る、彼の爲に説くことを知る。一切の諸佛は定めて實時に隨ひて佛事を失はず。一切の諸佛は定めて菩薩の功徳具足せることを知りて後に説く。一切の諸佛は定めて衆生の一切の困難に隨つて、一念の中に於て

【如来を見たてまつらん】以下、此段は佛の益を叙す

悉く能善く答ふ。佛子、是を一切諸佛の十種の定法と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の法有り、若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、皆悉く疾かに十種の果報を得ん。何等をか十と爲す。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに一切の惡道を遠離することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに一切の善根を長養することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに一切の善根を満足することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに淨妙なる天上に往生することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、速かに一切の疑惑を除滅することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、已に菩提心を發せる者は疾かに不退轉を得、未だ發心せざる者は速かに阿耨多羅三藐三菩提の心を發さん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、未だ離生現道を得て有見を除滅せざるものには、速かに正しく離生現道を取らしむ、若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、速かに世間離世間の一切の諸根を清淨ならしめん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに一切の障礙を除滅することを得ん。若し衆生有りて如来を見たてまつらん者は、疾かに無畏不懼の辯才を得ん。佛子、是を一切諸佛を衆生の見たてまつる者は皆悉く疾かに十種の果報を得と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の清淨法の、一切菩薩の應に常に正念すべき有り。何等をか十と爲す。一切諸佛の過去の方便を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の清

淨の妙行を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の波羅蜜を滿足せることを、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の大願を滿足せることを、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の功德の積聚を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の過去の梵行を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の等正覺を成ぜしことを、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の色身の無量無邊なることを、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の無量無邊なる神力の境界を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。一切諸佛の十力無畏を、一切の菩薩は應に常に正念すべし。佛子、是を一切諸佛の十種の清淨法と爲す。一切の菩薩は應に常に正念すべし。

【一切の諸佛は一念の中に】以下、佛言の用を明

佛子、一切の諸佛に十種の一切智住有り。何をか十と爲す。一切の諸佛は一念の中に於て、悉く一切法界の三世の一切衆生の心心の所行を知る、一切の諸佛は一念の中に於て、悉く善く三世の一切衆生の種種の業報を分別す。一切諸佛は一念の中に於て、一切衆生の應すべき所に隨ひ、或は帝足を以て、或は眞足を以て、或は說法を以て之を教化す。一切の諸佛は一念の中に於て、悉く能善く一切法界の十方の衆生の諸心の相を取り、一切の世間に如來の出現を承現す。一切の諸佛は一念の中に於て、一切法界の中の一切衆生の希望欲性の、應に化現すべき所に隨ひて、如來を見なてまつらしむ。一切の諸佛は一念の中に於て、一切法界の中の一切衆生に、如來の住持の神力自在なることを承現す。一切の諸佛は一切法界の中の一切衆生の行に、一切の佛の諸の熾然を離れたる

【佛子云云】以下  
妙定の自在を明す

ことを説き、其所隨に隨ひて衆生を化度す。一切諸佛は一念の中に於て、一切至處の道を以て、悉く一切法界の中の一衆生の彼彼の諸趣を知る。一切諸佛は一念の中に於て、一切法界の中の一の方處の、一切の衆生にして如來を念する者には、悉く見ることを得しむ。一切諸佛は一念の中に於て一切法界の中の衆生の、心の樂處所に隨ひて、如來の形色を悉く見たてまつることを得しむ。佛子、是を一切諸佛の十種の一切智住と爲す。佛子、一切諸佛に十種の無量不可思議なる三昧有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は一切法に於て常に定まりて亂れず、一念の中に於て一切衆生の爲に一切の法を説く。一切の諸佛は一切法界の一切衆生に於て、常に定まりて亂れず、一念の中に於て、悉く衆生の爲に、無我の實際を分別し演説す。一切の諸佛は一切法界の三世の諸法に於て、常に定まりて亂れず、一念の中に於て億の三昧に入る。一切の諸佛は一切法界の十方の佛刹に於て常に定まりて亂れず、一念の中に於て悉く遍く一切の佛刹に遊行す。一切諸佛は一切法界に於て普く無量無邊の佛の種種の身を現じ、常に定まりて亂れず、一念の中に於て一切の世界は遍く現せざること無し。一切諸佛の身口意の業は一切の法界に充滿して、常に定まりて亂れず、一念の中に於て一切衆生の心藏の欲性を分別し演説す。一切諸佛は一切法界の一切の法性に於て、常に定まりて亂れず、一念の中に於て、悉く能く離欲の實際を究竟す。一切諸佛は一切法界の一切世界の緣起に於て、常に定まりて亂れず、一念の中に於て一切の因縁を分別し演説す。一切諸佛は一切法界の一切の世間と離世間との法に於て、

常に定まりて亂れず、一念の中に於て無量に莊嚴し、一切衆生の爲に遍く諸佛を現じて窮盡有ること無し。一切諸佛は一切の衆生と一切の法界とに於て、正受して礙ふること無く、常に定まりて亂れず、一念の中に於て諸佛の趣に至り、無量の解脫彼岸を究竟す。佛子、是を一切諸佛の十種の無量無邊の不可思議三昧と爲す。

佛子、一切の諸佛に十種の無礙の解脫有り。何等をか十と爲す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、悉く能く普く不可説不可説の諸佛の出世を現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、悉く能く普く不可説不可説の諸佛の淨法輪を轉ずることを現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、不可説不可説の衆生を教化し調伏す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、普く不可説不可説の佛刹を現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、不可説不可説の菩薩を現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、普く三世一切衆生を現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、遍く三世の一切衆生を現す。一切の諸佛は一微塵の中に於て、普く三世一切の諸佛の佛刹を現す。佛子、是を一切諸佛の十種の無量の莊嚴と爲す。

大方廣佛華嚴嚴經 卷第三十二

東晉天竺三藏佛跋致陀羅譯

如來相海品第十九

【如來相海品】第六會第八の說法にして、佛の九十四の相好を擧げて佛の相狀を示して佛の勝果を顯す。【如來の頂上】下、九十四相の依たる十九處を明し、第一に佛の頂相に三十相を擧げ、各相に四義の釋あり、即ち相名、體莊嚴、光業用、成益を解す。【明淨】如來の光明は遍く十六法界を照して清淨らしむる義なり。

爾時、普賢菩薩摩訶薩、諸の菩薩に告げて言はく、「佛子、諦かに聽け、善かに聽け。善く之を思念せよ、當に汝が爲に如來の相好を説くべし。如來の頂上に大人の相有り、名けて明淨と曰ひ、三十二の寶を以て莊嚴と爲し、普く無量の大光明網を放ち、遍く一切の十方世界を照す。如來の頂上に大人の相有り、名けて普照佛方便海と曰ひ、圓滿なる雜寶を以て莊嚴と爲し、種種の摩尼寶王もて莊嚴し、金剛光明世界の起す所にして、普く一切法界を照す。如來の頂上に大人の相有り、充滿法界雲と名け、妙寶の光明は、普く一切の法界、一切の世界、如來の功德智慧、十方の世界海雲と、菩薩の功德海雲とを普く一切の法界、一切の世界、如來の功徳智慧、十方の世界海雲と、菩薩の功德海雲とを照す。如來の頂上に大人の相有り、名けて普照と曰ひ、悉く不可思議の諸佛世界の金剛摩尼の妙寶の光明を現じ、觀るに厭足無く、衆寶華聚の如く、奮迅して普く一切法界の佛の寶光明を放つ。如來の頂上に大人の相有り、瑠璃寶と名け、普く一切法界の大自在雲を照す、摩尼寶王の相もて種種に莊嚴し、普く一切の十方世界を照す。佛の功徳を

【伊那羅】(Itana) 四陀羅即也 帝釋天玉の青珠の 意にして新譯は四 陀羅寶と言ふ

數々に因縁の如く所にして、悉く如來の大寶光雲を放ち、普く菩薩の消場場にて結願 跌坐するを照し、普く菩薩の自在神力を現じ、如來の力を覺り、普く一切十方の佛刹を照 して六種に雲照し、大法界の虚空の中に於て、普く無量自在の一切智雲を現す。如來の頂 上に大人の相有り、名けて平等なる如來の百億億雲輪塔寶海と曰ひ、如來の光明を放ち て、普く一切の法界、十方の世界、菩薩の功德海を照し、三世の佛の智輪海を安立す。如 來の頂上に大人の相有り、佛光廣雲と名け、伊那羅寶、如意王寶、摩尼王寶を以て莊 嚴と爲し、普く一切世界の法界の菩薩を照し、光輝燦雲は、普く一切如來の好色百億海及 び世界海、淨佛力海を照す。

如來に大人の相有り、圓滿光明雲と名け、種種の寶華もて莊嚴す。琉璃摩尼寶玉の光 明は、法身及び諸の菩薩を讚歎し、一切十方の世界海の中に如來地を敷して、一切衆生 をして如來の諸力の境界に趣向せしめ、普く無量無邊の如來の淨地を現じ、無垢清淨に して大光明を放ち、普く一切諸佛の世界を照す。如來に大人の相有り、菩薩の行雲光 明雲と名け、無量の世界の中の如來は、無量種種の色寶の光明を放ちて、普く一切法界 の佛刹を照し、無量の如來の妙音を出して、皆悉く如來の甚深の大法を分別し演說 す。如來に大人の相有り、普照雲と名け、琉璃、伊那羅、金剛寶、無量の色、清淨の摩尼寶も て莊嚴し、琉璃色の光明を放ちて、皆悉く遍く一切諸海を照し、佛の無量の微妙の音 聲を出して、一切の十方世界に充滿し、普く一切の佛の智慧海と無量の化身とを現す。如

【四種の菩薩行】  
 一は波羅蜜行、二  
 は菩提分法行、三  
 は神通行、四は成  
 熟有情の行を總  
 括するなり。

來に大人の相有り、名けて覺雲と曰ひ、佛の頂の右面は寶寶華鬘を以て莊嚴し、一切の  
 世界に於て道場を莊嚴し、一切の法界の世界を清淨にし、一切の虛妄をして捨悉く解  
 脱して淨法界を覺らしむ。如來に大人の相有り、光明雲と名け、心海王如意法の寶を以  
 て莊嚴す。如來の頂相は普く十方世界の諸菩薩雲を照し、最上の智身法身を長養し、一切  
 如來の相海を行じ一切菩薩の法界雲を満足す。如來に大人の相有り、一切莊嚴雲と名け、  
 金剛琉璃の華普く照して、一切法界海の世界を莊嚴し、衆寶の蓮華を以て莊嚴と爲し、皆  
 悉く一切法界に充滿し四種の菩薩の行を自在に歸子咲して、一切の法界海に充滿す。如  
 來に大人の相有り、佛三昧海行雲と名け、一切の法界海を莊嚴し、念念の中に於て普く無  
 量の如來の莊嚴を現じ、一切不可思議法界の世界に充滿す。如來に大人の相有り、化海普  
 照雲と名け、妙寶の蓮華は須彌山王の如く、無量寶の光明海を出生す、佛意の起す所  
 盧舍那の住する所にして、無量の一切の化海を出生す。如來に大人の相有り、一切如來  
 解脱雲と名け、離垢の勝寶を以て莊嚴と爲し、普く照して一切如來の歸子座を莊嚴す、其  
 座の中に於て、悉く一切如來の色像を現じ、大寶光明を放ちて、無量の佛法の大海を  
 演説し、一切諸佛の刹海を莊嚴す。如來に大人の相有り、覺佛種姓雲と名け、琉璃華、金  
 の寶蓮華に於て、無量の寶正法光明雲を放ちて、一切如來の光明を嚴淨し、普く一切  
 の清淨法界を現じ、衆寶の光明は無壞解脫にして、遍く甚深の諸の法界海に入り、  
 普く無量の自在力海を現す。如來に大人の相有り、無量寶光明雲と名け、過去の清淨

の善根を不現し、清淨の智日を出生して、普く十方の智慧法界を照す。如來に大人の  
 相有り、普照自在雲と名け、如來の頂の寶妙の摩訶薩、瑤瑤の光明は普く一切の法界  
 海の佛を照し、悉く一切の諸佛得海を現じ、如來の智慧を具足し圓滿す。如來に大人の  
 相有り、大一切普照光明と名け、如來の寶相は清淨に莊嚴し、普く一切無量無邊の如  
 來と菩薩の妙智慧法と一切法界とを照す。如來に大人の相有り、明淨雲と名け、寶華瑤  
 瑤の月は無量百千の光明を放ち、普く一切法界、虛空界、一切佛刹を照し、普く十方の  
 一切如來を現す。如來に大人の相有り、燦光明雲と名け、一切寶の光明は普く一切法  
 界を照し、普神は淨法輪を轉じて、悉く如來の妙光明雲を放ち、普く一切の十方世界  
 を照す。如來に大人の相有り、普現一切莊嚴雲と名け、無量の寶光明は一念の中に於て  
 一切法界に普く一切の菩薩の道場を普提標下に現して、普雨覺を降することを見じ、又能  
 く普く一切諸佛を現す。如來に大人の相有り、法界因雲と名け、如意妙寶として莊嚴し、見  
 るに麗き星ること無く、大寶光明網を放ち、普く一切衆生の諸の寶海を現す。如  
 來に大人の相有り、名けて普照淨法輪雲と曰ひ、能く如來の正法を流淨ならしめ、普く  
 照して一切の諸佛を莊嚴し、深く一切不思議の法流を降り、普く過去未來現在の諸佛の法  
 界を照し、無量の如來の化身を生ず。如來に大人の相有り、普照諸佛海雲と名け、十  
 方の一切世界海の中に悉く摩訶薩を離れ、普く一切の如來法雲を見す。如來に大人の相有  
 り、淨燦雲と名け、方便して深く一切衆生、一切菩薩、一切如來の不可思議の法界法雲に

【普照法界遍光明相】以下、佛の眉雲を擧げて其勝徳を顯す。  
 【自在云】以下、佛の眼相を説く。  
 【慧眼】五眼の一にして、智慧の眼即ち諸法の空理を了達する二乗具有の智なり。

入り、普く一切の法界を照す。如來に大人の相有り、分別法界と名け、如來の智慧は、廣く佛地と一切の菩薩衆と無量の法海と無量の佛刹とを照し、一切の衆生をして佛の境界に入り、普賢菩薩の隨行と佛の平等智と一切の清明とを具足せしむ。如來に大人の相有り、一切世界海安住普照雲と名け、一切の法界虚空界の寶光明雲は見るに厭足ること無く、普く道場の一切の菩薩と、諸の如來身とを現じ、無量の普功德雲を生ず。如來に大人の相有り、一切寶光焰雲と名け、佛の眉間の相の中に於て無量の淨寶光明を出生し、普く一切十方世界を照し、淨く一切の諸佛菩薩の行を照し、法王の光明は普く法界を照し、悉く能く一切の光明を長養し、一切の法界の光明もて莊嚴し、普く一切の諸の菩薩海を照し、如來の力雲は普く一切十方の佛刹を照す。如來に大人の相有り、一切法界莊嚴雲と名け、如來の頂相は鬘次に漸く起り、闍浮檀金の衆寶もて莊嚴し、種種の金色の光明を放ち、念念の中に於て普く一切世界の諸佛を現じ、悉く能く普く一切の佛刹を照し、一切の菩薩の諸の功徳雲を莊嚴す。如來の頂相は悉く能く三十二相を莊嚴し、又能く一切の法界を莊嚴す。

如來に大人の相有り、普照法界遍光明雲と名け、佛の眉間の相は悉く能く普く一切の妙寶、一切の衆色、一切の日月、一切の佛海を照し、十方無量の光明海を出生して、一切の諸の如來身を莊嚴し、一切如來の法界を演說す。如來に大人の相有り、自在雲と名く、佛の清淨眼は、衆寶莊嚴し、慧眼清淨にして、諸の法界に於て障礙する所無く、

【勝妙の鼻相】以下、佛の鼻相を明す。

【廣長舌相】以下佛の舌相の勝果を説き、四攝を明す【尸羅】(Sila)戒又は清涼と譯す。(前註)

青光明雲一切を示現す。如來に大人の勝妙の鼻相有り、清淨の衆寶を以て莊嚴と爲し、一切衆寶の妙色を覆と爲し、佛の寶華雲一切の菩薩も能く思議することも無く、悉く一切衆生と諸佛の法界とを知る。

如來に大人の廣長舌相有り、悉く能く能く十方世界の一切法界を覆ひ、過去に善根を修習して得る所、一切の寶王清淨の光明は普く一切法界の尸羅の心を照し、又一切三世の諸佛を照し、悉く能く一切の法界を莊嚴し、無量の微妙の音聲を生じ、不思議の衆寶を以て莊嚴と爲し、普く無量の諸の光明海を照し、佛の妙音聲は悉く遍く一切の法界と一切の世界海とに充滿す。如來に大人の相有り。法界地雲と名く、舌掌安住して一切の衆寶を以て莊嚴と爲し、一切法を安住し、十方の諸佛の具足せる音聲を生じ、

悉く能く一切の佛刹を清淨にし、一切者佛の不可思議の音聲海雲を分別す。如來に大人の相有り、願法界雲と名く、舌端の妙相は金色の淨寶を以て莊嚴と爲し、無量の金色の光明を生じ、普く一切諸の如來海を照し、大師子吼して妙音聲を響ひ、悉く皆遍く一切の世界に至り、一切衆生聞かざる者無し、不可思議劫に於て修行して得し摩訶

普く一切の音聲海を現じ、普く一切を照し、衆生樂聞して厭是有ること無し。如來に大人の相有り、平等法門雲と名く、佛の舌端の相は無量佛刹をして皆悉く清淨ならしめ、如意の妙寶を以て莊嚴と爲し、無量の種種の音聲を生じて、一切諸佛の法界を覆敷し、普く一切菩薩の法界の妙功德雲を現じ、普く一切の菩薩を覆ひ、普く一切の諸

【斷斷の相】此段  
如來の斷斷の一相  
を説く。

【大牙雲】以下、  
如來の大牙の相に  
四を擧ぐ。

佛菩薩の法に入り、悉く一切難垢の寶寶と清淨の佛刹とを現じ、悉く能く普く一切の佛刹を照す。

如來に大人の相有り、伊陀尼羅、淨摩訶の寶を以て莊嚴と爲し、諸の法界地は悉く其内に在り、諸の菩薩雲は皆悉く充滿し、難垢妙寶の光明を出生して、普く十方を照し、種種の香雲と種種の鬘雲とは、普く菩薩の内の諸の樓閣を照し、一切諸佛の和法を分別し、方便して自在神力に安住し、普く不可思議なる諸の法界雲を現す。

如來に大人の相有り、佛の大牙雲と名け、如來の右面の下の大牙の相なり、寶寶莊嚴して大光明輪を放ちて、普く法界及び諸佛の身を照し、普く光明輪を現す。十方の世界海及び衆生海を照し、勝鬘雲を以て莊嚴し、如來に大人の相有り、寶寶須彌藏と名け、如來の右面の上の大牙の相なり、如意寶王藏、勝鬘雲は、照して以て莊嚴し、寶光明を放つこと法界と等しく、一一の光明の中に普く一切諸佛の自在と一切の佛刹の莊嚴せる道場とを現す。

如來に大人の相有り、照一切寶寶須彌山燈雲と名け、如來の左面の下の大牙の相なり、一切の諸相を分別し解説し、香華、樂寶、寶方便輪を以て莊嚴と爲し、寶光明輪を放ちて普く一切の世界海を照し、普く一切の佛の蓮華藏の師士の座を照し、難垢の音聞海雲の眷屬に圍繞せらる。如來に大人の相有り、普照佛雲と名け、如來の左面の上の大牙の相なり、清淨の寶寶及一切淨淨の寶寶輪の華を以て莊嚴と爲し、不可思議の微妙の音聲を出生

【金髻者】須旋  
 舞文とす、佛の  
 舞の形狀なり、此  
 段佛の相を説く  
 【一切寶雲】以  
 下、佛の肩に五  
 相を擧ぐ。

し、普く一切如來の自在神力を現じ、一切の菩薩の功德を成就し、普く一切の虚空及諸  
 音の法、無量の法雲、一切の法海、諸佛の音聲及び一切の寶を照し、一切の諸佛を分別す  
 る衆妙の音聲出生して法界に充滿す。

如來に大人の相有り、金髻者と名け、如來の一一の毛孔に無量の相海門雲を出し、種  
 種の色寶は日光明海を放ち、閻浮檀金の色は普く法界の一切世界、一切如來を照す。如  
 來に大人の相有り、一切寶雲と名け、如來の右肩の相なり、一切の寶色、淨蓮華の色、  
 明淨の寶色の光焰は普く一切菩薩の内法華雲を照し、悉く一切如來の法海を照す。如來  
 の右肩は平滿なる大人の相にして、清淨の閻浮檀金の色は普く菩薩の法輪法界を照し、  
 及び一切の如意寶王を照す。如來に大人の肩の相有り、閻浮檀の蓮華の色と如來の圓滿な  
 る諸の功德海とを以て莊嚴と爲し、普く無量の諸の光明網を放ちて、悉く一切世界  
 の法界を照し、如來の無量の自在と諸の神力雲とを示現す。如來に大人の相有り、周遍  
 普照雲と名け、如來の左肩の相なり、衆寶もて莊嚴し、閻浮檀金色の光明を放ちて、悉  
 く能く一切の法段に充滿し、普く一切諸の如來海を照し、種種の寶香もて一切諸佛の刹  
 海を莊嚴す。如來に大人の相有り、普照莊嚴雲と名け、如來の右肩に動轉有ること無く、  
 無量の佛の妙明を出生し、法界雲を垂れて菩薩の衆を充滿し、普く照して一切の法  
 界を莊嚴す。

【寶頂雲】如來の  
 胸の妙相なり。  
 此段如來の相を  
 説く。

如來に大人の相有り、海頂雲と名け、如來の胸に妙妙の相海有り、以て莊嚴と爲す、柔

【勝妙相續普現雲】如來の勝妙の相を以て、

【普現如來雲】以下、如來の勝妙に七の勝相を説く、

歡にして細清、種種の衆寶の焰輪を以て、周遍にして甚深の法海の音聲を開發す。如來に夫人の相有り、勝妙相續普現雲と名け、如來の右脇は勝妙清淨の法界の輪地を以て莊嚴と爲し、清淨の寶雲もて之を覆敷し、無量の如來の化身を出生して、普く一切の十方法界を照す。如來に夫人の相有り、普現如來雲と名け、勝妙の功德藏と菩薩の功德寶の天冠とは、普く極高雲を照し、離垢清淨にして、普く十方無量の諸神の自在神力を現じ、二世の一切諸佛の法海の淨行を開示し、道場を菩提樹下に坐して等正覺を成ず。如來に夫人の相有り、開敷蓮華雲と名け、如來の勝妙の功德相續し、衆の妙寶華寶の輪もて莊嚴し、香焰光明を放ちて、普く一切の蓮華の形色の世界を現す。如來に夫人の相有り、可悅樂金色雲と名け、一寶王藏の勝妙の功德相續し、一切寶の心王藏は摩尼寶の光明輪を放ち、離垢清淨にして極大高顯なり、普く一切諸佛の内方便の功德藏を照し、普く一切の法界を照す。如來に夫人の相有り、勝海雲と名け、勝上の虚空寶、香の光明を放ちて普く十方一切の道場を照し、圓滿なる瑠璃の寶、香、燈、鬘は十方に充滿す。如來に夫人の相有り、電光雲と名け、佛藏の光明を放ち、普く法界海を照す。如來に夫人の相有り、菩薩衆は寶蓮華に坐して、佛藏の光明を放ち、普く法界海を照す。如來に夫人の相有り、普現法界雲と名け、第三の勝相海なり、一切の寶海刹を具足し成滿して、普く照して無量の菩薩の法界を開現す。如來に夫人の相有り、普照最高雲と名け、第四の勝相海なり、離垢の衆寶光明海を放ちて、普く一切法界、一切如來、一切世界を照し、一切衆生海を莊

【傳一切法輪妙音聲雲】以下、如來の下分相に二の勝相を説く。

【手掌】以下、如來の手に十二を擧げて、勝相を説く。

第十

如來に大人の相有り、傳一切法輪妙音聲雲と名け、下分の勝相なり。離垢淨淨にして一切の正法道の音聲の光明、一切の佛の内心の相海と一切法界とを照す。如來に大人の相有り、莊嚴雲と名け、十方の勝相なり、十方の一切の諸佛菩薩の淨行を宣暢し、離垢清淨の光明を覺悟し、三世諸佛の一切諸佛の相海を莊嚴す。

如來に大人の手掌の相有り、千福の寶輪を具足し、種種の業寶を以て莊嚴と爲し、大光明を放ちて普く法界を照し、正法輪を轉じて普く一切諸佛の如來海を照し、一切の佛の功德海を充滿し、種種の妙寶して法界を莊嚴す。如來に大人の相有り、海照雲と名け、如來の寶手は衆寶莊嚴して、普く淨土の光明焰雲を放ち、虚空の如來と菩薩との諸佛の相海を莊嚴し、菩薩の行海を莊嚴す。如來に大人の相有り、普莊嚴雲と名け、如來の影手は因陀尼羅、璽瑠寶の雲を以て莊嚴と爲し、普く一切法界一切世界の蓮華藏菩薩の安住する寶藏を照し、十方一切の淨土を莊嚴し、普く一切諸佛の海雲の清淨法身を照す。如來に大人の相有り、離垢淨淨雲と名け、淨土の光明は淨光、刹土を放ち、十方を照し、普く悉く變化の刹土を出して、菩薩の淨土の光明を莊嚴し、一切淨土の行海を究竟じて彼岸に到る。如來に大人の相有り、普現一切衆寶雲と名け、寶藏海雲も莊嚴し、如來の蓮華は一切衆寶の蓮華を充滿して、寶光明雲を放ち、普く一切の法界を照す。如來に大人の相有り、普照明淨雲と名け、寶焰の光明海を放ちて法界を照し、一切の衆香

の光焰もて莊嚴し、普く寶華の幢蓋を現じ、一切の佛の世界網をして悉く淨く莊嚴せしめ、普く一切の道場を照す。如來に大人の相有り、瓊瑠瓔雲と名け、一切世界の衆寶色の地、普く照して莊嚴し、普諸佛の金色の光明を放ち、一切の莊嚴を以て之を莊校し、一念の中に於て皆悉く一切法門を示現す。如來に大人の相有り、智慧幢蓋と名け、金剛の寶華を以て莊嚴と爲し、紺浮輪金色の光明を放ちて、普く一切世界を照す。如來に大人の相有り、安住蓮華光明雲と名け、衆寶妙華を以て莊嚴と爲し、大光明網を放ちて一切世界の諸の須彌山を覆ふ。如來に大人の相有り、充滿法界如來雲と名け、彌堵の淨寶を以て莊嚴と爲し、大光明を放ちて普く一切諸佛の世界を照し、悉く如來の蓮華藏の師子座に坐したまふを見る。又復普く一切の法界を照して一切の相を現じ、如來の妙手は普く一切の自在の相を現じ、千幅相輪は清淨にして具足し、種種の衆寶を以て莊嚴と爲し、佛の手は一切の刹雲を充滿し、普く一切諸の法界雲を照す。如來に大人の相有り、名けて成就佛刹海雲と曰ひ、佛の右手の指の寶相なり。清淨の法界の、清淨の光焰は普く照すこと、淨水の月の如く、衆の寶華を出し、一切妙寶の音聲を出し、普く一切諸佛の刹海を現す。如來に大人の相有り、安住一切寶雲と名け、普く諸佛の寶藏法界を照し。佛の指相に於て如意妙寶王雲を出し、衆寶もて莊嚴し、大光明網を放ちて普く一切の法界雲と及び諸佛雲とを照し、普く照して一切菩薩諸の功德海を莊嚴し、普賢菩薩の淨行妙音摩海を出し、生じて、一切の佛刹に聞かざる者無く、又諸の菩薩の心を聞奏し

【寶馬藏】此段如來の陰藏(馬王相)に三を擧ぐ。如來の陰藏は馬の如く隱密にして外現せずと言ふを以て寶馬藏の名あり三十二相の一。

【普示現雲】此は如來の祥相に三勢相を擧ぐ。

【伊尼延】(Jiney) 彌伽如魔王相と譯す。足の踏相なり。

普照して、皆悉く無量の法界を滿足し、摩尼寶王を以て莊嚴と爲し、種種の日光輪は、皆悉く普く一切の法界を照す。

如來に夫人の寶馬藏の相有り、右に隱密し、衆寶莊嚴して、普く一切の法界及び虚空界を照し、一切の衆寶は法界海を莊嚴し、一切如來の莊嚴せる微妙音聲を生ず。如來に夫人の相有り、名けて一相現一切相海雲と曰ひ、如來三福田の處に安處したまひ、一切の衆寶を以て莊嚴と爲し、無量不可思議の妙寶の光明を出生して、普く十方一切の法界を照し、普く分別一切衆相現一相去を現じて、一切諸佛の自在神力を照現す。如來に夫人の相有り、一切法界海雲と名け、普く十方の諸の如來の處と及び一切法界の法輪法界とを照し、悉く普く一切相現を承現す。

如來に夫人の相有り、普示現雲と名く、如來の右膝に衆寶して莊嚴し、妙法種種の音光を放ち、隨順に安住して、一切の音聲を出し、一切の寶王を以て莊嚴と爲し、念念の中に於て悉く慈く慈く心王法雲を云現す。如來に夫人の相有り、普照一切相向海雲と名け、如來の左業は悉く普く一切の寶海に充滿し、隨順して法海の莊嚴に安住し、一切の光明海を放ちて、悉く普く普く一切の衆生と無量の相海とを照す。

如來に夫人の相有り、伊尼延の右脇に闍浮檀金色の光明を放ちて、普く一切の世界を照し、無量諸佛の刹土を雲動し、佛の音聲を出して一切普く聞き、無量の菩薩の化身を生じて、一切諸佛の世界、及び虚空界に充滿し、明淨の光明を放ちて莊嚴し、普く一

【毛端】以下、佛の毛端相に一の勝相を擧ぐ。

【菩薩海莊嚴云】此段佛の足相に十三の勝相を擧ぐ。

切を照して、諸部の刹をして普悉く清淨ならしめ、菩薩の變化の諸の法界を裁すること猶し虚空の如し。如來に大人の相有り、伊尼延の左脇は鍊金の色の如く、常に一切妙寶の光明を放ちて、無量諸師の世界に充滿し、一切諸佛の法化を開發して無量諸師の法海を莊嚴す。如來に大人の相有り、毛端と名け、内に一切の佛刹を現じ、一毛孔に於て、悉く一切寶の光明藏を放ち、普く十方一切の法界を照し、一毛孔に於て一切如來の自在と諸法界云とを示現す。

如來に大人の相有り、菩薩海莊嚴云と名く、如來の金剛の足の下は閻浮檀金の色、一切寶の光明網を放ち、十方の諸佛刹雲に充滿し、一切の菩薩の法化を開發し、無量の菩薩の變化を出し、一切寶倉の光明を放ち、菩薩海に任じ、能く一步に於て諸佛の刹に遍す。如來に大人の相有り、時淨雲と名く、佛の足趺の上は一切の衆寶を以て莊嚴と爲し、妙寶の光明を放ちて、一切の諸佛菩薩の火光明藏を示現し、普く無量の諸の如來雲を照す。如來に大人の相有り、名けて覺雲と曰は、普く一切如來の指間を覆ひ、衆の寶土もて莊嚴し、諸の寶光を放ち、念念の中に於て、一切諸佛の自在を示現し、普く無量の諸佛の法海を照し、一切の道場を示現して、悉く未來無量際の時を照す。如來に大人の相有り、名けて遍照法界海雲と曰ふ、如來の足下は千輻相輪にして、種種に莊嚴し、百千の衆寶の光明を放ちて、普く一切の法界の諸の世界海を照し、衆寶の燈焰、妙莊嚴の藏は、普く十方の一切諸佛を照し、無量の香光を以て莊嚴と爲し、普く一切の淨法界海を

照す。如來に大人の相有り、示現一切諸佛海雲と名け、清淨なること空の如く、法海を照して十方に充滿し、一切諸の菩薩雲を發起し、妙音聲を出し、衆寶の華雲を以て莊嚴と爲し、香燈の光焰示現して普く一切の世界を照す。如來に大人の相有り、自在光明雲と名け、衆寶莊嚴し、一切諸佛の光明を示現して、法界海及び諸の道場を淨め、常に如來の智慧光明を放ち、一切の衆相は悉く一相と爲り、法界無雜にして種種に莊嚴す。如來に大人の相有り、法界海音聲雲と名け、如來の足下の後分は衆寶莊嚴して、普く一切諸の法界海を照し、一切諸佛自在に莊嚴して、普く化輪に入りて、一切法界を覆ひ、一一の身に於て法界の妙音聲雲を出生す。如來に大人の相有り、深寶源底と名け、衆寶の華雲し、閻浮檀金の色、圓滿の光明を放ちて、普く十方世界の法界を照し一切莊嚴の道場を顯現す。如來に大人の相有り、一切寶月光明と名け、伊那尼羅寶藏もて莊嚴して法界を照し、念念の中に於て悉く能く如來の法海を示現す。如來に大人の相有り、普賢藏石盧舍婆雲と名け、最高の寶光明は一切の佛の道場座敷を照し、金剛伊那尼羅寶顯現して莊嚴す。如來に大人の相有り、平等光雲と名け、衆寶妙華を以て莊嚴と爲し甚深の法界の音聲を出生し、一切の法界及び虚空界に遍く、一一の相に於て普く一切諸の如來海を照し、仰の甚深の自在と菩薩の法界海に入り、盡くとも盡すべからず。如來に大人の相有り、示現莊嚴雲と名け、清淨の閻浮檀金の色、衆寶莊嚴し、普く種種の妙色の光明を放ち、遍く一切莊嚴の佛刹を照し、佛雲は無量の世界に充滿し、菩薩の自在

【佛子】以下、本品の結文なり。廣く佛の大相を解説して無盡を顯表するなり。

【佛小相光明功德品】第六會第九の品法にして前品の説を受けて佛の勝徳の益用を明す。【如來應供等正覺】以下、如來の果用の攝益と因用の攝益とを明す。

法海を莊嚴し、普く一切諸佛の功德及び諸の菩薩の摩訶の藏を照して法界を莊嚴す。如來に夫人の相有り、諸佛自在普示現雲と名け、諸の寶輪を轉じ、衆寶莊嚴して不思議の如來の光明を放ち、妙香普く一切世界、無量佛海に聞え、一切の佛の音聲海を演出し、諸の世界に於て菩薩の門、佛の自在雲を現す。

佛小相光明功德品第三十

爾時、佛、寶手菩薩に告げて言はく、『如來應供等正覺に隨形好有り、名けて海王と曰ふ。彼光明を出す、名けて明淨と曰ひ、七百萬阿僧祇の光を以て眷屬と爲す。又菩薩摩訶薩は兜率天に於て大光明を放つ。名けて幢王と曰ひ、普く十世界微塵數の刹を照し、遍く彼處の地獄の衆生を照して、苦痛を滅除し、彼衆生の十種の眼耳鼻舌身意の諸根の行業をして、皆悉く清淨ならしむ、彼諸の衆生は光明を見已りて皆大いに歡喜し、命終して皆兜率天上に生る。天上に生れ已りて、天の妙音を聞くを不可樂と名く。此音聲は諸の天子の言を語る。不放逸を以ての故に、諸佛の所に於て善根を種をたるが故に、善知識に遇ひしが故に、盧舍那佛の威神力の故に、地獄に於て命終し此天上に生ぜしなり。』

【如來の是下】以下、第二段に先の光樂道を救ふことを明す。

【天上に生れ】以下、前の聲の天樂を利益することを明す。

【四維】東北、東南、南、南西、西北、西、四方を言ふ。

如來の是下の千輻輪の中に妙光明光り、普照王と名く、彼海王の勝形好處に於て、悉く四十の廣大の光明を放つ、一をば清淨功德と名く、普く六十億那由他の佛刹微塵數の世界を照し、衆生の境界に隨ひ、衆の善根に隨ひ、衆生の意に隨ひ、乃至普く河鼻地獄を照し、其中の衆生命終して、皆兜率天上に生る。天上に生れりて天の妙音を聞き、是の如きの言を作さく、「善哉善哉、諸の天子、盧舍那尊佛は今娑竭三昧に住したまふ、應當に敬念すべし」と。

爾時、諸の天子は天の勸生の微妙の音を聞きて、領ち是念を作さく、「命なる哉奇なる哉、何に由りてか此微妙音聲を出す」と。爾時、音聲は諸の天子に語りて言はく、「我此天音は諸善の功徳の成就する所なり。諸の天子、我我を説きて前も我に著せず、我所に著せざるが如く、一切諸佛も亦復是の如く、自ら是れ佛なりと説きて前も我に著せず、我所に著せず。諸の天子、我音聲は東方南西北方四維上下より來らざるが如く、諸の天子、業報の成滿も亦復是の如く十方より來るに非ず。諸の天子、猶し汝等が昔摩訶羅刹に在りしときのみ如し、十方より來らず、但倒愚癡に纏はるるを以ての故に、地獄の身を得たるも本來處無し。普照王の光明の十方より來らざるが如く、我天の音聲も、亦復是の如く、十方より來るに非ず。但三昧の善根力を以ての故に是の如きの微妙音聲を生ず。般若波羅蜜力の故に是の如きの自在神力を示現す。諸の天子、譬へば須彌山王に三十三天の淨妙の宮殿、種種の樂具有るも、十方より來らざるが如く、我天の音聲も、亦復是の

如し。諸の天子、譬へば億那由他の微利微塵の世界を末して微塵と爲し、是の如き微塵の衆生に我爲に法を説きて、彼所處に隨ひて大いに歡喜せしむ、然も我彼に於て厭惡の心を生ぜず、疲倦の心を生ぜず、放逸の心を生ぜず、清淨の心を生ぜざるが如し。諸の天子、盧舍那菩薩摩訶薩に往するも、亦復是の如く、右手の掌の隨形好の中に於て一光明を放ちて無量の自在神力を生じ、一切衆生聲聞緣覺の知ること能はざる所なり。

汝等應當に盧舍那菩薩に往詣して恭敬し禮拜すべし、五欲に著して諸の善根を障ふることを莫れ。諸の天子、譬へば劫盡に須彌山を燒き悉く消滅せしむるが如し。諸の天子、五欲の纏心は念佛三昧を修して皆悉く除滅せらる、是故に諸の天子、當に報恩を知りて一向に盧舍那菩薩を敬念すべし。諸の天子、其れ衆生有りて報恩を知らざれば、是身を捨て已りて、三惡道に入らん。諸の天子、汝等地獄に在りしとき、光明の恩を蒙りて、地獄を捨て已りて此天に來生せり、應當に彼諸の善根を長養すべし。諸の天子、譬へば我天は男に非ず女に非ず、而も能く百千萬億の不思議の法を出生するが如し。諸の天子、天子天女の五欲の樂具、宮殿園林の如きは、皆悉く我の如く不生不滅なり。色受想行識も亦復是の如し。若し是の如く知らば、是を善く無著甚深の三昧海に入ると名くるなり。

時に諸の天子、是菩薩を聞きて、歡喜すること量無く、皆悉く一萬の華雲、一萬の

【淨飯王】 (C. 11)

hodana) 首圖 耶那の譯、釋迦族の王にして釋迦佛の父王たり。

【摩耶夫人】 (C. 11)

釋迦佛の母なり。

【意を清淨】

七佛通誠の第三に自淨の他教と異る標語たり。意を清淨ならしむるは無明煩惱の垢を除滅する意にして、從て佛性漸く顯現し來りて佛果に近くを以て是れ佛道の修行にして、菩薩行たり。

香雲、一萬の樂雲、一萬の幢雲、一萬の蓋雲、一萬の讚歎雲を化作せり。是化を作し已りて、盧舍那菩薩の住したまふ所の宮殿に往詣し、恭敬し供養して一面に於て住し、而も盧舍那菩薩を見たまつらず。時に天子有り、是の如きの言を作さく、「此菩薩は今已に命終せば、淨飯王の家に生れ、梅檀樓閣に處じ、摩耶夫人の胎に處せん」と。

爾時、諸の天子は天眼を以て盧舍那菩薩摩訶薩を觀するに、梵身天、欲界の諸天の恭敬し供養したてまつるを見る。時に諸の天子、是の如きの言を作さく、「我等若し先に往きて盧舍那菩薩を恭敬し供養せず、乃至一念の頃も兜率天に住して樂著の心を起さば我は則ち不可ならん」と。爾時、一の天子は十那由他の天子の眷屬と天より下りて閻浮提に至り、菩薩の所に詣でんと欲へり。時に天の妙音、天子に語りて言はく、「菩薩摩訶薩も亦命終して彼間に生れず、變化する所に隨ひて悉く彼をして見しめん。諸の天子、譬へば我は今、眼の見る所に非ずして、能く音聲を出すが如し。菩薩摩訶薩垢障に住するも亦復是の如く、眼の見る所に非ずして而も處處に命終受生を示現し、虛妄を捨離し、輪慢を滅除して樂著する所無し。是故に諸の天子、應當に速かに阿耨多羅三藐三菩提心を發して、意を清淨ならしめ、威儀堂に住して一切の業障、煩惱、報障、邪見障を悔過し、法界、虛空界、衆生界に等しき善の身口意業を以て、衆生界に等しき身、衆生界に等しき頭、衆生界に等しき舌を以て四障を悔過すべし」と。時に諸の天子は、是聲を聞き已りて、皆大いに歡喜し、心意柔軟にして天の聲に問うて曰はく、「菩薩摩訶薩は云何が悔

過したまふや

【邊見】五見（前註）の一にして斷常の二邊に執するを言ふ。斷見とは一度死すれば斷滅して相續を斷つと考へ、因果を信ぜざる妄見なり。常見は萬有常存にして不滅不變と妄信する邪見を言ふ。

爾時、天の聲、菩薩摩訶薩の三昧力を以ての故に、天の善根力の故に、諸の天子に答へて言はく、「業障等の罪は、東方南西北方四維上下より來りて心に積聚せず、菩薩摩訶薩は此業等は顛倒に因りて起りしことを知りて疑惑を生ぜず。諸の天子、我天の聲の隨業報行、隨戒、隨喜、隨定は寂滅なりと説きしが如く、諸佛菩薩も我家生の貪恚癡の業を説きて、而も實に我無く我所有ること無く、亦復是の如き所作の諸業は十方に於て求むるに悉く不可得なり。諸の天子、我天の聲は小福の衆生の聞くこと能はざる所なるが如し、地獄の衆生の應に化を受くべき者をば除く。諸の天子、聲は生滅に非ず、一切の諸業も亦復是の如く、生に非ず、滅に非ず、但業行に隨ひて果報を受く。諸の天子、我出す所の聲は無量劫に於ても窮盡すべからざるが如し。諸の天子、若し音聲に來去有りと謂はば即ち邊見に墮せん、一切の諸佛は斷常を説きたまはず、衆生の爲に方便して法を説きたまふをば除く。諸の天子、我天の聲は十方世界の應化する所に隨ひて、皆悉く聞くことを得るが如し、一切諸佛も亦復是の如く、應に度すべき者に隨ひて、皆悉く見たてまつることを得しむ。諸の天子、譬へば明淨の鏡、光の玻璃鏡の十世界と等しきもの如し、彼鏡の中に於て無量の刹を見る、一切の山川、一切の衆生、地獄餓鬼、若は好、若は醜、形類の若干は、悉く中に於て現す。諸の天子、意に於て云何、彼諸の影像是來りて鏡に入るや、不や」答へて言はく、「不」諸の天子、一切の業報も亦復是の如く、

來去の處無くして、雨も能く普賢の果報を出生す。賢へば幻師の能く人の目を欺すが如し。當に知るべし、諸業亦復是の如し。若し是の如く知らば、是を清淨にして眞實の海過と名けん。」

是法を説きたる時、百千萬億那由他の佛刹微塵数の諸の世界の中の覺率天子は、皆無生法忍を得。無量無量の不可思議の阿僧祇の欲界の諸の天子は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し。六欲の中の一の阿女は、普賢身を捨てて悉く男子と爲り、不退轉の菩提の心を得た。爾時、諸の天子は廣く普賢の廻向善根を聞きて、悉く十地の諸力莊嚴を得て三昧を具足し、普悉く衆生界に等しき普の身口意の業を成就し、一切の障を滅して皆清淨を得。百千萬億那由他の刹微塵数の七寶蓮華を見、一一の華上に皆菩薩結跏趺坐して、大光明を放つを見、彼諸の菩薩の一一の蓮形好の中より衆生界に等しき光明を放つ、彼光明の中に、衆生界に等しき普佛、結跏趺坐したまひ、應に度すべき所に隨ひて爲に法を説きたまふを見、れども、猶も離垢三昧の少分をも見ること能はざるなり。

爾時、諸の天子は、一一の毛孔に於て、衆生界に等しき妙香華雲を化作して、衆金那佛を供養したたまわれり。香華を散じ已りて、一一の華の中に諸の如来を見たまふ。時に彼香雲は、普く無量の清淨法塵數世界の衆生に熏じ、其香を蒙る者は身心快樂なり。譬へば比丘の第四禪に入るが如し。若し衆生有りて此香を聞ぐことを得ば、諸の罪業障は皆悉く斷滅せん。色聲香味觸に於て内に五百の煩惱有り、其外にも亦五百の煩惱有り。

【爾時】以下、得益傳通して無量の行を成ずることを明かす

【等行類】 欲、  
悲、癡の三種等分  
なるを等行と言ふ

【本生經】 十二部  
經の一。佛の因位  
時を種種なる譬喩  
を以て説ける經典

【周羅摩尼】 (六三  
dru) 周羅を小寶  
(Mani) 摩尼を如  
意珠と譯す。何れ  
も印度に於ける寶  
珠なり。

二萬一千の修行煩惱、一萬一千の志行煩惱、一萬一千の修行煩惱、一萬一千の修行煩惱、  
此の煩惱は皆悉く除滅し、彼諸の衆生は阿羅漢の淨智自在の光明 證根を具足せん。  
若し衆生有りて此菩薩を見ん者は、彼諸の衆生、一恒沙の轉輪聖王の積うる所の善根を  
種えん。謂ゆる白淨寶網轉輪王等なり。菩薩摩訶薩は、是の如きの轉輪王の處に安住し  
て、百千億那由他の佛刹微塵數の諸の世界の中に於て衆生を教化す。譬へば明鏡世界  
の月王如來は、十方無量劫の中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、乃至一念にも化身と作り  
て、來りて佛の所に詣で、法を聽かざる者有ること無く、彼佛は常に爲に廣く經法を説き  
乃至廣く爲に本生經を説き、其佛名を聞き、命終の後は皆其國に生らるが如し。菩薩摩  
訶薩、白淨寶網轉輪王の處に安住するも亦復是の如し。曼陀羅自在の光明を放つ、若  
し衆生有りて斯光に遇はん者は、皆菩薩の十地を得ん、當に知らべし、此等の衆生は悉  
く是れ光世に善根を修めし力なり。初禪を得ば未だ命終らずと雖も、梵天の處を以、梵天  
の樂を得ん、是の如く次第して諸禪を得ん者は、未だ命終らずと雖も、前も彼樂を得るが  
如し。是の如く菩薩摩訶薩も白淨寶網轉輪王の處に安住して、大光明を放らば周羅摩尼  
と名く。若し衆生有りて斯光に遇はん者は皆菩薩の十地を得、悉く無量の習學の光明を  
得、十種の眼の清淨の行業、乃至十種の意の清淨の業を得、淨力の三昧を具足し成就せ  
ん。是の如くして清淨の肉眼を成就す、譬へば菩薩摩訶薩、左の手を以て億那由他の佛刹  
微塵を持して東に行きて、億那由他の佛刹微塵數の世界を過ぎて乃ち一塵を下し、是の如

くして東に行き、此微塵を盡すが如し。是の如く菩薩摩訶薩は悉く能く彼微塵の数を了知し、亦諸塵の本初の末處及び塵を下す刹をも盡る、乃至十方も亦復是の如し。菩薩摩訶薩は復能く盡つて此諸の微塵を集めて、一刹と爲し、此佛刹に於ても亦分別して知る。佛、寶手菩薩に告げて言はく、「意に於て云何、是の如きの佛刹の廣大なること思議すべきて、不や、寶手菩薩、佛に白して言さく、世尊、是の如き佛刹は無量無邊にして思議すべからず。世尊、空なる哉奇なる哉。若し是喻を聞かんは此人得難し、聞きて信する者も亦復得難し。」

佛、寶手菩薩に告げて言はく、「是の如く是の如し。若し善男子善女人有りて、聞きて而も信ぜん者には我彼に記を授け、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成じ、一切種智を得しめん。」佛、寶手菩薩に告げて言はく、「譬へば千億の微塵の如きを、上の喻の如く此一切刹を托して微塵と爲し、彼諸の世界の一一の微塵は、悉く一切の佛刹の微塵と等し。菩薩摩訶薩は此微塵を取りて、具轉して更に種を、乃し八十に至る。彼一一の微塵の果を生ずることよ、悉く一切世界の微塵と等しきも、菩薩摩訶薩の業果の清淨の肉眼は、悉く分別して見る。亦念念の中に於て百千萬億那由他の佛刹微塵に等しき如來を見たてまつる。」

佛、寶手菩薩に告げて言はく、「譬へば鏡光玻璃珠の十佛刹微塵に等しき世界を照すが如し、此珠は白淨寶網轉輪聖王の善根の成ずる所なり。」

大方廣佛華嚴經

卷第三十二

東晋天竺三藏佛驮跋陀羅譯

普賢菩薩行品第三十一

【普賢菩薩行品】第六會第十の說法たり。前八品は修生差別の因果の說明なりしを以て今明なりしを以て今修顯平等の因果を明す。就中、當品は平等の因即ち普賢無盡の因行を説く廣大なる普賢の行を十門に綜括し各又十門を開きて百門となして一乘圓融の行たる、一切障の行たる、一切障の純圓教の理を顯表するなり。【爾時】以下一段は本品正説の因由を説く。【若し普薩摩訶薩】以下廣く普賢の行を明し、百門に分

爾時、普賢菩薩摩訶薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、向に説く所の如きは是れ微妙の説なり。何を以ての故に。一切の如來應供等正覺は化を受くる者の爲に應に隨ひて法を説きたまへばなり。愚癡の衆生は諸譯に纏はれ、我我所を計し、吾我的に見に著しく、常に顛倒に隨ひ、邪見の惑を生じ、邪なる虚妄を起し、縛の爲に縛せられて、生死に流轉し、如來の道に遠ざかる。是の如き等の諸の衆生の爲の故に、如來應供等正覺は世に出興したまふ。

佛子、若し普薩摩訶薩、一の瞋恚の心を起さば、一切の惡の中に於て此惡に過ぐるもの無けん。何を以ての故に。佛子、普薩摩訶薩、瞋恚の心を起さば、則ち百千の障礙の法門を受けん。何等をか百千と爲す。謂ゆる菩提を見ざる障、正法を聞かざる障、不淨の國に生るる障、惡道に生るる障、八難處に生るる障、疫病多き障、多く誘毀せらるる障、闇鈍の趣に生るる障、正念を失ふ障、智慧少き障、眼耳鼻舌身意等の障、惡知識に近づく障、惡

別して百千の障を  
一に括す。位に寄せて  
十は十住行の障、第十  
次は十住行の障、第十  
十廻向行の障なり。

件業に近づく障、悪人に近づく障、悪人と同止する障、賢善と事を共にする障、善知識  
正見に通かる障、外道の家に生るる障、佛の正教を離るる障、魔の境界に入る障、善知識  
を見ざる障、諸の善根を生ぜざる障、不善の法を著す障、惡家に生るる障、地に生る  
る障、惡人の中に生るる障、天の貧窮に生るる障、諸の毗、夜叉、乾陀婆、阿修羅、迦樓羅、  
緊那羅、摩睺羅伽、羅刹の中に生るる障、佛法を樂はざる障、童蒙の法を習ふ障、小乘を樂  
ふ障、大誦を樂はざる障、多く恐怖を生ずる障、生死を樂ふ障、三界に著する障、佛法を  
離るる障、佛の自在神力を聞くことを樂はざる障、菩薩の清淨の諸根を離るる障、菩  
薩の行を離るる障、菩薩の深心希望を離るる障、正念を離せざる障、一切智心を發起せざ  
る障、修行を淨めざる障、業を淨めざる障、報を淨めざる障、諸力を成長せざる障、智  
慧の根を斷つ障、菩薩の諸行を受持せざる障、佛法を講誦する障、善根を遠離する障、佛  
の境に入らざる障、魔の境界に墮する障、佛法を求むること能はざる障、諸の菩薩の  
大莊嚴の事を問きて恐怖を生ずるの障、菩薩と共に往することを樂はざる障、菩薩の善根  
の業を求むることを樂はざる障、邪見蓋疑の障、愚癡を増益する障、菩薩の戒を捨てて破  
戒に隨順する障、如來の教を信ぜざる障、佛の諸の持戒の者を敬したまふを圖きて瞋  
恚の心を生ずる障、忍辱を離れ常に懈怠せんことを樂ふ障、諸の菩薩の不退の精進を謗  
る障、三昧の塵を捨つる障、般若波羅蜜の巧方便を講誦する障、是處非處の方便を知らざ  
る障、衆生を度脱する方便を知らざる障、菩薩の諸の深智に入らざる障、菩薩の諸道を

【三種の戒】 三聚  
 【口の四過】 妄語  
 兩舌、惡口、綺語  
 の四惡業を言ふ。

【佛子、是故】 以  
 下、善賢能治の行  
 を明す。其正顯に  
 六位の別を立つ、  
 一に正法、二に清  
 淨、三に正智、四  
 に巧隨順入、五に  
 直心、六に巧方便  
 なり。

出生せざる障、菩薩の十種の眼に於て生盲なる障、菩薩の法に於て無礙の法流を出生すること能はざる障、無礙の身量の障、相好を具へざる障、無礙の舌、衆生の音聲を別知すること能はざる障、衆生の中に於て懈怠の心を生ずる障、狂亂の障、三種の戒を離るる障、無礙の入の障、口の四過の障、意の惡業の障、増上の貪患見を生ずる障、正法を求めざる障、菩薩の法に於て懈怠する心の障、菩薩の精進の法の中に於て疑惑する心の障、菩薩の決定法を捨離する障、菩薩の智慧門を損滅する障、正念を損滅する障、佛法を遠離する障、菩薩の護生法を離ざる障、菩薩の護下心の障、聲聞緣覺の護生法を遠離する障、三世の諸障菩薩に障せざる障を受けん。佛子、菩薩摩訶薩は一の瞋恚心を起さば、是の如き等の百の障法門、乃至百千の障法の法門を受けん。何を以ての故に。佛子、我、一の惡法も菩薩の一瞋恚の心に出過せること有るを見ざればなり。

佛子、是故に菩薩摩訶薩は疾かに菩薩の行を具足せんと欲せば、應當に十種の正法を修すべし。何等をか十と爲す。謂ある一切の衆生を捨てず、諸の菩薩に於て如來の想を止せし、常に一切の障法を離脱せず、諸佛の利に於て無盡の智を得、菩薩の所行を恭敬し信樂して虚空法界に等しき菩提の心を捨てず、菩提を分別し佛力を究竟して彼岸に到り、菩薩の一切諸障を離脱し、衆生を教化して心に疲厭無く、一切の世界に於て交生を示現して而も樂著せず。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の正法に安住すれば、則ち能く十種の清淨法を攝取

す。何等をか十と爲す。謂ゆる甚深の法に於て究竟すること清淨、善知識に親近すること清淨、能く諸佛の正法を護ること清淨、悉く空界を分別すること清淨、善く法界に入ることを清淨、智慧もて諸の菩薩の心行を了ること清淨、諸の菩薩の善根をして清淨ならしめ、心常に諸劫に著せずして清淨に、智慧もて三世を觀察すること清淨、諸佛の種姓を成就すること清淨なり。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き清淨の正法に安住すれば、則ち能く十種の正智を具足す。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生の心行を分別する智、衆生の諸の業報を分別する智、普く一切諸佛の法を照す智、諸佛の法に於て方便次第を得る智、一切の總持門を具足する智、一切の文字辯を成就する智、善く衆生は一切語を知る智、一切世界の身を示現する智、具足して善く一切衆生を照す智、一切趣に於て一切を得る智なり。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の正智に安住すれば、則ち十種の巧隨順入に入る。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の世界は一毛道に入り、一毛道は不可思議の行を出す。一切衆生の身は悉く一身に入り、一身に於て無量、諸身を出す。不可説の劫は悉く一念に入り、一念をして不可説劫に入らしむ、一切の佛法は悉く一法に入り、一法をして一切の佛法に入らしむ。一切の諸入は一入に入り、一入をして一切の諸入に入らしむ。一切の諸根は一根に入り、一根をして一切の諸根に入らしむ。一切の諸根は非根の法に入り、非根の法は一切の諸根に入る。一切の諸相は悉く一相に入り、一相は一切の諸相に入る。

【巧隨順入】正智を行に能く所知の境を制轉し、相互に順入するを以て言ふ。

【直心】正しく眞實に趣入せしむるを以て言ふ。

一切の語言は一語言に入り、二語言は一切の語言に入る。一切の三世は悉く一世に入り、一世をして一切の三世に入らしむ。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の入法を分別すれば、則ち能く十種の直心に安住す。何等をか十と爲す。謂ゆる一切世界の語言、非語言の法の直心に安住し。正念一切衆生の直心に安住し。虚空界の直心に安住し。法界無量無邊の直心に安住し。一切の佛の眞正法の直心に安住し。甚深の善法不壞の正法の直心に安住し。一切の疑惑を除滅する直心に安住し。三世の法を等觀する直心に安住し。三世諸佛の平等の直心に安住し。諸佛の無量力の直心に安住す。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き十種の直心に安住すれば、則ち諸佛の十種の巧方便法を得、何等をか十と爲す。謂ゆる巧方便を得て當く諸佛の深法を照し、巧方便を得て諸佛の深甚の勝法を出し、巧方便を得て一切諸佛の莊嚴の法を分別し演説し、巧方便を得て深く一切の佛の平等法に入り、巧方便を得て別相の一切の佛法を分別し、巧方便を得て不可壞の諸佛の正法に入り、巧方便を得て一切の佛の諸の莊嚴法に入り、巧方便を得て一方便を以て一切の佛法に入り、巧方便を得て佛の無量の諸の方便法に入り、巧方便を得て一切の佛法に於て心に自在を得て而も退轉せず。佛子、是を十種の巧方便法と爲す。

佛子、是故に菩薩摩訶薩は應當に一心に恭敬して是法を聽受すべし。何を以ての故に。菩薩摩訶薩、是法を聞くことを得ば、少方便を以て疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得、三世

【爾時、佛の神力の量に】以下、感瑞と感応とを明かす

佛と等しからん

爾時、佛の神力の故に、法是の如くなるが故に、十不可說那由他の佛刹微塵に等しき世界は六種に震動し、諸天に出過せる一切衆の雲雨、妙香の雲雨、末香の雲雨、大雲菩薩、寶莊嚴具の雲雨、妙華の雲雨、諸の菩薩の雲雨、不可言に佛を讚歎したてまつる雲雨、不可説の讚歎菩薩の雲雨、佛の音聲法界に滿てる雲雨、不可説の世界を淨むる雲雨、不可説の菩薩の功を具養する雲雨、不可説の光明の雲雨、不可説の佛の神力自在の雲雨を雨らせり。此世界の四天下に佛道場に坐したる佛は、是の如き等の種種の雲雨を雨らし、諸法を演説したるひしが如く、十方の世界も亦復是の如し。

爾時、佛の神力の故に、法是の如くなるが故に、十不可説那由他の微塵に等しきを過ぎて、十佛世界微塵數の菩薩摩訶薩有り、其上に大辯して十方に充滿し、其の如き等の言を作さく、善哉善哉、佛子。能く是の如き諸佛如來の最大の誓願、授受の深法を説けり。我等も同様に、普賢と名け、諸の普勝世界の諸の普賢自在如來の所より、其上に來盡し、一切の世界にも亦此法を説けり。是の如き自身身一切の諸行は、増減有ること無し。是故に此に來りて汝が身に證を作す。是の如く十佛世界微塵數の菩薩摩訶薩、此に來りて爲に證を作せしが如く、一切十方の諸の如來の所に、亦復是の如し。

爾時、普賢菩薩摩訶薩は佛の神力と自らの善願力とを以て十方及び一切の法界を觀察し、諸の菩薩の行と諸佛の普提とを明さんと欲し、大願を成かんを欲し、一切世界の諸劫を

【一切の業】以下  
 百廿一偈あり、總じて二  
 段に分ち第一は所説は  
 二の分齊を以て其説  
 の因、初の二は所説  
 薩の因、次八偈は所説  
 行、次の十一偈は所説  
 現在、未來佛の許に  
 三輪行を修するに  
 とを頌す。

分別せんと欲し、時に隨ひて佛の世間に出づることを示現したまふを明さんと欲し、衆生の根に隨ひて悉く化を受けしめんと欲し、如來の諸の所説の法に虚妄有ること無きを明さんと欲し、善根を種うるに隨ひて果報の虚しからざるをあかさんと欲し、菩薩の清淨の法身は妙音聲を出して衆生を覺悟し菩提心を起さしむることを明さんと欲するが故に、偈を以て頌してはく、

一切の衆歡喜して、諸の發意を除滅し  
 一心に恭敬して、菩薩の諸の願行を聽け  
 三世の菩薩の、行する所の諸の願行に隨ひて  
 我當に次第して、菩薩の勝妙の法を説くべし  
 一切諸劫の數、及び世界の業數に  
 我は盡けり、無等等の應化世に興りたまひしと  
 過去の諸佛を見たまつりて、彼に於て大願を發し  
 衆生の類を饒益し、一切の苦を除滅せり  
 菩薩論師の王は、行する所斷絶すること無く  
 無等等の法と、一切諸の境界とを得たり  
 菩薩は過去の、一切諸の導師の  
 大光明網を放ちて、普く十方界を照したまひしことを見て

是の如きの大願を發しき、我世間の燈と爲り  
功德もて身を莊嚴し、十力智を具足せん  
一切諸の群生は、貪恚癡熾然なり  
我當に爲に、無量の惡道の苦を除滅すべしと  
是の如き誓願を發して、堅固にして退轉せず  
其に菩薩の行を修して無礙力を究竟せん  
是の如く誓願し已りて、世間の行に轉ぜられず  
行する所虚妄無く、論王の法を究竟せり  
一賢劫の中に於て、千佛世に出でたまふ  
彼佛の正法に隨ひて、次第に分別して説かん  
此賢劫の佛の如く、無量劫も亦然り  
未來の諸佛の法も、我當に次第して説くべし  
一佛刹の中の如く、無量の刹も亦然り  
一切の佛國の性を、我悉く分別して説かん  
諸佛次に世に興りたまひ、隨に隨ひ名號に隨ひ  
彼所得の記に隨ひ、其壽命する所に隨ひ  
修する所の正法に隨ひて、専ら無礙の道を求めしめ

所化の衆生に隨ひて、正法世に住せん  
所淨の佛刹と、衆生及ぶ法輪と

説法の時と非時とに隨ひ、次第に群生を淨めん  
彼衆生の行の、種種の業性は

上中下の差別に隨ひ、化を受くる所に隨應せん  
是の如きの甚深の智もて、菩薩は是行に入り

普賢の業を修習して、智慧輪を具足す  
身業障礙無く、口業悉く清淨に

意業も亦無礙にして、三世の法に通達す  
菩薩は是の如く行じて、普賢の道を究竟し

淨智の目を出生して、普く諸の法界を照す  
不可説の劫と、及び一切の佛刹とに於て

菩薩は一念に知り、彼に於て著する所無し  
行者は是の如きの、奇特甚深の地

菩薩の妙法の中に入る、我當に少分を説くべし  
智慧邊際無くして、佛の境界を究竟し

善く一切處に入りて、不退轉を成就す

【智慧邊際無く】  
以下第二段にして  
正しく普賢の行用

の中、六十九偈は明  
 自十門に分つ。其  
 し初七は帝網の  
 中初七は帝網の  
 十大智に入る處の  
 細智は三世の微  
 五偈は三世の微  
 要は未來攝化の  
 用は了來攝化の  
 偈は現在佛の境  
 五通達するの四  
 行は自在の根化  
 問は自在の根化  
 偈は自在の根化  
 法身正覺の六世  
 淨心行を頌す。

普賢の淨慧を具へ、普賢の願を満足したる  
 菩薩の究竟の行、深く無等の智に入る  
 微塵の中に於て、悉く一切の刹を内れ  
 彼無量の佛を見、具に法を演説したまふを聞く  
 一微塵の中の如く、一切の塵も亦然り  
 刹及び諸佛を見る、是れ不思議の智なり  
 一一の微塵の中に、普く三世の法を現じ  
 五趣生死の道を、皆悉く分別して知る  
 一一の微塵の中に、無量の佛刹有り  
 一の中に無量を有り、無量の中に一を知る  
 是の如く法界に遍しき、一切諸の國土の  
 同性と及び異性とを、皆悉く能く了知す  
 深く微細の智に入りて、諸の世界を分別し  
 一切劫の成壞を、悉く能く分別して證く  
 諸劫の修短を知るに、三世は即ち一念にして  
 同行と不同行とを、皆悉く分別して知る  
 深く諸の世界の、清淨と不清淨とに入り

身中に無量の刹あり、一刹に無量の身あり

一切十方の中の、無量の諸の世界の

種種無数の性を、一切悉く能く知る

一切三世の中の、無量の佛国土を

甚深の智を具足して、悉く彼の成敗を了る

十方諸の世界に、或有り或は取有り

普賢は悉く深く入りて、一切能く了知す

淨き慧眼を以て、無量の諸佛の土を見

分別して諸業を知り、隨ひて行ずるが故に清淨なり

菩薩摩訶薩は、善く衆生の行を知る

諸の悪業を以ての故に、不淨の土を得たり

無量無邊の刹は、即ち爲れ一刹なることを知り

是の如くして諸刹に入り、一切能く知る莫し

一切諸の世界を、一刹の中に入らしめ

世界積聚せず、亦復離散せず

或は伏し或は仰ぐ有り、或は高く或は復下く

世界の衆生の相をも、菩薩は皆悉く知る

或は翻覆の利有り、無量の諸佛の土は  
種種も是れ一なることを知り、一も是れ種種なることを知る  
普賢は眞の佛子にして、不思議の智を以て  
不思議の智を知り、無邊の際を了達す  
諸法の世間の化と、利化と衆生化とを知り  
諸法の化を了知し、諸佛の化を究竟す  
甚深の世間の法と、種種莊嚴の事と  
衆生の無量の報とは、皆心業の莊嚴なり  
眞の佛子は善く、甚深の妙法界を學び  
自在の神力を具へて、十方の刹に充滿す  
衆生に等しき諸劫に、常に世界の法を説き  
一切能く知る莫し、唯等正覺のみを除く  
世界及び如来の、種種の諸の名號は  
無量劫に演説すとも、猶究竟すること能はざらん  
何に況んや心の境界なる、三世諸佛の法と  
眞實の妙法界と、諸佛の一切地をや  
清淨の無礙の念は、無礙の智を具足し

一切の衆生界は、悉く電の如しと了達す  
虚妄の劫と、及び一切の世間とを取せず

善く眞實に非ざることを解り、彼に於て著する所無し  
無量無数の劫も、之を解るに即ち一念なり

念を知れば亦念に非ず、世間に實の念無し  
本座を動ぜずして、一念に十方に遊び

無量無邊の劫に、常に諸の衆生を化す  
不可説の諸劫は、即ち是れ一念の頃

亦劫を短ならしめずして、刹那の法を究竟す  
一切諸の世間と、及び諸の衆生心とは

一に非ず亦二に非ざるを、菩薩は悉く了知す  
衆生の世界の劫と、諸佛及び佛法とは

皆悉く幻化の如くして、法界に二有ること無し  
普く十方の刹に於て、無量の身を示現し

虚妄の身を取せず、法界に著する所無し  
無二の智慧の中より、人師子を出生して

不二の法に著せず、一二無きことを知るが故なり

菩薩は諸法の、焰の如く電光の如く  
霧の如く亦夢の如く、幻の如く變化の如きを知る  
是の如く隨順して、一切の佛の境界に入り  
平等智を成就して、普く深法界を照す  
無量の大悲を以て、諸の衆生を觀察し  
染著の心を遠離して、清淨に世間を觀ず  
廣淨なる無盡の身は、深く方便地に入り  
菩薩は常に、論師子の妙法を正念す  
世の衆の苦情を見て、無量の願を發し  
行ずる所皆清淨にして、普く諸の法界に遍し  
諸佛及び菩薩と、佛法と世間とを  
菩薩の方便にて、通達するに差別無し  
清淨の法身藏と、一切諸の世間と  
世間及び法身は、二俱に著する所無し  
譬へば淨水の中に、影を見るも所有無きが如く  
法身十方に至るも、而も亦所至無し  
此の如く所著無ければ、世間の清淨身は

分別して法界を説き、智慧彼岸に到る

是の如きの諸の世界は、無量の業の華鬘にして、

菩薩は一念の中に、悉く三世の利を知る

彼世界の中に於て、諸の最勝の行を行じ

等正覺を究竟して、自在力を顯現す

是の如く未來世の、一切世界の中に

諸佛次いで世に興りたまはるも、菩薩は悉く能く知る

彼行と諸の妙願と、境界に功德を修め

劫に隨ひて正覺を成ずるを、菩薩は分別して知る

亦彼壽量と、及び所化の衆生とを知り

方便の法門に隨ひて、衆の爲に法輪を轉す

菩薩は是の如く知りて、普賢の行地を具へ

一切智を成就して、諸の如來と等し

十方界の、無量の諸佛の土を現在し

深く此世界に入りて、諸の法界に通達す

彼世界の中に於て、現在の無数の佛と

無礙の論山王とは、自在の法を究竟す

淨土及び衆を知り、變化の自在力もて  
無量億劫を盡して、當に是事を思惟すべし  
調御世間の尊は、自兵力を成就し  
菩薩は究竟して度り、深く智慧海に入る  
菩薩は具に、無礙の眼耳鼻と  
無礙の廣長舌とを出生して、衆をして、悉く歡喜せしむ  
最勝無礙の心は、無量にして普く清淨なり  
甚深の無礙の智は、悉く三世の法を了る  
善く一切の化と、刹化と衆生化と  
能化と世間化とを學び、化の彼岸を究竟す  
種種の業莊嚴もて、諸の世間を裝飾し  
佛の智慧を成就して、善く一切の相を知る  
一一の如來身は、無量の方便を以て  
具變化する所に隨ひて、無量の衆を度脱す  
深く智の境界に入れる、出世間の慧日は  
所行退轉せずして、遍く一切の刹に遊ぶ  
深く、明の世間の、夢の如く幻化の如きを解り

身と雖も而も身に非ず、諸法は生ずること無きが故なり

深く無盡の身に入れば、生に非ず亦滅に非ず

常に非ず無常に非ずして、諸の世間に示現す

悪用見を除滅して、正見を成就し

平等に諸法を觀じて、我我所に著せず

譬へば工なる幻師の、種種の幻を示現するも

本從來する所無く、去るも亦所至無く

幻も亦有量に非ず、亦復無量に非ずして

彼大衆の中に於て、量と無量とを示現するが如し

此寂滅の心を以て、諸の善根を修習し

諸佛の法を出生するも、量に非ず無量に非ず

有量と無量と有るは、皆悉く是れ妄想なり

一切の趣を分別して、量と無量とに著せず

諸佛の甚深の法は、寂滅にして最も勝妙なり

甚深の無量智は、甚深の諸趣を知る

菩薩は愚癡を離れ、心意淨くして量無く

諸の善根を修習して、無量の願を具足す

【無量の衆生を】  
以下、三十偈は下  
化大悲の大行を明  
して本頌を結す。

無量の衆生を度して、安隱の處に至らしめ  
平等に法界を觀じて、彼に於て著す所無し  
深く眞實際を解れば、諸法に所有無し  
諸の世間を覺悟すれば、諸法に生滅無し  
深く一切の法を知り、應化の衆生に隨ひて  
普く甘露の法を雨らし、諸の世間に充滿せしむ  
無量の衆生を化して、菩提心を發さしめ  
菩薩の行を捨てずして、皆不退轉を得しむ  
佛の正法に隨順して、究竟じて法身を得  
悉く世間の、一切の衆生身を了知す  
諸の衆生と、及び一切の佛刹とを分別して  
深く智慧海に入り、十方海に遍達す  
如來の淨身の中に、普く衆生の身を現じ  
菩薩の明淨の眼は、悉く皆能く觀見る  
無量億劫の中に、如來の身を讚歎せんに  
一切劫を窮盡すとも、猶尙究竟せざらん  
菩薩摩訶薩は、佛の涅槃の後に於て

能く念念の中に於て、諸の舍利を分布す  
是の如く未來世に、佛道を求むる者有らば  
無量の菩提心の、決定智もて能く知らん  
是の如く三世の中に、諸佛世に出で  
普賢の行に安住したまふを、皆悉く分別して知る  
是の如く分別して、無量の諸行の地を知り  
堅固の智を成就して、能く不退轉を轉ず  
無量の深智慧は、如來の境を究竟し  
普賢の明淨智は、深く不退轉に入る  
一切の最勝尊は、深く妙境界に入り  
不退轉を究竟して、無上の菩提を得  
無量無邊の心と、一切種類の業とは  
諸の想行を修習し、能く一念に於て知る  
染汚と不染汚と、學心と無學心と  
菩薩は一念の中に、無量の心を覺悟す  
一に非ず、穢に非ず亦淨に非ず  
亦復積集に非ず、皆因縁より起ることを了知す

是の如く分別して、一切衆生の心を知らば  
 世間と諸佛の刹とは、悉く皆是れ虚妄なり  
 是の如き妙方便もて、深く菩薩の行に入らば  
 皆普賢と等しく、如來の法より化生せん  
 一切の衆生類は、善惡の想同じからず  
 或は天上に生るる有り、諸の惡道に墮する或り  
 菩薩は世間を見るに、皆業縁より起り  
 常に虚妄の想に著して、生死に流轉せり  
 十方の諸の衆生は、虚誑の網に覆はるるも  
 菩薩は一念の中に、方便もて解脱せしむ  
 是の如き諸の根人と、眼耳鼻舌身と  
 分別して意識を知るに、世間の想同じからず  
 一の眼の境界は、無量の眼を出生して  
 種種に相同じからず、無量にして違有ること無し  
 衆生の行する所の、一切の善惡業に隨ひ  
 彼に於て果報を得、像類悉く同じからず  
 普賢の清淨眼は、深く諸境界に入り

【性起品】第六會の第十一品即ち本會の最後の説法たり。當品は平等の果を明す。即ち廣く十門の性起を擧げ、各十門を分別して百門を成じ、十身如來の無礙の大本經の玄旨、圓教の極致たる教理なり。

一一の限の境界は、無量の智を出生す  
 是の如き諸の世間を、悉く能く分別して知り  
 一切の行を究竟じて、不退轉を逮得す  
 佛説と菩薩説と、刹説と衆生説と  
 三世一切の説とを、菩薩は分別して知る  
 過去は是れ未來、未來は是れ過去  
 現在は是れ未來なりと、菩薩は悉く了知す  
 是の如き無量の世に、覺悟の相同じからず  
 方便究竟の行は、諸佛の智を具足す

寶王如來性起品第三十二之一

爾時、如來、眉間の白毫相の中より大光明を放つ。名けて明如來法と曰ひ、無量億那由他阿僧祇の光を以て眷屬と爲し、普く十方一切の世界を照し、圍遶すること十匝して、如來の無量の自在を顯現し、無數億那由他の諸の菩薩衆を覺悟し、一切の世界六種に震動して一切諸の惡道の苦を除滅し、一切諸魔の光明を映蔽して猶し繁疊の如くし、一切如來の菩提を顯現し、一切諸佛の大衆を顯現し、究竟莊嚴して、普く法界虛空界に等し

【住】 今去界は如来性起の真現にして一切衆生本来如来の智徳を具するの本来の法界に在り。如来自證の理智究竟して法然の大用自覺に起る。而て佛智、法理と契衛して心平等の下に一體の所證の果を性と言ひ、因果を待たず自ら生起し、靈縁盛衰して因果の法則を施設する性智の大用を起と言ふなり。

【爾時、如来】 以下、當百四の序説、説主、請主共に加光あるを説す。

【正しく】 以下、讚詩の頌、十頌あり初六偈は佛及光を讃じ、次四偈は光益、増進、開示を讃じ、蓋主を示さんことを詩ふ。

【大仙】 如来の異稱なり。

き一切の世界を照し、復還つて一切の菩薩と諸の大衆とを圍遶し已りて、如来性起妙徳菩薩の頂に入る。

爾時、一切の大衆は心大いに歡喜し身柔軟となり、是の如きの念を作さく、甚だ奇なり、希有なり。如来は今大光明を放ちたまふ。必ず當に甚深の正法を演説したまふべし。

爾時、如来性起妙徳菩薩、蓮華の座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を以て蓮華臺上に著け、一心に合掌して正しく如来に向ひたてまつり、偈を以て頌して曰はく、

正しく一切の法を覺り、諸の境界を究竟したまひて  
三世の大仙に等し、是故に恭敬して禮したてまつる  
無相の境を究竟せる、相好莊嚴の身は  
普く離垢の光を放ち、一切の塵を除滅したまふ

上方界の、一切の諸佛の刹を震動して  
衆生恐怖せず、是れ佛の威神力なり  
虚空の如き、清淨の法界等に安住して

一切の悪を除滅し、衆をして清淨を得しめたまふ  
無量劫に善行して、一心に佛道を求め  
無礙の境界を得て、諸の如来と等し

普く無量の光を放ちて、一切の刹を震動し

自在力を顯現して、來りて我身中に入れり

善學の諸の菩薩は、皆悉く來りて集會す

是故に我發心すらく、應に法王の事有るべしと

大衆は皆清淨にして、菩薩の行を究竟じ

智慧染著無く、無所畏を成就せり

大仙の行は無量にして、智慧力精進し

菩薩の心に、如來の甚深の法を開發せしめたまふ

正覺の微妙の義を、誰か能く演說する者ぞ

我今請問せんと欲す、願くば佛爲に顯示したまへ

是偈を説き已りし時、如來の口中より大光明を放ち、無礙無畏と名く。無量億那由他

阿僧祇の光を以て眷屬と爲し、普く十方の一切世界を照し、圍遶すること十匝して如來の

無量の自在を顯現し、無數億那由他の諸の菩薩衆を覺悟し、一切の世界六種に震動して

一切の諸の惡道の苦を除滅し、一切諸魔の光明を映蔽して、猶し聚雲の若くし、一切如

來の菩提を顯現し、一切諸佛の大衆を顯現し、究竟莊嚴して、普く法界虚空界に等しき一

切の世界を照し、復還つて一切の菩薩と諸の大衆とを圍遶し已りて、普賢菩薩摩訶薩の

口に入りぬ。爾時、普賢菩薩摩訶薩の身、及び師子座は殊に勝れ、諸の菩薩の身及び師子座に百倍せり、唯如來の處したまふ所の座をば除く。

爾時、如來性起妙德菩薩、普賢菩薩摩訶薩に問うて言はく、「佛子、佛の顯現したまふ所の大威神力は不可思議なり。是れ何の瑞相ぞや。」爾時、普賢菩薩摩訶薩、如來性起妙德菩薩に答へて言はく、「佛子、我惟付するが如くば、我見たてまつりし所の過去の如來應供等正覺の如きは、大光明を放ちたまはては、必ず如來性起の正法を説きたまひき。是故に今、佛大光明を放ちて自在力を顯はしたまふは、必ず如來性起の正法を説きたまふなるべし。」

時に如來性起妙德菩薩、如來性起の正法の名を聞き已りて、一切の大壇六種に寶動し、無量の壽量の光明を出し生ぜり。

爾時、如來性起妙德菩薩、普賢菩薩摩訶薩に問うて言はく、「佛子、云何が普賢菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の性起の正法を知るや。」佛子、無量億那由他の普賢菩薩の清淨の衆會は、善學して清淨の諸行を修行し、念う放棄し、諸莊嚴して彼岸を究竟じ、佛の威儀に住し、如來の行を具へ、諸佛を正念して未だ曾て散亂せず、大慧もて一切の衆生を觀察し、決定の智慧もて普薩の諸の妙神通を分別し、佛の神力を得、一切普薩の功德に安住せり。是の如き無量の功德を成就せる諸の大菩薩は、皆來りて集會せり。仁者は曾て無量億那由他の佛の所に於て、恭敬し供養して諸の善根を種ゑ、普薩の無上の妙行を成就し、諸の三昧門は皆自在を得、深く一切如來の祕密に入り、諸佛の法に於て衆の疑惑を除き、深く佛法に入り、善く一切衆生の諸根を知り、衆生の性に隨ひて乃に法を説き、佛

【善い哉無礙の智】  
 以下、正しく十門  
 の性起を請問す、  
 初法を請問し、性起の  
 正法を請問し、次に  
 三業、所知の境界  
 所行の行、所得の  
 果、轉法輪、所入  
 の涅槃、見聞敬養  
 等の益を請問する  
 ことを叙す。

智に隨順して一切の佛法を分別し演說し、彼岸を究竟せり、是の如き等の無量の功德を成就せり。善い哉、佛子。願くば爲に如來性起の正法を説きたまへ。」  
 爾時、如來性起妙德菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、普賢菩薩に向ひ、偈を以て頌して曰はく、

善い哉無礙の智もて、一切の法を覺悟し  
 平等の慧を具足して、佛の無量の境を説きたまへ  
 諸の佛子聞き已らば、心皆大いに歡喜せん  
 願くば時に爲に、如來性起の法を敷演したまへ  
 何等か如來身なる、清淨の妙音聲なる  
 云何が如來心、及び無量の境界なる  
 何等か如來の行、及び諸佛の菩提なる  
 何等の法を修習してか、速かに等正覺を成じたまへる  
 云何が法輪を轉ずる、清淨妙勝の法なる  
 願くば爲に分別して、普透の涅槃の法を説きたまへ  
 佛子等聞き已りて、歡喜の心無量にして  
 上方の衆生類は、皆諸の法王を見て  
 佛を恭敬し供養したままつり、彼に於て善根を種ゑん

若し諸佛を見たてまつりて、恭敬して善根を種うること有らば  
功德の藏無量ならん、願くば爲に分別して説きたまへ  
若し一切、如來の名號と

十方の現在佛と及び已に涅槃したまへる

無盡の功德藏とを聞くこと有らんに、名を聞いて歡喜せん者は  
彼何等の利をか得る、哀愍し分別して説きたまへ  
清淨の眞の佛子、願くば爲に廣く敷演して

深境界と、無量の功德海とを分別したまへ

一切諸の菩薩は、皆一心に合掌し

恭敬して善逝を觀たてまつり、仁と兼ねて我とを嗔ん

巧なる語と微妙の音ともて、願くば眞實の義を説き

一切の疑惑を除滅したまはば、清淨なること虚空の如くたらん

因縁及び譬喩もて、我爲に分別して説きたまへ

無量の衆聞きにりて、皆菩提心を發さん

一切諸の如來の、相好莊嚴の身も

十方の國に充滿して、方便もて衆生を度し

微妙の音聲を出して、無量の法を演説し

因縁は應化に隨ひて、佛の菩提を示悟したまへり

十方一切界の、無量の刹刹の中に

稱説すべからざる劫にも、是會は甚だ見難し

此の如き大衆の集れる、清淨の諸の佛子は

無量億劫の中にも、見難く亦聞き難し

是故に眞の佛子、願くば微妙の義を説きて

廣くして無量なる、如來の性起の法を顯現したまへ

一切諸の菩薩は、皆一心に合掌して

大乘を渴仰す、願くば甘露の法を雨らしたまへ

爾時、普賢菩薩摩訶薩、如來性起妙德菩薩等の諸大衆に告げて言はく、佛子、如來應供

等正覺の性起の正法は思議すべからず、所以は何ん。小因縁にて等正覺を成じ世に出興し

たまふに非ざればなり。佛子、十種の無量無數の百千阿僧祇の因縁を以て、等正覺を成じ世

に出興したまへり。何等をか十と爲す。一には無量の菩提心を發して一切衆生を捨てず。

二には過去無數劫に諸の善根を修したる正直の深心なり、三には無量の慈悲もて衆生を

救護す。四には無量の行を行じて大願を退かず、五には無量の功徳を積みて心に厭足無し。

六には無量の諸佛を恭敬し供養して衆生を教化す。七には無量の方便智慧を出生す。八

には無量の諸の尸德藏を成就す。九には無量の莊嚴智慧を具足す。十には無量の諸法の

【爾時、普賢菩薩】以下、當品の正説にして、前の十問に答ふるに十段に分たれ、各段長行と偈頌より成る。【佛子、如來應供】以下、第一問に答ふる性起の正法なり。

實義を分別し演説す。佛子、是の如き等の十種の無量無数の百千阿僧祇の法門もて等正覺を成じ世に出興したまへり。

【佛子、譬へば】以下、性起の正法を説くに譬喩を以てし、第一に大千世界興起の喩を以て佛の衆縁合して起る性起の徳を顯す。

【止觀】止と觀となり。止とは(止madhi)奢摩他の譯にして、止寂の義に於ち心外境に動ぜず、一切の亂想を止めて寂靜なるを言ひ、觀とは(毗婆sāyana)毘婆舍那の譯にして、細なる分別心即ち明細

佛子、譬へば三千大千世界の少因縁にて成ずるに非ず、無量の因縁を以て乃ち能く成ずるを得たるが如し。謂ゆる大雲は雨を興し、大雨に因るが故に四の風輪を起す。何等をか四と爲す。一に名けて持と曰ひ、能く大水を持す。二に漸消と名け、漸く大水を消す。三に名けて起と曰ひ、諸の處所を起す。四に莊嚴と名け。三千大千世界の衆生の業報を莊嚴す。是の如きの四種は皆衆生の業報、及び諸の菩薩の善根の起す所なり。佛子、是の如き等の無量もて乃ち三千大千世界を成ず。法是の如くなるが故に、作者有ること無く亦成者も無し。如來、佛等正覺も亦復是の如く、少因縁にて成ずるに非ず、無量の因縁を以て等正覺を成じ世に出興したまふ。謂ゆる菩薩摩訶薩は、曾て過去の無量の佛の所に於て正法の甘露の大雨を聞受し、是に因りて能く如來の四種の智慧風輪を起せり。何等をか四と爲す。一には正念、陀羅尼を攝して、未だ曾て如來の大智の風輪を忘失せず、能く如來の一切法雨を持す。二には止觀、如來の大智の風輪は、悉く能く一切の煩惱を消滅す。三には善趣向、如來の大智の風輪は一切の功德の善根を成就す。四には離垢の諸の善法を生ず。如來の大智の風輪は皆衆生の諸根をして清淨にして相好莊嚴ならしむ。如來の無漏の善根の成ぜし所は、法是の如くなるが故に、作者有ること無く亦成者も無し。佛子、是を第一最勝の法門にして等正覺を成じ、世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

なる證別を言ふ。而して此止觀は天台に於て重要な教行たり。

【譬へば三千大千世界】以下、此段は第二の洪澎大千の喻なり。此喻を以て佛徳の深廣難知を表す。

【譬へば衆生の業報】以下、此段は第三大雨無從の喻にして性起は縁にとを顯はす。

【譬へば大雲の雨を降らす】以下、此段は第四大雨難知の喻にして、佛の性起は二乘凡夫の難知なることを顯はす。

復次に佛子、譬へば三千大千世界の成する時、大雲雨を降らすを名けて洪澍と曰ひ、一切の世界も容持すること能はざるが如し、大千世界の初始めて成する時をば除く。如來應供等正覺も亦復是の如し、世に出興して如來の性起の法雨を演説したまひ、一切の聲聞縁覺も亦復是の如し、世に出興して諸力を成就せる菩薩摩訶薩をば除く。佛子、是を第二の因縁と爲す、等正覺を成じ世に出興したまふなり。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば衆生の業報にて、大雲の雨を降らすも、從來する所無く、去るも所至無きが如し。如來應供等正覺も亦復是の如く、諸の菩薩の善根力を以ての故に、如來の性起の法雨を演説するも、從來する所無く、去るも所至無し。佛子、是を第三の因縁にして等正覺を成じ、世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば大雲の雨を降らすに、大千世界の一切衆生も、能く數を知る無きが如し。若し算計せんと欲せば、心を狂亂せしめん。大千世界の主なる摩醯首羅天の、乃至一滴をも知らざる無き者をば除く。木の善根の果報の力を以ての故なり。如來應供等正覺も亦復是の如し。世に出興して、如來の性起の甘露の法雨を説きたまふも、一切の衆生、聲聞縁覺の知ること能はざる所なり。若し思量せんと欲せば心を狂亂せしめん。一切の世界の主たる菩薩摩訶薩の、乃至一句一味をも悉く分別して知るものをば除く。過去の佛の所に於て地力を修せしが故なり。佛子、是を第四の因縁にして、等正覺を成じ、世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば大雲の雨を降らすに、大千世界の一切衆生も、能く數を知る無きが如し。若し算計せんと欲せば、心を狂亂せしめん。大千世界の主なる摩醯首羅天の、乃至一滴をも知らざる無き者をば除く。木の善根の果報の力を以ての故なり。如來應供等正覺も亦復是の如し。世に出興して、如來の性起の甘露の法雨を説きたまふも、一切の衆生、聲聞縁覺の知ること能はざる所なり。若し思量せんと欲せば心を狂亂せしめん。一切の世界の主たる菩薩摩訶薩の、乃至一句一味をも悉く分別して知るものをば除く。過去の佛の所に於て地力を修せしが故なり。佛子、是を第四の因縁にして、等正覺を成じ、世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

【譬へば大雲の雨を降る】以下、此段は第五大雨成敗の論にして、佛の斷惑成智の徳を顯はす。

【譬へば大雲】以下、此段は第六、雨隨別の味、器の徳を顯はす。

【譬へば三千大千世界】以下、此段は第七に二喻を出す。一は先成色界の喻、二は疑難なり、而して佛の善後先済を顯はす。

復次に佛子、譬へば大雲の雨を降らし、濃熾然と名け、或は能起と名け、或は能壞と名け、或は成實と名け、或は分別大千世界と名くるが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し。世に出興して正法の雨を雨らす。名けて除滅と曰ひ、衆生の煩惱の盛火を除滅す。或は法雨有り、名けて能起と曰ひ、能く衆生の一切の善根を起す。或は法雨有り、名けて成實と曰ひ、能く衆生の一切の習氣を成す。或は法雨有り、名けて分別と曰ひ、衆生の心心の所行を分別す。佛子、是を第五の因縁にして等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は眞に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば大雲の一味水を雨らすも、其雨ふる所に隨ひて、差別有るが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し。大悲一味の法雨を雨らすも、應作する所に隨ひて種種の不同あり。佛子、是を第六の因縁にして等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は眞に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば三千大千世界の初始めて起する時、無つ色界の諸天宮殿を成じ、次に欲界の諸天宮殿を成じ、次に人趣及び餘の衆生の所住の處を成するが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し。世に出興したまひて、無つ菩薩の諸行智慧を起し、次に緣覺聲聞及び餘の衆生の一切の善根を起す。佛子、譬へば大雲は一味水を雨らすも、諸の衆生の善根方に隨ふが故に種種の宮殿を起すが如し。如來の大悲一味の法水も、衆生の器根の不同

【譬へば世界】以下、此段は第八の譬喻なり。一あり、二は風輪起處の喻たり。而して佛の大事を成辨する徳を顯はす。

なるに隨ふが故に法雨に差別あり。椰子、是を第七の因縁にして等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は隨に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば世界初始めて成ずる時の如し、大水輪有りて三千大千世界に遍滿す。世界に滿ち已りて大蓮華を生じ、如來起と名け、諸の功德の寶を以て莊嚴と爲し、遍く三千大千世界を覆ひ、光、十方一切の國土を照す。時に摩醯首羅、淨居天等、蓮華を見已りて、即ち決定して蓮華の敷くが如く、諸佛世に出興したまふことを知る。佛子、爾時、風輪の起る有りて淨、光明と名け、能く色界の諸天宮殿を成す。又風輪の起るを淨、莊嚴と名け、能く欲界の諸天宮殿を成す。又風輪の起るを不可壞と名け、能く大小の國土、及び金剛山を成す。又風輪の起るを名けて勝高と曰ひ、能く須彌山下を成す。又風輪の起るを名けて不動と曰ひ、能く十種の大山を成す。何等をか十と爲す。謂ゆる芭蕉山、仙人山、伏魔山、大伏魔山、持劫山、黑山、目童鄰陀山、摩訶目童鄰陀山、香山、雪山なり。又風輪の起るを名けて安住と曰ひ、能く大地を成す。又風輪の起るを名けて莊嚴と曰ひ、能く地天の宮殿乾闥婆の宮殿を成す。又風輪の起るを無盡藏と名け、能く三千大千世界海を成す。又風輪の起るを明、淨藏と名け、能く大千世界の珍寶を成す。又風輪の起るを堅固根と名け、能く一切の如意珠を成す。佛子、是を大雲一味水を雨らすと爲す。衆生の善根果報力を以ての故に、法是の如くなるが故に、種種の風輪を起す。風輪に差別あるが故に、大千世界の形類同じからず。如來應供等正覺も亦復是の如く、世に出興したまふに諸の善根を具、

光明有り、無上大智と名け、如來の性起不思議の智を斷たず、普く十方の世界を照し、  
 一切の菩薩に如來の記號を授け、等正覺を成じて世に出興したまふ、又能善く、一の佛の  
 所に幾くの菩薩の功德を成就するもの有るやを知りたまふ。復光明有り、離垢淨如來の  
 大智と名け、能く如來の無漏の無生智を成ず。復光明有り、名けて普照如來の大智と曰  
 ひ、能く如來の不可思議なる法界智を成ず。復光明有り、持佛性如來の大智と名け、能  
 く如來の不動なる諸力を成ず。復光明有り、無壞最勝如來の大智と名け、能く如來の無  
 所畏智を成ず。復光明有り、一切明如來の大智と名け、能く如來の堅固にして不退の一  
 切種智を成ず。復光明有り、出生變化如來の大智と名け、能く諸の如來を見聞し恭  
 敬し供養する者をして、善根を虛しからざらしむ。復光明有り、普隨順至如來の大智と  
 名け、能く如來の無盡の功德智慧、清淨の法身を成じて衆生を饒益す。復光明有り、  
 不可究竟如來の大智と名け、能く如來甚深の妙智を成じて三寶を闡發す。復光明有り、  
 種種莊嚴如來の大智と名け、能く如來の相好嚴身を成じ、一切衆生をして皆悉く歡喜し  
 て一切智を得しむ。復光明有り、不可壞如來の大智と名け、能く如來の法界虚空界に等  
 しき、窮盡有ること無き殊勝の壽命を成ず。佛子、如來の大悲一味の水は、諸の菩薩の善  
 根力を以ての故に、及び餘の衆生の根に差別あるが故に、法是の如くなるが故に、如來の  
 智慧は實化同じからず。佛子、如來性起の正法は、一切如來の平等の智慧の光明の起す  
 所、一切如來の一味の智慧は、無量無邊の功德を出生す。衆生念言すらく、此諸の功

【譬へば四の風輪】  
以下、此段は第九  
四輪相依の喻にし  
て佛の體用依持の  
徳を喻説す。

徳は如來の造りたまふ所なり」と。佛子、此れ如來の神力の過る所に生ず。佛子、乃至一  
りの菩薩、無上道を成じ、佛の造りたまふを言ふは、是處有ること無し。諸佛は一切の  
群生の爲に善知識と作るを以て衆生此に依りて大智慧を得、作法行ること無く、亦作者無  
し。佛子、是を第八の因縁にして、等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は  
應に是の如く知るべし。

復次に佛子、譬へば四の風輪有り、虚空に依りて住し、能く水輪を持す、何等をか四と  
爲す。謂ゆる安住と不動と常住と堅固と是を名けて四と爲し、能く水輪を持す。水輪は能  
く大地を持して散壞せざらしむ。是故に大地は水輪に依り、水輪は風輪に依り、風輪は虚  
空に依ると説けり。虚空には所依無し、虚空は所依無しと雖も、能く三千大千世界をして、  
而も安住することを得しむるが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し。如來は四種の無礙  
大智の風輪を起すに依りて、能く一切衆生の善根を持す。何等をか四と爲す。謂ゆる衆生  
を攝取して皆歡喜せしむる大智の風輪、諸法を分別して、衆生をして樂ひ求めしむる大智  
の風輪、衆生は一切の善根を守護する大智の風輪、決定して無漏の法界を了知する大智の  
風輪なり。是を四種の大智の風輪と名く。大慈は衆生の歸依と爲り、大悲は衆生を度脱し、  
大慈大悲は衆生を饒益す、大慈大悲は方便智に依り、大方便の智は如來に依る、如來には  
所依無くして、無礙の慧光は普く十方一切の世界を照す。佛子、是を第九の因縁にして、  
等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は應に是の如く知るべし。

【譬へば大千世界】以下、此段第十大千億益の衆生に於て佛世に出興して衆生を濟度することとを顯はす。

復次に佛子、譬へば大千世界成じ已りて、種種に無量の衆生を饒益し、水智の衆生は水の安樂を得、陸地の衆生は地の安樂を得、宮殿の衆生は宮殿の安樂を得、空中の衆生は虚空の安樂を得るが如し。如来應供等正覺も亦復是の如し、世に出興して種種に一切の衆生を饒益したまふ。如来を見聞して踊躍歡喜し、諸の善根を修し、尸羅に住する者は、佛性の樂を得、四禪四無量に住する者は、聖無上智明の樂を得、法門に住する者は、眞實の樂を得、照明に住する者は淨智の樂を得。是の如き等の無量の法門は、種種に一切衆生を饒益す。佛子、是を第十の因縁にして、等正覺を成じ世に出興したまふと爲す。菩薩摩訶薩は國に是の如く知るべし。

大方廣佛華嚴經

卷第三十四

東晋天竺三藏佛驮跋陀羅譯

寶王如來性起品第三十二之二

【佛子】以下、此段は論説を了り、法に據りて結するなり。

【一切衆生】以下、重頌なり。總じて六十五頌あり、中前の二十八偈は性起の甚深なり。

「佛子、菩薩摩訶薩は、又復應に知るべし、如來の性起の正法は功德無量なり、行無量なるが故に十方に充滿す、來去無きが故に。生住滅を離る、行有ること無きが故に。心意識を離る、身有ること無きが故に。性虚空の如し、悉く平等なるが故に。一切の衆生に我我所無し、盡くすること有る無きが故に。一切の初は無盡なり、轉すること有る無きが故に。未來際を斷せず、退有ること無きが故に。如來の智は無礙にして無二なり、平等に有爲無爲を觀察するが故に。平等に正覺して衆生を饒益す、本行を廻向して自在滿足するが故なり。」

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、  
一切の衆生がに聽け、如來の十力の法は  
一切の諸の世間にて、最勝にして上有ること無く  
悉く無等と等しく、亦虚空と等しく

ることを歎じて中  
の徳答を頌す。中  
に於て初二偈は佛  
徳の深廣無量を顯  
傷各一徳を顯し、二  
初は喻説後法を  
説けり。次二偈は  
能知の淨、次四偈  
は聽を誡め説を許  
すことを頌す。

功徳等しき者無く、境界は量るべからず  
一切諸の如來の、功徳は量ること無く  
諸の餘の衆生類は、能く思議する者無し  
如來の一法門は、一切諸の群生  
無量億劫の中に、思量すとも盡すこと能はず  
十方の諸佛の刹を、盡く末して微塵と爲し  
人有り能く計算して、悉く其數を了知すとも  
彼人無量劫に、諸の如來の  
一毛の功徳を算數せんに、能く少分をも知ること莫けん  
譬へば一丈夫の、能く虚空界を量り  
又第二の丈夫、隨ひ算じて量數を知るが如し  
億無數劫に於て、空を算量せば盡すべくとも  
如來の諸の功徳は、窮盡することを得べからず  
譬へば一丈夫有りて、能く一念の中に於て  
三世の衆生の、心心の所行を數ふるが如し  
衆生數に等しき劫に、之を數へば窮盡すべくとも  
如來の無量の徳は、其數盡すべからず

譬へば、諸の法界の、分際不可得にして

一切も一切に非ず、見に非ず取るべからざるが如し

是の如く諸の如來の、境界は量るべからず

一切一切に非ず、法界に窮盡無し

譬へば如如の性の、虚妄を離れ寂滅にして

亦生有る者無く、亦滅有る者無きが如し

是の如く諸の如來、及び一切の境界は

亦如如の性に同じく、不増にして亦不減なり

譬へば未來際は、眞實の際に際無く

三世の性自ら離れ、眞實に不可得なるが如し

等正覺も是の如く、境界も亦復然なり

一切三世の中に、通達して障礙無し

諸法に變易無し、性空にして無作なるが故に

垢を離れて染汚無く、其性虚空の如し

一切諸の如來の、清淨の性も亦然なり

一切の性は無性にして、有に非ず亦無に非ず

正法の性は、一切の語言道を遠離し

一切の趣は趣に非ず、皆悉く宣滅の性なり

一切諸の如来の境界も亦是の如く

語言の道を遠離し、譬喩を爲すべからず

諸佛の覺悟したまふ法は、性相皆寂滅なり

鳥の空中を飛ぶて、足跡を得べからざるが如し

無量の天國の果は、淨き色身を成就し

十方の功徳を具へ、大神變を示現す

如来の甚深の法を、若し知らんと欲する者行らば

應當に其心を淨くすること、猶し虚空の如くすべし

虚妄の想と、及び見顛倒とを遠離し

清淨の道を修習せば、究竟じて淨處を得ん

是故に、佛の世子、一心に善く諦かに聽け

佛の善道の境界をば、我當に少分を説くへし

一切諸の十方の、功徳は數ふべからず

群生を覺悟せんが故に、我今少しく演說せん

一切諸の導師の、清淨の身業と

口業及び意業とを起し、境界悉く清淨たるを

【譯へば大千】以下、三十七は別して前の十喻を類す。

如來の深境界と、清淨の法輪と  
涅槃と、諸の善果とを、我當に分別して説くべし  
譬へば大千界の、國土初めて成ずる時  
是れ少因縁の、能く世界を成ずるに非ず  
無量の方便力と、一切の因縁とは  
三千大千世界を起して、諸の群生を安置するが如し  
是の如く、諸の最勝の、如來性起の法は  
無量の功德藏にして、一切能く知る莫し  
十方諸の世界を、皆抹して微塵と爲し  
諸の微塵を算數し、及び衆生の心を知らんに  
微塵の衆生心は、猶尙數を知るべくとも  
一切諸の十力の、功德は知るべからず  
譬へば重雲に閃りて、能く大雨を澍ぎ降らし  
四種の風輪起りて、能く三千界を成じ  
衆生の諸の善根と、菩薩の功德力とにて  
三千世界起り、衆生類を安置するが如し  
如來も亦是の如く、因縁の法雲にて

大智慧の風輪と、離垢清淨の意とを起し  
一切諸佛の所にて、諸の善根を修習し  
偏向して衆生に與へ、速かに等正覺を成ぜしむ  
譬へば虚空の中の、雲雨を洪澍と名け  
一切諸の世界に、受持するに堪ふる者無きが如し  
十方大千、世界の初めて成ずる時  
動かすべからざる風輪の、虚空界に依止するをば除く  
如來も亦是の如く、初め等正覺を成じ  
十方の一切界に、法雲の大雨を降らし  
勝法界に充滿するも、能く持するもの有ること無し  
唯諸の大菩薩の、無量の徳を成就せるもののみなり  
空中に雲雨を興すも、無作にして造者無く  
本より從來する所無く、去るも亦所至無し  
如來も亦是の如く、法雲甘露を雨らすも  
本より從來する所無く、去るも亦所至無し  
一切諸の菩薩は、無量の行を修習し  
應に化を受くべき所に隨ひて、彼の爲に正法を雨らす

譬へば大雲雨の、能く數ふる者有ること無く  
唯摩訶首羅のみ、悉く能く分別して知るが如し  
善逝も亦是の如く、無量の法雨を雨らして  
諸の佛刹に充滿するも、能く數ふる者有ること無し  
唯無上の法王なる、一切世界の主のみ  
悉く能く分別して知り、掌中の寶を觀るが如し  
惡に滅すべきは能く寂滅し、應に起るべきは能く起らしめ  
諸の邪見を除滅して、功德の寶を長養す  
如來は正法を雨らして、諸の煩惱を除滅し  
數ふべからざる、無量の諸善根を出生し  
正見を修習して、暗の顛倒を遠離し  
一切諸の最勝は、深く功德の寶を解る  
譬へば虚空の中に、普く一味の水を雨らすも  
衆生の果報力にて、起す所の物同じからざるが如し  
如來は正法を雨らすに、大悲の一味水なるも  
應に化を受くべきに隨ふが故に、種種に差別して説く  
世界初めて成ずる時は、先づ色界の宮を起し

復欲界天に於て、次第に宮殿を起し

次に復人間に於て、各各住處を造り

然る後に次第に、乾闥諸龍の法を起す

如來も亦是の如く、始めて等正覺を成じ

初に菩薩の行を起し、次に緣覺乘を成じ

又心自在の、一切諸の聲聞を化し

然る後に衆生をして、諸の善根を修習せしむ

清淨の蓮華を見て、諸天は佛の出でたまふことを知り

雨に因りて能く風を起し、風は能く世界を起す

如來は光明を放ちて、佛菩薩を分別し

能く智慧輪を起して、諸例の法に通達せしむ

水は風輪に依りて住し、地は水輪に依り

衆の寶樹は地に依るも、虚空には依る所無し

智輪は如來に依り、慈悲は智慧に依り

功德は方便に依るも、法身は依る所無し

譬へば大地起りて、諸の衆生を饒益し

水陸の群萌の類は、各各安樂を得

【二足四足】 人天等は二足、畜生は四足なり。

【爾時、普賢菩薩】 以下、第二に如來性起の身掌を叙す

【譬へば虚空】 以下、此段は第一に虚空周遍の身を以て有量周遍の佛身を説く。

虚空に依る衆生、及び欲色の諸天

二足四足等の、一切悉く饒益せらるるが如し  
法王も亦是の如く、世間に出興したまひて

一切の衆生をして、皆悉く饒益を得しむ  
若し人見聞し、恭敬し供養する者行らば

諸の煩惱を除滅し、深く如來の法を解らん  
如來性起の法は、世間能く知る莫し

我が説く所の少分は、衆生を饒益せんが故なり  
爾時、普賢菩薩摩訶薩、諸の菩薩に告げて言はく、

佛子、云何が菩薩摩訶薩は如來應  
供等正覺を知見せん。此菩薩摩訶薩は如來の具足し成就せる無量の功德を知見す。何を以  
ての故に。如來應供等正覺は一法一行一身一初にて、一衆生を化するに非ざるが故に。此

菩薩摩訶薩は、如來の具足し成就せる無量の法と無量の行と無量の身と無量の刹と一切衆  
生とを教化することを知見するが故に。

佛子、譬へば虚空の一切の色處非色處に、處として至らざること無く、而も至るに非ず  
至らざるに非ざるが如し。何を以ての故に。虚空には形色無きが故に。如來の法身も亦復

是の如く、一切處、一切刹、一切法、一切衆生に至るも而も所至無し。何を以ての故に。  
諸の如來の眞は、是れ身に非ざるが故に、應化する所に隨ひて其身を示現す。佛子、是

【勝へば虚空】以下、此段は第二に虚空無染の喻を以て周遍無著の如來身を明す。

【勝へば日月の世間】以下、此段は第三に日光無礙の喻を以て、大用成盛の如來身を説く。

を菩薩摩訶薩の初人の勝行門如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば虚空の彌廣くして、悉く能く一切衆生を容受し、而も染著無きが如し、如來の法身も亦復是の如く、一切衆生の世間の善根と離世間の善根とを照すも、亦染著無し。何を以ての故に。如來の法身は一切の染著に於て悉く已に離したるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の第二の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば日月の世間に出でて無量の事を以て、衆生を饒益するが如し、謂ゆる闇冥を消除し、一切の山林、藥草、百穀、卉木を長養し、冷濕を消除し、空を照して虚空の衆生を饒益し、池を照せば則ち龍く蓮華を開敷し、普く悉く一切の色像を照現し、世間の事業皆究竟することを得。何を以ての故に。日は能く普く無量の光を放つが故に。如來身の日も亦復是の如く、無量の事を以て普く能く一切衆生を饒益す。謂ゆる無量の饒益は善法を長養し、普照の饒益は一切衆生の闇冥を消除し、大慈の饒益は衆生を救護し、大悲の饒益は一切を度脱し、正法の饒益は一切の根身覺意を長養し、堅信の饒益は心の垢濁を除き、見法の饒益は因縁を壊せず、天眼の饒益は悉く衆生の罪に死し續に生るるを見、離害の饒益は衆生は一切の善根を壊せず、慧光の饒益は一切衆生の心華を開敷し、真心の饒益は一切菩薩の同行を究竟す。何を以ての故に。如來身の日は普く一切の慧の光明を放つが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の勝行にして如來を知見すと爲す。

【勝へば日出でて】

復次に佛子、譬へば日出でて普く一切の諸大山王を照し、次に一切の大山を照し、次に

以下、此段は第四の驗説にして、第一は日光等照の驗、第二は其疑智機にして佛の平等應

【發】ば日世間】以下、此段は第五に日照生盲の驗を以て湛光密用の如來身を顯はす。因に此段天台宗の五時教典の據たり。生盲の生盲關提の略、佛の正法を疑訪する不信者なり。

金剛寶山を照し、然して後に普く一切の大地を照すも、日光は是念を作さず、「我當に先づ諸大山王を照し、次第して乃至普く大地を照すべし」と。但彼山地に高下有るが故に照すに先後有るが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し、無量無邊の法界智慧日輪を成、就して、常に無量無礙の智慧の光明を放ち、先づ菩薩摩訶薩等の諸大山王を照し、次に緣覺を照し、次に聲聞を照し、次に決定善根の衆生を照し、應に隨ひて化を受けしめ、然して後に、悉く一切の衆生を照して、乃し邪定に至り、爲に未來の饒益の因縁を作す。如來の智慧の日光は是念を作さず、「我當に先づ菩薩を照し、乃し邪定に至るべし」と。但大智の光を放ちて普く一切を照すのみ。佛子、譬へば日月の世間に出現して、乃し深山幽谷に至るまでも、普く照さざる無きが如し。如來の智慧の日月も亦復是の如く、普く一切を照して明子なしざる無し。但衆生の希望、善根に不同あるが故に、如來の智光は種種に分別せり。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば日世間に出づるも、生盲の衆生は未だ曾て親見せず。何を以ての故に。肉眼無きが故に。佛子、此生盲の衆生は日を見ずと雖も、亦日光の饒益する所と爲る。日光に因るが故に、飲食資生の衆具を得、冷濕を消除し、體を輕軟ならしめ、風寒瘰癧の諸患は悉く除こりて安隱快樂なるが如し。如來の慧日の世間に出現するも亦復是の如し、一切の邪見、犯戒、無智、邪命の生盲の衆生は未だ曾て佛の智慧日の光を親ず。何を以ての故に。信心の眼無きが故に。佛子、生盲の衆生は如來の智慧日の光を見ずと雖も

【四大】地、水、火、風の四原素を言ふ。

然も此衆生も亦如來の智慧日の光の饒益する所と爲り、四大の一切諸苦を除滅し、身體安樂にして、一切の煩惱毒蒂の根本を斷つ。佛子、如來に光有り、名けて一切功德の積聚と曰ふ。復光明有り、普く一切を照すと名く。復光明有り、名けて清淨にして自在に普く照すと曰ふ。復光明有り、大妙音を出すと名く。復光明有り、普く一切諸の語言の法を照すと名く。復光明有り、自在に一切の疑惑を除滅すと名く。復光明有り、無依にして普く照すと名く。復光明有り、智慧自在にして一切境界の重安を降注すと名く。復光明有り、諸乘を分別して其所應に隨ひて大妙音を出すと名く。復光明有り、名けて圓滿自在の音聲は諸刹を莊嚴し、悉く衆生をして普清淨なるを得しむと曰ふ。佛子、如來の一一の毛孔より、是の如き等の千種の光明を放ち、五百の光明は普く下方を照し、五百の光明は普く上方を照す。菩薩摩訶薩は各其刹の諸の如來の所に於て、此光を見已りて、彼諸の菩薩は、即時に清淨の十頭、十眼、十耳、十鼻、十舌、十身、十手、十足、十地、十智を具足せり。彼諸の菩薩の、菩薩の行地に因りて得し所の諸入は皆悉く清淨にして、普根と一切煩惱とを成就せり。聲聞緣覺も皆悉く一切の煩惱を除滅し、少智の生盲の衆生も、身體柔軟にして安隱快樂となり、離垢清淨にして諸根を調伏し、四念處の法を具足し成就せり。地獄、餓鬼、畜生の惡道の衆生も、衆苦悉く除こりて皆安樂なることを得、身壞し命終りては、人天の中に生る。彼諸の衆生は何の因縁、何の威神力を以て、來りて真如に生れしやを知らず覺らず。彼生盲の者は唯是念を作すのみ、

【譬へば満月に】  
 以下、此段は第六  
 に月光奇特の喻を  
 以て、圓廻自在の  
 如來身を顯表す。

「我は是れ梵天なり、我は是れ梵化なり」と。爾時、如來は普自在三昧に安住し、八種の如來の妙音を演出して衆生に告げて言はく、「汝等衆生は是れ梵天に非ず、亦梵化に非ず、佛の神力を蒙るが故に、此間に生るることを得たり」と。彼諸の衆生は、佛の神力の故に、即ち宿命に經し所の惡道より來りて、此間に生れたることを識り、皆大いに歡喜せり。大いに歡喜し已りて、各優曇華雲、香雲、娛樂雲、一切衣雲、蓋雲、幢雲、末香雲、妙寶雲、師子幢雲、半月樓閣雲、讚歎莊嚴具雲を持して、如來の所に詣り、奉獻し供養したてまつれり。何を以ての故に。佛の神力を蒙りて、慧眼開明したればなり。如來は即ち彼諸の衆生に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまへり。佛子、當に知るべし、如來の慧日は生首の衆生を饒益し、善根を長養し具足し成就す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば満月に四の奇特未曾有の法有り。何等をか四と爲す。一切の星宿の光明を映蔽し。増減を現し。閻浮提の一切の淨水に於て、影現せざること無く、一切の衆生親見する者有らば、皆悉く面に對するが如し。如來の法身も亦復是の如く、四の奇特未曾有なる法有り。何等をか四と爲す。一切の聲聞緣覺、學無學の法、功德の星宿を映蔽し、其所應に隨ひて壽命の修短同じからざることを示現し、法身常に住して未だ曾て増減せず。影は一切世界の淨心の衆生の菩提器の中に現じ、所聞の法に隨ひ、解脫地に隨ひ、應に化を受くべき者は、一切皆、如來前に現じたまふと謂ふ。其實、法身には彼此

【譬へば三千大千世界】以下、此段は第七に佛身菩薩の喻を以て、佛の一多無礙の身を明す。

【譬へば大醫王】以下、此段は第八に醫王巧術の如來を以て、無思成事の如來を説く。

有ること無くして佛事を究竟す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば三千大千世界の大梵天王は、少しく方便を以てすれば大千世界の一切の衆生は、各梵王は己が前に現在することを見るも、亦分身せず、種種の身無きが如し。佛子、如來も亦復是の如く、亦身を分たず、種種の身無くして、一切の衆生に於て、應化する所に隨ひて其身を示現し、未だ曾て彼處の若干の衆生に示現せりと念を生ぜず。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば大醫王の善く衆衆と對治の法を知り、一切の方論を皆悉く明瞭す。彼大醫王は闍浮提の中の一の草にして、若し其前に現せば、悉く能く識別せん。彼大醫王の宿善根の力なり。又能く明かに諸の方論を了るが故に、悉く能く一切の衆衆を療治す。彼大醫王の命終の時に臨んで、是の如きの念を作さく、「我命終の後は、一切衆生歸依す。唯無けん、是故に我身に巧方便を現すべし」と。爾時、醫王は藥を以て身に塗り、呪詛にて自ら替し、我命終の後は、身乾燥せず又故壞せずして、能く身の四威儀を具足し、行住坐臥に醫王の事を行じて、衆病を療治し、木と異なること無からしめんが如し。如來應供等正覺の無上の醫王も亦復是の如く、善能く諸の對治法を明了し、悉く能く一切衆生の諸の煩惱の病を除滅し、無量億那由他劫に善根を修習し、般若波羅蜜を究竟して彼岸に到る。善く方便の藥塗呪持を學し、如來、昔に於て先づ善く菩薩の行地に

【譬へば大海】以下、第九に摩尼利益の喻を以て佛有成益の如來身を叙す。

【譬へば大海】以下、第十に寶王稱念の喻を以て、如來滿願の如來身を顯はす。

安住し、般若波羅蜜の巧妙なる方便の業呪の力もて、壽命を任持す。如來は少しの方便を以て、佛事を施作し、衆生を救護して煩惱を除滅す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第八の勝行にして、如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば大海に摩尼寶有り、普照明淨藏と名け、此寶の光明、衆生の身に觸るれば、悉く同一の色と爲る。若し見る者行らば、眼即ち清淨とならん。彼光明の所照の處に隨つて日法の寶を雨らし、皆悉く遍滿して無量の衆生を饒益し、安樂にするが如し。如來の法身も亦復是の如く、大寶王の功德積聚したる大智慧藏と爲る。如來に光有り、寶身智と名く。若し衆生有りて斯光に觸れん者は、皆悉く佛身と同色なるを得ん。若し衆生有りて斯光を見ん者は、皆悉く清淨の法眼を達得せん。若し衆生有りて斯光に觸れん者は、貧賤の苦を除き、尊貴にして富樂となり、乃至無上菩提の快樂あらん。佛子、當に知るべし、如來の法身は彼此有ること無くして、悉く能く一切の衆生を究竟して而も佛事を作す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第九の勝行にして如來を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば大海に寶有り、名けて一切世間莊嚴如意摩尼寶王と曰ひ、百萬の功德を具足し成就す。彼寶王の所住の處に隨ひて、一切の衆生、有ゆる善患は皆除滅することを得、其所願に隨ひて悉く能く充滿す。彼摩尼寶王は少福の衆生の能く見ることを得る所に非ざるが如し。如來の法身の摩尼寶王も亦復是の如し。若し衆生有りて聞見することを得ん者は、皆悉く生死の苦を除滅せん。若し一切の衆生、一時に尊念して如來を

見たてまつらんと欲せば皆悉く觀見し能く歡喜せしめ、願ふ所悉く滿せん。如來の法身は少福の衆生の能く見る所に非ず、佛の神力をば除く。其所應に隨ひて而も身を示現したまふ。佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の勝行にして如來を知見すと爲す。

菩薩摩訶薩は無量の淨心を具足し成就して十方に充滿し、深く法界に入り、眞實際に住して生も無く滅も無く、三世平等にして悉く能く一切の虚妄を除滅し、未來際に入りて正法は一切の世間、一切の法界に充滿し、一切の佛身は無量に尊重す。爾時、普賢菩薩摩訶薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

譬へば虚空の性、虚として至らざる無く

十方世界の中の、一切諸物の刹色之處非色の處、一切衆生の類

去來今現在に、至るに非ず至らざるに非ざるが如し

一切諸の最勝の、清淨の妙法身

處として至らざる無く、諸の法界に充滿す

最勝の妙法身は、一切能く見る莫し

衆生を教化せんが故に、導師爲に示現したまふ

譬へば虚空の性の如し、能く執持する者無く

普く諸の群生をして、無處に衆業を造らしむ

【譬へば虚空の性】以下重頌なり。總じて四十二偈ありて前の十身を頌説す。就中、第四と第八とは各五頌、他は各四頌を以て説く。

虚空に是念無し、我今何の作す所ぞ

云何が造作し、誰が爲に造作せるやと

是の如く諸の最勝も、此淨き身業に因りて

普く群生の類をして、白淨の法を成就せしむ

如來の淨法身は、無量の衆を饒益するも

法身も亦、我諸の群萌を利せりと念ふこと無し

譬へば明淨の日の、闇浮世に出現して

一切の闇を除滅し、普く照して悉く餘す無く

一切の衆寶山と、大地と諸華の池と

事に隨ひて長養し、一切の衆を饒益するが如し

最勝の日も是の如く、一切の衆を饒益し

悉く群生の類をして、諸の善根を長養し

慧の光明を成就して、一切の闇を除滅し

諸の導師を親見して、一切の衆を具足せしむ

譬へば日の出づる時、先づ大天王を照し

又復次第に、一切の諸大山を照し

次に一切の小山、及び餘の高顯の處を照し

然して後に乃し普く、世界の諸大地を照すが如し。

普遊も亦是の如く、清淨の慧日の光は

先づ諸の菩薩の、功德の大山王を照し

爾して乃し次第に、一切諸の緣覺を照し

又復次第に、聲聞、學、無學を照し

然して後に次第に、一切諸の衆生を照すも

法身に是念無し、我照明する所有りと

應へば明淨の日の、世間に出現するが如し

生盲は見すと雖も、而も能く饒益を作し

飢渴の患を除滅して、身を柔軟にして樂ならしむ

常に知るべし明淨の日は、饒益せざる所無し

佛日も亦是の如く、世間に出現して

信心の眼無きものと雖も、而も爲に饒益を作す

或は如来の聲を聞き、或は導師の光に觸れなば

彼が爲に因縁と作りて、究竟して菩提を成ぜん

譬へば盛満月の、諸の星宿を映徹し

一切の衆を示現し、増有り或は減有り

一切の澄淨の水に、月影現せざること無く  
世間の群生の類、皆悉く對すれば、自ら見るが如し  
最勝の淨滿月も、二乗を映蔽し  
其化を受くる者に隨ひて、壽の修短を示現し  
影は、暗の上天の、淨心の菩提の器に現じ  
各各皆自ら謂へらく、我天人の尊に對せりと  
譬へば大梵王の、梵天の宮に安住して  
悉く大千界に於て、普く梵王の身を現じ  
自在力を具足して、無量の身を變現し  
處として見ざること無けれども、其身亦分たざるが如し  
導師も亦是の如く、自在力を具足して  
一切の十方刹に、普く無量の身を現す  
稱量すべからざる身は、一切能く見る莫くして  
普く衆生に應現すれども、而も亦身を分たず  
譬へば大醫王の如し、普く對治の法を知り  
若し見ることを得る者行らば、病として除かれざる無し  
命終らんと欲する時に臨んで、是の如きの念を生ずらく

我身終沒の後は、一切のものを歸依無けん

藥を以て其身に塗り、呪術して自ら持し

我命終の後も、本の如く變異無からしめん

是の如く諸の最勝、無上の大勝王も

善く方便慧を學し、一切智を具足し

過去の無量行にて、淨法身を示現し

衆生の若し見たてまつらん者は、煩惱の患を除滅せん

譬へば大海の中の、摩尼の衆寶王は

無量衆の、清淨の妙光明を出生し

衆生斯光に觸れたば、皆悉く寶色に同じく

若し觀見ることを得るもの有らば、彼清淨の眼を聞くが如し

最勝の寶も是の如く、普く慧の光明を放つ

若し斯光に觸るる有らば、悉く佛と色を同じうせん

衆生若し見ん者は、互の淨眼を具足して

諸の闇冥を除滅し、如來の地に安住せし

譬へば如意寶の、隨ひて一切の願を滿し

若し求むる所有らん者には、皆悉く其意を滿たし

【佛子、菩薩摩訶薩以下、第三に如來性起の語業を叙す】

【菩薩摩訶薩は以下、十の譬喩を以て如來の十種の音聲を叙す。就中其一到劫盡明聲の

寶王は、我世間を饒益せりと、の念を生ぜず

少功德の衆生は、此寶王を見ざるが如し

善逝も亦是の如く、一切の願を滿せしめ

若し求願する者有らば、皆悉く滿足することを得ん

善逝は、我衆生を利益せりと、の念を生ぜず

其惡心を懷く者は、如來の身を觀たてまつらず

佛子、菩薩摩訶薩は云何が如來應供等正覺の微妙の音聲を知見せん。此菩薩摩訶薩は如

來の音聲を處として至らざること無しと知見す。如來の種種微妙の音聲は一切の衆生をし

て皆大いに歡喜せしめ、無量の諸佛の正法を演說し。應に化すべき者に隨ひて、悉く解了

を得しめ、衆生を教化して未だ曾て時を失はず。身を清涼にし、心定まりて亂れざらし

め、觀衆平等にして、生も無く滅も無し。譬へば呼響の主無きが如し。出生すと知見

す、諸の善根を長養するが故に。甚深なりと知見す、邊底無きが故に。正直なりと知見

す、究竟じて法界に度るが故に。斷ゆること無しと知見す、法界を攝するが故に。壞すべ

からずと知見す、法界を究竟するが故に。

菩薩摩訶薩は、如來の音聲は、量に非ず量無きに非ず、主に非ず主無きに非ず、智に非

ず智無きに非ざるを知る。何を以ての故に。譬へば世界の將に壞せんとする時の如し。法

是の如くなるが故に、自然に四種の音聲を演出す。何等をか因と爲す。一に曰はく、汝等

論を擧げて平尋  
法の佛華を説く

當に知るべし、何禪は安樂にして欲瞋志を離れ、欲界を遠離す一と。衆生聞き已りて自然  
 に皆初禪を成就することを得、欲界の身を捨てて、梵天の處に生る。二に曰はく、「汝等當  
 に知るべし、二禪は安樂にして、覺觀を離れ、無覺無觀にして、梵身を遠離す一と。衆生  
 聞き已りて自然に皆二禪を成就することを得、梵世の身を捨てて光音天に生る。三に曰は  
 く、「汝等當に知るべし、三禪は安樂にして喜愛を離る一と。衆生聞き已りて、自然に皆三  
 禪を成就することを得、光音の身を捨てて過淨天に生る。四に曰はく、「汝等當に知るべ  
 し、四禪は安樂にして衆苦を遠離す一と。衆生聞き已りて自然に皆四禪を成就することを得、  
 淨の身を捨てて果實天に生る。佛子、是を世界將に壞せんとする時、法是の如くな  
 るが故に、自然に四種の音聲を出生すと爲す。彼聲に主無く、亦作者無し。如來の妙音  
 も亦復是の如く、亦主有ること無く、自然に四種の妙音を出生して佛法に隨順す。何等  
 をか四と爲す。一に曰はく、「汝等當に知るべし、一切の行は苦なり、地獄、畜生、餓鬼の中  
 の苦、閻羅王の苦、惡行者の苦、功德無き苦、我我所に著する苦なり、人天に生れんと欲  
 せば、當に善根を種多、一切の功德を修し、八難を遠離して無難の處を得べし一と。衆生  
 聞き已りて、顛倒を捨離し善根を修習し八難を遠離して人天の中に生る。二に曰はく、「汝  
 等當に知るべし、一切の行は苦なり、皆悉く熾々に然え燒くる鐵丸の如し、一切の衆生  
 は悉く磨滅の法なり、寂滅の涅槃は熾然を遠離して清涼安樂なり一と。衆生聞き已り  
 て、皆善根を修す、善根を修し已りて音聲忍を得、音聲忍を得已りて聲聞乘を學ぶ。三



きて恐怖の心を生じ、五欲を遠離し、各宮殿を捨てて正法の堂に詣で、善法を作見し、正道を安樂せり。佛子、天の妙音聲も亦有ること無く亦作音無し、不起不滅にして而も普く放逸の諸天を利益す。如來の妙音も亦復是の如く、普く放逸の諸の衆生の爲の故に無量の正法の音聲を出して之を覺悟す。謂ゆる無著の聲、不放逸の聲、無常、青、空、非真の聲、寂滅涅槃の聲なり。皆悉く一切の法界に充滿し、其所應に隨ひて悉く歡喜せしめ、各樂土所に隨ひて、諸衆を修學し、無量の大智の音聲、不退轉の聲、菩薩の諸行を具足する音聲、如來の一切智慧地の聲を出して生ず。衆生此諸の音聲を聞き已りて、無量無數の阿僧祇の衆生、善法を修習せり、或は聲聞辟支佛衆を學び、或は無上の摩訶衍衆を學ぶ。如來の妙音は衆相を超越し、言語の道斷ゆ。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の勝行にして、如來の微妙音聲を知見すと爲す。

【善へば自在天王】  
以下、第四に寶女妙音の聲を以て法華の善の佛聲を明す。

復次に佛子、善へば自在天王に天の寶女有り、名けて善口と曰ひ、一語の中に於て百千の娛樂の音聲を演出す、彼一一の娛樂の音の中に於て、復百千の娛樂の音聲を出す。佛子、當に知るべし、一りの善口の聲は無量の微妙音聲を出して生ずるが如く、如來の音聲も亦復是の如く、一音の中に於て無量の聲を出し、其所應に隨ひて悉く開解せしむ。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の勝行にして如來の微妙音聲を知見すと爲す。

【善へば大梵天王】  
以下、第五に梵衆各開の聲を以て根

復次に佛子、善へば大梵天王の如し、梵衆の中に於て梵音聲を出し、一切の大衆聞かざる者無く、彼梵音聲は衆の外に出でず。時に梵身の諸天、各是念を作さく、「大梵天王は

慈獨聞の佛聲を明す。

【譬へば水性】以下、第六に水の隨器別異の喻を以て一異無礙の佛聲を説く。

【譬へば阿耨達龍王】以下、第七に龍王降雨の喻を以て善根長養の佛聲を叙す。

唯我と語りて餘天に對せず」と。如来應供等正覺、亦復是の如く、無量の無上の妙音を出生して、應に化を受くべき者は、皆悉く聞くを得て、心の外に出でず、何を以ての故に。彼諸の衆生は、根未だ熟せざるが故なり。佛の音を聞く者は、各是念を作さく、「今日如来は唯我爲に説きて、餘人の爲にしたまはず」と。如来の出したまふ所の音聲も、亦所出無く、佛の音を聞く者も亦所聞無くして、能く衆生の爲に佛事を施作す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の勝行にして、如来の微妙音聲を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば水性の如し、皆同じく一味なるも、器の異なるに隨ふが故に、味に差別有りとも、水に是念無し、我衆味と作らんと。如来の妙音も亦復是の如く、皆悉く一味なり。謂ゆる解脫味なるに、諸の衆生の受化の器異なるに隨ひ、應じて差別有り。如来の音聲は是知を作さず、是念を作さず、「我種種別異の音聲を作さん」と。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六の勝行にして、如来の微妙音聲を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば阿耨達龍王の如し、大重雲を興して閻浮提に滿ち、普く大雨を降らし、百穀、草木、皆悉く滋り長じ、江河池泉一切に盈滿するも、此大雨の水は龍王の身心の中より出でず、而も能く無量の衆生を饒益す。如来應供等正覺も亦復是の如し、大悲の雲を興して世間に遍滿し、普く無上の甘露の正法を雨らし、一切の衆生をして皆大いに歡喜し、善根を出生し、正法を長養し、諸乘を具足せしむるも、如来の音聲は外より來らず、亦内より出でず、而も能く一切の衆生を饒益す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の勝

【龍王以下、第八に龍王漸降の喻を以て漸次説法の佛聲を説く。】

【龍王以下、第九に龍王漸降の喻を以て種種差別の佛功德を顯表す。】

行にして如來の微妙音聲を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば摩那斯龍王の如し、特に雨を降らさんと欲して、先づ重雲を興して虚空に彌覆し、漸降すること七日にして雨も未だ雨を降らさず、先づ衆生をして諸業を究竟せしむ。何を以ての故に。彼大龍王の慈悲心の故に。七日を過ぎしめて漸く微雨を降らし、普く大地を潤す。如來聖供等正覺も亦復是の如し。將に法雨を雨らさんとして、先づ法雲を興して、普く衆生を普ひ、未だ使即甘露の正法を雨らさずして、先づ衆生をして諸根を成就せしむ。諸業熟しりて、然る後に漸く甘露の法雨を降らす。若し即ち深法を説かば衆生堪情せん。故に如來は漸漸に微かに一切種智の甘露の法味を雨らしたまふ。佛子、是を菩薩摩訶薩の第八の勝行にして、如來の微妙音聲を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば海中に龍王有り、大莊嚴の龍王、或は十日、或は百日は百日、或は千日、或は百千日なると、佛子、雨は是念を作さず、我雨ること十日、乃至百千日ならんと。但彼龍王に不可思議の自在力有るが故に、或は十日雨ふり、乃至百千日雨ふるが如し。如來應供等正覺も亦復是の如し。微妙の甘露の正法を雨らさんと欲し、或は十種の音聲、或は二十日、或は百、或は千、或は百千、或は八萬四千種の種種の音聲、乃至無量億那由他の聲もて、分別して法を説き、一切の衆生をして皆悉く歡喜せしめたまふも、如來の妙音は是念を作さず、我能く種種の諸法を演説すと。又法界清淨にして差別有ること無し、衆生を化せんが故に、所説同じからざるなり。佛子、是を菩薩

【雲へば娑伽羅龍王】以下、第十にて普通法界の佛聲を顯はす。

摩訶薩の第九の勝行にして、如來の微妙音聲を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば娑伽羅龍王の龍王の自在力を現せんと欲するが如し。群生の類を饒益せんと欲するが爲の故に、四天下より乃し他化自在天の處に至るまで大重雲を興し、遍く六天を覆ひて種種の色有り。或は處有り閻浮檀金の色の如く、或は處有り琉璃の色の如く、或は處有り白金の色の如く、或は處有り玻璃の色の如く、或は處有り珊瑚の色の如く、或は處有り瑪瑙の色の如く、或は處有り勝寶藏の色の如く、或は處有り赤真珠の色の如く、或は處有り妙香の色の如く、或は處有り種種の衣色の如く、或は處有り清淨水の色の如く、或は處有り種種雜色の如し、是の如き等の無量の色雲、四天下を覆ひて、乃し六天に至る。覆ひ已りて、中の電光を出す。謂ゆる閻浮檀金色の雲は琉璃の電光を出し、琉璃色の雲は閻浮檀金の電光を出し、白銀色の雲は玻璃の電光を出し、玻璃色の雲は白銀の電光を出し、玫瑰色の雲は瑪瑙の電光を出し、瑪瑙色の雲は玫瑰の電光を出し、勝寶藏色の雲は赤真珠の電光を出し、赤真珠色の雲は勝寶藏の電光を出し、妙香色の雲は種種の衣色の電光を出し、種種の衣色の雲は妙香色の電光を出し、淨水色の雲は種種の雜色の電光を出し、種種の雜色の雲は淨水の電光を出す。廣く説かば乃至一種色の雲は種種色の電光を出し、種種色の雲は一種色の電光を出す。又種種の大雷の音聲を震はし、衆生をして歡喜せしむ。謂ゆる天女の歌音、天の娛樂の音、龍女の歌音、乾闥婆の歌音、緊那羅女の歌音、大地の音、大海の音、魔王の音なり、或は異類の奇妙なる種種の鳥音、或は種種の

歌音有り。爾時、龍王は若下の風を起して微細の雨を降らし、無量の衆生を饒益し安樂にす。四天下より上は六天に至るまで、普く種種無量の異雨を雨らす。謂ゆる大海の中に於て雨るを洪澍と名け斷絶有ること無く、他化自在天に於て普く歌頌娛樂の音聲を雨らし、化自在天に於て普く解脫の明淨光寶を雨らし、兜率陀天に於て普く頂髻明月神珠を雨らし、夜摩天に於て普く種種衆の莊嚴具を雨らし、三十三天に於て普く妙香を雨らし、四天王に於て普く寶衣を雨らし、龍王宮に於て普く赤明眞珠を雨らし、訶修羅の處に於て普く兵仗の怨敵を伏すと名くるを雨らし、鬱單越に於て普く衆華を雨らす。是の如く廣く説かば遍く四天下に種種の雨を雨らす。然れども彼龍王は其心平等にして彼具有ること無し。但衆生の根不同なるを以ての故に、雨に差別有り。如來應供等正覺の無上の法王も亦復是の如し。將に無量の大法を應現せんと欲して、先づ清淨の身雲を以て、普く一切の法界を覆ひ、其所應に隨ひて身雲を显现したまふ。或は衆生有りて應に如來生身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の神力の住持身の雲を見らばし、或は衆生有りて應に如來の種種身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の巧徳身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の千壞身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の智護身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の法界身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の無畏身の雲を見るべし、或は衆生有りて應に如來の無量身の雲を以て、普く一切の世界を覆ひ、其所應に隨ひて光明の電光を

示現す。或は衆生有りて如來の光明電光の無所不至と名くるを見ることを得、或は衆生  
 有りて如來の光明電光の照無量無邊と名くるを見ることを得、或は衆生有りて如來の光  
 明電光の名けて入佛微密の教と曰ふを見ることを得、或は衆生有りて如來の光明電光  
 の明淨普照と名くるを見ることを得、或は衆生有りて如來の光明電光の名けて淨照と  
 曰ふを見ることを得、或は衆生有りて如來の光明電光の入無盡藏陀羅尼門と名くるを見  
 ることを得、或は衆生有りて如來の光明電光の不亂正念と名くるを見ることを得、或は  
 衆生有りて如來の光明電光の不退智慧と名くるを見ることを得、或は衆生有りて如來の  
 光明電光の順入諸趣と名くるを見ることを得、或は衆生有りて如來の光明電光の普令  
 衆生滿足諸願と名くるを見ることを得、佛子、是の如く如來應供等正覺は普く衆生の爲  
 に如來の光明電光を示現したまふ。電光を現じりて、無量諸の大電震の音聲、金  
 を出生す。謂ゆる正覺三味の雷聲、離垢寂靜海三味の雷聲、一切法自在三味の雷聲、金  
 剛圓滿三味の雷聲、須彌山王幢三味の雷聲、海印三味の雷聲、日光三味の雷聲、普令衆生  
 歡喜三味の雷聲、無盡功德藏三味の雷聲、不壞解脫阿羅漢三味の雷聲を出す。佛子、如來  
 應供等正覺は佛の身雲に於て無量の種種の三味の雷聲を出したまふ。雷聲を出しり  
 て甘露の法を説かんと欲する時に、先づ如來の大智風輪の瑞相を現じ、無障礙の大慈悲よ  
 り起りて、先づ一切の衆生及び諸の菩薩の身心をして柔軟に皆大いに歡喜せしめたまふ。  
 如來は是の如く正法の雲、大慈悲の雲、不可思議の雲を以て、一切の衆生の身心を柔軟な

【最後の身の菩薩】  
佛果に到らんとす  
る金剛無間道の最  
後の身を得たる菩  
薩を言ふ。

【向行の菩薩】 五  
十二位の中十地以  
下の菩薩を言ふ。

らしめ、然る後に乃ち不可思議の大法の雲雨を雨らす。謂ゆる道場に生ずる一切の菩薩の爲には、不可壞の法界の大法雲雨を雨らし。最後の菩薩の爲には、如來の密教、菩薩の修業自在の大法雲雨を雨らし。一生補處の菩薩の爲には、清淨普照の大法雲雨を雨らし。記を得たる菩薩の爲には、如來の莊嚴の大法雲雨を雨らし。忍を得たる菩薩の爲には、功德の寶と智の華とを斷たざる菩薩行の大法雲雨を雨らし。向行の菩薩の爲には、不退の行にて化門の甚深門に入り、度厥有ること無き大法雲雨を雨らし。初發心の菩薩の爲には、如來の定行大善大慧もて衆生を救護する大法雲雨を雨らし。緣覺を樂ふ者の爲には、深く緣起を知り斷常の見を離れたる無垢の法雲雨を雨らし。聲聞を求むる者の爲には、煩惱の怨敵を降伏する智慧の法雲雨を雨らし。善根を修習し長養する衆生及び決定不決定の衆生の爲には、種種の歡喜の法門雲雨を雨らす。佛子、是の如き等の十種の無量無邊の大法雲雨を雨らし、法界に充滿したまふ。佛子、如來圓供養正覺は其心平等にして彼其有ること無し、但衆生の根不同なるを以ての故に、如來の法雨に差別有ることを現す。佛子、是を普賢摩訶薩の第十の勝行にして、如來の微妙普應を知見すと爲す。

大方廣佛華嚴經

卷第二十五

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

寶王如來性起品第三十二之三

【復次に佛子】以下、如來十聲の叙説を結ぶ。

復次に佛子、菩薩摩訶薩は如來の音聲の十種の無量を知見す。何等をか十と爲す。謂ゆる虚空に等しく無量なるを知見す、處として至らざる無きが故に。法界に等しく無量なるを知見す、處として徹せざる無きが故に。衆生界に等しく無量なるを知見す、一切衆生をして悉く歡喜せしむるが故に。行業に等しく無量なるを知見す、廣く一切の果報を造くが故に。煩惱に等しく無量なるを知見す、究竟寂滅の故に。種種の音聲に等しく無量なるを知見す、應に化を受くべきに隨ひて聞かざる無きが故に。欲樂に等しく無量なるを知見す、悉く分別して諸の解脫を説くが故に。三世に等しく無量なるを知見す、分際無きが故に。智慧に等しく無量なるを知見す、深く一切の法に入るが故に。佛の境界の不退に等しく無量なるを知見す、如來の法界に隨順するが故に。佛子、菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の音聲には是の如き等の十種の無量阿僧祇有るを知見す。爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

寶王如來性起品第三十二之三

【世界壞】以下前  
の長行の重顯なり  
總じて四十偈より  
成り如來の十聲各  
段に各四頌次第各  
如く頌せり

世界壞んとする時、彼虚空の中に於て  
衆生の輻報の力、自然に四聲を出すらく  
彼四神の中に於て、寂業にして衆苦を離れよと  
衆生是を聞き已りて、欲界の身を厭離す  
十力も亦是の如く、自然に四聲を出して  
法界に充滿し、處として聞かざる無し  
衆生の四縁は、佛の四種の聲に應じ  
其音を聞く者有らば、永く生死の海を度らん  
譬へば山谷に囚りて、呼聲の響を出生するが如し  
外の一切の音に從ひて、響聲隨つて應對し  
種種の四縁より起り、聞く者亦同じからず  
響は是念を作さず、我種種の音を出す  
如來の聲も是の如く、無量の音を出して  
應に作を受くべき者に隨ひて、一切聞かざること無く  
皆悉く歡喜せしめ、諸の衆生を調伏す  
音聲も亦、我種種の音を出すと念ふこと無し  
譬へば天の梵音の、彼虚空の中に於て

自然に演出して、諸の天子を覺悟し

諸の天子は此、正法の妙音聲を聞き

不放逸を修習して、五欲を遠離するが如し

十力も亦是の如く、微妙の聲を出生して

法雲の音は、一切諸の世界に充滿し

衆生をして覺悟せしむるも、彼音に生滅無し

若し聞くことを得る者有らば、皆悉く菩提を證せん

自在天王の、寶女を善口と名け

一の音聲の中に於て、百千の聲を出生し

復一一の音に於て、百千の聲を出生す

諸天若し聞かば、一切皆悅樂するが如し

十力も亦是の如く、彼一音の中に於て

應に隨ひて一時に、衆生の數に等しき音を演ぶ

衆生は音を聞き已りて、諸の煩惱を除滅す

音聲は念を作さず、我能く滅する所有りと

譬へば大梵王の、清淨の梵音を出して

一切の梵天の衆、聞かざる者有ること無く

【八功德】 淨澄、清冷、甘美、輕軟、潤滑、安和、除患、增進、八を數ふ。

一、の寶音は、樂をして歡喜せしめ

梵天の衆に對して、音は外に出でざるが如し

功德ある大梵王は、如來の處に安處し

一妙音を演出して、諸の法界に充滿し

應に化を受くべき音に隨ひて、一切聞かざること無し

聲は衆の外に出でず、信心無きを以ての故なり

響へば諸の水性質、皆悉く同一味にして

清淨にして香潤を具え、八功德を具足す

因る所の地同じからず、衆器各別異なれば

彼因縁に隨ふが故に、水味に差別有るが如し

佛子應當に知るべし、一切智の音聲と

如來の微妙の音とは、悉く同く所豎味なるも

衆生の造る所の行に、若干の差別有るが故に

清淨は隨ひて應化し、聞く所 各同じからず

響へば阿耨達の、自在大龍王

雲を興して世間を覆ひ、普く雨らして大地を潤はし

諸の法林、百發蓮華等を長養するに

彼降す所の雨水は、身心より出でざるが如し  
如來も亦是の如く、初に大法の雲を興して  
普く諸の法界を覆ひ、大甘露の法を雨らして  
衆をして善根を増し、煩惱の熱を除滅せしめたまふ  
而も彼甘露の法は、身心より出でず  
響へば大龍王の、名けて摩那斯と曰ふは  
七日重雲を起し、凝停して雨を降らさず  
普く一切の衆をして、諸の事業を究竟せしめ  
漸く微細を降らして澤し、然して後乃ち大いに雨らすが如し  
十方は法雲を興して、普く諸の法界を覆へ  
大甘露の法を雨らして、諸の群生を饒益し  
應に化を受くべき者に隨ひ、彼が爲に深法を説き  
聞く者恐怖せず、究竟して菩提を成ず  
響へば大龍王の、名けて大莊嚴と曰ふは  
先づ密なる重雲を布きて、然して後に大雨を降らし  
或は上、二十日、乃至百千日たるも  
雨水は等しく一味なり、衆生の故に同じからざるが如し

究竟じて如來の、大辯の彼岸に至り

或は十の法門、乃至百千の門を説き

或は八萬四、乃至無量の行を説きたまふも

如來は、我法界を分別すとの念を生じたまはず

譬へば海龍王の名けて婆伽羅と曰ふは

悉く密なる重雲を興して、四天下を彌覆し

普く一切處に雨らし、各各悉く同じからざるも

龍王の心は平等にして、亦憎愛有ること無きが如し

最勝も亦是の如く、無上法の龍王にして

大悲の雲を興起して、普く一切を覆ひ

道場の菩薩の爲に、大甘露の法を雨らし

其塵化する時に隨ふも、如來の心は平等なり

『佛子、云何が菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の心を知見せん。此菩薩摩訶薩は、心意識は

即ち如來に生ずることを知る。但如來の智は無量なるが故に、心も亦無量なりと知る。佛

子、譬へば虚空は悉く一切萬物の所依と爲るも、而も彼虚空には依止する所無きが如し。

如來の智慧も亦復是の如く、悉く一切世間の智慧、離世間の智乃依止する所と爲るも、而

も如來の智は依止する所無し。佛子、是は菩薩摩訶薩の最初の勝行にして、如來應供等

【佛子、云何】以下、第四に如來性の意を叙す。【譬へば虚空】以下、十種の譬喩を以て如來性の起の十種の大智を明し、此段は第一に虚空無依の喩を擧げて平等無依の佛智を顯表す。

【譬へば清淨の法界】以下、第二に法界無改の喻を以て佛性増減無き佛智を明す。

【譬へば四大海水】以下、第三に大海調益の喻を以て益生無念の佛智を説く。

【譬へば大海】以下、第四に大寶出生の喻を以て興用體密の佛智を明す。

正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば清淨の法界は悉く一切の聲聞、緣覺、菩薩の解脫の依止する増と爲るも、而も清淨の法界には、増無く減無きが如し。如來の智慧も亦復是の如く、一切の世間、出世間の智、算數巧術の一切衆智の依止する所と爲るも、而も如來の智には増無く減無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第二の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば四大海水の如し、悉く能く四天下の地、八十億の小洲を澤潤す。若し衆生有りて彼諸の處に於て、方便もて水を求むるに往くとして得ざる無し、而も彼大海は是念を作さず、我能く諸の衆生に水を資給すと。如來の智慧の大海も亦復是の如く、悉く能く一切の衆生の心を澤潤す。彼諸の衆生は各法門に於て善根を修習すれば皆智慧の光明を得。而も如來は是念を作したまはず、我能く悉く衆生に智慧を與ふと。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。復次に佛子、譬へば大海に四種の寶珠有るが如し、此四種の寶は悉く海中の一切の衆寶を生ず。若し此寶無ければ、海中の衆寶は悉く皆滅失せん。何等をか四と爲す。一に衆寶積聚と名く。二に無盡寶藏と名く。三に遠離熾然と名く。四に一切莊嚴聚と名く。是を四寶と爲す。佛子、此四種の寶は一切の阿修羅、迦樓羅、諸の龍神等は悉く見ることを得ず。何を以ての故に、娑伽羅龍王は密に深き寶藏に置けるが故なり。此四種の寶は端

【大智】(へば大海)以下、第五に寶珠消海の喻を以て、惑成徳の佛智を顯表す。

離にして方正なり。如來應供等正覺の海にも亦四種の大智の寶珠有りて、一切の善問、緣覺、學、無學の智及び諸の菩薩の智慧の大寶を出生す。何等をか四と爲す。一に業無き巧妙方便の清淨智寶と名く。二に有爲無爲を分別演說する清淨智寶と名く。三に一切諸法を分別演說して法界を壞せざる清淨智寶と名く。四に業生に塵化して未だ曾て時を失はざる清淨智寶と名く。是を如來の大海の四種の清淨智寶と爲す。佛子、此如來の四種の清淨智寶は一切の業生能く見る者無し。何を以ての故に。此四種の智慧の大寶は如來の深密の法寶の法に安置せらるるが故なり。菩薩の慧は攝收にして殊物なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば大海に四の熾然たる光。明の大寶有るが如し、此四種の寶は悉く能く大海の無き水を清濁す。何等をか四と爲す。一に日藏光。明の大寶と名く。二に離濁光。明の大寶と名く。三に火珠光。明の大寶と名く。四に究竟無餘光。明の大寶と名く。佛子、若し大海の中に此四寶集ければ、四種の天下の金剛山、乃至非想非非想處は皆悉く漂没せん。佛子、此日藏光。明の大寶は能く海水を照して悉く離と成爲す。離濁光明の上寶は能く暗濁を照して悉く離と成爲す。火珠光明の大寶は能く悉く離海を熾然す。究竟無餘光明の大寶は悉く離海を照して永く盡して滅すること無し。如來應供等正覺の海にも亦四種の智慧摩尼の大寶有りて、諸の菩薩を照し、一切の業行を具足し修習し乃至他の平等智慧を成就せしむ。何等をか四と爲す。一には永く一切不善の波浪を息むる

【勝へば水輪際】  
以下、第六に虚空  
持無礙の佛智を説  
く。

【勝へば雪山】  
下、第七に藥王生  
長の譬を以て、種  
姓深廣の佛智を明  
す。

智光の大寶。二には一切法愛を滅する智光の大寶。三には大慧智光の大寶。四には如來と等しき無量智光の大寶なり。佛子、彼菩薩摩訶薩は善法を修習する時、無量の生死不善の波浪を起し、一切の高天、阿修羅等、悉く能く止むること無し。如來は一切不善の波浪を息むる智光の大寶を以て菩薩を照曜し、不善の波浪を永く止息せしめ、堅固に無上の三昧に安住せしむ。一切の順法愛を滅する智光の大寶を以て、一切の三昧の捨て難き味著を離す。大慧智光の大寶を以て一切の無明を滅し淨慧通達す。如來と等しき無量智光の大寶を以て少しの方便を以て、如來の智慧の地を出生す。佛子、若し如來の四種の智光大寶無ければ、乃至一りの菩薩も如來地を得んこと、是處有ること無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば水輪際より上は非想非非想天に至る。一切の三千大千世界は虚空に依りて住す。謂ゆる無色界の衆生の處、色界の衆生の處、欲界の衆生の處、此三界の處は悉く虚空に依る。而も彼虚空は迫進有ること無きが如し。如來の智慧も亦復是の如く一切の聲聞、緣覺、菩薩の、有爲法を知るの智慧、無爲法を知るの智慧、是の如き等の一切智慧は、悉く如來の智慧に依りて起り、悉く如來の智慧に依りて住するも、如來の智慧に迫進有ること無し。何を以ての故に。如來の智慧は至らざる所無きが故なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の第六の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば雪山の頂に藥王樹有りて、非從根生非不從根生と名くるものの如

し。彼藥王樹は六百八十萬由旬より、下に金剛地水輪際を極めて生ず。佛子、此藥王樹は若し根を生ずる時には閻浮提の樹の一切の根生ず。若し華を生ずる時には閻浮提の樹は皆悉く華を生ず。若し枝葉華果を生ずる時には閻浮提の樹は一切悉く枝葉華果を生ず。

此藥王樹は、俱能く華を生じ、華能く根を生ず、是故に名けて不從願生非不從具生と曰ふ。佛子、此藥王樹は一切諸の處に皆悉く生長す、唯二處をば除く。謂ゆる地獄の深坑

と及び水輪の中とは生長することを得ず。而も大藥王樹は亦生性を捨てず。如來の智慧の大藥王樹も亦復其の如し。一切如來の稱號の中より生じ、過去世に於て大慈悲等の

無量無邊の功徳を修習せしをもて、堅固に正住して、傾動すべからず、三世の無量の菩薩の智慧は、皆悉く皆一切の世間を覆ひ、一切の衆生の衆難を除滅し、巧方便の華、淨

法界の枝、諸佛三昧伽藍の華、七覺意の華、無上解脫の果は、陀羅尼に持せられて初めより増減無し。佛子、如來の智慧の大藥王樹は復異なる有りて、根堅固不壞と名く。何を以ての

故に。菩薩の六行を捨てず、是故に其根を名けて不壞と曰ふ。後如來の智慧の大藥王樹は初め根を生ずる時に一切の菩薩は悉く大慈悲の根を生じ、未だ嘗て一切衆生を捨置

せず。初め華を生ずる時、一切の菩薩は皆悉く堅固の精進正直心の華を生ず。初め枝を生ずる時、一切の菩薩は一切の波羅蜜の枝を生じ、初め葉を生ずる時、一切の菩薩は皆根も

は一切の淨戒、威儀、頭陀の功徳の華を生じ、初め華を生ずる時、一切の菩薩は皆根もて莊嚴せる相好の華を散く。初め果を生ずる時、一切の菩薩は無生忍を得て、佛説の果を

【讀記】 (Ihuta) 陶法、修治等と譯す修行と同義の前

【譬へば火劫】以下、第八に劫火燒の喻を以て佛智の無盡なることを説く。

【譬へば風災】以下、第九に劫風持壞の喻を以て巧方便留慧の佛智を顯表す。

受く。佛子、如來の智慧の大藥王樹は、唯二處の生長することを得ざるをば除く。一、闍維の聲聞、緣覺の涅槃と、地獄の深坑、及び諸の犯戒、邪見、貪著の法器に非ざる等しなり。而も如來の樹は生長せざるに非ず。其餘の一處の應に化を受くべき者には皆悉く生長し、而も如來の智慧の大藥王樹は増せず減せざるなり。佛子、是を菩薩摩訶薩の第七の勝行にして、如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば火劫の起る時の如し。三千大千世界の一切の有ゆる大地の草木、金剛圍山は、皆悉く熾然として燒き盡し、餘すこと無し。設ひ一人有り、若し乾草を以て彼火中に投せば、寧ろ然をさることを得るや。答へて言はく、「不らざるなり、燒盡せざることを無し。佛子、彼投ぐる所の草は、猶盡さざるべくとも、如來の智慧は一切衆生、一切の佛刹、一切の劫數、一切の諸法に於て悉く知らざること無し。若し知らざること有らば、是處有ること無し。何を以ての故に。如來の智慧は破壊すべからずして悉く明証するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の第八の勝行にして如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

復次に佛子、譬へば風災の世界を壞する時の如し。大風行りて起るを、名けて壞散と曰ふ。悉く能く大千世界の金剛圍山、一切の萬物を壞散し磨滅せしむ。爾時、三千大千世界の外に、復風行りて起るを、障壞散風災と名け、風災をして餘方に至ることを得しめず。佛子、若し此障風無ければ、十方の無量無邊阿僧祇の世界は散滅せざること無し。如來應

供等正覺も亦復是の如く、大智風有り、名けて散滅一切煩惱と曰ひ、悉く能く一切の菩薩の煩惱習氣を散滅す。如來に復巧方便智風有りて、能く一切の菩薩を授けて究竟にて盡滅し、轉聞聲支佛の地に墮せしめず。菩薩摩訶薩は此巧方便智の風力を得るが故に、能く聲聞支佛の地を過ぎ、佛地を究竟す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第九の勝行如來應供等正覺の心を知見すと爲す。

【復次に佛子】以下、第十に廣含經卷の意を以て佛性は通じて平等なる如來言を説く。【無師言】佛は無師獨覺なるを以て其證言は無師なり、故に此名あり。

復次に佛子、如來の智慧は處として至らざること無し。何を以ての故に。衆生に衆生の身無く、如來の智慧の具足せざる者有ること無ければなり。但衆生顛倒して如來の智を知らざるのみ。顛倒を遠離すれば、一切智、無師智、無礙智を起さん。佛子、譬へば一經卷有りて一三千大千世界の如くなれば、大千世界の一切有ることを記録せざる無く、若し二千世界に等しければ、悉く二千世界の中の事を記し、小千世界に等しければ小千世界の中の事を記し、四天下に等しければ、悉く四天下の事を記し、須彌山王に等しければ、悉く須彌山王の事を記し、地天の宮に等しければ、悉く地天の宮殿中の事を記し、欲天の宮に等しければ、悉く欲界天の宮殿中の事を記し、色天の宮に等しければ、悉く色界天の宮殿の中の事を記し、若し無色天の宮に等しければ、悉く無色界天の宮殿の中の事を記す。彼三千大千世界に等しき經卷は一復經の中に在り。一切の微塵も亦復是の如し。時に一人有りて世に出現し、智慧廣達にして、清淨の天眼を具足し成就し、此經卷の微塵の内在るを見て、是の如きの念を作さく云何ぞ此の如き廣大の經卷は、微塵の内に在

【如來の心を知らん】以下重頌して、  
て三十七偈あり、  
最初の偈は前來  
の所説を總頌し、  
以下は次第して十  
餘を頌せり。

りて而も衆生を饒益せざるを、我當に勤めて方便を爲し、彼彼處を破りて此經卷を出し、衆生を饒益すべし」と。爾時、彼人即ち方便を爲し、微塵を破壊して此經卷を出し、衆生を饒益するが如し。佛子、如來の智慧、無相の智慧、無礙の智慧は、具足して衆生の身中に在るも、但愚癡の衆生は顛倒の想に覆はれて、知らず、見ず、信心を生ぜざるのみ。爾時、如來は闍鞞無き清淨の天眼を以て、一切の衆生を觀察したまひ、觀じ已りて、是の如きの言を作したまはく、「奇なる哉奇なる哉、云何が如來の具足せる智慧は身中に在りて而も知見せざる、我當に彼衆生を教へて聖道を覺悟せしめ、悉く永く妄想顛倒の垢縛を離れしむ、具に如來の智慧其身内に在りて、佛と異ること無きを見らしめん」と。如來は即時に彼衆生を教へて、八聖道を修し、虛妄顛倒を捨離せしめたまふ。顛倒を離れば如來の智を具へ、如來と等しく衆生を饒益す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の勝行にして如來應供等正覺の心を知見すと爲す。佛子、菩薩摩訶薩に是の如き等の無量無邊の諸の勝妙行有りて、如來應供等正覺の心を知見す。

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

如來の心を知らんと欲せば、應に最勝の智を解るべし  
如來の智は無量なり、最勝の心も亦然なり  
十方諸の世界の、一切衆生の類は  
皆悉く虚空に依るも、虚空には所依無し

一切法界の中の、衆生の種種の樂と

方便巧智の術とよ、最勝の智に依りて起る

一切諸の智慧は、悉く普逝の智に依るも

如來の最勝智は、寂然として所依無し

聲聞緣覺衆の、解脫の智慧の果は

悉く法界より起るも、法界に増減無し

法界の智は是の如く、能く一切智

學智無學智、有無に了達するの智を起す

善逝の無上智は、一切智を出生するも

生ずるに非ず生ぜざるに非ず、皆悉く増減無し

譬へば大海の水は、一切の地を溼潤す

衆生善方便して、水を求むれば得ざることも無し

大海と地とは、我衆生に水を與ふと念ふこと無し

大海に増減無く、方便もて求むれば悉く得るが如し

十方諸の世界の、一切衆生の類を

普逝の智慧海は、皆悉く能く潤澤す

各各勤めて方便して、諸の法門を修習せば

一切修行の者、其かに智慧の光を得ん  
婆伽梵王に、四の妙寶珠有り

密かに深寶藏に置きて、衆生の能く見る無し  
辯嚴にして方正、常に大海に住す

此四摩訶に因りて、一切の寶を出生するが如く  
最勝の四種の智も、無量にして稱るべからず

一切の衆に、無量諸の智慧を出生して  
大寶藏に安住せしめ、無量の徳も莊嚴す

受記の菩薩を除き、一切能く見る莫し  
譬へは大海の中に、四の摩訶寶有り

光輝甚だ猛熱にして、能く大海の水を消す  
若し此四寶無ければ、天地悉く漂没せん

大海に増減無くして、四域皆安住するが如く  
如来の四種の智も、無量にして稱るべからず

能く諸の菩薩の、不善根の波浪を止む  
一切の三世間、欲色無色界は

我及び我所を離れ、虚空に安住す

善逝の智も亦然なり、一切智の根本なり

覺明、樂、無羣、及び諸の緣覺の智

菩薩の普く健えする、無量甚深の智は

悉く如來の智に依るも、如來の智には依無し

彼雪山の二頭に、大藥王樹有りて

根より生ぜず、俱より生ぜざるに非ずと名く

此藥王樹の、生長の因縁に由るが故に

悉く闍浮提の、一切諸の樹林を生ず

彼樹の根を生ずる時は、一切の樹根生じ

草、花、葉、實、實も、一切亦是の如くたるが如く

清淨の甚深の智も、如來性の中より生ず

如來の智に依因りて、修行の智を生ず

一切の菩薩の行と、無量の一諸の功德とは

如來智の得王、平等の心地より生ず

譬へば劫盡くる時、猛暴の大風定あり

設ひ人乾草を投げて、崩壊きこ盡さざるべけんも

善逝の清淨智は、無量にして違有ること無く

悉く能く分別して、三世の衆生類を知り  
又一切の劫と、一切の諸佛の刹とを知るが如く  
是の如く無量の法を、如來は悉く了知したる  
譬へば劫盡くる時、風災あり壞散と名け  
能く諸の大地と、金剛及び須彌とを壞す  
刹の外に風有りて起る、名けて障散壞と曰ふ  
若し此風無ければ、十方悉く磨滅するが如し  
十方も亦是の如く、智珠の風無量にして  
皆悉く能く、菩薩の諸の煩惱を散滅す  
如來の方便智は、諸の菩薩を攝取し  
警覺を過ぎて、如來の地に安住せしむ  
譬へば微塵の内に、一丈經卷有り  
三千世界に等しけれども、衆生の類を益すること無し  
爾時一人有りて、世間に出興し  
塵を破りて經卷を出し、一四世を饒益するが如し  
如來の智も是の如く、衆生悉く具足するも  
顛倒妄想に覆はれて、衆生知見せず

【佛子、云何が】  
以下、第五に如來  
性起の境界を辨ず

【非境界】 如來の  
境智不二なる境界  
を言ふ。

【佛子、菩薩摩訶  
薩】以下、如來の  
深智に約して境界  
も亦深廣なること  
を叙す。

【一、龍王の心】  
以下、龍王心所の  
智を以て、佛に依  
心無本の智を顯は  
す。

【一切の大海の水】  
以下海は龍の大願  
より起るの喻を以  
て佛智の大願より  
起る義を叙す。

如來は衆生を救へ、八埏道を修證して

一切の辨を離滅し、究竟として菩提を成ぜしめたまふ。

佛子、云何が菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の境界を知見せん。此菩薩摩訶薩は、無量無邊の無礙の智慧を成就して、一切衆生は是れ如來の境界なり、一切の世間、一切の刹、一切の法、一切衆生の行、如來不壞の境界、無礙法界の境界、實際無際の境界、無量虚空の境界、非境界の境界は、是れ如來の境界なりと知る。佛子、一切の衆生無量なるが故に、如來の境界も無量なり。一切の世間無量なるが故に、如來の境界も無量なり。乃至非境界の境界無量なるが故に、如來の境界も無量なり。非境界は一切處に至るも前も至る所無し。如來の境界も亦復是の如し。

佛子、菩薩摩訶薩は心の境界は是れ如來の境界なりと知る。心の境界の無量なるが如くなる故に、如來の境界も無量なり。何を以ての故に。心の無量なるに隨ひて智慧を生ずることと亦復是の如くたればなり。

佛子、譬へば龍の心に隨ひて雨を降らすも、雨内よりせず、亦外よりせざることが如し。如來の境界も亦復是の如く、心の所念に隨ひて念念の中に於て無量不思議の智を生ずるも、彼諸の智慧は悉く來由無し。

佛子、一切の大海の水は龍王の心願より起る所なり。如來の智海も亦復是の如く、悉く大願力より起る。佛子、如來の智海は無量無邊にして、口説すべからず、思議すべからず。

【此閻浮提の内】  
以下、海本空界の  
喻を以て置廣無限  
の佛智を顯表する  
なり。

我小喻を説かん。汝今諦かに聽け。

佛子、此閻浮提の内より二千五百の河水を流出して、悉く大海に入る。俱耶尼の内より五千の河水を流出して、悉く大海に入る。弗婆提の内より八千四百の河水を流出して、悉く大海に入る。鬱單越の内より一萬の河水を流出して、悉く大海に入る。佛子、此四天下の内よりして、是の内より二萬五千九百の河水は、悉く大海に入る。佛子、意に於て云何、此水は多きや、少きや、一答へて言はく、「甚だ多し。」と。佛子、復十の光明龍王有り。大海の中に雨らして、悉く前の水に過ぎたり。百の光明龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。大莊嚴龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。摩那斯龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。大雷龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。無量光龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。難陀跋闍龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。金剛光龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。大勝龍王、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。大龍王、大海の中に雨らし、展轉して前に過ぎたり。娑伽羅龍王の太子を名けて佛生と曰ひ、大海の中に雨らして、復悉く前に過ぎたり。佛子、彼十の光明龍王の住する所の淵地は、大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。百の光明龍王の住する所の淵地は、大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。大莊嚴王の住する所の淵地は、大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。大龍王の住する所の淵地は、大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。

前に過ぎたり。摩那斯王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。難陀跋難陀王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。難陀跋難陀王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。無量光明龍王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。流注不闍龍王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。大瞿龍王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。金剛光明龍王の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。其の如き等廣く説かば、乃至婆伽羅龍王の太子の住する所の淵池は大海に流入して、復悉く前に過ぎたり。佛子、彼十龍王及び八十億龍王、乃至婆伽羅龍王の太子の大海の中及び其淵池に雨らすか如きは、皆悉く婆伽羅龍王の雨らす所の大海に及ばず。婆伽羅龍王の住する所の淵池は、涌出して大海に流入するは、倍して復前に過ぎたり。彼涌きて流れたる水は青瑠璃の色にして大海に盈滿せり。涌出するに時有り、是故に海滿は常に時を喪はず。佛子、是の如きの大海は其水無量にして、珍寶も無量、衆生も無量、大増も無量なり。佛子、次に於て云何、彼大海の水は無量と爲すや、不や。各へて言しく、實に闍り、其水の深廣なることは譬を爲すべからず。佛子、是の如く海水の深廣にして無量なるも、如來の無量の智海に於ては百分が其一にも及ばず。乃至譬を爲すべからず。但應化する所に隨ひて、爲に譬喩を爲すのみ。佛子、菩薩摩訶薩は如來の智海の深廣にして無量なるを知見す、初發心より乃至菩薩の無量の行を闍せざるが故に。道品の寶無量なるを知見

【離垢の淨き境界】  
以下重頌にして十  
偈より成り、初二  
偈は法説、次四偈  
は前三喻を頌せり

す、三寶を離せざるが故に。無量の衆生の歡喜を知見す、一切の憚聞、辱、無辱及び縁覺を  
長養するが故に。大地の無量を知見す、歡喜地より乃し究竟無礙の智地に至るが故に。佛  
子、是を菩薩摩訶薩、如來應供等正覺の境界の無量なることを知見すと爲す。一切衆生を  
饒益する無量の智慧の故に。

爾時、普賢菩薩、重ねて眞義を明さんと爲し、偈を以て頌して曰はく、

離垢の淨き境界は、無量にして稱るべからず

殊勝の願力の故に、一切量有ること無し

譬へば心の境界の、無量にして邊有ること無きか如く

一切の所の十力の、境界も亦是の如し

譬へば大龍王の、木處を離れずして

心の願力を以ての故に、其雨に量有ること無く、

雨水從來する所無く、亦去處有ること無し

龍王の願力の故に、心に隨つて雨無量なるが如し

一切の所の十力の、亦是の如く

木より從來する所無く、去るも亦至る所無く、

無量の所の境界は、悉く心より縁覺

一切の所の法界は、皆一毛道に入る

譬へば、海の水は、無量にして流れること無く

衆生及ぶ多寶、大地も亦無量なり

海水は常に湛然として、普悉く同一味なるも

衆生の愛用に随ひて、其味各同じからざるが如し

最勝も亦是の如く、智慧の流無量なり

三密最勝なるが故に、是故に寶も無量なり

佛、學、無學、辟支、無量にして

其に無上道を修す、故に端も無量なりと説く

佛子、云何菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の行を知覺せん。其菩薩摩訶薩は如來の無礙

の行を知見す。如如の行よ、量れ如來の行なり。如は過去に滅せず、未來に至らず、現在

に起らざるが如く、如來の行は亦是の如く、滅せず、起らざるなり。佛子、譬へば法

界の無量無礙なるが如し、何を以ての故に。法界は無身の故に。如來の行も亦是の如く無

量にして無礙なり。何を以ての故に。如來の行は無身なるが故に。佛子、譬へば虚空

を造ぶに、百千年を経て遊行せし處は度量すべからず、未だ遊行せざる處も亦量すべから

ざるが如し、何を以ての故に。虚空には分齊無きが故に。如來應供等正覺の行も亦復是の

如し。若し人有りて、百千億劫由他劫に於て如來の行を分別し解説せん、正に解説せし

者は限量すべからず、未だ解説せざる者も亦量すべからず、何を以ての故に。如來の行に

【佛子、云何正覺以下、第六に如來の性也の行を以てす。五喻を擧げて廣釋す。】  
【如は過去に滅せず以下、第三に眞に變化無き心以て佛の至絶、如の行を顯はし、如の行を説く】  
【譬は法界以下、第二に法界無形の譬を以て佛の無礙の行を説す】  
【譬は鳥の以下、第三に飛鳥翔

空の喻を以て佛の圓滿無分齊の行を顯表す。

【譬へば金翅鳥王】以下、第四に金翅搏海の喻を以て如來の勝用濟生の行を叙す。

【譬へば日月】以下、第五に日月行空の喻を以て佛の無功成事の行を説く。

【譬へば如の盡く】以下重頌にして、十偈を以て前五喻を頌説せり。

は分齊無きが故に、佛子、如來應供等正覺は如來の住に住す。所住無きが故に。前も能く普く一切衆生の爲に、如來の行を示現し開導したまふ。衆生見已りて一切諸の障礙道を出過す。佛子、譬へば金翅鳥王の虚空に飛行し虚空に安住して、清淨眼を以て大海の龍王の宮殿を觀察し、勇猛の力を奮ひ、左右の翅を以て海水を搏ち聞きて、悉く南に聞かしめ、龍の男女の命の盡きたんしんす。是を行むを知りて、之を撮取するが如し。如來應供等正覺の金翅鳥王も亦復是の如く、無礙の虚空の中に安住し、清淨の眼を以て法界の諸の宮殿の中の一切衆生を觀察したまひ、若し善根已に成熟せる者有らば勇猛の十力を奮ひ、止觀の兩翅もて、生死の愛の海水を搏ち聞き、其所處に隨ひて生死の海を出で、一切の妄想顛倒を除滅し、如來の無礙の行に安立せしむ。佛子、譬へば日月の虚空を周行するも、是念を作さざるが如し、我虚空を行くに何の所より來り、去りて何の所にか至らん。如來も亦復是の如く、無礙の虚空を周行して、一切の法界を分別し、一切の衆生を饒益し、廣く佛事を作すも、如來は是念を作したまはず。我來來すること有り」と。佛子、菩薩摩訶薩は是の如き等の無量無邊の勝行を以て、如來應供等正覺の行を知見す。

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

譬へば如の盡くること無く、生無く亦滅も無く

亦方處有ること無く、之を求むるも見るべからざるが如し

如來も亦是の如く、境界は量るべからず

三世を遠離し、其性悉く如如なり

譬へば諸の法界の、界に非ず不界に非ず

行に非ず亦無に非ず、量に非ず無量に非ざるが如し

功德を持てるものも是の如く、所行量るべからず

有に非ず亦無に非ず、其身本より無たるが故なり

鳥の虚空を飛ぶに、百千年を經由すれば

行處と本行處とは、皆悉く量るべからざるが如く

若し人百千劫に、如来の行を演說せんも

計及び未計、皆悉く量るべからざるなり

譬へば金翅鳥の、虚空に安住して

龍王の宮を觀望し、其男女を擗取するが如し

十力も亦是の如く、如来の行に安住し

善根純熟の者は、煩惱の海を出でしむ

譬へば淨き日月の、虚空を周行して

一切の業を安樂ならしむるも、我能く爾すと念はざるが如し

如来も亦是の如く、諸の法界に遊行して

一切の業を度脱したまふも、我能く度すと念ひたまはず

【佛子、如何乎】  
 以下、第七に如來性起の菩提を明す。十門に分つて廣釋す。即ち一に菩提の體性、二に業用、三に甚深、四に廣大、五に顯現、六に體攝盈、七に用離、八に定に依りて用を起し、九に法界周遍、十に普通心中の十段あり。

佛子、云何が菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の菩提を知見せん。此菩薩摩訶薩は、菩提を知見するに一切の義を解り、疑惑を滅除し不<sub>レ</sub>等しく覺り、無相、無行、無退、無量、無邊、無縛、無障にして二邊を遠離す。處非處を知り、一切の字、一切の語言の法を知り、一切衆生の心心の所行を知り、一切の根と、煩惱の習と、性と知り、一念の中に於て悉く三世一切の諸法を知る。佛子、譬へば大海は一切衆生の色像の印を爲す。是故に大海に説いて名けて印と爲すが如し。如來應供等正覺の菩提も亦復是の如く、一切衆生の心念と、諸根とは、菩提の中に現じて而も所現無し。故に如來を説きて一切覺と爲す。

佛子、一切諸佛の菩提は一切の文字の記すること能はざる所、一切の語言の説くこと能はざる所、譬を爲すべからざるなり。但所應に隨ひて如來之が爲に分別し演説したまふの

佛子、如來應供等正覺は菩提を成じたまふ時に、佛の方便に住して一切の衆生に等しき身を得、一切の法に等しき身を得、一切の刹に等しき身を得、一切の如來に等しき身を得、一切の諸佛に等しき身を得、一切の語言に等しき身を得、一切の法界に等しき身を得、虚空界に等しき身を得、無礙の法界に等しき身を得、出生無量界に等しき身を得、一切の行界に等しき身を得、寂滅の涅槃界に等しき身を得たまふ。佛子、如來の得たまふ所の身に隨ひて、當に知るべし、音聲及び無礙の心も亦復是の如し。如來は是の如き等の三種の清淨無量を具足したまふ。

佛子、如來の身中に、悉く一切衆生の菩提心を發し、菩薩の行を修し、等正覺を成ずることを見たまふ、乃至一切衆生の窮深湛淨を見たまふことも、亦復是の如し。皆悉く一性にして無性なるを以ての故に。無相、無念、無生、無住なるが故に。我も我性に非ざるが故に衆生も衆生の性に非ざるが故に。覺も覺無きが故に。法界も自性無きが故に。虛空界も自性無きが故に。是の如く等しく一切の無性を覺り、無盡智と自然智と一切如來の無極の大悲ともて衆生を度脱したまふ。

佛子、譬へば虛空界の世界若は成り若は敗るるも、常に増減無きが如し。何を以ての故に。虚空には生滅無きが故に。如來の法界の正覺の菩提も、若は成未成あるも、常に増減無し、一性無性にして衆生を捨離すればなり。

佛子、豈ひ一人有りて世に出興し、彼能く恆沙に等しき心を化作し、彼一一の心は、悉く能く恆沙の如來を化作して、色も無く形も無し。是の如く恆沙に等しき劫に、常に化して阿耨多羅三藐三菩提に、意に於て云何、彼化する如來は寧ろ多しと爲す事不々。容へて曰はく、我も亦た意を知らず、皆變化、不化あらんも、等しくして異り有ること無し。一と。善い哉善い哉、佛子、衆に言ふ所の如し。佛子、設使一切の衆生、一念の中に於て、悉く正覺を成し、若は成じ、未だ成ぜざるも、皆悉く平等なり。何を以ての故に。皆は無性なるが故に、増も無く減も無ければなり。如來の菩提は皆悉く一性にして誰ゆる無性なり。佛子、是を菩薩摩訶薩、如來應供等正覺の菩提を知見すと爲す。

佛子、如來應供等正覺は正覺を成じ已りて正受三昧したまふ。名けて善覺と曰ふ。正受三昧し已りて菩提の身を得、數は一切衆生の身と等し。一三昧の如く、一切の三昧、一切の法門も亦復是の如し。佛子、是を菩薩摩訶薩、如來應供等正覺の菩提身を知見すと爲す。復次に佛子、菩薩摩訶薩は一毛道に於て、悉く一切衆生に等しき如來の身を知る。一毛道の如く一切の毛道、一切法界の處にも、亦復是の如し。何を以ての故に。如來の菩提身は處として至らざる無く、處として有らざる無きが故に。如來應供等正覺は、本より菩提を求め、勤修し精進して、道場の菩提樹下に往詣し、師子の座に處して最正覺を成じ、菩提を究竟したまふ。

復次に佛子、此菩薩摩訶薩は自ら身中に悉く一切諸佛の菩提有ることを知る。何を以ての故に。彼菩薩の心は一切如來の菩提を離れざるが故に。自らの心中の如く、一切衆生の心中も亦復是の如く無量無邊にして處として有らざる無く、破壊すべからず、思議すべからざるなり。佛子、菩薩摩訶薩は、是の如き等の無量無邊の不可思議の方便の法門を以て、如來應供等正覺の菩提を知見す。爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、  
菩提は二法に非ず、二邊を遠離し  
一切の惡を除滅し、平等に諸法を覺る  
一切の法は、皆悉く虚空の如く

【菩提は二法に非ず】以下重頌にして十二頌あり、前の十門を頌説す。

我に非ず無我に非ずと了達して、等しく一切の法を覺る  
 譬へば諸の大海は、一切衆生の類は  
 色像を悉く現す、故に一切印と説くが如し  
 十方世界の中の、一切衆生の類は  
 無上菩提の海に、法として現せざる無し  
 譬へば虚空の性の、世界の成壞の時  
 若は成り若は未だ成らざるも、虚空に増減無きが如し  
 最勝も亦是の如く、無上菩提の道を  
 若は覺り若は未だ覺らざるも、一性も亦無性なり  
 譬へば無量劫に、念念に諸佛を化するに  
 若は化し若は化せざるも、皆悉く等しくして異ること無きが如く  
 設ひ一切の衆生、一時に正覺を成じ  
 若は成じ若は未だ成せざるも、菩提に増減無し  
 最勝に昧有り、名付けて善覺と爲す  
 道場に菩提を成じ、此三昧を速得したまひ  
 普く無量の光を放つこと、一切の衆生に等しく  
 一切の闇を除滅して、諸の群生を聞悟したまふ

【佛子、云如何が】以下、第八に如來性起の轉法輪を説く。義を釋するに一に體相、二に深廣の相、三に無盡廣の相、五に分齊、六に出生、七に知益の七門を叙す。

三世の一切劫に、佛刹と及び諸法と諸根と心心の法と、一切虚妄の法とは一の如來身に於て、此法皆悉く現す。是故に菩提は、無量にして邊有ること無しと説く。

『佛子、云何が菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の轉法輪を知見せん。此菩薩摩訶薩は如來の一切の願と一切の法と轉に所轉無きとを知見す、本より所起無く、三轉圓滿にして、皆悉く清淨に、悉く能く一切の邪見を遠離し、欲際と非際とを離れ、一切の諸法は虚空際の如く言説すべからず。一切の法は寂滅涅槃の性なるが故に。菩薩摩訶薩は一切の文字、一切の語言法は、悉く法輪を轉すと知見す。如來の音聲は至らざる所無きが故に、法輪は響の如しと知見す、眞實の法性なるが故に。一切の音聲は皆是れ一聲なりと知見す、如來は此を以て法輪を轉じ、佛の轉法輪に主有ること無きが故に。轉法輪は無漏無盡なりと知見す、内外所有無きが故に。

佛子、譬へば文字は無量無數劫に於て説くとも盡すべからざるが如し。如來應供等正覺の正法輪を轉ずるも亦復是の如く、一切の文字、一切の語言もて説くとも盡すべからず。如來の法輪は悉く一切の語言文字に入りて、而も所住無し。佛子、譬へば字章は悉く一切の字數、一切の事數、一切の語言數、一切の算數、一切の世間出世間に入りて、而も所住無きが如し。如來の音聲も亦復是の如く、一切處に於て入らざる所無し、一切衆生、

一切の法、一切の業、一切の報、一切の心に於ても亦所住無し。一切衆生の諸の語言法は、皆是れ法輪の音聲の攝する所なり。何を以ての故に。一切の音聲は法輪の音聲を離れざるが故に。

復次に佛子、此菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の出生法門の轉法輪を知見す。何等をか如來の出生法門の轉法輪と爲す。如來は一切衆生の念念心心の行に等しき音聲を以て一切衆生の爲に法輪を轉ず。何を以ての故に。佛子、如來應供等正覺に三昧有り、名けて究竟無礙無畏と曰ふ。如來正受三昧して法輪を轉ず。如來此三昧に入り已りて、一切衆生に等しき音を出生したまひ、一一の音の中に於て、復一切衆生に等しき音を生じて法輪を轉じ、悉く衆生をして、皆大いに歡喜せしめたまふ。

佛子、若し是の如く轉法輪を知る者は、當に知るべし、是人は則ち一切の佛家に隨順すると爲す。是の如く知らざれば、則ち諸の如來家に隨順せざるなり。佛子、是を普賢摩訶薩、如來應供等正覺の轉法輪を知見すと爲す。

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

如來の轉法輪は、三世に至らざる無く

所轉に所轉無く、之を求むるも不可得なり

譬へば諸の文字の、之を説くとも盡すべからざるが如し

十力も亦是の如く、轉法輪は無盡なり

【如來の轉法輪】  
以下重頌にして十偈あり、初一偈は普賢、第二偈は無盡、次三偈半は出生、最後二偈は深廣を頌説す。

譬へば章の文字の如し、悉く一切の數に入りて  
所入に所入無きが如し、法輪も亦是の如し  
普く一切の音に入りて、所入に所入無し  
彼も亦自性無く、能く一切を喜ばしめ  
一切の數を出過し、究竟して菩提を成ず  
眞實の義を説かんと欲す、是故に三昧に入る  
彼三昧の力を以て、妙音聲を出生して  
悉く衆生と等しく、而も正法輪を轉ず  
又復悉く彼、一一の諸の音聲に於て  
無量の音を出生す、衆生の語言の法は  
大自在にして無念なり、我彼衆の音を出し  
其受化の者に隨ひて、一切聞かざること無し  
譬へば諸の文字の、内ならず亦外ならず  
無漏にして盡すべからず、亦復積聚も無きが如し  
十力も亦是の如く、清淨の法輪を轉じ  
無漏にして盡すべからず、諸佛の大神力なり

# 大方廣佛華嚴經 卷第三十六

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

## 寶王如來性起品第三十一之四

【佛子、云何が】  
以下、第九に如來性起の涅槃を明す。八門に分段して一に實の眞常、二に空を簡異し、三に出沒無礙、四に普賢勸導、五に存亡涅槃、七に用來窮際、八に所知等を明す。

「佛子、云何が菩薩摩訶薩は、如來應供等正覺の大般涅槃を知見せん。此菩薩摩訶薩は如來應供等正覺の大般涅槃を知見せんと欲せば、當に是の如く知るべし。如の般涅槃の如く如來の大般涅槃も亦復是の如し。實際の如く、法界の如く、虚空界の如く、實性の如く、離欲際りよくさの如く、無相際むさうの如く、我性際わがじやうの如く、一切の法性際ほつじやうの如く、眞實際しんじつの般涅槃の如く、如來の大般涅槃も亦復是の如し。何を以ての故に。涅槃は生滅の法に非ざればなり。若し法生ぜざれば當に知るべし、不滅にして去るも至る所無し。

佛子、如來應供等正覺は、菩薩の爲に如來の究竟涅槃を演說し顯現したまはず。何を以ての故に。諸の菩薩をして一念の中に於て、普く三世一切の諸佛悉く現前することを見しめんと欲するが故なり。一切如來の妙色を出生するも亦復二不二の想を起さず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は諸想を遠離して染著無きが故に。

佛子、但如來は衆生をして歡喜せしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生をし

て憂悲感慕せしめんと欲するが故に、涅槃を現したまふ。其實は如來に出世有ること無く、亦涅槃も無し。何を以ての故に。如來は常住なること、法界の如くなるが故に、衆生を化せんが爲に、涅槃を現したまふ。

佛子、設ひ日の出づる有りて世間を照現し、圓滿明淨なること法界と等しく、一切世界の淨水の器の中に於て影現ぜざること無からんも、日には是念無し、「我能く普く一切の淨水に現す」と。佛子、彼時に、或は一水器の破るる有らば日影現せず。意に於て云何。彼影の現ぜざるは豈日の過ならんや。答へて曰はく、「不、水器破るるが故に。日影現せざるなり」と。佛子、如來の智慧の圓滿の淨日は、一念に出現して、悉く能く一切世界、一切法界、一切衆生を照明して垢濁を滅除し、淨心の水器に、影顯はれざること無く、常に現じて前に在り。但破器濁心の衆生は如來の法身の影像を見ず。應に涅槃を見て得度すべき者なり。是故に如來は般涅槃を現じたまふも、其實、如來は不生不滅にして、永く滅度したまふこと無し。

佛子、譬へば大火は、一切の世界に於て能く火事を爲し、草木を焚燒して盡さざる者無く、時有りて、彼火、草木、城邑、聚落無きに至らば、自然に滅するが如し。意に於て云何。一切世間の火は悉く滅するや不や。答へて曰はく、「不」と。如來應供等正覺も亦復是の如く一切世界に於て、佛事を施作し、或は一佛刹を化度し已りて、周く涅槃を現したまふ。意に於て云何。一切世界の如來は悉く滅度したまふや。答へて曰はく、「不」と。佛

子、是を菩薩摩訶薩、如來應供等正覺の大涅槃を知見すと爲す。

復次に佛子、大幻師は善く幻術を知り、此術に安住し、三千大千世界の一切の城邑、聚落、大王都に於て、普く幻身を現じ、幻身を住持し、壽命盡くること無し。時に此幻師、彼城邑、聚落、大王都に成て、事の起る處に隨ひて、便ち幻身を捨つるが如し。意に於て云何三千大千世界の幻身は悉く捨離せりと爲すや。空へて曰はく、一不<sup>レ</sup>如來應供等正覺も亦復是の如く善く大慈の幻術を知りて、巧方便の慧を具足し出生して、一切の法界に於て、普く能く如來の幻身を示現したまひ、常住なること法界の如く、究竟すること虚空の如く、諸佛の刹に隨ひて、教化度脱し、已に固く訖りし處に涅槃を示現したまふ。當に知るべし、一佛刹に涅槃を示現したまふを以ての故に、如來は究竟してよく滅度したまはざるなり。佛子、是を菩薩摩訶薩、如來の大般涅槃を知見すと爲す。

復次に佛子、如來般涅槃を示現したまふ時、先づ不動三昧に入りたまふ。三昧に入り已りて、一一の身に於て、各各無量億千那由他の大光を放ち、一一の光明は各各無量阿僧祇の妙寶蓮華を出し、一一の蓮華に各各不可說不可說の妙寶の華鬘有り、一一の華鬘に各各寶獅子の座有り、一一の座上に各各如來有して跏趺坐したまふ。彼時に現する諸の如來身は、悉く一切衆生の數と等しく、功德具足し相好莊嚴して、本願を究竟せり。時に衆生有り、善根の熟する者は如來の身を見たまつて、心皆調伏して道化を稟受す。彼如來身は、究竟して盡未來際に安住し、一切衆生の應に化を受くべき所に隨ひて、未來

曾て時を失はず。彼如來身は處所有ること無く、實に非ず虚に非ず。如來は但過去の諸大願を究竟せんと欲したまふが故に、衆生をして諸の善根を長養せしめんと欲したまふが故に、其身を應現し、常に住して滅せざるなり。佛子、是を菩薩摩訶薩、如來應供等正覺の大般涅槃を知見すと爲す。

復次に佛子、此菩薩摩訶薩は、如來の涅槃を知見するに、無量無邊にして、法界を究竟じて障礙する所無く、不生不滅にして淨きこと虚空の如く、實際に安住し、其所應に隨ひて而も之を示現し、本願に持せられ、一切衆生、一切佛刹、一切諸法を捨てず。」

【譬へば圓滿の日の】以下重頌にして十二偈あり、前來所説の八門を頌説す。

譬へば圓滿の日の、一切の法界に等しく影は一切の水に現するが如し、唯諸の破器をば除く最勝も亦是の如く、普く一切の世に現じたまふ衆生の信心無きものは、佛涅槃に入りたまふと謂へり譬へば猛盛の火の、一切の物を焚燒するも草木聚落無ければ、火は則ち自然に滅するが如し最勝も亦是の如く、法界に充滿して諸の佛事を究竟じ、涅槃に入ること示現したまふ譬へば大幻師の、無量の身に示現するが如し

如來も亦是の如く、普く一切の身を現じて

諸の佛事を究竟じ、教涅槃を示現したまふ

塵に化を受くべき者に隨ひ、此を以て示現したまふ

最勝に三昧有り、名けて不可動と曰ふ

佛事を究竟じ已りて、然して後に此定に入りたまひ

念に無數の佛を出し、又無量の光を放ちたまふ

光に無量の華有り、華に無量の佛有す

最勝の無量身は、諸の法界に充滿したまひ

功德を積集する者は、一切見たてまつらざること無し

善逝の淨法身は、無量なること法界と等しく

壽命は淨く普賢せられ、一切悉く具足す

猶し無生の性の如く、如來の興りたまふも亦然なり

猶し無滅の性の如く、涅槃したまふも亦是の如し

悉く語言の道を離れ、譬喩を爲すべからず

天中の天にして勝れ難く、一切の徳を具足したまふ

【佛子、云何が菩薩摩訶薩は、如來應供等正覺の所に於て、見聞し恭敬し供養して種無し  
所の善根を知見せん。此菩薩摩訶薩は如來の所に於て、見聞し恭敬し供養して、種無し所

【佛子、云何が  
以下、第十に如來  
性起の見聞敬養の

善根を叙す。初は法に約して釋し、次は三喻を以て三果を説く。

【譬へば丈夫】以下、第一に看少金剛の喻を以て徳未來際を窮むる如來の徳果を顯表す。

【譬へば須彌山】以下、第二に小火能燒の喻を以て慧障斷滅の佛果を顯表す。

【譬へば雪山】以下、第三に藥王多益の喻を以て戒大菩提の佛果を顯表す。

の善根を知見するに、皆悉く虚しからずして、功德無盡なり。一切の愛を離れて解脱を究竟じ、果報虚しからずして諸願を満足し、一切の有爲法の中に於て窮盡すべからず、而も能く無爲の智慧に隨順し、諸佛の智を起し、未來際を究竟じて一切諸の如來地を具足す。

佛子、譬へば丈夫の少金剛を食せんに、終竟に消えずして、要す身より過ぎて、金剛輪際に至り、然して後に乃ち住するが如し。所以は何ん。彼金剛は消すべからざるを以ての故に。是の如く佛子、如來の所に於て少しく善根を植ゑば、能く一切有爲の煩惱を壞り、乃至如來の涅槃の智慧を究竟じ、然して後に乃ち住す。所以は何ん。如來の所に於て植ゑし諸の善根は、盡すべからざるが故に。

佛子、譬へば須彌山に等しき大乾草聚まらば、若し人有りて芥子の如き火を持せば、悉く能く燒き盡すが如し。何を以ての故に。火性は悉く能く燒くが故に。佛子、如來の所に於て少しの善根を種うるも、亦復是の如く、悉く能く一切の煩惱を燒滅して遺餘有ること無く、涅槃を究竟せん。何を以ての故に。如來の所に於て種ゑし諸の善根の性は、究竟するが故に。

佛子、譬へば雪山に大藥王有り、名けて善現といふ。若し見る者有らば、眼清淨なるを得ん。若し聞く者有らば、耳清淨なるを得ん。若し香を聞がん者は、鼻清淨なるを得ん。若し味を嘗めん者は、舌清淨なるを得ん。若し觸るる者有らば、身清淨なるを得ん。

を。若し彼地の土を取らば、悉く能く無量の重病を除滅し、安樂快樂ならしめん。如し如来應供等正覺の無上の藥王も、亦復是の如く常に一切諸の方便行を以て、衆生を饒益す。若し如来の色身を見ることを得る有らば、眼清淨なることを得ん。若し如来の名號を聞くことを得る有らば、耳清淨なることを得ん。若し如来の蚊香を聞くことを得る有らば、鼻清淨なることを得ん。若し如来の法味を味ふことを得る有らば、舌清淨なることを得、金剛の廣長、清淨の舌根を得て、悉く能く一切の言音を演說せん。若し如来の光に觸るることを得る者有らば、衆人は即ち清淨の色身を得て、究竟一切無上の法身を獲得せん。若し如来を念ずる者有らば、念佛三昧を得て正念にして亂れざらん。若し經行の地、如来の塔廟を得て、禮拜し供養する有らば、彼衆生は等しく善根を具足し、煩惱の患を滅して、賢聖の業を得ん。佛子、乃至不信邪見の衆生にして、佛を見聞したてまつらんには、夜諸の衆生、見聞の中に於て種まじ所の善根の果報は虚しからず、乃至究竟涅槃して、一切の惡と諸の不善根とを斷ち、善根を具足せん。

佛子、如来の所に於て、見聞し、供養し、恭敬して、種あし所の善根は、言説すべからず、喩を爲すべからず、何を以ての故に。如来は不可思議にして、思慮を過ぎたるが故に。但所應に隨ひて佛爲に喩を爲したまふのみ。佛子、是を菩薩摩訶薩、如来の所に於て、見聞し恭敬し供養して、諸の善根を種まじことを知見すと爲す。

爾時、諸の菩薩摩訶薩、普賢菩薩に白して言さく、佛子、當に何んが此經を名け、云何

【爾時】

以下、前

來十門性起の正説に次で總名受持とを叙説す。

【佛子、是の如き】以下、受持を明す。其中四段に分れ、第一に器即ち能受の修行者、第二に益を擧げて信を勤め、第三に信受の利益、第四に修行の益を叙す。

が奉持したてまつるべき。佛子、此經を名けて、一切諸佛の微密法藏と爲す。一切の世間は思議すること能はず、如來の印する所にして、大智の光明、如來の種性を開發し示現して、一切菩薩の功德を長養し、一切の世間は能く破壞すること無く、一切如來の境界に隨順して、一切の衆生をして皆悉く清淨ならしめ、佛の究竟法を分別し、演説するなり。

佛子、是の如きの經典は但不思議乘に乗ずる菩薩摩訶薩の、一向專心に菩提を求むる者の爲にのみ分別し解説して、餘人の爲にせず。何を以ての故に。此經は一切衆生の手に入らず、唯菩薩をば除く。佛子、譬へば轉輪聖王の有する所の七寶の如し。此寶に因るが故に、轉輪王の法を行す。聖王の七寶を持するに堪へたる者無し。唯第一夫人の生む所の太子にして、聖王の相を具足し、成就せる者をば除く。佛子、若し轉輪王にして此太子の衆德を具ふる者無ければ、王命終の後、此諸寶等は自然に散滅せん。佛子、此經も是の如く一切衆生の手に入らず。唯如來の法王の眞子にして、諸の如來種姓の家より生れ、如來の相の、諸の善根を種ゑたる者をば除く。若し此等の佛の眞子無ければ、斯經は則ち滅せん。何を以ての故に。一切の聲聞緣覺は此經を聞かず。何に況んや受持し書寫し解説せんこと、是處有ること無きをや。唯菩薩摩訶薩の能く自ら經卷を誦持し書寫するものをば除く。

佛子、是故に菩薩摩訶薩の此經を聞かん者は、歡喜し恭敬し頂戴し受持せん。何を以て

の故に、菩薩摩訶薩は此經を信樂し、少しく方便を作せば、必ず決定して無上菩提を得ればなり。佛子、菩薩摩訶薩は無量阿僧祇劫、六波羅蜜を行じ、道品の善根を修習すと雖も、未だ此經を聞かず、聞くと雖も信じ受持し隨順せず。是等は眞假名の菩薩と爲す、如來種姓の家より生れざるなり。

佛子、若し菩薩摩訶薩にして、此經を聞くことを得、聞き已りて信向し受持し、隨順せば、當に知るべし、此等を眞の佛子と爲す。佛家より生れ、一切如來の境界に隨順し、一切の菩薩の正法を具足し、一切種智の境界に安住し、一切世間の諸法を遠離し、如來の所行を出し、生じ長養し、一切の菩薩の諸法の彼岸に到り、如來の自在に於て心に疑惑無く、究竟して無師の地に安住し、深く一切如來の境界に入らん。

佛子、菩薩摩訶薩は此經を聞き已りて、應當に平等の意行、無量の心を發し、一切虚妄の想を遠離し、直心を究竟し、前に對して一切の如來を正念し、修習平等にして清淨なること、猶し虚空の如く、一切の菩薩の行業を分別し觀察して、法界と等しく、一切智を具足し成就し、一切世間の垢濁を遠離して、清淨の心を發し、一切の十方世界に充滿し、深く一切の菩薩の法門に入り、平等に三世の諸佛を觀察し、善根功德智慧を具足し、深く此等の一切諸法に入りて、而も所入無く、一法を念せず、二法を念せず、悉く平等に無量の諸法を觀すべし。佛子、菩薩摩訶薩は是の如き等の功德を成就し、少方便を作せば、無師智を得ん。

四若し如來を見聞して以下重頌にして八偈あり。初二偈は前來の法説を頌し、後六偈は三喻を頌説す。

爾時、普賢菩薩、重ねて此義を明さんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

若し如來を見聞して、恭敬し及び供養したてまつらば

植うる所の諸の善根は、無量にして稱るべからず

一切有爲の中に、窮盡することを得べからず

諸の煩惱を寂滅し、苦を離れて涅槃を得ん

譬へば一人有り、小金剛を呑み服せば

究竟じて消すべからず、下りて金剛際に至るが如し

是の如く十力の所にて、見聞し供養したる福は

金剛の智を具足し、煩惱滅して餘無し

譬へば乾草を積みて、彼須彌山に等しきも

火の芥子の如きを投ずれば、燒き盡して悉く餘無きが如し

是の如く善逝の所にて、若し少しの功德をも積るば

諸の煩惱を燒き盡して、正しく趣きて涅槃に到らん

譬へば雪山の中に、大薬王樹有り

見るも聞くも嗅ぐも味ふも觸るるも、一切の患を除滅するが如し

十力も亦是の如く、若し見聞する者行らば

勝功德を修習し、究竟じて菩提を成ぜん

爾時、十方不可說不可說、以下、即華嚴經、佛果感證、

爾時、十方不可說不可說の、百千億那由他の佛刹微塵に等しき世界は六種に震動し、東に涌きて西に没し、西に涌きて東に没し、南に涌きて北に没し、北に涌きて南に没し、邊に涌きて中に没し、中に涌きて邊に没し、及び十八相に動けり。謂ゆる動、遍動、等遍動、起、遍起、等遍起、覺、遍覺、等遍覺、震、遍震、等遍震、吼、遍吼、等遍吼、涌、遍涌、等遍涌なり。爾時、佛の神力の故に、法是の死くなるが故に、衆の華雲を雨らして、諸天に勝過し、寶衣の雲、蓋雲、幢雲、幡雲、香雲、塗香雲、鬘雲、莊嚴雲、衆寶雲、菩薩讚歎雲、菩薩身雲、寶雲、三菩提雲を雨らし、普く不可思議の世界をして、皆悉く清淨ならしめ、如來の妙音聲雲を雨らして、無量無邊の法界に充滿せり。此四天下に、佛の神力の故に、諸の菩薩を一切に普大いに歡喜せしめたるが如く、一切の十方も亦復是の如し。

爾時、十方各八十不可說の百千億那由他の佛刹の、微塵に等しき世界の外を過ぎて、各各八十不可說の百千億那由他の、世界の微塵に等しき如來有して、悉く其身を現じたまひ、若は近く前に對し、同じく普賢と號せり。現じ已りて成く是言を作したまはく、善い哉善い哉、佛子、乃し能く佛の神力を承け、淨法に隨順して、不可思議の如來性起の正法を解説せり。佛子、我等諸佛も亦此法を説き、十方一切の諸佛、及び諸の菩薩も、亦復是の如し。此經を説く時、百千の佛刹微塵に等しき菩薩は、菩薩の一切の明と一切の三昧とを得、一生の思を受けて、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。一佛刹の微塵に等しき衆生も菩提心を發し、我等悉く記を與へ授け、未來世に於て當に佛道を成じ、悉く

同一の號にして、佛の勝境界と號すべし。是故に我等は普く未來の諸の菩薩の爲の故に、此經を護持して、久しく世に住せしむ。此四天下の所度の衆生の如く、十方無量阿僧祇の不可思議、不可稱、不可量、不可說の法界虚空界に等しき一切世界の所度の衆生も亦復是の如し。盧舍那佛の本願力の故に、法是の如くなるが故に、善根力の故に、如來の無盡智の故に、如來時を失はざるが故に、其所應に隨ひて菩薩を化するが故に、廣く普賢菩薩の行を行するが故に、一切種智を示現するが故に、

爾時、十方各十不可說百千億那由他の、佛刹の微塵に等しき世界の外を過ぎて、各十不可說百千億那由他の佛刹の微塵に等しき菩薩有り、此土に來詣して、一切の法界に充滿し、菩薩の大妙莊嚴を示現し、大光明網を放ち、一切の世界を震動し、一切諸魔の宮殿を壞散し、一切惡道の諸難を除滅し、一切如來の功德を照明し、一切如來の正法を讚歎し、普く無量無邊の供養雲雨を雨らし、無量の種種の異身を示現し、己身は是れ無量の諸佛の法門の器なることを現せり。時に彼諸の菩薩、佛の神力を承けて、各是れを任さく、善い哉善い哉、佛子。乃し能く是如來の不可壞の法を説けり。佛子、我等は一切悉く普賢と名け、普光明世界の普勝如來の所に於て、梵行を淨修せり。彼諸佛の所にも亦是經の是の如き句、是の如き味、是の如き行、是の如き相貌を説けり。佛子、我等は佛の神力を承くるが故に、法是の如くなるが故に、彼世界より此土に來詣し、汝が爲に證を作す。一切十方の盡法界、虚空界に等しき一切の世界も亦復是の如し。

爾時、普賢菩薩、佛の神力を承けて、一切諸の菩薩衆を觀察し、重ねて如來性起の正法を明さんと欲し、如來の無量の功德を説かんと欲し、如來の正法の沮壞すべからざるを明さんと欲し、一切の菩薩の無量智慧の法明を生ぜんと欲し、一切の具足せる佛法を説かんと欲し、一切の群生類の心を觀察せんと欲し、所應に隨ひて化して時を失はざらんと欲し、一切無量無邊の菩薩の正法を分別せんと欲し、一切如來の變化自在なる莊嚴を顯現せんと欲し、一切如來は一身にして異なること無きを明さんと欲し、一切の菩薩の無量の本行を出生せんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

一切諸の如來の成就したまふ所の依儀は

世を擧げて悉く稱譽するも、能く譬喩を爲すこと無し

衆生を利益して、悉く開悟せしめんが爲の故に

喩に非ざるを以て喩と爲し、眞實の義を顯現したまへり

是の如きの微密の法は、無量劫にも聞くこと難く

精進智慧の者は、乃ち如來藏を聞かん

若し此經を聞きて、歡喜し恭敬する者有らば

此等は已に過去に、無量の佛を供養したてまつりしなり

當に知るべし此の如きの人は、諸天常に讚歎し一切諸の善趣も、撰取して常に守護したまふ

以下諸説は、偈の如く、初は偈は前分、次は偈は後分、分、最後二偈は、歡喜して受持を勤むることを顯す

【離世間品】第七  
 會善光法堂に於ける説法にして、前  
 來所説の六位因果  
 の行法に託して、廣  
 く二十の行法を成  
 じて繫縛を離れ、  
 無染清淨なる世界  
 を成ずることを明  
 す。本會説法の要  
 領は初に普賢菩薩  
 二百句の問を答へ  
 普賢菩薩之に答へ  
 きて、二十の行法を  
 解説す。即ち此行法  
 は普賢の圓融行な  
 るを以て一行善く  
 六位に通じ、一行  
 に二十の行法を攝  
 りし行位無礙無盡  
 り、而して本會の

一切諸の善逝は、世出世間に勝れたまひ  
 最勝は衆を歡喜せしめ、此經を内藏と爲したまふ  
 能く無量の、一切白淨の道を出生す  
 是故に放逸を離れ、一心に常に奉持したてまつるべし

離世間品第三十三之一

爾時、世尊、摩竭提國の寂滅道場の普光法堂に在して、蓮華藏の寶師子の座に坐し、  
 等正覺を成じたまひ、不二の念、無想の念を念じ、佛の所住に住して、一切の佛に等しく  
 無礙の趣に到り、不還の法を得、無礙の境界にして、不思議に住し、三世を遠離し、一切  
 の世界に於て普く其身を現じ、一切の法を知り、一切の妙行を具足し成就し、永く疑惑を  
 滅し、虚妄を離れたる身にて、能く一切の菩薩に無量の智慧を與へ、佛の無二の法に住し、  
 究竟じて彼岸に到り、如來の沮壞すべからざる智慧の法門を具足し、無量無邊の虚空、法  
 界に等しき如來の諸地を究竟したまふ。百千億那由他の不可説の一切の佛刹の微塵に等し  
 き菩薩摩訶薩と俱なり。悉く是れ一生にて當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。各十  
 方の世界より來集し、一切の菩薩の方便智慧を具足し成就し、善巧方便もて衆生を調伏し、  
 悉く菩薩の正法に安住せしめ、一切の世界を分別し了知し、明達せる解脱の境界を觀

二千の行法も本經  
深甚の教旨たる圓  
融無礙重重無盡の  
緣起の法界に在り  
ては大地に於ける  
一塵に過ぎざる所  
説なることを明す  
【爾時、世尊】以  
下、本會の序文に  
して三世間の圓滿  
なることを叙す

【佛世界】佛の

察し、悉く已に一切の虚妄を除き、一切の妙行を具足し成就し、善く衆生を攝して、  
深く無量の巧方便法に入り、善く一切衆生の果報を知り、善く一切衆生の心使し、諸佛の境  
界、方便を知り、三世一切諸佛の説きたまふ所の、句味及び義を善く聞き受持し、廣く  
人の爲に説き、善く無量無邊の世間に入りて世間の法を轉れ、善能く諸の有爲法は皆悉  
く無二なり、解了せり、一念の中に於て一切の佛智を得、念念の中に於て善能く等正覺を  
成ずることを示現し、一切衆生をして善根心を發して等正覺を成ぜしめ、一衆生の境界に  
入りて善く一切の衆生心の境界を知り、如來境を捨てずして善其身を現じ、不退轉の一切  
智地を得て善薩の行を捨てず、深く無行智に入り、一切衆生の爲に無量無數劫に於て  
善薩の行を修し、無量無數劫に於て善薩の實に值遇することを得難く、正法輪を轉じて  
衆生を調伏し、悉く明淨の法眼を建得せしめ、三世の一切諸佛の淨土行願を成就せ  
り、是の如き等の無量無邊の功徳を具足し、一切の諸佛未來劫を盡して悉くとも盡すべか  
らず、其名を普賢菩薩、普正法華菩薩、普化菩薩、普莊嚴菩薩、普眼菩薩、普智菩薩、普觀察菩薩、  
普照菩薩、普幢菩薩、普覺菩薩といふ。是の如き等の百萬億那由他の不可説の淨刹微塵に等  
しき菩薩摩訶薩は、皆悉く普賢の行願を具足し、諸の世界に隨ひて、自在して世に  
興りたまはば、悉く能く往説して轉法輪を請ひ、悉く能く諸佛の正法を受持して一切  
の種種を斷ぜざらしめ、悉く能く一切諸佛の次第の授記に了達し、諸の世界に隨ひ  
て等正覺を成じて淨法輪を轉じ、無量世界に於て身を現じ、佛と爲りて世に出興し、行樂



爲し、何等をか無著と爲し、何等をか平等心と爲し、何等をか出生智慧と爲し、何等をか變化と爲す。

何等をか持と爲し、何等をか大正希望と爲し、何等をか深入佛法と爲し、何等をか依止と爲し、何等をか無畏心を發すと爲し、何等をか一切の疑惑を除滅して無疑心を發すと爲し、何等をか不思議と爲し、何等をか巧方便微密の語と爲し、何等をか巧方便分別智と爲し、何等をか正受三昧と爲し、何等をか一切處と爲し、何等をか法門と爲し、何等をか道と爲し、何等をか明と爲し、何等をか解脫と爲し、何等をか園林と爲し、何等をか宮殿と爲し、何等をか樂と爲し、何等をか莊嚴と爲し、何等をか不動心を發すと爲し、何等をか深心を捨てずと爲し、何等をか智觀察と爲し、何等をか分別法と爲し、何等をか無垢と爲し、何等をか智印と爲し、何等をか智慧の光明と爲し、何等をか不可稱量の住と爲し、何等をか無懈怠の心と爲し、何等をか須彌山王正直の心と爲し、何等をか深く智慧の大海に入りて無上菩提を成ずと爲す。

何等をか寶住と爲し、何等をか金剛心を發して大衆を莊嚴すと爲し、何等をか廣大事と爲し、何等をか究竟大事と爲し、何等をか不壞信と爲し、何等をか愛記と爲し、何等をか善根廻向と爲し、何等をか智慧を得と爲し、何等をか無量無邊の廣心を發すと爲し、何等をか藏と爲し、何等をか調順と爲し、何等をか自在と爲し、何等をか衆生自在と爲し、何等をか刹自在と爲し、何等をか法自在と爲し、何等をか身自在と爲し、何等をか願自在と爲す。

爲し、何等をか境界自在と爲し、何等をか智自在と爲し、何等をか通自在と爲し、何等をか神力自在と爲し、何等をか力自在と爲し、何等をか遊戯神通と爲し、何等をか勝行と爲し、何等をか力と爲し、何等をか無畏と爲し、何等をか不共法と爲し、何等をか業と爲し、何等をか身と爲す。

何等をか身業と爲し、何等をか淨身業と爲し、何等をか口と爲し、何等をか淨口業と爲し、何等をか淨口業もて諸の守護を得と爲し、何等をか口業成辦大事と爲し、何等をか心と爲し、何等をか發心と爲し、何等をか心滿と爲し、何等をか根と爲し、何等をか直心と爲し、何等をか深心と爲し、何等をか方便と爲し、何等をか樂修と爲し、何等をか解脫深入世界と爲し、何等をか衆生性に入ると爲し、何等をか習氣と爲し、何等をか熾然と爲し、何等をか趣と爲し、何等をか法を具足すと爲し、何等をか佛法を退失すと爲し、何等をか離生と爲し、何等をか決定と爲し、何等をか佛法を出生すと爲し、何等をか善男子の名號を得と爲し、何等をか道と爲し、何等をか無量道と爲し、何等をか道具と爲し、何等をか修道と爲し、何等をか莊嚴道と爲し、何等をか足と爲し、何等をか手と爲し、何等をか腹と爲し、何等をか藏と爲し、何等をか心と爲し、何等をか莊嚴と爲し、何等をか器仗と爲し、何等をか頭と爲し、何等をか眼と爲し、何等をか耳と爲し、何等をか鼻と爲し、何等をか舌と爲し、何等をか身と爲し、何等をか意と爲し、何等をか行と爲し、何等をか住と爲し、何等をか坐と爲し、何等をか臥と爲し、何等をか住と爲し、何等をか行と

爲す

何等をか觀察と爲し、何等をか周遍觀察と爲し、何等をか奮迅と爲し、何等をか獅子吼  
 と爲し、何等をか淨施と爲し、何等をか淨戒と爲し、何等をか淨忍と爲し、何等をか淨  
 持と爲し、何等をか淨禪と爲し、何等をか淨慧と爲し、何等をか淨慈と爲し、何等をか  
 淨悲と爲し、何等をか淨喜と爲し、何等をか淨捨と爲し、何等をか義と爲し、何等をか法  
 と爲し、何等をか功德具と爲し、何等をか智具と爲し、何等をか明足と爲し、何等をか求  
 法と爲し、何等をか明了法と爲し、何等をか向法と爲し、何等をか魔と爲し、何等をか魔  
 業と爲し、何等をか魔業を捨離すと爲し、何等をか見佛と爲し、何等をか佛業と爲し、何  
 等をか慢業と爲し、何等をか智業と爲し、何等をか魔の攝持と爲し、何等をか佛の攝持と  
 爲し、何等をか法の攝持と爲し、何等をか兜率天に住する所行の事業と爲し、何等をか兜  
 率天にて命終を不現すと爲し、何等をか神を母胎に降す事を不現すと爲し、何等をか微細  
 の趣を不現すと爲し、何等をか生と爲し、何等をか大莊嚴と爲し、何等をか遊行七步と爲  
 し、何等をか童子を不現すと爲し、何等をか采女眷屬を不現すと爲し、何等をか捨家出家  
 を不現すと爲し、何等をか苦行を不現すと爲し、何等をか道場に往詣すと爲し、何等をか  
 道場に坐すと爲し、何等をか道場に坐する時奇特の相を顯はすと爲し、何等をか降魔を示  
 現すと爲し、何等をか等正覺成すと爲し、何等をか轉法輪と爲し、何等をか轉法輪に因  
 りて白淨法を得と爲す。佛子、何等をか如來應供等正覺の大嚴涅槃を示現したまふと爲

【爾時、普賢菩薩】

以下、前來の二百問に答ふ。初めに十偈行を答ふるに二百句ありて三段に分れ、初段九十句を以て自行の圓滿を盡く。  
【依果】 行の起る所依なり。

【奇特想】 勝れたる想の義。

【菩提の想】 一切衆生悉有佛性なりとの想。

【諸言道の想】 一切の言語悉く法輪たり得るの想。

【十種の行有り】

す。善い哉、佛子。向の所問の如く、願くば具に演説したまへ。

爾時、普賢菩薩、普慧等の諸菩薩に告げて言はく、佛子、菩薩摩訶薩に十種の依果有り、何等をか十と爲す。謂ゆる、菩提心の依果、究竟して妄失せざるが故に。善知識の依果、隨順して和合するが故に。善根の依果、諸の善根を長養するが故に。諸の波羅蜜の依果、究竟して修行するが故に。一切法の依果、永く生死を出づるが故に。諸願の依果、菩提を長養するが故に。諸行の依果、廣く修習するが故に。菩薩の依果、一生補處の故に。佛を供養する依果、信心不壞なるが故に。一切如來の依果、正教は顛倒を離るるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の依果と爲す。若し菩薩摩訶薩、此依果に住せば、則ち如來の無上智の依果を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の奇特想有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の善根に於て自の善根の想を生ず。一切の善根に於て菩提の種子の想を生ず。一切衆生に於て菩提の想を生ず。一切の願に於て自の願の想を生ず。一切法に於て出生死の想を生ず。一切の行に於て自の行の想を生ず。一切の法に於て佛法の想を生ず。一切の語言に於て諸言道の想を生ず。一切の佛に於て慈父の想を生ず。一切の如來に於て無二の想を生ず。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の奇特想と爲す。若し菩薩摩訶薩、此想に安住せば、則ち無上巧妙の方便を得て、一切の想を轉ぜん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の行有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生をして専ら正

以下、前の勝應の解に依りて大行を起すことを明す。

【十種の善知識有り】以下、前の行を起すは必ず善知識に依るを以て之を明す。

法を求めしむる行、善根淳熟の行、善く一切の戒を學ぶ行、一切の善根を長養する行、一心不乱に三昧を修する行、一切を分別する諸の智慧行、一切の所修を修習する行、一切の世界を莊嚴する行、善知識を恭敬し供養する行、諸の如來を恭敬し供養する行なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の行と爲す。若し菩薩摩訶薩、此行に安住せば、則ち如來の無上の大智の行を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の善知識有り。何等をか十と爲す。謂ゆる能く菩提心に安住せしむる善知識、能く善根を修習せしむる善知識、能く諸の波羅蜜を究竟せしむる善知識、能く一切法を分別し解説せしむる善知識、能く一切衆生を安住し成熟せしむる善知識、能く辯才を具足し問に隨ひて能く答へしむる善知識、能く一切の生死に苦せざらしむる善知識、能く一切劫に於て菩薩の行を行じ心に厭倦無からしむる善知識、能く普賢の行に安住せしむる善知識、能く深く一切の佛智に入らしむる善知識なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の善知識と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の勤修精進有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生を教化する勤修精進、一切の法に入る勤修精進、一切世界をして清淨ならしむる勤修精進、一切の菩薩の所學を究竟する勤修精進、一切衆生をして一切の惡を滅せしむる勤修精進、一切の地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の苦を除滅する勤修精進、一切の魔を降す勤修精進、一切衆生の爲に清淨眼と作る勤修精進、一切の諸佛を恭敬し供養する勤修精進、一切の如來を

【正希望】精進勤修して自他行を圓滿究竟せしめんとの希望を言ふ。

して皆悉く歡喜せしむる勤修精進なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の勤修精進と爲す。若し菩薩摩訶薩此精進に住せば則ち如來の無上の精進波羅蜜を具へん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の正希望有り。何等をか十と爲す。謂ゆる自ら菩提心に住し、亦衆生をして菩提心に住せしむる正希望、自ら忿怒を離れ、亦一切衆生をして忿怒を離れしむる正希望、自ら愚癡を離れて佛法に安住し、亦衆生をして愚癡を捨離して、佛法に安

住せしむる正希望、自ら善根を修して専ら正法を求め、亦衆生をして善根を修習して専ら正法を求めしむる正希望、自ら諸の波羅蜜を究竟して彼岸に到ることを得、亦衆生をし

て諸の波羅蜜を究竟し、彼岸に到ることを得しむる正希望、自ら如來種姓の家に生れ、亦衆生をして如來種姓の家に生れしむる正希望、自ら深く入りて一切法の無盡性を觀せしむる正希望、自ら一切の佛法を講誦せ

ず、亦衆生をして一切の佛法を講誦せざらしむる正希望、自ら一切智願を滿じ、亦衆生をして一切智願を滿ぜしむる正希望、自ら深く一切如來の無盡の智藏に入り、亦衆生をして

深く一切如來の無盡の智藏に入らしむる正希望なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の正希望と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如來の無上の平等大智の正希望を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩は十種の法の衆生を成就する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる布施も

て衆生を成就し、色身の端嚴もて衆生を成就し、說法もて衆生を成就し、同意もて衆生を

成就し、無染著もて衆生を成就し、菩薩の行を數じて衆生を成就し、一切世界の熾然なる

ことを示現して衆生を成就し、如来の功徳を顯して衆生を成就し、日月の自在なることを示現して衆生を成就し、種種の巧方便もて、微妙に世間の行に隨順して衆生を成就するなり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の成就衆生と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち悉く一切の衆生を成就せん。

# 大方廣佛華嚴經

卷第二十七

東晋天竺三藏佛驮跋陀羅譯

## 離世間品第三十三之二

【十種の戒有云云】十戒を擧ぐべきなれど八戒のみにして二戒を缺けり。本經の註釋たる探玄記には十戒あり亦新譯にも十戒ありて本經の缺は傳寫の脱落なるべし

【十種の自ら受記云云】戒行勤修し依りて斷染脱惑し徳果を成じ來るが故に自ら自行を思惟して當に佛果を得べきこと必定なりと自ら受記を知るなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の戒有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩提心を壞せざる戒、聲聞緣覺地を離る戒、一切衆生を饒益し觀察する戒、一切衆生をして佛法に住せしむる戒、一切の菩薩戒を學ぶ戒、一切所有無き戒、一切の善根を菩提に廻向する戒、一切の如來身に著せざる戒なり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の自ら受記を知る法有りて、彼菩薩をして自ら受記を知らしむ。何等をか十と爲す。謂ゆる一向に菩提心を發す菩薩の受記、菩薩の行を壞はざる菩薩の受記、一切劫に於て諸の苦行を修する菩薩の受記、一切の佛法に隨順する菩薩の受記、一切の如來の所説に於て決定して信向する菩薩の受記、一切の善根を具足し修習する菩薩の受記、一切衆生をして菩提に安住せしむる菩薩の受記、一切の善知識に於て和合し隨順する菩薩の受記、一切の善知識に於て如來の想を生ずる菩薩の受記、菩提の本願を守護する菩薩の受記なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の自ら受記を知る法、彼菩薩をして自ら受

【佛子、菩薩摩訶  
薩】以下八十句  
は勝進行を明す。  
【人】證又は得の  
義なり。

【深入如來】如來  
身ち佛果位の境に  
入る義なり。

【衆生心行に入る】  
衆生の佛果の境界に  
入るに對し、下位  
衆生の心に入る

記を知らしむと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の入有り、何等をか十と爲す。謂ゆる願に入り、行に入り、聚に入り、波羅蜜に入り、具足に入り、分別願に入り、性に入り、莊嚴刹に入り、神力自在に入り、示現出生に入るなり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の入にして、亦三世一切の菩薩の所入に入ると爲す。

佛子、菩薩摩訶薩の十種の深入如來有り。何等をか十と爲す。謂ゆる深く無量無邊の諸佛の菩提に入り、深く無量無邊の轉淨法輪に入り、深く無量無邊の諸の方便法に入り、深く無量無邊の微妙の音聲に入り、深く無量無邊の調伏衆生に入り、深く無量無邊の神力自在に入り、深く無量無邊の種種異身に入り、深く無量無邊の三昧に入り、深く無量無邊の無所長に入り、深く無量無邊の示現涅槃に入る。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の深入如來と爲す。此十種の深入法には三世の諸佛も悉く亦共に入りたまふ。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の衆生心行に入る有り。何等をか十と爲す。謂ゆる過去の一切衆生の心行に入り、未來の一切衆生の心行に入り、現在の一切衆生の心行に入り、一切衆生の諸の善根行に入り、一切衆生の行善根の行に入り、一切衆生の心力の所行に入り、一切衆生の諸根の行に入り、一切衆生の種性の行に入り、一切衆生の煩惱、使、靜氣の行に入り、一切衆生の時、非時の調伏行に入る。佛子、是を十種の入衆生の心行と爲す。是十種の入衆生の心行に因れば、則ち能く普く一切衆生の心行に入るなり。

【十種の世界に入る】前の正量に同じし、此段依報の四上を意するなり。

【十種の劫に入る】前來の入處即ち空間的證得に對し、此段時間的證得を明す。

【十種の三世】以下、三世得入を明す。

【十種の三世間】以下、菩薩修行勝進して時劫無礙に達したるを以て三世中の法に得入することを明す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の世界に入る有り。何等をか十と爲す。謂ゆる不淨の世界に入り、清淨の世界に入り、小世界に入り、中世界に入り、微塵世界に入り、微細世界に入り、伏せる世界に入り、仰げる世界に入り、有佛の世界に入り、無佛の世界に入る。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の入世界と爲す。此十種の入世界に因れば、則ち能く普く一切の世界に入るなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の劫に入る有り。何等をか十と爲す。謂ゆる過去の劫に入り、未來の劫に入り、現在の劫に入り、可數の劫に入り、不可數の劫に入り、可數不可數の劫に入り、不可數可數の劫に入り、一切劫非劫に入り、非劫一切劫に入り、一切劫即ち是れ一念なるに入る。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の入劫と爲す。此十種の入劫に因れば、即ち能く普く一切の諸劫に入るなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の三世を説く有り。何等をか十と爲す。謂ゆる過去世に過去世を説き、過去世に未來世を説き、過去世に現在世を説き、未來世に過去世を説き、現在世に平等を説き、未來世に無盡を説き、現在世に未來世を説き、現在世に平等を説き、現在世に三世即ち一念なるを説く。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の説三世と爲す。此十種の説三世に因れば、則ち能く普く一切の三世を説くなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の三世間に入る有り。何等をか十と爲す。謂ゆる世間に入り、語言道に入り、性に入り、施設に入り、想に入り、名字に入り、語言に入り、無盡に入り、亂

欲に入り、寂滅に入る。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の入三世間と爲す。此十種の入三世間に因れば、則ち能く普く一切の三世間に入るなり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の愛憍を捨離して心に厭悔無き有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の佛を供養して、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一切の善知識に親近して、愛憍を捨離し心に厭悔無し。専ら一切の法を求めて愛憍を捨離し心に厭悔無し。常に正法を聞きて、愛憍を捨離し心に厭悔無し。常に正法を説きて、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一切衆生を教化し調伏して、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一切衆生をして佛道に安住せしめて、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一一の世界の中に於て不可説不可説の菩薩行を行じて、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一切の世界に遊行して衆生を教化し、愛憍を捨離し心に厭悔無し。一切の佛法を出して、愛憍を捨離し心に厭悔無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の愛憍を捨離し心に厭悔無しと爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如来の無上智を得て永く厭悔を離れん。

【十種の愛憍】以下、修行の心果として得たる法を明す。  
【佛子、菩薩摩訶薩】以下、三句は自分勝進の二行究竟を明す。  
【言不可壞】法性不易の智なり。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の壞すべからざる智有り。何等をか十と爲す。謂ゆる衆生を知る智不可壞、諸衆を知る智不可壞、受生を知る智不可壞、世界を知る智不可壞、法界を知る智不可壞、佛を知る智不可壞、法を知る智不可壞、僧を知る智不可壞、世を知る智不可壞、一切の語言道を知る智不可壞なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の不可壞智と爲す。若し菩薩摩訶薩此智に安住せば、則ち如来の無上の不可壞智を得ん。

【十種の陀羅尼】以下、法を持して失はざることを明す。陀羅尼とは總持と譯し、善法を持する義なり（前註）

【正覺佛】自然に覺悟せし佛。以下行境の十佛なり。【願佛】無礙の大願を成就せし佛。【業報佛】修行の因に感得せむる佛。【住持佛】萬徳を聚集し住持する佛。【化佛】機（衆生）に應じて化身を現する佛。

佛子、菩薩摩訶薩は十種の陀羅尼有り。何等をか十と爲す。謂ゆる聞持陀羅尼、一切の法を忘れざるが故に。正法を持する陀羅尼、巧方便もて一切法の如實を分別するが故に。一切法を生ぜざる陀羅尼、一切法の無自性なるを覺るが故に。法明陀羅尼、普く不可思議の諸佛の法を照すが故に。三昧陀羅尼、現在の一切の佛の所に於て法を聞いて亂れざるが故に。首楞嚴滿の陀羅尼、究竟して不可思議の語言の法を解了するが故に。三世陀羅尼、分別して一切の三世佛の不思議の法を説くが故に。種種の辯才陀羅尼、無量無邊の諸佛の法を分別し解説するが故に。無礙の耳を出生する陀羅尼、不可説の佛の説きたまふ所の諸法を、悉く能く聞くが故に。一切の佛法を持する陀羅尼、如來の十力無畏に安住するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の陀羅尼と爲す。若し菩薩摩訶薩此法を得んと欲せば、應に勤めて修學すべし。

佛子、菩薩摩訶薩は分別して十種の佛を説くことを知る。何等をか十と爲す。謂ゆる正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、化佛、法界佛、心佛、三昧佛、性佛、如意佛なり。佛子、是を菩薩摩訶薩、分別して十種の佛を説くを知ると爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の普賢の心を發す有り。何等をか十と爲す。謂ゆる大慈心を發す、一切衆生を救護するが故に。大悲心を發す、一切衆生に代りて一切の苦毒を受くるが故に。一切の施を首と爲すの心を發す、悉く一切諸の有する所を捨つるが故に。一切智を正念するを首と爲す心を發す、一切の佛法を樂ひ求むるが故に。功德莊嚴の心を發

【法界佛】 宇宙法

界の理性たる佛

【心佛】 唯心の所

現なる佛

【三昧佛】 定中に

在る佛

【性佛】 眞性不變

の佛

【如意佛】 無功の

大明意の如き佛

以上の十佛は一行用及

び性徳の觀察より

見たる十名にして

本是れ一體なり

【十種の普賢の心】

以下、第二段に十

住の二十問の答

なり。二百句あり

て四段に分れ、初

六十句は十解中の

初發心住の義を別

釋せり。

【十種の大悲】 以

下、大悲行を明す。

大悲は普賢の行願

大特に深要なる大

行にして而も菩薩

の本分たる行なり

す、一切の菩薩の所行を學ぶが故に。金剛の心を發す、一切の受生に忘失せざるが故に。

大海の心を發す、一切の白淨法悉く流入するが故に。須彌山王の心を發す、一切の誹

謗苦言を悉く堪忍するが故に。安隱の心を發す、一切衆生に無畏を施すが故に。般若波

羅蜜を究竟して彼岸に到るの心を發す、巧に一切法の所有無きことを分別するが故に。佛

子、是を菩薩摩訶薩の十種の普賢の心を發すと爲す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、少

方便を以て、則ち能く普賢の巧方便の智を具足せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の普賢の願行法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる未來劫を盡

して菩薩の行を行ずる普賢の願行法、未來の一切の佛を恭敬し供養する普賢の願行法、

一切の衆生を普賢菩薩の願行に立つる普賢の願行法、一切の善根を積集する普賢の願

行法、一切の波羅蜜に入る普賢の願行法、一切の菩薩の願行を満足する普賢の願行

法、一切の世界を莊嚴する普賢の願行法、一切の佛の所に往生する普賢の願行法、善

巧の方便もて一切の法を求むる普賢の願行法、一切十方の佛刹に於て無上善根を成する

普賢の願行法なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の普賢の願行法と爲す。若し菩薩摩

訶薩此願行を修せば、疾かに普賢の願行を具足するを得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の大悲有りて常に衆生を觀す。何等をか十と爲す。謂ゆる衆

生の歸依する所無きを觀察して大悲を起し。衆生の邪道に墮逐するを觀察して大悲を起し。

衆生貧しくして善根無きを觀察して大悲を起し。衆生の長く生死に寢るを觀察して大悲を

【十種の發菩提心】  
以下、菩提心を明  
す。是れ菩提心は  
前の大悲行の所依  
たればなり。

【善知識を恭敬】  
以下、發心以後善  
知識に其教導を仰  
ぐことを明す。  
【一向の心】唯一  
向に出道を期する

起し。衆生の不善の法を行ずるを觀察して大悲を起し。衆生の欲縛に縛せらるるを觀察して大悲を起し。衆生の生死の海に在るを觀察して大悲を起し。衆生の久遠に長く病めるを觀察して大悲を起し。衆生の善法を欲する無きを觀察して大悲を起し。衆生の諸佛の法を失ふを觀察して大悲を起す。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の大悲もて常に衆生を觀すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の發菩提心の因縁有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生を教化し成就するは發菩提心の因縁なり。一切衆生の苦を除滅するは發菩提心の因縁なり。一切衆生に種種の快樂を與ふるは發菩提心の因縁なり。一切衆生の愚闇を除滅するは發菩提心の因縁なり。一切衆生に佛智を與ふるは發菩提心の因縁なり。一切諸佛を恭敬し供養するは發菩提心の因縁なり。如來の教に隨ひて佛を歡喜せしむるは發菩提心の因縁なり。佛の色身の相好を見るは發菩提心の因縁なり。一切の佛智に入るは發菩提心の因縁なり。佛の力無畏を顯現するは發菩提心の因縁なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の發菩提心の因縁と爲す。若し菩薩摩訶薩、菩提心を發さば、應當に善知識を恭敬し供養し親近すべし。何を以ての故に。速かに一切智を覺らんと欲するが故に。

彼菩薩摩訶薩は、善知識を恭敬し供養し親近して十種の心を起す。何等をか十と爲す。謂ゆる善知識に於て給侍の心、不違の心、隨順の心、歡喜の心、利を求めざるの心、一向の心、善根を同じうせんとの心、願を同じうせんとの心、如來の心、滿行を同じうせんとの心、

【是の如き十種】以下、前の發心に依りて得し淨報を明す。

の心を起す。佛子、是を菩薩摩訶薩普知處に於て十種の心を起すと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩、是の如き十種の心を發さば、則ち十種の清淨を得ん。何等をか十と爲す。謂ゆる正直心清淨なり、究竟して失はざるが故に。色身清淨なり、塵化する所に隨つて見さざる無きが故に。普賢圓滿にして清淨なり、一切の語言の法を究竟するが故に。辯才清淨なり、巧方便もて不可思議の諸佛の法を説くが故に。智慧清淨なり、一切愚癡の闇を除滅するが故に。受生清淨なり、菩薩の自在力を具足するが故に。眷屬清淨なり、過去同行の衆生の諸の障礙を成斃するが故に。果報清淨なり、一切の業障を除滅するが故に。諸願清淨なり、一切の菩薩に同するが故に。諸行清淨なり、普賢菩薩の行を究竟するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の清淨と爲す。

【十種の波羅蜜】以下、六十句は第二住より第九住に至る中に成ずる内總の行を明す。第一に十度の行を説く。

【十種の隨順覺知】以下、隨順覺知の行を明す。十度、行を感ずる結果、所知の境に無例を了達するを隨順覺知と言ふ。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の波羅蜜有り。何等をか十と爲す。謂ゆる檀波羅蜜、一切の有を捨つるが故に。尸波羅蜜、佛性を淨むるが故に。羼提波羅蜜、佛の忍を具足するが故に。精進波羅蜜、一切の時に於て退轉せざるが故に。禪波羅蜜、正念にして亂れざるが故に。般若波羅蜜、一切の法を悉く知知なりと觀するが故に。智波羅蜜、深く神力に入るが故に。願波羅蜜、普賢菩薩の願行滿するが故に。神力波羅蜜、一切の神通力を示現するが故に。法波羅蜜、一切の法を攝取するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の波羅蜜と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如來の無上の究竟の智波羅蜜を得ん。佛子、菩薩摩訶薩に十種の隨順覺知有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切の世界を隨順

【十種の決定智】  
以下、前の隨順覺知に依りて決定無疑の智を成ずることを明す。

【十種の力】  
以下、智既に決定するが故に力用を起すことを明す。

覺知し、一切衆生の不可思議なるを隨順覺知し、一切諸法の不一不異なるを隨順覺知し、一切の法界を隨順覺知し、一切の虚空界を隨順覺知し、一切の世界、過去世に入るを隨順覺知し、一切の世界、未來世に入るを隨順覺知し、一切の世界、現在世に入るを隨順覺知し、一切の如來は、一念の中に於て願行を具足するを隨順覺知し、三世の諸佛は悉く同一行なるを隨順覺知す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の隨順覺知と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、明了一切法の自在普照を得、意に隨ひて隨を滿し、一念の中に於て無上道を覺し、一切の佛法悉く現じて前に在らん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の決定智有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の諸法を一念の中に於て決定了知し、一切の諸法を決定了知するに無礙智を以てし、一切衆生の心心の所行を決定了知し、一切衆生皆悉く同根なることを決定了知し、一切衆生の煩惱習氣の諸行を決定了知し、一切衆生の諸の心使の行を決定了知し、一切衆生の善不善の行を決定了知し、一切の菩薩の願行を決定了知し、神力自在にして變化住持することを決定了知し、一切如來の成就せる十力を決定了知す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の決定智と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸法の巧妙方便を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の力有り。何等をか十と爲す。謂ゆる深く一切の法に入る力、一切の法は猶し化の如しと解る力、一切の法は猶し幻の如しと解る力、一切法をして佛法に入らしむる力、一切の法に於て染著すること無き力、専ら一切の善妙の法を求むる力、一

【十種の平等】以下、諸事に於て平等の眞體を作すとを明す。

【衆生平等】怨親平等即ち眞俗一味の義なり。

【法平等】染淨平等即ち染淨の二相差別を壞する義。

【行平等】諸行は眞如に契稱するを以てなり。

【十種の方便佛法】以下、巧便説教を起すことを明す。

【十種の説法】以下、三十句は外化攝生の行を説く。

向に一切の善知識を恭敬し供養する力、一切の善根悉く究竟して無上智を得しむる力深心一切の佛法を信解して講誦せざる力、究竟して一切の智心を退かざる力なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の力と爲す。若し菩薩摩訶薩此方に安住せば、則ち能く如來の無上の十力を具足せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の平等有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の衆生平等なり。一切の法平等なり。一切の佛刹平等なり。一切の佛衆平等なり。一切の善根平等なり。一切の菩提平等なり。一切の願平等なり。一切の波羅蜜平等なり。一切の行平等なり。一切の佛平等なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の平等と爲す。若し菩薩摩訶薩此平等に住せば、則ち一切諸佛の無上の平等を具足せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の方便佛法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の法を説く言説の方便佛法句、一切の法は幻の如く、一切の法は電の如く、一切の法は縁より起る。一切の法は淨業なり。一切の法は文字なり。一切の法は實際なり。一切の法は無相なり。一切の法は眞實義なり。一切の法は法界なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の方便佛法句と爲す。若し菩薩摩訶薩此方に安住せば、則ち無上の方便一切智を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の説法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる甚深の法を説き、勝妙の法を説き、種種の莊嚴の法を説き、一切智の法を説き、隨順波羅蜜の法を説き、如來力を出生する法を説き、分別して三世の法を説き、不退の菩薩の法を説き、一切の佛の

【十種の受持】以下、心に明記し受持することを明す

【十種の勝法】以下、四十句は無礙殊勝の行を明す

功德を讚歎する法を説き、一切の菩薩の一切の佛の平等を行ずる一切如来の境界の法を説く。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の説法と爲す。若し菩薩摩訶薩此説法に任せば、則ち如来の無上の説法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の受持有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の善根の功德を受持し、一切の佛の所説の法を受持し、一切の譬喩を受持し、一切の方便の法門を受持し、一切の出生陀羅尼門を受持し、一切の疑惑を除く法を受持し、一切の菩薩の具足の法を受持し、一切如来の所説の平等の三昧の法門を受持し、一切の普照の法門を受持し、一切諸佛の自在神力を受持す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の受持と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如来の無上の智慧の持法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の辯有り。何等をか十と爲す。謂ゆる虚妄に一切の法を取らざる辯、一切の法に於て所行無き辯、一切の法に於て所著無き辯、一切の法に於て悉く空無なる辯、一切の法に於て闇障無き辯、一切の法に於て佛の持したまふ所の辯、一切の法に於て他に由りて悟らざる辯、一切の法に於て巧方便もて句味身を説く辯、一切の法に於て衆生を説く辯、一切衆生に於て等心に觀察して、歡喜せしむる辯なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の辯と爲す。若し菩薩摩訶薩此辯に安住せば、則ち如来の無上の巧方便の辯を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の勝法有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の衆生を成熟す



【十種の智慧】以下、前の平等心によりて得たる勝智を明す。

【十種の變化】以下、後得智に依り自在の妙用を起す即ち變化を明す。【衆生の變化】他の衆生身に變ずる義。

【身の變化】異類の身に變ずる義。【佛刹の變化】佛刹を變じて染刹と爲すが如きを言ふ。【十種の持】以下第三に十行位を行法を二百句を以て答ふ。二段に六行、初六十句は大志願遠の行を明す。持とは加持又は依持の義なり。

す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、則ち如來の無上の平等心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智慧を出生する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生の性に入りて智慧を出生し、一切の佛刹の無一無異なるに入りて智慧を出生し、十方の一切世界網を分別するに入りて智慧を出生し、一切の俯仰、翻覆の世界等に入りて智慧を出生し、巧方便もて一切諸法の無一無異なるに入りて智慧を出生し、一切種種の異身に入りて智慧を出生し、一切世間の顛倒感網悉く所著無きに入りて智慧を出生し、一切法の究竟一乘に入りて智慧を出生し、一切法界の自在神力に入りて智慧を出生し、三世の一切衆生は、諸佛の種姓を常に斷絶せざるに入りて智慧を出生す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智慧を出生すと爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち無盡の法藏を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の變化有り、何等をか十と爲す。謂ゆる衆生の變化、身の變化、佛刹の變化、供養の變化、音聲の變化、行願の變化、衆生を伏し成熟する變化、菩提の變化、眞法の變化、住持の變化なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の變化と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切の無上の化法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の持有り。何等をか十と爲す。謂ゆる佛持、法持、衆生持、業持、願持、行持、境界持、妙持、善持、智持なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の持と爲す。若し菩薩摩訶薩此持に安住せば、則ち一切の法に於て自在の持を得ん。

【大正希望】廣大無邊の欲樂を言ふ

佛子、菩薩摩訶薩に十種の大正希望有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「未來世を盡して一切諸佛、世に出興したまはば、我當に隨順し奉行して悉く歡喜せしむべし」との大正希望を得。復一切如來應供等正覺をば、我當に無上の恭敬供養を以て、之を供養したてまつるべし」との大正希望を得。彼諸佛を恭敬し供養し已らば、必ず當に具足して我に正法を誨へたまふべし。正法を聞き已りて、三世の菩薩の一切諸地に生ずる所の功徳を、我に悉く得しめん」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に不可説不可説の劫に於て、菩薩の行を修し、常に佛及菩薩の菩薩を尊れざるべし」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に正しく菩提に向ひ、一切の畏を離るべし。謂ゆる不活の畏、惡名の畏、死の畏、惡道の畏、大衆の畏なり、是の如き等の畏をば我當に遠離し、休息し、除滅し、一切の衆魔外道の我を壞ること能はざるべし」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「一切衆生をして無上の菩提を究竟成就して菩提に安住せしめ、菩提を成じ已りて、我當に彼佛の所に於て具形壽を盡して菩薩の行を修し、彼諸の如來を恭敬し供養したてまつるべし、彼諸の如來の滅度の後は、我當に悉く舍利を取りて無量の塔を起し、之を供養して、彼諸の法を受持し守護すべし」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「十方一切の世界をして、悉く無上の莊嚴を以て之を莊嚴し、平等清淨に住持し、神力自在を出生して、六種に震動せしめん」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の

如きの心を發すらく、「一切衆生をして悉く疑惑を除き、清淨の直心もて、煩惱を除滅し、永く惡道を閉ぢ、善趣の門を開き、慧光を成就して、癡闇を照除し、衆魔を降伏して安穩の處に置かしめん」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「無量無數劫にも如來に值ひたてまつること難く、正法は聞くこと難し。譬へば優曇鉢華のごとし、我佛を見たてまつりて、正法を聽受せんと欲せば、應に念じ見聞すべし、彼佛の所に於て直心清淨にして、衆の諸曲を離れ、玄偽の法を捨てて、常に諸佛を見たてまつり、一心に恭敬せん」との大正希望を得。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に大法鼓を撃ち、甘露の法を雨らして、大法施を作し、清淨無畏大師子吼し、大願を滿足し、法界に安住し、無量無數劫に於て、常に衆生の爲に正法を講説して、大悲の身日意の業に安住し、未だ曾て疲厭せざるべし」との大正希望を得。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の大正希望と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち無上の智慧の大正希望を得ん。

【十種の深く佛法に入る】以下、深く佛法に入りて邊際を盡すことを明す

佛子、菩薩摩訶薩に十種の深く佛法に入る有り。何等をか一と爲す。謂ゆる一切の世界は過去世に入る、是を第一の深入佛法と爲す。一切の世界は未來世に入る、是を第二の深入佛法と爲す。一切の世界は現在世に入り、行ゆる世界の數、世界の行、世界の説、世界の清淨、世界の智は悉く現在世に入る、是を第三の深入佛法と爲す。一切の世界は悉く分別して一切の世界に入る、是を第四の深入佛法と爲す。悉く分別して一切衆生の業報に入る、是を第五の深入佛法と爲す。悉く分別して一切菩薩の行に入る、是を第六の深入

佛法と爲す。悉く次第して過去の一切如来を知る、是を第七の深入佛法と爲す。悉く次第して、未來の一切諸佛世に出興したまふを知る、是を第八の深入佛法と爲す。悉く現在の十方世界の一切佛刹の佛及び眷屬は、說法して法界虚空界に等しき衆生を教化するを知る、是を第九の深入佛法と爲す。世間の法を知り、善問、緣覺、菩薩の法を知り、如来の法を知り、彼諸法の無一無異なるに於て而も一異を覺き、彼諸法に於て悉く法界に入りて所入無きが故に、法相の如く説きて染著する所無し。是を第十の深入佛法と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の深入佛法と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち能く深く阿耨多羅三藐三菩提の甚深の智慧に入らん。

【十種の依止】以下、所託の外縁を明す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の依止有り、菩薩は此に依りて菩薩の行を行す。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の諸佛を供養するに依りて、菩薩の行を行す。一切衆生を調伏するに依りて菩薩の行を行す。善知識に依りて菩薩の行を行す。一切の善便に依りて菩薩の行を行す。清淨の佛刹に依りて菩薩の行を行す。一切衆生を捨てざるに依りて菩薩の行を行す。深く一切の良羅蜜に入ることに依りて菩薩の行を行す。一切の菩薩の満足する諸國に依りて菩薩の行を行す。無量の菩提心に依りて菩薩の行を行す。一切諸佛の菩提に依りて菩薩の行を行す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の依止と爲す。菩薩は是に依りて菩薩の行を行す。

【十種の無畏心】以下、無所畏を得て業事を成ずることを明す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の無畏心を發す有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の業障を

【十種の一切】以下、所行無疑なることを明す。

滅して無畏心を發し、佛滅度の後正法を受持し守護して無畏心を發し、一切の魔を降して無畏心を發し、身命を惜まずして無畏心を發し、法の如く一切の外道を調伏して無畏心を發し、一切衆生を皆悉く歡喜せしめて無畏心を發し、一切の大衆を皆悉く歡喜せしめて無畏心を發し、一切の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽を調伏して、無畏心を發し、聲聞緣覺の地を遠離し甚深の法に入りて無畏心を發し、不可説不可説の劫に於て菩薩の行を修して心に疲厭無くして無畏心を發す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無畏心を發すと爲す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、則ち如來の大智、無所畏の心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發す有り、何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「布施もて一切衆生を攝取し、戒、忍、精進、定、慧、慈、悲、喜、捨もて一切衆生を攝取せん」と。疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第一の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「未來の一切諸佛世に出興したまはば、我當に奉持し恭敬し供養したてまつるべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第二の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「一切の世界を種種に莊嚴し、大光明網を敷ちて、皆悉く普く照さしめん」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第三の一

一切の疑惑を除滅して、無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、我當に未來際劫を盡して、菩薩の行を修し、無量無數にして思議すべからず、稱量すべからず、分齊すべからず、不可說不可說にして、一切の算數の及ぶ能はざる所の法界虚空界に等しき衆生をば、悉く無上の教化を以て、彼諸の衆生を調伏し成熟して心に跋扈無かるべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第四の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に十劫を圓滿し、菩薩の行を行じ、一切智を出生し、一切智に安住すべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第五の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に一切世界の爲に菩薩の行を行じ、大燈明と作りて普く佛法を顯すべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第六の一切疑惑を除滅して、無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に一切の法は悉く是れ佛法なりと説くべし、其所處に隨ひて一切を化するが故に」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第七の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に無礙の法門を得て、一切の障礙を除滅し、究竟して無上正覺を達得すべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば、是處有ること無し。是を第八の一切の疑惑を除滅して無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の

【佛子、菩薩摩訶  
薩】以下、九十句  
は定慧の業用行を  
明す中、初三十句  
は融慧超情の行、  
次二十句は深定普  
遍の行、後四十句  
は業用自在の行を  
明す。第一段に所  
修の行の不可思議  
深甚なることを明  
す。

如きの心を發すらく、「我當に一切世間の法は、即ち是れ出世間の法なりと知りて、一切の顛倒を斷ち、一莊嚴を以て自ら莊嚴して、莊嚴する所無く、他に由りて悟らざるべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば是處有ること無し。是を第九の一切の疑惑を除滅して、無疑の心を發すと爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの心を發すらく、「我當に等正覺を成じて一切智を得、永く一切の顛倒疑惑を滅して、一念の智、無二の智、無所有の智、無礙の智、無爲の智、無著の智、不可説の實際境界の智を成すべし」と。彼に於て疑惑を生ぜず。若し疑惑を生ぜば是處有ること無し。是を第十の一切の疑惑を除滅して、無疑の心を發すと爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の一切の疑惑を除滅して、無疑の心を發すと爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切の佛法に於て無疑の心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の不可思議有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の善根は思議すべからず、是を第一の不可思議と爲す。一切の願は思議すべからず、是を第二の不可思議と爲す。一切の法は幻の如しと解るは思議すべからず、是を第三の不可思議と爲す。菩提心を發して、菩薩の行を修し、善根依住する所無くして而も亦失はず、染著する所無し、是を第四の不可思議と爲す。深く一切の法を解り亦滅度せず、一切の諸願未だ成滿さざるが故に、是を第五の不可思議と爲す。菩薩の行を行じて、受胎し出生し、出家し苦行して、道場に往詣し、衆魔を降伏し、最正覺を成じ、正法輪を轉じ、一切の法に於て自在を得るを示現し、大般涅槃を示現し、而も亦大願大慈もて衆生を救護するを捨てず、是を第

【十種の巧方便微密】以下、内行の微密なることを明

六の不可思議と爲す。如來の十力の自在なるを示現して、而も亦法界に等しき心を捨てず、一切衆生を教化し成熟す、是を第七の不可思議と爲す。一切の法は無相にして有相、有相にして無相、非劫は是れ劫、劫は是れ非劫、非有は是れ有、有は是れ非有、非行は是れ行、行は是れ非行、非説は是れ説、説は是れ非説なりと解る、是を第八の不可思議と爲す。發菩提心と菩提と等しきことを解り、菩提と發菩提心と等しきことを解り、初發の菩提心、及び菩提と一切の衆生と等しきことを解り、亦心の顛倒、想の顛倒、見の顛倒を生ずす、是を第九の不可思議と爲す。念念の中に於て滅盡、味正受に入りて、一切の漏を滅して實際を證らす、又亦有漏の善根を書きすして、一切法の無漏を知り、亦漏の滅盡を知り、一切の佛法は是れ世間の法なりと知るも、佛法の中に於て、世間の相を取らず、世間の法の中に於て佛法の相を取らず、一切の諸法は悉く法界に入る、所入無きが故に、一切の法は悉く無二なりと解る、變易せざるが故に、佛子、是を菩薩摩訶薩の第十の不可思議と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如來の不可思議の法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の巧方便微密の語有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切の經典に於ける巧方便微密の語なり。一切の受生の處に於ける巧方便微密の語なり。一切の菩薩の神力自在なることを覺る巧方便微密の語なり。一切衆生の災報に於ける巧方便微密の語なり。一切衆生の垢淨處に於ける巧方便微密の語なり。一切法の究竟無礙門に於ける巧方便微密の語なり。一切處空界の一一の方面に於て世界の成壞は、處として現せざること無

き、巧方便微密の語なり。一切法界の一切の諸方、乃至微細の處に於て、等正覺を成ずる如來は一切の法界に充滿するを現じ、乃至大般涅槃を示現するを、悉く分別して見る、巧方便微密の語なり。一切衆生は、悉く涅槃に同じと解る、變易無きが故に、而も大願を捨てず、乃至一切の智願を究竟に満足する巧方便微密の語なり。一切の法を解るに他に由りて悟らず、而も亦諸の善知識を離れず、如來を恭敬し、善知識に隨順して、諸の善根を修し、善根を廻向し、善根に安住し、善根を相續し、同一の善根、一道の善根、一成就の善根の巧方便微密の語なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の巧方便微密語と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如來の無上の巧方便微密語を得ん。』

# 大方廣佛華嚴經

卷第三十八

東晉天竺三藏佛跋闍維羅譯

## 華嚴經世間品第三十八之三

【十種の巧方便の】  
以下、智應通達し  
て明了なることを  
明す。

【十種の正受三昧】  
以下、二十句は深  
定普明行を明す。

一、佛子、菩薩摩訶薩に十種の巧方便の分別智有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切佛刹に入  
 る巧方便分別智、一切衆生の處に入る巧方便分別智、一切衆生の心の斷行に入る巧方  
 便分別智、一切衆生の根に入る巧方便分別智、一切衆生の明の行業の報に入る巧方便分  
 別智、一切の聲聞の行に入る巧方便分別智、一切の緣覺の行に入る巧方便分別智、一切の  
 菩薩の行に入る巧方便分別智、一切の世間の法に入る巧方便分別智、一切の佛法に入る巧  
 方便分別智なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の巧方便分別智と爲す。若し菩薩摩訶薩此  
 法に安住せば、即ち一切諸佛の無上の巧方便分別智を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の正受三昧有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切世界の正受三  
 昧、一切衆生身の正受三昧、一切法の正受三昧、一切の諸佛を見たてまつる正受三昧、摩  
 訶に一切劫を住持する正受三昧、巧方便もて不可思議の身を出生する正受三昧、一切の  
 如來身の正受三昧、巧に隨順して一切衆生の平等を覺る正受三昧、一念の中に於て一切の

【十種の一切處】  
以下、定用一切處  
に通きことを叙す

【十種の法門】  
以下、三十句は業用  
の自在を説く

【十種の神通】  
以下、業用無限なる  
こと神通の如きこ  
とを明す

菩薩の三昧を正受し、一念の中に於て無礙智を以て、一切の菩薩の行を具足し成就して、大願を捨てざる善巧智慧の正受三昧なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の正受三昧と爲す。若し菩薩摩訶薩此三昧に安住せば、即ち一切佛の無上の巧方便智の正受三昧を得ん。佛子、菩薩摩訶薩に十種の一切處有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切衆生の處、一切佛刹の處、一切衆生性の處、一切火災の處、一切水災の處、一切佛の處、一切出生莊嚴の處、一切如來の無量の功德の處、一切分別説法の處、一切如來の種種供養の處なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の一切處と爲す。若し菩薩摩訶薩此處に安住せば、則ち如來の無上の一切の大智の處を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の法門有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一身にて一切の世界に充滿する法門、一切世界の種種無量の色を示現する法門、一切の世界は一佛刹に入る法門、一切の衆生を住持する法門、如來の莊嚴身は一切の世界に充滿する法門、遍く一切の世界に至る法門、一念の中に於て一切の世界に遊行する法門、一佛刹に於て一切如來の出世を示現する法門、一身一切の法界に充滿する法門、一念の中に於て一切諸佛の神力を示現する法門なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の法門と爲す。若し菩薩摩訶薩此法門に住せば、則ち如來の無上の法門を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の神通有り。何等をか十と爲す。謂ゆる宿命を念ずる方便智通を出生し、無礙の天耳の方便智通を出生し、一切衆生の不可思議の心心の數法を知

る方便智通を出生し、無礙の天眼もて、衆生を觀察する方便智通を出生し、不可思議の自在の神力もて、衆生に示現する方便智通を出生し、一身もて不可思議の世界に示現する方便智通を出生し、一念の中に於て、不可説の世界に往詣する方便智通を出生し、不可思議の莊嚴具もて、一切の世界を莊嚴する方便智通を出生し、不可説不可説の化身もて、衆生に示現する方便智通を出生し、不可説の世界に阿耨多羅三藐三菩提を成じて、不可思議に衆生に示現する方便智通を出生す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の神通と爲す。若し菩薩摩訶薩此通に安住せば、明ら無上の大方便の智通を得、諸佛の自在神力を顯現す。

【十種の明】以下  
智用節を明智を説く。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の明有り。何等をか十と爲す。評ゆる一切衆生の業散を知る方便智明を出生し、一切衆生の境界、解脫、寂滅の淨心を知る方便智明を出生し、一切の境界と一切の衆生とに入りて、種種に一切の法は所有無しと決定する金剛の方便智明を出生し、不可思議の淨妙の音聲は、無量の世界に普く聞かざること無き方便智明を出生し、智慧もて一切の善業者を除滅する方便智明を出生し、受生の方便、受生せざる方便の、方便智明を出生し、一切の境界に於て諸の受想を轉ずる方便智明、一切の法は性無く非性無く相無く非相無きことを知る、一性にして無性なるが故に、而も無量劫に於て種種に説法して、善根を修習し、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる方便智明、一切衆生の生を知り、亦無生を知り、一切衆生の滅を知り、亦無滅を知り、因を知り縁を知り、事を

知り、境界を知り、行を知り、生を知り、滅を知り、衆生の説を知り、愚癡を知り、愚癡を離るるを知り、顛倒を知り、顛倒に非ざるを知り、垢濁を知り、清淨を知り、生死を知り、涅槃を知り、有を知り、無を知り、著を知り、不著を知り、堅固を知り、離を知り、轉を知り、不轉を知り、起を知り、不起を知り、壞を知り、道を知り、成就を知り、根を知り、衆生の受化を知る、器に隨ひて應ずるが故に、衆生を教化して、未だ曾て菩薩の所行を安失せず、何を以ての故に。菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提心を發すは、衆生を教化せんが爲の故なり。是故に菩薩摩訶薩は常に衆生を化して菩薩の行を失はず、身疲倦無く、一切衆生に違はず、緣起を觀察する方便智明、諸初に著せず、著心を起さず、諸佛に著せず、著心を起さず、一切の法に著せず、著心を起さず、世界に著せず、著心を起さず、衆生に著せず、著心を起さず、衆生を見ず、衆生を化せず、衆生を調伏せず、衆生の爲に法を説かず、而も亦菩薩の行願を捨てずして大悲を長養し、一切の佛を見たてまつり、正法を聽受して未だ曾て忘失せず、佛の依果を得、諸の善根を種ゑ、如來の所に於て恭敬し供養するの心を捨てず、恭敬し供養するの心を増長し、法界に等しき心を具足し成就し、自在の神力もて、六種に不可思議の無量の世界を震動し、種種の説法を知り、衆生の數を知り、種種の衆生を知り、苦の起るを知り、苦の滅するを知り、一切行の苦を知り、一切行は悉く電光の如きを知りて、菩薩の行を行じ、永く一切生死の根本を斷ち、悉く能く一切の衆生を救護し、菩薩の行を行じて、染汚する所無く、一切如來の種性を圖た

【十種の解脱】以下、無明の轉滅して解脱を得ることを明す。

【十種の園林】以下、百五十句は具徳圓滿の行を説き、初四句は報徳圓滿の行、次二十句は心住堅深の行、次五十句は智徳殊勝の行、後四十句は徳重高深の行を明す。園林とは遊觀の悦の義を喻表するなり。

す、須彌山王の心を發して傾動すべからず。一切顛倒の衆想を除滅して、一切の智門は悉く現在前して轉せず壞せず、等正覺を成じて、生死の海に於て悉く能く一切の衆生を濟度する方便智明なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の明と爲す。若し菩薩摩訶薩此明に安住せば如来の無上の巧方便の智明を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の解脱有り、何等をか上と爲す。謂ゆる煩惱の解脱、邪見の解脱、熾熱の解脱、陰界人の解脱、善聞緣覺の地を越出する解脱、無生法忍の解脱、一切の佛刹、一切の衆生、一切の諸法に著せざる解脱、無苦無憂の諸の菩薩の住に住する解脱、一切の菩薩の行を離れて如来の地に任ずる解脱、一念の中に於て悉く能く一切の三世の諸法を了知する解脱なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の解脱と爲す。若し菩薩摩訶薩此解脱に住せば、則ち能く普く一切衆生の爲に無上の佛事を作さん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の園林有り。何等をか上と爲す。謂ゆる生死の園林、菩薩の行を行じて憂惱を起さざるが故に。衆生を教化する園林、衆生を懷はざるが故に。一切功の園林、菩薩の一切の人行を攝取するが故に。清淨の世界の園林、性無著の故に。一切の魔の宮殿の園林、魔の境界を降すが故に。正法を聽受する園林、正念に觀察するが故に。六波羅蜜、四攝法、三十七道品の園林、慈父の境界を修習するが故に。十力、四無所畏、乃至一切の佛法の園林、異法を念せざるが故に。菩薩の一切の無量無邊の功德神力を示現する園林、淨法輪を轉じて衆生を調伏するが故に。念念の中に於て一切衆生の爲に成、正

【三七七道品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道文を言ふ。是等は菩提に順趣するものなれば道分と言ふ(前註)【十種の宮殿】以下、内心に安ずることを明す。宮殿は園林の外遊に對するなり。

覺を現する園林、法身は虚空の如く、一切の世界に充滿して平等に覺るが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の園林と爲す。若し菩薩摩訶薩此園林に住せば、則ち如來の無上なる離憂快樂の園林を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の宮殿有り、何等をか十と爲す。謂ゆる發菩提心の宮殿、忘失せざるが故に。十善の業跡功德智慧の宮殿、欲界の衆生を教化し成熟するが故に。四梵の住する處の宮殿、色界の衆生を教化し成就するが故に。淨居天の生を受くる宮殿、一切の煩惱も染すること能はざるが故に。無色界天の生を受くる宮殿、衆生の障礙の處を除滅するが故に。不淨の世界に降生する宮殿、衆生をして一切の煩惱を離せしめんと欲するが故に。現じて深宮の采女妻子の色味に處する宮殿、木の同行の衆生を教化し成熟せんが故に。現じて四天下の王、四大天王、帝釋、梵王と爲る宮殿、自在心の衆生を調伏せんが故に。一切菩薩の神力自在に行かしまる宮殿、一切の諸禪解脫三昧智慧自在なるが故に。諸佛の所に於て、無上自在の一切智王の記を受くる宮殿、十力莊嚴して一切法の自在に。諸佛の事を行するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の宮殿と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切法王の受記自在の法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の樂有り、何等をか十と爲す。謂ゆる寂靜を樂ふ、散亂せざるが故に。明慧を樂ふ、善く法を分別するが故に。一切の佛の所に往詣せんことを樂ふ、現前に法を聞きて受持するが故に。一切の佛を樂ふ、十方に充滿するが故に。菩薩の自在

神力の無量の法門を樂ふ、衆生身に示現するが故に。三昧を樂ふ、一の三昧門を出生するが故に。陀羅尼門を樂ふ、一切の法を持ちて衆生を教化し忘失せざるが故に。辯才を樂ふ、一の句身味身に於て不可説劫に説くとも窮盡すること無きが故に。菩提を樂ふ、無量の法門を以て衆生に等しき身を現じて正覺を成ずるが故に。轉法輪を樂ふ、法の如く一切の外道を調伏するが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の樂と爲す。若し菩薩摩訶薩此樂に安住せば、則ち一切諸佛の無上の法樂を得ん。

【十種の莊嚴】以下、菩薩を以て自ら莊嚴することを明す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の莊嚴有り。何等をか十と爲す。謂ゆる力莊嚴、壞すべからざるが故に。無畏莊嚴、恐怖を生ぜざるが故に。義莊嚴、不可説の義法門を説きて窮盡すること無きが故に。法莊嚴、八萬四千の法藏を説きて忘失せざるが故に。願莊嚴、一切の菩薩の願事具足せざるが故に。行莊嚴、普賢菩薩の行を究竟するが故に。佛刹莊嚴、一切の佛刹を受持して一佛刹と爲すが故に。妙音莊嚴、又甘露の法を雨らして一切の佛刹に充滿するが故に。受持莊嚴、一切劫に於て菩薩の行を行じて斷絶せざるが故に。變化莊嚴、一の衆生身に於て一切衆生に等しき身を示現して、一切の衆生知見せざる無く、自ら十力一切智を求めて返轉せざるが故に。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の莊嚴と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の無上の莊嚴を得ん。

【十種の不動心】以下、二十句は心住摩深を明す。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の不動心を發す有り。何等をか十と爲す。一、行有する所を皆悉く能く捨てて、不動の心を發し。一切諸佛の正法を出生して、不動の心を發し。

【不濁の信】無明を惟くある信を言ふ。

【十種の深心】以下、行堅固にして不動なるを以て深心に窮する事を明す。

四十種の智觀察

一切諸佛を恭敬し供養して、不動の心を發し、等心に一切衆生を觀察して、不動の心を發し、一切衆生を攝取して、不動の心を發し、一向に専ら一切の佛法を求めて未だ曾て休息せずして、不動の心を發し、一切衆生に等しき劫に菩薩の行を修して、不動の心を發し、有根の信、不濁の信、離垢の信、明淨の信、一切の佛を恭敬し供養する信、不退轉の信、不壞の信を成就して、不動の心を發し、究竟一切智を具足し成就して、不動の心を發し、一切の菩薩の諸行を成就して、不動の心を發す、佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の發不動心と爲す、若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち無上の一切智の不動心を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の深心を捨てざる有り、何等をか十と爲す。謂ゆる一切の佛の菩提を覺りて、深心を捨てず、一切衆生を教化し成熟して、深心を捨てず、一切諸佛の種性を斷せずして深心を捨てず、善知識に親近して、深心を捨てず、一切の佛刹に於て、一切の諸佛を恭敬し供養して、深心を捨てず、専ら大乘と及び一切の功德とを求めて、深心を捨てず、一切の佛の所に於て梵行を修行し、淨戒を護持して、深心を捨てず、一切の菩薩を攝取して、深心を捨てず、一切の佛法を聞持して、深心を捨てず、一切の菩薩の行願を修習して、一向に専ら一切の佛法を求めて、深心を捨てず、佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の不捨深心と爲す、若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛の深心を捨てざる正法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智觀察有り、何等をか十と爲す。謂ゆる智慧もて善巧に一切

以下、五十句は智德殊勝の行を明す。第一に諸法を觀察するの行を明す。

【十種の法】以下諸法を分別することを明す。

【十種の無垢】以下、障を除き、染垢を離るることを明かす。

諸法を分別することを觀察し、智慧もて三世の一切の善根を觀察し、智慧もて一切菩薩の行、神力自在を觀察し、智慧もて一切諸法の巧方便門を觀察し、智慧もて一切の佛性を觀察し、智慧もて一切の陀羅尼門を觀察し、智慧もて一切の世界の常に正法を説くを觀察し、智慧もて深く一切の法界に入ること觀察し、智慧もて十が一切の世界の不可思議なるを觀察し、智慧もて一切の佛法を觀察し、智慧もて無障礙の智を觀察す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の智觀察と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち如來の無上の大智の觀察を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の法を分別する有り。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の法は悉く縁より起ると分別し、一切の法は皆悉く幻の如しと分別し、一切の法は皆悉く無常なりと分別し、一切の法は無量無邊なりと分別し、一切の法は依止する所無しと分別し、一切の法は悉く金剛の如しと分別し、一切の法は悉く是れ如來なりと分別し、一切の法は皆悉く寂靜なりと分別し、一切の法は悉く是れ正道なりと分別し、一切の法は悉く是れ一相一義なりと分別す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の分別法と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち巧方便を得て悉く能く一切の諸法を分別せん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の無垢有り。何等をか十と爲す。謂ゆる深心の無垢、疑惑を除くする無垢、邪見を遠離する無垢、境界の無垢、一切智を得んと欲する無垢、喧嘩の無垢、無畏の無垢、一切の菩薩の住する所の無垢、一切の菩薩の正受三昧の無垢、三十二相、百

【十種の智印】以下、智徳堅固にして決定して變動なき智印を明す。  
 【苦苦】、變易苦、行苦、三苦なり  
 (前註)

幅らて莊嚴し、一切諸の白淨法を成就し、究竟して無上菩提を遠得する無垢なり。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無垢と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、期ち一切の佛の無上の無垢の法を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の智印有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は苦苦、變易苦、行苦を知りて、懈怠を生ぜず、菩薩の行を修して一向に専ら無上菩提を求め、恐れず怖ぢず驚かず畏れず大願を捨てず、菩提の心堅固不退にして阿耨多羅三藐三菩提を究竟す。是を第一の印と爲す。一切の凡夫衆生には悉く煩惱、顛倒、惑亂有り、彼諸の衆生は、魔師の惡言もて菩薩を訶罵し、或は刀杖瓦石を以て之を加害するも、菩薩、爾時、心に憂惱無く、菩薩の行を修して、正しく菩提に向ひ、忍法を修習して受證し離生す。是を第二の印と爲す。菩薩摩訶薩は甚深の佛法の一切智を讚するを聞き、聞き已りて一向に信解す。是を第三の印と爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「我菩提心を發し、究竟して阿耨多羅三藐三菩提を成就し、一切衆生の五道に流轉し、無量の苦を受くるをば、我當に彼をして皆大いに歡喜し、勤行精進して、善根を修習し、生死の流を渡り、永く安樂を得しむべし」と。是を第四の印と爲す。菩薩摩訶薩は如來智の無量無邊を解りて、而も未だ如來と等しからず。如來の所に於て無量無邊の智を聞き、文字の中に於て分別し解りて、如來と等し。是を第五の印と爲す。菩薩摩訶薩は善欲、不可壞の欲、甚深の欲、勝欲、功德の欲、莊嚴の欲、無比の欲、無上の欲、堅固の欲、究竟して正しく無上菩提を

求<sup>もと</sup>め 一切<sup>いっせつ</sup>の象<sup>しやう</sup>魔<sup>ま</sup>外<sup>がい</sup>道<sup>だう</sup>及<sup>およ</sup>び其<sup>その</sup>眷<sup>けん</sup>屬<sup>じやく</sup>も壞<sup>くわい</sup>すること能<sup>あた</sup>はざる欲<sup>よく</sup>、無<sup>む</sup>上<sup>じやう</sup>菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>を退<sup>たい</sup>かざる欲<sup>よく</sup>を成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>す。  
 是<sup>こゝ</sup>を第<sup>だい</sup>六<sup>ろく</sup>の印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>は身<sup>しん</sup>命<sup>めい</sup>を惜<sup>おし</sup>ま<sup>ず</sup>、怖<sup>おそ</sup>畏<sup>おそ</sup>する所<sup>ところ</sup>無<sup>な</sup>く、菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>の行<sup>ぎやう</sup>を修<sup>しゆ</sup>し、菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>心<sup>しん</sup>を發<sup>はつ</sup>し、一切<sup>いっせつ</sup>の智<sup>ち</sup>に越<sup>こ</sup>え、一切<sup>いっせつ</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>の智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>を得<sup>え</sup>、佛<sup>ぶつ</sup>の菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>を捨<sup>す</sup>てず、善<sup>ぜん</sup>知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>を捨<sup>す</sup>てず。  
 是<sup>こゝ</sup>を第<sup>だい</sup>七<sup>しち</sup>の印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>若<sup>じやく</sup>し善<sup>ぜん</sup>男<sup>なん</sup>子<sup>し</sup>善<sup>ぜん</sup>女<sup>にょ</sup>人<sup>にん</sup>の大<sup>だい</sup>乘<sup>じやう</sup>を學<sup>まな</sup>ばん者<sup>もの</sup>は諸<sup>しよ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の善<sup>ぜん</sup>根<sup>こん</sup>を長<sup>ちやう</sup>養<sup>やう</sup>し、善<sup>ぜん</sup>根<sup>こん</sup>に安<sup>あん</sup>住<sup>じゆ</sup>し、一切<sup>いっせつ</sup>の智<sup>ち</sup>を攝<sup>しやく</sup>取<sup>しゆ</sup>して、菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>を退<sup>たい</sup>か<sup>ず</sup>。是<sup>こゝ</sup>を第<sup>だい</sup>八<sup>ぱち</sup>の印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>は一切<sup>いっせつ</sup>衆<sup>じゆう</sup>生<sup>じやう</sup>をして平<sup>へい</sup>等<sup>とう</sup>心<sup>しん</sup>に住<sup>じゆ</sup>して一切<sup>いっせつ</sup>の智<sup>ち</sup>を修<sup>しゆ</sup>せしめ、衆<sup>じゆう</sup>生<sup>じやう</sup>の爲<sup>ため</sup>に法<sup>ぽう</sup>を講<sup>かう</sup>じて、悉<sup>しつ</sup>く無<sup>む</sup>上<sup>じやう</sup>菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>を退<sup>たい</sup>かざらしめて大<sup>だい</sup>悲<sup>ひ</sup>を長<sup>ちやう</sup>養<sup>やう</sup>す。是<sup>こゝ</sup>を第<sup>だい</sup>九<sup>きゆう</sup>の印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>は三世<sup>さんぜ</sup>の諸<sup>しよ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の一切<sup>いっせつ</sup>善<sup>ぜん</sup>根<sup>こん</sup>に隨<sup>ずい</sup>順<sup>じゆん</sup>して、佛<sup>ぶつ</sup>種<sup>しゆ</sup>を紹<sup>しやう</sup>繼<sup>けい</sup>し、一切<sup>いっせつ</sup>の智<sup>ち</sup>を生<sup>しゆ</sup>ず。是<sup>こゝ</sup>を第<sup>だい</sup>十<sup>じゆ</sup>の印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。佛<sup>ぶつ</sup>子<sup>し</sup>、是<sup>こゝ</sup>を菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>の十<sup>じゆ</sup>種<sup>しゆ</sup>の智<sup>ち</sup>印<sup>いん</sup>と爲<sup>な</sup>す。若<sup>し</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>此<sup>こゝ</sup>印<sup>いん</sup>を成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>せば、疾<sup>しやく</sup>かに阿<sup>あ</sup>耨<sup>に</sup>多<sup>た</sup>羅<sup>ら</sup>三<sup>さん</sup>藐<sup>みやく</sup>三<sup>さん</sup>菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>を得<sup>え</sup>、如<sup>ごと</sup>來<sup>らい</sup>の無<sup>む</sup>上<sup>じやう</sup>の智<sup>ち</sup>印<sup>いん</sup>を具<sup>ぐ</sup>足<sup>そく</sup>せん。

佛<sup>ぶつ</sup>子<sup>し</sup>、菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>に十<sup>じゆ</sup>種<sup>しゆ</sup>の智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>有<sup>あ</sup>り。何<sup>なん</sup>等<sup>とう</sup>をか十<sup>じゆ</sup>と爲<sup>な</sup>す。謂<sup>いは</sup>ゆる菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>は、阿<sup>あ</sup>耨<sup>に</sup>多<sup>た</sup>羅<sup>ら</sup>三<sup>さん</sup>藐<sup>みやく</sup>三<sup>さん</sup>菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>に於<sup>お</sup>て決<sup>けつ</sup>定<sup>ぢやう</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>を見<sup>み</sup>たてまつる智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>衆<sup>じゆう</sup>生<sup>じやう</sup>の此<sup>こゝ</sup>に死<sup>し</sup>し彼<sup>か</sup>に生<sup>じやう</sup>することを見る智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>衆<sup>じゆう</sup>生<sup>じやう</sup>を開<sup>ひら</sup>悟<sup>ご</sup>して、悉<sup>しつ</sup>く正<sup>しやう</sup>しく修<sup>しゆ</sup>多<sup>た</sup>羅<sup>ら</sup>の法<sup>ぽう</sup>を求<sup>もと</sup>めしむる智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、善<sup>ぜん</sup>知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>に依<sup>よ</sup>りて菩<sup>ぼ</sup>提<sup>だい</sup>心<sup>しん</sup>を發<sup>はつ</sup>し、善<sup>ぜん</sup>根<sup>こん</sup>を長<sup>ちやう</sup>養<sup>やう</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>諸<sup>しよ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>を示<sup>し</sup>現<sup>げん</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>衆<sup>じゆう</sup>生<sup>じやう</sup>を化<sup>け</sup>して悉<sup>しつ</sup>く佛<sup>ぶつ</sup>地<sup>ぢ</sup>に安<sup>あん</sup>住<sup>じゆ</sup>せしむること成<sup>じやう</sup>熟<sup>じやく</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>の法<sup>ぽう</sup>を分<sup>ぶん</sup>別<sup>べつ</sup>し解<sup>げ</sup>決<sup>けつ</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>の神<sup>しん</sup>力<sup>りき</sup>に於<sup>お</sup>て住<sup>じゆ</sup>す善<sup>ぜん</sup>巧<sup>きやく</sup>方便<sup>はんべん</sup>の智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>の波<sup>は</sup>羅<sup>ら</sup>蜜<sup>みつ</sup>を満<sup>まん</sup>足<sup>そく</sup>する智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>光<sup>くわう</sup>明<sup>めい</sup>なり。佛<sup>ぶつ</sup>子<sup>し</sup>、是<sup>こゝ</sup>を菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>摩<sup>ま</sup>訶<sup>か</sup>薩<sup>さつ</sup>の十<sup>じゆ</sup>種<sup>しゆ</sup>の

【十種の不可稱量】以下、十句は徳重高深の行を明す。而してこの行用は高深にして凡夫の知る所にあらず。ざるを以て不可稱量と言ふなり。

智慧光明と爲す。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切の佛法の無上の智慧光明を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に十種の不可稱量住有り。一切の衆生、及び聲聞緣覺は稱量するに能はず。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は實際住に住して而も證を受けず、一切の所願未だ成滿せざるが故なり。是を第一の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は法界に等しき如き清淨の善根を種え、彼善根に於て染著する所無し。是を第二の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は菩薩の行は猶し變化の如く、一切の諸法は皆悉く寂滅なりと解り、諸佛の法に於て疑惑を生ぜず。是を第三の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は生死の心を離れ、不可説の劫に於て菩薩の行を修し、一切の大願を滿じて、而も中にて厭念の心を起さず。是を第四の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は一切の法に住して、依止する所無く、皆悉く寂滅にして而も涅槃を證せず、一切の智道未だ成滿せざるが故に。是を第五の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は一切の劫は劫に非ざるを知りて、而も實には一切の劫を説く。是を第六の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は一切法は行に非ざることを知りて、而も道行を捨てず、正しく佛の法を求む。是を第七の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は心は是れ三世なり、心は是れ三世なりと解り、彼心の無量無邊なるを了知す。是を第八の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は一りの衆生の爲の故に、不可説の劫に於て菩薩の行を修し、一切智

【十種の懈怠】以下行用殊勝にして勇猛無間なることを明す。

地に安住せしめんと思す。一りの衆生の如く、一切の衆生も亦復其の如くして厭心を生ぜず。是を第九の菩薩住にして不可稱量と爲す。菩薩摩訶薩は具足して菩薩の諸行を成ずと爲す、而も正覺を成ず。何を以ての益に。菩薩摩訶薩は其の如きの念を作さく、「我正覺を受けざるが故に、菩薩の行を行じて無量劫の中に於て無量の衆生を多く無上菩提に安住せしめん」と。是を第十の菩薩住にして不可稱量と爲す。若し菩薩摩訶薩其法に安住せば、明も一切の佛法の無上の大智の不可稱量を得ん。

佛子、菩薩摩訶薩に、十種の懈怠無心心を發す有り。何等をか十と爲す。謂はる菩薩摩訶薩は其の如きの念を作さく、「我一切の魔、及び其眷屬を降伏せん」と、無懈怠の心を發す。法の如く一切の外道を調伏せん」と、無懈怠の心を發す。深妙の法を説きて一切衆生をして皆悉く歡喜せしめん」と、無懈怠の心を發す。一切の法界に等しき一切の波羅蜜を滿足せん」と、無懈怠の心を發す。一切衆生をして、一切の功徳を成就し圓滿せしめん」と、無懈怠の心を發す。一切如來の無上菩提は、難成き大事にして、甚だ成難し難し、我當に菩薩の行を修して具足し成就すべして、無懈怠の心を發す。無上の法を以て、一切衆生を教化し調伏して、悉く成熟せしめん」と、無懈怠の心を發す。一切の世界に於て、種種の異色もて無量に莊嚴し、正覺を成就せん」と、無懈怠の心を發す。菩薩摩訶薩は其の如きの心を發すらく、「我菩薩の行を修する時、若し衆生有り、求りて我身を求め或は手足、耳鼻、血肉骨髄、妻子象馬、園土を求めんに、其の如き等に心を惜み悉く能く

捨てて、乃至一念の悔心をも生ぜず、悉く能く恵み施して一切衆生を饒益し安樂にして、果報を求めず、大慈悲心を以て上首と爲さん」と、無懈怠の心を發す。菩薩摩訶薩是の如きの念を作さく、「一念の中に於て、三世の一切の佛、一切の佛法、一切の衆生、一切の刹、一切の世界、一切の空界、一切の法界、一切の施設語界、一切の寂滅涅槃界、是の如き等の一切諸法は一念相應の慧を以て、悉く別相を覺知し、明了に修し、分別して修し智の斷證を知りて、一切の法に於て虚妄を取らず、無一無異にして分別する所無く、修習する所無く、境界無く、所有無く、無二の智慧は一切の無二を覺り、無相の智慧は一切の相を覺り、無劫の智慧は一切の劫を覺り、無異の智慧は一切の異を覺り、光明の智慧は一切世間の光明界を覺り、趣の智慧は一切の世界を覺り、非世の智慧は一切の世を覺り、衆生地の智慧は一切の衆生界を覺り、無著の智慧は無著の行を究竟じ、無堅固の智慧は一切の堅固を覺り、無染の智慧は一切の煩惱を覺り、無盡際智慧は一切の盡を覺り。法界に等しき智慧は一切の世界に於て其身を示現し、一切の言音を離れたる智慧は一切の微妙の言音を出し生じ、一性の智慧は無性の法を説き、一境の智慧は種種の諸の異なる境界を示現し、不可説の諸法を覺る智慧は無量の大自在の神變を示現し、一切地を覺る智慧は大自在の神變を顯現し、一切智の自在神變もて一切の衆生を教化し成熟せんと、無懈怠の心を發す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無懈怠の心を發すと爲す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上の無懈怠の法を得ん。

【十種の須彌山王正直心】以下、大心を成じ決定して菩提に向ふ正直心を明す。

佛子、菩薩摩訶薩は十種の須彌山王正直心有り。何等をか十と爲す。謂ゆる菩薩摩訶薩は常に正念一切智の法を修す。是を第一の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は一切の法は空なり、一切の法は所有無しと觀察す。是を第二の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は無量無量の劫に於て菩薩の行を行じ、一切の具足せる白淨の法を以て發心し、決定して如來の無量智の法を了知し、如來の白淨法に趣向し結聚す。是を第三の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は一切の佛法の爲に等心に、一切の善知識を恭敬し供養して、眞心發起す、利養を求めず、又復蓋法の心を遠離し、但無上の恭敬、供養、一切施の心を起す。是を第四の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は著し一切の華生、訶責し罵辱して、一切の苦を生じ、乃至命を捨つんとす。菩薩摩訶薩は眞に四力が故に菩提心を捨てず、心亦散憂す、悲心を生ぜず、一切華生に於て大悲の華嚴を捨てずして、大悲を長養す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は一切法の如如の捨を成ずるが故に。決定して如來の大慈の法を了知するが故に。是を第五の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は増上の功德、人増上の功德、色増上の功德、界増上の功德、眷屬増上の功德、欲増上の功德、正法増上の功德、自在増上の功德、智慧増上の功德を成就し、彼菩薩は味樂に著せず、欲樂に著せず、對樂に著せず、眷屬樂に著せず。但專ら正法を求め、正法を諦滿し、正法を諦滿し、正法を究

竟じ、正法の燈明に向ひ、正法の教護に向ひ、正法の歸依に向ひ、正法の道に向ひ、正法の義に向ひ、正法を樂ひ求め、寂靜の法に樂ひ住す。菩薩摩訶薩は是の如きの一切の快樂を成就すと雖も而も悉く衆魔の境界を遠離す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は過去世に於て、是の如き心を發しき、一切衆生をして、皆悉く衆魔の境界を遠離して、佛の境界に住せしめん」と。是を第六の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は精進を勤修して、正しく阿耨多羅三藐三菩提を求め、阿耨多羅三藐三菩提の行を修し、猶我は今初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發せりと謂へり。亦爾かす怖れず畏れずして、菩薩の行を行じ、能く速かに正覺を成すと雖も、衆生を化せんが爲の故に、無量劫に於て菩薩の行を修す。是を第七の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は一切衆生の伏し難く、度し難く、恩を知らず、恩を報ゆることを知らざるを知り、彼衆生の爲の故に、大莊嚴を發して自ら莊嚴し、一切衆生をして心に自在を得、隨意の境界に悪心を生ぜず、他所に於て煩惱の心を生ぜざらしめんと欲す。是を第八の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、我他に依りて菩提心を發し菩薩の行を修せず、都て人の助有ること無くして、我は菩薩の行を修習せん、但我一身にて、未來際劫を盡して菩薩の苦行を修し、一切諸佛の正法を積集して、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、身自ら清淨となり、亦一切衆生を清淨ならしめ、自ら境界を知り、他の境界を知りて、我當に悉く三世の諸佛の境界に同じらす

べし」と。是を第九の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。菩薩摩訶薩は是の如く知見するく、一法として菩薩の行を終するもの有ること無く、一法として菩薩の行を滿するもの有ること無く、一法として衆生を調伏するもの有ること無く、一法として衆生を任置するもの有ること無く、法として一切の諸佛を恭敬し供養すること有るを見ず、法として過去に阿耨多羅三藐三菩提を成せしもの有るを見ず、法として未來に阿耨多羅三藐三菩提を成せんもの有るを見ず、法として現在に阿耨多羅三藐三菩提を成するもの有るを見ず、一法として過去に法を説き、未來に法を説き、現在に法を説くもの有ること無く、一法として能く法を説く者有ること無く、亦法の説くべきも無し。而も菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提の大願が心を捨てず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は是の如くして阿耨多羅三藐三菩提を出し、深く一切甚深の諸法に入りて、無所有の行を行すればなり。而も眞菩薩摩訶薩は善善菩提を修習し結聚し、一切諸の對治法を清淨にし、智慧成滿して、念念の中に於て悉く能く一切諸の善根の法を積集し長養す。若し一切の法所有無ければ、我何の業有りてか無上道を求めん。是故に恐怖驚畏の心を生ぜず」と。是を第十の阿耨多羅三藐三菩提を決定する須彌山王正直心と爲す。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の須彌山王正直心と爲す。若し菩薩摩訶薩此心に安住せば、則ち一切諸佛の無上の智慧の須彌山王正直心を得ん。

四十種の深く智慧

佛子、菩薩摩訶薩は十種の深く智慧の大海に入る有りて、阿耨多羅三藐三菩提を成す。

【の大海】以下、大海の如き深宏なる智慧を得て無上菩提を成ずることを明す。

何等をか十と爲す。謂ゆる無量の一切衆生界に入る。是を第一の智慧の大海に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は一切世界に入りて虚妄を取せず。是を第二の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は一切の虚空界は等しく、十方一切の世界に入りて障礙する所無きを知る。是を第三の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は普く法界に入り、無礙に入り、不に入り、不常に入り、無量に入り、不生に入り、不滅に入り、知一切に入る。是を第四の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は過去未來現在の諸佛、菩薩、法師、聲聞、緣覺、及び一切衆生の時に於て善根を種を、過去の諸佛は已に無上菩提の善根を成じ、未來の諸佛は當に無上菩提の善根を成すべく、現在の諸佛は今無上菩提の善根を成すべし。過去の諸佛の法を説きて、教化し調伏して衆生の善根を成熟し、未來の諸佛も法を説きて、教化し調伏して衆生の善根を成熟し、現在の諸佛も法を説きて、教化し調伏して衆生の善根を成熟す。菩薩摩訶薩は皆悉く隨喜して是の如き等の一切の善根を長養し積集して、心に厭き足ること無し。是を第五の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は念念の中に於て、過去世に入りて不可説の劫を觀察するに、一切の中に於て或は百億の佛世に出興したまは、或は千億の佛、百千億の佛、無量の佛、阿僧祇の佛、不可思議の佛、不可稱量の佛、無分齊の佛、無邊際の際、不可説不可説の佛、算數譬喩も及ばざる所の佛、世に出興したまは、彼中の

如來及び其眷屬の菩薩の衆、諸の聲聞僧は法を證きて教化し、壽命住持し、種種の法  
 住し、一劫の中の如く一切諸劫も亦復是の如し。若し無佛の劫の中に諸の衆生有りて阿  
 耨多羅三藐三菩提の爲に、種無し所の善根をも亦悉く了知し、又衆生の見佛の善根を種  
 悉て、未來の無量の諸佛に値ひたてまつることを得るを觀る。是の如く過去一切劫を觀  
 察して、厭き足ること無し。是を第六の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成  
 ずと爲す。菩薩摩訶薩は未來世に入りて一切劫を觀察し、劫に佛有るを知り、劫に佛無き  
 を知り、彼諸劫に佛の佛有りて世に出興したまひ、世界を如來の名號とは何等なる  
 かを知り、又成する所の衆生の多少を知り、亦未來の壽命の長短を知る。是の如く未來世  
 の一切諸劫に入りて、分別し了知して厭き足ること無し。是を第七の深く智慧の大海に入  
 りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は現在世に入りて十方の一切世界を觀  
 察し、無量無邊の不可說不可說の諸の世界の如來は、家を捨てて道を學び、  
 道場に往詣して、菩提樹の下に菩提草を藉き、結跏趺坐したまひて、魔の官屬を斷し、阿  
 耨多羅三藐三菩提を成じ已りて、起ちて城邑に入り、天の宮殿に昇りて微妙の法を説き、  
 正法を傳じて、無量の衆生を調伏し教化し、如來の無量の自在神力を現じて、阿耨多羅  
 三藐三菩提を付屬し、乃至壽を捨てて無餘涅槃に入りたまひ、如來の滅後は大眾普く會し  
 て經教を結集し、正法を護持して久しく世に住せしむ。舍利の爲の故に、無量の塔を起し、  
 種種に莊嚴し、恭敬し供養し、又衆生を化して諸佛を見、正法を聽受し、憶念し護持せし

た、是の如く智慧觀察して、勝越の深心を長養し、無量の法界に充滿して、一切の佛法に於て錯謬無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は一切の如來は皆悉く夢の如しと知りて、而も能く一切の佛の所に往詣して、恭敬し供養し。自身に著せず、佛身に著せず、世界に著せず、大衆に著せず、聞法に著せず、諸劫に著せず、佛を見法を聞き、世界を觀察して一切劫を解りて厭足無し。是を第八の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は不可説不可説劫に於て、無量の諸佛を恭敬し供養したてまつり、一の劫の中に於て、不可説不可説の佛を恭敬し供養したてまつり、此に没し彼に生じ、以て三界を出づることを示現し、衆の供養の具もて諸佛菩薩の大業及び聲聞の僧を供養し、諸佛の滅後は、無上の供具を以て舍利を供養し、廣く大施を行じて一切衆生の意願を満足し、行する所の大施は不可思議にして果報を求めず、衆生を哀愍し饑益し攝取せんが爲に不可説不可説の劫に於て、一切の諸佛を恭敬し供養したてまつり、正法を護持し、衆生を化度して、阿耨多羅三藐三菩提を成じて、而に厭足無し。是を第九の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずと爲す。菩薩摩訶薩は一切の佛の所、一切の菩薩の所、一切の法師の所に於て、一向に専ら菩薩教法、菩薩の威儀、菩薩の隨順法、菩薩の清淨法、菩薩の長養法、菩薩の調代法、菩薩の平等法、菩薩の出生道を求め、菩薩の陀羅尼門を受持し、一切衆生を攝取して爲に法を説き、調伏し成熟して、不可説不可説の衆生をして、一切智を發して、心に不退轉を得、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめ、一切の佛法に隨

順一修習して、衆生を教化して厭足無し。是を第十の深く智慧の大海に入りて阿耨多羅三  
 藐三菩提を成ずるに成ずる種子、是を菩薩摩訶薩の十輪の深大智慧の大海と爲し、阿耨多羅  
 三藐三菩提を成ずるなり。若し菩薩摩訶薩此法に安住せば、則ち一切諸佛に無上の菩提入  
 海を得ん。

昭和四年六月一日印刷  
昭和四年六月十日發行

昭和國譯大藏經 經典部  
第十卷

不許複製

編纂者

編輯部  
代表者 三井 品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地  
株式會社 東方書院

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同興會  
代表者 井波 康三 郎

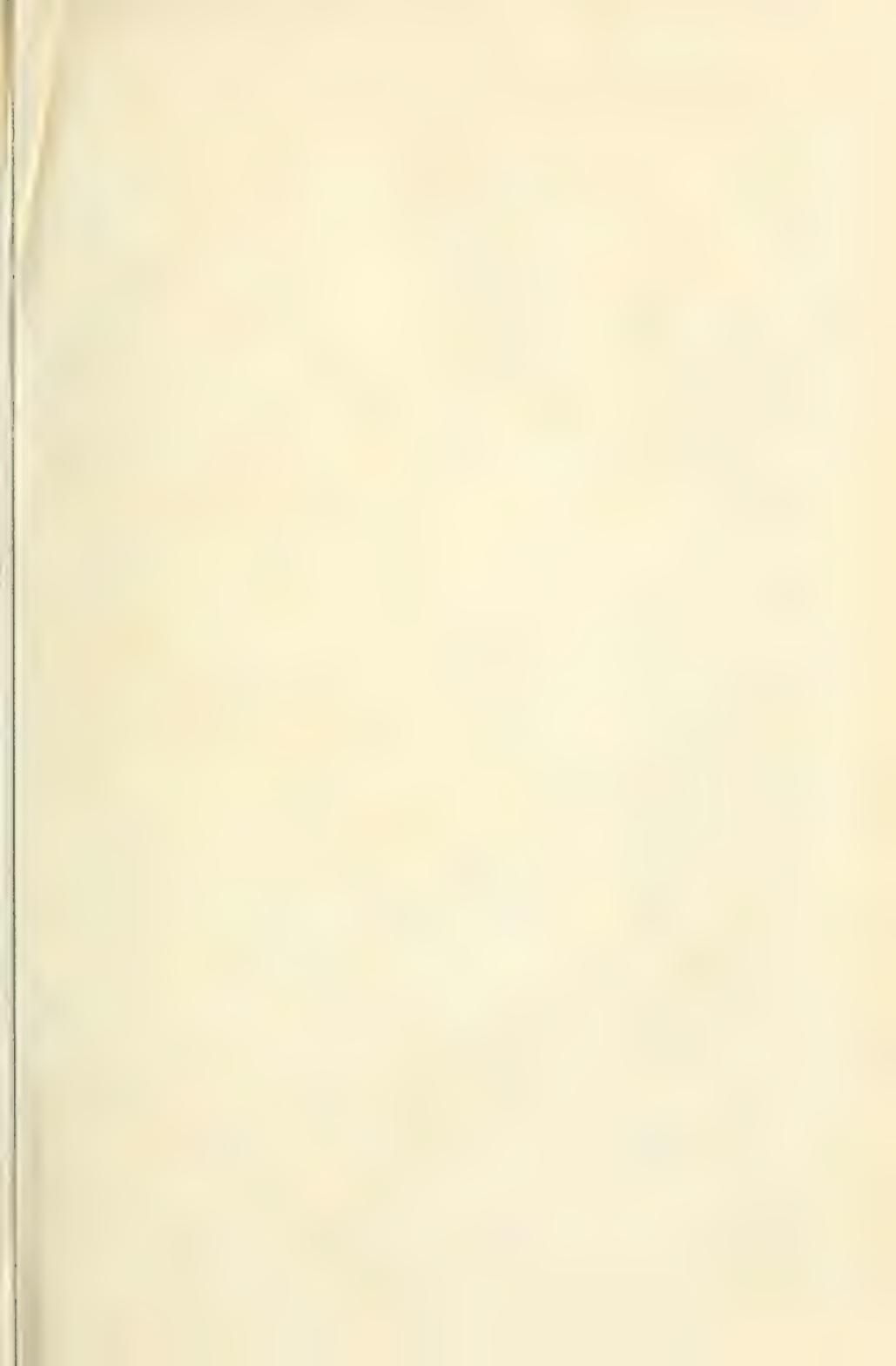
發行所

東京市下谷區  
上野櫻木町五〇

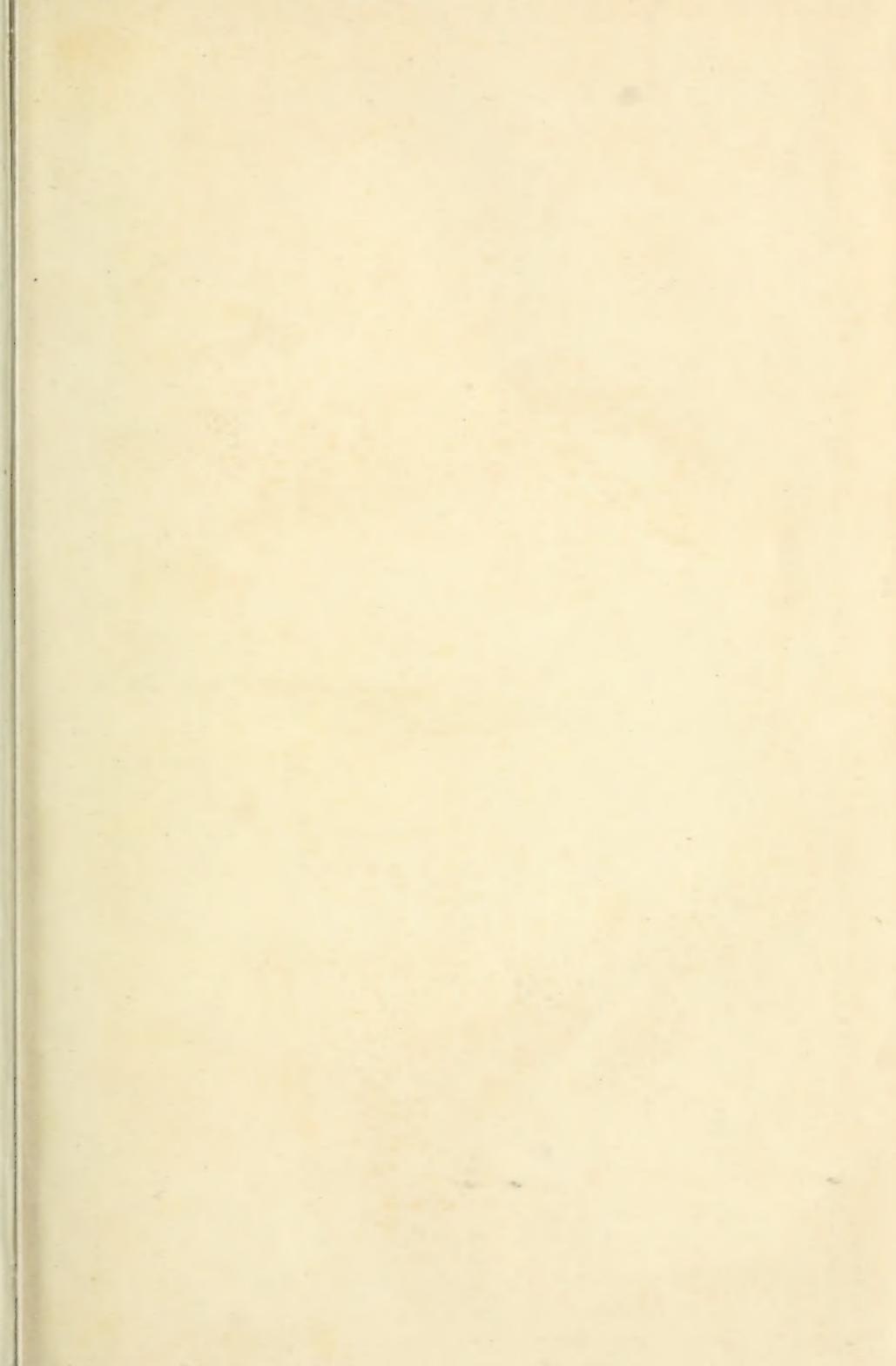
株式會社

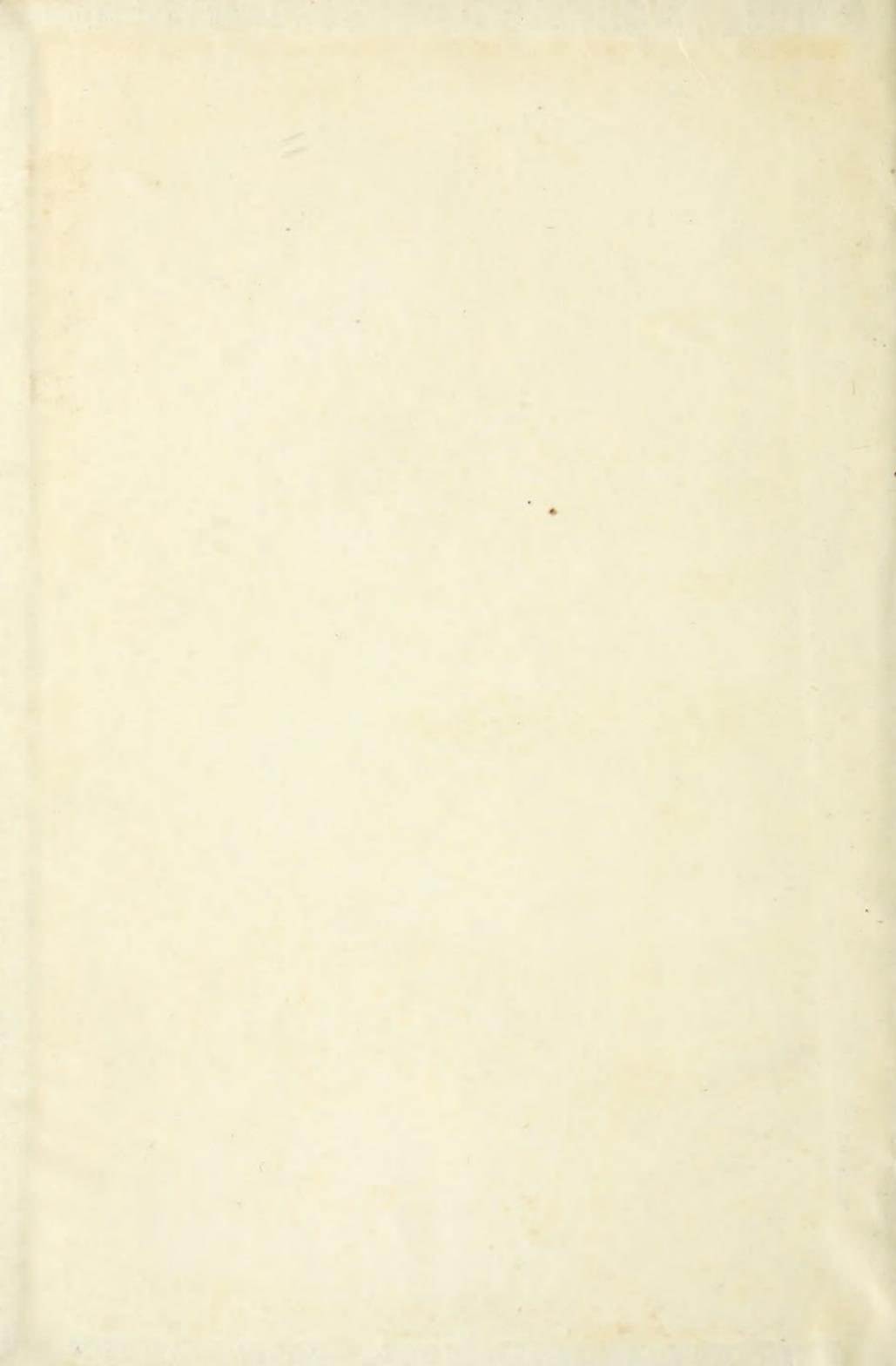
東方書院

電話 下谷四二五九  
振替東京六八六一一









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 4181